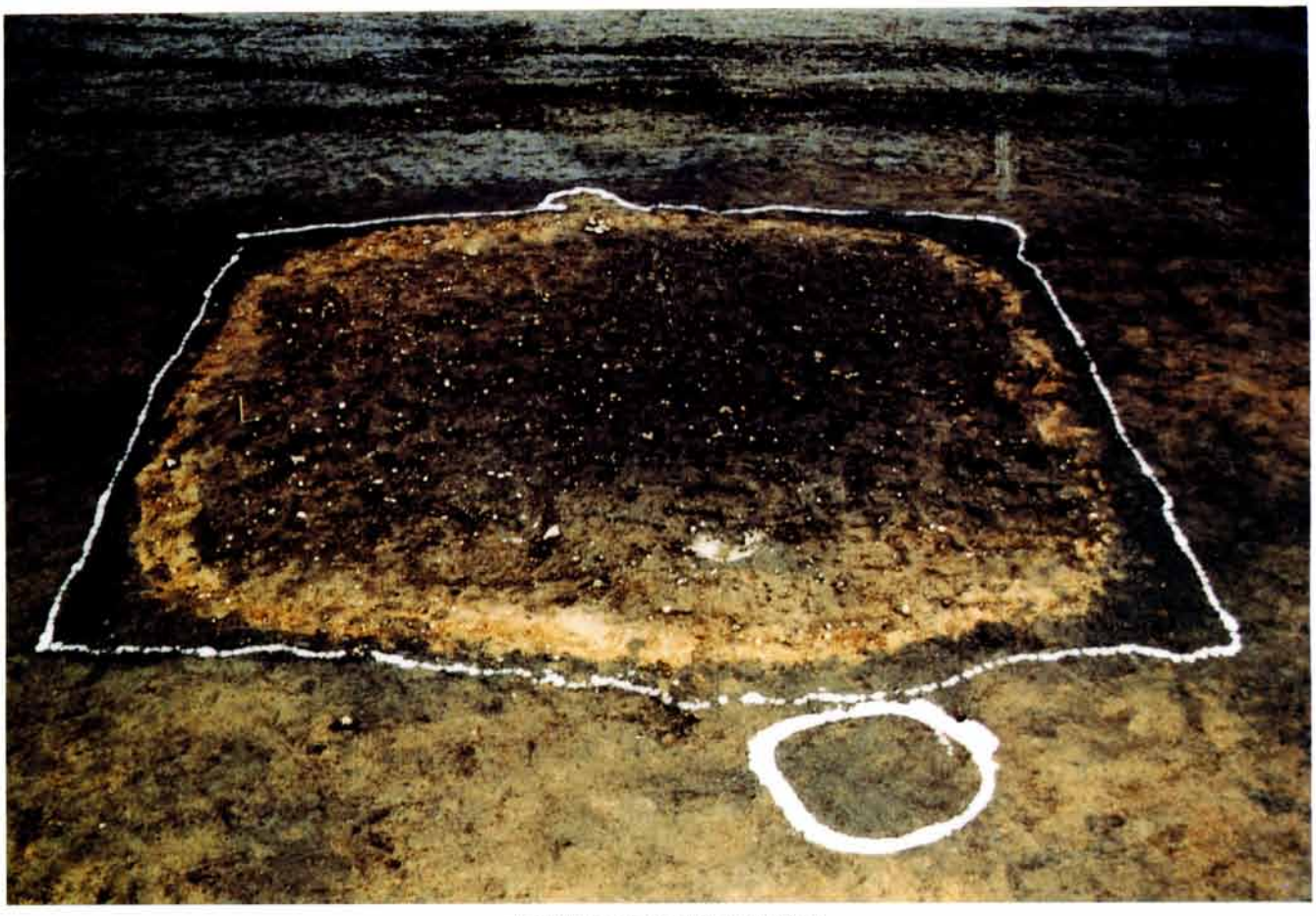
富士見地区遺跡群

白川遺跡
由森遺跡
久保田遺跡

昭和62年度県営圃場整備事業富士見地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

群馬県勢多郡富士見村教育委員会



白川遺跡11号住居跡検出状況

白川遺跡11号住居跡埋土断面

白川遺跡11号住居跡出土遺物

白川遺跡13号住居跡出土遺物

序　　文

富士見村は、赤城山の南西麓に位置し、西に榛名山、妙義山を望み、南に西上州の山々、さらには遠く富士山が見えるということが村名の由来になったように、豊かな自然に囲まれた風光明媚な地であります。また、赤城山の南麓から南西麓にかけては、広く遺跡の宝庫として知られており、近年の発掘調査の増加によって、具体的な歴史事象が次第に明らかにされつつ有ります。

農業を主産業とする富士見村でも、農業を巡る環境の変化に伴い、昭和58年度から県営富士見地区の圃場整備事業を行ってまいりましたが、今回の調査はその５年次事業に伴い行われたものであります。

白川遺跡・由森遺跡・久保田遺跡は、調査以前には全く遺跡地として認識されていませんでした。しかし、今回の発掘調査によって縄文時代早期から後期、さらには、古墳時代、奈良・平安時代から中近世に至るたくさんの遺構・遺物が発見されたと聞いております。

発掘調査・整理作業ともに必ずしも十分な時間と費用をかけて行ったわけではありませんが、これまでの調査と同様に、今回の発掘調査でも多大な成果が得られ、富士見村の歴史に新たな事実を書き加えることができました。さらには、本書が富士見村だけにとどまらず、群馬県あるいは日本の歴史を解明する一助となれば何よりの幸いと思います。

最後に、発掘調査にあたりご尽力いただいた関係諸機関、地権者の方々、さらには、現場で調査に携わった作業員の皆様に心より感謝申し上げ、序といたします。

平成元年３月

富士見村教育委員会

教育長　鈴　木　清　茂

例　　言

1．本書は県営ほ場整備事業富士見地区に伴い事前調査を行った白川遺跡、由森遺跡、久保田遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の所在地は以下のとおりである。

白川遺跡　群馬県勢多郡富士見村大字田島303番地外

由森遺跡　〃　〃　〃　〃　390番地外

久保田遺跡　〃　〃　〃　大字原之郷2124番地外

3．試掘調査　昭和62年７月14日～昭和62年７月24日

本調査　白川遺跡　昭和62年８月17日～昭和62年10月22日

由森遺跡　昭和62年10月５日～昭和62年11月18日

久保田遺跡　昭和62年11月12日～昭和62年12月５日

整理作業　昭和62年12月７日～平成元年３月31日

4．調査は前橋土地改良事務所の委託を受け、富士見村教育委員会が主体となって行った。

発掘調査及び整理報告書刊行作業の費用は国庫補助金、県費補助金、村費、農政委託金をあてた。

5．調査組織は次のとおりである。

富士見村教育委員会　教育長　鈴木清茂

社会教育課長　長谷川功

係　長　狩野　透

主　事　羽鳥政彦　（担当）

6．本書の作成は編集、執筆、遺構写真、遺物写真の撮影を羽鳥政彦が行ったが、縄文時代遺物についての説明は谷藤保彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団職員）の助力を得た。

7．実測・トレース・図版作成などは羽鳥の他、以下のものが従事した。

阿久沢志津子　木暮朱実　斎藤正子　田村節子　平沢小夜子　舩津かほる

8．発掘調査から整理作業にかけて以下の方々から指導助言を賜った。また地元地権者各位には調査に際し、全面的な協力を受けた。記して心より感謝の意を表したい。　（敬称略　順不同）

群馬県教育委員会文化財保護課　前橋土地改良事務所　富士見村土地改良課　富士見北橘土地改良区

西田健彦　桜岡正信　木津博明　黒沢はるみ　関根慎二　富澤敏弘　近藤尚嗣　岩崎泰一　右島和夫

井上唯雄　山下歳信　綿貫清　スナガ環境測設株式会社

9．発掘調査・整理作業員は以下のとおりである。

阿久沢志津子　金沢とみ子　狩野たか子　狩野冬子　狩野洋子　小林サク子　斎藤和子　斎藤きよ

斎藤正子　斎藤光枝　塩沢久代　須田幸江　須田と志　須田美千代　滝沢ツネ　田村節子　角田静枝

平沢小夜子　舩津かほる　星野三恵

10．出土遺物、資料類は一括して富士見村教育委員会に保管してある。

凡　　例

1．本書の挿図の方位は座標北を表す。

2．挿図の縮尺は以下のとおりである。

遺構図	竪穴住居跡	1／80	遺物図	縄文土器実測	1／3、1／4
	炉・竈	1／40		縄文土器拓影	1／3
	掘立柱建物跡	1／80		石　器	2／3、1／3
	土　坑	1／40			1／4、1／6
	溝　跡	1／80、1／120、		土師器・須恵器など	1／4
		1／160、1／240		鉄器、砥石	1／4
				石造物	1／8

3．遺物写真の縮尺は統一していない。

4．遺構平面実測図中で、基本的に礫は点描している。また、焼土の範囲を点線で囲んでいるが、復元線も点線表記であり、紛らわしい図面であることをお詫びしたい。さらに、遺物実測図の成・整形表現等も統一されていないため、合わせてお詫びしたい。

5．遺構番号は基本的に調査時点に付したものをそのまま用いているが、整理作業によって掘立柱建物跡には新たに加わったものがある。また、土坑番号は遺跡によって付け替えを行ったもの、一部の掲載となったため欠番が生じているものがある。

6．遺構図のうち、出土遺物及び出土位置ドットに付けられた番号は、遺物実測図の番号と一致する。

7．第２図は建設省国土地理院発行の2.5万分の１地形図「渋川」を一部加筆して使用した。

目　　次

巻頭写真
序　　文
例言・凡例

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要……1

1．発掘調査に至る経過……3
2．発掘調査の経過……3
3．遺跡の位置と周辺の遺跡……4
4．遺跡の立地……8
5．基本土層……9
6．調査の方法……9
7．遺跡の概要……10

Ⅱ　白川遺跡の遺構と遺物……11

1．縄文時代の遺構と遺物……13
(1)　竪穴住居跡……13
(2)　土　　坑……16
(3)　遺構外出土遺物……16
2．古墳時代の竪穴住居跡……18
3．奈良・平安時代の竪穴住居跡……46
4．その他の遺構と遺物……54
(1)　掘立柱建物跡……54
(2)　土坑・ピット……60
(3)　溝……63

Ⅲ　由森遺跡の遺構と遺物……85

1．縄文時代の遺構と遺物……87
(1)　竪穴住居跡……87
(2)　土　　坑……89
(3)　遺構外出土遺物……91
2．平安時代の竪穴住居跡……92
3．掘立柱建物跡……110

Ⅳ　久保田遺跡の遺構と遺物……125

1．縄文時代の遺構と遺物……127
(1)　竪穴住居跡……127
(2)　土　　坑……135
(3)　遺構外出土遺物……141
2．古墳～平安時代の竪穴住居跡……147
3．その他の遺構と遺物……157
(1)　掘立柱建物跡……157
(2)　土　坑……157
(3)　溝……159
(4)　井 戸 跡……160
(5)　遺構外出土遺物……160

Ⅴ　調査の成果と問題点……169

1．遺跡の変遷について……171
2．白川遺跡13号住居跡出土
　竹製品について……184
3．その他の主要な成果について……188
4．ま と め……188

挿 図 目 次

第１・２図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 7
第３図　立地図…… 8
第４図　基本土層図…… 9

〈白川遺跡〉
第５図　遺構配置及びグリッド設定図……12
第６図　Ｊ１号住居跡……13
第７図　〃　出土遺物……14
第８図　Ｊ２号住居跡……15
第９図　〃　出土遺物……15
第10図　縄文土坑実測図……16
第11図　遺構外出土遺物実測図……17
第12図　１号住居跡及びカマド……18
第13図　〃　出土遺物……19
第14図　２号住居跡……20
第15図　〃　カマド……21
第16図　〃　出土遺物(1)……21
第17図　〃　(2)……22
第18図　３号住居跡……23
第19図　〃　出土遺物……23
第20図　６号住居跡及び出土遺物……24
第21図　７号住居跡……24
第22図　９号住居跡……25
第23図　〃　出土遺物……25
第24図　10号住居跡及びカマド・炉……26
第25図　〃　出土遺物……27
第26図　11号住居跡及びカマド……28
第27図　〃　出土遺物(1)……29
第28図　〃　(2)……30
第29図　〃　遺物出土状況……30
第30図　12号住居跡及び出土遺物……31
第31図　13号住居跡及びカマド……32
第32図　〃　炭化材・焼土出土状況……32
第33図　〃　出土遺物(1)……33
第34図　〃　出土遺物(2)……34
第35図　〃　遺物出土状況……35
第36図　14号住居跡……36
第37図　〃　出土遺物……36
第38図　15号住居跡……37
第39図　〃　カマド……38
第40図　〃　出土遺物(1)……38
第41図　〃　〃　(2)……39
第42図　16号住居跡……39
第43図　17号住居跡……40
第44図　〃　出土遺物……40
第45図　20号住居跡……40
第46図　22号住居跡及びカマド……41
第47図　〃　出土遺物……41
第48図　24号住居跡及びカマド……42
第49図　〃　出土遺物……42
第50図　28号住居跡……43
第51図　〃　出土遺物……44
第52図　32号住居跡……44
第53図　34号住居跡……45
第54図　〃　出土遺物……45
第55図　４号住居跡及び出土遺物……46
第56図　５号住居跡……46
第57図　８号住居跡及び出土遺物……47
第58図　18号住居跡及び出土遺物……47
第59図　21号住居跡……48
第60図　〃　出土遺物……48
第61図　23号住居跡……49
第62図　25号住居跡……49
第63図　25号住居跡出土遺物……49
第64図　26号住居跡及びカマド及び出土遺物……50
第65図　27号住居跡……50
第66図　〃　出土遺物……51
第67図　29号住居跡……51
第68図　29号住居跡出土遺物……52
第69図　30号住居跡……52
第70図　30号住居跡出土遺物……52
第71図　31号住居跡及び出土遺物……53
第72図　35号住居跡……53
第73図　１号掘立柱建物跡……54
第74図　２Ａ・Ｂ号掘立柱建物跡……55
第75図　３号掘立柱建物跡……56
第76図　４Ａ・Ｂ号掘立柱建物跡……57
第77図　５号掘立柱建物跡……57
第78図　６号掘立柱建物跡……58
第79図　７号掘立柱建物跡……59
第80図　８Ａ・Ｂ号掘立柱建物跡……59
第81図　土坑(1)……61
第82図　土坑(2)・ピット……62
第83図　１、２号溝……63
第84図　３号溝……64
第85図　４号溝……64
第86図　掘立・土坑・ピット・溝・出土遺物……65

〈由森遺跡〉
第87図　遺構配置図及びグリッド設定図……86
第88図　Ｊ１号住居跡……87
第89図　〃　出土遺物　(1)……87
第90図　〃　〃　(2)……88
第91図　Ｊ２号住居跡……89
第92図　〃　出土遺物……89
第93図　縄文土坑及び出土遺物……90
第94図　遺構外出土遺物……91
第95図　１号住居跡……92
第96図　〃　出土遺物……92
第97図　２号住居跡……93
第98図　〃　出土遺物……93
第99図　３号住居跡……93
第100図　〃　出土遺物 ……94
第101図　４号住居跡 ……95
第102図　〃　出土遺物 ……96
第103図　５号住居跡 ……97
第104図　〃　出土遺物 ……97
第105図　６号住居跡 ……98
第106図　〃　出土遺物 ……98
第107図　７号住居跡 ……99
第108図　〃　出土遺物 ……99
第109図　８号住居跡……100
第110図　〃　出土遺物……100
第111図　９ａ号住居跡……101
第112図　９ｂ号住居跡……101
第113図　９ａ・ｂ号住居跡　出土遺物……101

第114図　10号住居跡……102
第115図　〃　出土遺物……102
第116図　11号住居跡……103
第117図　〃　出土遺物……103
第118図　12号住居跡……103
第119図　13号住居跡……104
第120図　14号住居跡……104
第121図　15号住居跡……104
第122図　14・15号住居跡　出土遺物……104
第123図　16号住居跡……105
第124図　〃　出土遺物……105
第125図　17号住居跡……105
第126図　18号住居跡……106
第127図　〃　出土遺物……106
第128図　19号住居跡及び出土遺物……106
第129図　20号住居跡……107
第130図　〃　出土遺物……107
第131図　22号住居跡……107
第132図　21号住居跡……108
第133図　〃　出土遺物(1)……108
第134図　〃　出土遺物(2)……109
第135図　1ａ・ｂ号掘立柱建物跡……110
第136図　2号掘立柱建物跡……110
第137図　3号掘立柱建物跡……111
第138図　6号掘立柱建物跡……111
第139図　4号掘立柱建物跡……112
第140図　5号掘立柱建物跡……113
第141図　7号掘立柱建物跡……113
第142図　8号掘立柱建物跡……114
第143図　9号掘立柱建物跡……114

〈久保田遺跡〉
第144図　遺構配置及びグリッド設定図……126
第145図　Ｊ1号住居跡……127
第146図　〃　出土遺物(1)……127
第147図　〃　出土遺物(2)……128
第148図　Ｊ2号住居跡……128
第149図　〃　出土遺物(1)……128
第150図　〃　出土遺物(2)……129
第151図　Ｊ3号住居跡……130
第152図　〃　出土遺物(1)……131
第153図　〃　出土遺物(2)……132
第154図　Ｊ4号住居跡……133
第155図　〃　出土遺物……133
第156図　Ｊ5号住居跡……134
第157図　〃　出土遺物(1)……134
第158図　〃　出土遺物(2)……135
第159図　Ｊ6号住居跡……136
第160図　〃　出土遺物(1)……136
第161図　Ｊ6号住居跡出土遺物(2)……137
第162図　縄文土坑……138
第163図　〃　出土遺物……139
第164図　陥穴状遺構……140
第165図　遺構外出土遺物(1)……142
第166図　遺構外出土遺物(2)……143
第167図　遺構外出土遺物(3)……144
第168図　遺構外出土遺物(4)……145
第169図　1号住居跡……147
第170図　〃　出土遺物……147
第171図　2号住居跡……148
第172図　4号住居跡……148
第173図　〃　出土遺物……148
第174図　5号住居跡……149
第175図　〃　出土遺物……149
第176図　6号住居跡及び出土遺物……150
第177図　7号住居跡及び出土遺物……151
第178図　8号住居跡及び出土遺物……151
第179図　9・10号住居跡……152
第180図　〃　出土遺物……152
第181図　11号住居跡……153
第182図　〃　出土遺物……153
第183図　12号住居跡……153
第184図　〃　出土遺物……154
第185図　13号住居跡及び出土遺物……154
第186図　14号住居跡……155
第187図　〃　出土遺物……155
第188図　15号住居跡……155
第189図　16・17号住居跡及び出土遺物……156
第190図　1号掘立柱建物跡……156
第191図　1号土坑及び出土遺物……157
第192図　2号土坑及び出土遺物……157
第193図　1号ピット……157
第194図　1・3号溝……158
第195図　2号溝……159
第196図　溝出土遺物……160
第197図　井戸跡及び出土遺物……161
第198図　遺構外出土遺物……161
〈調査の成果と問題点〉
第199図　遺跡変遷図―縄文時代―……175
第200図　〃　―古墳時代―……176
第201図　〃　―奈良・平安時代―……177
第202図　〃　―中・近世―……178
第203図　白川遺跡古墳時代集落変遷図……179
第204図　奈良・平安時代集落の変遷―Ⅶ～Ⅹ期―……180
第205図　〃　―Ⅺ期―……181
第206図　〃　―Ⅻ期―……182
第207図　〃　―XIII・XIV期―……183
第208図　竹製品実測図……184
第209図　竹製品編み方模式図……185

写　真　図　版

〈白川遺跡〉
ＰＬ１―白川遺跡全景
ＰＬ２―縄文時代の遺構
ＰＬ３―１・２・３号住居跡
ＰＬ４―６・７・９・10号住居跡
ＰＬ５―11・12号住居跡
ＰＬ６―13・14号住居跡
ＰＬ７―15・16・17号住居跡
ＰＬ８―20・22・24・25号住居跡
ＰＬ９―28・34・32号住居跡、３・５号土坑
ＰＬ10―４・５・８・18・21・23号住居跡
ＰＬ11―26・27・29・30号住居跡
ＰＬ12―31・35号住居跡、１・２・３・４・７号掘立柱建物跡
ＰＬ13―５・６号掘立柱建物跡、１・２・４・13号土坑
ＰＬ14―６号土坑、１号ピット、１・２・３・４号溝
ＰＬ15―縄文時代遺物(Ｊ１号住・Ｊ２号住・遺構外)

ＰＬ16－１号・２号住居跡出土遺物
ＰＬ17－２号住居跡出土遺物
ＰＬ18－２号・３号・６号・９号・10号・11号・20号住居跡出土遺物
ＰＬ19－11号住居跡出土遺物
ＰＬ20－12号・15号住居跡出土遺物
ＰＬ21－13号住居跡出土遺物
ＰＬ22－13号・14号住居跡出土遺物
ＰＬ23－古墳時代住居跡出土遺物(22・24・28・34号)
　　奈良・平安時代住居跡出土遺物(４・８・18・21号)
ＰＬ24－奈良・平安時代住居跡出土遺物(26・27・29・30・31号)
　　その他遺構出土遺物(１号ピット・５号土坑・３号溝)

〈由森遺跡〉
ＰＬ25－由森遺跡全景、縄文時代の遺構
ＰＬ26－１・２・３・４号住居跡
ＰＬ27－４・５・６・７号住居跡
ＰＬ28－８・９・10号住居跡
ＰＬ29－11・12・13・14・15・16号住居跡
ＰＬ30－16・17・18・19・20・21号住居跡
ＰＬ31－21・22号住居跡、１・２・３・４号掘立柱建物跡
ＰＬ32－５・６・７・８号掘立柱建物跡、１・２・３号土坑
ＰＬ33－縄文時代出土遺物
ＰＬ34－平安時代住居跡出土遺物(２・３・４号住居跡)
ＰＬ35－　〃　(５・６・７・８・９・10・11号住居跡)
ＰＬ36－　〃　(14・16・18・20・21号住居跡)

〈久保田遺跡〉
ＰＬ37－久保田遺跡全景
ＰＬ38－Ｊ１・Ｊ２・Ｊ３号住居跡
ＰＬ39－Ｊ４・Ｊ５・Ｊ６号住居跡、縄文土坑
ＰＬ40－縄文遺構、１・２号住居跡
ＰＬ41－４・５・６・７・８号住居跡
ＰＬ42－９・10・11・12号住居跡
ＰＬ43－13・14・16・17号住居跡、１・２・３号溝
ＰＬ44－２号溝、１号土坑、15号住居跡、ピット群、井戸
ＰＬ45－縄文時代出土遺物(Ｊ１～Ｊ５号住、Ｊ２号土坑)
ＰＬ46－縄文時代出土遺物(Ｊ６号住居跡・Ｊ１号土坑・遺構外)
ＰＬ47－縄文時代出土遺物(遺構外)
　　古墳～平安時代住居跡出土遺物(１～10号)
ＰＬ48－　〃　(11～16)
　　その他の遺構、遺構外出土遺物

表　目　次

周辺の遺跡一覧表……5

〈白川遺跡〉
Ｊ１号住居跡出土石器観察表……14
Ｊ２号住居跡出土石器観察表……15
遺構外出土石器観察表……16
１号住居跡出土遺物観察表……66
２号住居跡出土遺物観察表……67
２・３号住居跡出土遺物観察表……68
６・９号住居跡出土遺物観察表……69
10号住居跡出土遺物観察表……70
11号住居跡出土遺物観察表……71
11・12号住居跡出土遺物観察表……72
12・13号住居跡出土遺物観察表……73
13号住居跡出土遺物観察表……74
13・14・15号住居跡出土遺物観察表……75
15・17号住居跡出土遺物観察表……76
17・20・22・24号住居跡出土遺物観察表……77
24・28号住居跡出土遺物観察表……78
34・４・８・18・21号住居跡出土遺物観察表……79
21・25・26号住居跡出土遺物観察表……80
26・27・29号住居跡出土遺物観察表……81
29・30・31号住居跡出土遺物観察表……82
土坑・溝出土遺物観察表……83
３号溝・１号ピット出土遺物観察表……84

〈由森遺跡〉
Ｊ１号住居跡出土石器観察表……88
Ｊ２号住居跡出土石器観察表……89
遺構外出土石器観察表……91
１・２・３号住居跡出土遺物観察表……115
３・４号住居跡出土遺物観察表……116
４・５号住居跡出土遺物観察表……117
５・６号住居跡出土遺物観察表……118
７・８号住居跡出土遺物観察表……119
８・９ａｂ・10号住居跡出土遺物観察表……120
10・11・14号住居跡出土遺物観察表……121
15・16・18・19号住居跡出土遺物観察表……122
20・21号住居跡出土遺物観察表……123
21・22号住居跡出土遺物観察表……124

〈久保田遺跡〉
Ｊ２号住居跡出土石器計測表……129
Ｊ３号住居跡出土石器計測表……132
Ｊ４号住居跡出土石器計測表……133
Ｊ５号住居跡出土石器計測表……135
Ｊ６号住居跡出土石器計測表……137
土坑出土石器計測表……139
遺構外出土石器計測表……146
１・４・５住居跡出土遺物観察表……162
５・６・７・８号住居跡出土遺物観察表……163
８・９・10号住居跡出土遺物観察表……164
11・12・13・14号住居跡出土遺物観察表……165
16号住居跡土坑・溝・井戸・遺構外出土遺物観察表……166
遺構外出土遺物観察表……167

〈調査の成果と問題点〉
　　遺跡変遷表……174

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要

1．発掘調査に至る経過

富士見村では昭和58年から本村の西南部を中心とする地域で県営ほ場整備事業を行ってきている。それに伴い埋蔵文化財発掘調査も大字横室地区、米野地区で毎年行われてきた。

昭和62年度のほ場整備事業は新たに大字田島地区、原之郷地区でも開始されることとなったが、「群馬県遺跡台帳」には事業対象地内に埋蔵文化財包蔵地その他の遺跡の記載はなかった。しかし、地形的にみると十分に遺跡の存在が予想されることから、群馬県文化財保護課及び開発関係諸機関と富士見村教育委員会の3者合同で、あらかじめ開発予定区域全面の遺物散布調査を行ったところ、田島字白川、字由森、原之郷字久保田の各地区ともに縄文土器片、石器、土師器破片等が認められたため、とりあえず試掘調査を行い再度協議を行うこととなった。試掘調査は昭和62年7月14日から7月24日まで久保田地区－白川地区－由森地区の順序で行い、各地区で遺構、遺物の検出を見た。試掘調査の結果と工事計画をもとに改めて関係諸機関が集まり協議を行った。本年度の工事は畑地と水田が予定されており、道水路だけでなく遺跡の乗る台地のかなりの部分が削平されることが予想されたため、調査範囲・調査期間・費用等の面で協議は難航したが、8月のお盆過ぎに調査を開始し、11月末日までに調査を終了することで合意をみた。

2．発掘調査の経過

発掘調査は試掘調査と異なり、白川遺跡－由森遺跡－久保田遺跡の順序で行った。

白川遺跡の調査は、試掘調査の結果表土が厚かったため、ブルドーザーによる表土の粗押しから始めた。引き続きパワーショベルによって南端部－北端部－中央部の順序で表土剝ぎを行ない、作業員を投入して、遺構の検出作業を行った。さらに、遺構検出作業の合間を見て一部遺構（北端部－1・2号住居跡）の調査も開始した。表土剝ぎは8月27日に終了した。当初は数名の作業員しか確保できなかったが、9月1日からは作業員が大幅に増員できるようになったため、改めて南端部から調査を行うことにした。(平安時代の遺構が多く、比較的初心者でも調査を行いやすいと思われたため。)南半部は小型の住居が多く、また、渇いた台地上での調査であったため順調に調査を行うことができ、順次北側へと進んでいった。しかし季節は秋の長雨のシーズンであり、やがて度々の降雨に悩まされることとなった。さらに、北半部の窪地を取り巻く古墳時代の住居の調査を開始すると、湧水にも悩まされることとなった。急遽排水ポンプを導入したものの、調査の進捗ははかばかしくなかった。頭上からの降雨、足下からの湧水に悩まされ、毎日泥だらけになりながらの調査も10月14日に遺跡の全体写真を撮影し、22日には最後の実測を行って全て終了した。

由森遺跡の調査は白川遺跡の調査終了時期を考慮し、10月5日から表土剝ぎを開始した。20日には作業員を投入し遺構検出作業を開始した。白川遺跡の調査が終了した23日からは全作業員を投入し、24日には南西端部から遺構調査を開始した。調査は順調に進んでいたが、工事工程上調査区の北側を先に明け渡して欲しいとの申し入れがあり、南側での調査を中断し、改めて北側から調査を行うこととなった。11月10日に北半部の全体写真を撮影し、11日には工事業者に引き渡した。紆余曲折はあったものの11月14日には現地見学会を行い、18日には最後の実測を行い調査を終了した。

久保田遺跡の調査は11月13日から表土剝ぎを開始した。14日には由森遺跡の人員を一部割き、遺構検出作業と遺構調査も北東部の道路予定地から開始した。表土剝ぎの進捗に伴い20日からは切り土部分の調査を開

始した。11月30日に全景写真を撮影し、若干予定よりも遅れたものの12月５日には調査を終了した。

３．遺跡の位置と周辺の遺跡

富士見村は群馬県の県庁所在地である前橋市の北方に接し、上毛三山の一峰である赤城山の南西部に位置している。標高は南端の約140mから赤城山頂の1828mまでで、標高450m前後の傾斜変換点を境として、北東部の山岳地と南西部の裾野部分とに２分される。さらにこの裾野部分も、小河川に開析されてはいるものの、比較的平坦な火山性扇状地形と、北西の北橘村から続く開析谷の発達した丘陵性台地地形に２分される。本報告の３遺跡はこの扇状地形の西端に位置する。

周辺の遺跡と富士見村の遺跡

富士見村で本格的な発掘調査が行われるようになったのは昭和58年からであるが、それ以前にも個人的な遺物採集は各地で行われていた。また、富士見村誌作成の際には群馬大学史学研究室によって遺物の散布調査、古墳調査が行われ、群馬県遺跡台帳作成の際にも遺物の散布調査等が行われている。ここではこれらの資料とこれまでの発掘調査に基づいて、富士見村の遺跡について概観してみたい。

〈旧石器時代〉

現在までに調査された遺跡は、昭和59年に群馬県立歴史博物館によって試掘調査の行われた龍の口遺跡だけであり、遺物の性格から採集報告もされていない。しかし、隣接する北橘村、宮城村、前橋市などでも調査例が報告されており、富士見村にもさらに多くの遺跡が存在していると思われる。

〈縄文時代〉

富士見村でもっとも多くの遺跡地が報告されている時代であり、居住可能と思われる地域の多くで土器・石器等の遺物が採集されている。前橋市と接する横室、原之郷、時沢など標高150m前後の地域から、傾斜変換点である標高400～450mの地域まで濃密に分布している。特に、赤城山大洞でも早期の土器が採集されており、注目される。富士見村誌によると63遺跡が、台帳では55遺跡が記載されている。

時期的にみると、赤城山南麓の一般的な傾向と同様に、前期（20遺跡）と中期（26遺跡）に遺跡数が増大し、早期（３遺跡）・後期（５遺跡）・晩期（明確な遺跡はない）には極端に減少するようである。

これまでの発掘調査では多寡の差はあるものの、いずれの遺跡でも該期の遺構・遺物が検出されている。

〈弥生時代〉

縄文時代の早期、後期と同様に遺跡数のもっとも少ない時代である。しかし、昭和58年度に発掘調査を行った田中田遺跡では、調査以前には全く予想もしていなかったにもかかわらず、中期と後期の遺物が出土しており、他にも遺跡の存在する可能性が多い。

〈古墳時代〉

上毛古墳綜覧に記載された古墳の数は29基であるが、富士見村誌によると約90基の存在が報告されている現在ではこれらのうちの多くがすでに平夷されてしまっているが、横室地区では墳丘を残すものが比較的多く、10基ほどが数えられる。

古墳の分布は白川沿いの時沢・小沢、南西に位置する横室・原之郷、北橘村に接する米野・山口の各地区に集中している。標高は150～250mの範囲に多いが、米野から山口にかけては約400m付近まで分布していたようである。

遺物の散布状況は村誌によると田島字清水、引田字高橋、横室字沢口の３カ所だけであり、時期不明の土師器出土とされる地域を含めても余り多くはない。しかし、古墳の分布状況から考えると、さらに多くの集落跡等の遺跡があると思われる。

これまでの調査では、横室の田中田遺跡・岩之下遺跡、米野の窪谷戸遺跡・向吹張遺跡で集落跡が調査されている。本報告書の白川遺跡・久保田遺跡でも集落跡、住居跡を調査した。

〈奈良・平安時代〉

村誌によると土師器の新式を出土する遺跡として11ケ所が記載されており、時期不明とされる土師器出土地の多くも該期に属すると思われる。両者合わせると27ケ所となり縄文時代に次いで多い。

遺物の散布は標高150～450mまで比較的密に分布しており、縄文時代前期・中期に近い状況を呈しているまた、赤城山の地蔵岳南面（標高1,370m付近）にも散布が認められており、山岳信仰に関連する遺物と思われる。

これまでの発掘調査では米野窪谷戸遺跡、見眼遺跡で集落跡が検出されており、合計約70軒の住居跡や掘立柱建物跡・溝跡が調査された。また、60・61年度調査の米野向吹張遺跡、61年度調査の横室岩之下遺跡でも各20軒前後の集落跡を調査し、掘立柱建物跡・溝なども検出されている。本報告書の３遺跡ともに該期の遺跡であり、やはり20軒前後の住居跡と掘立柱建物跡・溝等を調査している。

〈中近世〉

群馬県遺跡台帳に記載された本村の城館跡は５ケ所であるが、村誌等によると他にも数ケ所の言い伝えがあり、また、発掘調査の成果からもさらに多くの遺跡の存在が予想される。

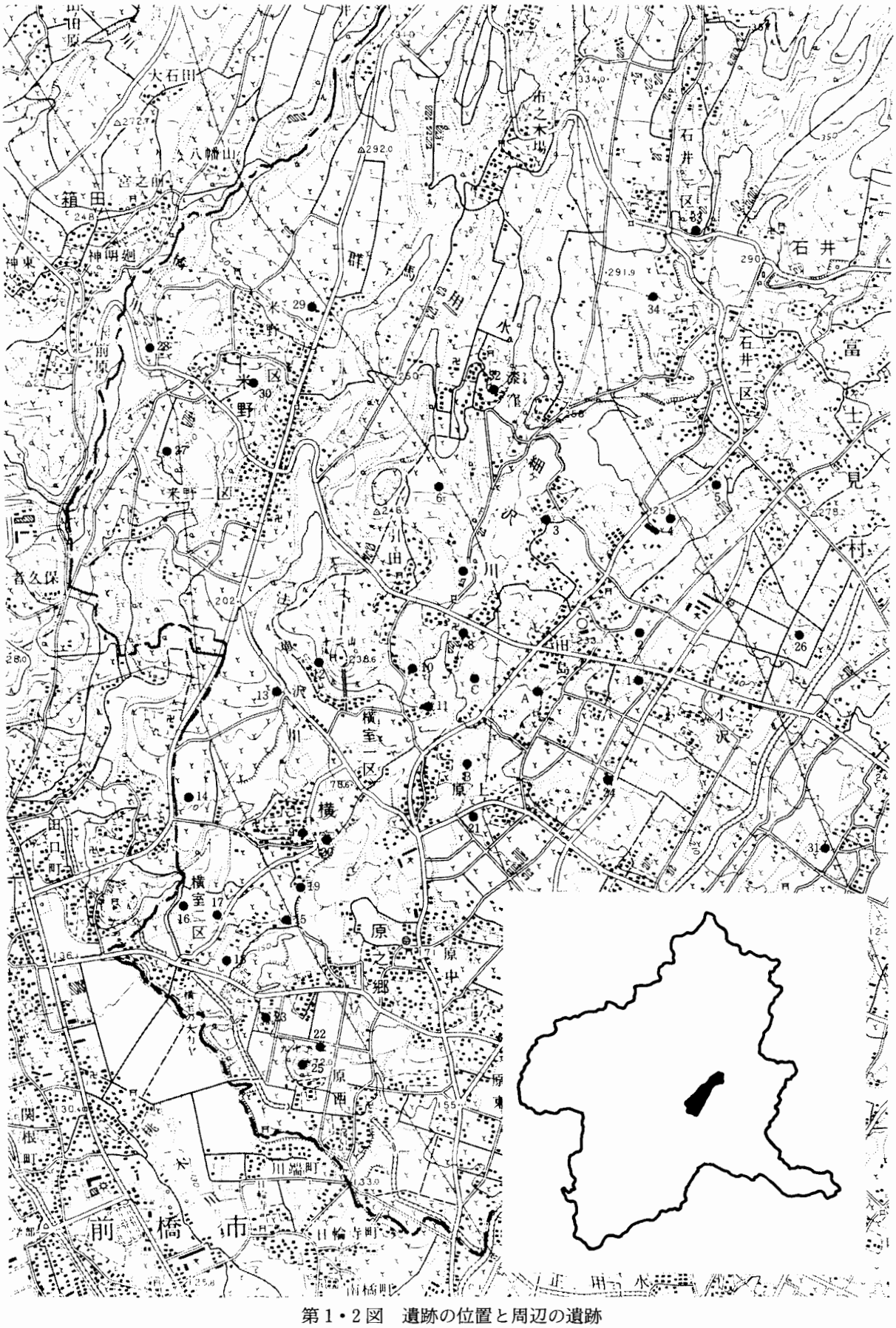
これまでの発掘調査では、窪谷戸遺跡で溝（堀）跡、竪穴状遺構、井戸跡、見眼遺跡で道路跡、向吹張遺跡で溝（堀）跡、寄居遺跡で石積みの溝跡を調査している。本報告の久保田遺跡でも溝跡を調査した。

調査地周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考	群馬県遺跡台帳№
A	白川遺跡	富士見村田島字白川	縄文、古墳、奈良平安	集落跡	本報告書	
B	由森遺跡	〃　田島字由森	縄文、平安	集落跡	〃	
C	久保田遺跡	〃　原之郷字久保田	縄文、古墳、平安中近世	集落跡など	〃	
1	（鉄砲林）	〃　田島字鉄砲林	古墳	包蔵地		2118
2	（十二）	〃　田島字十二	縄文	包蔵地	散布多量	2119
3	（赤城）	田島字赤城	縄文、古墳	包蔵地	散布少量	2120
4	（新井）	田島字新井	縄文、古墳	包蔵地	散布少量	2121
5	（切蓋）	〃　田島字切蓋	縄文、古墳	包蔵地	散布やや多量、縄文中期、土師一新	2122
6	（宿原）	〃　引田字宿原	縄文、古墳	包蔵地	広範囲に散布多量縄文前～後期土師一断	2123
7	（三反田）	〃　引田字三反田	古墳	包蔵地		2124
8	（高橋）	〃　引田字高橋	古墳	包蔵地	縄文中期、土師一古	2126

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考	群馬県遺跡台帳No.
9	横室古墳	〃　横室字中	古墳	墳墓	上毛古墳綜覧13号　円墳	2127
10	森山古墳	〃　横室字道上	古墳	墳墓	〃　6号　円墳	2128
11	道上古墳	〃　横室字道上	古墳	墳墓	円墳	2129
12	初室古墳	〃　横室字初室	古墳	墳墓	上毛古墳綜覧7号、群大調査円墳	2129
13	庄司原古墳	〃　横室字庄司原	古墳	墳墓	〃　9号、〃　円墳	2131
14	陣場古墳	〃　横室字陣場	古墳	墳墓	〃　12号、〃　円墳	2133
15	荒井古墳	〃　横室字寄居	古墳	墳墓	〃　14号、〃　円墳	2134
16	田中田古墳	〃　横室字田中田	縄文、古墳	集落跡など	昭和58年度調査、報告書既刊	
17	(田中田)	〃　横室字田中田	古墳	包蔵地	小範囲に散布少量	2139
18	岩之下遺跡	〃　横室字岩之下	縄文、古墳、奈良平安	集落跡など	昭和61年度調査、報告書既刊	
19	寄居遺跡	〃　横室字寄居	縄文、中近世	館跡など	〃　、〃	
20	田中遺跡	〃　横室字田中	縄文	集落跡など	〃　、〃	2141
21	(鎌塚)	〃　原之郷字鎌塚	古墳	包蔵地	散布少量　土師―新	2143
22	(山ノ郷)	〃　原之郷字山ノ後	弥生	包蔵地	小範囲に散布やや多量　土師―新	2147
23	金山城跡	〃　原之郷字岡	室町	城館跡		2149
24	鎌塚古墳	〃　原之郷字塚ノ上	古墳	墳墓	上毛古墳綜覧15号	2150
25	九十九山古墳	〃　原之郷字九十九山	古墳	墳墓	〃　16号、群馬大学調査前方後円墳	2151
26	八幡古墳	〃　小沢字八幡	古墳	墳墓	円墳	
27	丸山城跡(丸山)	〃　米野字丸山	室町	城館跡包蔵地	散布やや多量、縄文後期？弥生	2153
28	向吹張遺跡	〃　米野字向吹張尺神	縄文、古墳、奈良平安、中近世	集落跡など	昭和60・61年度調査報告書既刊	2154
29	見眼遺跡	〃　米野字見眼	縄文、奈良、平安中近世	集落跡など	昭和59年度調査、報告書既刊	2155
30	窪谷戸遺跡	〃　米野字窪谷戸	縄文、古墳、奈良平安、中近世	集落跡など	〃　、〃	2156
31	(甚太夫)	〃　時沢字甚太夫	縄文	包蔵地	小範囲、散布多量　縄文中期	2170
32	漆窪遺跡	〃　漆窪字城跡	戦国	城館跡		2181
33	岡城跡	〃　石井字岡	室町	城館跡		2184
34	(下小原目)	〃　石井字下小原目	縄文	包蔵地	散布地　縄文中期	2196

註：群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編）及び、富士見村誌をもとに作成した。備考中の時代細別は富士見村誌による。
既調査地については調査結果に基づく。
包蔵地の遺跡名は便宜的に小字名をあてた。



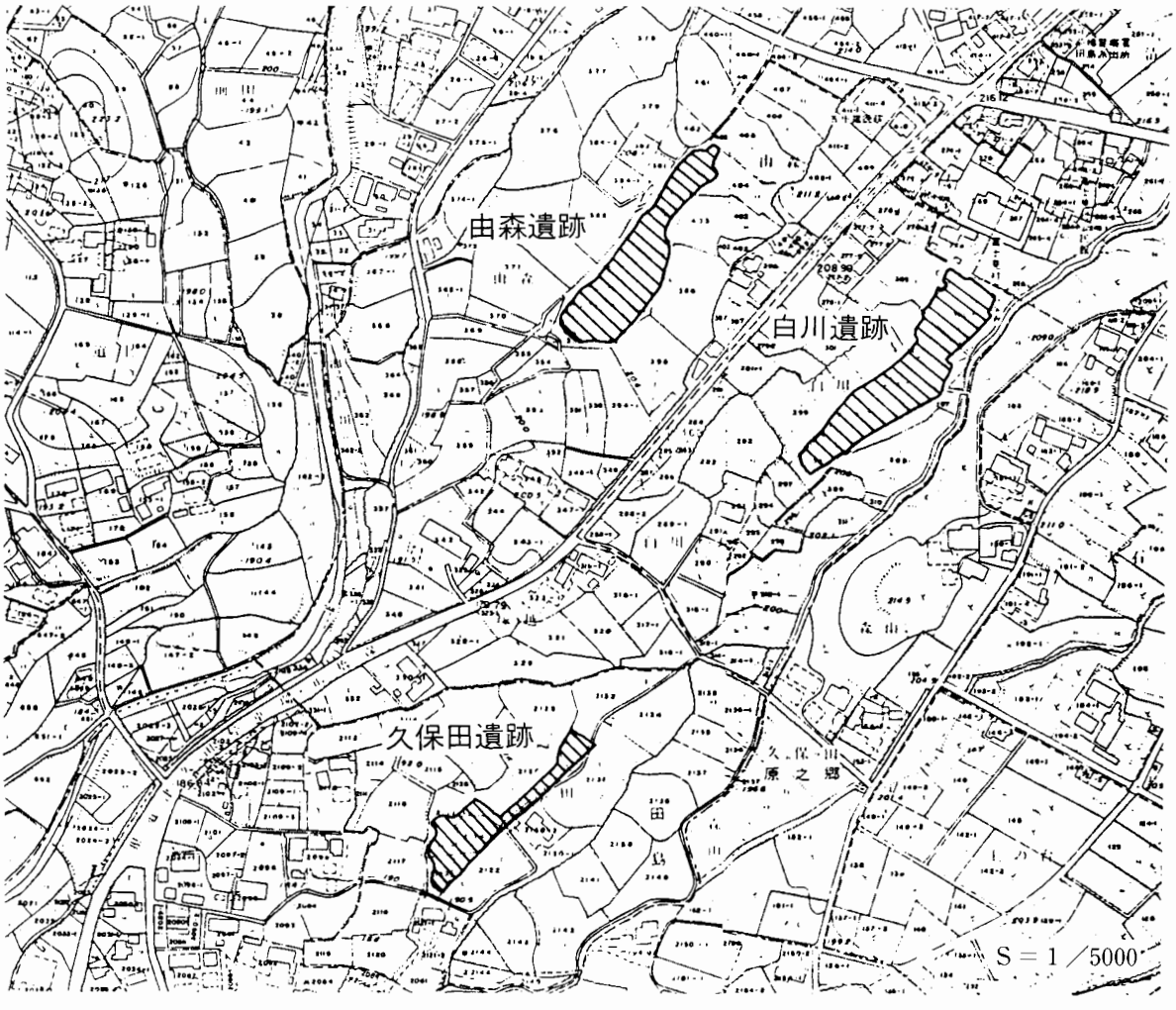
第1・2図　遺跡の位置と周辺の遺跡

4．遺跡の立地

3遺跡の占地する台地は、すでに述べたように扇状地形の西端に位置する。扇状地形と丘陵性地形との間には細ケ沢川が蛇行しながら南西へ流下している。扇状地上には台地との比高差は少ないものの幾筋もの開析谷が地形に添って発達しており、遺跡周辺ではその内の数本が細ケ沢川へと合流していく。さらにこれらの開析谷からも小支谷が樹枝状に伸び、地形的にはかなり複雑な様相を呈する。

由森遺跡は2本の開析谷とで挟まれた狭長な舌状台地の先端部に位置する。開析谷の先端は細ケ沢川で合流している。北西の開析谷と細ケ沢川の間には別の舌状台地が形成されており、由森遺跡の北東約300mが南東開析谷の谷頭となっている。調査地の西側は開析谷に向かって緩斜面になっており、水田跡等も予想されたが、試掘調査では確認できなかった。遺跡はこの緩傾斜地を巡り調査地の北側にも伸びてはいるが、台地奥まで連続して展開するわけではない。試掘調査では遺跡の北限が明瞭に把握できたわけではないが、単位集落の過半部は調査できたものと思われる。

由森遺跡の南東開析谷と大川の間の台地には、さらに台地を縦断するように谷地が派生しており、この谷頭を取り巻くように白川遺跡が占地している。調査地の南西側は台地がかなり狭まっており、遺構密度が急



第3図　立　地　図

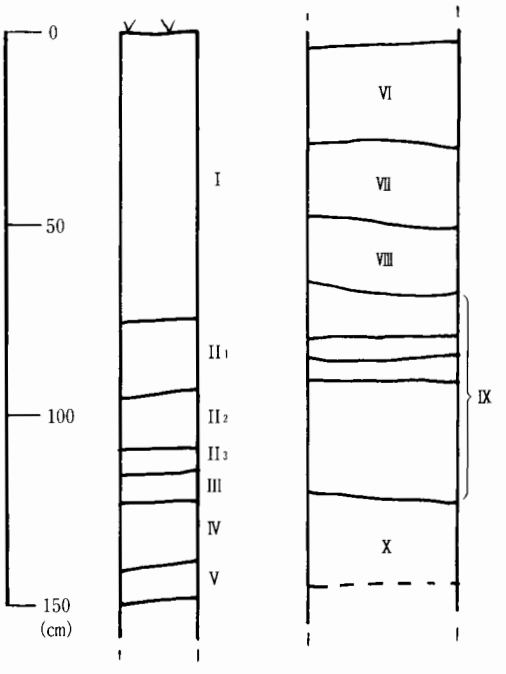
速に減じている。北東側には大川に面してさらに遺跡が展開するが、明瞭には範囲を把握できていない。

久保田遺跡は白川遺跡から南西に続く舌状台地の先端部に位置している。調査地は台地中央の道路予定地部分と２ケ所の切り土部分であり、調査地の北西側と南東側にはさらに遺跡が展開するものと思われる。北東端部には試掘調査でも明瞭な遺構は検出されておらず、白川遺跡と久保田遺跡との間の台地は空白地となっている。

5．基　本　土　層

３遺跡はともに近接した台地上にあり、大きな土層堆積状況の相違はない。但し、耕作等による削平の程度により若干の差異は認められる。ここでは白川遺跡のほぼ中央部で観察できた堆積状況を説明し、３遺跡の基本土層としたい。

I	暗褐色土	耕作土
II$_1$	黒褐色土層	ＦＰ、Ｃ軽石含む。
		橙色小粒含む。
$_2$	〃	ＦＰ、Ｃ軽石含む。
$_3$	〃	ＦＰ・ＦＡ含む。
		橙色小粒含む。砂質土。
III	黒色土	Ｃ軽石含む。
IV	〃	夾雑物少ない。
V	褐色土	ローム漸移層。
VI	黄褐色ローム	
VII	ＳＰ層	浅間－白糸軽石。
VIII	淡褐色ローム	
IX	ＢＰ層群	浅間－板鼻褐色軽石群。
X	暗褐色土	暗色帯



第４図　基本土層図

6．発掘調査の方法

調査は基本的に全面発掘を行った。まず、表土剝ぎは確認面よりほぼ20cmほど上部までの表土をブルドーザーによって粗押しし、その後パワーショベルによって遺構確認面までの表土剝ぎを行った。重機による表土剝ぎがある程度進捗した段階で作業員を投入し、表土剝ぎと並行して遺構の検出作業を行い、順次遺構調査へと入っていった。遺構検出段階で重複が確認されたものについては、極力新→旧の順序で調査するように努めたが、時間短縮等の都合で、手順を踏まずに行わざるをえなかったものもある。

竪穴住居跡を例に調査手順を説明すると、基本的に１～２本のベルトを残し床面・壁面までを精査した。セクションは基本的にベルトの南側と、西側で観察・図面作成を行った。柱穴のある住居跡の場合は柱穴を通して２～４本のエレベーションを測量した。遺物は基本的に床面直上のものは平面的な位置と高さを記録して取り上げたが、残存状態のよいもの、特に壁面近くから出土したものは上層のものも記録して取り上げ

た。それ以外の上層遺物や小破片は出土位置を記録せず、埋土遺物として一括して取り上げた。

遺物包含層の調査がなかったため、主に実測図作成のために10mメッシュでグリッド設定を行った。基準線は国家座標に合わせてある。グリッドの呼称は南東杭で行っている。

水準測量のためのベンチマークは、遺跡により３～５ケ所設けている。

作成図面は基本的に竪穴住居跡・掘立柱建物跡の平面図・断面図は1／20、住居の竈・炉、土坑等の遺物出土状態実測図は1／10で行った。溝の平面図は1／40、断面図1／20、遺跡の全体図は1／200で行った。平面実測の方法は1／20～1／200は平板実測で、1／10は基準線を設定して行った。

竪穴住居跡の調査は基本的に床面までで、床下の調査は行っていない。

7．各遺跡の概要

白川遺跡－縄文時代の遺構は竪穴住居跡が前期後半１軒、後期１軒で調査区域のほぼ中央部に検出された。土坑は住居跡の周辺に検出されている。遺構外遺物の出土位置は、前期は南半部が多く、中期・後期は北半部、特に谷頭の西側周辺と住居跡の周辺が多い。

古墳時代の竪穴住居跡は南端と西側窪地周辺を除いて全体的に占地しているが、北半部に比較的多い。総数20軒が検出された。住居以外では溝が北端に検出された。また、土坑も検出されているが明確な数量は不明である。住居跡にはＦＡ（榛名山二ツ岳噴出火山灰層）が堆積するものとしないものがあり、良好な一括遺物を出土した住居跡も多い。

奈良・平安時代の竪穴住居跡は時期的に不明瞭なものも含めて14軒を調査した。調査範囲内では南半部に多く、北半部では河川寄りに少数検出されている。掘立柱建物跡は建て替えも含めて１１棟を調査した。占地状況は住居跡とほとんど変わらないが、北半部に多く、南半部に少ない。

由森遺跡－縄文時代の住居跡は前期中葉のものが２軒検出され、調査区北端に占地する。土坑は住居よりも若干広い範囲に認められた。遺構外の遺物は北端と南端にほぼ限定して出土した。

平安時代の竪穴住居跡は23軒を調査した。南端と中央部に群在し、北半部にも散在するが、調査区域の関係もあり、北半の占地状況は不明瞭である。掘立柱建物跡は住居跡群と重複する形で南端に集中し、中央部は少ない。建て替えを含め、約10棟を調査した。なお、南端と北半部の数ケ所には小ピットが集中して検出されており、これらも建物跡の可能性がある。

久保田遺跡－縄文時代前期初頭の竪穴住居跡を６軒調査した。調査区域のほぼ中央部に広く占地しており、土坑の占地状況も同様である。南西端には陥穴状の遺構が１基検出されている。遺構外の遺物は北端と南端を除いた比較的広い範囲から出土したが、住居跡周辺がもっとも多い。時期的には前期が多いが、早期・中期も若干出土している。

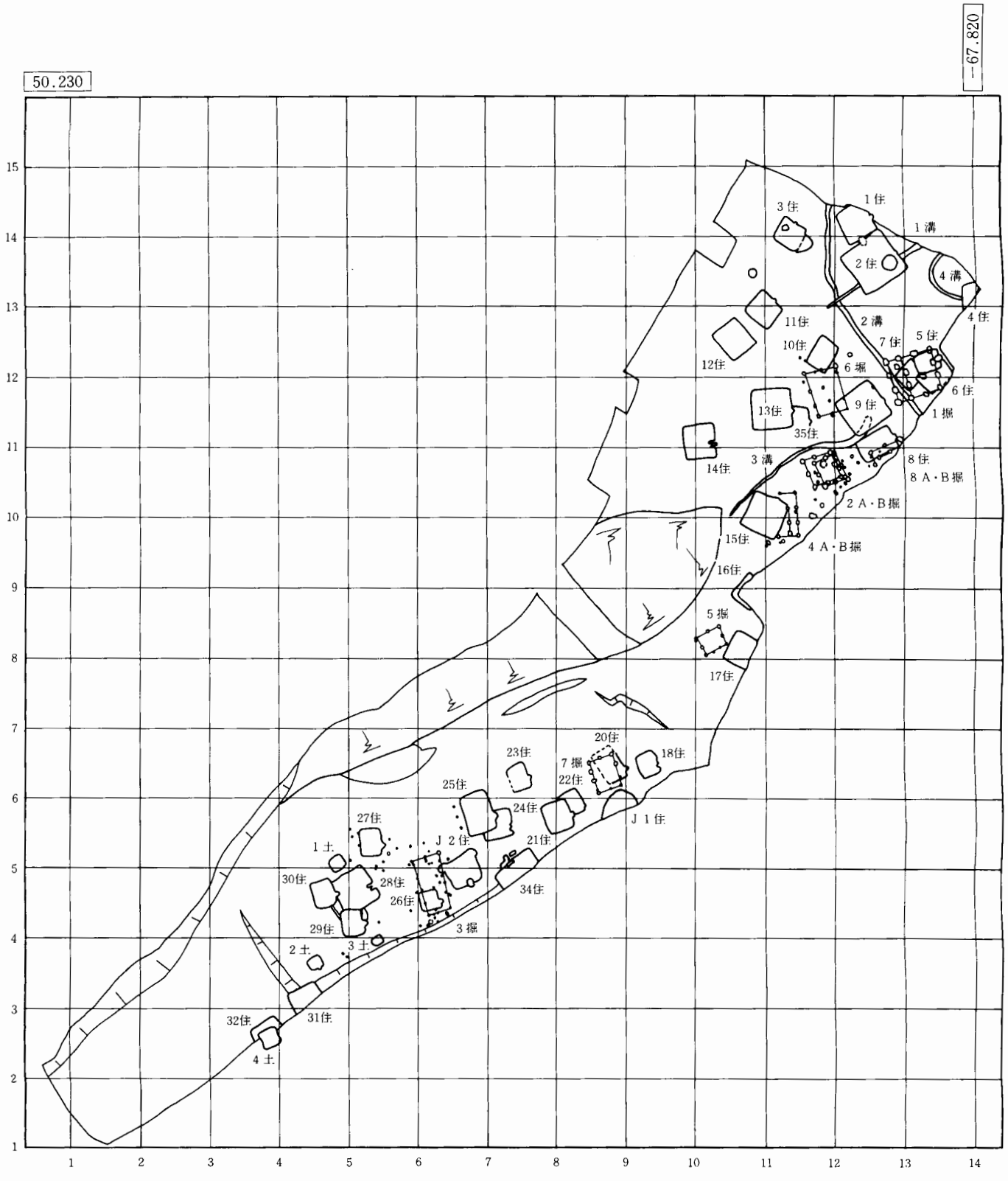
古墳時代前期の遺構は、調査区域北端に竪穴住居跡と土坑が各１検出された。後期の住居跡は南半部に１軒検出されただけである。

奈良・平安時代の竪穴住居跡はほとんどが南西端にまとまって検出された。総数13軒である。時期は不詳であるが、掘立柱建物跡が北東端部に１棟だけ検出された。なお、掘立柱建物跡周辺と南西端住居跡群の空閑地にピット群が検出されており、建物跡の可能性もある。

溝は３条検出されており、中央部の１条は中世の館跡の一部と思われる。

南端に検出された井戸跡は屋敷跡に伴うと思われるが、削平が激しく他の施設は検出されなかった。

II　白川（しらかわ）遺跡の遺構と遺物



第5図　遺構配置及びグリッド設定図

1．縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

Ｊ１号住居跡（第６・７図）

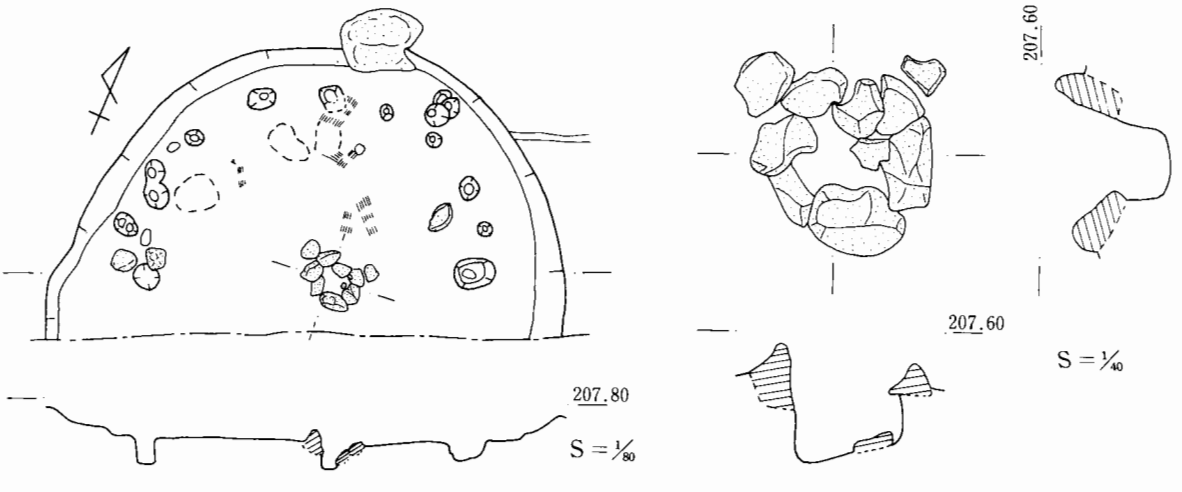
５－９グリッドに位置する。南東部の半分弱は耕作等により、すでに削平されている。

東西約5.4m、南北4.4m以上を測り、円形もしくは南北に若干長い楕円形を呈すると思われる。深さは約30cmで、壁は角度をもって立ち上がる。床面は全体的に軟弱である。壁に沿って小ピットが多数検出されており、柱穴と思われる。床面のほぼ中央部に石組炉が付設されている。遺物は北西端の床直で注口土器が出土した以外は埋土中からの出土である。深鉢、石皿等が出土している。なお、床面直上から埋土中にかけて多量の炭化物・焼土が出土している。

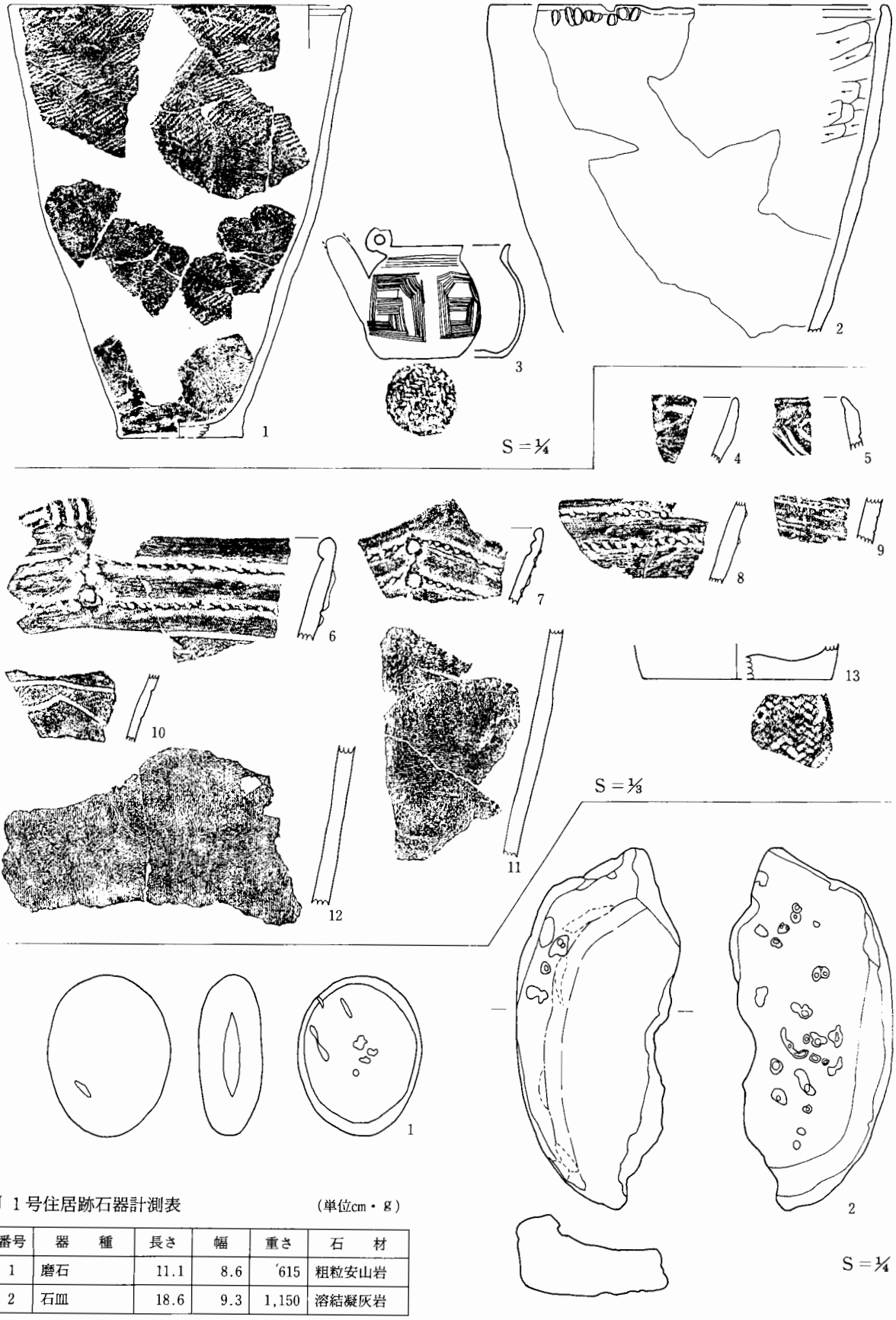
出土した遺物には、平口縁となる大型の深鉢形を呈するもので、口縁部内面に太い沈線を巡らせ，器面全体にＬＲによる斜縄文を施すもの（第７図１）や、平口縁となる無文の大型深鉢形となるもの（第７図２）、底面に網代痕を持つ小型の注口土器（第７図３）がある。第７図４は無文の口縁部で、５は口縁部に刻みを持つ細い隆帯を巡らせ、沈線による文様を描くもの。６～８は平口縁ないしは波状口縁となるもので、口縁部に刻みを持つ細い隆帯を二条巡らせ、その下に沈線で区画し、区画内にＬＲの縄文を施している。９・10は沈線による文様の区画内に、ＬＲの縄文を施したもの。11・12は、無文となる胴部の破片である。13は底面に網代痕が施されているものである。これらの土器は、後期の堀之内II式に比定されよう。このほかにも、前期の諸磯式土器が数点出土している。

Ｊ２号住居跡（第８・９図）

３・４－７グリッドに位置する。北西隅と南西隅に土坑が重複するが、底面が住居の床面とほぼ同一レベルであり、新旧関係は不明である。住居に伴う可能性もある。径は1.0～1.2mで円形を呈する。遺物は出土していない。東壁にもＪ１号土坑が重複するが、新旧関係は不明である。



第６図　Ｊ１号住居跡



Ｊ１号住居跡石器計測表　　（単位cm・g）

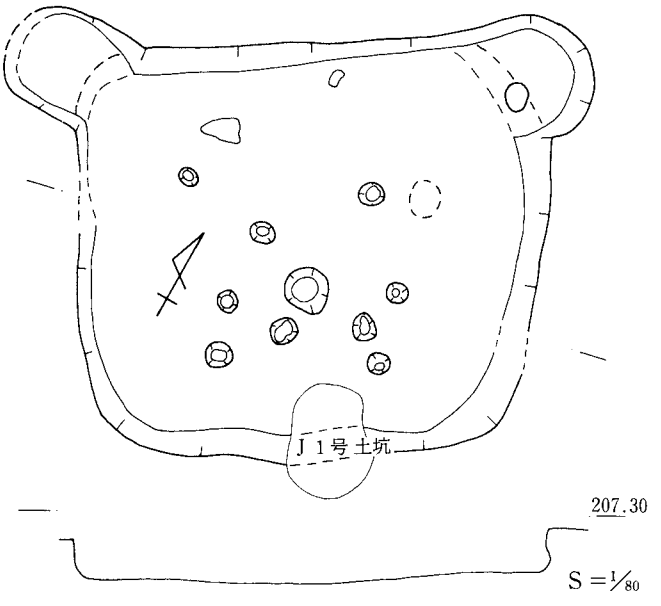
番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
1	磨石	11.1	8.6	′615	粗粒安山岩
2	石皿	18.6	9.3	1,150	溶結凝灰岩

第７図　Ｊ１号住居跡出土遺物

Ｊ２号住居跡は東西4.4m、南北約4.8mを測り、隅丸方形状を呈する。深さは約40cmである。壁面は北・西壁は比較的直に立ち上がるが、南・東壁は角度をもって立ち上がる。床面は中央部が若干凹んでおり、小ピットが多数検出されているが、いずれも浅く明確に柱穴と判断できる物はない。北寄りの床面には焼土が検出されており、地床炉の可能性がある。床面のほぼ中央部に小ピットがあるが、焼土が検出されず、炉であるかどうか不明である。

遺物は床直で２個体の深鉢が出土したが埋土からは破片が少量出土しただけである。

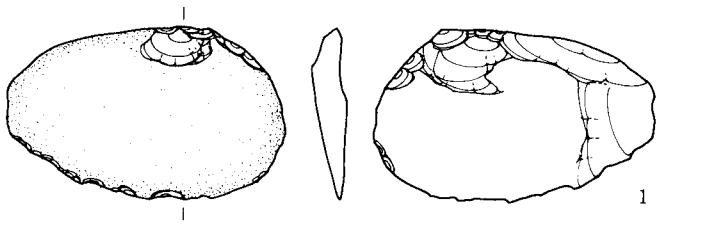
出土した遺物には、平口縁となる口縁部が外反する深鉢形を呈し、器面全体にＲＬの縄文を施したもの（第９図１）。２・３のように縄文を地文とし、沈線でさらに文様を描くもの。４は地文に縄文を持つ深鉢の胴部のくびれ部に半裁竹管具による沈線と爪形刺突を施したもの。４～８は、胴部にＲＬの縄文が施されたものである。これらの土器は、前期の諸磯ａ式に比定されよう。

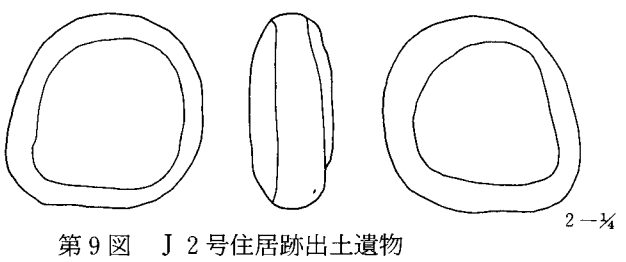


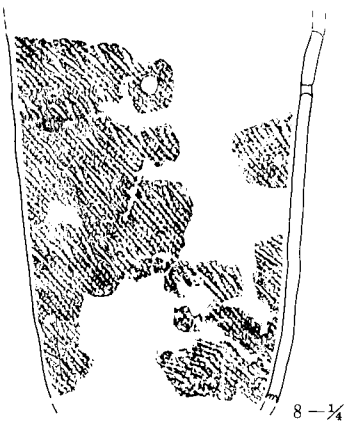
第８図　Ｊ２号住居跡

Ｊ２号住居跡石器計測表　（単位cm・g）

番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
1	スクレイパー	6.8	11.0	58.2	輝緑岩
2	磨石	10.4	10.6	635	粗粒安山岩







第９図　Ｊ２号住居跡出土遺物

(2) 土　　坑

Ｊ１号土坑（第10図）

４－７グリッドに位置する。Ｊ２号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

長径約1.2m、短径1.0mを測り、長円形を呈する。深さは96cmである。

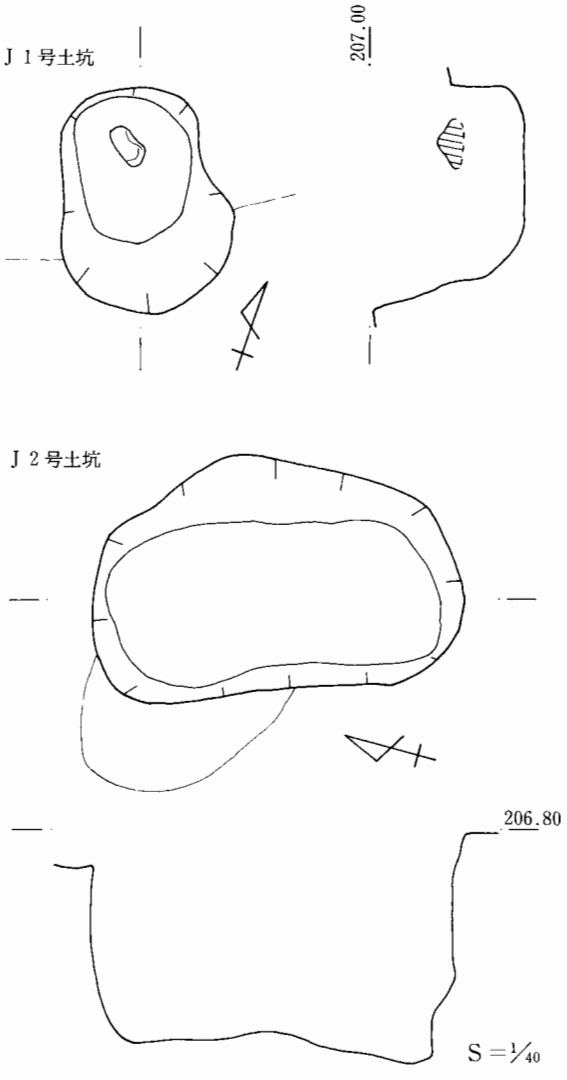
遺物は埋土中位から礫が出土したほか、数点の石器類が出土している。土器が出土しないため、詳細な時期は不明であるが、埋土から縄文時代と思われる。

Ｊ２号土坑（第10図）

４－６グリッドに位置する。28、30号住居跡と重複する。北西にも土坑が重複する可能性がある。

長径2.0m、短径1.2mを測り 歪んだ隅丸長方形状を呈する。深さは約1.2mである。底面は中央が若干高くなっており、両端が低い。

遺物は底面近くから礫が数点出土しただけである。土器が出土しないために明確な時期は不明であるが、埋土から縄文時代とした。



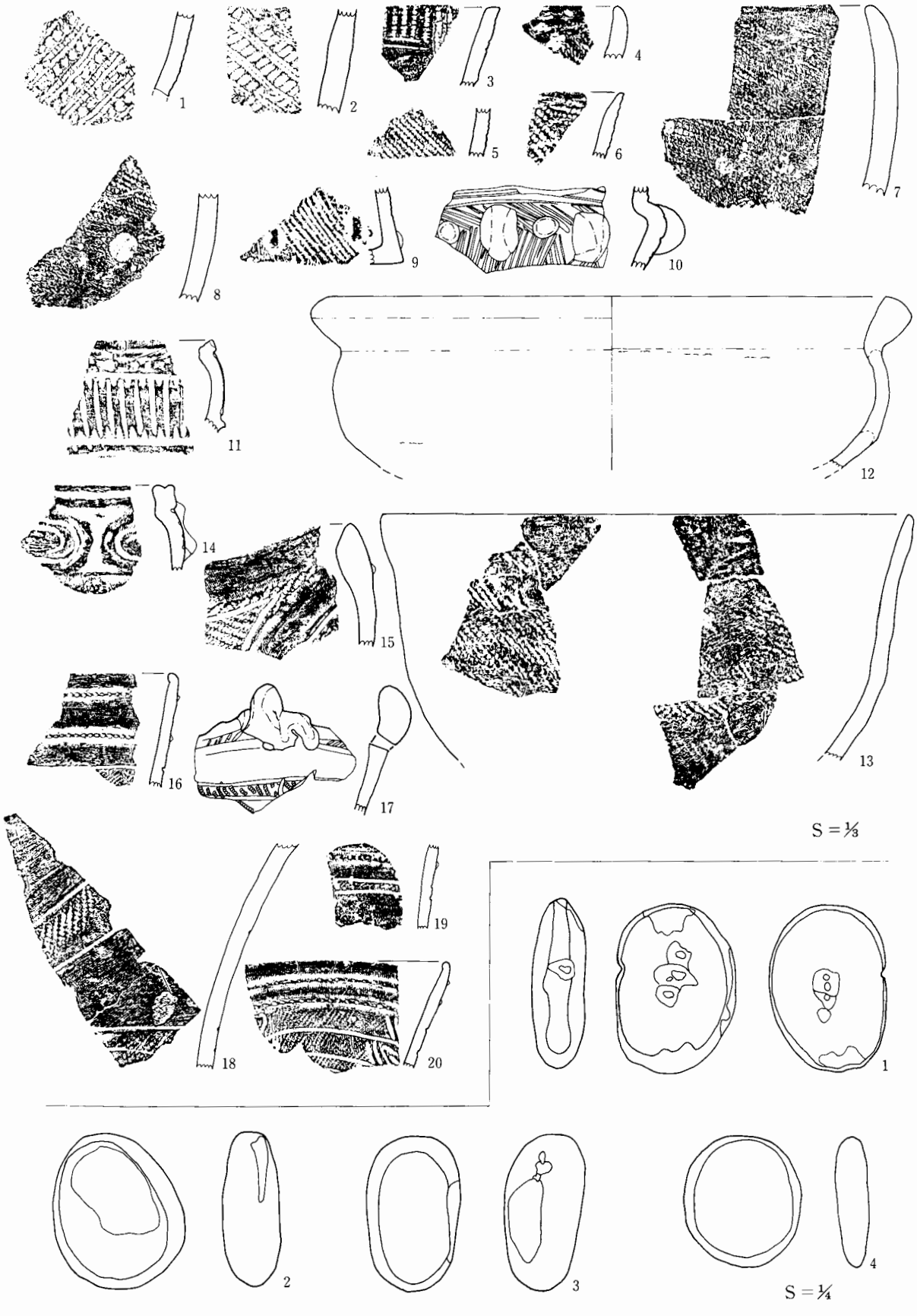
第10図　縄文土坑実測図

(3) 遺構外出土遺物（第11図）

遺構外から出土した縄文時代の遺物は、量的にはさほど多くはなく、図示したとおりである。１～４・７・８は胎土中に繊維を含むもので、１・２は胴部に異条斜縄文（正反の合）を施したもの。３は口縁部に櫛歯状刺突を縦位に施したもの。４・７・８はやや内反する口縁で、口縁部以下にＬＲの縄文を施したもの。５・６は口縁ないしは胴部に、ＬＲの縄文を施したもの。９・10は胴部に矢羽根状等の集合沈線をもち、さらにボタン状の貼付をも持つ。11は口縁部に沈線で区画し、区画内に縦位に沈線を施すもの。14は口縁部に隆帯と沈線で楕円状に文様を施したもの。15は波状となる口縁で、口縁部以下に沈線で区画し、区画内にＬＲの縄文を施している。12は頸部がくびれる無文の浅鉢である。13は口縁が外反する浅鉢となるもので、口縁部が無文で胴部に縄文が施されるもの。16・18・19は口縁に刻みのある細い隆帯を巡らせ、胴部に沈線で幾何学状に文様を区画し、区画内に縄文を施すもの。17・20は口縁に刻みのある隆帯を巡らせ、胴部に沈線を平行に数条巡らせ、縄文を施すと共に沈線間に（　）状の文様を施したものである。

遺構外出土石器計測表　　（単位cm・g）

番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
1	磨石	11.8	8.3	605	粗粒安山岩
2	磨石	10.9	9.1	625	粗粒安山岩
3	磨石	10.9	6.5	585	粗粒安山岩
4	磨石	9.3	8.2	315	粗粒安山岩



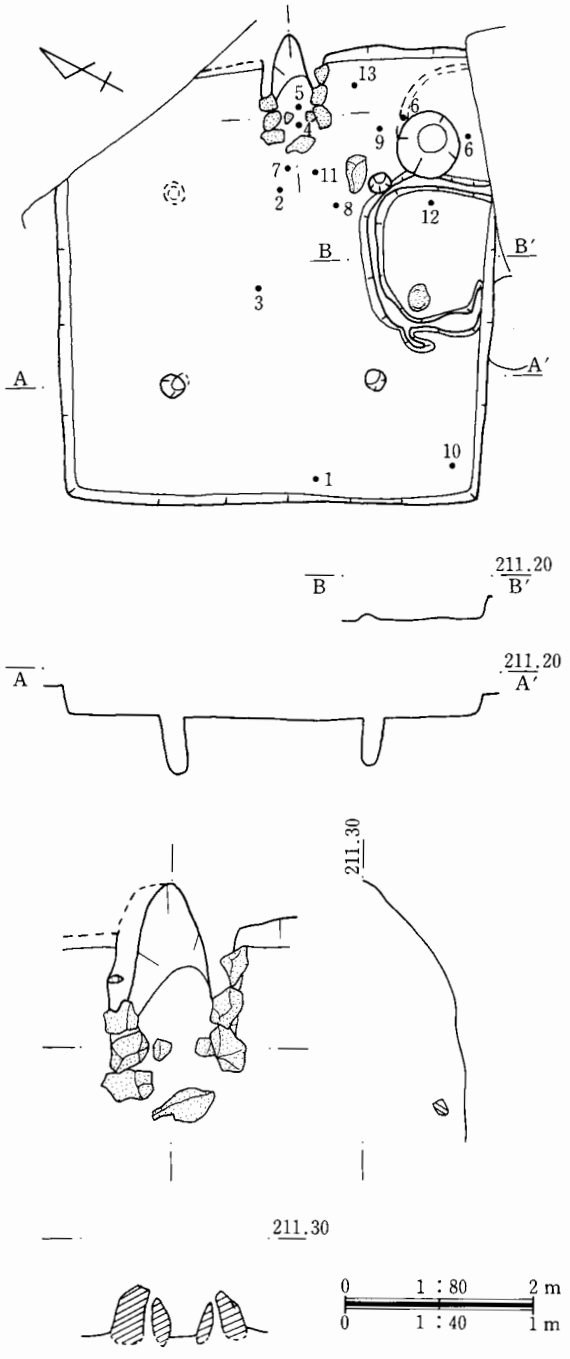
第11図　遺構外出土遺物

2．古墳時代の竪穴住居跡

1号住居跡（観P66、ＰＬ３・16）

13－13グリッドに位置する。南東隅部がわずかに２号住居跡と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。東北隅部は現代の排水溝により上部を被われており、完掘できなかった。

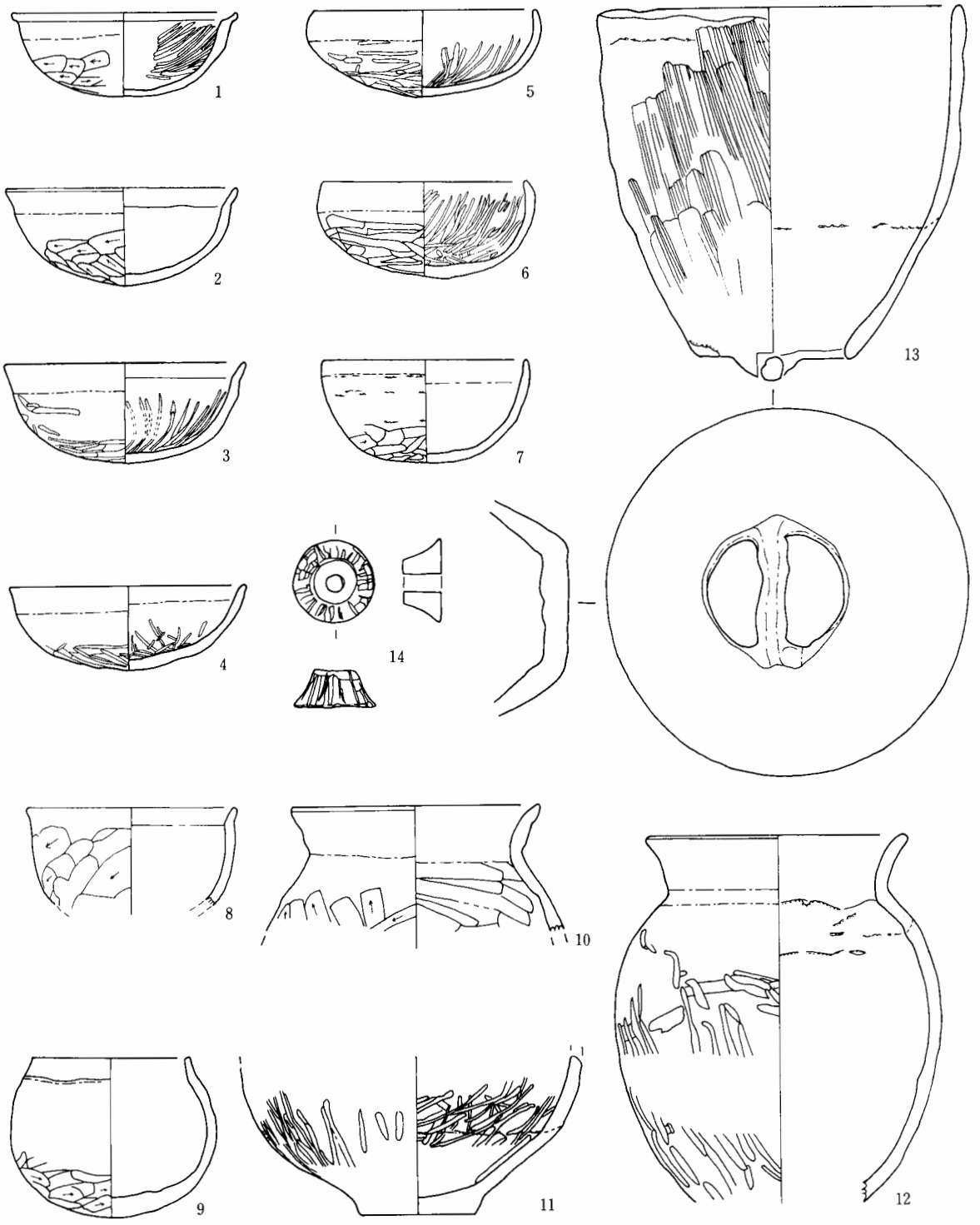
規模は東西4.8m、南北4.6mを測り、若干南辺の長い正方形状を呈する。検出面からの深さは20～30cmを測る。東西軸の方位はＮ－20°－Ｅである。埋土はＣ軽石含みの黒色土を主体とするが、ロームや黒褐色土のブロックが全体的に混入しており、自然堆積でない可能性もある。床面はカマド前面から中央部にかけて堅かったが、他は軟弱である。南東隅に若干東壁から離れて貯蔵穴が付設されている。径約65cm、深さ53cmを測り、ほぼ円形を呈する。貯蔵穴から南東隅部にかけては隅丸方形状に浅く掘られていたと思われるが、埋土と地山堆積土が近似していたため、明瞭には形状等の確認ができなかった。貯蔵穴の西側、南壁のほぼ中央部に接して、ローム粘土帯で床面を区画した施設（土手状区画遺構－仮称）が設けられている。区画遺構の外径は東西1.6m×南北1.4m、内径は東西1.4m×南北1.1mを測る。粘土帯の幅は15～25cm床面からの高さ５cm前後を測る。区画内の床面も良好に踏み固められており、西端部に長径30cmほどの扁平な河原石が出土している。柱穴は対角線上に４本が検出された。径22～26cm、深さ43～52cmを測るが、北東柱穴は実測漏れしてしまった。カマドは東壁のほぼ中央に付設されている。燃焼部はほぼ壁内に収まるが煙道が壁外に伸び、斜めに立ち上がる。袖は左右３石ずつを補強材とし、ローム粘質土を用いて構築されている。支脚は燃焼部の焚口寄りに棒状の礫を２石据えていた。



第12図　１号住居跡及びカマド

遺物はほぼ完形に復元できた甕が右袖脇から出土したほか、カマド燃焼部・カマド前面から坏・甕類が出

土したが、残存状態は余り良好ではなかった。なお、床面および埋土中から炭化材が出土している。

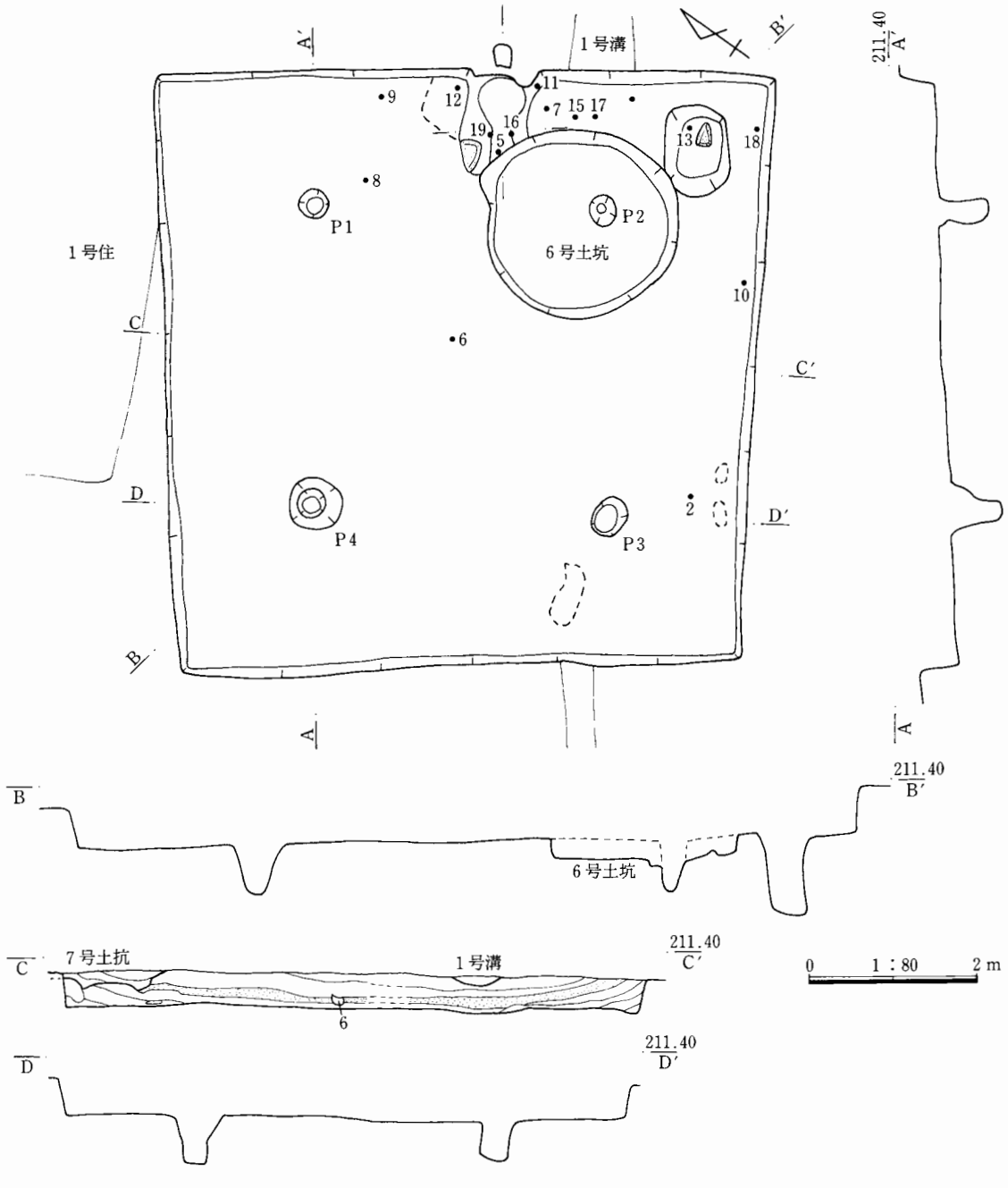


第13図　1号住居跡出土遺物

2号住居跡（観P67、PL 3・17）

12－13グリッドに位置する。北東隅に1号住居跡が重複している。南壁寄りの埋土上位を後世の1号溝が切っている。また、6号土坑が竈前面に、7号土坑が北壁上に重複する。

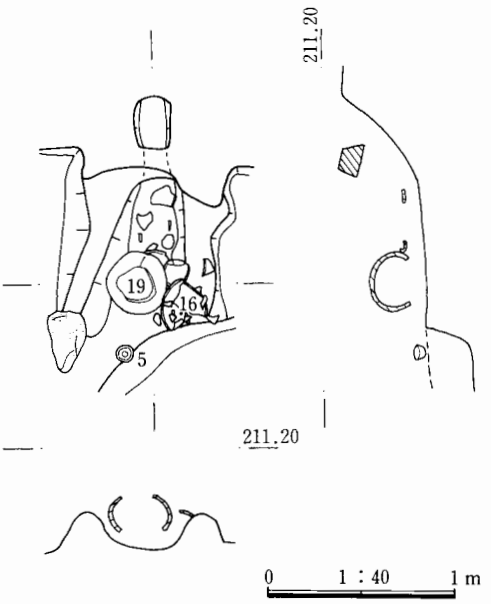
平面形は東壁が若干長いが、ほぼ正方形状を呈する。東西7.0m、南北7.0mを測る。残存壁高は52cmである。壁はほぼ直に立ち上がる。東西軸の方位はN－53°－Eである。埋土は間層を挟みＦＡがレンズ状に堆積していた。ＦＡは住居の中央部で床面上約10cmに堆積し、厚さ約10cmを測る。床面は壁沿いを除き全体的によく踏み固められている。主柱穴はほぼ対角線上に４本が検出されている。Ｐ２は６号土坑に上部を削平され、わずかに底面を確認しただけである。径は30～60cm、深さ47～61cmを測るが、Ｐ４は排水作業のため大きくなっている。貯蔵穴は南東隅に壁から離れた位置に付設されていた。形状は隅丸長方形状を呈し、長軸108cm、短軸73cm、深さ98cmを測る。底面に長径30cmほどの河原石が置かれており、小型甕も出土した。竈は



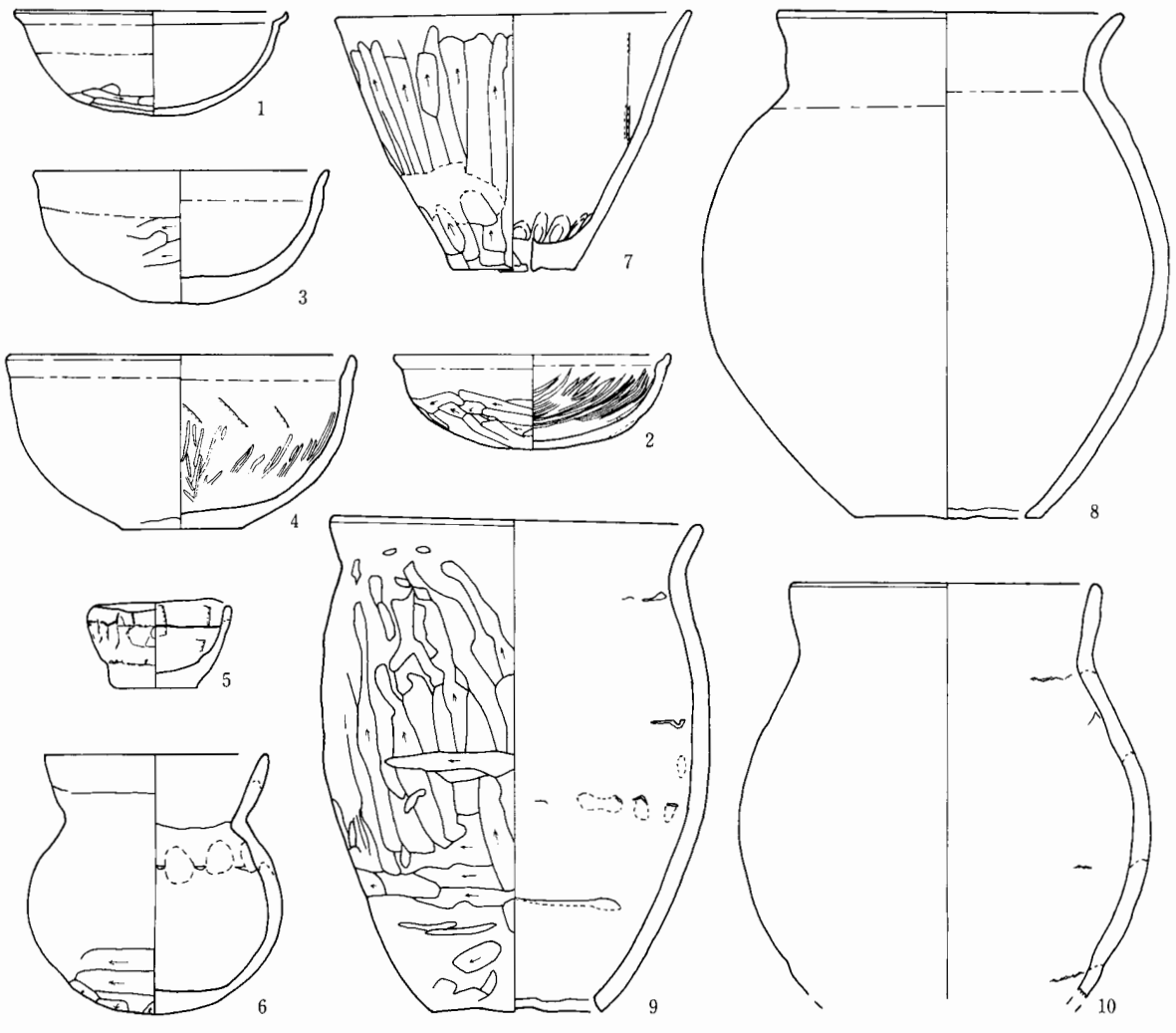
第14図　２号住居跡

東壁のほぼ中央に付設されている。右袖は８号土坑によって先端を削られている。左袖の焚き口は礫によって補強されており、ローム粘土によって構築されている。燃焼部は壁内に位置するが、煙道は壁外に伸びている。また、天井部が若干残存する。左袖から東壁にかけてロームの堆積が認められるが、これが粘土の流れ出したものかどうかの確認はできなかった。

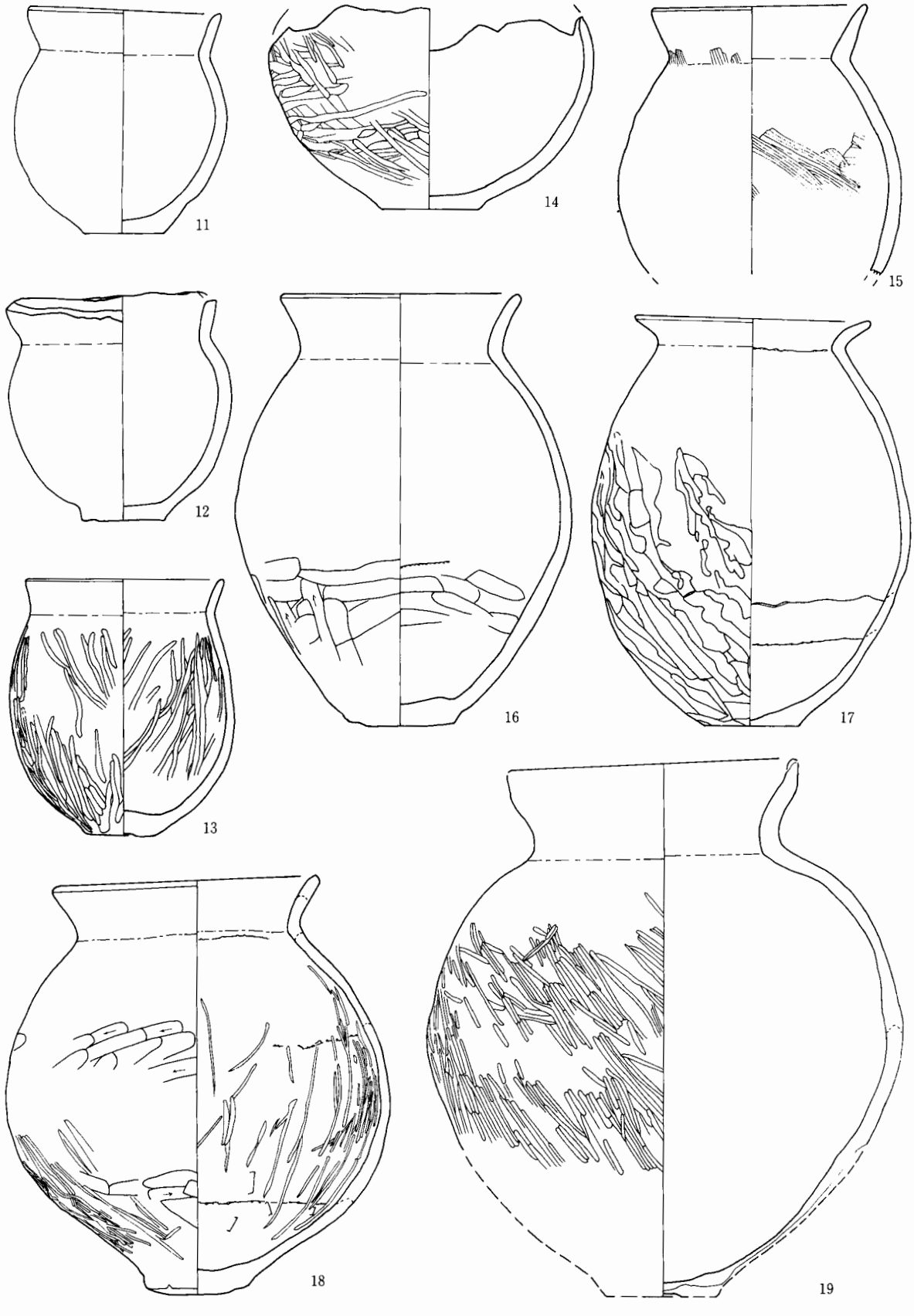
遺物はカマドに架けられた状態で甕２個体、焚口に手捏土器が出土している。また床より若干浮いた状態で南壁・東壁沿いに甕・小型甕・甑などが出土している。なお、住居中央部から正位で出土した坩の中にはＦＡが詰まっていた。また床面上には多量の焼土・炭化材が検出されている。



第15図　２号住居跡カマド

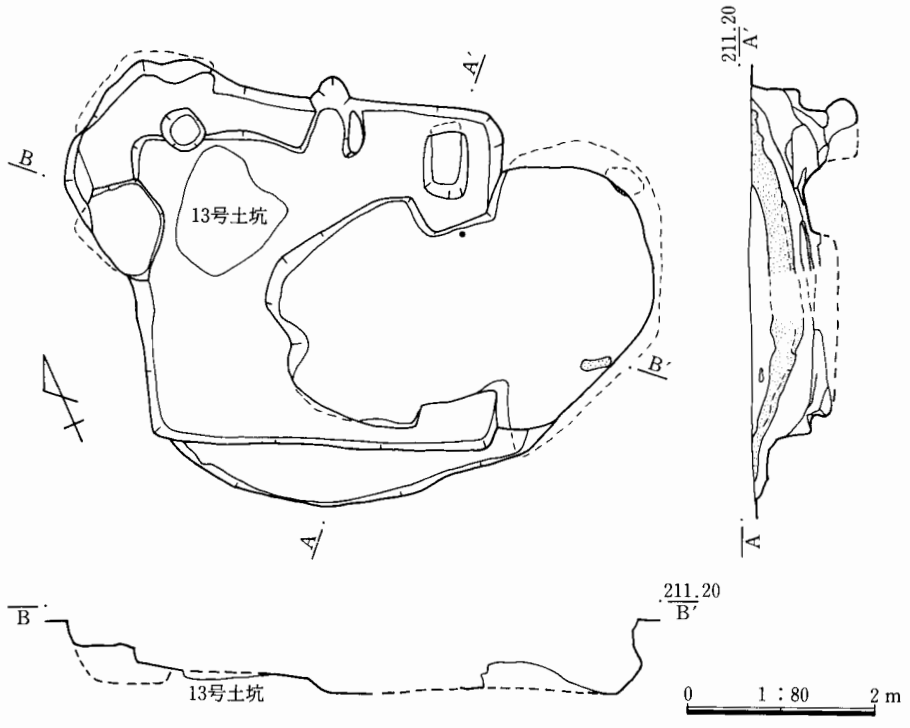


第16図　２号住居跡出土遺物(1)



第17図　2号住居跡出土遺物(2)

0　1：4　10cm



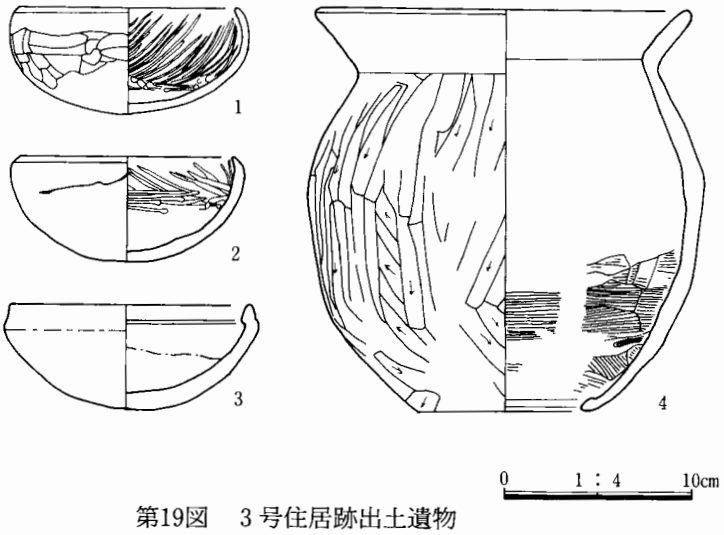
第18図　3号住居跡

3号住居跡（観P68、PL3・18）

12・13－12グリッドに位置する。13号土坑が重複しわずかではあるが床面まで削平している。

規模は3.76m×3.60mを測りほぼ正方形状を呈する。検出面からの深さは40～50cmである。方位はN－60°－Wである。埋土は間層を挟みFAが堆積する。住居の中央部での厚さ約30cmを測る。住居の東半部から東壁を越えて、壁外まで長円形の掘り込みがある。また、北西隅の壁も掘り込まれている。これらは埋土の堆積状態からは住居の廃棄と同時に埋没していると思われる。東側の掘り込みの東半部分にはロームブロックが厚く堆積しており、一旦は横穴状に掘り込まれ、天井部が落下したものと思われる。住居の床面の削平部分が大きいため生活状態の中での施設とするには不自然で、住居廃棄時前後に掘られたものと思われるが、性格については不明である。床面は余り堅くない。北壁の西半部には一段高い部分があり、床状を呈することから床の掘り替え等の可能性もある。貯蔵穴は北東隅に付設されている。長辺65cm×短辺45cm、深さ60cmを測り、長方形を呈するが、北側は横穴状に20cmほど掘り込まれている。柱穴は検出されていない。カマドは北壁のほぼ中央に付設されている。東側のローム袖がわずかに残る程度である。

遺物は甕・坏が出土している。



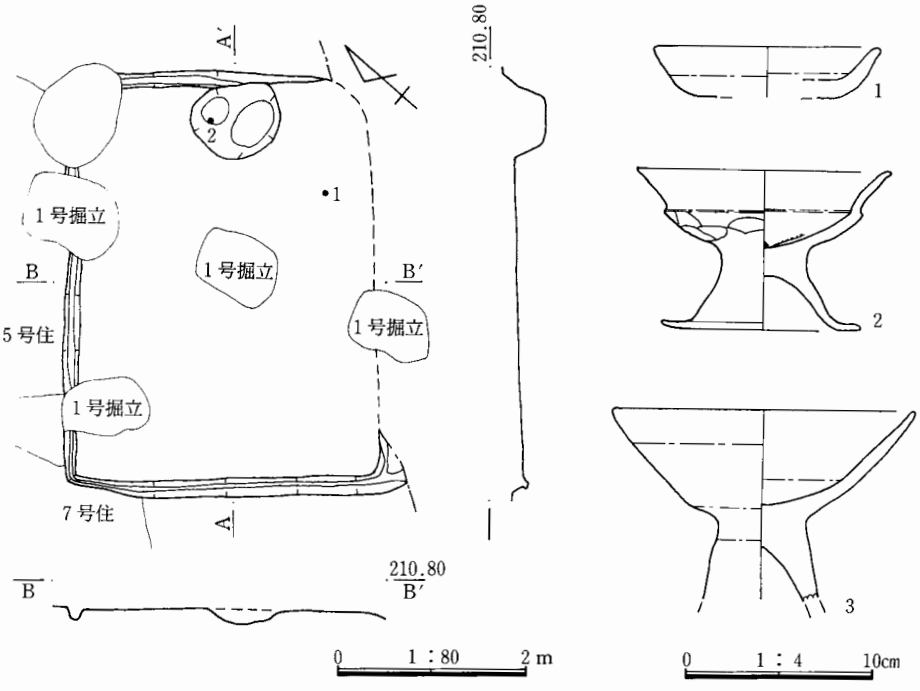
第19図　3号住居跡出土遺物

6号住居跡（観P69、ＰＬ４・18）

11・12－14グリッドに位置する。５・７号住居跡、１号掘立柱建物跡と重複する。５号住居跡・１号掘立柱建物跡よりも古いが、７号住居跡との新旧関係は不明である。検出面から浅く、他の遺構に削平されている為残存状態は不良である。南壁は検出されておらず、他の遺構が重複していた可能性もある。

規模は東西4.74m×南北3.36mを測り、検出面からの深さは５cmほどである。平面形状は長方形を呈すると思われる。方位はＮ－55.5°－Ｅである。埋土はＣ軽石含みの黒色土である。床面は比較的良好に踏み固められている。南壁側を除き幅約10cm、深さ５cmの周溝が巡る。貯蔵穴は東壁のほぼ中央部に接して位置する。径約90cm、深さ約30cmを測り不正円形を呈する。柱穴は検出されていない。炉は床面の中央に付設されていたと思われるが、１号掘立の柱穴によって撹乱されており詳細不明である。

遺物は貯蔵穴から高坏が、埋土中から坏・高坏が出土しただけである。



第20図　６号住居跡及び出土遺物

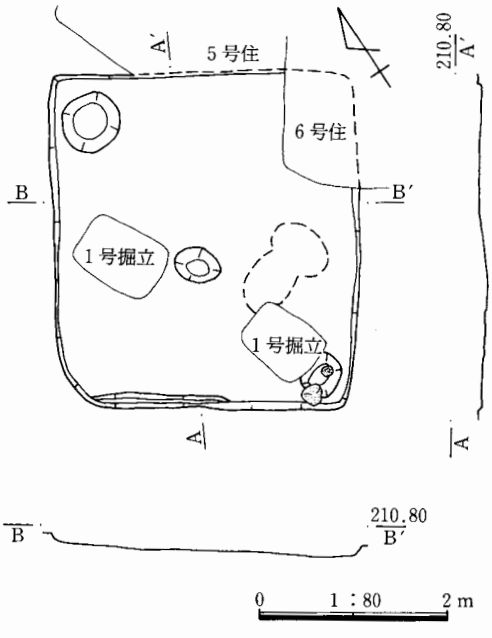
7号住居跡

（ＰＬ４）

11・12－14グリッドに位置する。５・６号住居跡、１号掘立柱建物跡と重複する。５号住居跡、１号掘立柱建物跡より古いが、６号住居跡との新旧関係は不明である。

東西3.46m、南北3.2m、深さ11cmを測り、若干東西に長い正方形状を呈する。方位はＮ－48.5°－Ｅを測る。埋土は６号住居跡同様Ｃ軽石含みの黒色土である。床面は中央部はよく踏み固められていた。住居のほぼ中央部がわずかに掘り凹められ焼土が堆積していた。また南壁沿の床も焼土化しており炉跡と思われる。住居の北東隅及び南西隅にピットが検出されており、貯蔵穴の可能性がある。なお、南西隅のピットから土師器の坏が出土したが盗難にあった。

遺物は数点の土器小片が出土しただけである。

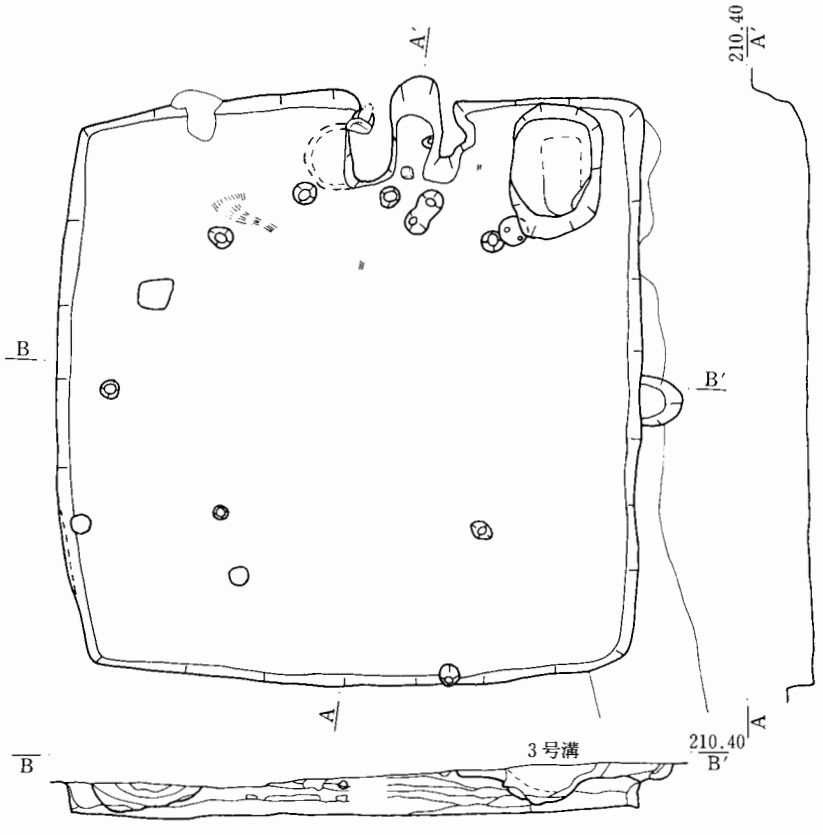


第21図　７号住居跡

9号住居跡

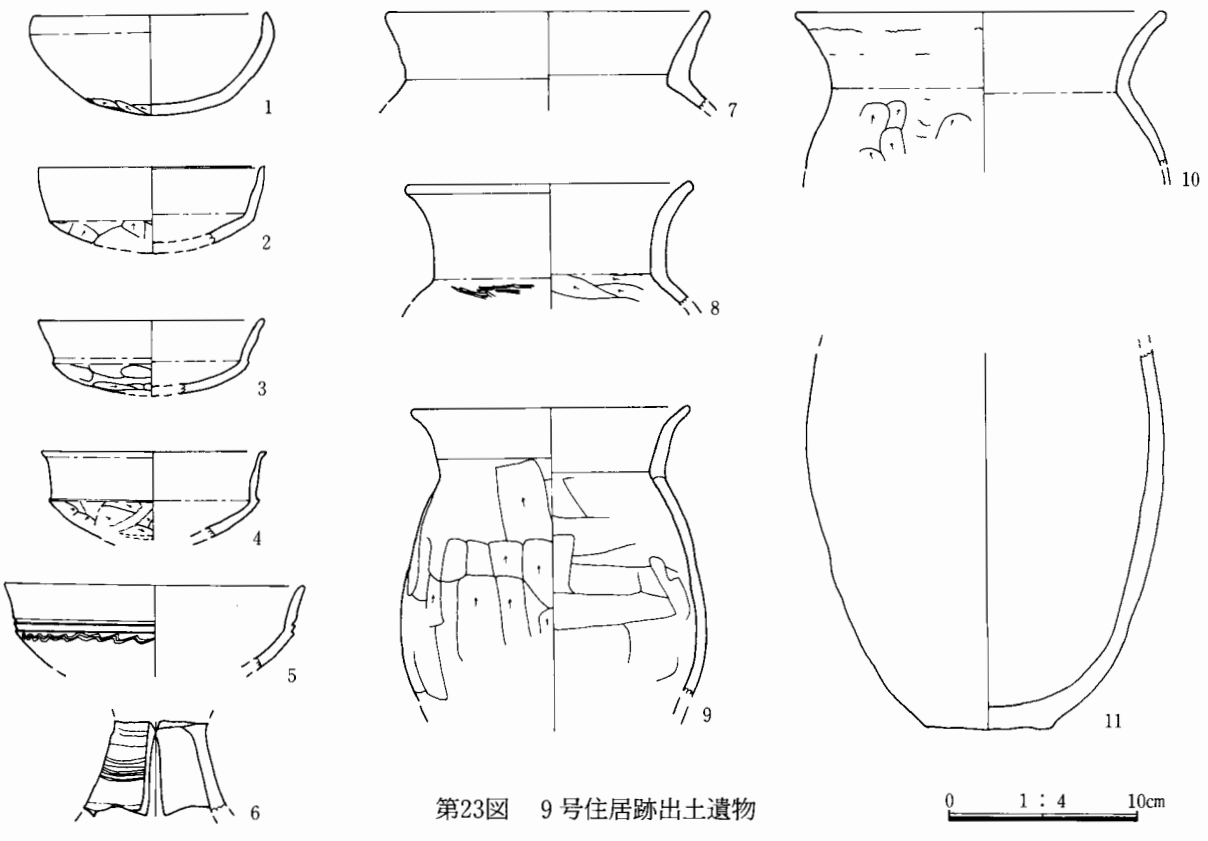
（観P69、ＰＬ４・18）

10－13グリッドに位置する。７号掘立柱建物跡・３号溝と重複し、いずれよりも古い。東西6.24m南北6.12m、深さ約40cmを測り、正方形状を呈するが、南壁を除き外方にわずかな膨らみを持つ。方位はＮ－32°－Ｗである。埋土はＣ軽石を含む黒色土主体で、ＦＡ層の純層堆積はみられないが、壁面直下の床面に砂質の軽石類似の物質が認められ、ＦＡ火山灰（軽石）の可能性がある。床



第22図　９号住居跡

0　1：80　2 m



第23図　９号住居跡出土遺物

0　1：4　10cm

面は湧水の為に調査の際に撹乱した部分もあるが、比較的良く踏み固められていた。貯蔵穴は南東隅に東壁に接し、南壁から離れて付設されている。長径140cm×短軸95cm、深さ80cmを測り、隅丸長方形状を呈する。柱穴はほぼ対角線上に４本検出された。径14～26cm、深さ33cm～64cmと一定していない。カマドは東壁の若干南寄りに付設されている。袖は地山を掘り残した粘土袖で、煙道が比較的急角度で立ち上がり、検出面でわずか壁外に出る。燃焼部の焚き口寄りには、礫を用いた支脚が立てられている。

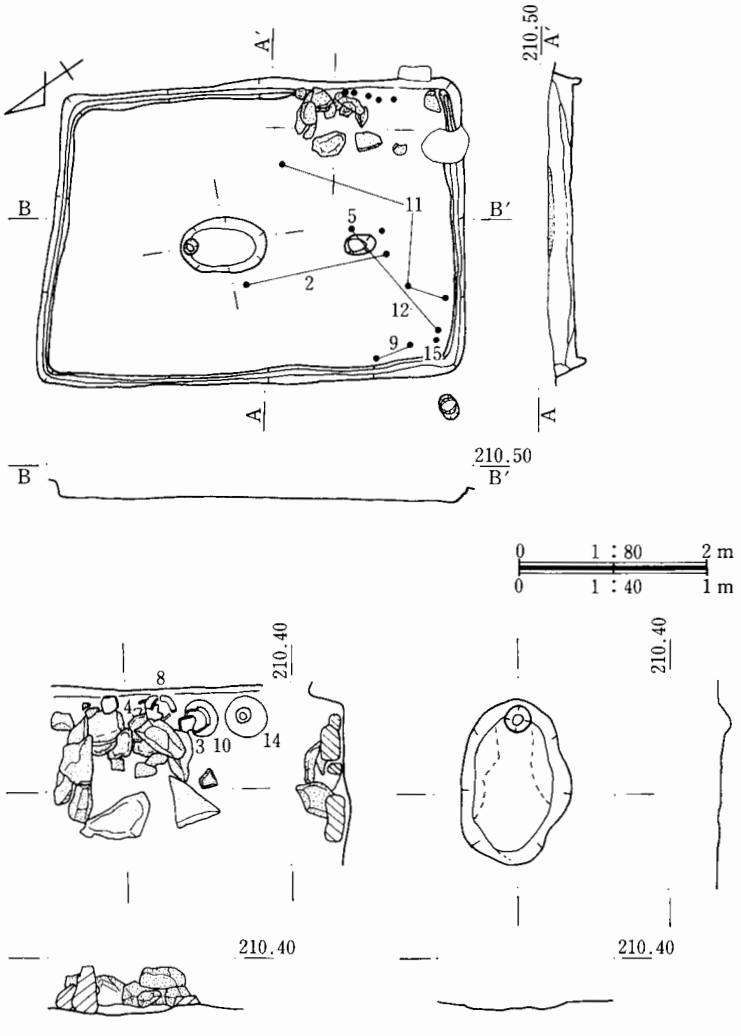
遺物は比較的多く出土したが、ほとんどは小破片で、床面・埋土中とも接合できたものは少ない。なお、貯蔵穴中から須恵器の高坏が、やはり破片であるが出土している。

10号住居跡（観Ｐ70、ＰＬ４・18）

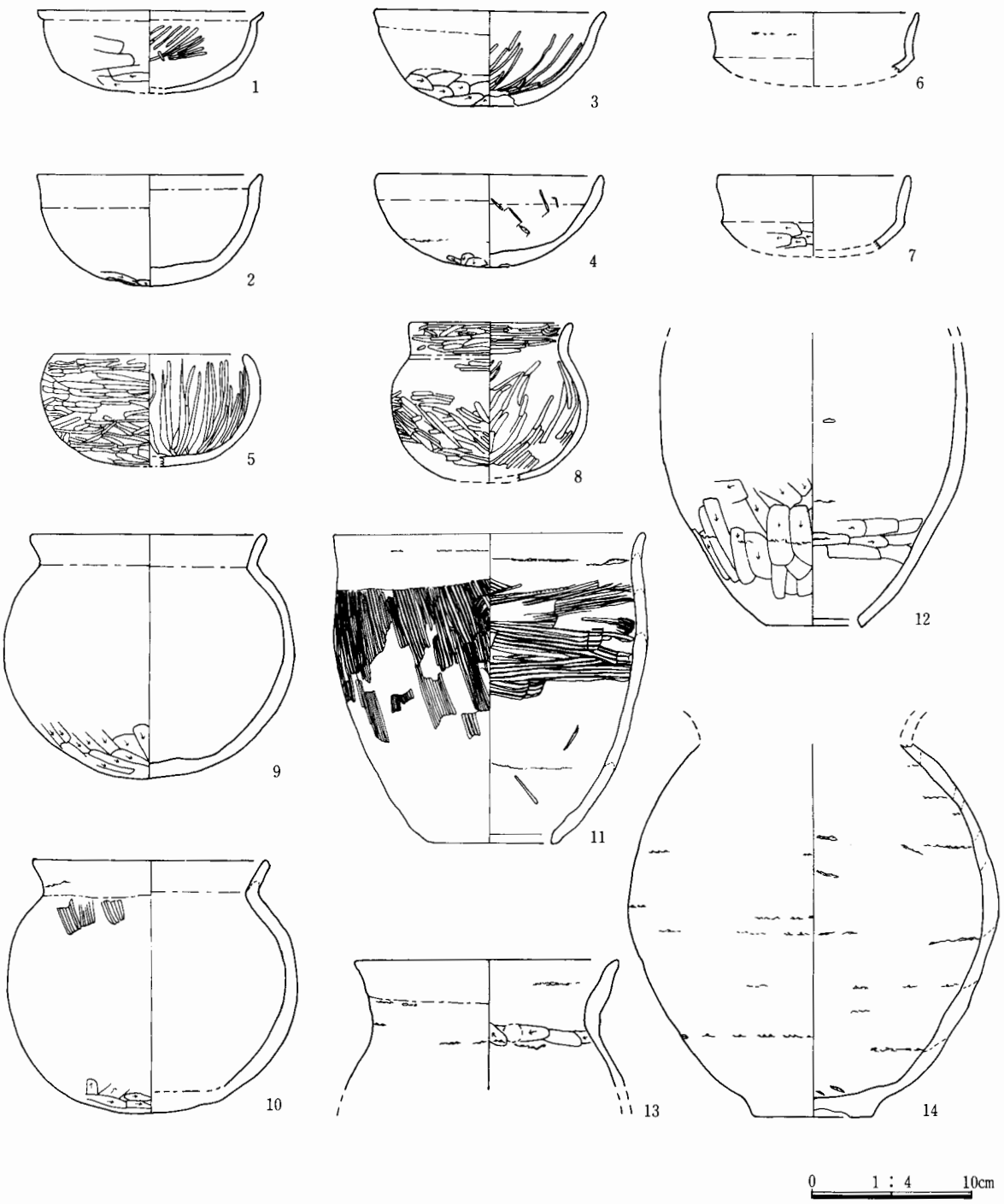
12－12グリッドに位置する。７号掘立柱建物跡と重複し、７号掘立柱建物跡のほうが新しい。

規模は東西3.14m、南北4.36m、深さ約13cmを測る。平面形状は西壁が若干長い長方形状を呈する。方位はＮ－31.5°－Ｗである。埋土はＣ軽石含みの黒色土主体であるが、上層にＦＡ火山灰層がレンズ状に堆積する。床面は全体的に余り堅くない。貯蔵穴・柱穴は検出されなかったが、周溝がほぼ全周する。炉は床面中央部北寄りに付設されている。長径85cm×短径57cmで、深さ約３cmを測る。底面北端には小ピットが検出されている。東壁の南寄りには壁に沿って石組の竈状の燃焼施設が設けられている。石組のまわりには粘土が巻かれていたと思われるが、ほとんどは流失していた。崩落により不鮮明な部分もあるが、この石組は東壁からわずか離れた位置に、現状では焚口を内側に向けて「コ字」型に組まれていた。但し、燃焼部の西側底面にあった平板な礫は、西側に立っていたものが倒れた可能性もあり、その場合には四周を礫で囲んでいたことになる。出土状況からはどちらとも明瞭には断じがたい。少なくとも検出面のレベルにおいては煙道は検出されておらず、石組炉と称したほうが適切かもしれない。焚口幅・奥行きともに約40cmを測る。なお、この石組内からは多量の焼土が検出されている。

遺物はカマド状施設の周辺及び南壁直下の床面から出土している。器種は土師器の甕・坏・小型壺・甑等である。



第24図　10号住居跡及びカマド・炉



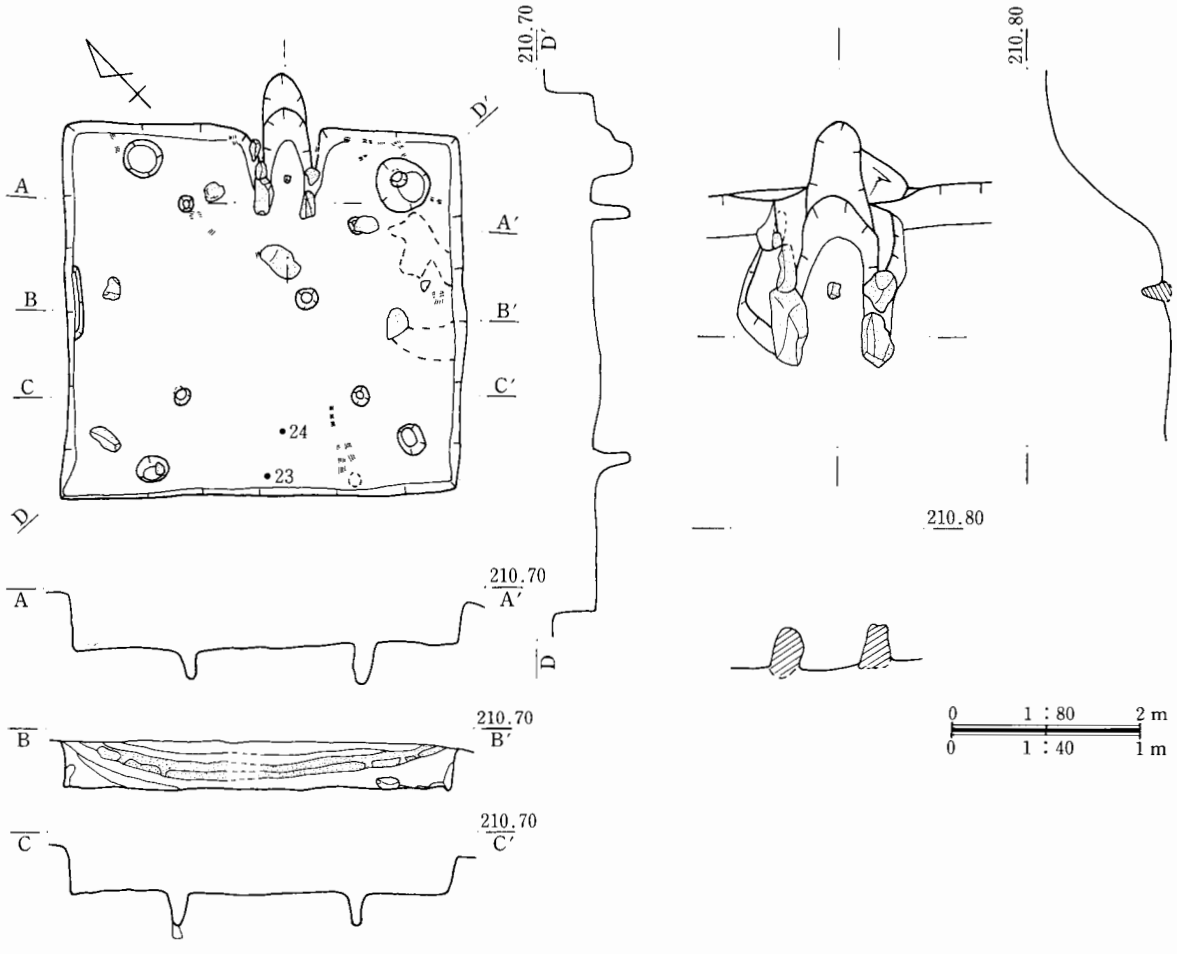
第25図　10号住居跡出土遺物

11号住居跡（観P71、ＰＬ５・19）

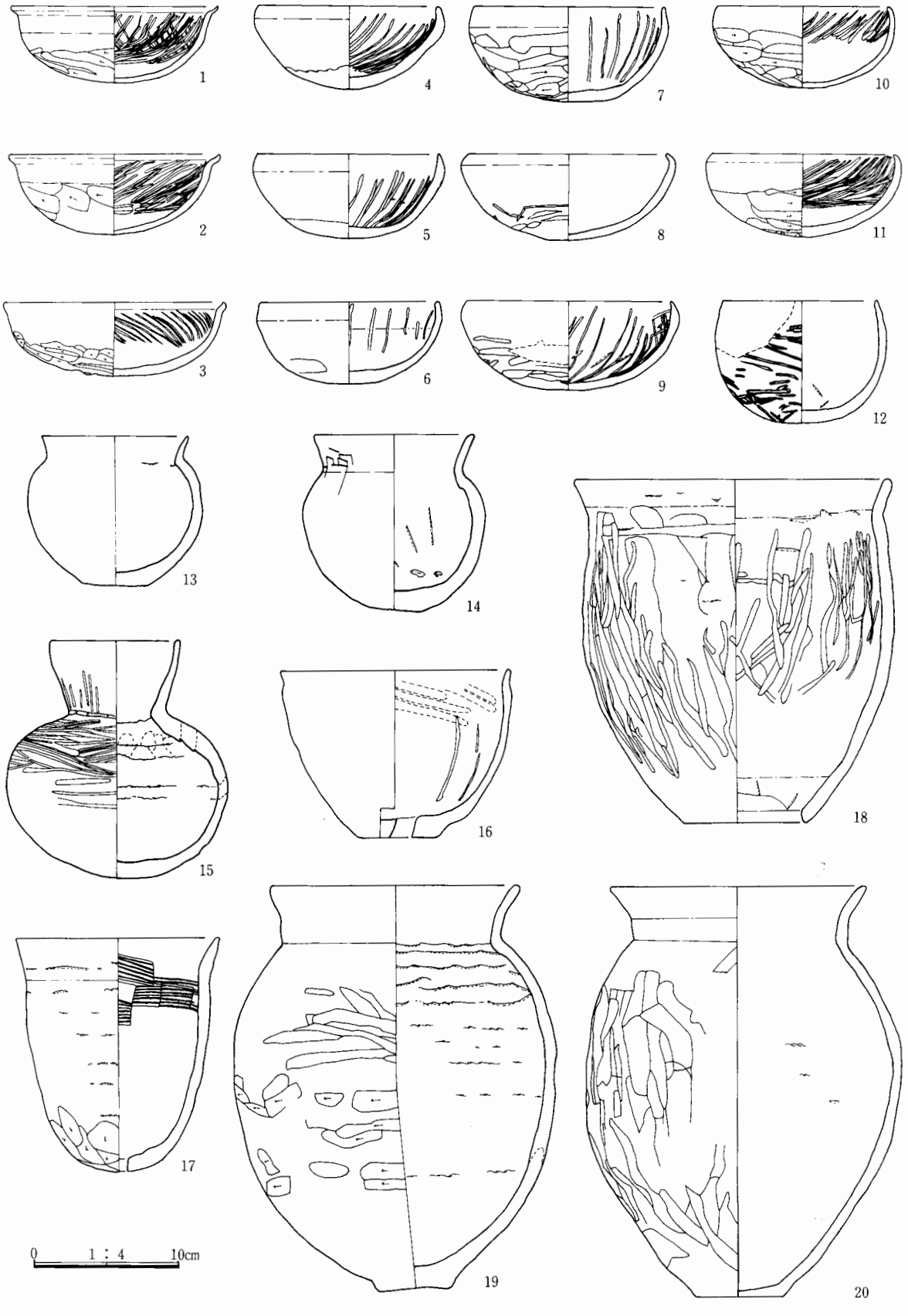
12－12グリッドに位置する。重複する遺構は無いが、南西に12号住居跡が近接する。主軸方位からカマドの付設されている壁を北として記述する。

東西4.2m×南北3.9mを測り、東西にわずか長いものの、ほぼ正方形状を呈する。検出面からの深さは50～60cmを測る。埋土はＣ軽石含みの黒色土を主体とする間層を挟み、ＦＡ火山灰層がレンズ状に堆積する。床面直上から壁際の埋土中位にかけて焼土・炭火物が堆積しており、焼失家屋の可能性もある。主軸方位はＮ－47.5°－Ｗを測る。床面は壁沿いを除いて良好に踏み固められている。貯蔵穴は北東隅に壁からわずか離れた位置に付設されている。長径62cm×短径52cm、深さ40cmを測り、ほぼ円形を呈する。柱穴はほぼ対角線上に４本検出された。径14～20cm、深さ30cm～44cmを測る。南壁沿いの２ケ所に検出されたピットの性格は不明である。壁に沿って一部に周溝状の部分があるが、明瞭には認められなかった。カマドは北壁のほぼ中央に付設されている。袖部には礫が補強材として用いられており、鳥居状の石組カマドと思われるが、天井石は崩落していた。燃焼部の中央には支脚が据えられていた。

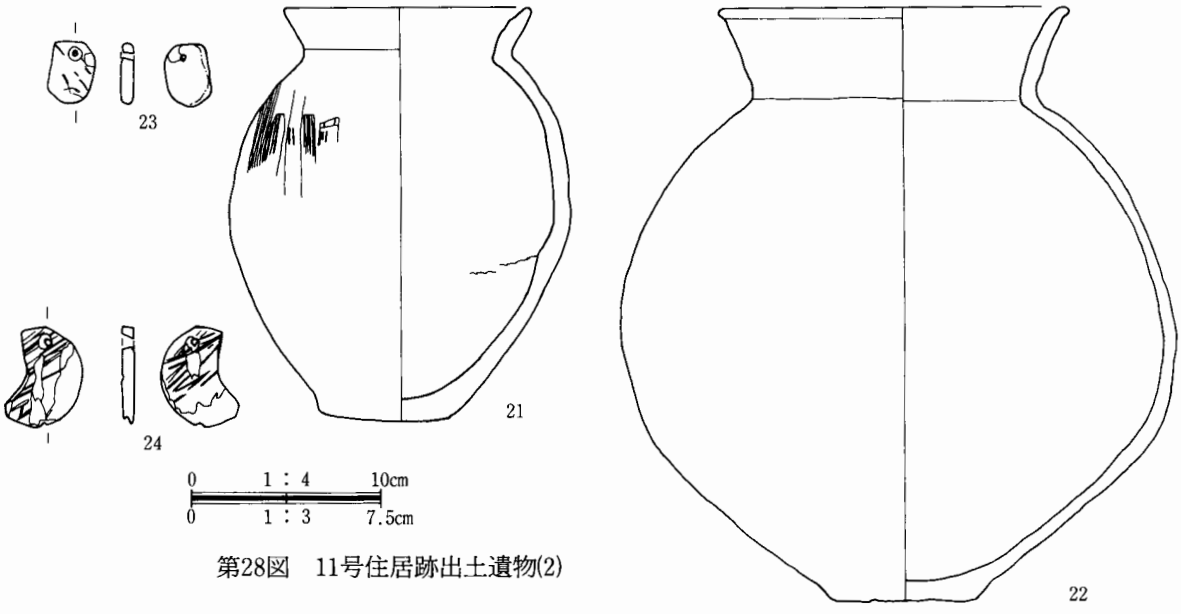
遺物は北壁直下の床面から多量に出土している。カマドの西側の床面に土師器の甕１個体、浅い円形のピットの中から坏７個体、壁から落ちかかったような状態で甑１個体、カマドの右袖脇に坏３個体、小型甕２個体、甑１個体、貯蔵穴の上部に坏１個体が出土した。また、カマドの前面には破砕された状態で甕３個体が出土した。南壁のほぼ中央部直下からは石製模造品が２個出土している。



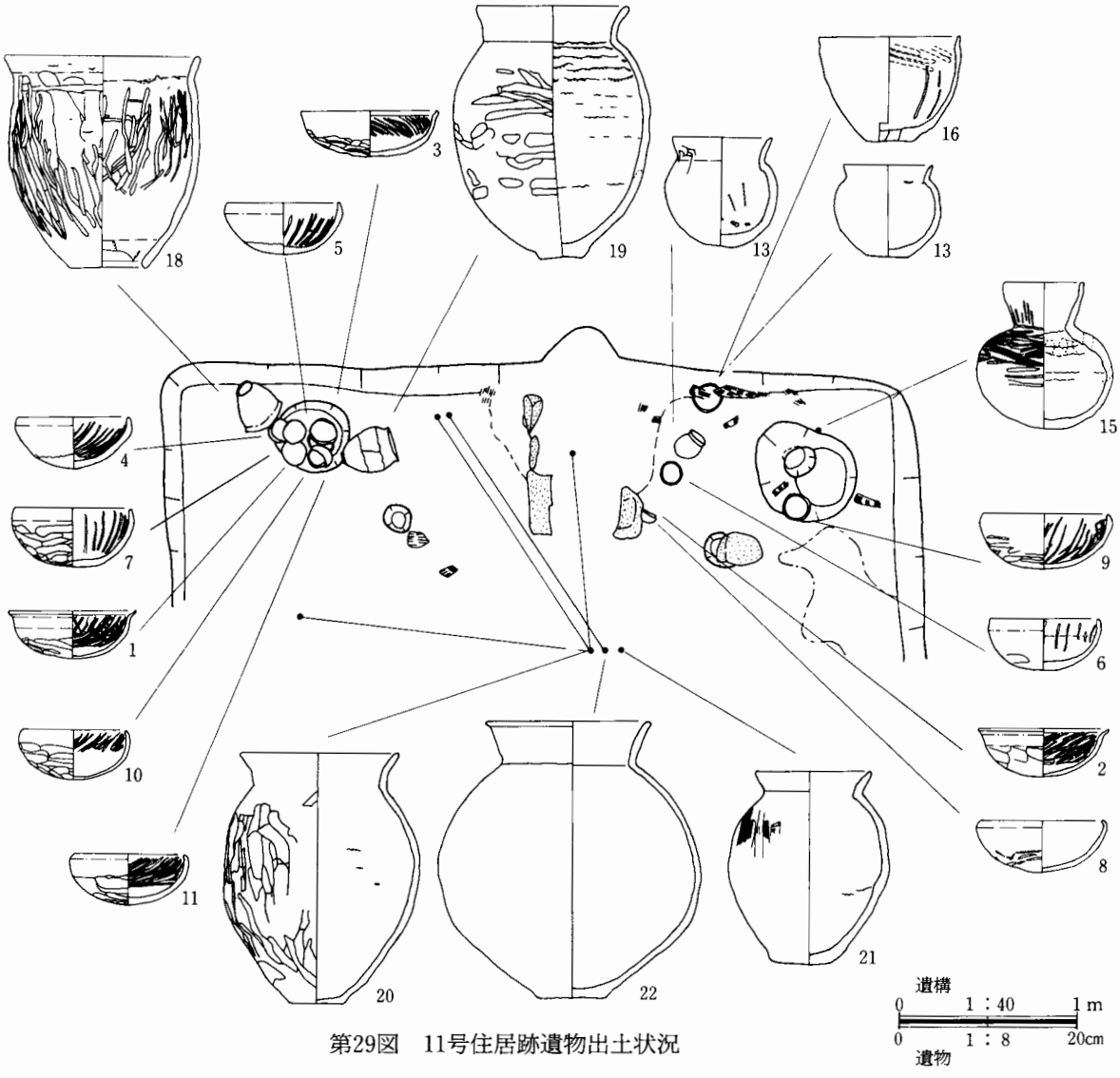
第26図　11号住居跡及びカマド



第27図　11号住居跡出土遺物(1)



第28図　11号住居跡出土遺物(2)



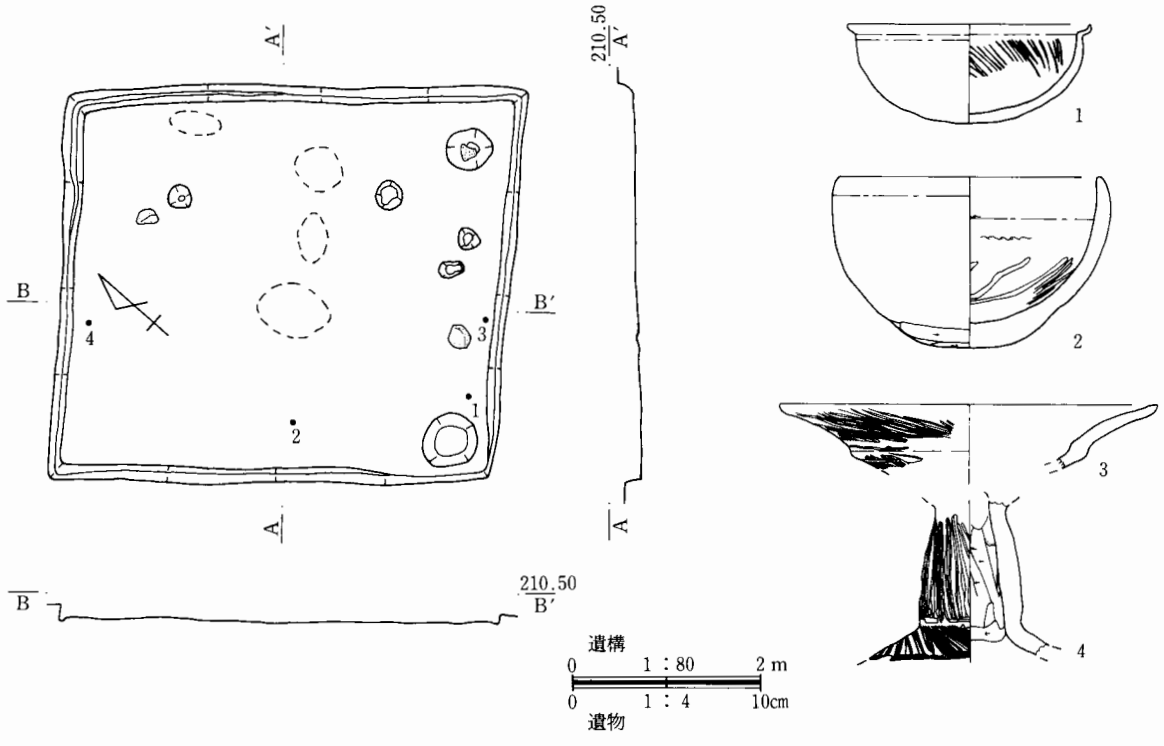
第29図　11号住居跡遺物出土状況

12号住居跡（観Ｐ72、ＰＬ５・20）

12－11グリッドに位置する。重複する遺構は無いが（縄文倒木痕？と重複）北東に11号住居跡が近接する。

東西4.14m、南北4.56m、深さ11～18cmを測り、南北に長くわずかに歪んだ長方形を呈する。埋土はＣ軽石含みの黒色土の上にＦＡ層がわずかであるがレンズ状に堆積する。ただ、一部で床面下まで入り込んでいる部分もあり、埋没の初期に何らかの撹乱を受けた可能性がある。主軸方位はＮ－39°－Ｗを測る。床面は部分的に堅いが全体的には余り踏み固められていない。主柱穴は検出されていないが、南壁に寄った両隅に浅い円形のピットが検出されている。炉は床のほぼ中央に３ケ所焼土化した部分があり、地床炉と思われる。

遺物は土師器の坏・高坏・埦が床面から出土した。

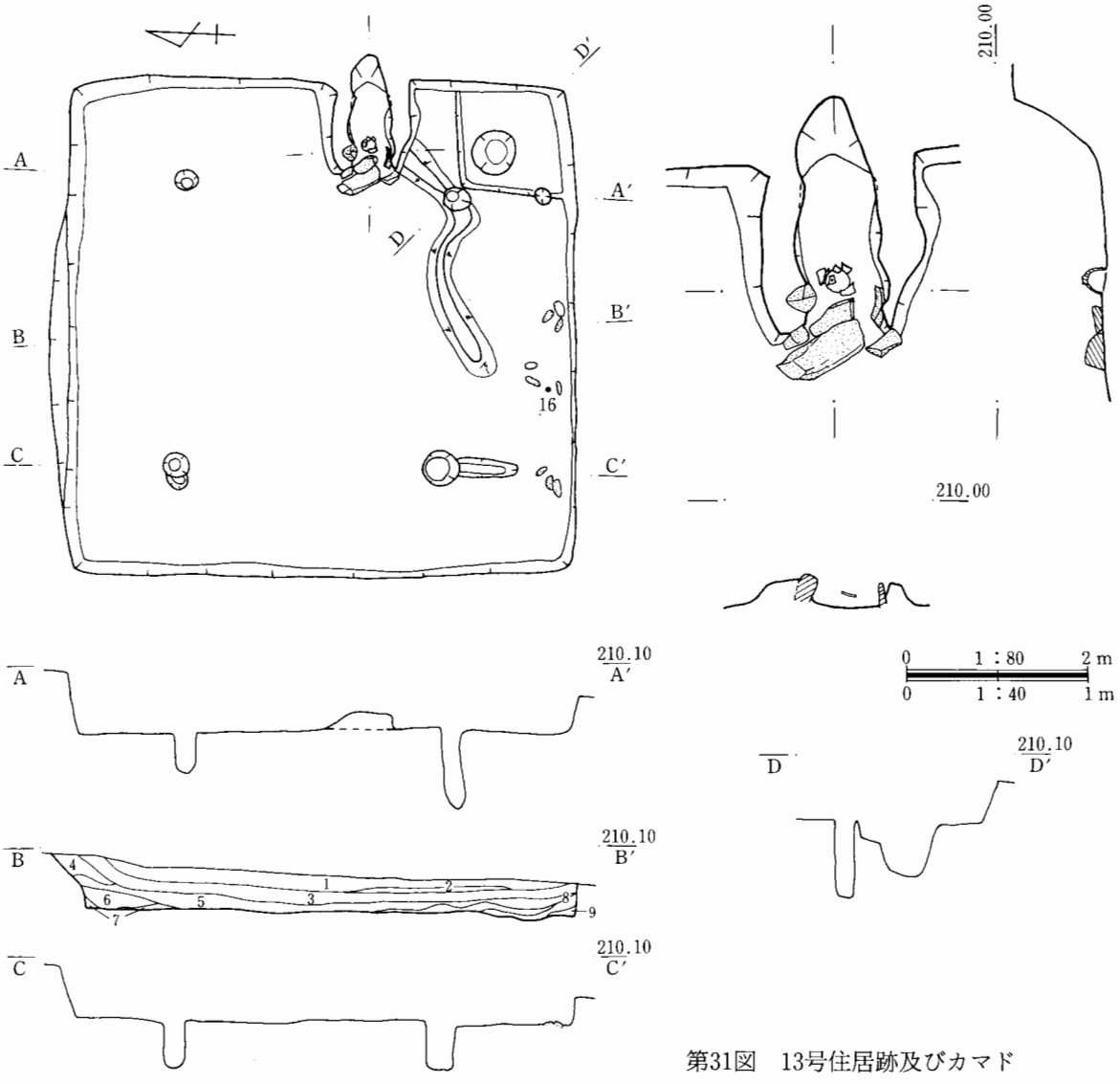


第30図　12号住居跡及び出土遺物

13号住居跡（観Ｐ73、ＰＬ６・21）

10－11・12グリッドに位置する。35号住居跡と重複し、35号住居跡のほうが新しいと思われる。

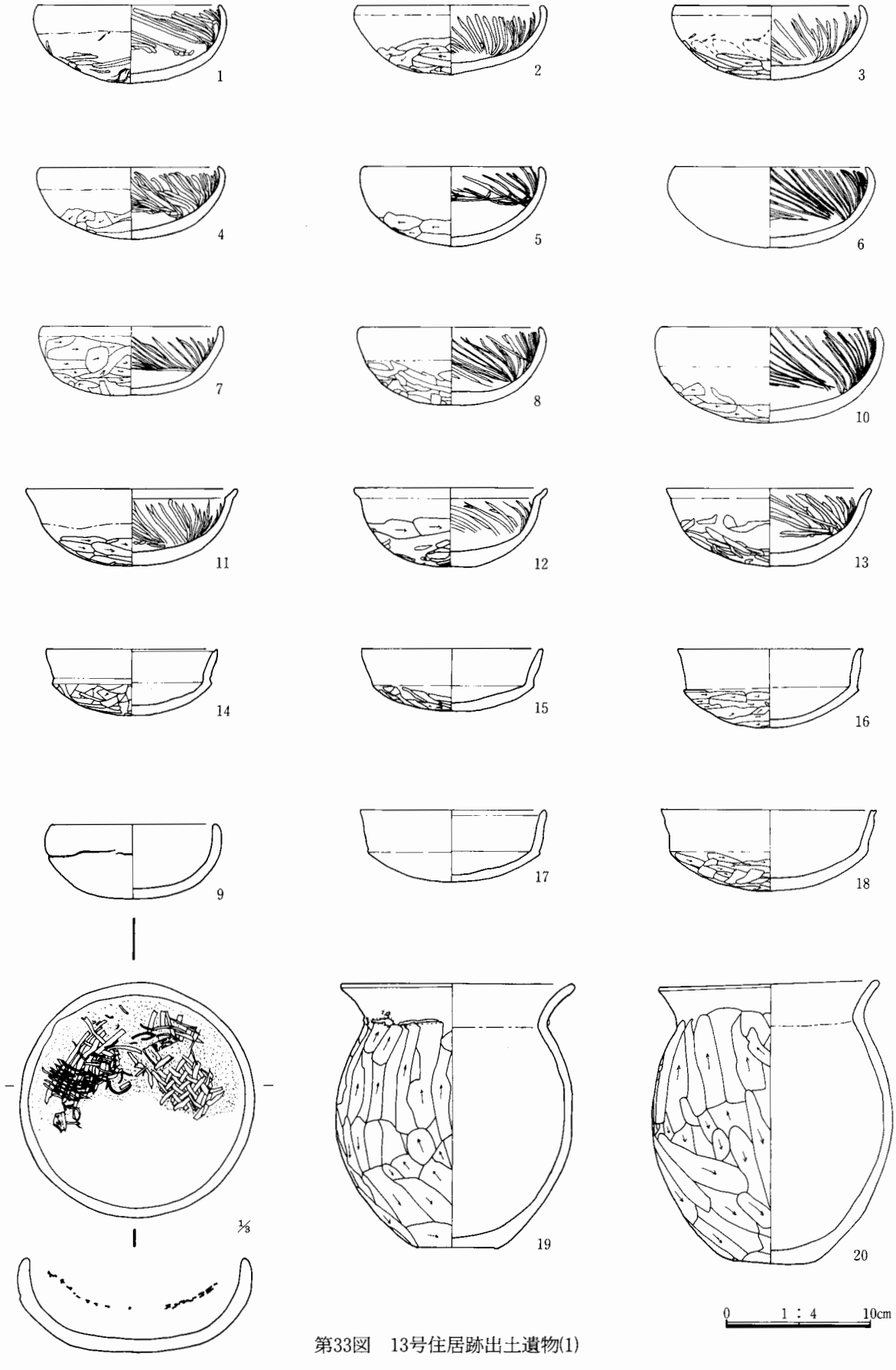
東西5.5m×南北5.8m、深さ約43～73cmを測り、正方形状を呈するが、北壁の上半部は崩落しているものと思われる。主軸方位はＮ－3.5°－Ｗである。埋土の下層は焼土・炭化物を含む黒褐色土層とローム・ロームブロックを含む褐色土層が堆積しており、中位に來雑物を余り含まない暗褐色土層、上層にＣ軽石・ＦＰ軽石粒を少量含む黒色土層が堆積している。ほぼ床一面に広がる炭化材・焼土から焼失家屋と思われる。床面は湧水の為に調査の際に撹乱した部分もあるが、比較的良く踏み固められていた。貯蔵穴は南東隅が一辺約40cm、深さ10cmの規模で方形に掘り込まれており、この区画内の北西に寄って、径・深さとも約50cmの規模で円形の貯蔵穴が付設されていた。主柱穴は対角線上に４本が検出された。径22～30cm、深さ48cm～58cmを測るが、南西柱穴は排水作業の為に他の柱穴よりも径が大きくなっている。但し、掘り方の調査は行っていないので、柱穴の掘り方の規模かどうかは不明である。その他の施設としては、カマド袖から南東主柱穴、



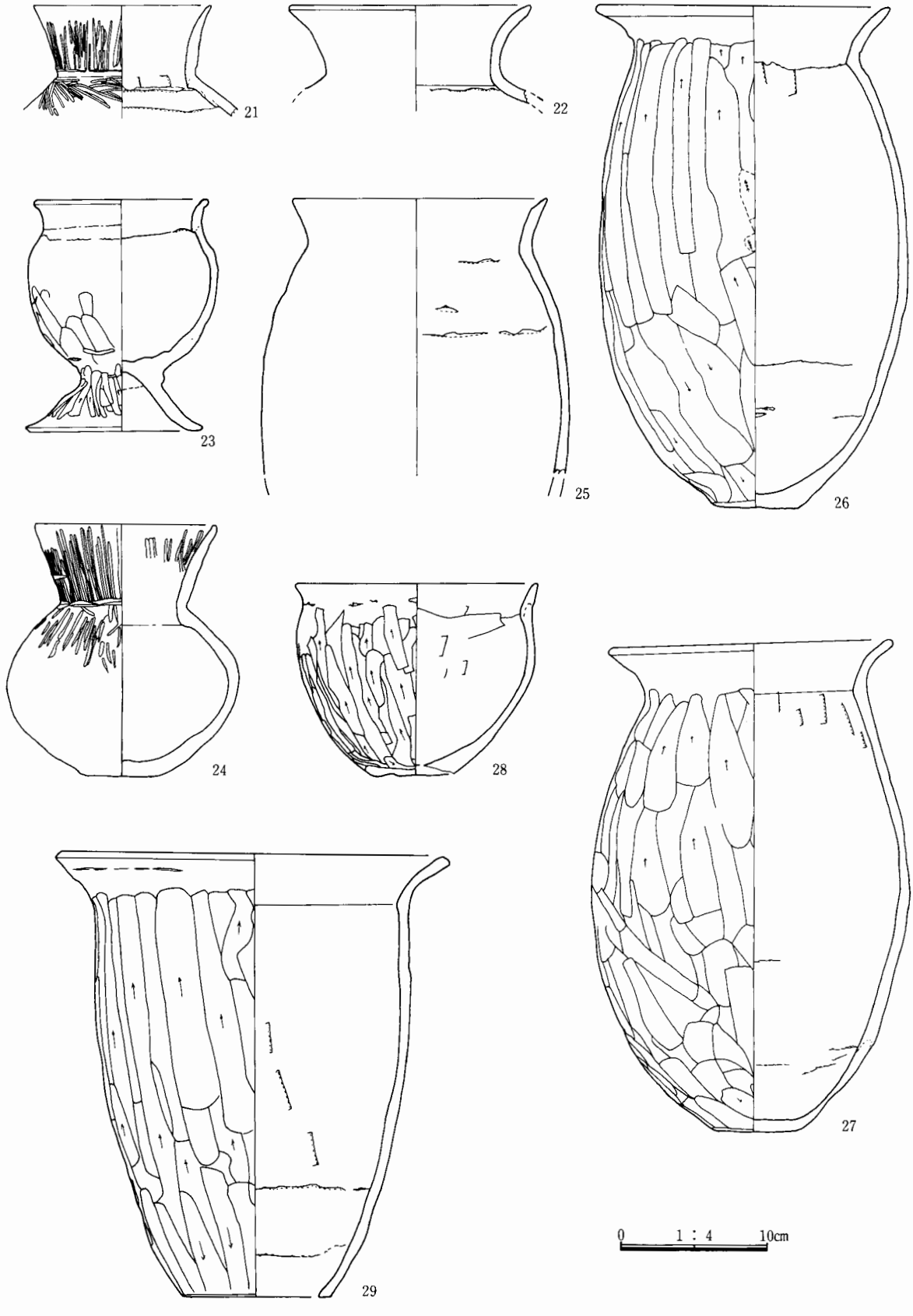
第31図　13号住居跡及びカマド

さらに西に向かって曲線を描く、ローム粘土の低い帯状の盛り上がりがみられた。1号住居跡で検出されたものとは形状等が多少異なるが、土手状区画遺構と思われる。湧水中での調査のため判然としないが、西端は閉じていた可能性もある。南西主柱穴から南に向かって西壁と平行に浅い溝が掘られておりこれも区画施設と思われる。竈は東壁のわずか南寄りに付設されている。焚口に補強材として礫を用いた鳥居状の石組竈であるが、天井石は崩落していた。燃

第32図　13号住居跡炭化材・焼土出土状況



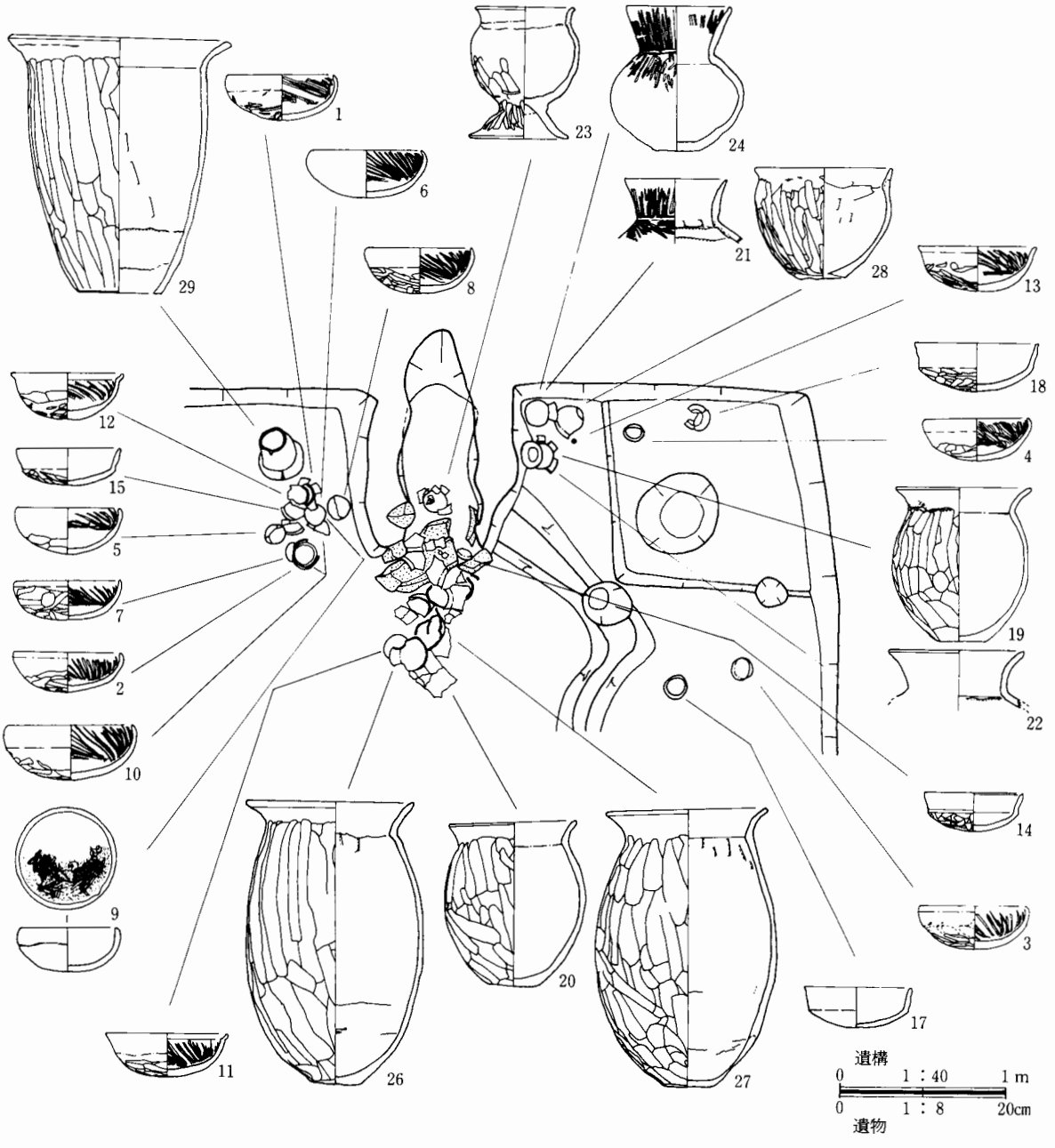
第33図　13号住居跡出土遺物(1)



第34図　13号住居跡出土遺物(2)

焼部の中央には土師器の脚付き小型甕が逆位で出土しており、支脚と思われる。燃焼部は壁内にあり、煙道部の先端が検出面でわずか壁外に出る。

遺物はカマド周辺から多量に出土している。左袖脇に土師器の甑が逆位で立てられていた。その西側に坏が12個置かれ、数点は重なり合っていた。何点かは伏せられており、この内の１つの内部には炭化した網代が残存していた。さらに右袖脇の壁際に寄って甕の口縁部に乗った小型甕、壺の口縁部に乗った坩、小型甑、カマド燃焼部から前面にかけて崩れ落ちるように長胴甕２個、小型甕１個、坏１個が出土した。また、貯蔵穴周辺から坏４個、南壁中央部直下から坏１個が出土している。これらの遺物は全て床面から出土したもので、埋土中からは破片さえもほとんど出土していない。

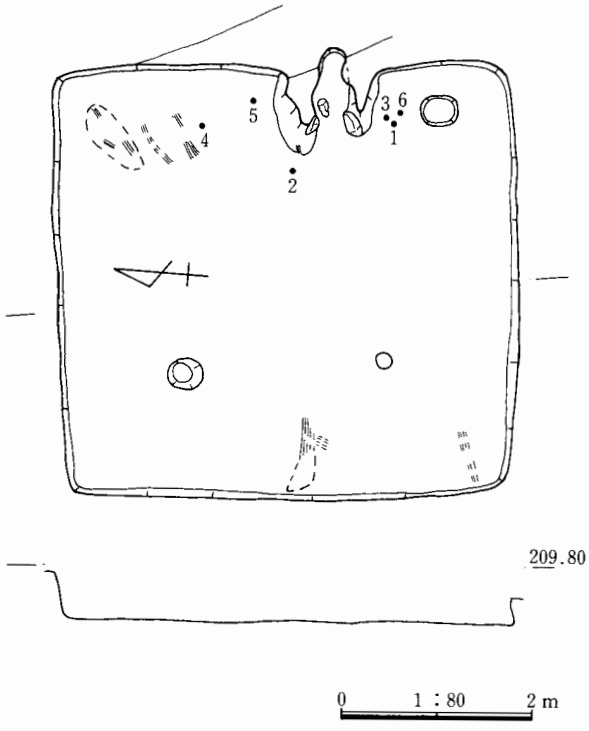


第35図　13号住居跡遺物出土状況

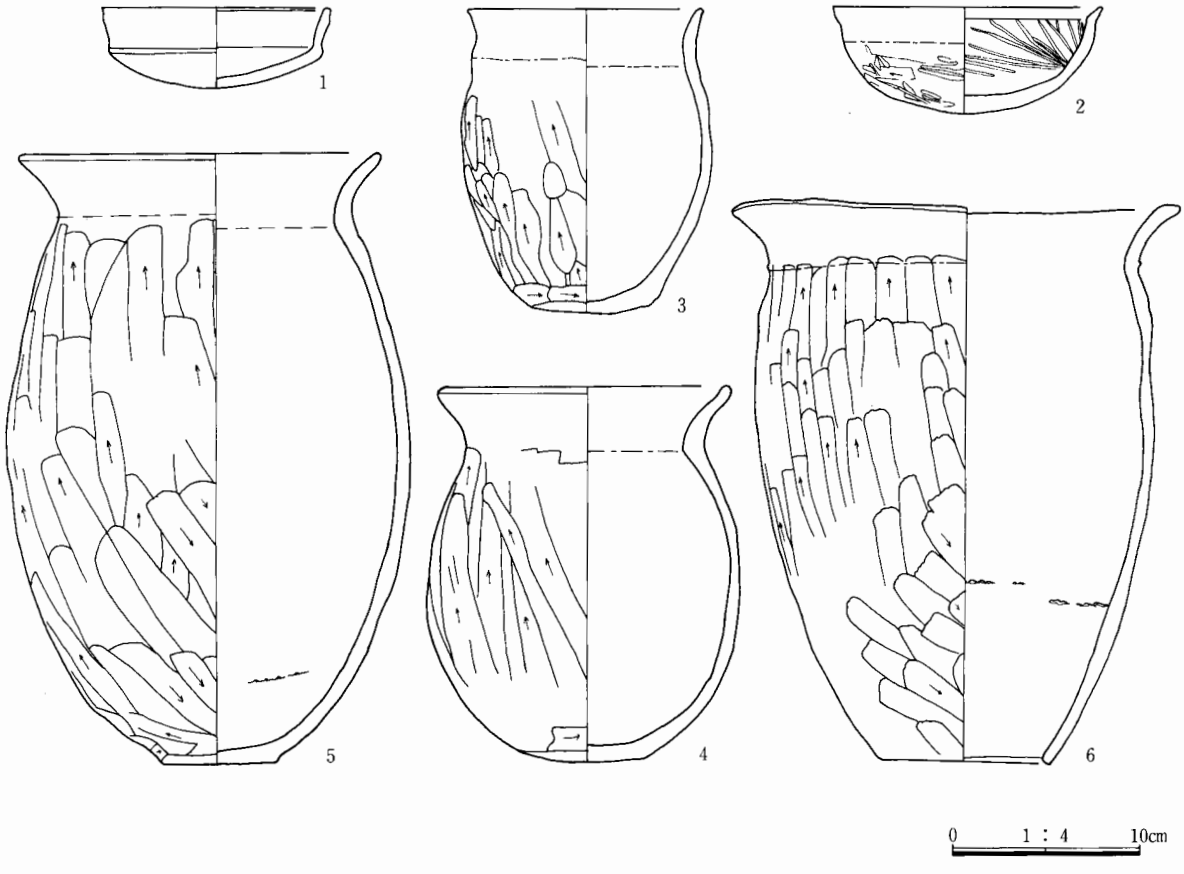
14号住居跡（観P75、ＰＬ６・22）

11－10杭を中心に位置する。重複する遺構は無いが、東６ｍに13号住居跡が近接する。

東西4.5m×南北4.8m、深さ30～42cmを測る主軸方位はＮ－3.5°－Ｗである。埋土は13号住居跡と同様に、下層に炭化物・焼土を含む褐色土、ローム・ロームブロックを含む層、上層に軽石をほとんど含まない暗褐色土層が堆積している。焼失家屋の可能性がある。床面は精査時点では明瞭堅緻に検出できたが湧水中での調査による撹乱により実測時にはほとんど面を捉えられなかった。周溝についても判然としない。貯蔵穴は南東隅に壁から離れて付設されている。長径38cm×短径30cmを測り楕円形を呈する。深さは記録しなかった。主柱穴は西壁沿いの２本が検出されたが、東壁沿いは撹乱が激しく検出できなかった。北



第36図　14号住居跡



第37図　14号住居跡出土遺物

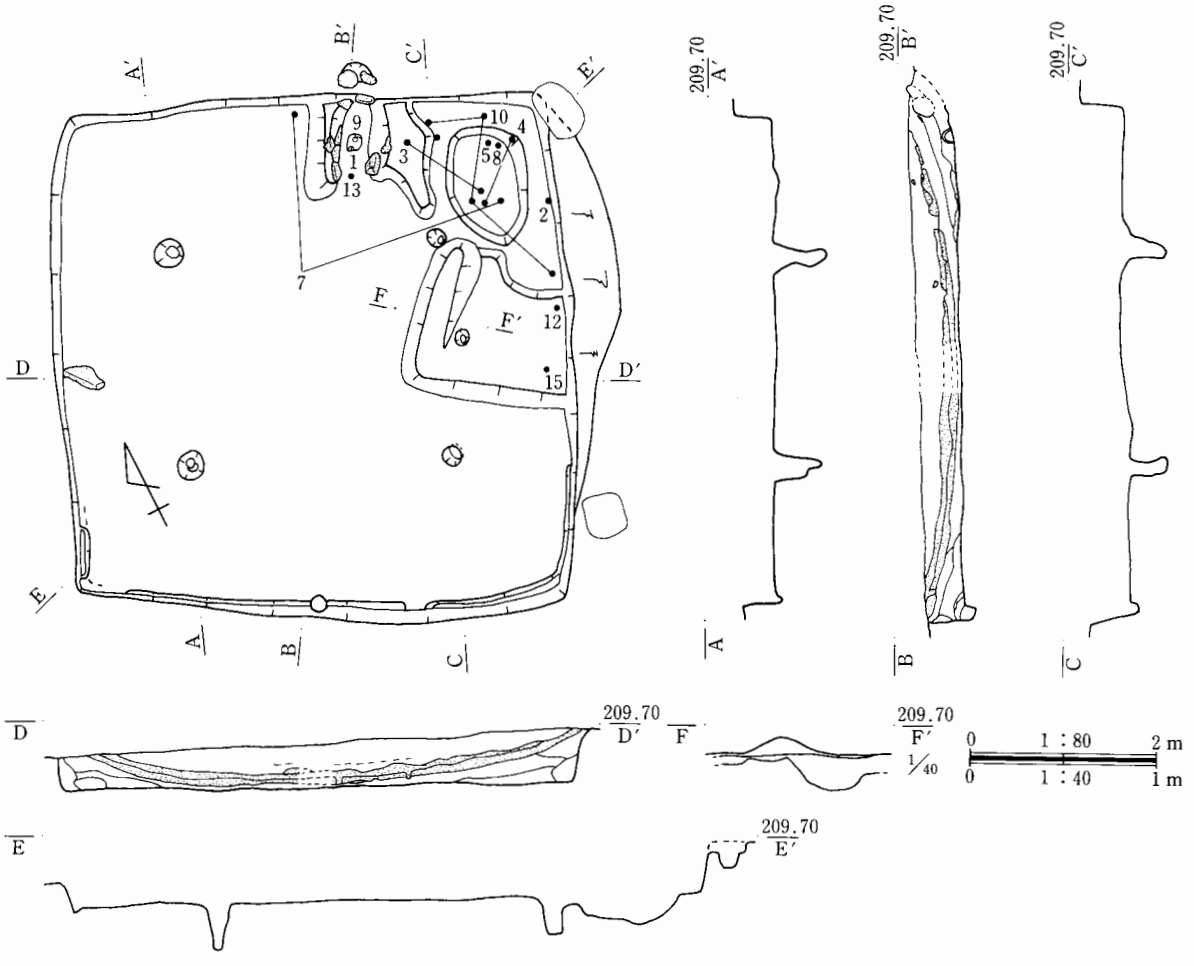
西柱穴は排水作業のため大きくなっている。カマドは東壁の南寄りに付設されている。左右１石ずつの袖石が残存していた。貯蔵穴の西側に細長い礫があり天井石の可能性がある。燃焼部の若干左によって棒状の支脚石が据えられていた。

遺物はカマド周辺から出土している。左袖脇から土師器の長胴甕・小型甕、右袖脇に甑・小型甕・坏、前面に坏が出土している。また、南壁中央部直下に棒状の河原石が４個あった。出土遺物はこれが全てであり、埋土中も含めてほとんど破片さえも出土していない。

15号住居跡（観Ｐ75、ＰＬ７・20）

10—11杭を中心に位置する。４号掘立柱建物跡と重複し、３号溝が近接するが、どちらも15号住居跡より新しい。

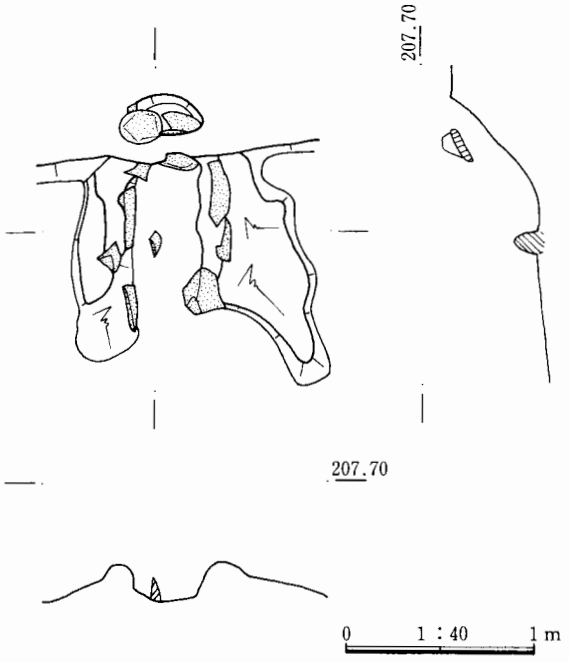
東西5.4m×南北5.5m、深さ48cmを測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方位はＮ－63°－Ｗである。埋土は間層を挟みＦＡがレンズ状に堆積する。湧水を汲み出しながらの調査であったが、床面は良好に検出できた。西方に向かってわずかに傾斜している。周溝は検出されていない。貯蔵穴は北東隅に壁から若干離れて付設されている。長径120cm×短径84cmを測るが、深さは約20cmと浅い。貯蔵穴の西に１・13号住居跡と同様に、ロームを低く盛り上げて区画した施設が検出されている。一辺約170cmを測り方形状を呈するが、柱穴を挟ん



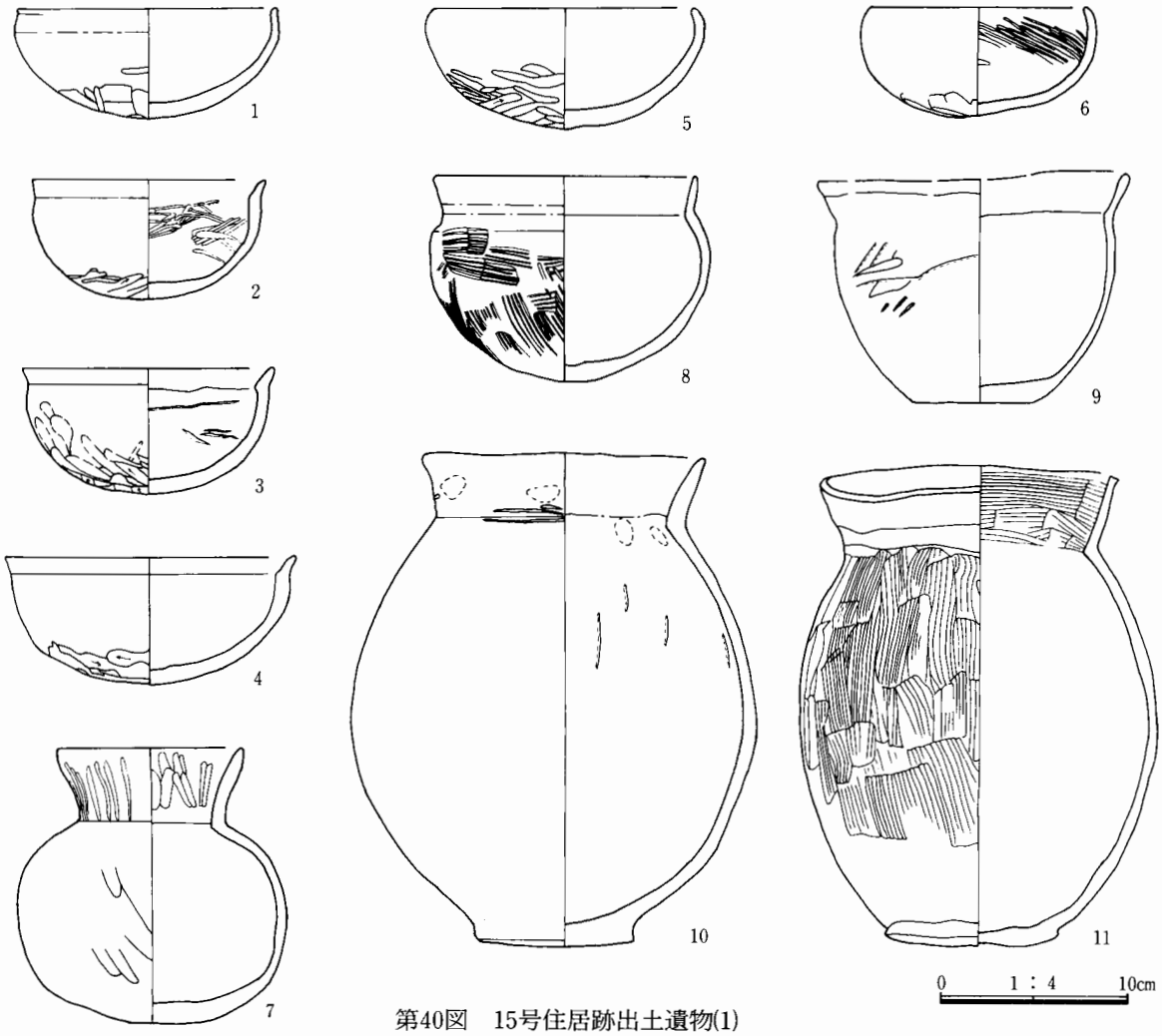
第38図　15号住居跡

で竈右袖のロームとつながるような状況もみられる。主柱穴は4本検出されている。径20～30cm、深さ40～55cmを測る。カマドは北壁の若干東寄りに付設されている。両袖部から天井部まで石を用いて補強しており、わずかではあるが天井が崩落せずに残っていた。煙道部は礫により塞がれていたが、人為的かどうかは不明である。燃焼部中央には支脚が据えられ、これを被うように小型甕が伏せられていた。

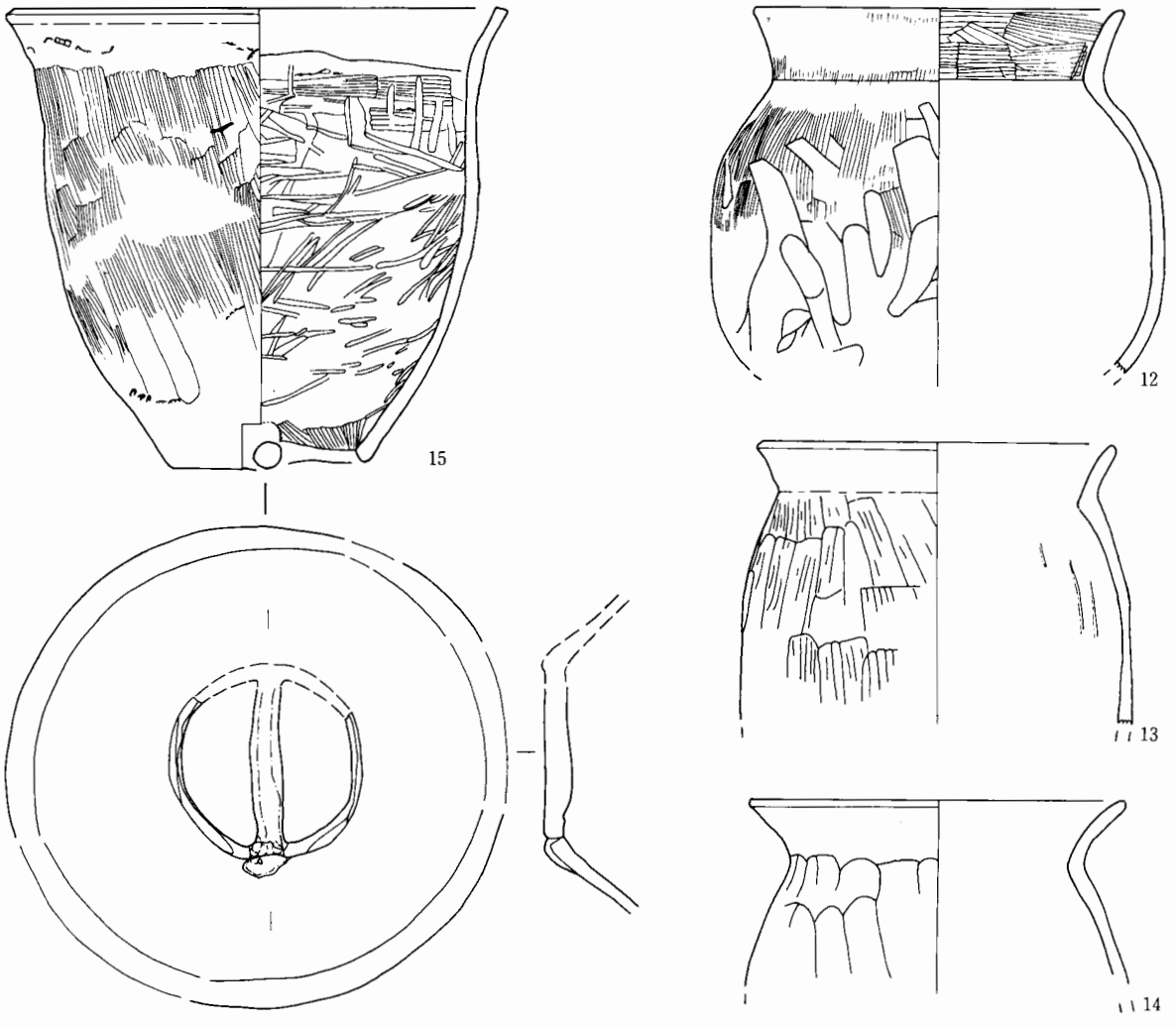
遺物は主にカマド～貯蔵穴～区画遺構周辺から出土している。貯蔵穴周辺からは坏類が多く、甑は区画遺構内に壁上から落ちたような状態で出土している。



第39図　15号住居跡カマド



第40図　15号住居跡出土遺物(1)



第41図　15号住居跡出土遺物(2)

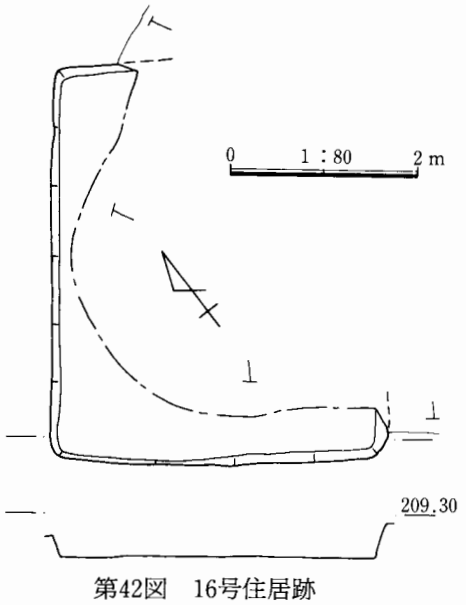
16号住居跡（ＰＬ７）

８・９－11グリッドに位置する。道路工事により大半を削平されてしまっているが、西・南壁が全て残存しており、規模は把握できた。

東西3.5m、南北4.1mを測り、検出面からの深さは30cmほどである。平面形は若干南北に長い長方形状を呈する。長軸の方位はＮ－40°－Ｅである。壁はほぼ直に立ち上がる。床面は西・南壁際にわずか残るだけであるが、北半部が若干低くなっている。カマド等の施設は全て削平されている。遺物は残存していない。

17号住居跡（観Ｐ76、ＰＬ７）

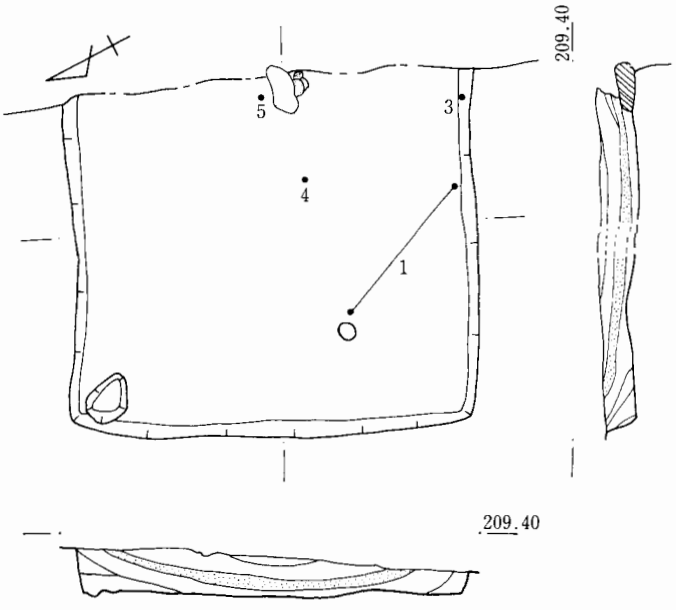
７・８－11グリッドに位置する。東壁部分は完全に道路工事により削平されている。



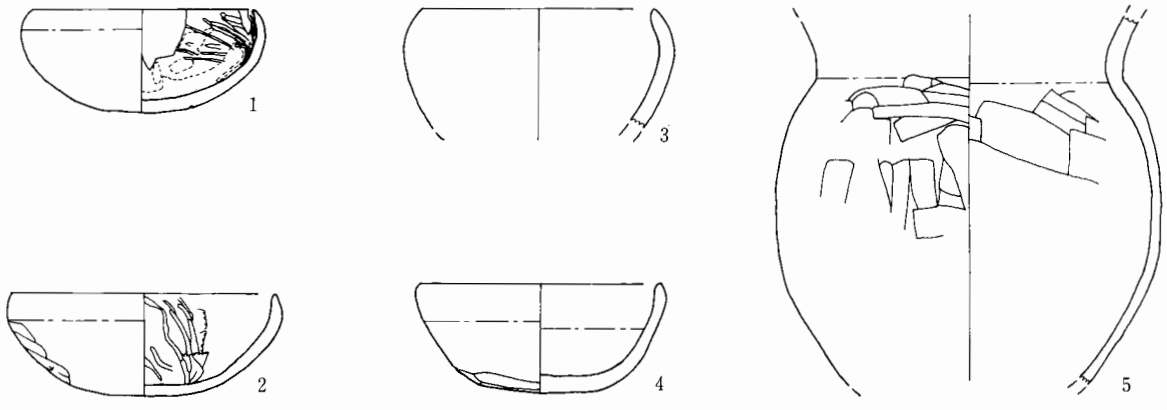
第42図　16号住居跡

東西3.7m以上、南北4.2mを測り、平面形は正方形状を呈すると思われる。深さは北壁で48cmを測る。方位はN－27.5°－Eである。埋土は間層を挟みＦＡがレンズ状に堆積する。壁は北壁は直に立ち上がるが、西・南壁は若干角度をもって立ち上がる。床面は中央部は良好に踏み固められているが、壁際は軟弱である。柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。北西隅部に浅いピットが検出されたが、住居と関連するか不明である。天井石が床面に残存することから、カマドは東壁に付設されていたと思われる。

遺物は住居南半部に散在して坏・甕類が出土した。



第43図　17号住居跡　0　1：80　2m

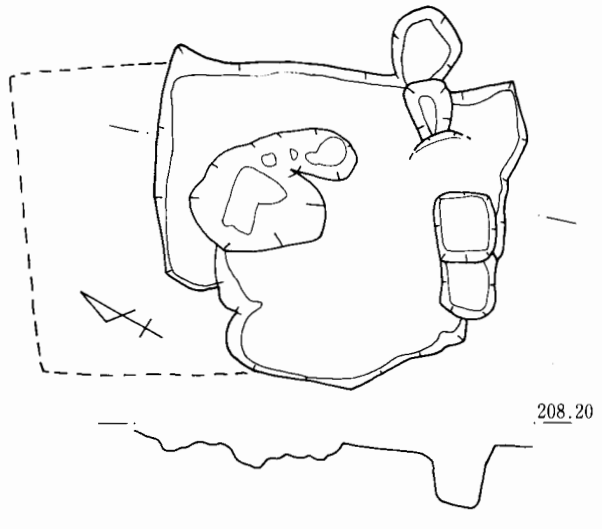


第44図　17号住居跡出土遺物　0　10cm

20号住居跡（観Ｐ77、ＰＬ８）

６－９グリッドに位置する。５号掘立柱建物跡と重複し、本跡が古いと思われる。検出面ですでに床が削平されているような状態で、詳細不明な点が多い。図はわずかな床の痕跡と、南側の掘り方部分で示してある。

東西3.2m、南北4.8mを測り、長方形を呈する。主軸方位はN－34°－Wを測る。柱穴、周溝は検出されていない。東壁に接した南端の浅いピットは竈掘り方の可能性があるが、焼土が検出されないためカマドの確証はない。南壁際の



第45図　20号住居跡　1　1：80　2m

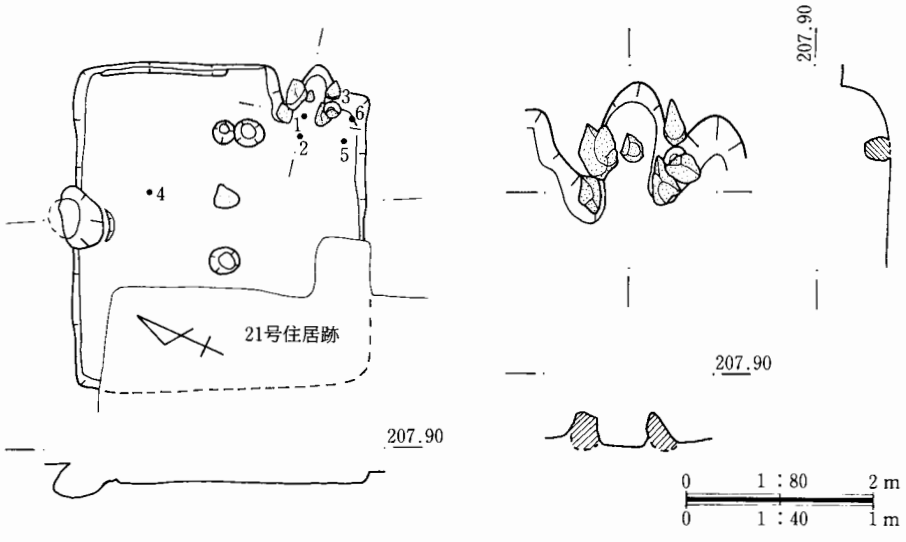
ほぼ中央に方形のピットが2基連続して穿たれており、貯蔵穴の可能性がある。1辺が各々60cmで、深さは東側が検出面から50cm、西側が35cmを測る。但し、同時に機能していたかどうかどうか不明である。

遺物は貯蔵穴から小型の埦が1点出土しているだけである。住居の時期をこの遺物から判断して古墳時代としたが、平面形状の点などから余り明確な判断は下せない。

22号住居跡

(観P77、PL8・23)

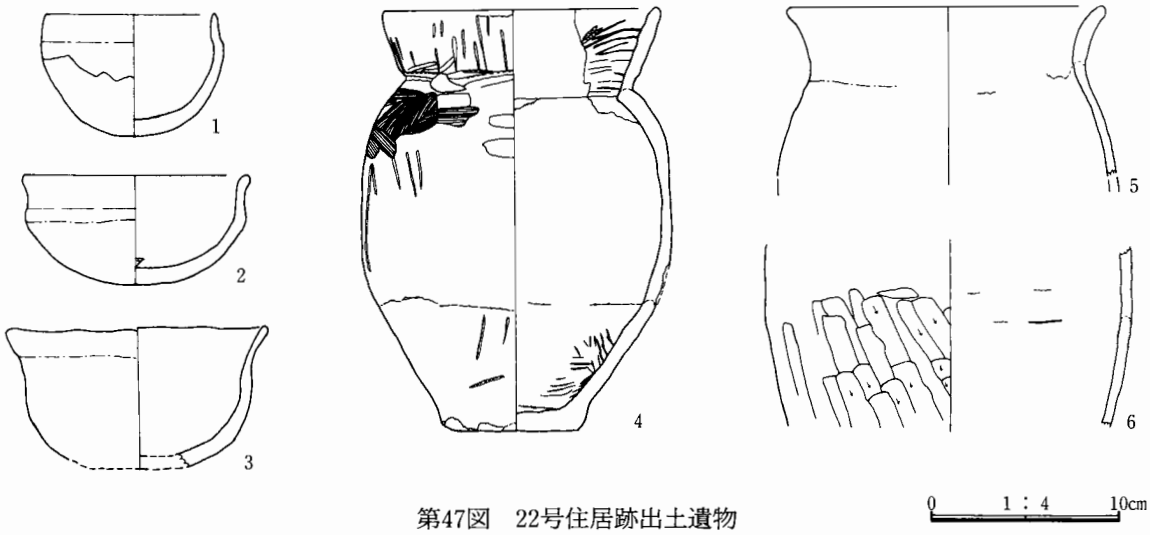
5－9グリッドに位置する。西端部を21号住居跡によって壊されている。西壁のほとんどと南壁の半分程を壊されている。



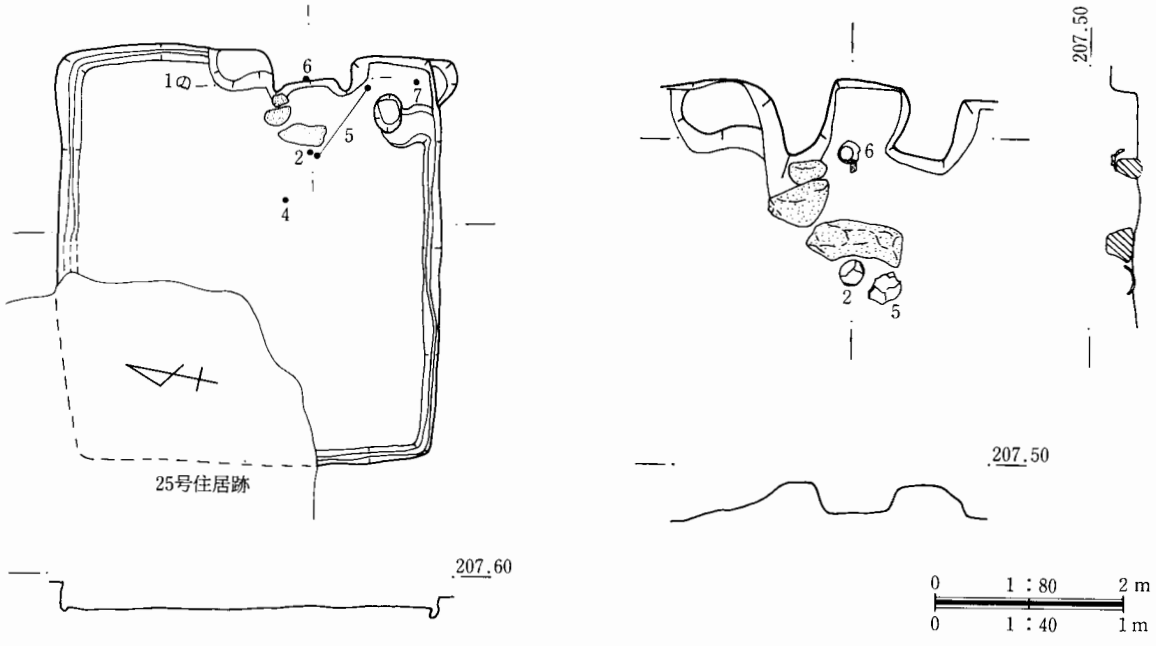
第46図　22号住居跡及びカマド

規模は東西3.3m、南北3.0mを測り、若干東西に長い方形を呈する。深さは北壁で35cmを測る。方位はN－25°－Wである。壁はほとんど直に立ち上がる。床面はほぼ全面が良好に踏み固められていた。貯蔵穴は北壁の中央部を一部掘り込んで付設されている。また、貯蔵穴の上縁に沿って床面上にロームを盛り上げていたような痕跡が認められる。長径約60cm、深さ約20cmを測り、壁内に30cm掘り込んでいる。主柱穴は長軸上に位置する2基に可能性がある。径22～34cm、深さ20～30cmと浅い。カマドは東壁の南端近くに付設されている。検出面において煙道が壁外に出ないタイプで、各々3石ずつの礫が袖に補強材として残っている。礫上に出土した埦は補強材の可能性がある。支脚は燃焼部のほぼ中央に設置されている。

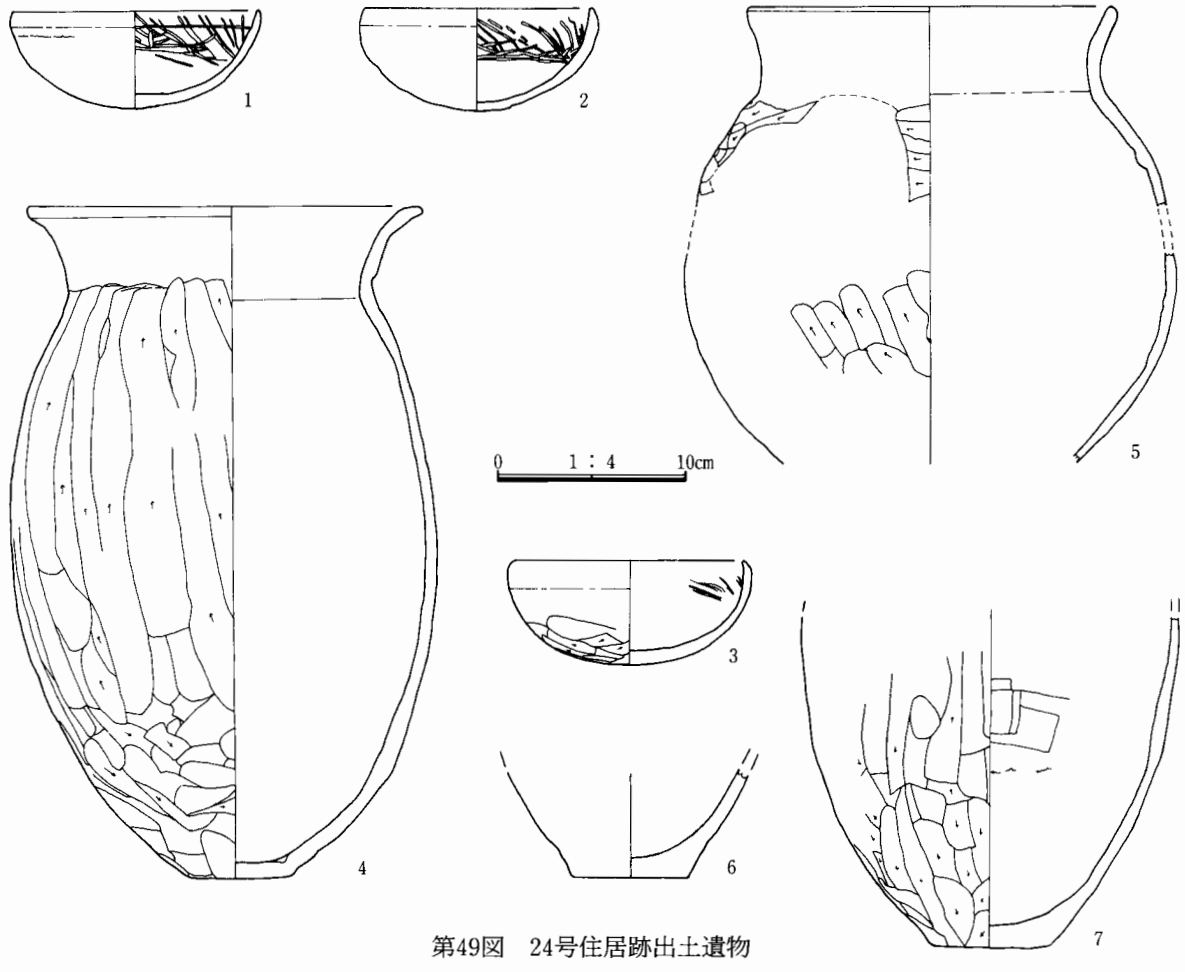
遺物は竈とその周辺から坏・埦が、中央部西寄りの床面から甕が出土している。



第47図　22号住居跡出土遺物



第48図　24号住居跡及びカマド



第49図　24号住居跡出土遺物

24号住居跡（観Ｐ77、ＰＬ８・23）

５－10グリッドに位置する。西北部に25号住居跡が重複する。

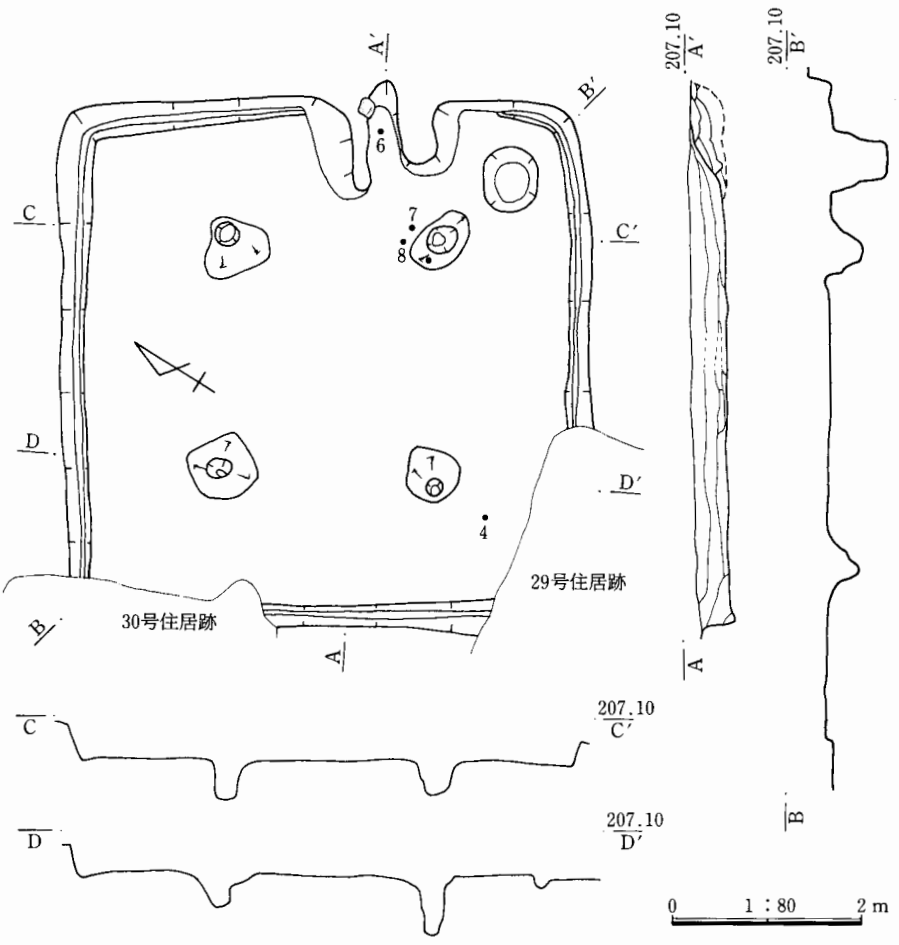
東西4.22m、南北4.04mを測り、ほぼ正方形である。深さは北壁で約30cmを測る。方位はＮ－10.5°－Ｗである。壁は直に立ち上がる。床面は竈から中央部にかけて良好に踏み固められている。浅く狭い壁周溝が竈周辺を除いてほぼ全周している。主柱穴は検出されていない。南東隅部に壁から離れて検出されたピットは長径40cm、短径30cm、深さ30cmと小規模であるが貯蔵穴の可能性がある。竈は東壁の南寄りに位置する。左の袖石は残っているが、右側はローム粘土だけが残存する。焚口前面に天井石が崩落している。支脚は燃焼部中央の若干左寄りに設置されている。また、支脚の上に甕の底部が伏せられている。煙道部は壁外に出ず、直に立ち上がっている。

遺物はカマドの周辺を中心に坏・甕が出土している。

28号住居跡（観Ｐ78、ＰＬ９・23）

４－５・６グリッドに位置する。西端部に平安時代の29・30号住居跡が重複する。

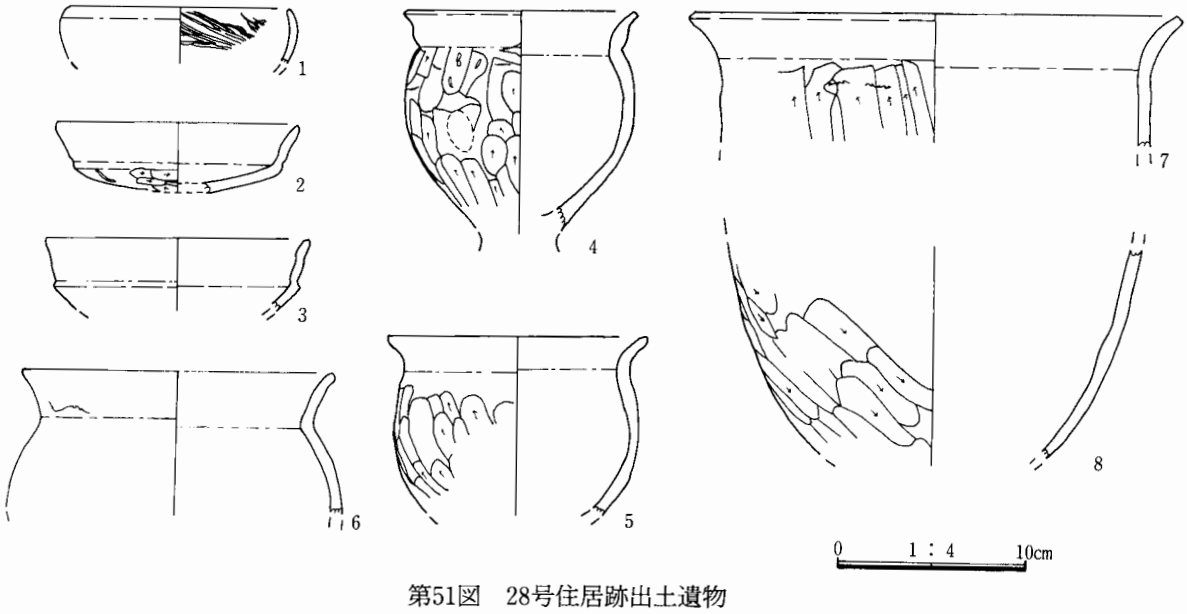
東西5.6m×南北5.6mを測り、ほぼ正方形状を呈する。深さは北壁で35cmを測る。方位はＮ－32.5°－Ｗである。壁は角度をもって立ち上がる。床面はカマドから中央部にかけては堅緻であるが、周縁部は軟弱であ



第50図　28号住居跡

る。幅20cm、深さ10cmほどの壁周溝が竈部分を除いてほぼ全周している。主柱穴は住居プランの対角線上から若干ずれるが、4本検出された。径46～72cm、深さ34～60cmと不揃いである。貯蔵穴は南東隅に壁から距離をおいて付設されている。長径70cm×短径58cmを測り、楕円形を呈する。深さは58cmである。竈は東壁の中央より若干南に寄って付設されている。焚口や袖の補強に石を用いておらず、ローム粘土だけで構築している。検出面で若干煙道が壁外へ出る。

遺物はカマド周辺から坏・甕・脚付き小型甕などが出土したが、余り残存状況はよくない。



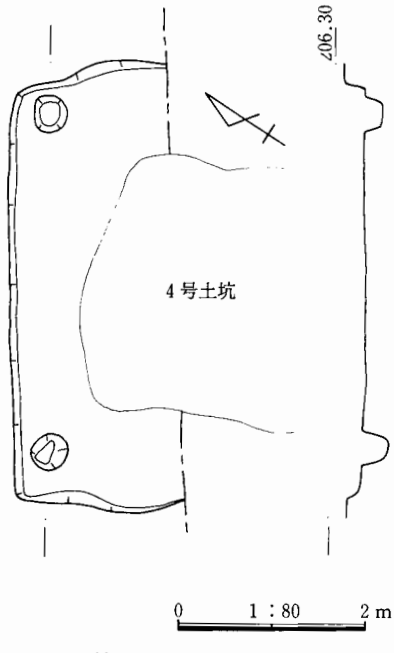
第51図　28号住居跡出土遺物

32号住居跡（ＰＬ９）

２－４グリッドに位置する。南側の過半部分が耕作により削平されている。また住居のほぼ中央部に4号土坑が重複する。検出された該期の遺構の中でもっとも南西端に位置する。

東西4.5mを測り、南北は1.8mほどが残存する。平面形状は不明である。深さは北壁で25cmである。方位はN－30.5°－Wを測る。床は周縁部のためもあり、余り堅くない。壁は直に立ち上がっている。北壁の両隅に浅いピットが検出されている。径32～38cm、深さ14～24cmを測る。

遺物は土器片が少量出土しただけである。出土した遺物によって住居の時期を古墳時代としたが、不明な点が多い。



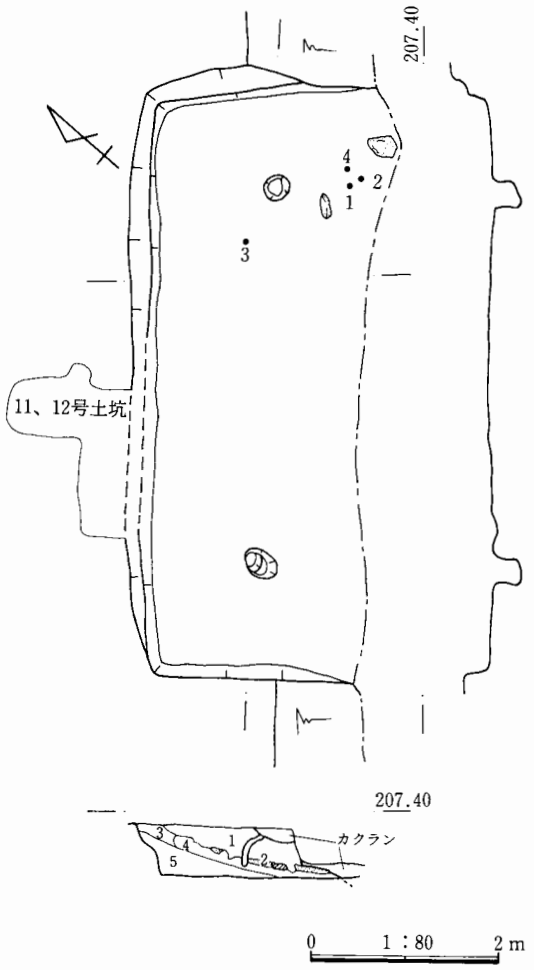
第52図　32号住居跡

34号住居跡（観Ｐ79、ＰＬ９・23）

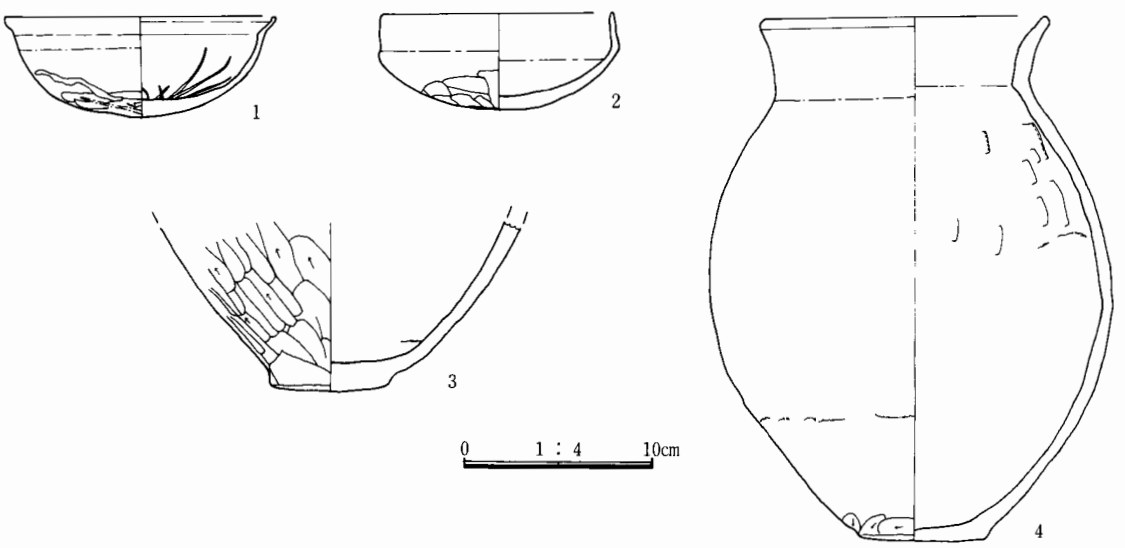
４・５－11グリッドに位置する。北西約３ｍに24号住居跡、北東約８ｍに22号住居跡が近接する。南側過半部は耕作により削平されている。北壁上に後世の土坑が重複する。

東西6.3ｍを測り、南北は約2.4ｍが残存する。方位はＮ－38°－Ｗである。埋土は間層を挟みＦＡ火山灰層がレンズ状に堆積する。壁は一旦直に立ち上がり、上半部は外方に傾斜する。床面は全面が比較的堅緻である。主柱穴は北壁寄りの２基が検出された。径24～40cm、深さ28～38cmである。貯蔵穴及び竈等の施設は削平されている。

遺物は東壁寄りの床面から坏と甕が出土している。



第53図　34号住居跡



第54図　34号住居跡出土遺物

3．奈良・平安時代の竪穴住居跡

4号住居跡（観P79、PL10・23）

13－14杭を中心に位置する。4号溝と重複している。東・南の過半部を道路工事により削平されており、北端は調査区域外に伸びる。

規模・形状等は不明であるが、東西約2m×南北約3mほどの範囲を調査した。深さは北壁で22cmを測る。方位は西壁でN－3°－Wである。床面は比較的堅緻である。底部が平坦で、明瞭な掘り込みを持つ壁周溝が検出されている。幅約15cmで深さ約5cmと浅い。これ以外の施設は不明である。

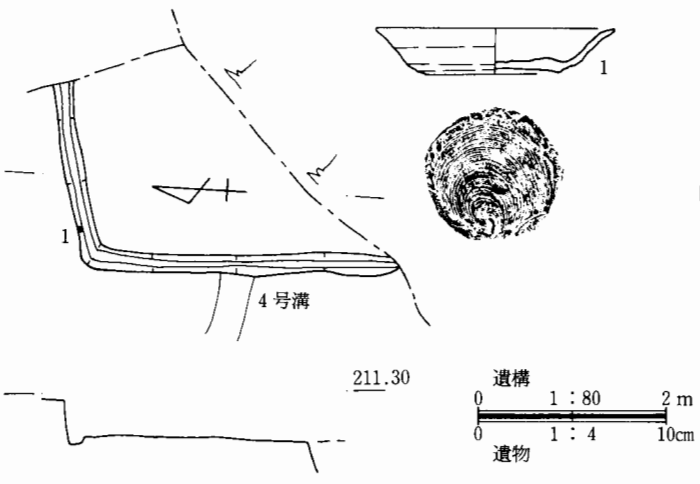
遺物は北壁面に密着して須恵器の皿が1点出土している。

5号住居跡（PL10）

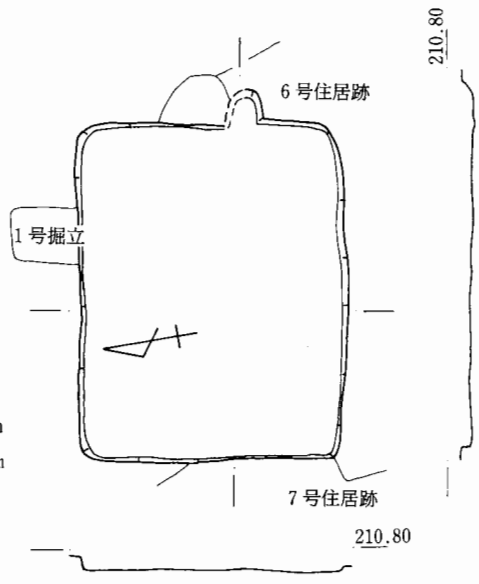
12－14グリッドに位置する。6・7号住居跡、1号掘立柱建物跡と重複しいずれよりも新しい。

東西3.5m×南北2.8mを測り、東西に長い隅丸長方形を呈する。深さは約5cmと浅い。床面は軟弱である。貯蔵穴・柱穴等は検出されていない。カマドは東壁の南に寄って付設されているが、住居等との重複によって不明瞭な点がある。煙道が壁外に出るタイプであるが、構築材であるロームや礫は出土していない。

遺物は土器の小片が出土しただけである。



第55図　4号住居跡及び出土遺物



第56図　5号住居跡

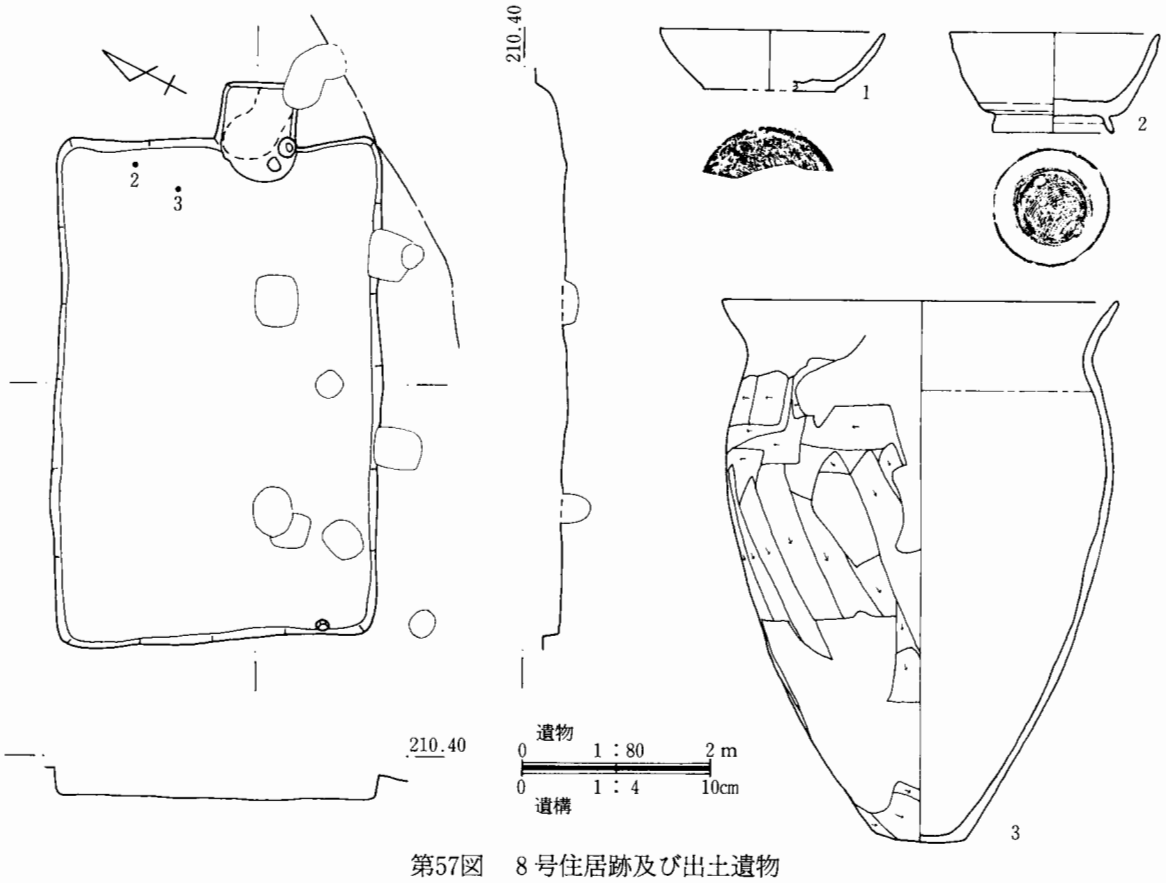
8号住居跡（観P79、PL10・23）

10・11－18グリッドに位置する。古墳時代の9号住居跡と近接し、平安時代と思われる3号溝と重複するが、新旧関係は明瞭ではない。また、掘立柱建物跡の可能性のあるピットにより撹乱されている。

東西5.4m×南北3.4mを測り、東西に長い隅丸長方形を呈する。深さは北壁で34cmを測る。方位はN－24.5°－Wである。壁はほぼ直に立ち上がる。床面は全面が比較的堅緻である。本住居につくと思われるピットは検出されていない。カマドは東壁の中央より若干南に寄って付設されている。煙道部及び燃焼部の半分ほど

が壁外に位置しており、底面が良好に焼けている。幅77cm、奥行き60cmほどの方形の掘り方を有する。

遺物は東壁際から土師器の甕、須恵器の坏、西壁際から鉄製品が出土している。

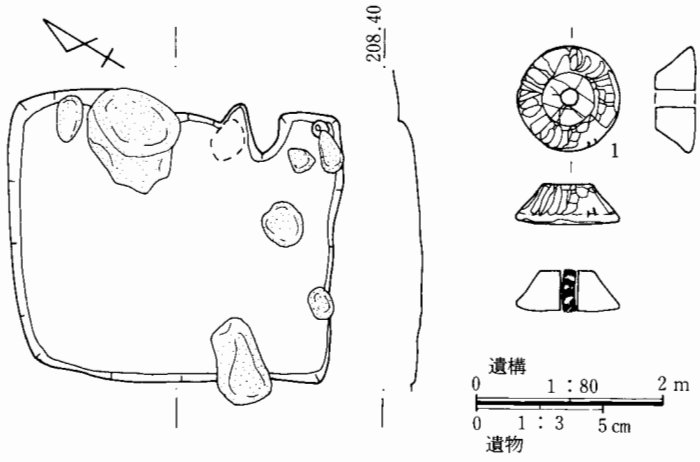


第57図　8号住居跡及び出土遺物

18号住居跡（観P79、PL10・23）

6－10グリッドに位置する。20号住居跡・5号掘立柱建物跡が西方に近接する。18号住居跡周辺は検出面において多量の自然石が露出しており、住居内にも大きな石が存在する。東西2.8m×南北3.4mを測り、歪んだ隅丸長方形状を呈する。深さは北壁で24cmと浅い。方位はN－28.5°－Wである。壁はなだらかに立ち上がる。主柱穴・貯蔵穴は検出されていない。カマドは東壁の南に寄って付設されている。燃焼部は屋内にあり、煙道は壁外に出る。右側のローム袖が残存する。

遺物は土師器の甕、軸木の残る石製紡錘車が出土している。



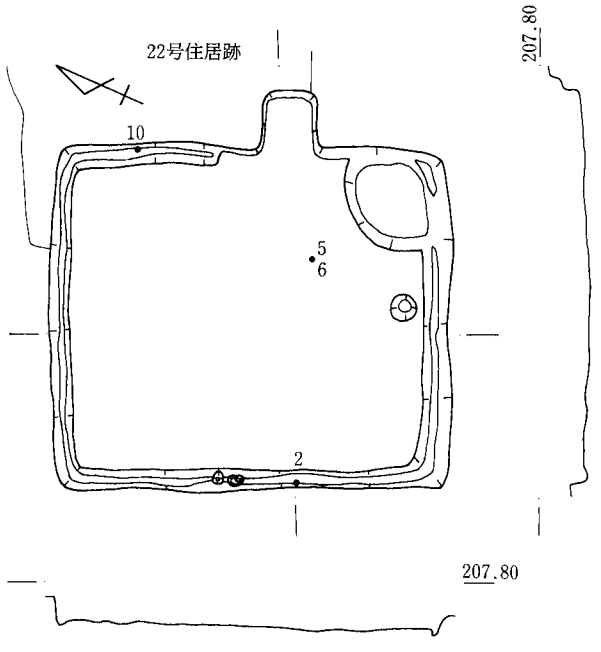
第58図　18号住居跡及び出土遺物

21号住居跡（観P79、PL10・23）

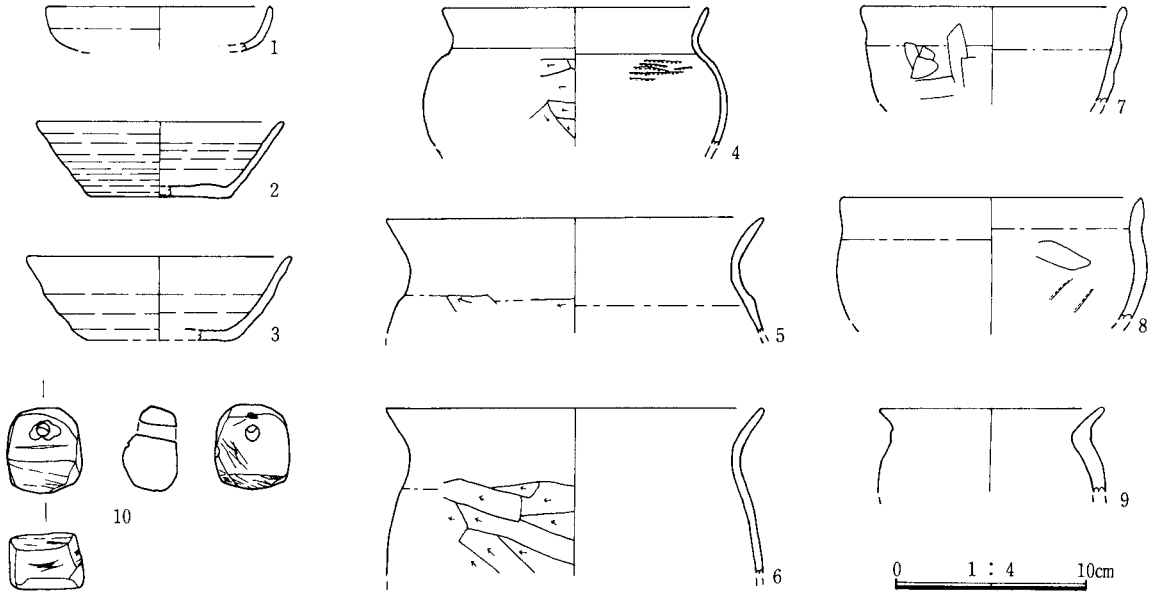
5－8・9グリッドに位置する。古墳時代の22号住居跡と重複する。北西に23号住居跡が近接している。

東西3.6m×南北4.2mを測り、均整のとれた長方形を呈する。深さは北壁で31cmを測る。主軸方位はN－22.5°－Wである。壁は比較的直に立ち上がる。床面はほぼ全面が堅緻である。カマドおよび貯蔵穴部分を除いて壁周溝が巡るが、幅約10cm、深さ5cmで不明瞭である。南東隅に壁に接して円形の浅い堀込みがあり、貯蔵穴の可能性がある。径85cm、深さ10cmを測る。また、南壁のほぼ中央から若干離れて径約30cm、深さ20cmのピットが検出されており柱穴の可能性がある。但し、北壁寄りには対応するピットは検出されなかった。カマドは東壁中央からわずか南に寄った位置に付設されている。幅・奥行きともに約60cm壁を掘り込んだ、方形のカマドである。袖は検出されていない。

遺物は土師器甕・脚付小型甕・坏、須恵器坏が出土している。また、小型の砥石が東壁密着で出土した。



第59図　21号住居跡



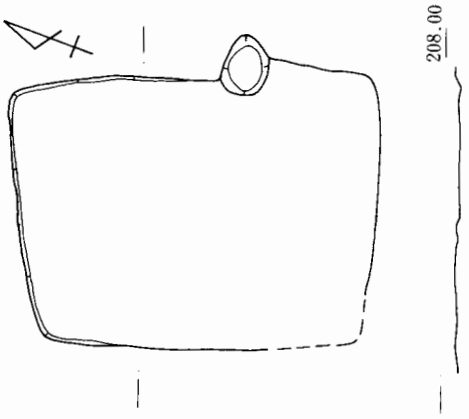
第60図　21号住居跡出土遺物

23号住居跡（ＰＬ10）

6－10グリッドに位置する。遺構検出作業時に既に床が露呈しており不明な点が多い。重複する遺構は無い。21号住居跡が南東に、25号住居跡が南西に近接する。東西約2.8m×南北約3.9mを測り、不正な長方形状を呈する。深さは北壁で9cm、南半部は床面まで削平されている。方位はN－19°－Wである。床は軟弱で

ある。柱穴その他の施設は検出されていないが、南壁に沿って床下土坑があるのが確認されている。カマドは東壁の南寄りに付設されている。燃焼部は壁外に出ている。

遺物は残存していないが、住居構造等から平安時代に属すると思われる。

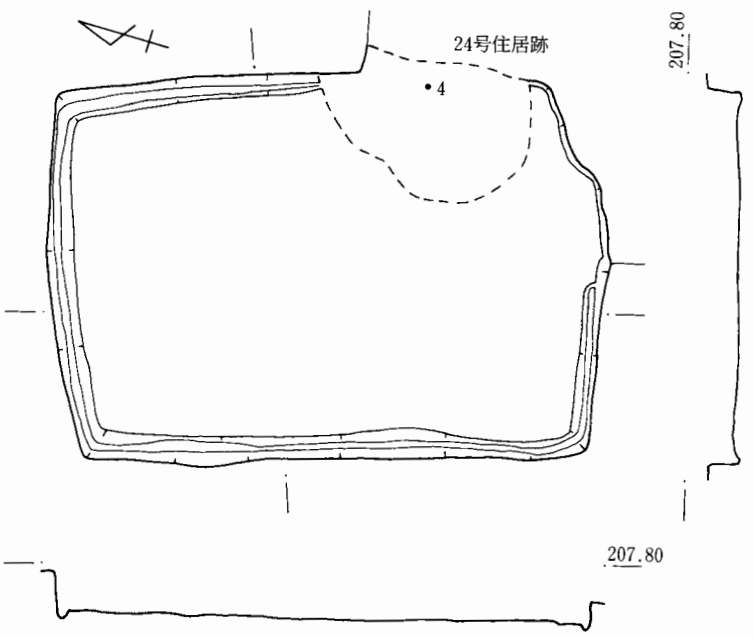


第61図　23号住居跡

25号住居跡（観Ｐ80、ＰＬ８）

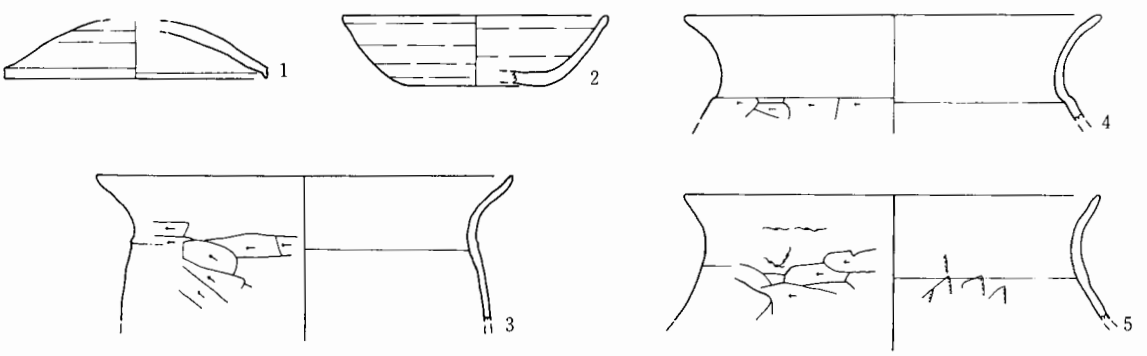
６－７杭に接して南西に位置する。古墳時代の24号住居跡と重複する。

東西4.0m×南北5.7mを測り該期の住居の中で最も大きな長方形の住居である。深さは北壁で41cmである。方位はＮ－18°－Ｗである。壁は比較的直に立ち上がる。24号住居と重複する部分の壁は明瞭には捉えられなかった。床面は比較的堅緻である。カマドと24号住居跡との重複部を除いて浅く不明瞭な溝が巡っている。幅15cm、深さ６cmほどである。カマドは東壁の南寄りにローム粘土を用いて付設されているが、かなり広範囲に崩落しており袖や煙道等の構造は捉えられなかった。



第62図　25号住居跡

0　1：80　2m



第63図　25号住居跡出土遺物

0　1：4　10cm

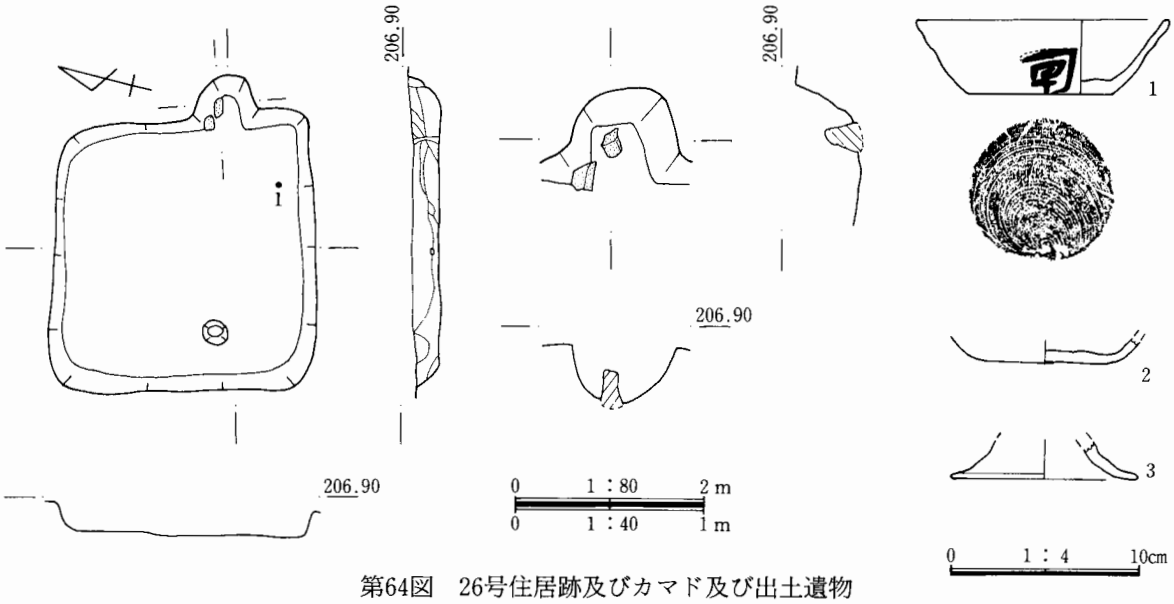
遺物は多量に出土しているが多くは小破片で、実測できたのは土師器甕、須恵器坏・蓋等数点である。

26号住居跡（観P80、PL11・24）

4―7グリッドに位置する。3号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

東西2.8m×南北2.8mを測り、隅丸正方形状を呈する。深さは北壁で27cmを測る。方位はN―14°―Wである。壁は緩やかに立ち上がり、床面は軟弱である。カマド以外の施設は検出されていない。竈は東壁の南寄りに付設されている。燃焼部のほとんどが壁外に位置する。幅60cm、奥行き40cmを測り、左側袖石と支脚が残存する。支脚は燃焼部の左に寄って設置されている。

遺物は須恵器坏（墨書土器）、土師器脚付き甕の脚部が出土している。

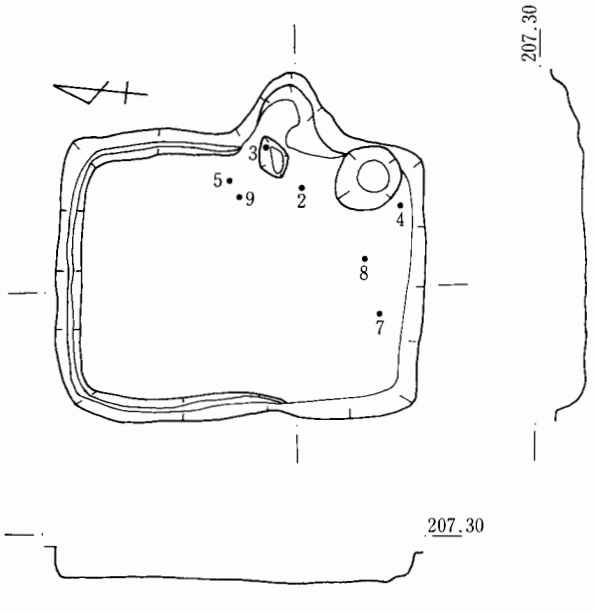


第64図　26号住居跡及びカマド及び出土遺物

27号住居跡（観P81、PL11・24）

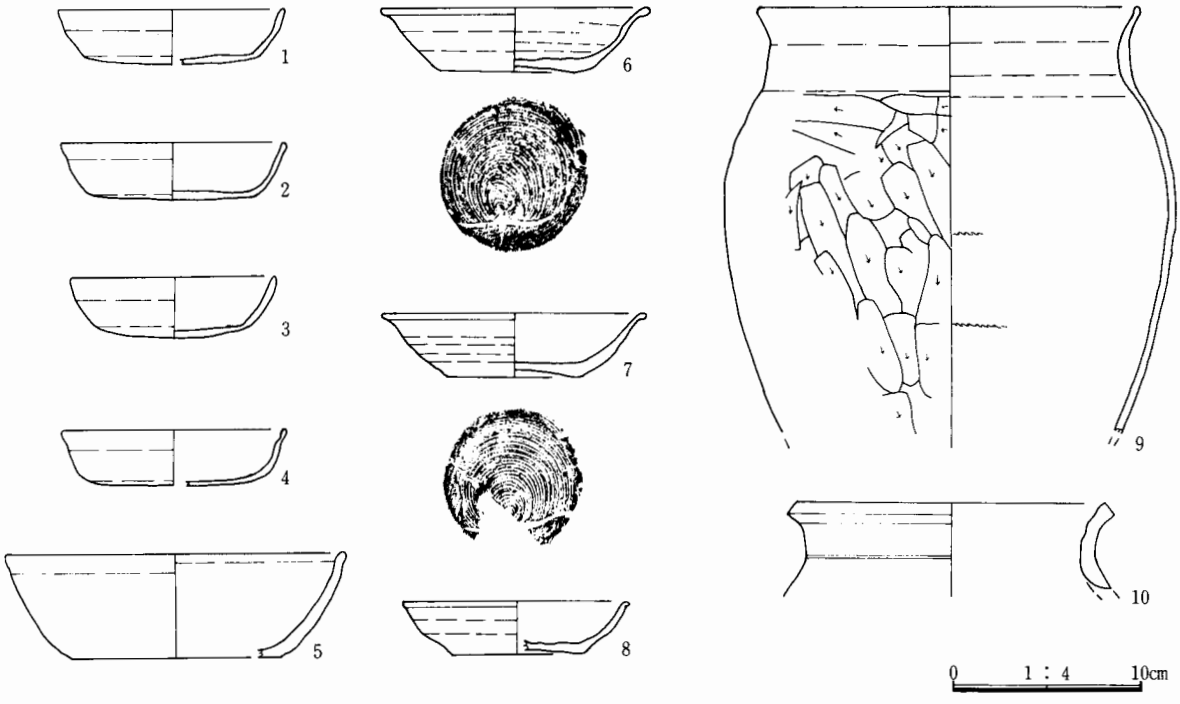
5―6グリッドに位置する。重複する遺構はないが、29・30号住居跡が南西約10mに近接する。

東西3.0m×南北3.8mを測り、隅丸長方形を呈する。深さは北壁で35cmを測る。方位はN―5°―Wである。北壁はほぼ直に立ち上がるが、他は角度をもって立ち上がる。床面はカマド前面を除いて軟弱である。北半部に浅く不明瞭な溝が巡る。南東隅に径74×64cm、深さ20cmの円形の土坑があり、貯蔵穴の可能性がある。カマドは東壁の南寄りに付設されている。燃焼部は屋内屋外のほぼ中間に位置し煙道が約60cm壁外に伸びている。



第65図　27号住居跡

遺物は土師器甕・坏・埦、須恵器坏が出土している。また、刀子及び鉄滓も出土している。



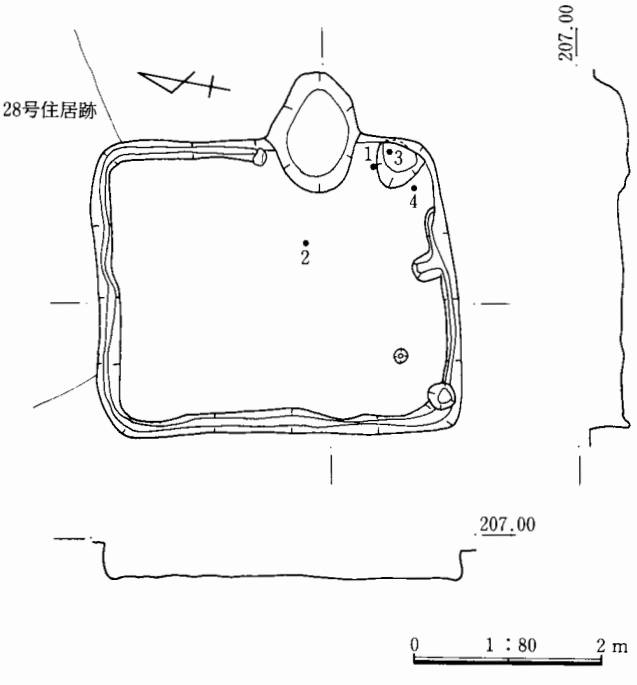
第66図　27号住居跡出土遺物

29号住居跡（観Ｐ81、ＰＬ11・24）

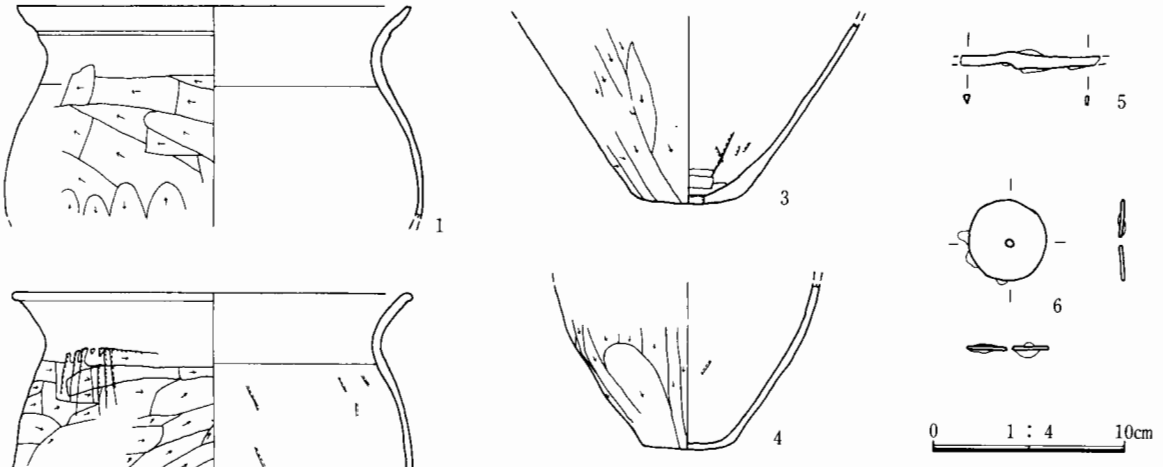
4—5杭に接し北東に位置する。Ｊ2 号土坑、28号住居跡、6号溝と重複する。北西に30号住居跡が近接する。

東西3.1m×南北3.8mを測り、いびつな隅丸長方形を呈する。深さは北壁で36cmを測る。方位はN—10.5°—Wである。壁の立ち上がりは比較的直である。床面は余り踏み固められていない。浅い壁周溝がほぼ全周する。幅10～15cm、深さ10cmほどで、南壁際は特に不鮮明である。南東隅部に径約46cm、深さ30cmの不正円形のピットがあり、小型であるが、貯蔵穴の可能性もある。南西部にも小ピットがあるが、住居と関係するかは不明である。カマドは東壁の南寄りに付設されている。燃焼部が壁外と住居内にほぼ半々属するタイプである。

遺物は土師器甕、刀子、鉄製紡錘車が出土している。



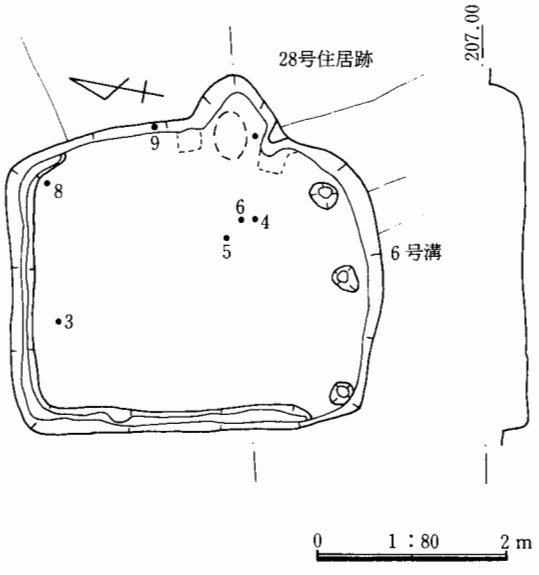
第67図　29号住居跡



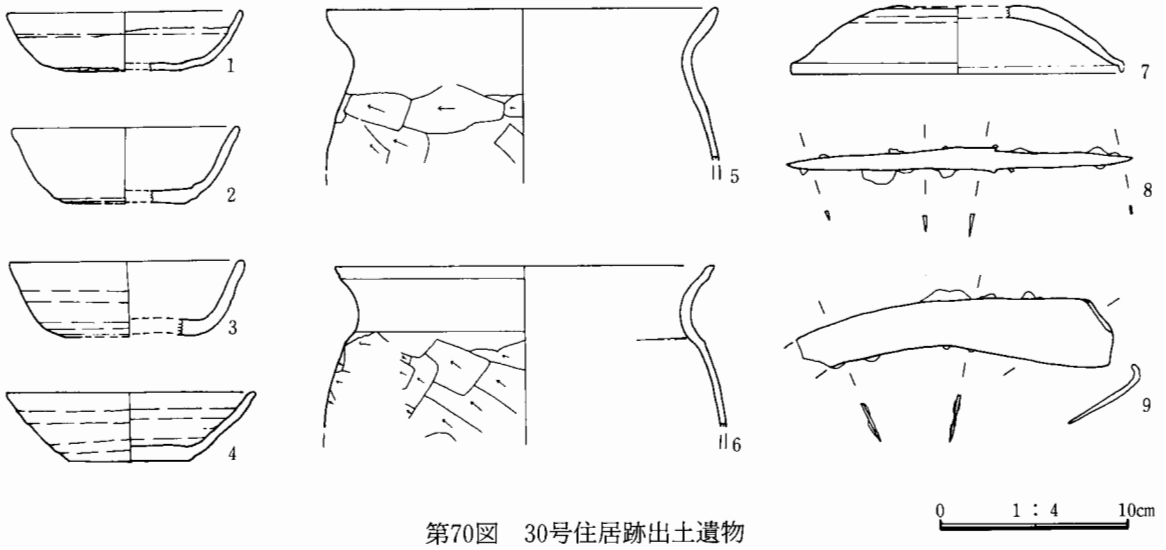
第68図　29号住居跡出土遺物

30号住居跡（観Ｐ82、ＰＬ11・24）

４－５グリッドに位置する。28号住居跡、６号溝と重複する。東西3.24m×南北3.88mを測り、隅丸長方形状を呈するが、南・東壁は壁外に湾曲している。深さは南壁で33cmを測る。方位はＮ－16.5°－Ｗである。壁の立ち上がりは南壁を除いてほぼ直である。床面は余り堅くない。北・西壁際に浅い壁周溝が巡る。幅約20cm、深さ５cm程度である。南壁際に浅いピットが検出されているが性格不詳である。カマドは東壁の南寄りに付設されている。燃焼部が屋内壁外に半々属するタイプである。燃焼部右側にローム



第69図　30号住居跡



第70図　30号住居跡出土遺物

袖がわずかであるが残存し、左側にも残痕が認められる。燃焼部底面は非常に良く焼けている。

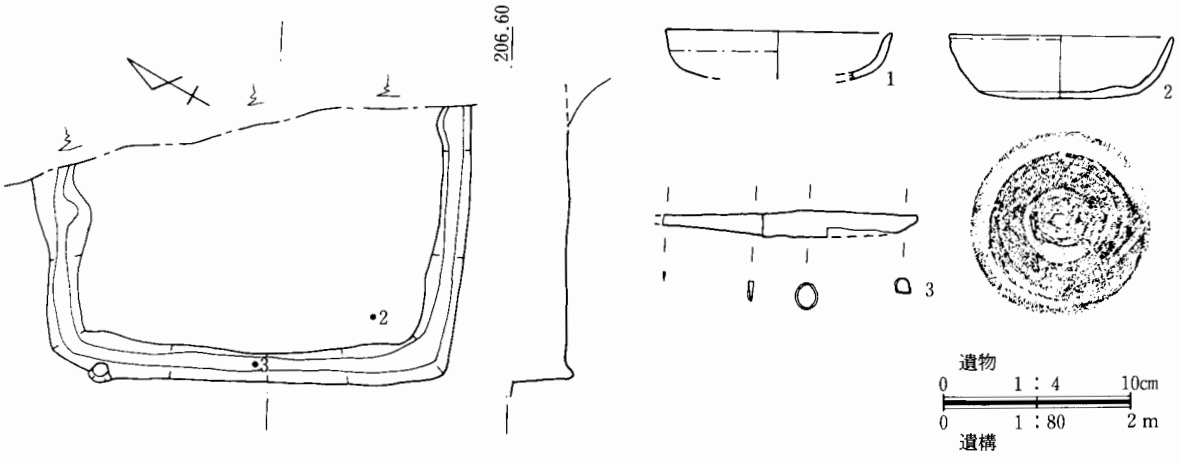
遺物は土師器坏・甕、須恵器坏・蓋、刀子、鉄鎌が出土している。

31号住居跡（観P82、PL12・24）

2・3－5グリッドに位置する。南半部は耕作により削平されている。南西に32号住居跡が近接する。

東西4.3mを測り、南北は2.7mほどが残存する。深さは北壁で64cmを測る。方位はN－26.5°－Wである。壁の立ち上がりは直で、床面は軟弱である。残存部において壁周溝が全周する。幅約20cm、深さ10cmを測り掘り込みはしっかりしている。カマドその他の施設は残存していない。

遺物は須恵器と土師器の坏、鉄製品（刀子）が出土している。



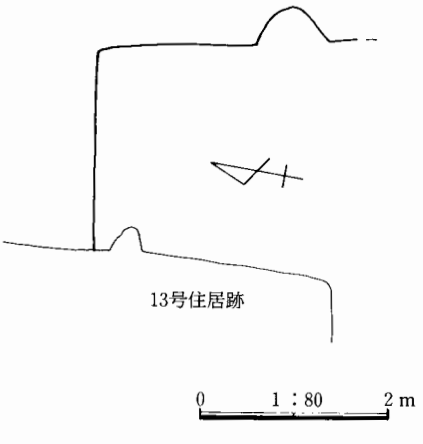
第71図　31号住居跡及び出土遺物

35号住居跡（PL12）

10－12グリッドに位置する。13号住居跡と重複すると思われる。東約2mに6号掘立柱建物跡、南約4mに2A・B号掘立柱建物跡が近接する。遺構検出段階に床面まで削平してしまったため、カマドと北半部の床の範囲が把握できただけで、規模その他の詳細は不明である。

カマドは東壁に付設されており、壁内外ほぼ半々に燃焼部が位置するタイプである。主軸方位はN－10°－W前後と思われる。

遺物が1点も出土していないため時期も不明であるが、住居掘り方とカマドの構造から平安時代と判断した。



第72図　35号住居跡

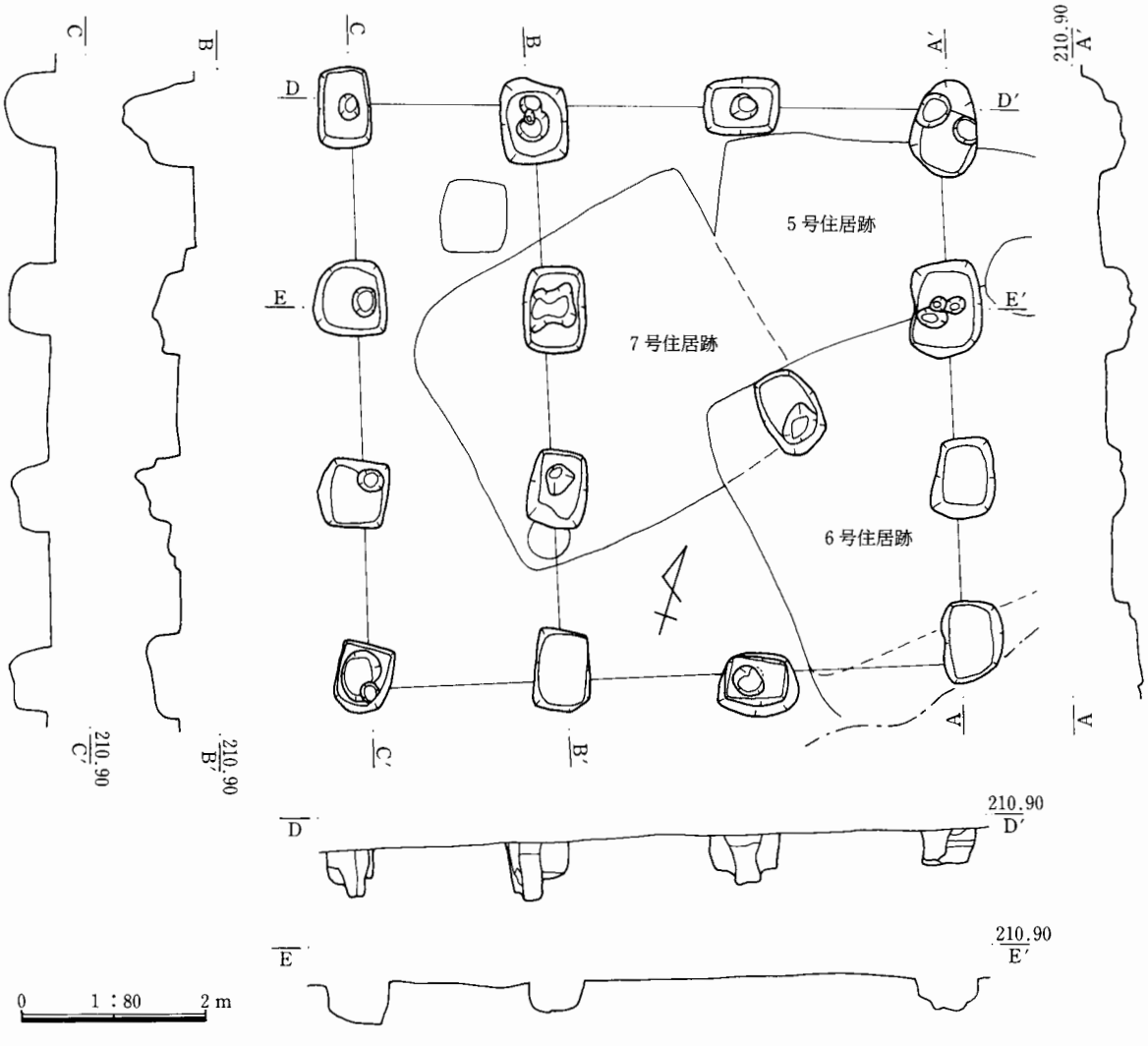
4．その他の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（PL12）

12－13杭に接し、東側に位置する。重複する6・7号住居跡、2号溝より新しく、5号住居跡より古い。

調査時点では3間×3間の総柱建物と考えたが、柱穴の配置から見ると、2間×3間で中央に束柱を持つ建物の西に庇が付く構造とするほうが良いと思われる。但し、身舎部と庇部の柱穴の規模に差は認められない。多くの柱穴に柱痕が検出されている為、かなり正確に建物規模を計測できるが、南東隅は掘り方だけの検出のため、柱痕部の検出された北・西辺を中心にして記述を進めたい。柱間の距離は北辺で6.28m、西辺で6.36mを測り、南辺が長く東辺が短いが比較的整った正方形状を呈する。東西・南北とも21尺の建物と思われる。方位は西辺でN－19.5°－Wである。柱穴の掘り方は基本的に長方形で、1辺は60～80cmである。深さは70～20cmを測る。



第73図　1号掘立柱建物跡

２Ａ号掘立柱建物跡

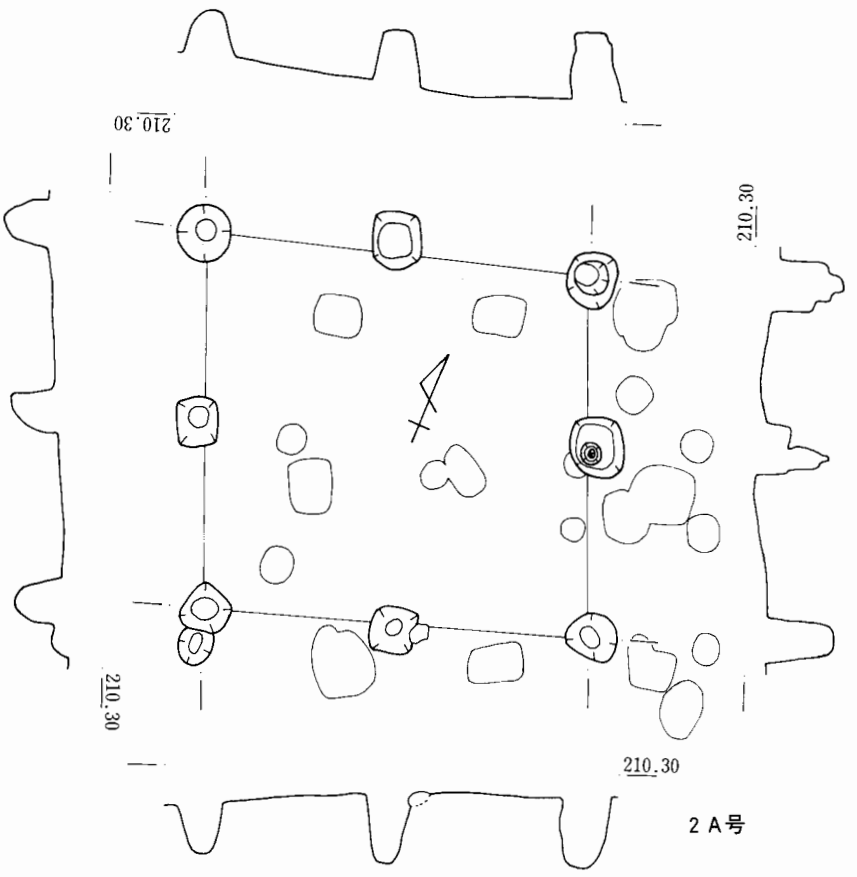
（ＰＬ12）

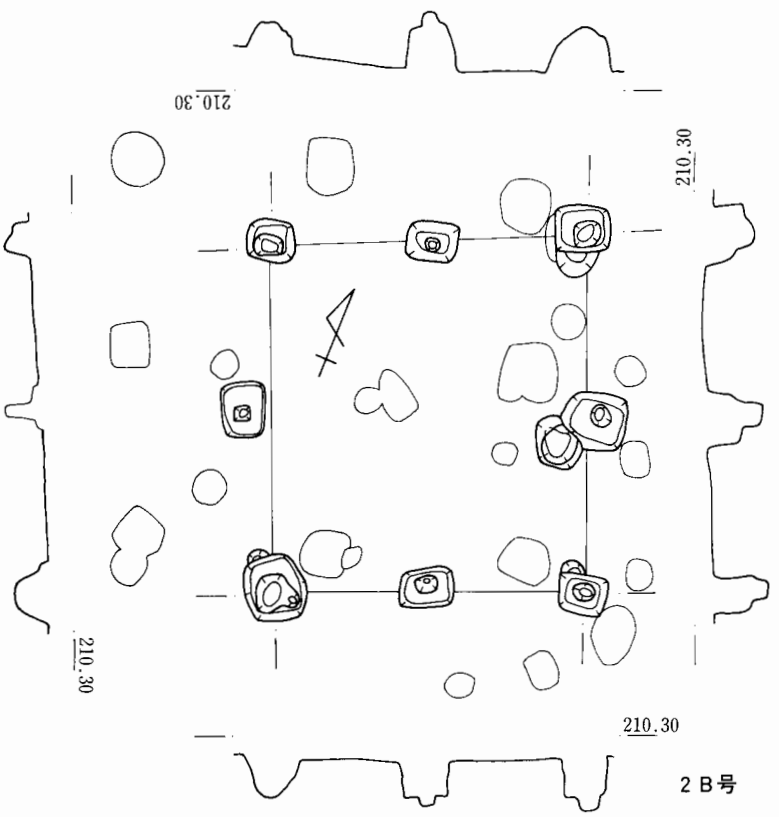
10－12・13グリッドに位置する。2Ｂ号掘立柱建物跡と重複し新旧関係は不明であるが、建て替えの可能性がある。また倒木痕（？）、９号土坑が重複する。周辺にもピットが検出されているが、建物との関係は不明である。

２間×２間の建物で、規模は東西3.9m×南北3.8mを測る。東辺が若干長いが、比較的整った正方形状を呈する。基本的には東西11尺×南北12尺の企画と思われる。因みに南北辺の間柱は外方にずれて位置しており、間柱間の距離は12尺である。また、東西辺の間柱は内側にずれている。方位はＮ－22°－Ｗである。柱穴掘り方の形状は長方形であり、柱痕部と思われるところがさらに深く円形に掘り込まれている。一辺40～70cm、深さは30～60cmを測る。

２Ｂ号掘立柱建物跡

２Ａ号掘立柱建物跡と同様２間×２間の建物であるが、かなり歪んだ方形状を呈する。東西4.1m×南北3.9mを測る13.5尺(13尺)×13尺の企画で建てられたと思われる。





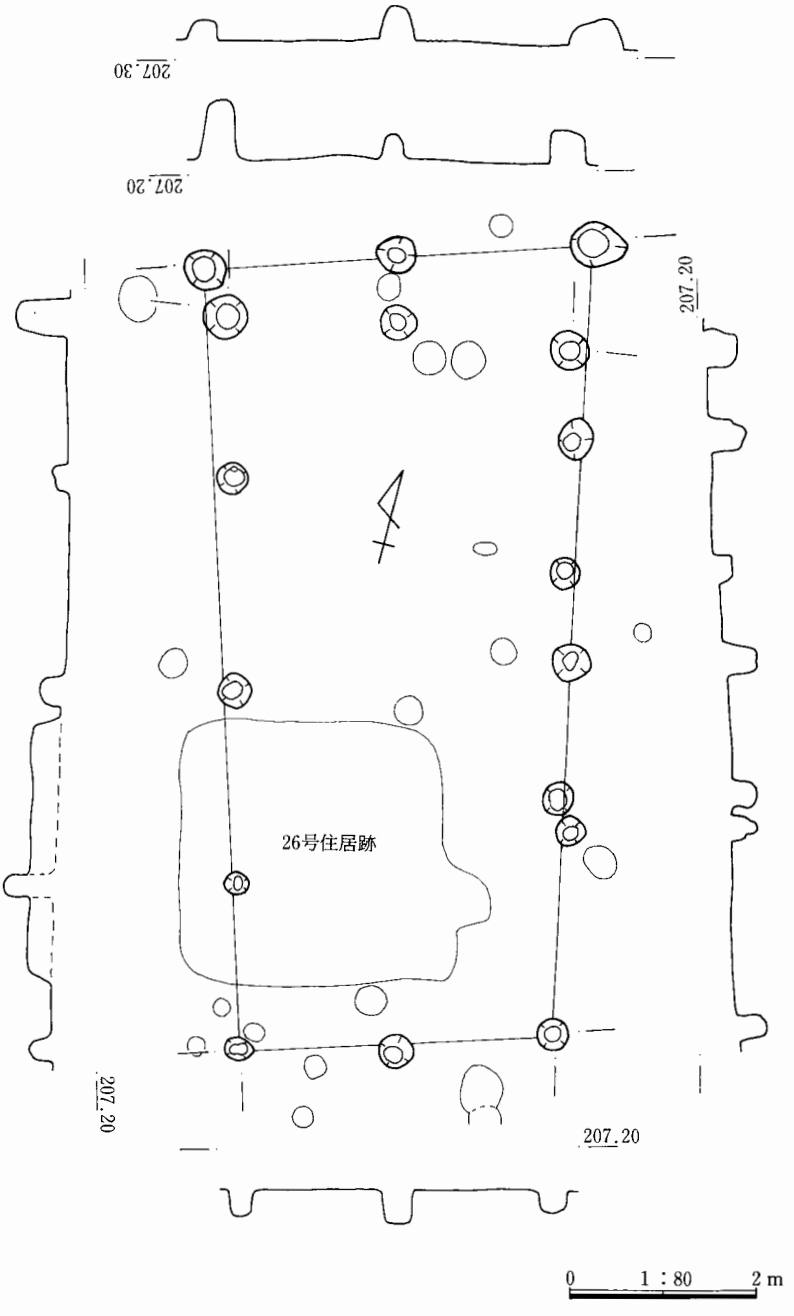
第74図　２Ａ・Ｂ号掘立柱建物跡　0　1：80　2m

方位はN－22°－Wである。柱穴の掘り方は4隅が円形状、間柱が隅丸方形状を呈する。径（一辺）50～60cm、深さ35～70cmを測る。

3号掘立柱建物跡

（PL12）

4－7グリッドを中心に位置する。26号住居跡と重複する。本建物跡周辺には多くの小ピットが検出されており、建て替え・重複等も考えられるため、明瞭には構造を把握できなかったが、もっとも可能性の高い一例として報告したい。なお、調査時点での認定と若干の相違点がある。南北に長い2間×4間の建物跡である。東西4.0m×南北8.3mを測り、東西11～13.5尺×南北27～27.5尺の企画で作られたものと思われる。方位はN－15°－Wである。柱穴の掘り方は円形を呈し、径25～50cm、深さ20～50cmを測る。



第75図　3号掘立柱建物跡

4A号掘立柱建物跡（PL12）

9・10－12グリッドに位置する。4B号掘立柱建物跡・15号住居跡と重複する。15号住居跡との重複その他の理由により西側は不明であるが、南北に長い2間×3間の建物跡と思われる。柱間の距離は南辺4.4m×東辺6.36mを測り、14～15尺×21尺の企画による建物と思われる。東辺の方位はN－6°－Wである。柱穴の掘り方は不正円形が多いが、方形のものもみられる。径50cm前後、深さ25～60cmを測る。

4B号掘立柱建物跡

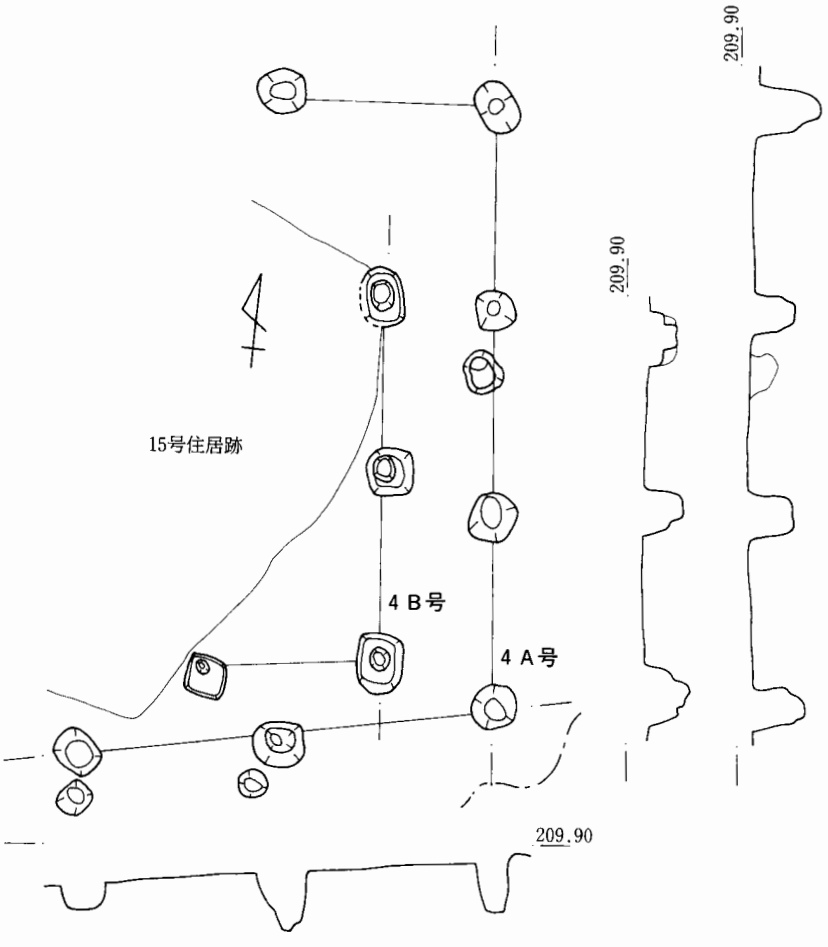
4A号掘立柱建物跡の内部に位置する。15号住居跡との重複により、東辺と南辺の一部が判明しただけである。建物の規模は不明であるが、2間×2間の可能性が強い。東辺は柱間の距離3.8mを測り、12～13尺の

企画と思われる。東辺の方位はN－6°－Wで、4A号掘立柱建物跡と同じである。柱穴の掘り方は、残存する部分では隅が長方形、間柱が正方形状となっており、柱痕部分をさらに深く円形に掘り下げている。径40～60cm、深さ30～50cmを測る。

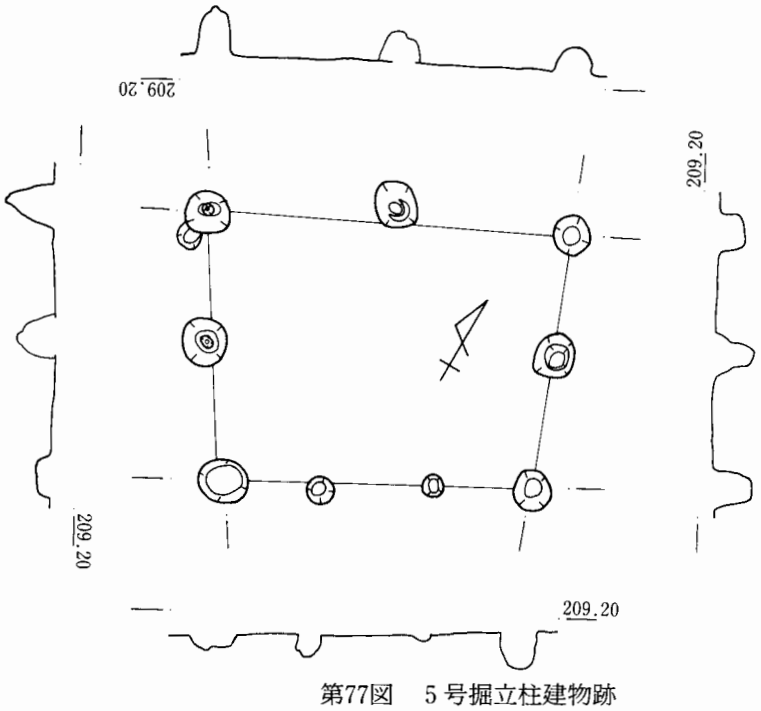
5号掘立柱建物跡

（PL13）

8－11グリッドに位置する。重複する遺構はない。柱間の距離で東西3.8m×南北2.92mを測るが、南辺が北辺よりかなり短いため、東西に長い台形状を呈する。基本的には2間×2間の建物と思われるが、南辺は他に比し小規模な間柱を用いた3間となっており、ここに入口などの施設を設けていた可能性がある。各柱間の距離はかなり偏差が大きいが、北辺12.5尺、南辺11尺、南北9～10尺の企画で構築されたものと思われる。柱穴の掘り方は円形状で、径40～50cm、深さ10～50cmを測るが、南辺の間柱は径20～30cmである。



第76図　4A・B号掘立柱建物跡



第77図　5号掘立柱建物跡

6号掘立柱建物跡（PL13）

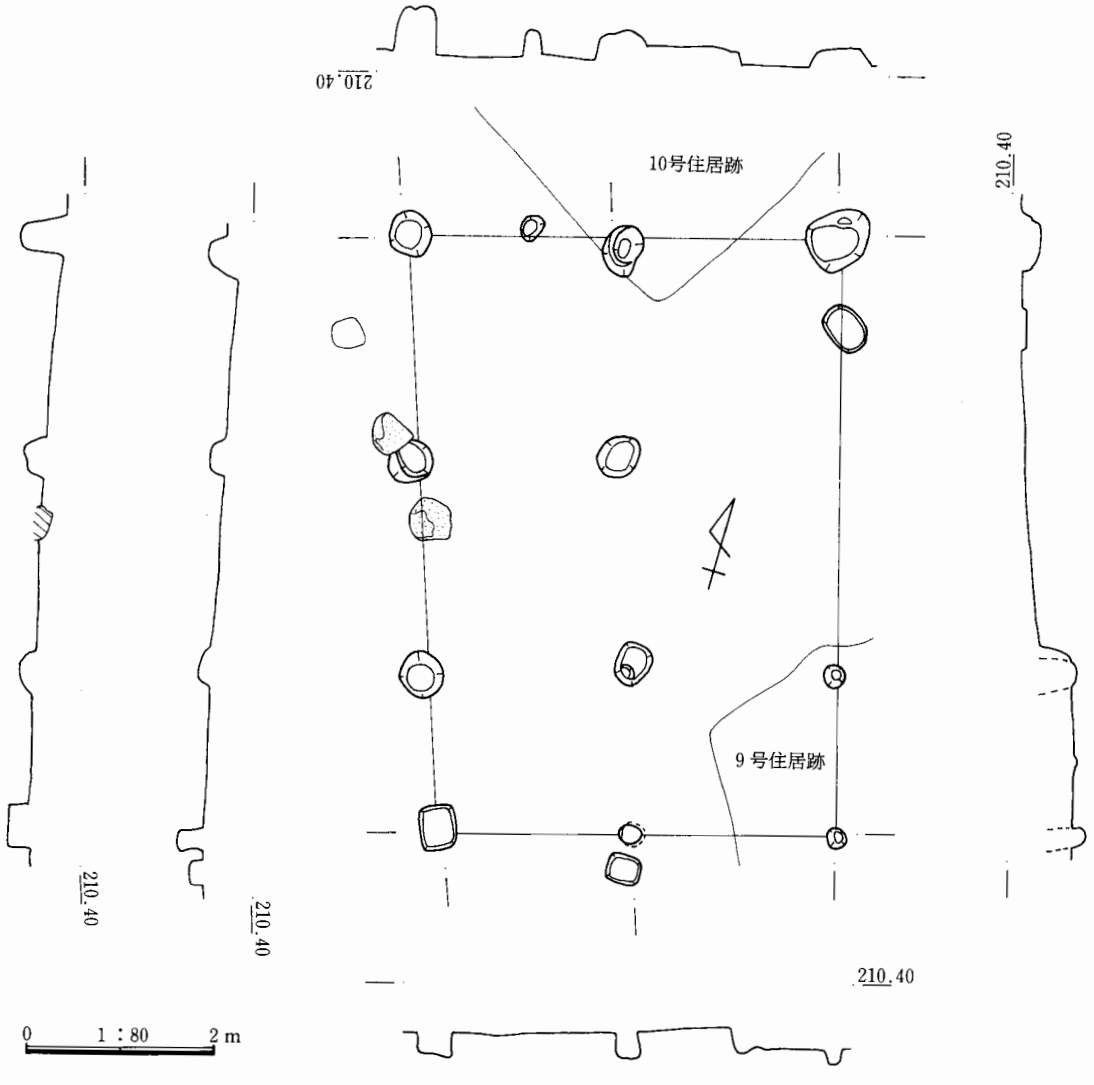
12－12杭を中心に位置する。古墳時代の9・10号住居跡と重複し、いずれよりも新しいと思われる。

南北に長い2間×3間の総柱建物跡と思われるが、東辺に間柱が1本検出されていない。柱間の距離は東西4.5m×南北6.3mを測る。東西14～15尺、南北21尺の企画で建てられたものと思われる。方位はN－17°－Wである。柱穴の掘り方は不正円形が多いが、方形のものもある。検出面の落差が大きく径20～70cm、深さ20～40cmとばらついている。

7号掘立柱建物跡（PL12）

6－7グリッドに位置する。20号住居跡と重複する。

南北に長い2間×3間の建物跡であり、比較的整った長方形状を呈する。東西3.5m×南北4.7mを測る。東西12尺×南北15尺の企画で建てられたものと思われる。方位はN－19°－Wである。柱穴の掘り方は一定していない。径35～60cm、深さ20～40cmを測る。



第78図　6号掘立柱建物跡

8A・B号掘立柱建物跡

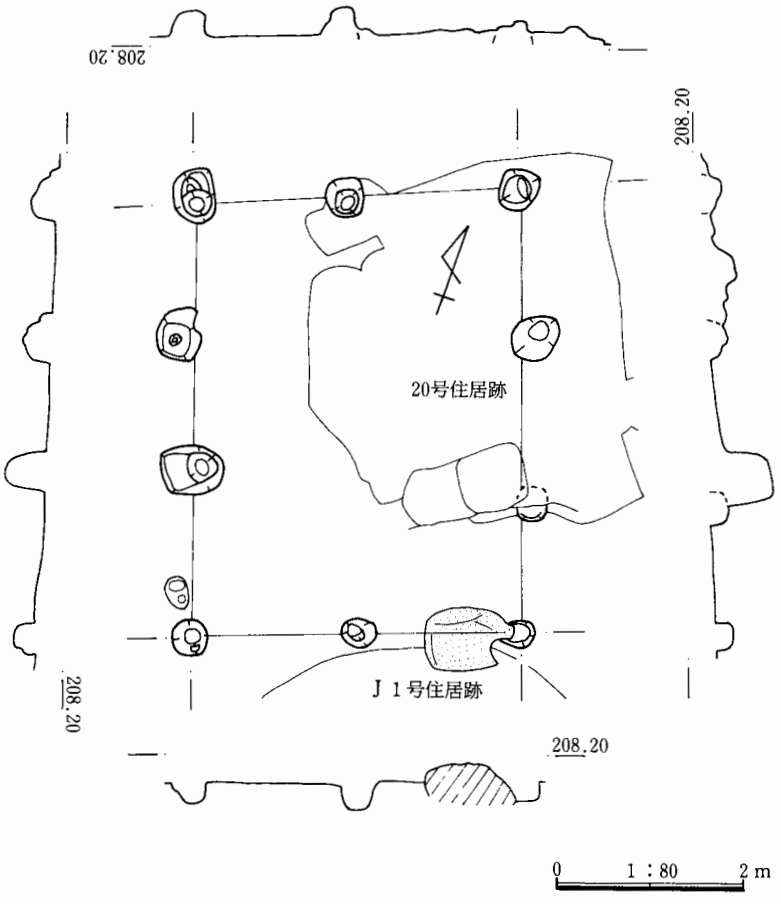
8A・B号掘立柱建物跡については、部分的な調査に留まったこともあり、調査時点では掘立柱建物跡として認識しなかったが、整理時点において柱穴の配列や掘り方を検討した結果、掘立柱建物跡として報告することにした。

8A号掘立柱建物跡

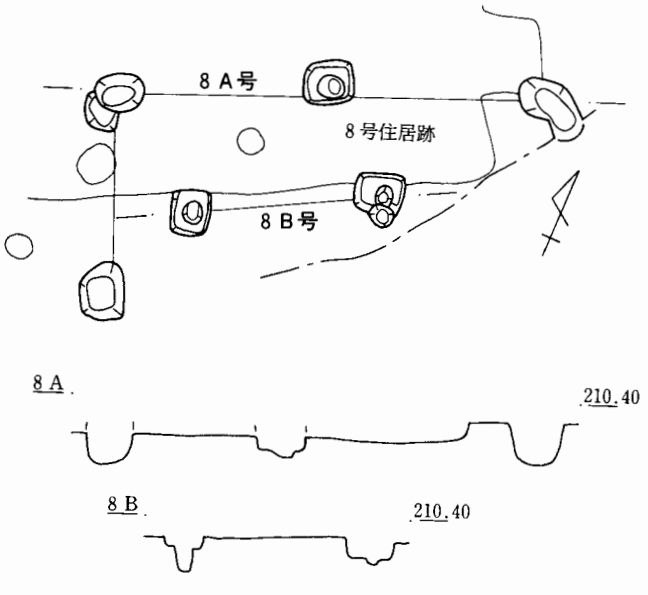
10－13グリッドに位置する。8号住居跡と重複し、本建物跡のほうが新しい。また、8B号掘立柱建物跡とも重複するが、新旧関係は不明である。さらに柱穴が重複しており、建て替えの可能性もある。東・南側は道路工事の際に削平されており、北辺と西辺の一部が調査できただけである。東側は不明なものの、東西2間で、南北は2～3間の建物跡と思われる。柱間の距離は北辺は4.56mで約15尺、西辺は残存柱間で2.0m、約6.5尺である。方位は北辺の直交軸でN－24°－Wである。柱穴の掘り方は長円形や方形のものが混在する。径40～60cm、深さ50cm前後を測る。

8B号掘立柱建物跡

東・南側は削平されている為、柱穴2本だけの検出であり、規模・形状等は不明である。柱穴間の距離は2.0m、約6.5尺である。柱穴を結んだ線の直交軸の方位はN－28°－Wである。柱穴の掘り方は長方形状で、短辺40cm×長辺50cm、深さ20cm前後を測る。柱痕部の深さは5.2cmである。



第79図　7号掘立柱建物跡



第80図　8A・B号掘立柱建物跡

(2)　土坑・ピット（観Ｐ83・84、ＰＬ9・13・14、24）

1号土坑－位置：４・５－５グリッド　　平面形状：長方形　　規模：東西2.3×南北2.0m×深さ100cm
長軸方位：Ｎ－36°－Ｗ　　遺物：なし　　備考：中段より上は開く。

2号土坑－位置：３－５グリッド　　平面形状：長方形　　規模：東西1.9×南北1.6m×深さ65cm
長軸方位：Ｎ－62°－Ｅ　　遺物：なし

3号土坑－位置：３－６グリッド　　平面形状：長方形　　規模：東西1.9×南北1.6m×深さ70cm
長軸方位：Ｎ－62°－Ｅ　　遺物：脚付き小型甕

4号土坑－位置：２－４グリッド　　平面形状：ほぼ正方形　　規模：東西2.7×南北2.7m×深さ100cm
長軸方位：Ｎ－67°－Ｅ　　遺物：なし

5号土坑－位置：13－12グリッド　　平面形状：辺の丸い方形　　規模：軸長1.3×1.3m×深さ60cm
遺物：坏　　重複関係：なし　　埋土：ＦＡを多量に含む。

6号土坑－位置：13－13グリッド　　平面形状：円形　　規模：径約2.3m×深さ80cm
遺物：坏・甕　　重複関係：２号住居跡

7号土坑－位置：13－13グリッド　　平面形状：長円形？　　規模：長径1.8×短径1.0m×深さ14cm
遺物：なし　重複関係：１・２号住居跡

8号土坑－位置：12－14グリッド　　平面形状：長円形　　規模：長径1.15×短径0.8m×深さ30cm
遺物：なし　重複関係：５・６号住居跡

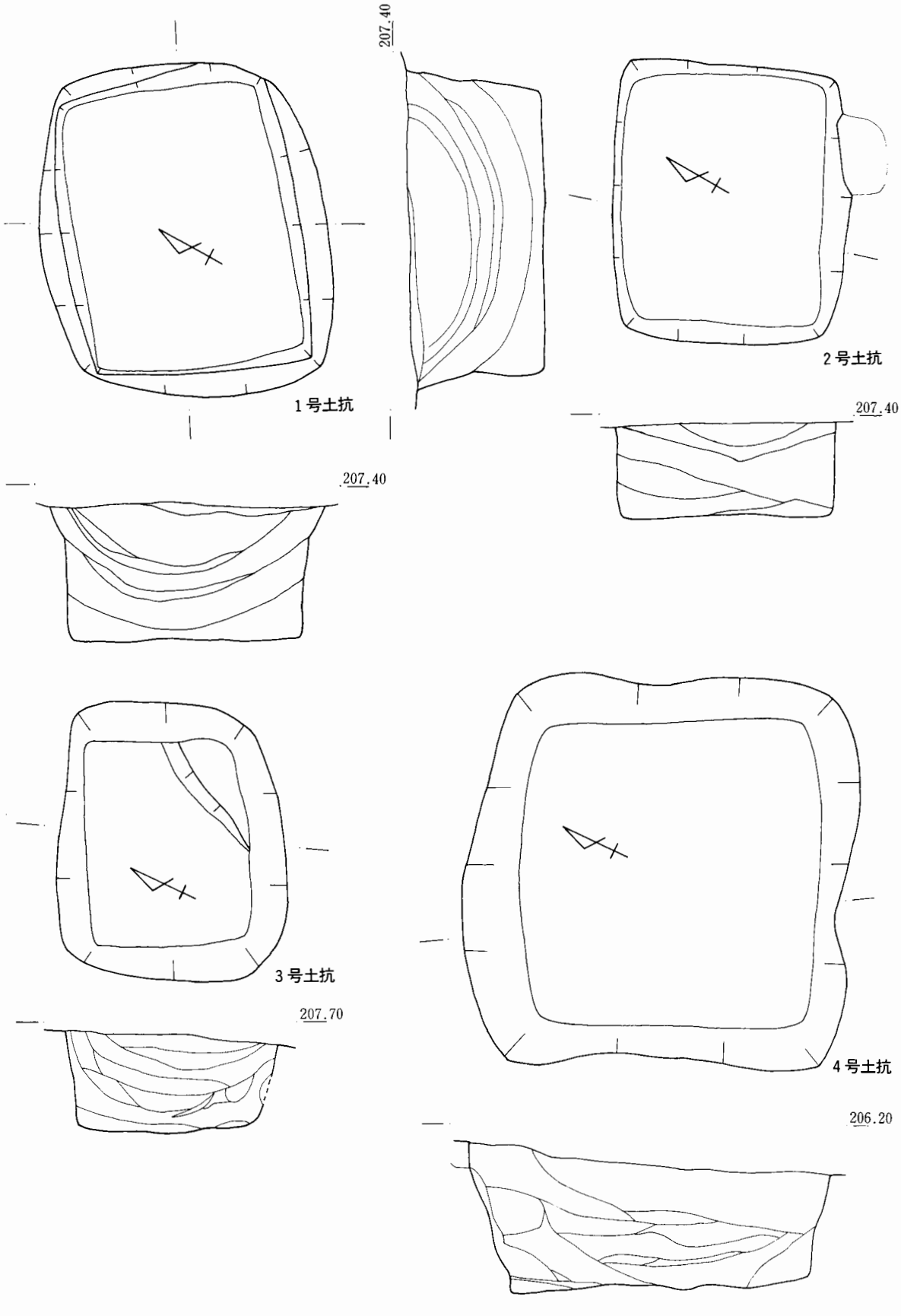
9号土坑－位置：10－12グリッド　　平面形状：円形　　規模：径約1.0m×深さ15cm
遺物：なし　　重複関係：（２号掘立柱建物跡）　埋土：ＦＡ主体

10号土坑－位置：５－８グリッド　　平面形状：長方形　　規模：長軸1.1×短軸0.6m×深さ20cm
遺物：須恵器埦　　重複関係：なし

11号土坑－位置：５－８グリッド　　平面形状：長方形？　　規模：長軸？×短軸0.6m×深さ20cm
遺物：なし　　重複関係：12Ａ・Ｂ号土坑、ピット

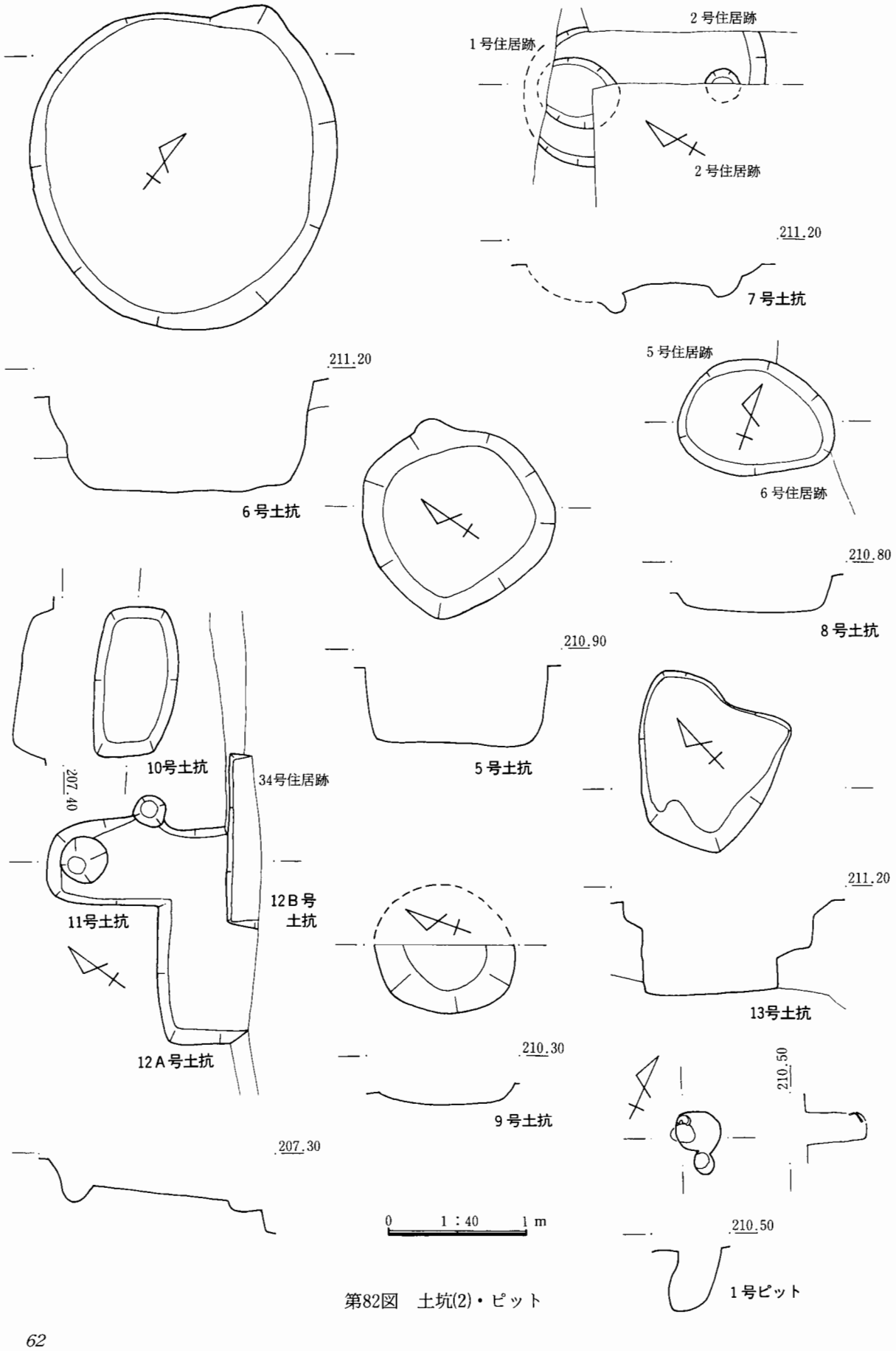
12Ａ号土坑－位置：５－８グリッド　　平面形状：長方形？　　規模：不明
遺物：なし　　重複関係：34号住居跡、12Ｂ・11号土坑

（65ページに続く）



第81図　土　坑(1)

0　1：40　1m


1号住居跡
2号住居跡
2号住居跡
211.20
7号土抗
211.20
6号土抗
5号住居跡
6号住居跡
210.80
8号土抗
210.90
5号土抗
10号土抗
34号住居跡
207.40
12B号
土抗
11号土抗
12A号土抗
207.30
211.20
13号土抗
210.30
9号土抗
210.50
210.50
1号ピット
0　1：40　1m

第82図　土坑(2)・ピット

(3) 溝

1号溝

（観P83、PL14）

13－13グリッドから13－14グリッドを中心に位置する。13－14グリッドで調査区域外へと伸び、12－12グリッドの調査区域内で消滅する。2号住居跡と重複し本跡が新しい。2号溝・6号土坑とも重複するが、新旧関係は不明である。

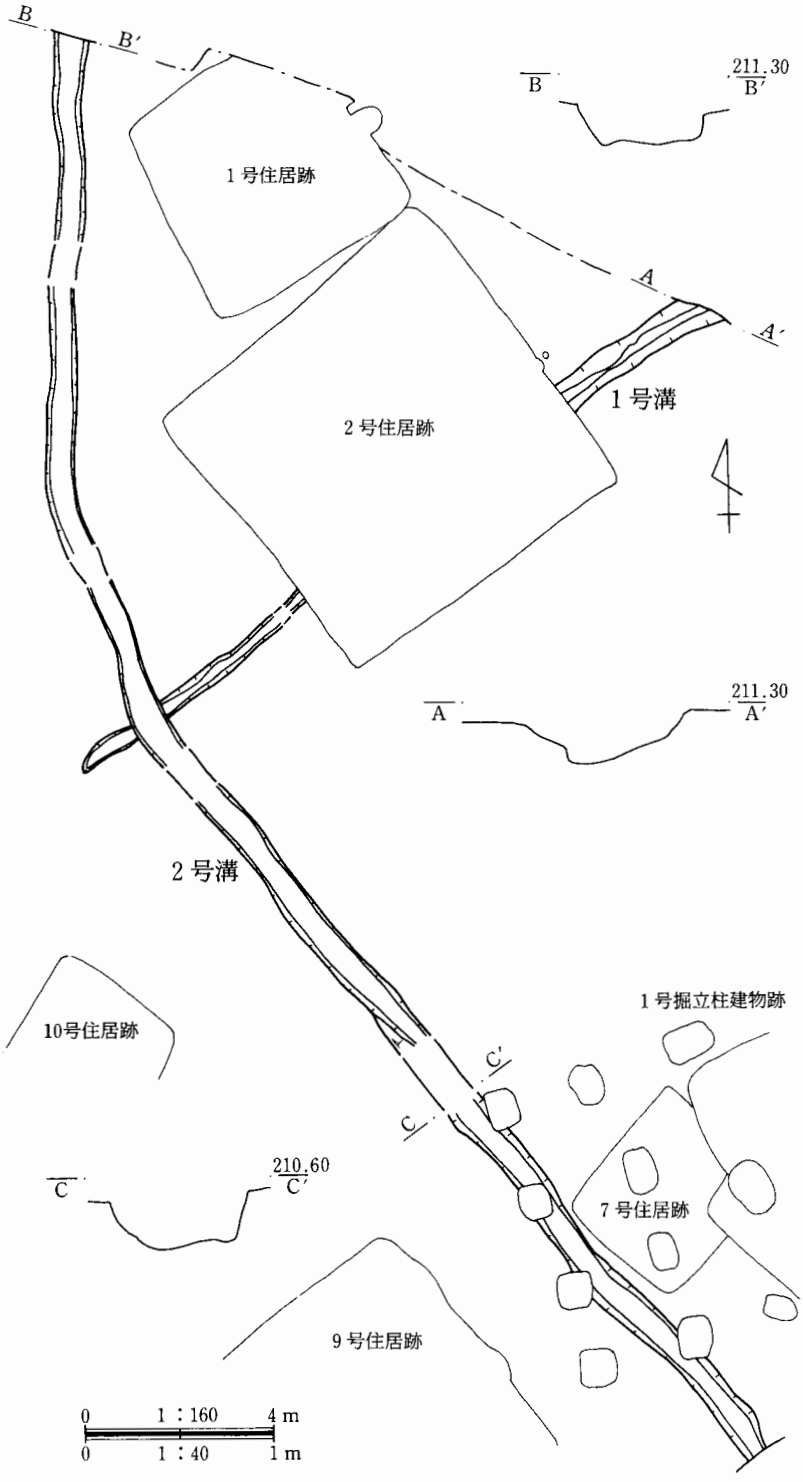
最大幅約70cm、検出面からの深さ30cmを測る。ほぼ直線的に掘削されており、約16mの距離を調査した。方位はほぼN－55°－Eである。

遺物は土器破片が少量出土しただけであるが、時期は古墳時代に限られることから、本跡の時期は古墳時代に属すると思われる。

2号溝

（観P83、PL14）

調査区域の北東端部14－12グリッドから11－14グリッドにかけて位置する。両端部ともに調査区域外に伸びている。1号掘立柱建物跡と重複し、本跡が古い。



第83図　1、2号溝

14－12グリッドから13－12グリッドにかけてほぼ南北（N－3°－E）の走行で掘削され、2号住居跡の南西で屈曲して、南東方向（N－38°－W）に走向を変えている。

幅約60～70cm、深さ約30cmとほぼ一定の規模で掘削されている。距離は約34mを測る。

遺物は1号溝と同様に土器破片が少量出土しただけであるが、やはり時期が古墳時代に限られることから本跡の時期も古墳時代と思われる。

3号溝（観P84、PL14・24）

11－13グリッドから10－11グリッドにかけて位置する。東側の端部は9号住居跡中から始まっており、西側は15号住居跡の脇で消滅している。東側が最も深く、幅広く、西に行くに従って規模が漸減する。8号住居跡とも重複するが、わずかであるため新旧関係は不明である。

東端の最大部で幅1.0m、深さ40cmを測る。距離は約24mである。北東半部は曲折しているが、南西半部は多少の屈曲はあるものの、概ねN－48°－Eの走向を示す。

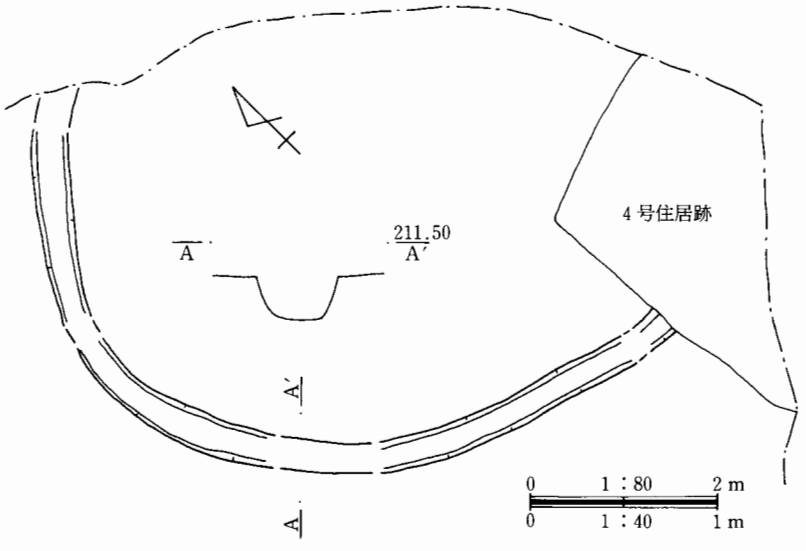
遺物は比較的多量に出土しており、土師器坏・甕、須恵器坏・埦・蓋などがある。遺物の時期は古墳時代～平安時代であるが、主体は平安時代であり、本跡の時期も該期に属すると思われる。

4号溝（PL14）

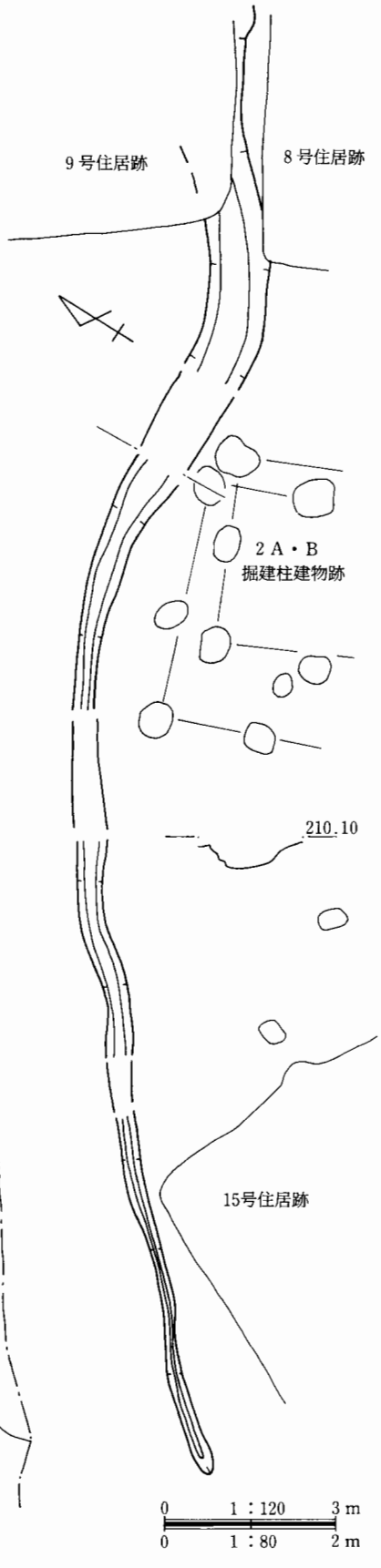
13－14グリッドに位置する。4号住居跡と重複するが、新旧関係は判然としない。北端部は調査区域外へ伸びている。溝の巡る周辺は、わずかな高まりが認められている。正円ではないものの、全体が孤を描いており、いわゆる円形周溝状遺構と呼称されている遺構の可能性がある。

幅50cm、深さ20cmを測り、ほぼ一定の掘り方である。円形に巡るとすると、径は7m強である。

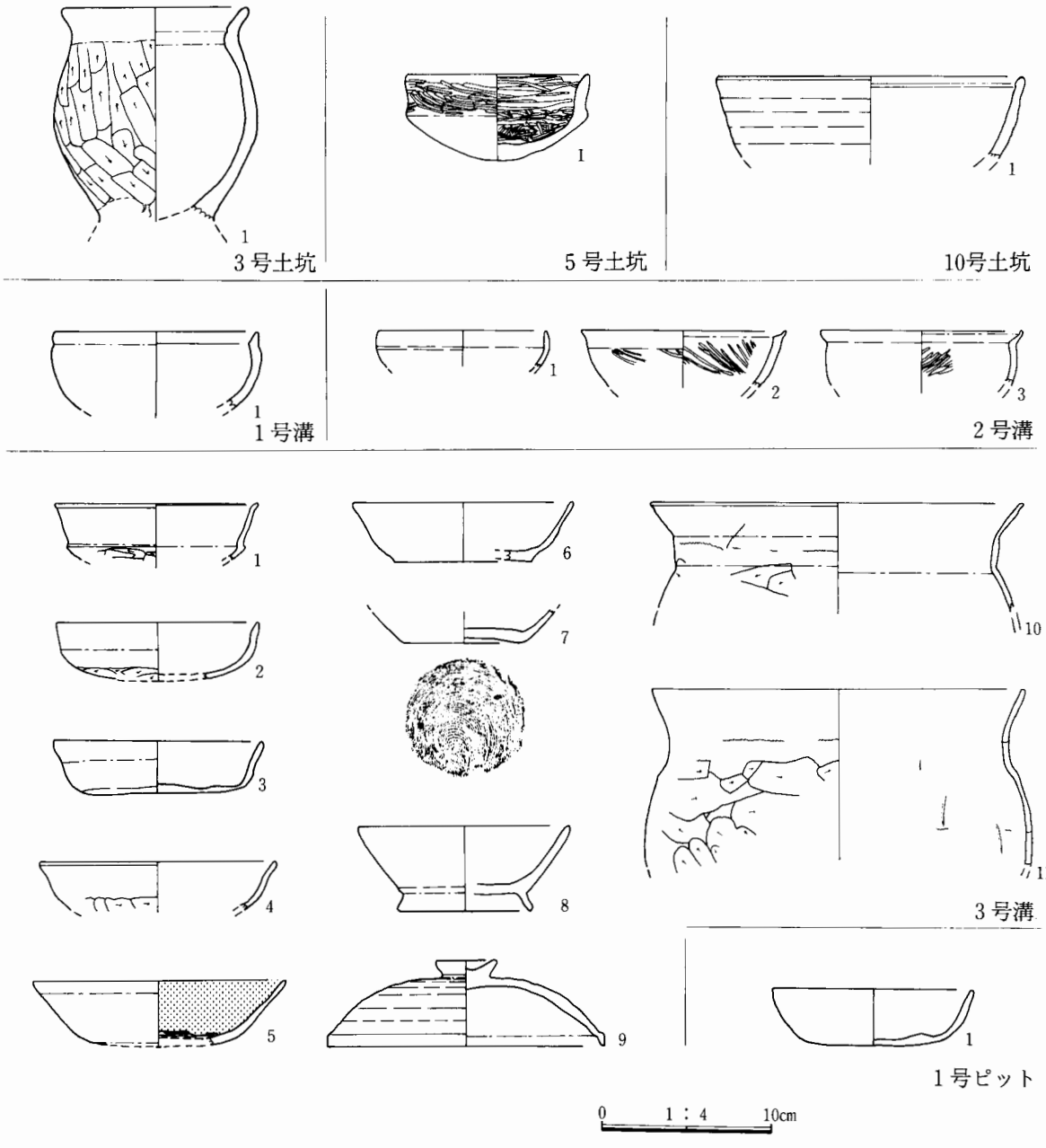
遺物は出土していない。



第85図　4号溝



第84図　3号溝



第86図　掘立・土坑・ピット・溝・出土遺物

12B号土坑－位置：５－８グリッド　　平面形状：長方形？　　規模：1.2×？m×深さ50cm
遺物：なし　　重複関係：34号住居跡、12A・11号土坑

13号土坑－位置：14－12グリッド　　平面形状：台形　　規模：東西1.1×南北1.1m×深さ70cm
遺物：なし　　重複関係：３号住居跡

１号ピット－位置：11－13グリッド　　平面形状：円形　　規模：径0.3m×深さ40cm
遺物：坏　　重複関係：なし

遺物観察表　古墳時代の竪穴住居跡

1号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	西壁際床直 1/2	口：14.2 高：5.3	砂粒，赤色粒 にぶい黄褐色	内斜口縁、口縁は薄く先端は立ち気味。 外面：体部ヘラケズリ。 内面：体部密な放射状のミガキ。底部ナデ	破砕後二次焼成
2	坏 土師器	竈前面床直、 竈内 1/2	口：14.7 高：6.1	砂粒、礫少量 赤色鉱物多量 橙色	内斜口縁、口縁部は外傾。 外面：体部ヘラケズリ。 内面：体～底部ナデか？。(器面荒れて不鮮明)	破砕後二次焼成
3	坏 土師器	中央無床直 2/3	口：15.4 高：6.3	砂粒，赤色鉱物 橙色～灰褐色	内斜口縁、口縁部は外傾。 外面：体部ヘラケズリ後粗いヘラナデ。 内面：体～底部ナデ後放射状ヘラミガキ。	二次焼成 内面に大黒斑
4	坏 土師器	竈燃焼部 1/2	口：15.1 高：5.3	砂粒 にぶい橙色	内斜口縁、口縁部はわずかに外傾。 外面：体部上半ナデ、下半ヘラケズリ。 内面：体～底部ナデ後粗いミガキ。	二次焼成
5	坏 土師器	竈右袖脇床直 竈内 一部欠損	口：14.0 高：5.5	砂粒 にぶい橙色～ 灰褐色	浅い体部から口縁部が内湾する。 外面：体部ヘラケズリ後ミガキ。 内面：体～底部ナデ後粗い放射状ミガキ。	二次焼成 内外共底部に黒斑
6	坏 土師器	貯蔵穴縁床直 一部欠損	口：12.8 高：6.2	砂粒，赤色鉱物 赤褐色	口縁部内湾。 外面：体～底部ヘラケズリ後ミガキ。 内面：体部放射状ミガキ、底部一定方向ミガキ。	
7	坏 土師器	竈前面床直、 竈内 一部欠損	口：12.8 高：6.4	砂粒 橙色～浅黄橙色	底部は平底気味。口縁部は内湾気味。 外面：体部上半ナデ、下半～底部ヘラケズリ。 内面：ナデ	二次焼成 外面に煤付着 外面に接合痕
8	鉢 土師器	竈前面床直、 西壁際床直 1/2	口：13.5 高：(6.1)	砂粒 灰褐色～ にぶい橙色	口縁部は短く外傾。 外面：ヘラケズリ。 内面：ナデ。	
9	短頸壺 土師器	竈右袖脇床直 2/3	口：10.0 胴：13.2 高：10.1	砂粒、石英多量 橙色～灰褐色	丸みのある体部から口縁部が内傾して短く立つ。 外面：体部上半ナデ、下半～底部ヘラケズリ。 内面：体～底部ナデ。	二次焼成 底部外面に黒斑
10	甕 土師器	南西隅床直 1/4	口：15.7 高：(7.8)	砂粒 にぶい橙色	口縁部は弱い段があり、外傾する。 外面：胴部上端ヘラケズリ後ナデ。 内面：ヘラナデ。	
11	壺 土師器	竈前面床直 貯蔵穴縁床直 3/4	底：7.3	砂粒 橙色～灰褐色	底部は突出する。胴部（下半）は丸みがある。 外面：胴部ナデ後ミガキ、底部ナデ。 内面：胴部ナデ後ミガキ、底部ナデ。	外面に煤付着
12	甕 土師器	土手状区画遺 構内床直 1/2	口：16.7 胴：20.8 高：(23.0)	砂粒、白色粒 にぶい橙色	口縁部は外反。胴部は卵型。 外面：胴部ナデ後ミガキ。 内面：ヘラケズリ。	二次焼成 胴部外面に黒斑
13	甑 土師器	竈右袖脇床直 4/5	口：23.2 孔：9.6 高：22.0	粗砂、小礫 橙色～明赤褐色	胴部下半は孔部から直線的に大きく開き、上半は口縁部まで直線的にわずか外傾する。 外面：ハケナデ。 内面：胴部上半ヘラケズリ、下半ナデ。	円孔の中央に棒状粘土を架けた2孔 器面に凹凸が多い
14	紡錘車	埋土中	上径：2.1　下径：3.9　厚：1.8　重さ：28.7g		側面に縦方向の研磨痕。	滑石製、完形

2号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 3/4	口：14.6 高：5.4	砂粒、石英粒 橙色	内斜口縁、口唇部鋭く短く立ち上がる。 外面：体部ケズリ後ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：体～底部ナデ。	内面体部上半に剝落痕 6号土坑と接合
2	坏 土師器	南壁際床直 ほぼ完形	口：14.7 高：4.9	砂粒 橙色	内斜口縁、口唇部は比較的丸みがある。 外面：体～底部ヘラケズリ。 内面：体部ヨコナデ後放射状ミガキ、底部ナデ。	内面に剝落痕
3	埦 土師器	竈燃焼部 4/5	口：15.6 底：3.5 高：7.0	粗砂 にぶい橙色	口縁部は短く外反。底部はちいさな平底。 外面：体部ケズリ後ナデ、底部ナデ。 内面：体～底部ナデ。	内外面に少量のタール状付着物
4	鉢 土師器	竈右脇床直 1/2	口：18.6 底：6.2 高：9.1	砂粒 赤褐色	口縁部は内湾気味にわずか開く。底部は平底。 外面：体部ケズリ後ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：体部上半ヘラナデ、下半ヘラナデ後ミガキ	
5	手捏土器 土師器	竈焚口 完形	口：7.7 底：4.5 高：4.6	細砂粒 橙色	埦型。底部は平底。 外面：口縁部～体部ユビナデ、底部ナデ。 内面：ヘラケズリ後ナデ。	接合痕、粘土のヒビ割れが顕著
6	坩 土師器	中央部床上5cm 完形	口：12.0 胴：13.5 高：15.6	粗砂、石英粗粒 浅黄橙色	わずか扁平な球形胴、口縁部の立ち上がり下端に稜を有する。 外面：胴部ナデ、胴部下端～底部ヘラケズリ。 内面：胴部～底部ナデ、胴部上端にユビオサエ。	
7	甑 土師器	竈右袖脇床直 完形	口：19.0 底：6.9 孔：1.7 高：13.2	粗砂多量 赤色鉱物 橙色～浅黄橙色	鉢型。わずか内湾するが、直線的に開く。 外面：体部ヘラケズリ（後ナデ）、 内面：体～底部ナデ、体部立ち上がり部分ユビオサエ。	胴部外面が剝落・摩耗 焼成前穿孔
8	甑 土師器	北東柱穴脇床直 ほぼ完形	口：18.4 胴：24.8 底：9.8 高：26.4	砂粒、石英粒 浅黄橙色	胴部の立ち上がりは直線的で、上半部は丸みがある。口縁部は一旦直に立ち上がり外反する。 孔は甕の底部を打ち欠いた焼成後の穿孔。 外面：ナデ。内面：ナデ。	胴部外面に黒斑 1孔
9	甑 土師器	東壁際床上5cm ほぼ完形	口：19.8 胴：20.5 孔：9.0 高：25.9	砂粒 浅黄橙色	長卵型。口縁部は短く外傾。 外面：胴部ケズリ後ナデ、底部ナデ。 内面：ナデ。	焼成後穿孔もしくは孔拡大か？ 黒斑 1孔
10	甕 土師器	南壁際床直 1/2	口：16.6 胴：22.0 高：(21.8)	細砂粒 にぶい黄橙色～褐灰色	卵型の胴部から口縁部が直立気味にわずか外傾。 外面：ケズリ後ナデ。 内面：ナデ。	二次焼成 胴部内面に黒色付着物
11	小型甕 土師器	竈右袖脇床直 完形	口：13.4 胴：13.9 底：5.0 高：15.0	砂粒、粗砂少量 にぶい橙色	胴部は球形。底部は突出気味。平底。口縁部は直線的に外傾。 外面：胴部ナデ、底部ケズリ後ナデ。 内面：胴～底部ナデ。	歪み大きい 二次焼成
12	小型甕 土師器	左袖脇床直 口縁端部欠損 ほぼ完存	口：(14.4) 胴：15.2 底：5.9 高：15.2	砂粒 にぶい橙色	球形の胴部から平底の底部が短く突出。 外面：胴部ナデ、底部ケズリ後ナデ。 内面：胴部上半ナデ、下半ケズリ後ナデ。	口縁端部打ち欠き
13	小型甕 土師器	貯蔵穴 ほぼ完形	口：13.6 胴：15.4 底：4.6 高：17.4	砂粒少量 浅黄橙色～黒褐色	卵型の胴部から底部が短く突出。底部中央が凹む 口縁部はわずかに外傾。 外面：胴部ナデ後ミガキ。底部ナデ。 内面：胴部ナデ後ミガキ。	二次焼成

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
14	壺 土師器	貯蔵穴 胴部下半 5/6	胴：22.2 底：6.7	砂粒少量 赤色鉱物 橙色～浅黄橙色	扁平気味な球形胴部から底部が短く突出。平底。 外面：胴部ナデ後密なミガキ。底部ナデ。 内面：胴部ケズリ後ナデ。底部ナデ。	胴部外面中位に黒斑
15	甕 土師器	竈右袖脇床直 2/3	口：16.3 胴：19.4 高：(18.0)	砂粒 にぶい黄橙色～ 橙色	卵型の胴部から口縁部が外傾。 外面：頸部ハケナデ後ナデ、胴部上半ナデ、下半ハケナデ。 内面：胴部ハケナデ後下半をナデ。	破砕後二次焼成
16	甕 土師器	竈燃焼部 3/4	口：16.6 胴：23.1 底：7.4 高：29.2	砂粒 橙色～暗赤褐色	胴部は長卵型であるが、下半は丸みが少ない。底部は平底で若干突出する。口縁部は外反。 外面：胴部ケズリ後ナデ。底部ケズリ後ナデ。 内面：胴部上半ナデ、下半ヘラナデ、底部ケズリ	
17	甕 土師器	東壁際床直 完形	口：15.9 胴：21.7 底：6.3 高：27.6	粗砂、赤色鉱物 橙色～黒褐色	胴部は長卵型。底部は突出気味の平底。口縁部は急角度で外反。 外面：胴部上端ナデ、他はケズリ、底部ケズリ。 内面：胴部ナデ。	内外面煤付着 黒斑 二次焼成
18	甕 土師器	南壁際床上5cm 完形	口：18.3 胴：26.3 底：7.0 高：28.6	粗砂 にぶい赤褐色～ 暗赤褐色	球形胴部から底部が突出。口縁部は外反気味。 外面：胴部上半ケズリ後ナデ、下半ケズリ後ミガキ、底部ケズリ。 内面：胴部ナデ後ミガキ、底部ナデ。	胴部中央外面に帯状に煤付着 胴部中央内面に黒斑
19	壺 土師器	竈燃焼部 4/5	口：(20.1) 胴：32.8 高：(36.0)	粗砂、石英粒 浅黄橙色～ にぶい橙色	球形胴部であるが下半は伸び気味。底部は突出し中央部が凹む。口縁部は一旦外反し、中位から直線的に立つ。 外面：胴部上端ナデ、他はケズリ後ナデ。 内面：胴部ナデ。	胴部外面中央に帯状に煤が付着 内外面ともに剝落痕がある

3号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	貯蔵穴脇床直 ほぼ完形	口：11.6 高：5.6	粗砂、白色粒 浅黄橙色	浅い体部から口縁部が内湾。 外面：体～底部ヘラケズリ後ナデ？ 内面：体部ナデ後放射状ミガキ、底部丁寧なナデ	二次焼成
2	坏 土師器	FA上層中 1/4	口：11.4 高：5.5	砂粒 橙色～赤褐色	口縁部は内湾気味で口唇部は鋭角的。 外面：体部ケズリ後ナデ。 内面：口縁～体部ヨコナデ後ミガキ、底部ナデ。	
3	坏 土師器	貯蔵穴脇床直 2/3	口：12.8 高：4.7	細砂粒 橙色～暗赤褐色	口縁部は内傾気味に短く立つ。器壁は厚い。 外面：体～底部ナデ。(ケズリの可能性がある) 内面：体～底部ナデ。	黒斑 器面荒れている。
4	甑 土師器	埋土中 一部欠損	口：20.1 胴：21.2 高：21.4 孔：8.9	粗砂、赤色鉱物 浅黄橙色～ にぶい橙色	胴部は上下2段に稜があるが概ね卵型。口縁部は直線的に外反。 外面：胴部ケズリ。 内面：胴部上半ケズリ、下半ハケナデ後一部ナデ	黒斑 破砕後二次焼成

6号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	床直 2/5	口：12.0 高：2.7	砂粒 浅黄橙色～ 褐灰色	器高低く、口縁部はわずか外反気味に開く。 外面：体～底部ナデ。 内面：体～底部ナデ。	黒色付着物あり
2	高坏 土師器	貯蔵穴 3/5	口：13.4 脚：10.6 高：8.4	黒色・白色細粒 橙色	坏部は一旦内湾気味に開き、中位の段を経てさらに外反気味に開く。脚部はハの字状に開き裾先端はほぼ水平におれる。 外面：坏体部ケズリ後ナデ、脚部ナデ、ヨコナデ 内面：坏体部ナデ、脚柱部ユビナデ、ユビオサエ	坏部外面に黒色付着物あり 脚部内面に黒斑
3	高坏 土師器	床直 1/5	口：16.0 高：(9.9)	粗砂少量、石英粗粒、白色粗粒 にぶい橙色	坏部は底部から稜を経て直線的に大きく開く。 外面：全体的にナデか？ 内面：坏部ナデ、脚柱部ユビナデ。	全体的に黒色付着物あり

9号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	左袖脇ピット 1/3	口：12.4 高：5.3	粗砂、赤色粒 橙色	底部～体部丸みをもち、口縁部内湾する。 底部外面ヘラケズリ、他はナデ、ヨコナデ。	
2	坏 土師器	北東隅床直 1/3	口：12.0 高：(4.5)	粗砂、石英粗粒 赤色粒 橙色	底部丸底。口縁部の中位に弱い稜を持つ。 底部外面ヘラケズリ、他はナデ、ヨコナデ。	二次焼成 煤付着
3	坏 土師器	北西柱穴脇 1/5	口：12.0 高：4.0	粗砂、石英粗粒 赤色粒 橙色	底部と口縁部の境に段がある。口縁部外反気味。 底部外面ヘラケズリ、他はナデ、ヨコナデ。	
4	坏 土師器	埋土中 1/6	口：12.0 高：(4.9)	粗砂、赤色粒 赤褐色	底部と口縁部の境の稜は鋭い。口縁端部は鋭く外側に張り出す。 底部外面ヘラケズリ、他はナデ、ヨコナデ。	
5	高坏 須恵器	貯蔵穴 坏部1/3	口：16.0	黒色粒、白色粒 小礫 灰色	口縁部は弱く外反。体部上端に波状文。 体部内外面ともに回転ナデ。左回転。	還元炎焼成。 硬質。
6	高坏 須恵器	貯蔵穴 脚柱部1/3		砂粒、黒色粒 灰色	脚柱部内外面回転ナデ。	外面に沈線 窓数は3か
7	甕 土師器	埋土中 口縁部1/3	口：17.2	粗砂、白色粒、 赤色粒 橙色	口縁部は外反気味に開く。 胴部内外面ともナデ。	
8	壺 土師器	竈前面床直 口縁部1/2	口：15.3 胴：14.7	砂粒、赤色粒 にぶい橙色	口縁部は下半でほぼ直立し、上半で外反する。 胴部：外面ナデ後ミガキ、内面ナデ。	
9	小型甕 土師器	南東柱穴脇 北西柱穴脇 口～胴部1/3	口：14.7 胴：16.1	粗砂 にぶい黄橙色～ 明赤褐色	口縁部は外傾して立ち、中位からさらに外傾する 胴部は長卵型。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	胴部外面に黒斑 二次焼成
10	甕 土師器	南壁際床面下 口縁部1/2	口：19.7	粗砂多量 浅黄橙色	口縁部は外反する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	
11	甕 土師器	西壁際床面 胴～底部3/4	底：6.7 胴：19.0 高：(20.0)	粗砂、赤色粒、 白色粒 橙色	底部は平底。胴部は長卵型。 胴部内外面ともヘラケズリ後ナデ。 底部ヘラケズリ。	胴部外面に黒斑

10号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土 1/5	口：14.0 高：5.0	粗砂、赤色鉱物 にぶい黄橙色	内斜口縁。口縁部の器厚は薄く先端は鋭い。 外面：体部下半～底部ケズリ後ナデ、上半ナデ。 内面：体部上半ナデ後ミガキ、下半～底部ナデ。	体部外面中央に黒斑あり
2	坏 土師器	床直 4/5	口：14.0 高：5.9	粗砂、石英 にぶい黄橙色	内斜口縁。口縁部は直立気味で内側を面取りする 外面：体部ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：体～底部ナデ。	表面摩耗 二次焼成
3	坏 土師器	床直 ほぼ完形	口：14.3 高：5.9	砂粒、白色粒 橙色～赤褐色	口縁部はわずか外反。 外面：体部上半ナデ、下半～底部ケズリ後ナデ？ 内面：ナデ後粗い放射状ミガキ。	底部外面に黒色付着物あり 底部焼成後穿孔？
4	坏 土師器	竈～東壁間 3/4	口：13.8 高：5.7	砂粒、赤色鉱物 にぶい橙色	器厚の変化が激しい。 外面：体部ケズリ後ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：ヘラケズリ後ナデ。	
5	坏 土師器	床直 1/4	口：11.8 体：13.6 高：6.9	砂粒少量 赤色鉱物 橙色	全体的に丸みがあり口縁部は内湾。 外面：ケズリ後密なミガキ。 内面：ナデ・ヨコナデ後縦ミガキ。	二次焼成
6	坏 土師器	埋土 1/4	口：13.0	砂粒 暗褐色～褐色	体部から稜を経て口縁部が直立気味に外反。 外面：体部ケズリ後ナデ。内面：全体ヨコナデ。	口縁部外面に黒斑
7	坏 土師器	埋土 1/5	口：12.0	砂粒、赤色鉱物 橙色	口縁部は外反気味に立ち上がる。 外面：体部ヘラケズリ。内面：体部ナデ。	体部外面に煤付着
8	小型壺 土師器	竈～東壁間床直 4/5	口：10.1 胴：12.2 高：9.7	砂粒少量 にぶい黄橙色～暗褐色	胴部は扁平気味の球形。口縁部は直立気味、底部は丸底か？ 外面：口縁部横ミガキ、体～底部不定方向ミガキ 内面：口縁部横ミガキ、体～底部斜ミガキ。	胴部外面に黒斑 胴部内面に黒色付着物あり
9	小型甕 土師器	南西隅床直 2/5	口：14.6 胴：18.0 高：15.0	砂粒、石英粗粒 にぶい黄橙色～にぶい褐色	扁平気味の球形胴部。底部丸底。口縁部は外傾。 外面：胴部下端～底部ケズリ。他はナデ。 内面：胴部～底部ナデ。	胴部外面広範囲に黒斑、黒色付着物 破砕後二次焼成
10	小型甕 土師器	竈右脇床直 4/5	口：14.6 胴：18.0 高：15.8	砂粒、白色粒 にぶい黄褐色～褐灰色	扁平気味の球形胴部。底部丸底。口縁部は外傾。 外面：胴部上半ケズリ後ハケナデ後ナデ、下半ケズリ後ナデ。 内面：胴部上半ハケナデ、下半～底部ナデ。	胴部外面広範囲に煤付着 胴部内面剝落多い
11	甑 土師器	南壁際床直～竈左脇 一部欠損	口：19.3 孔：7.3 高：19.1	砂粒 にぶい黄橙色	直立気味の胴部上半から口縁部がわずか外反。 外面：全体縦ハケナデ後口縁部ヨコナデ、胴部下半ナデ。孔縁ヨコナデ。 内面：胴部横ハケナデ後下半ナデ。孔縁ヨコナデ	破砕後に火熱 1孔
12	甑 土師器	南西隅床直 1/5	胴：19.0 孔：5.9	粗砂 にぶい黄褐色～淡黄色	長卵型。 外面：胴部ケズリ後上半ナデ、 内面：胴部ケズリ後ナデ。	1孔
13	甕 土師器	南西隅床直 3/4	口：16.4	粗砂 淡黄色	口縁部は肥厚し、弱く外反。 外面：ケズリ後ナデ。内面：ケズリ後ナデ。	
14	甕 土師器	竈右脇床直 胴～底部 完存	底：7.5 胴：23.0	粗砂、石英粗粒 にぶい黄橙色～にぶい褐色	胴部は卵型。底部は突出した平底で中央が凹む。 外面：胴部ナデ、底部ナデ。 内面：胴～底部ナデ。	胴部外面に黒斑 内面に煤と黒色付着物あり

11号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	壁際ピット中 ほぼ完形	口：14.2 高：5.1	粗砂 にぶい橙色	内斜口縁。口縁部は薄く鋭い。 外面：体～底部ケズリ後上半ナデ、底部ナデ。 内面：体部ナデ後ミガキ、底部ナデ。	内黒、剝落痕あり 黒色付着物 二次焼成
2	坏 土師器	竈右袖脇床直 ほぼ完形	口：14.5 高：5.4	粗砂 橙色	内斜口縁。 外面：ケズリ後体下端～底部ナデ。 内面：体部ナデ後ミガキ、底部ナデ。	内面剝落痕多い
3	坏 土師器	壁際ピット中 完形	口：15.4 高：5.0	粗砂 橙色	内斜口縁。口径に比し体部は浅い。口縁部短い。 外面：体部ナデ、底部へラケズリ。 内面：体部ナデ後ミガキ、底部ナデ。	
4	坏 土師器	壁際ピット中 ほぼ完形	口：12.2 高：5.6	粗砂 赤褐色	体部の開きは直線的。口縁部は短く内傾気味。 外面：体～底部ナデ。 内面：体部ナデ後放射状ミガキ、底部ナデ。	二次焼成 器壁厚い
5	坏 土師器	壁際ピット中 完形	口：12.3 高：5.7	粗砂 赤褐色	体部の開きは直線的。口縁部は短く内傾気味。 外面：体～底部ケズリ後ナデ。 内面：体部ナデ後放射状ミガキ(２本１組)、底部ナデ	底部中央に黒斑 内面に黒色付着物 補修痕あり
6	坏 土師器	竈右袖脇床直 完形	口：11.9 体：12.6 高：5.6	砂粒 橙色	口縁部～体部の境に弱い稜がある。 外面：体～底部ケズリ後ナデ。 内面：体部ナデ後粗い縦ミガキ。	二次焼成 底部内面摩耗
7	坏 土師器	壁際ピット中 完形	口：12.8 体：13.6 高：6.4	砂粒 橙色	深い体部から口縁部がわずか内傾。 外面：体～底部へラケズリ。 内面：ナデ後粗い放射状ミガキ。	煤付着 二次焼成
8	坏 土師器	竈右袖脇床直 一部欠損	口：13.6 体：14.7 高：5.8	粗砂 赤褐色～橙色	口縁部は短く、急激に内傾。 外面：体部上半ナデ、下半～底部ケズリ後ナデ。 内面：体～底部ナデ。	黒斑
9	坏 土師器	貯蔵穴上面 一部欠損	口：13.9 体：14.8 高：5.1	砂粒 にぶい赤褐色	口縁部は短く、内傾気味に立つ。 外面：ナデ後粗い横ミガキ。 内面：ナデ後粗いミガキ。	二次焼成
10	坏 土師器	壁際ピット中 ほぼ完形	口：11.5 体：12.5 高：5.5	砂粒 橙色	器壁薄く、口縁部は内湾。 外面：体～底部へラケズリ。 内面：体部ナデ後ミガキ。底部ナデ。	内面に剝落痕多い
11	坏 土師器	壁際ピット中 完形	口：12.5 体：13.3 高：5.6	砂粒 にぶい橙色	器壁は比較的厚く、口縁部は内湾。 外面：体～底部へラケズリ。 内面：体部ナデ後ミガキ。底部ナデ。	剝落痕あり 内面に黒色付着物
12	坏 土師器	ＦＡ上層中 2/5	口：10.7 体：11.8 高：8.3	粗砂 にぶい橙～褐色	全体的に丸みをもち深い。口縁部は弱く内傾。 外面：体～底部ハケナデ後ミガキ？ 内面：体～底部ナデ	煤付着
13	小型壺 土師器	竈右袖脇床直 一部欠損	口：10.0 胴：11.9 底：4.5 高：10.2	粗砂 黒色 (内面橙色)	胴部は扁平気味の球形。底部は平底。口縁部はわずか外反。口唇部は鋭角。 外面：胴部ケズリ後ナデ？、底部ナデ。 内面：胴～底部ナデ。	二次焼成
14	坩 土師器	竈右袖脇床直 完形	口：11.0 胴：12.4 底：3.5 高：12.1	砂粒 にぶい橙色～ 黒褐色	胴部は歪みのある球形。底部は小さな平底。口縁部は外傾。 外面：胴部ナデ、底部ナデ。 内面：胴部へラナデ。底部ナデ。	二次焼成

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
15	坩 土師器	貯蔵穴縁床直 2/3	口：8.9 胴：15.1 高：16.1	細砂粒少量 にぶい橙～橙色	胴部は扁平な球形。底部は丸底。口縁部は一旦直線的に開き上半で内湾気味となる。 外面：口縁部下半ナデ後縦ミガキ、頸部横ミガキ胴部上半横ミガキ、下半～底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ後ミガキ、胴部上半ユビナデ、下半～底部ナデ。	胴部外面に黒斑 底部内面に少量の炭化物 赤色塗彩の可能性あり
16	甕 土師器	13の上に重なる 完形	口：15.6 底：5.4 高：11.3 孔：1.4	砂粒少量 にぶい橙色	鉢型。底部は突出した平底、口縁部は短く外反。 外面：胴部ナデ、底部ケズリ後ナデ。 内面：胴部ケズリ後ナデ後粗い縦ミガキ、底部ナデ。	胴部外面に黒斑 焼成前穿孔 1孔
17	甕 土師器	竈前面床直 1/3	口：14.0 高：16.0 孔：1.2	粗砂 橙色	長めの胴部から口縁部がわずか外傾する。丸底。 外面：胴部下端～底部ケズリ、他はナデ。 内面：胴部上端～口縁部ハケナデ、他はナデ。	焼成前穿孔 1孔
18	甕 土師器	東壁密着床上 20cm 完形	口：21.7 高：23.5 孔：8.5	粗砂 にぶい橙色	胴部上半は直立気味、口縁部は短く外傾。 外面：胴部ヘラナデ後ミガキ、頸部1条横ミガキ 内面：胴部上半ヘラケズリ後ナデ後ミガキ、下半ケズリ後ナデ。	胴部外面に黒斑と煤付着
19	甕 土師器	壁際ピット脇 床直 完形	口：17.0 胴：22.0 底：4.9 高：27.8	砂粒 橙色～ にぶい赤褐色	卵型の胴部から上げ底気味の底部が突出。口縁部は外反気味。 外面：胴部ヘラケズリ、底部ケズリ。 内面：胴部ナデ、底部ナデ。	二次焼成
20	甕 土師器	竈前面床直・竈左袖脇・竈 4/5	口：17.5 胴：21.1 底：5.9 高：28.1	砂粒 にぶい橙色	卵型の胴部であるが、下半は直線的。口縁部は中位で折れる。底部は平底。 外面：胴部上半ナデ、下半ケズリ、底部ケズリ。 内面：ナデ。	胴部外面中央に黒斑
21	小型甕 土師器	竈前面床直 3/5	口：13.0 胴：18.0 底：6.8 高：21.7	砂粒少量 にぶい橙色	胴部は卵型。底部は突出気味。口縁部は外反気味 外面：胴部上半ハケナデ後ナデ、下半ナデ、底部ナデ 内面：ナデ。	二次焼成
22	甕 土師器	竈前面床直・竈左袖脇 4/5	口：18.4 胴：29.3 底：7.8 高：31.0	粗砂 橙～にぶい褐色	球形の胴部であるが、下半は直線的。口縁部は弱く外反する。底部は中央がわずか凹む。 外面：胴部ケズリ後ナデ、底部ケズリ後ナデ。 内面：ナデ。	二次焼成 胴部外面に剝落痕
23	石製模造品	床面密着	長さ2.4、幅1.8、厚さ0.45、孔径0.2、重さ3.7g孔は表裏から穿つ。			滑石製完形
24	石製模造品	床面密着	長さ3.9、幅2.7、厚さ0.5、孔径0.2～0.5、重さ8.0g研磨痕あり。 孔の脇に未通孔あり。石材質粗悪。			滑石製完形

12号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	南東ピット脇 床直、3/4	口：12.8 高：5.1	粗砂、赤色粒 橙色	内斜口縁。口縁部は薄く鋭い。 外面：ケズリ後ナデ。内面：ナデ後ミガキ。	全体に摩耗
2	塊 土師器	西壁際床直 3/4	口：13.7 高：9.0	砂粒 にぶい橙色～ 灰褐色	体部は丸く、底部は突出気味。 外面：体部ナデ、底部ケズリ。 内面：ナデ後粗いミガキ。	黒斑あり 煤付着
3	高坏 土師器	南壁際床直 坏部1/6	口：20.0	砂粒少量 橙色	段を経て口縁部が大きく外反。 外面：ミガキ。内面：ヨコナデ。	黒斑あり 4と同一個体

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
4	高坏 土師器	北壁際床直 脚部1/2		砂粒少量 橙色	脚柱部はエンタシス状。 外面：ミガキ。内面：脚柱部へラケズリ、上端ユビナデ、裾部ヨコナデ。	焼成良好 3と同一個体

13号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	竈左袖脇床直 完形	口：12.5 高：5.4	粗砂 橙色～赤褐色	口縁部内湾。 外面：体部ナデ後ミガキ、底部ケズリ後ナデ。 内面：体部ナデ後ミガキ、底部ナデ。	二次焼成
2	坏 土師器	竈左袖脇床直 完形	口：12.6 高：4.7	砂粒 浅黄橙色～ にぶい橙色	口縁部内湾。 外面：体部ナデ、底部ケズリ。 内面：体部ナデ後放射状ミガキ、底部ナデ。	二次焼成 器面内外荒れている
3	坏 土師器	土手状区画遺構内床直 完形	口：12.8 高：5.1	粗砂 にぶい黄橙色	口縁部内湾。 外面：体部ナデ、底部ケズリ。 内面：体部ナデ後放射状ミガキ、底部ナデ。	二次焼成 器面内外荒れている
4	坏 土師器	貯蔵穴区画内 完形	口：12.3 高：4.9	砂粒 浅黄橙色～ にぶい橙色	口縁部内湾。 外面：体部ナデ、底部ケズリ。 内面：体部ナデ後放射状ミガキ、底部ナデ。	
5	坏 土師器	竈左袖脇床直 一部欠損	口：12.2 体：12.8 高：5.5	粗砂、赤色粒 橙色 （内面黒褐色）	口縁部内湾。 外面：体部ケズリ後ナデ、底部ケズリ。 内面：体部ナデ後放射状ミガキ、底部ナデ。	二次焼成
6	坏 土師器	竈左袖脇床直 一部欠損	口：13.2 体：14.2 高：5.6	砂粒 にぶい橙色～ 黒褐色	口縁部内湾。 外面：体部ケズリ後ミガキ、底部ケズリ後ナデ。 内面：体部ナデ後放射状ミガキ、底部ナデ。	二次焼成
7	坏 土師器	竈左袖脇床直 完形	口：12.3 体：12.8 高：4.7	砂粒 橙～にぶい橙色	口縁部内湾。 外面：体～底部へラケズリ。 内面：体部ナデ後放射状ミガキ、底部ナデ。	底面に黒斑 二次焼成
8	坏 土師器	竈左袖脇床直 完形	口：12.4 体：13.0 高：5.3	砂粒、赤色粒 浅黄橙色～橙色 （内面黒色）	口縁部内湾。 外面：体～底部ケズリ後ナデ。 内面：体部ナデ後放射状ミガキ、底部ナデ。	
9	坏 土師器	竈左袖脇床直 完形	口：11.4 体：12.4 高：5.2	粗砂、赤色粒 橙色	口縁部内湾。 外面：体部ケズリ後ナデ？。底部ケズリ。 内面：不明	内部に網代残存
10	坏 土師器	竈左袖脇床直 一部欠損	口：14.8 体：15.7 高：5.5	粗砂、赤色粒 浅黄橙色～黒褐色	口縁部内湾。全体的に大きな作り。 外面：体部ナデ、底部ケズリ。 内面：体部ナデ後放射状ミガキ、底部ナデ。	二次焼成 黒斑あり
11	坏 土師器	竈前面床直 ほぼ完形	口：14.6 高：5.2	粗砂、赤色粒 橙色～浅黄橙色	内斜口縁。 外面：体部ナデ、底部ケズリ。 内面：体部ナデ後放射状ミガキ、底部ナデ。	二次焼成
12	坏 土師器	竈左袖脇床直 一部欠損	口：13.2 高：5.4	砂粒、赤色粒 橙～にぶい橙色	内斜口縁。 外面：体部ナデ、底部ケズリ。 内面：体部ナデ後放射状ミガキ、底部ナデ。	
13	坏 土師器	竈右袖脇床直 一部欠損	口：14.2 高：5.3	粗砂 にぶい橙色～灰褐色	内斜口縁。 外面：体部ナデ、底部ケズリ。 内面：体部ナデ後放射状ミガキ、底部ナデ。	二次焼成

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
14	坏 土師器	竈焚口 1/4	口：11.7 高：4.4	粗砂 橙色	口縁部は外傾する。口唇部は内そぎ気味。 外面：体底部ケズリ後ヘラナデ。 内面：体底部ヨコナデ。	
15	坏 土師器	竈左袖脇床直 一部欠損	口：12.5 高：4.3	砂粒、石英粗粒 赤褐色～橙色	口縁部は外傾する。口唇部は沈線が巡る。 外面：体底部ナデ。 内面：体底部ナデ。	
16	坏 土師器	南壁際床直 完形	口：12.8 高：5.4	砂粒、小礫 にぶい橙色	口唇部は面取りされ沈線が1条巡る。 外面：体底部ヘラケズリ。 内面：ヨコナデ、ナデ。	黒斑あり
17	坏 土師器	土手状区画遺 構内床直 完形	口：12.9 高：5.0	赤色粒 橙色	口縁部は直立気味。 外面：体底部ナデ。 内面：ヨコナデ、ナデ。	
18	坏 土師器	貯蔵穴区画内 一部欠損	口：14.8 高：5.6	粗砂、石英粗粒 赤色粒 赤褐～暗赤褐色	口唇部は面取りされ沈線が1条巡る。 外面：ケズリ後ナデ。 内面：ヨコナデ、ナデ。	黒斑あり
19	小型甕 土師器	竈右袖脇22上 完形	口：16.2 胴：16.4 底：5.8 高：18.1	粗砂多量 黄橙色～橙色	胴部は卵型。底部は平底。口縁部は強めに外反。 外面：胴部ケズリ、底部ケズリ。 内面：胴～底部ナデ。	黒斑あり
20	小型甕 土師器	竈前面床直 ほぼ完形	口：15.4 胴：16.8 底：5.8 高：19.3	粗砂、赤色粒 白色粒 橙色	胴部は卵型。底部は平底。口縁部は外反。 外面：胴部ケズリ、底部ケズリ。 内面：胴～底部ナデ。	二次焼成 器表面荒れている
21	壺 土師器	竈右袖脇床直 ほぼ完存	口：(12.1)	砂粒、赤色粒 橙色	口縁部は直立気味に外反。口唇部鋭い。 外面：口縁部ヨコナデ後ミガキ、胴部ミガキ。 内面：頸部ヘラナデ、胴部ナデ。	口縁部内面に黒色 付着物あり 口縁部打ち欠きか
22	甕 土師器	竈右袖脇床直 3/4	口：16.4	粗砂、赤色粒 浅黄橙色	口縁部は強く外反。 外面：頸～胴部ナデ。内面：胴部ナデ。	口縁部内外面摩耗
23	脚付甕 土師器	竈燃焼部 ほぼ完形	口：11.7 胴：12.8 脚：11.9 高：15.6	粗砂、石英粗粒 小礫 橙～にぶい橙色	球形胴部。口縁部は外反。脚部はハの字に開く。 外面：胴部ケズリ後ヘラナデ、脚部ヨコナデ後ヘラケズリ。内面：胴部ヘラナデ、底部ユビナデ 脚部ナデ、接合部ユビナデ。	胴部中央と脚外面 に小黒斑 竈支脚
24	坩 土師器	竈右袖脇21上 ほぼ完形	口：(12.3) 胴：15.7 底：5.2 高：17.0	粗砂、石英粗粒 橙色～浅黄橙色	胴部は扁平。口縁部は直線的に開く。底部平底。 外面：口縁部ヨコナデ後縦ミガキ、頸部横ミガキ 胴部上半ナデ後ミガキ、下半ケズリ、底部ケズリ 内面：胴部ナデ、底部ユビナデ。	口縁端部内面摩耗 胴部外面に黒斑
25	甕 土師器	埋土中 3/4	口：17.2 胴：21.0	粗砂 にぶい橙色～ にぶい褐色	口縁部はわずか外反。 外面：胴部ナデ。 内面：胴部ナデ。	器表面に剥落痕 二次焼成
26	甕 土師器	竈前面床直 一部欠損	口：19.9 胴：20.7 底：5.8 高：33.7	砂粒、白色礫多 浅黄橙色～褐色	胴部は長卵型。底部は突出気味の平底。口縁部は強く外反。 外面：胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。 内面：胴～底部ナデ。	器表面荒れている 二次焼成
27	甕 土師器	竈前面床直 一部欠損	口：19.2 胴：21.5 底：5.5 高：33.0	粗砂、白色礫多 赤色粒 浅黄橙～黒褐色	胴部は長卵型。底部は突出気味の平底。口縁部は強く外反。 外面：胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。 内面：胴部上半ヘラナデ、下半～底部ナデ。	二次焼成 器表面荒れている 破砕後にも火熱を 受ける

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
28	甑　？ 土師器	竈右袖脇床直 完存	口：16.5 高：12.9 孔：(1.2)	粗砂多量、赤色粒 にぶい橙色	鉢型。口縁部は短く外傾。 外面：胴部ヘラケズリ。 内面：胴部上半ヘラナデ、下半ナデ。	脚付き甕の脚部が欠けただけの可能性もある。 胴部外面に黒斑
29	甑 土師器	竈左袖脇床直 ほぼ完形	口：27.0 高：29.0 孔：10.1	砂粒、赤色粒 小礫、白色粒 にぶい橙色～黒褐色	長胴型。口縁部は大きく外反。 外面：胴部ヘラケズリ。 内面：胴部ナデ。	器表面荒れている 孔縁は摩耗 接合痕

14号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	竈右袖脇床直 一部欠損	口：12.0 高：4.2	粗砂、赤色粒 橙色	口縁部はわずか外反。 外面：ヘラケズリ後ナデ。内面：ナデ。	底部外面に黒斑
2	坏 土師器	竈左袖脇床直 一部欠損	口：14.3 高：5.5	粗砂 浅黄橙色～にぶい黄褐色	内斜口縁。 外面：ナデ後ミガキ、底部ナデ。 内面：体部ナデ後放射状ミガキ、底部ナデ。	底部外面に黒斑
3	小型甕 土師器	竈右袖脇床直 完形	口：12.6 胴：13.3 底：6.2 高：16.1	砂粒多量 にぶい橙色～黒褐色	底部丸みある平底。口縁部は弱い外反。 外面：胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。 内面：胴～底部ナデ。	胴部外面に黒斑 口縁部内面に煤付着
4	小型甕 土師器	竈左袖脇床直 ほぼ完形	口：15.6 胴：16.4 底：6.9 高：20.0	砂粒多量 浅黄橙色～にぶい橙色 (内面黒褐色)	卵型の胴部から口縁部が外反、口縁部先端は内湾気味となる。底部は丸みのある平底。 外面：胴部ヘラケズリ、底部ケズリ後ナデ。 内面：胴～底部ナデ。	煤付着
5	甕 土師器	竈左袖脇床直 3/4	口：19.1 胴：21.3 底：6.2 高：32.4	粗砂多量、 白色粗粒多量 にぶい橙色～褐灰色	胴部は長卵型、底部は突出した平底、口縁部は緩やかに外反。 外面：胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。 内面：ナデ。	胴部外面に黒斑 胴部外面に焼土・煤付着
6	甑 土師器	竈右袖脇床直 ほぼ完形	口：23.8 高：29.7 孔：8.8	粗砂 浅黄橙色～灰褐色	口縁部は強めに外反。孔は2段に削る。 外面：胴部ヘラケズリ後ナデ？ 内面：ナデ。	胴部～口縁部外面に黒斑

15号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	貯蔵穴 1/3	口：13.5 高：5.8	粗砂、白色粒、石英 橙色	口縁部はわずか内傾。 外面：体部ナデ、底部ヘラナデ後粗いミガキ。 内面：体～底部ナデ。	
2	坏 土師器	竈燃焼部 一部欠損	口：12.4 高：6.4	粗砂多量、白色粒 にぶい橙～橙色	内斜口縁。体部は深め。 外面：体部ナデ、底部ケズリ。 内面：密なミガキ（単位不明瞭）	
3	坏 土師器	東壁際床直 1/2	口：13.4 高：6.7	粗砂、白色粒、石英 橙色	内斜口縁。体部は深め。 外面：体部ナデ、底部ケズリ。 内面：ナデ。	外面に大黒斑

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
4	埦 土師器	竈右袖脇床直 ほぼ完形	口：15.4 高：6.7	粗砂、白色粒、石英 橙色	内斜口縁。 外面：体部ナデ、底部ケズリ。 内面：体～底部ヨコナデ。	小黒斑あり
5	坏 土師器	貯蔵穴 ほぼ完形	口：13.8 体：14.9 高：6.3	粗砂、白色粒、石英 明赤褐色	口縁部内湾。 外面：体～底部ヘラケズリ後ミガキ。 内面：体～底部ナデ。	
6	坏 土師器	FA上層中 ほぼ完形	口：11.2 体：12.4 高：5.8	粗砂、赤色鉱物 橙色	口縁部内湾 外面：体部ナデ、底部ケズリ。 内面：体部上半ナデ後ミガキ、下半～底部ナデ。	破砕後二次焼成
7	坩 土師器	貯蔵穴 竈左袖脇床直 一部欠損	口：9.8 胴：14.3 高：14.9	粗砂、白色粒、石英 にぶい橙～橙色	胴部は扁平。底部は丸みのある平底。 外面：口縁部ヨコナデ後ミガキ、胴部ナデ後粗いミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体～底部ナデ。	
8	鉢 土師器	貯蔵穴 一部欠損	口：13.9 胴：14.9 高：10.9	粗砂 にぶい橙色～黒褐色	胴部は扁平。底部は丸底。口縁部は直立気味。 外面：胴部ハケナデ、底部ケズリ。 内面：胴～底部ナデ。	
9	鉢 土師器	竈燃焼部 一部欠損	口：16.5 底：6.4 高：11.9	粗砂、白色粒 にぶい橙～橙色	底部は比較的大きな平底。 外面：胴部ナデ後ヘラナデ？底部荒れて不明 内面：胴～底部ナデ。	破砕後火熱受ける
10	甕 土師器	竈右袖脇床直 一部欠損	口：15.0 胴：21.4 高：26.3	粗砂、石英多量 浅黄橙～黒褐色	卵型の胴部から底部が突出。 外面：胴部ナデ、底部ケズリ。 内面：丁寧なナデ。	16号住居跡出土破片と接合
11	甕 土師器	貯蔵穴 一部欠損	口：15.8 胴：18.8 底：9.0 高：25.7	粗砂、白色粒 橙～にぶい橙色	卵型の胴部から底部が突出、底部はつぶれている 口縁部は直線的に開く。口唇部は面取りされる。 外面：胴部ハケナデ、底部ナデ。 内面：口縁部ハケナデ、胴部ヘラナデ。	二次焼成
12	甕 土師器	東壁直下床直 2/5	口：19.7 胴：24.2 高：(19.2)	粗砂多量 浅黄褐～黒褐色	胴部中位は直線的。口縁部は外反。 外面：口縁部ハケナデ後ヨコナデ、胴部上半ハケナデ、下半ケズリ。 内面：口縁部ハケナデ、胴部ケズリ後ナデ。	
13	甕 土師器	竈焚口 1/2	口：19.2 胴：20.9	砂粒、白色粗粒多量 橙色～赤褐色	口縁部はわずかに外反する。 外面：胴部浅いハケナデ。 内面：胴部ナデ。	
14	甕 土師器	FA上層中 2/5	口：20.1 高：(10.1)	粗砂、白色粒 にぶい橙色	口縁部は外反する。 外面：胴部ヘラケズリ。 内面：胴部ナデ。	
15	甑 土師器	土手状区画遺構床直～床上20cm 一部欠損	口：26.8 高：24.1 孔：9.8	粗砂、白色粒、橙色	口縁部外傾、口唇部面取り。丸孔の中央に棒貼付 外面：口縁部ナデ、端部ヨコナデ、胴部上～中位ハケナデ、下位ナデ。 内面：胴部ハケナデ後ミガキ。	胴部外面に黒斑 2孔

17号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	南西柱穴脇 南壁際床直 3/5	口：11.7 体：13.0 高：5.4	粗砂、赤色粒多 橙色	口縁部内湾。 外面：体～底部ケズリ後ナデ。 内面：口～体部ヨコナデ後ナデ、底部ナデ。	内外面にタール状付着物

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
2	坏 土師器	埋土中 1/2	口：13.9 体：14.7 高：5.4	砂粒、白色粗粒 明赤褐色	口縁部内湾。底部は平底気味。 外面：体～底部ケズリ後ナデ。 内面：口～底部ナデ後ミガキ。	口縁部外面に黒斑
3	埦 土師器	南壁密着床上 20cm 1/4	口：12.3 体：14.4 高：5.4	砂粒 浅黄橙～にぶい橙色	体部深い。 外面：口～体部ナデ。 内面：口～体部ナデ。	
4	坏 土師器	中央部床直 3/4	口：12.7 体：13.3 高：5.8	細砂粒 にぶい橙色	底部は平底気味。体部は直線的に開く。 外面：体部ナデ、底部ケズリ。 内面：体～底部ナデ。	
5	甕 土師器	竈前面床直 1/4	胴：20.4	細砂粒 にぶい橙色	口縁部は外反する。 外面：胴部上半ヘラナデ、下半ケズリ後ナデ。 内面：胴部ヘラナデ（浅いハケ状）	

20号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	埦 土師器	貯蔵穴 ほぼ完形	口：8.9 体：9.7 高：6.4	砂粒 にぶい橙～橙色	口縁部はほぼ直立。 外面：体部ケズリ後ナデ。 内面：体～底部ナデ。	外面に黒斑

22号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	竈燃焼部 3/4	口：12.2 高：5.8	砂粒少量 にぶい橙色	口縁部は直立気味に外反。 外面：体部ナデ、底部ケズリ。 内面：体～底部ナデ。	粘土のヒビ割れ 体底部外面に黒斑
2	埦 土師器	竈袖 一部欠損	口：14.0 高：(6.8)	粗砂、白色粒 にぶい橙色	口縁部は外反する。 外面：体部ケズリ後ナデ。 内面：体部ナデ。	二次焼成 内外に黒斑
3	小型甕 土師器	貯蔵穴脇床直 一部欠損	口：14.7 胴：16.4 高：22.4 底：7.1	粗砂 橙～灰褐色	胴肩部は丸みがあるが、下位と中位は直線的。 外面：口縁部ハケナデ後ヨコナデ、胴部ハケナデ 底部ナデ。 内面：全体ハケナデ後胴部上半ナデ。	内外面にタール状付着物 胴部外面に剝落痕
4	甕 土師器	南東隅床直 1/4	口：17.0	砂粒、赤色粒 橙色	口縁部外反。 外面：胴部ケズリ後ナデ。 内面：胴部ナデ。	内面にタール状付着物
5	甕 土師器	南東隅床直		砂粒、赤色粒 橙色	外面：胴部ケズリ。 内面：ナデ。	

24号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	竈焚口 ほぼ完形	口：12.9 高：5.2	砂粒 にぶい黄橙色～暗褐色	外面：体～底部ケズリ後ナデ。 内面：体部上半ナデ後ミガキ、下半～底部ナデ。	口縁部端部摩耗 口縁部内面に沈線

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
2	坏 土師器	東壁際 1/2	口：12.0 体：12.6 高：5.5	砂粒 橙～赤褐色	外面：体～底部ケズリ後ナデ（一部ミガキ？） 内面：体部ミガキ、底部ナデ。	内外面にタール状付着物
3	坏 土師器	埋土中 1/4	口：12.1 高：5.5	砂粒、白色粒 橙色	外面：体部ナデ後ケズリ、底部ケズリ。 内面：体部上半ナデ後ミガキ、下半～底部ナデ。	
4	甕 土師器	中央部床直 ほぼ完形	口：20.9 胴：22.5 高：35.6 底：5.5	粗砂、白色粒、 浅黄橙～褐灰色	胴部は長卵型。底部平底。口縁部外反。 外面：胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。 内面：胴部～底部ナデ。	二次焼成 ほぼ外面全体に煤付着
5	甕 土師器	竈前面床直 竈右袖脇床直 2/3	口：19.6 胴：26.0	粗砂、小礫 橙色	胴部は球形。口縁部は外反。 外面：胴部ケズリ。 内面：胴部ケズリ後ナデ。	口縁部内外面と胴部外面にタール状付着物
6	甕 土師器	竈燃焼部 1/2	底：6.2	砂粒 褐色	底部突出気味。 外面：胴部ナデ、底部木葉痕。 内面：胴～底部ナデ。	支脚石上逆位出土
7	甕 土師器	南東隅床直 2/5	底：6.4	粗砂 にぶい橙色～褐色	底部は平底 外面：胴部ケズリ、底部ケズリ。 内面：胴部中位ヘラケズリ、下位～底部ナデ。	炭化物付着

28号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 1/6	口：(11.5)	砂粒 橙色	口縁部は内湾。 体部外面ナデ、内面はヨコナデ後暗文状ミガキ。	内黒？ 外面に黒色付着物
2	坏 土師器	埋土中 1/6	口：(12.8)	粗砂多量 にぶい橙色	口縁部は外反気味に開く。底部～口縁部の境に段がある。底部外面ヘラケズリ後一部ナデ。他はヨコナデ、ナデ。	外面に黒斑
3	坏 土師器	埋土中 1/4	口：(14.0)	夾雑物少量 橙色	口縁部はわずか外反気味に立ち上がる。底部と口縁部の境に段がある。 体部外面ナデ、他はヨコナデ。	
4	小型甕 （脚付甕） 土師器	南西床直 1/6 脚部欠損	口：12.4 胴：(11.3) 高：(12.2)	粗砂多量 にぶい橙～橙色	口縁部は内湾気味に立ち上がり、先端で外反する 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。 胴部外面中位に指痕	
5	小型甕 （脚付？） 土師器	埋土中 1/3 脚部欠損	口：13.8 胴：13.0	粗砂 橙色～黒褐色	口縁部は外反する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	胴部外面に黒斑 二次焼成
6	甕 土師器	竈燃焼部 1/2	口：16.5	粗砂 浅黄橙色	口縁部は外反する。 胴部：外面ヘラケズリ後一部ナデ、内面ナデ。	胴部内面に黒色付着物、外面に黒斑 外面に接合痕
7	甕 土師器	竈前面床直 1/5	口：(26.1)	粗砂 にぶい黄橙色	口縁部は外反する。口唇部は面取り。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	胴部外面に黒斑 口縁部外面に接合痕
8	甕 土師器	竈前面床直 1/3		粗砂 橙～にぶい橙色	胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	胴部外面に黒斑

34号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	北側柱穴南東 床直 3/4	口：14.4 高：5.3	砂粒少量 にぶい橙色	内斜口縁。 体部～底部ケズリ後ナデ後一部ミガキ。 内面ナデ後放射状のミガキ。	破砕後火熱
2	坏 土師器	北側柱穴南東 床直 2/3	口：12.2 体：12.8 高：5.0	細砂粒 橙色	口縁部はわずか内傾気味に立つ。 底部外面ヘラナデ、他はヨコナデ、ナデ。	外面に黒斑
3	甕 土師器	北側柱穴南西 床直 1/3	底：6.1	細砂粒 にぶい橙色	底部は平底。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。 底部外面一定方向ヘラケズリ。	
4	甕 土師器	北側柱穴南東 床直 3/4	口：15.4 胴：21.4 高：27.7 底：6.8	砂粒 にぶい橙色	口縁部は外反する。底部は平底。 胴部：外面ヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ。 底部外面ヘラケズリ。	二次焼成 口縁部内外面に黒色付着物。

4号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	皿 須恵器	北壁西端密着 完形	口：12.5 底：7.0 高：2.4	白色粒少量 灰色	体部～口縁部外反して開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	黒色付着物 還元炎焼成。 硬質

8号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 須恵器	埋土 1/3	口：11.9 底：6.8 高：3.1	白色粒少量 灰色	体部～口縁部内湾して開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	内外面に自然釉 還元炎焼成。 硬質。
2	高台付埦 須恵器	竈左脇東壁際 床直 2/3	口：11.2 台：6.2 高：5.2	白色粒、黒色粒 灰色	体部～口縁部内湾して開く。高台部 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。	還元炎焼成。 硬質。
3	甕 土師器	竈左脇東壁際 床直 1/3	口：21.1 胴：20.5 底：4.6 高：28.3	砂粒 橙～にぶい褐色	口縁部はわずか外反気味に外傾する。底部平底。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	

18号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	紡錘車	上径2.1、底径4.1、厚1.6、孔径0.7、重さ34.2g　蛇紋岩製か。上面に刻線あり。軸木残存長1.7　軸木材質不明。				

21号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 破片	口：(12.0)	砂粒 橙色	体部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
2	坏 須恵器	西壁周溝中 1/3	口：13.0 底：7.3 高：4.0	夾雑物少ない 灰～灰白色	体部～口縁部直線的に外傾。 体部内外面ともに回転ナデ。左回転。 底部回転糸切り。	黒色付着物 還元炎焼成。 やや硬質。
3	坏 須恵器	埋土中 1/6	口：(14.0) 底：7.8 高：4.4	黒色粒 灰色	体部内湾気味に開き、口縁部わずか外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	還元炎焼成。 硬質。
4	甕 土師器	埋土中 破片	口：(14.0) 胴：(16.0)	細砂粒 橙色	胴部は扁平。口縁部は外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	
5	甕 土師器	竈前面床直 3/8	口：20.6	細砂粒、赤色粒 橙色	口縁部は外反する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	内面に黒色付着物
6	甕 土師器	竈前面床直 破片	口：(20.0) 胴：(20.0)	細砂粒、赤色粒 橙色	口縁部は外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	黒色付着物
7	埦 土師器	埋土中 破片	口：(14.0)	粗砂 黄橙色	全体的に内湾気味にわずか開く。 体部：ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。	22号住居跡からの 混入か？
8	鉢 土師器	埋土中 破片	口：(15.8) 胴：(16.4)	粗砂 にぶい褐色	口縁部はわずか外傾する。 体部：外面ナデ、内面ヘラナデ。	22号住居跡からの 混入か？
9	小型甕 土師器	埋土中 1/3	口：12.0 胴：(12.0)	橙色	口縁部は強く外傾する。 内外面とも回転ナデ。	黒色付着物 内面黒褐色
10	砥石	長4.5、幅3.9、厚2.9、孔径0.7～0.9、重さ73.0g　ほぼ全面に線条痕あり。全面黒色付着物に被われる。材質不明。				

25号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	蓋 (須恵器)	埋土中 1/4	口：14.0	粗砂少量 灰～灰白色	天井部上半回転ヘラケズリ、他は内外面とも回転ナデ。	半還元炎焼成。 やや軟質。
2	坏 (須恵器)	埋土中 1/5	口：14.0 底：7.4 高：3.7	砂粒少量 灰白色	体部～口縁部は内湾気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転ヘラ切り。	砂粒脱痕 半還元炎焼成。 やや軟質。
3	甕 土師器	埋土中 破片	口：(22.0)	砂粒 にぶい赤褐色	口縁部は外反し、上半で内湾気味になる。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	黒色付着物 5と同一個体
4	甕 土師器	竈中 1/4	口：22.0	砂粒、赤色粒 橙色	口縁部は外反する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	黒色付着物
5	甕 土師器	竈周辺 破片	口：22.0	砂粒、 にぶい赤褐色	口縁部は外反し、上半で内湾気味になる。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	胴部外面煤付着 3と同一個体

26号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 須恵器	南東部床直 ほぼ完形	口：13.3 底：7.7 高：3.9	白色粒多量 灰色～灰褐色	口縁部は直線的に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	墨書土器文字不明 還元炎焼成。 やや硬質。
2	坏 須恵器	埋土中 1/2	底：6.2	黒色粒 灰白色	体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。後ヘラ調整。	半還元炎焼成。 軟質。

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
3	脚付甕 土師器	埋土中 脚部破片	裾：(10.0)	砂粒少量 橙色	脚裾部は外反して開く。 内外面ともヨコナデ。	

27号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 1/4	口：12.0 底：9.3 高：2.9	砂粒、白色粒 橙～にぶい橙色	体部～口縁部は内湾気味に開く。 体部外面ナデ、底部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	二次焼成 黒色付着物
2	坏 土師器	竈前面床上10cm 1/3	口：12.0 底：9.0 高：3.0	砂粒、白色粒 にぶい橙色～にぶい赤褐色	体部～口縁部は直線的に開く。 底部：外面ヘラケズリ、内面ヨコナデ、ナデ。 体部外面ナデ、他はヨコナデ。	外面に黒色付着物
3	坏 土師器	竈燃焼部埋土中 2/5	口：11.0 底：8.3 高：3.2	砂粒、白色粒 にぶい橙色	体部～口縁部は内湾気味に開く。底部丸みある。 体部外面ナデ、底部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	内外面に黒色付着物
4	坏 土師器	南東隅床直 1/4	口：12.6 高：2.9	砂粒少量 にぶい橙色	体部は直線的に開き、口縁部内湾気味に張り出す 体部外面ナデ、底部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	二次焼成
5	埦	竈左前面床上10cm 1/4	口：18.0 底：11.2 高：5.5	赤色粒 にぶい橙色～にぶい赤褐色	体部～口縁部内湾して開く。 底部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	
6	坏 須恵器	埋土中 ほぼ完形	口：14.3 底：7.4 高：3.4	黒色粒、小礫 灰色	体部内湾気味に開き、口縁部外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	底部ヘラ記号？ 7に類似。還元炎焼成、やや硬質。
7	坏 須恵器	南壁際床上10cm 3/4	口：14.0 底：7.4 高：3.4	黒色粒、小礫 灰色	体部内湾気味に開き、口縁部外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	底部ヘラ記号？ 6に類似。還元炎焼成、やや硬質。
8	坏 須恵器	南壁際床上10cm 1/5	口：12.0 底：7.2 高：2.7	白色粗粒、黒色粗粒 灰色	体部～口縁部内湾して開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	還元炎焼成。 硬質。
9	甕 土師器	竈前面床上10cm。1/4	口：20.2 胴：23.4	砂粒 赤褐色	口縁部下半内傾気味に立ち、上半外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	
10	甕 須恵器	埋土中 破片	口：(17.3)	黒色粒 青灰色	口縁部は外反する。口唇部面取り。 内外面とも回転ナデ。	還元炎焼成 硬質

29号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	甕 土師器	貯蔵穴脇床直・竈中、1/4	口：21.0 胴：21.3	砂粒 にぶい橙～橙色	口縁部は外反するが、中位は沈線状に凹む。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	内外面に煤付着
2	甕 土師器	中央部床直 1/4	口：20.7	砂粒、赤色粒 橙色～にぶい赤褐色	口縁部は外反し、先端で強く張り出す。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	内外面に煤付着

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
3	甕 土師器	貯蔵穴中 1/5	底：5.6	砂粒 にぶい赤褐色～ 褐色	胴部下半は直線的に開く。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ハケナデ、ナデ。 底部：外面ヘラケズリ、内面ハケナデ。	二次焼成
4	甕 土師器	貯蔵穴脇床上 10cm	底：4.8	砂粒 橙色	胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。 底部外面一定方向ヘラケズリ。	外面に黒斑
5	刀子	南壁際	残存長7.3、(刃部長2.9、茎長4.4) 刃部最大幅0.8			鉄製品
6	紡錘車	埋土中	ほぼ完存。径4.2、厚0.15、孔径0.4			鉄製品

30号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 1/4	口：12.4 底：5.6 高：3.1	砂粒 橙色	体部から口縁部の立ち上がりに段を持つ。 体部外面ユビナデ。底部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	外面に黒色付着物
2	坏 須恵器	埋土中 1/6	口：(12.2) 底：(6.4) 高：4.0	白色粒、黒色粒 灰色	体部内湾して開き、口縁部わずか外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。底部周縁ヘラ調整。	還元炎焼成。 硬質。
3	坏 須恵器	北壁際床直 1/6	口：(12.4) 底：(6.8) 高：4.1	白色粒、小礫 灰色	体部内湾して開き、口縁部わずかに外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。底部周縁ヘラ調整か。	還元炎焼成。 やや硬質。
4	坏 須恵器	竈前面床直 一部欠損	口：13.3 底：6.4 高：3.7	粗砂 灰～淡橙色	体部～口縁部内湾気味に大きく開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	還元炎焼成。 やや硬質。
5	甕 土師器	竈前面床上10 cm、1/3	口：20.6	砂粒、赤色粒 にぶい橙色	口縁部は外反し、上半で内湾気味になる。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	
6	甕 土師器	竈前面床直 1/3	口：20.0 胴：21.8	砂粒 橙色	口縁部は強く外反して立ち、上半で内湾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。 口縁部上端は強いヨコナデにより下側に稜を持つ	胴部外面に黒色付着物
7	蓋 須恵器	竈前面床上10 cm、1/5	口：17.8	粗砂 白色(周縁灰色)	天井部外面上半回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	半還元炎焼成 やや硬質
8	刀子	北西隅埋土中	完形。全長18.0、刃部長11.0、茎長7.0、刃部最大幅1.3			鉄製品
9	鎌	東壁密着	刃部先端欠損。残存長17.1、最大幅3.7			鉄製品

31号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 破片	口：(12.0)	砂粒 にぶい橙色	外面：底部ヘラケズリ、体部ナデ。他はヨコナデ	
2	坏 (須恵器)	南西隅床直 2/3	口：13.3 胴：8.0 高：3.4	粗砂、黒色粗粒 白色粗粒 灰色	体部～口縁部内湾気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。左回転。 底部回転ヘラ切り。	二次焼成 還元炎焼成 やや硬質
3	刀子	床面密着	刃部先端欠損。残存長13.4、刃部長5.6、刃部幅1.2、柄部長7.8、柄部幅1.6 柄部は木芯。柄内に木質が残存する。木材質は不明。			鉄製品

3号土杭

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	脚付甕 土師器	埋土中 1/3	口：11.1 胴：12.0	粗砂多量 にぶい黄橙色	口縁部は外反する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	二次焼成

5号土杭

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 1/2	口：10.9 高：5.1	粗砂、赤色粒 にぶい橙色	口縁部はわずか外傾する。 口縁部：外面ヨコナデ後ミガキ、内面ミガキ。 底部：ヘラケズリ後ミガキ、内面ミガキ。	

10号土杭

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	埦 須恵器	埋土中 1/4	口：18.0	粗砂 外面灰褐色、内面にぶい赤褐色	内外面ともに回転ナデ。	

2号溝

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 破片	口：(9.8)	夾雑物少ない 赤色	口縁部は内湾する。 体部：外面ナデ、内面ヨコナデ。	
2	坏 土師器	埋土中 1/6	口：(12.0)	砂粒、小礫 橙色	内斜口縁。 体部内外面ともナデ後ミガキ。	
3	坏 土師器	埋土中 破片	口：(12.0)	砂粒 赤褐色	内斜口縁。 体部外面ヘラケズリ、内面ナデ後ミガキ。	

1号溝

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 破片	口：(12.1)	粗砂 橙色	内斜口縁。 体部：外面ナデ、内面ヨコナデ。	煤付着

3号溝

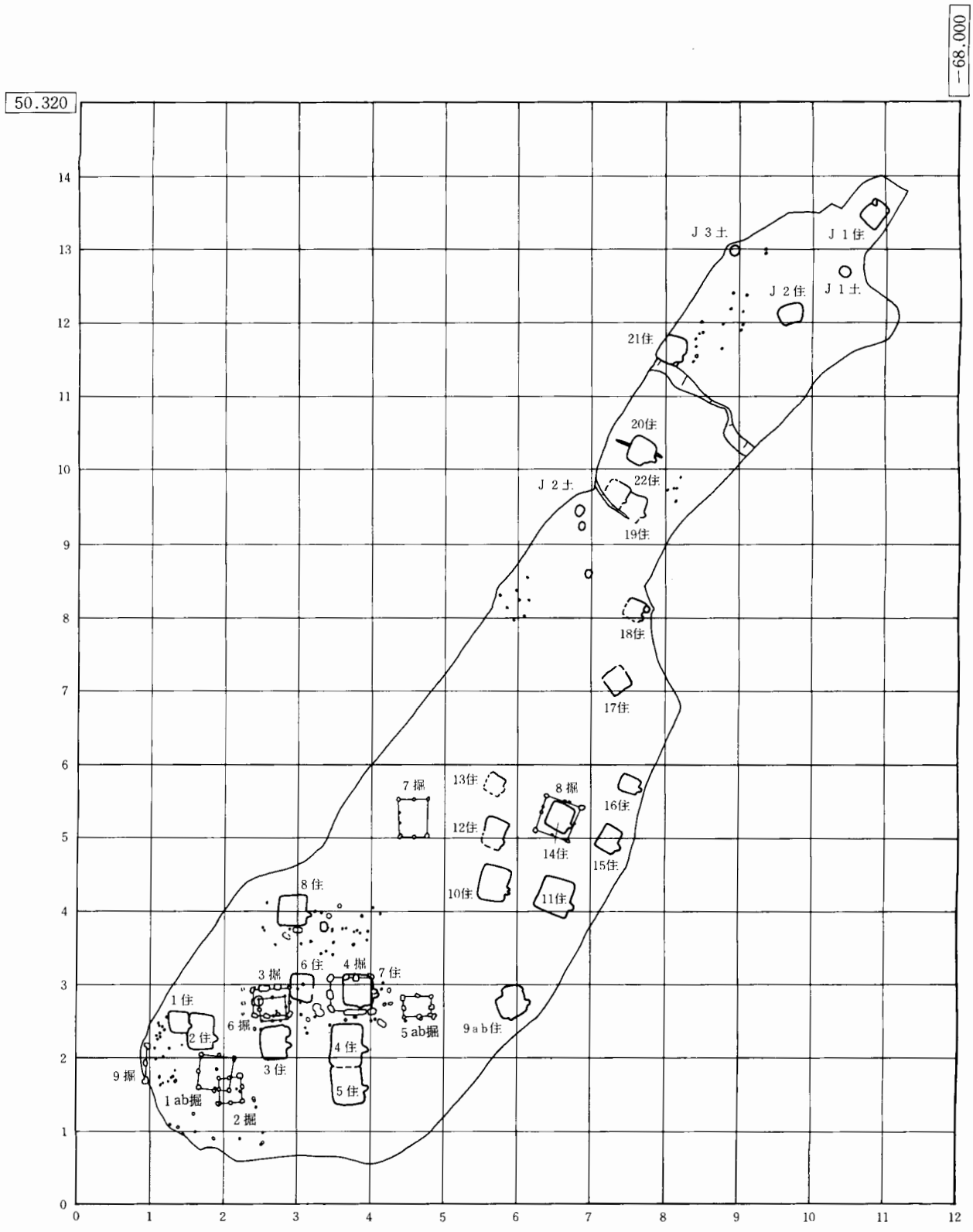
番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 破片	口：12.0	赤色粒 橙色	口縁部は直線的に開き、先端部が外方に張り出す 底部外面ヘラケズリ（ハケ状）。他はヨコナデ。	内外面に煤付着
2	坏 土師器	埋土中 1/5	口：12.0	砂粒少量 にぶい橙色	口縁部は直線的にわずか外傾する。 外面：体部ユビオサエ、底部ケズリ。 他はヨコナデ。	底部外面煤付着 内面赤色塗彩？
3	坏 土師器	埋土中 一部欠損	口：12.4 底：9.2 高：3.2	粗砂 にぶい橙色	体部内湾気味に立ち上がり、口縁部内湾して開く 体部外面ユビナデ、ユビオサエ、底部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ、ナデ。	墨書土器（底部外面、文字不明）

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
4	坏 土師器	埋土中 1/6	口：14.0	砂粒 赤褐色	口縁部は内湾気味に2段に開く。 体底部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	口縁部外面に煤付着
5	坏 土師器	埋土中 1/3	口：15.0 底：8.0 高：(3.8)	粗砂 橙色	体部～口縁部は直線的に大きく開く。 外面：体部ナデ後ミガキ、底部ヘラケズリ。 内面：ミガキ。	内黒土器 墨書土器（体部外面、文字不明）
6	坏 須恵器	埋土中 1/5	口：13.0 底：8.1 高：3.5	白色粗粒 灰色	口縁部はわずか外反気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	還元炎焼成。 硬質。
7	坏 須恵器	埋土中 3/4	底：6.6	黒色粒 灰色	体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。周縁調整。	還元炎焼成。 硬質。
8	埦 須恵器	埋土中 1/4	口：12.5 台：7.7 高：5.0		体部～口縁部内湾気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。	
9	蓋 須恵器	埋土中 1/2	口：16.2 高：5.0 鈕：3.5	砂粒 灰白色 周縁黒色塗彩	外面：天井部上半回転ヘラケズリ、他は回転ナデ 天井部中央回転糸切り。左回転。	砂粒脱痕多い 半還元炎焼成。 やや硬質。
10	甕 土師器	埋土中 1/5	口：22.0	砂粒、赤色粒 橙色	口縁部は下半でほぼ直立し、上半で外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	口縁部外面下半に接合痕
11	甕 土師器	埋土中 1/6	口：22.0 胴：22.8	砂粒、赤色粒 橙色	口縁部は下半でほぼ直立し、上半で外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	接合痕残存 10と同一個体

1号ピット

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	底面 3/4	口：12.0 底：8.3 高：3.3	砂粒少量 橙色	体部～口縁部内湾気味に開く。 外面：体部ナデ、底部ヘラケズリ。他はヨコナデ	外面に黒色付着物 底部内面中央にクレーター状剝落痕

III　由森（よしもり）遺跡の遺構と遺物



第87図　遺構配置図及びグリッド設定図

1．縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

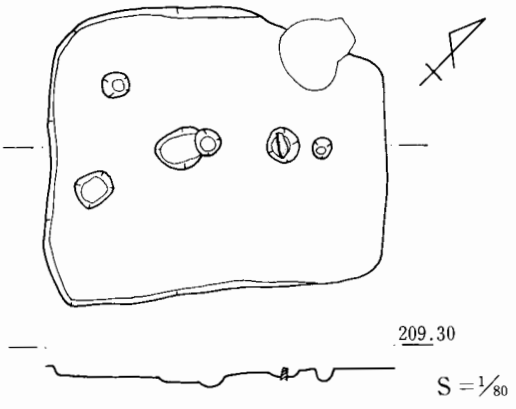
Ｊ１号住居跡（ＰＬ25・33）

13－11グリッドに位置する。南西約20mにＪ２号住居跡が近接する。北西隅に現代の撹乱坑が重複する。

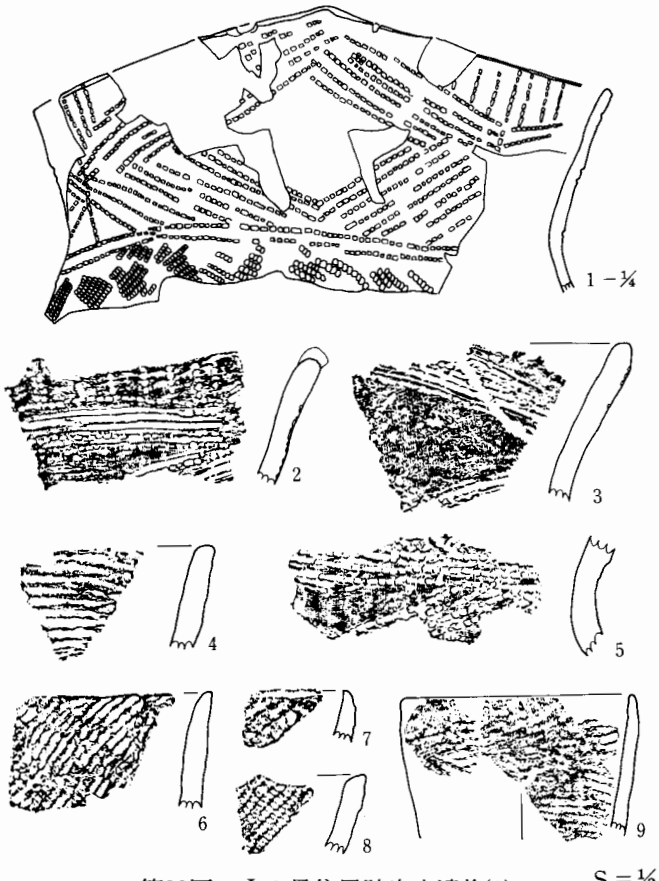
東西3.0m、南北3.8mを測り、隅丸長方形状を呈する。深さは耕作によって上部の大部分を削平されているため最大でも5cm程度である。床面は壁際を除き良く踏み固められている。南壁際と長軸上の４ケ所に小ピットが検出されているが柱穴かどうか不明である。炉は床面の中央部北寄りに位置している。径20cmほどの円形に浅く掘り凹め、中央に枕石を置いている。

遺物は床面に密着する状態で土器・石器が出土している。特に床面中央部南半に集中する傾向が認められた。

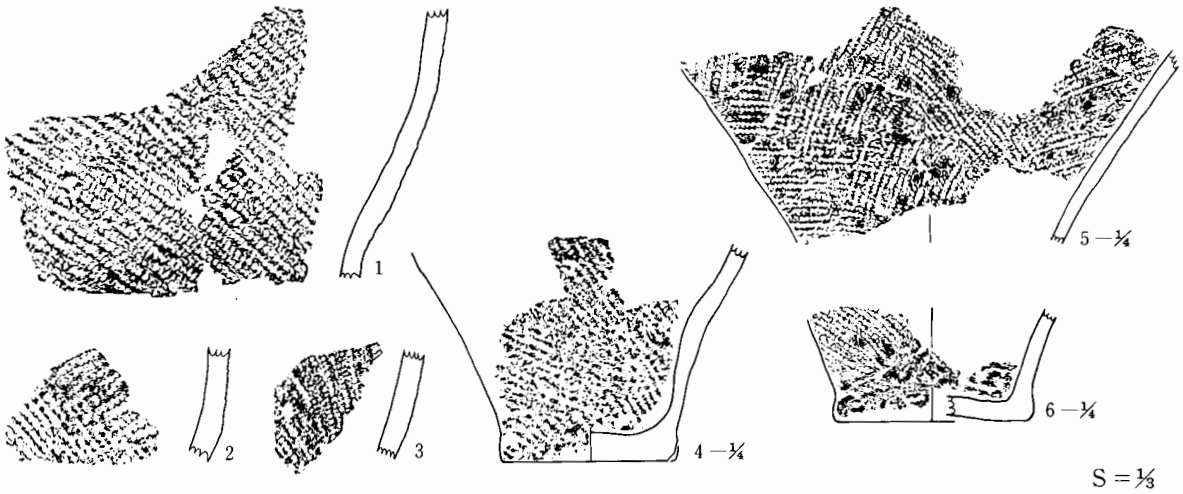
出土した遺物には、口縁が大きな波状となり頸部がくびれ胴部が張る深鉢形を呈し、口縁部に櫛歯状工具による刺突で縦位および大形の菱状となる文様が構成され、頸部には横位に刺突が巡らされ胴部との文様が区画されている。胴部には０段多条のＬＲ・ＲＬによる羽状縄文が施されるものと思われるもの（第89図１）。２～５も同様に櫛歯状工具による刺突や半裁竹管による沈線で大形の菱状となる文様が構成されているものであり、２は波状となる口縁の波底下に小突起をもつものである。６～８は口縁部以下に縄文が施されるもの。９は平口縁となる無文の深鉢。第90図１～６は胴部から底部にかけてのものであるが、０段多条や附加条によるものでの羽状縄文および斜縄文が施されている。このうち５と６は同一個体のものである。これらの土器は、有尾式に比定されるものである。

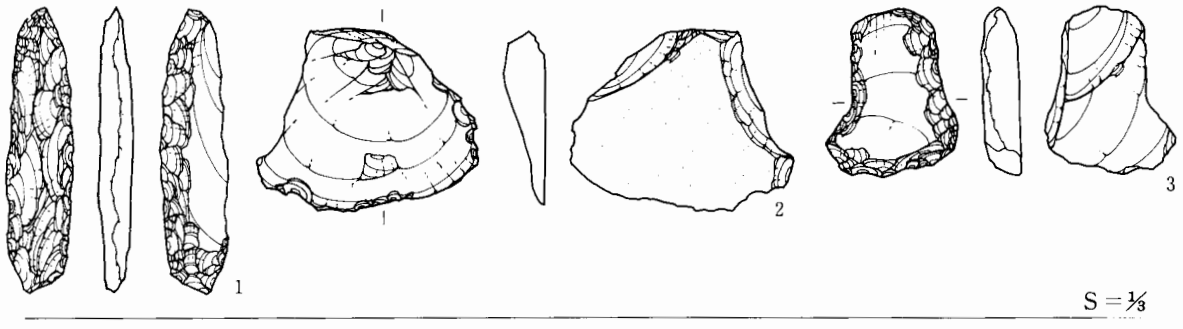


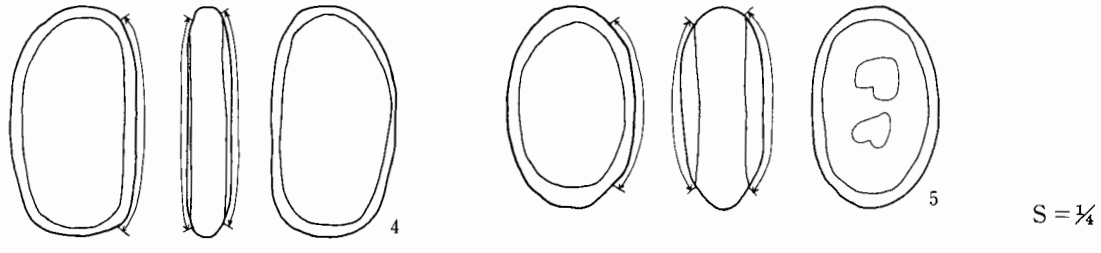
第88図　Ｊ１号住居跡



第89図　Ｊ１号住居跡出土遺物(1)　S＝1/3







J１号住居跡石器計測表　　(単位cm・g)

番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
1	尖頭器	10.1	2.7	41.4	黒色頁岩
2	スクレイパー	8.6	7.2	71.1	黒色頁岩
3	打製石斧	5.1	6.5	46.9	黒色頁岩

番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
4	磨石	12.1	6.6	320	粗粒安山岩
5	磨石	10.5	6.8	435	変質安山岩

第90図　J１号住居跡出土遺物(2)

J２号住居跡（PL25・33）

12－10グリッドに位置する。J１・３号土坑がそれぞれ10m前後北東、北西に近接する。殆ど調査期間がなかったために不明な点が多い。

東西約3.6m、南北約2:8mを測る。深さは20cm前後で中央部に土坑が２基重複しているが、新旧関係は不明である床面・壁面ともに明瞭には捉えられていないが、中央部の土坑周辺に焼土が検出されている。

遺物は埋土中央部から床面にかけて土器破片・石器が出土したが、ほぼ全体の形状が復元できるのは、深鉢１点だけであり、石器も剝片類が多い。

出土した遺物には、口縁が平縁となる胎土に繊維を含む無文の深鉢形土器（第92図１）や、２のように口縁部に半裁竹管具による沈線と櫛歯状工具による刺突での大形の菱状の文様が描かれているものもある。３

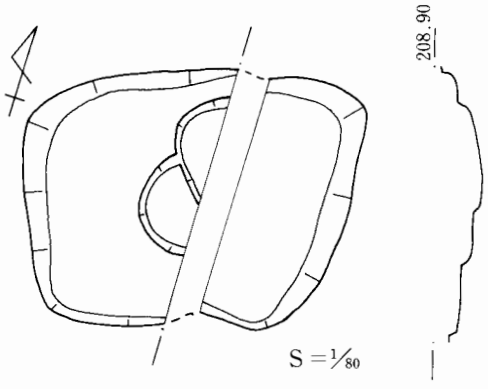
は口縁部に半裁竹管具による沈線での大形の菱状の文様が施されたもの。4は口縁以下に縄文が施文されるもので、無節のLによる斜縄文である。5～10は胴部に羽状縄文が施されるものであるが、5は0段3条のRLとLRに細いRとLを1本付加させた附加条による羽状縄文。6・8はかなり密な撚りによるRLとLRとの羽状縄文。7・10は0段3条によるRLとLRとの羽状縄文。9は前段反撚りのRRとLLとによる羽状縄文である。11は胴部に1本付加による附加条の縄が用いられたもの。12は節が密となる撚りのLRが施されているものである。これらの土器は、有尾式に比定されるものである。

(2) 土坑（PL25・33）

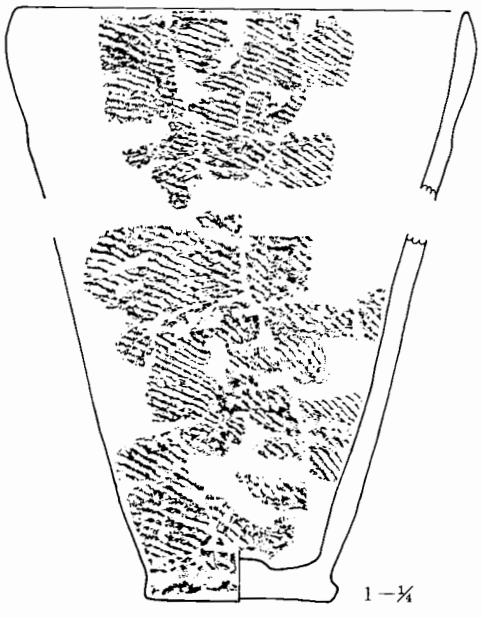
J1号土坑

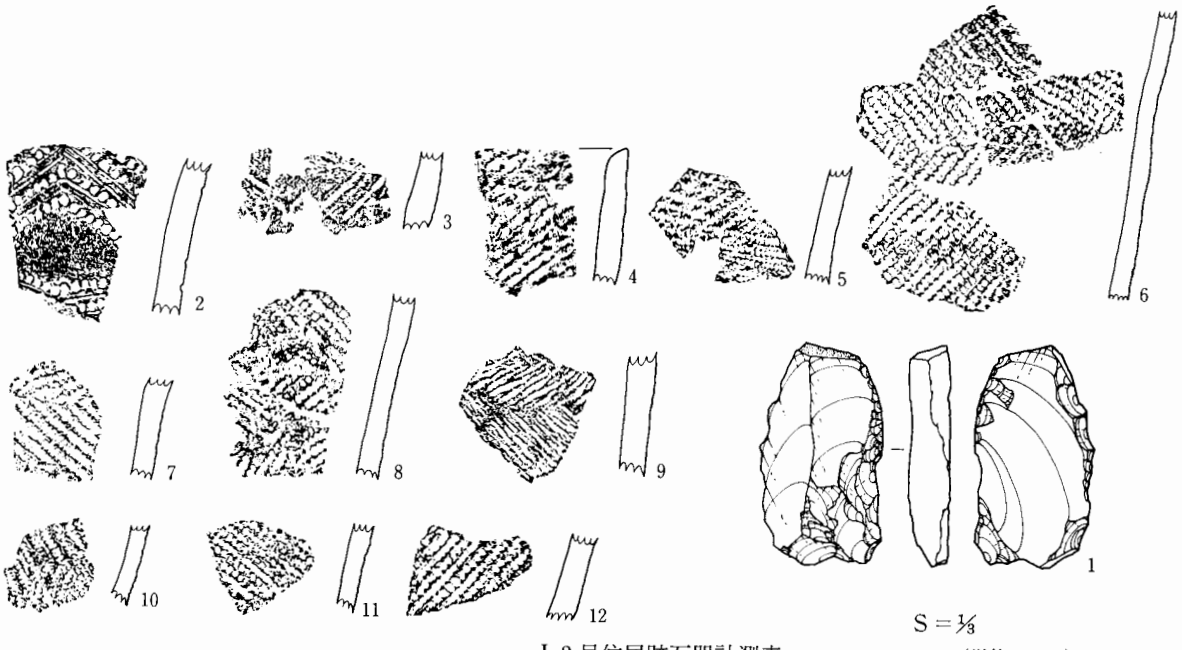
12－11グリッドに位置する。J1号住居跡とJ2号住居跡のほぼ中間である。

南東部には張り出しが認められるが、他の遺構が重複するのか、あるいは壁が崩れたのかの判断はできなかった。径約1.4m、深さ約50cmを測り、張り出し部分を除くとほぼ円形を呈する。底面は平坦で、壁面は急角度で直線的に立ち上がる。遺物は剝片類が数点出土しただけである。



第91図　J2号住居跡





第92図　J2号住居跡出土遺物

J2号住居跡石器計測表　（単位cm・g）

番号	器種	長さ	幅	重さ	石材
1	スクレイパー	8.7	4.7	74.5	黒色頁岩

Ｊ２号土坑

９－７グリッドに位置する。周辺に該期の遺構は近接しない。

長径1.7m、短径1.3mを測り、深さは約30cmである。平面形状は南北に長い卵型を呈する。底面は平坦であるが、壁面の立ち上がりは緩やかである。

遺物は数点の土器片と剝片類が埋土中から出土している。

いづれも胎土に繊維を含むもので、１は胴部にＬＲの縄文を施した後、半裁竹管による平行沈線を１条巡らせたもの。２～５は胴部に節が密となるＲＬとＬＲとによる羽状縄文を施したもので、２は羽状縄文自体も菱形が構成されるように縄文が施されているもの。これらの土器は、黒浜式ないしは有尾式に比定されるものである。

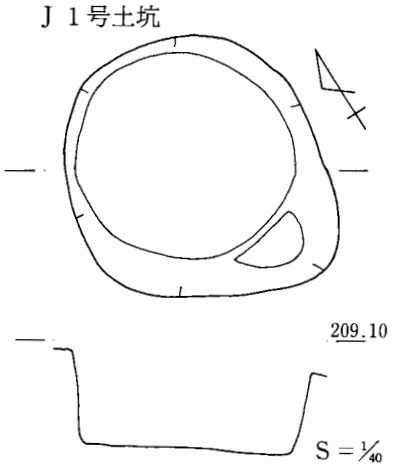
Ｊ３号土坑

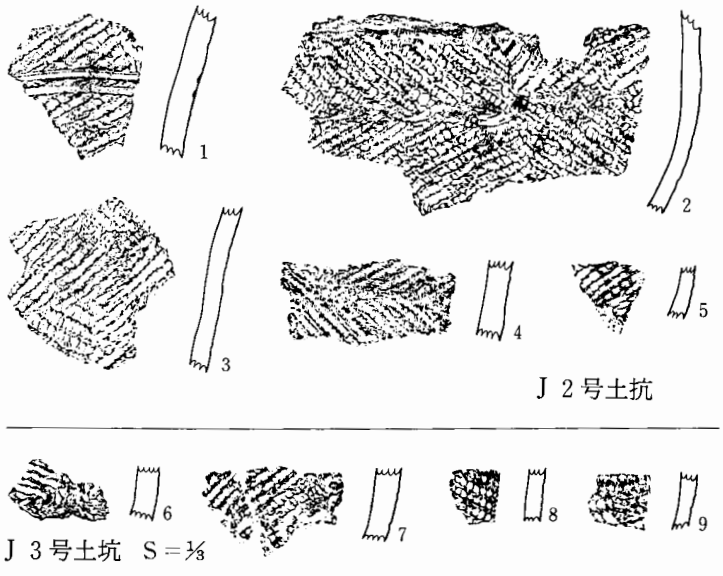
12－９グリッドに位置する。南東約10mにＪ２号住居跡が近接する。

径約1.2mを測り、ほぼ円形を呈する。深さは70cmを測る底面は平坦で、壁は若干角度をもって立ち上がる。南側壁面にわずかであるが中段からの張り出しが認められるが、壁の崩れか他の遺構の重複によるものかの判断は付かなかった。

遺物は土器破片と剝片類が埋土中から出土している。

いづれも胎土に繊維を含むもので、６～９は胴部にＲＬないしはＬＲの縄文が施されるもので、黒浜式ないしは有尾式に比定されるものである。



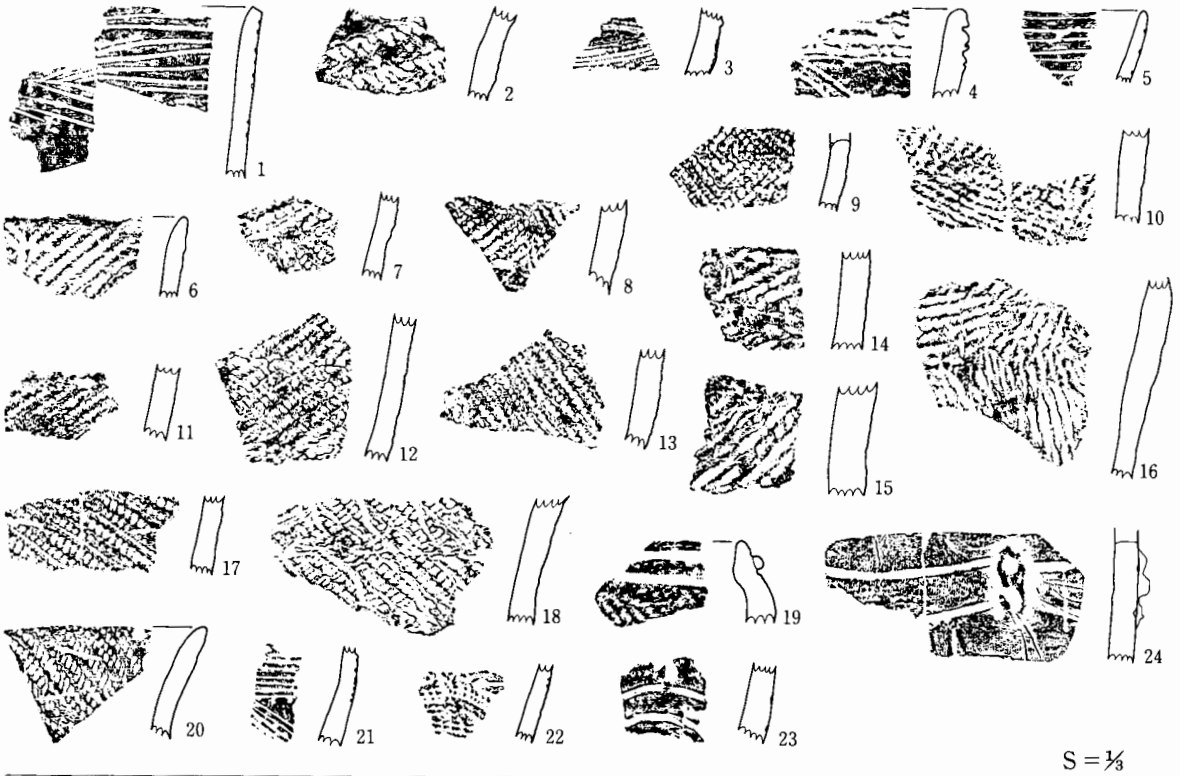


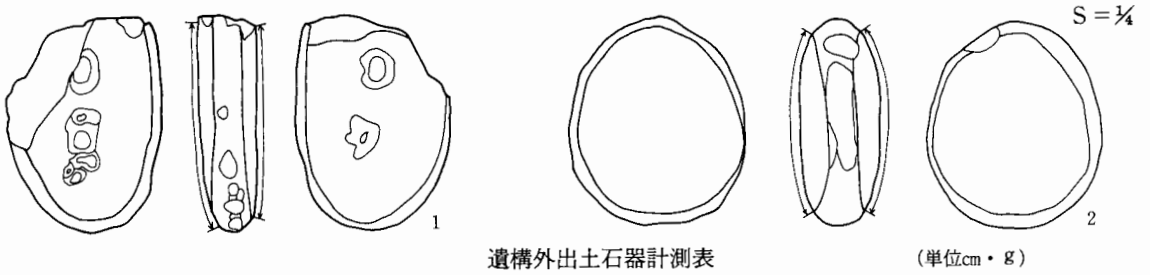
第93図　縄文土坑及び出土遺物

(3) 遺構外出土遺物（ＰＬ33）

本遺跡の遺構外から出土した縄文時代の遺物の量は、第94図に示したとおり余り多くはない。前期のものを主体として、中期・後期のものが数点出土したのみである。

1は平口縁となる口縁部に半裁竹管による沈線で文様を描くもの。2～18は胎土に繊維を含むもので、2は胴部にループ状の縄文を数段施すもの。3は口縁部に櫛歯状工具による沈線と刺突を施すもの。4は口縁部に半裁竹管による沈線で菱状の文様を描くもので、沈線間には櫛歯状工具による刺突が施されている。5は口縁部に半裁竹管で平行沈線が数条施されている。6～10・18は口縁部ないしは胴部に羽状縄文が施されているもので、節が密となるないしは0段3条によるＬＲとＲＬとを用いたもの。18は1本付加による付加条の縄によるもの。11～14は0段多条の縄が施されたもの。16は前段反撚りの縄を用いたもの。20は口縁部以下にＲＬを施したもの。21は胴部に集合沈線を矢羽根状に施すもの。22は胴部に貝殻腹縁による文様が施されたものである。23は口縁部に太い沈線が施されたもの。24は刺突をもつ突起を貼付し、平行沈線を施すとともに、その下にも縦位の沈線を施しているものである。





第94図　遺構外出土遺物

遺構外出土石器計測表　（単位cm・g）

番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
1	磨石	10.6	8.5	405	粗粒安山岩
2	磨石	10.1	9.4	580	粗粒安山岩

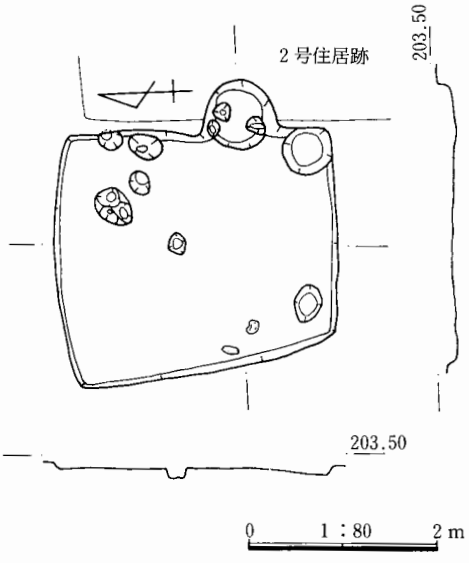
2．平安時代の竪穴住居跡

1号住居跡（観P115、PL26）

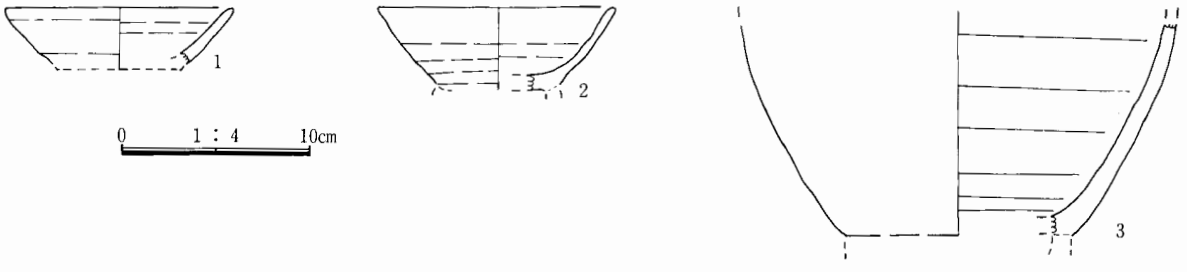
2－2グリッドに位置する。東側に2号住居跡が重複し本跡が古い。検出面から浅く、耕作等の影響もあり残存状況は余り良好ではない。

平面形は南壁が北壁より短く、台形状を呈している。規模は東西2.7m、南北3.0m、深さ10cm前後を測る。方位はN－3°－Wである。床面はカマドから中央部にかけては比較的堅緻である。南東隅には径約50cm、深さ5cmの浅い土坑が検出されており、貯蔵穴の可能性がある。これ以外にも小ピットが数個検出されたが、ほとんどは撹乱と思われる。カマドは東壁南寄りに付設されており、燃焼部が壁外に位置している。

遺物はカマド内や南半部床面から少量出土しただけである。実測可能な器種は須恵器坏、埦、甕である。



第95図　1号住居跡



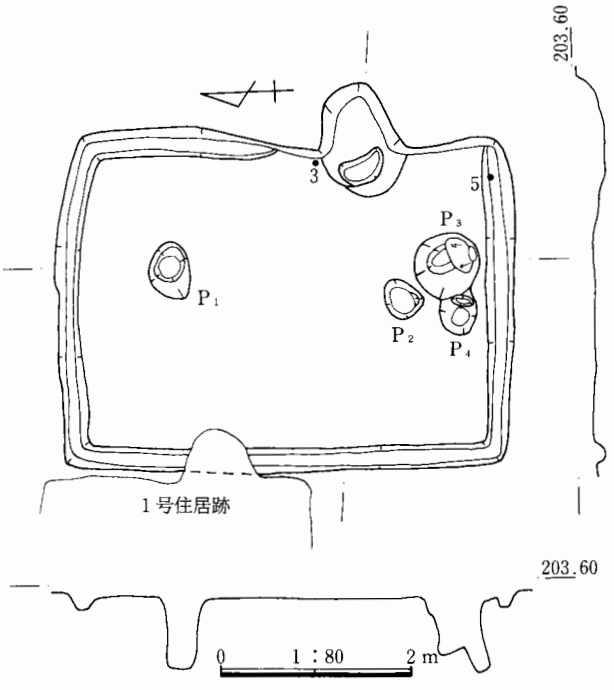
第96図　1号住居跡出土遺物

2号住居跡（観P115、PL26・34）

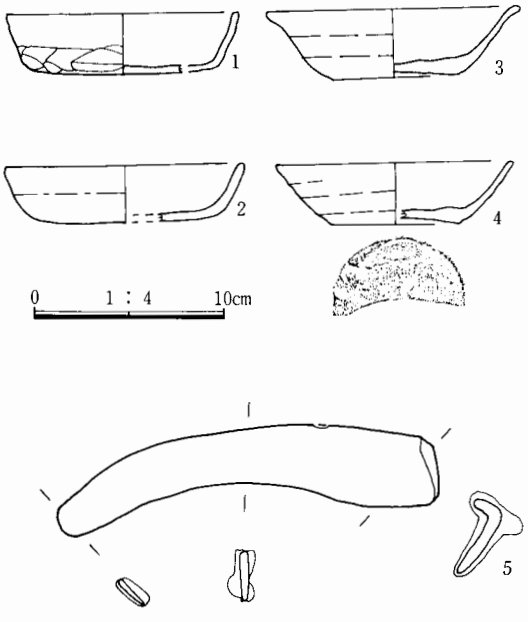
2－2グリッドに位置する。西側に1号住居跡の竈部分が重複し、本跡が新しい。南約2mに1号掘立柱建物跡、東約3mに3号掘立柱建物跡、約5mに3号住居跡が近接する。

規模は東西3.6m、南北4.8m、深さは北壁で15cm、南壁で約3cmを測る。平面形状は東壁が竈部分で内側に若干張り出すものの、整った長方形状を呈している。方位はN－2.5°－Eである。床面は全体的に非常に良く踏み固められている。竈周辺を除いて明瞭に壁周溝が巡っている。幅14～22cm、深さ10～15cmを測る。柱穴は南北軸周辺に4基が検出されており、深さ約75cmを測るP1・P2が主柱穴の可能性がある。P3・P4については出入口に関係するピットの可能性もあるが、性格については不詳である。竈は東壁の南寄りに付設されている。燃焼部が過半が壁外に位置するタイプである。

遺物は竈の左脇から鉄滓の付着した須恵器坏、また、平面図には表記していないが南東隅に検出されたピット内から鉄鎌が出土している。このほか埋土中から土師器・須恵器の坏が出土している。



第97図　2号住居跡



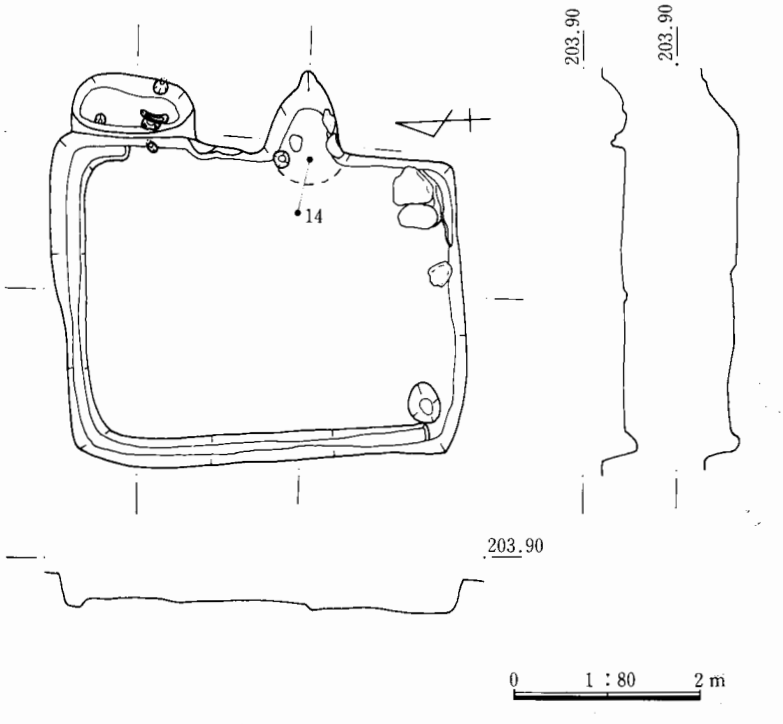
第98図　2号住居跡出土遺物

3号住居跡

（観P115、PL26・34）

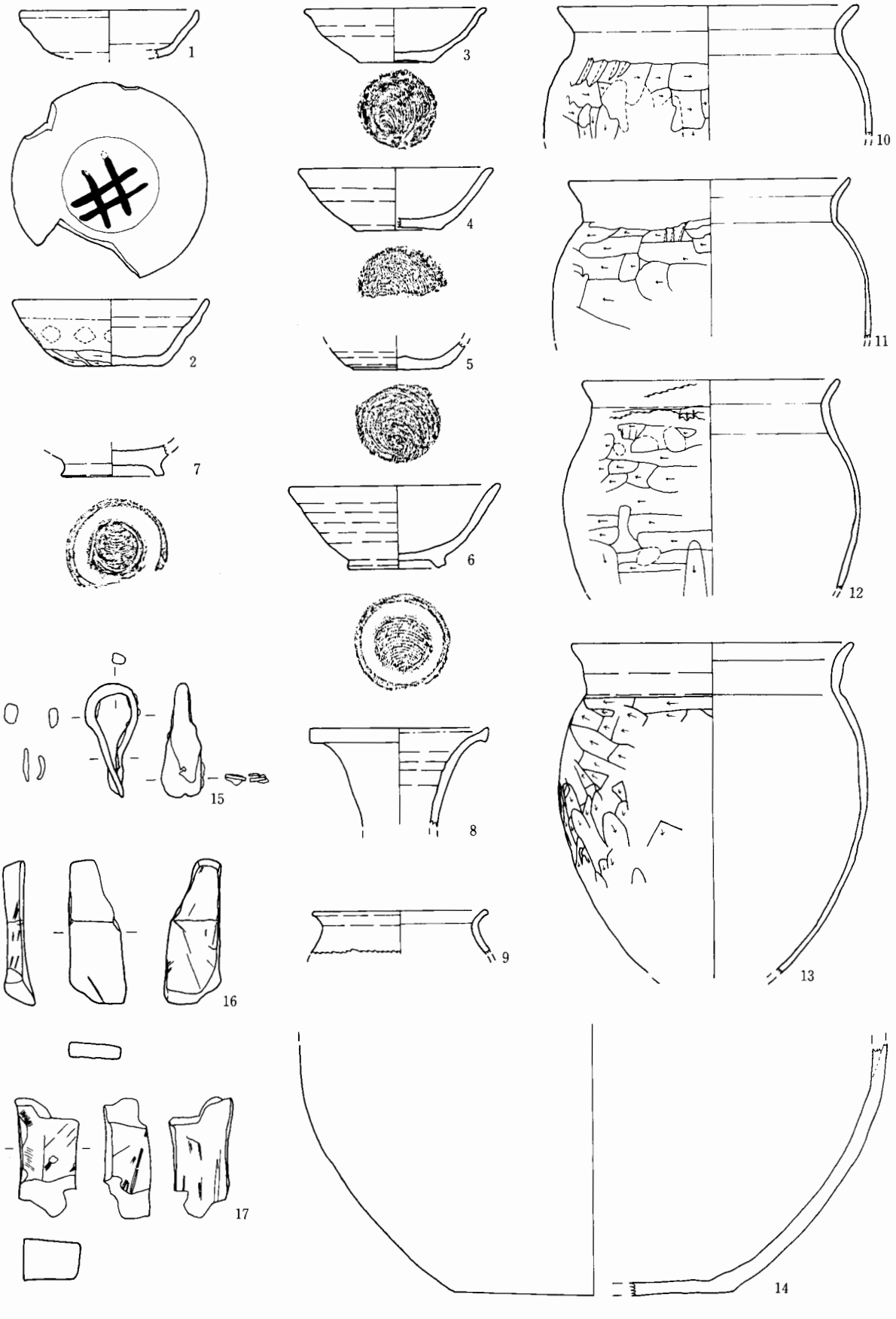
2－3グリッドに位置する。西約5mに2号住居跡、東約6mに4号住居跡、北約4mに6号住居跡が近接する。また、6号掘立柱建物跡が北側に接し、3号掘立柱建物跡も約2mに近接する。

東西約3.9m、南北約4.3m、深さ25cm前後を測り、長方形を呈するが、南壁が北壁より短く歪みがある。壁は各面とも若干の角度をもって立ち上がる。床面はほぼ全体的に良く踏み固められている。北・西壁際には幅16～20cm、深さ5～13cmの壁周溝が巡っている。主柱穴は検出されなかったが、南西隅に小ピットが検出された。なお、東壁北端に接して土坑が検出されているが、位置関係等により本跡の貯蔵穴の可能性を考えておきたい。竈は東壁の若干南寄りに付設されている。燃焼部の大半が壁外に位置するタイプで、南側に補強のための礫が残存していた。



第99図　3号住居跡

遺物は竈周辺を中心に、土師器坏・甕、須恵器坏・埦・甕、砥石、鉄製品などが大量に出土している。



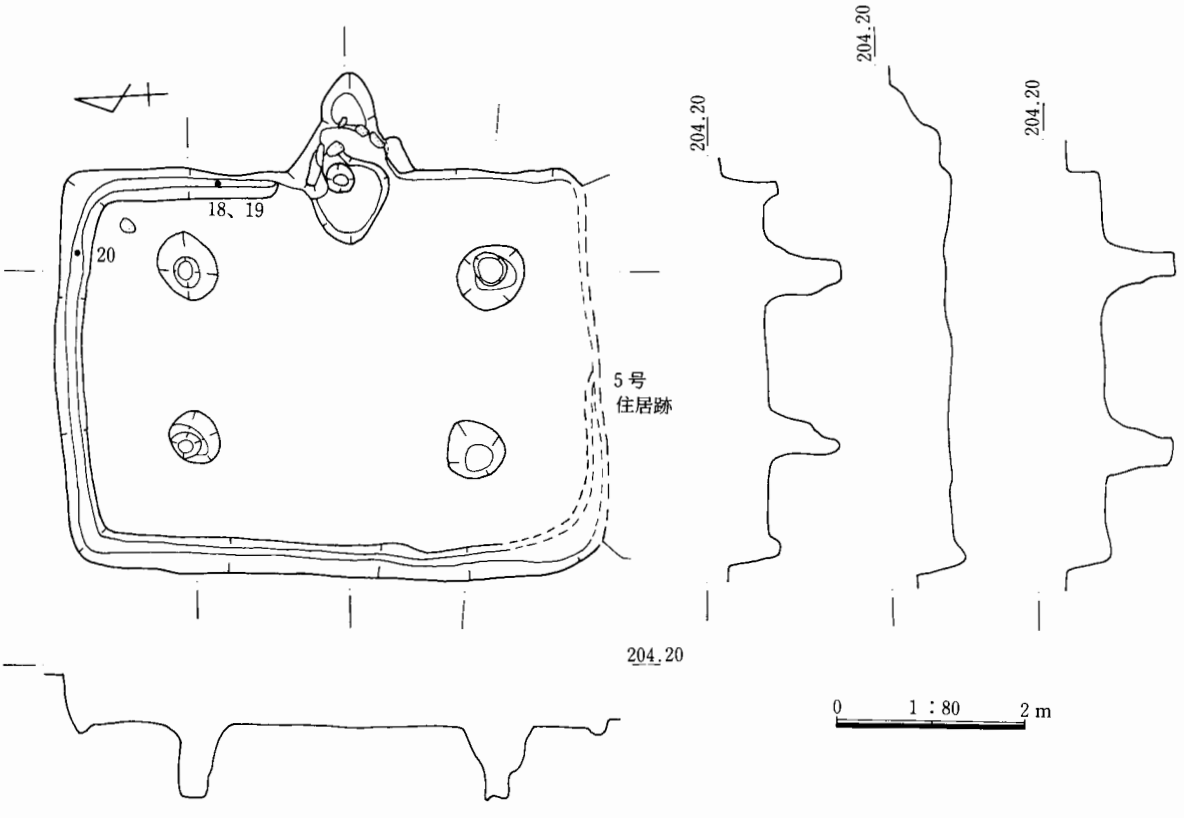
第100図　3号住居跡出土遺物　　0　1：4　10cm

4号住居跡（観P116、PL26・34）

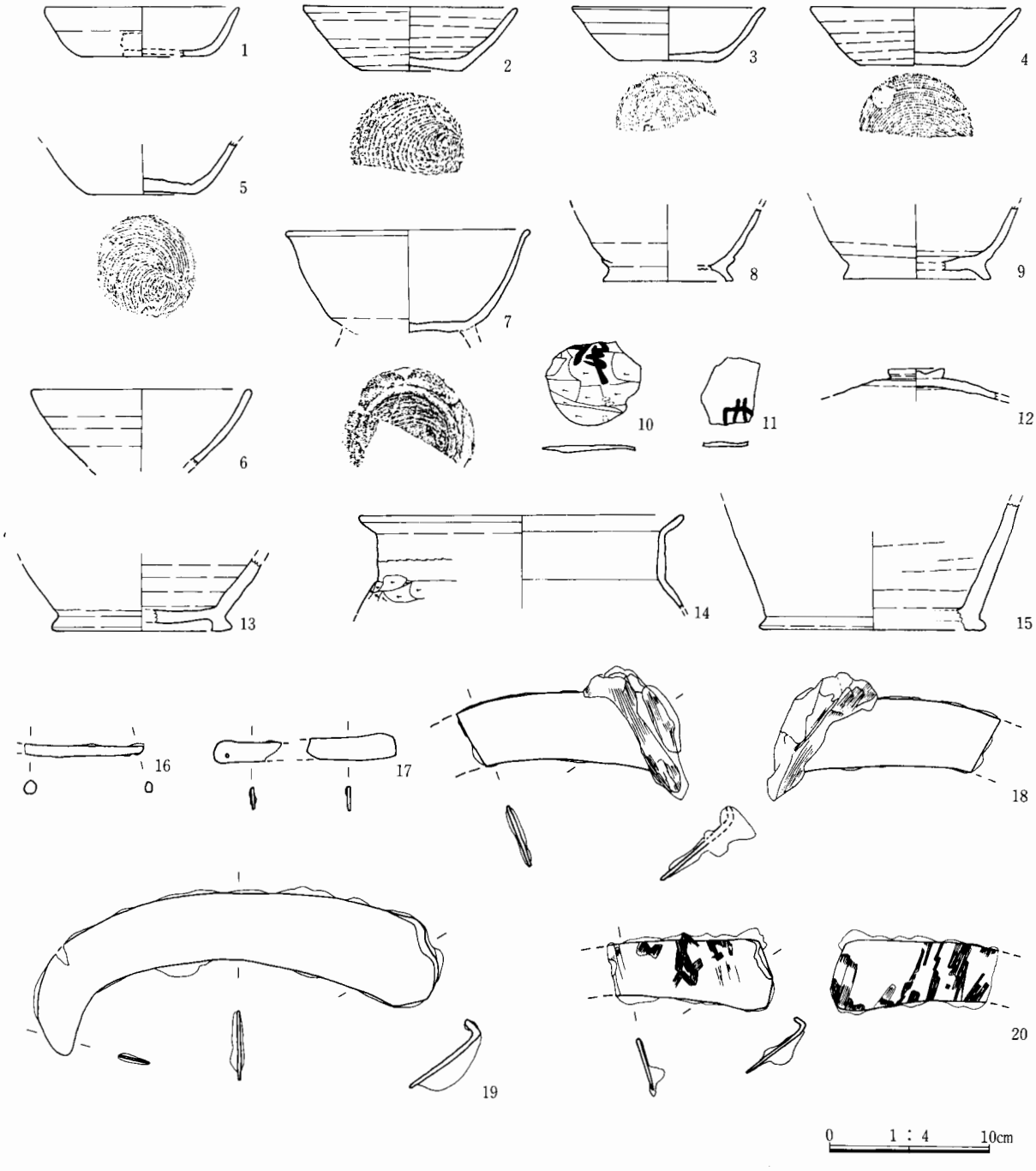
1・2－4グリッドに位置する。南壁に5号住居跡が重複する。西6mに3号住居跡、北3mに7号住居跡が近接する。また、北約2mに4号掘立柱建物跡、東6mに5号掘立柱建物跡も近接する。

規模は東西4.2m、南北約5.7m、深さ約50cmを測る。平面形は各壁の中央部がわずかに外方に張っているものの、比較的均整のとれた長方形を呈している。方位はN－3.5°－Eである。壁は各面とも比較的直に立ち上がる。床面は周縁部を除いて堅緻である。壁周溝は東壁北半から北・西壁にかけて巡っている。南壁の西半部にも巡っていると思われるが、5号住居との重複の為か判然としない。主柱穴は対角線上に4基検出された。柱穴掘り方の規模は径50～70cm、深さ73～82cmを測りほぼ一定している。また、柱痕部の検出されたものもある。断面形は中段から上が開くものが多い。竈は東壁のほぼ中央に付設されている。燃焼部は過半部が壁内に位置する。煙道は燃焼部からいったん直に立ち上がり、さらに斜めに壁外に伸びている。煙道の一部に礫が残存しており、補強材と思われる。

遺物は土師器坏・甕、須恵器坏・埦・甕等が出土しているが、残存状態は良好ではない。なお、鉄鎌3点が東壁際と北壁周溝中から出土しており特筆される。また、破片であるが墨書土器も2点出土している。



第101図　4号住居跡

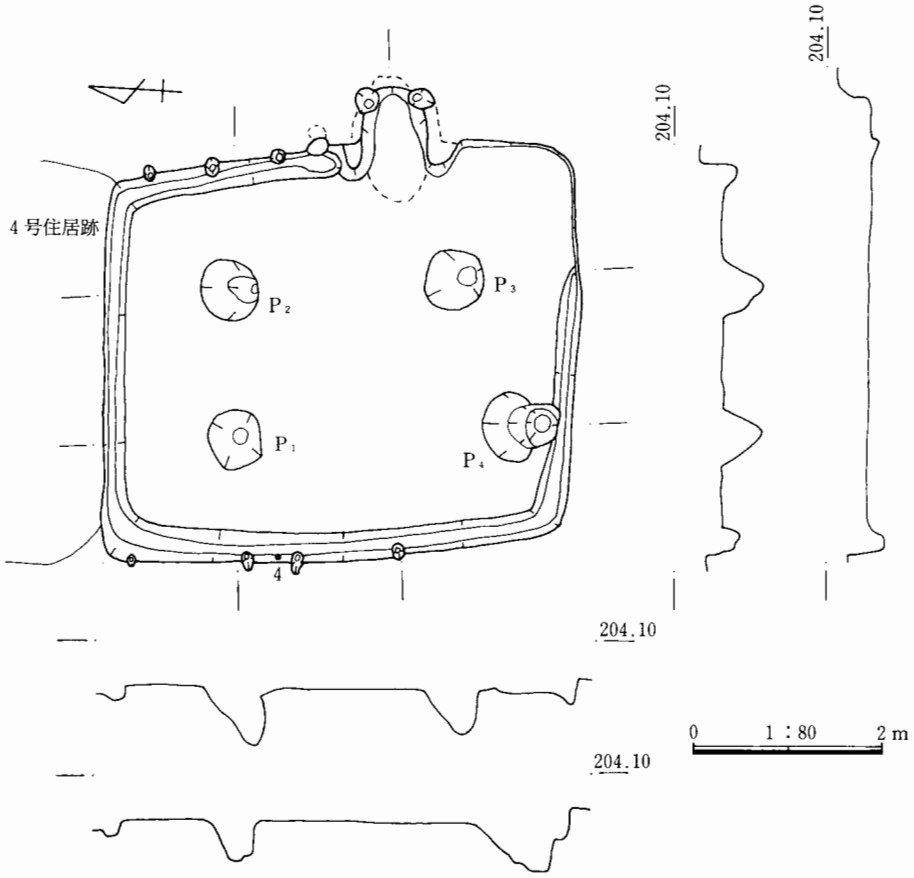


第102図　4号住居跡出土遺物

5号住居跡（観P117、PL27・35）

1－4グリッドに位置する。4号住居跡が北端に重複しているが、新旧関係は判然としない。

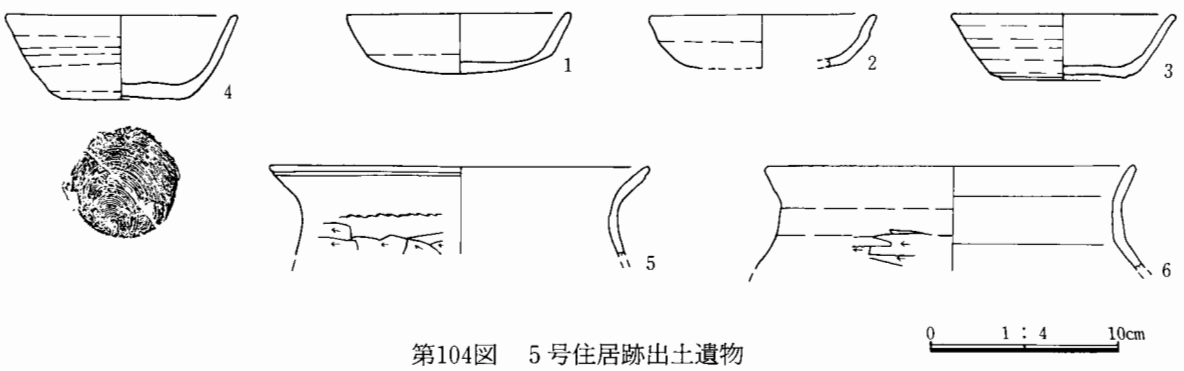
規模は東西4.1m、南北5.0m、深さ30cmを測る。平面形は全体的に若干の歪みがあるが長方形を呈する。方位はN－8.0°－Wである。壁の立ち上がりは各壁とも直である。床面は北端部を除いて堅緻である。竈から南東部にかけての部分を除いて壁周溝が巡っている。幅約20cm、深さ10～20cmを測る。主柱穴は対角線上に3基が位置するが、南西の1基は南壁寄りに偏している。柱穴掘り方の規模は径50～60cm、深さ45cm前後を測るが、P2は深さ約60cmと若干深い。また、P4は壁際のためか柱穴の掘り方が屋内側に偏して掘られて



第103図　5号住居跡

いる。特筆すべき施設として西壁・東壁に各4基づつ検出された小ピットがある。径10cm前後、深さ20～30cmを測り、竈脇の1基が斜めに掘り込まれている以外はほぼ直に掘り込まれている。竈は東壁に若干南に偏して付設されている。屋内外に燃焼部がほぼ半々かかるタイプで、ローム粘土の袖が残存する。煙道の両脇には小ピットが検出されており、補強のための礫の抜き痕の可能性がある。

遺物は土師器坏・甕、須恵器坏等が西壁面、主柱穴内などから少量出土しただけである。



第104図　5号住居跡出土遺物

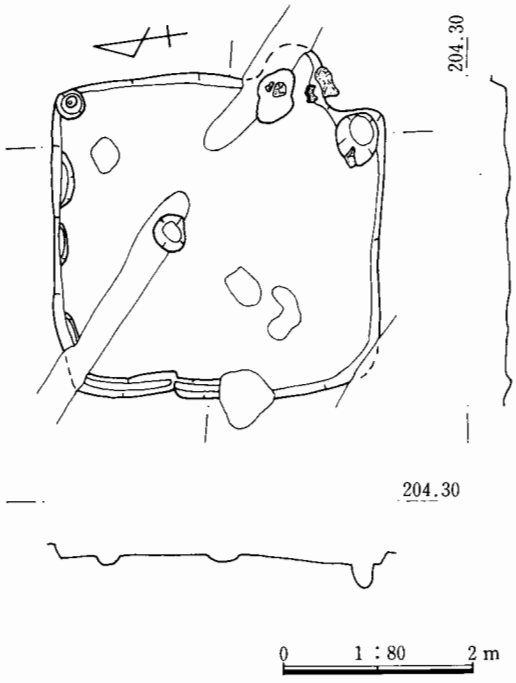
6号住居跡（観P118、PL27・35）

3－3杭上に位置する。3号掘立柱建物跡と重複し、本跡が新しいと思われる。南西約2mに6号掘立柱建物跡、南4mに3号住居跡、東約4mに4号掘立柱建物跡、6mに7号住居跡、北5mに8号住居跡が近

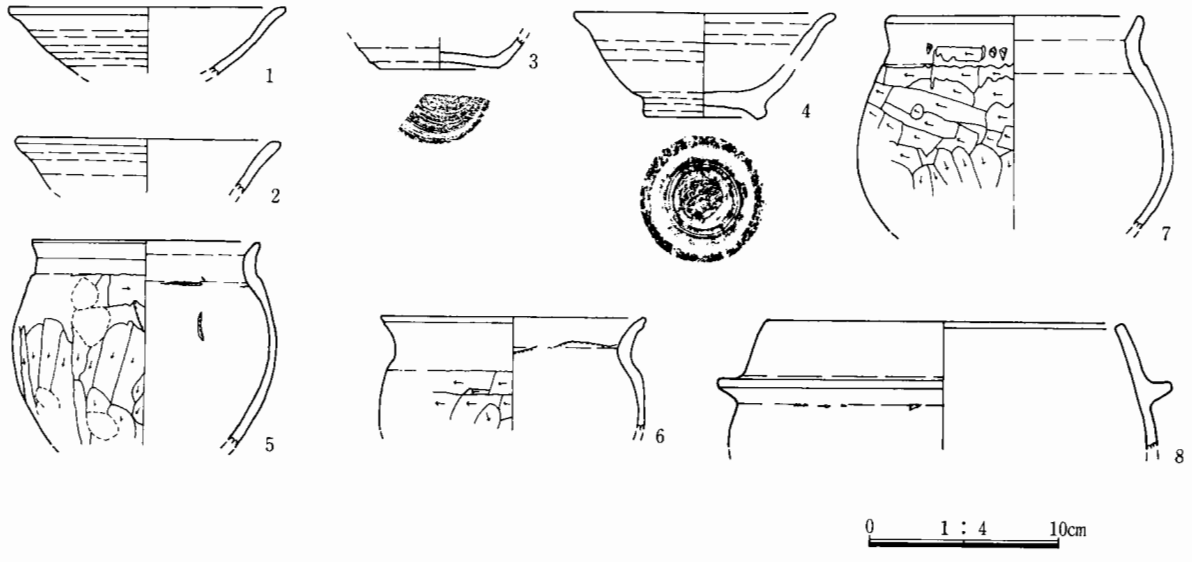
接する。検出面から浅く、耕作による撹乱が激しい。

東西3.3m、南北約3.5m、深さ10～18cmを測り、歪んだ正方形状を呈する。床面は竈前面から住居中央部にかけては堅緻であるが、周縁は軟弱である。北壁から西壁にかけて、壁周溝が断続的に認められる。南東隅には土坑があり、貯蔵穴の可能性がある。主柱穴については判然としないが、住居中央部北寄りと北東隅には小ピットが検出されている。竈は東壁のかなり南に寄った位置に付設されているが、北半部は耕作溝により削平されている。燃焼部の大半が壁外に位置するタイプと思われる。燃焼部の壁面には礫が残存しており、補強材と思われる。

遺物は竈内及び周辺を中心に土師器甕、須恵器坏・埦、羽釜が出土している。



第105図　6号住居跡



第106図　6号住居跡出土遺物

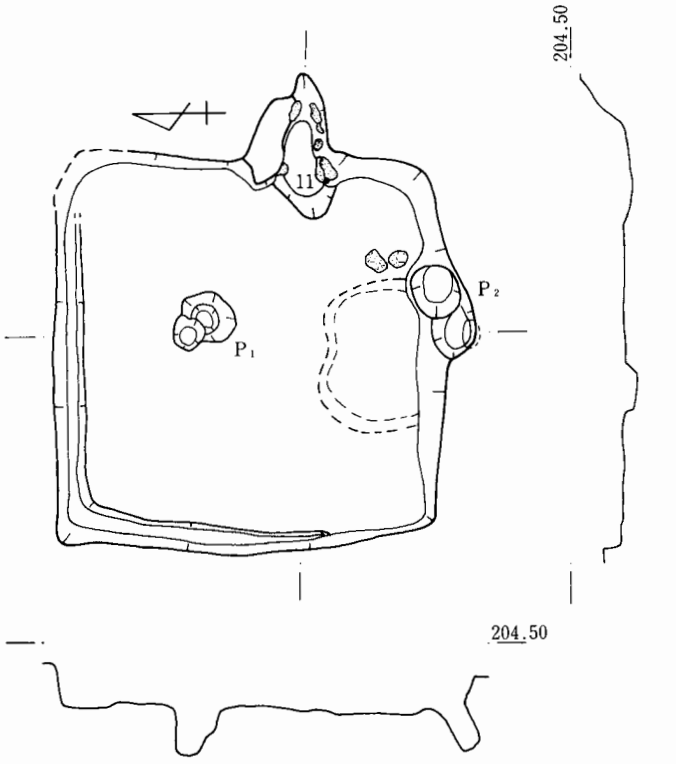
7号住居跡（観P119、PL27・35）

3－4杭の西側に接して位置する。4号掘立柱建物跡と重複し、本跡が古い。南4mに4号住居跡、西6mに6号住居跡、東3mに5号掘立柱建物跡が近接する。

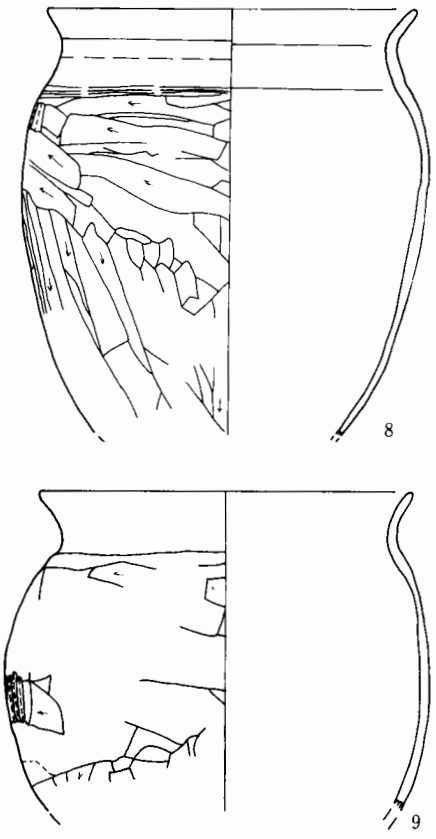
東西4.1m、南北4.2m、深さ22～45cmを測り、多少の歪みはあるものの正方形状を呈している。壁は南壁は角度をもって立ち上がるが、他の3面はほぼ直に立ち上がる。床面は床下土坑等により凹凸があるが、南端を除き良好に踏み固められている。壁周溝は北～西壁際に認められた。主柱穴は南北軸上の2ケ所に検出されたものが該当すると思われるが、P2は南壁中に深く斜めに掘り込まれている。竈は東壁の南寄りに付設されている。燃焼部の過半が壁外に位置するタイプで、壁面は石材により補強されている。また、須恵器

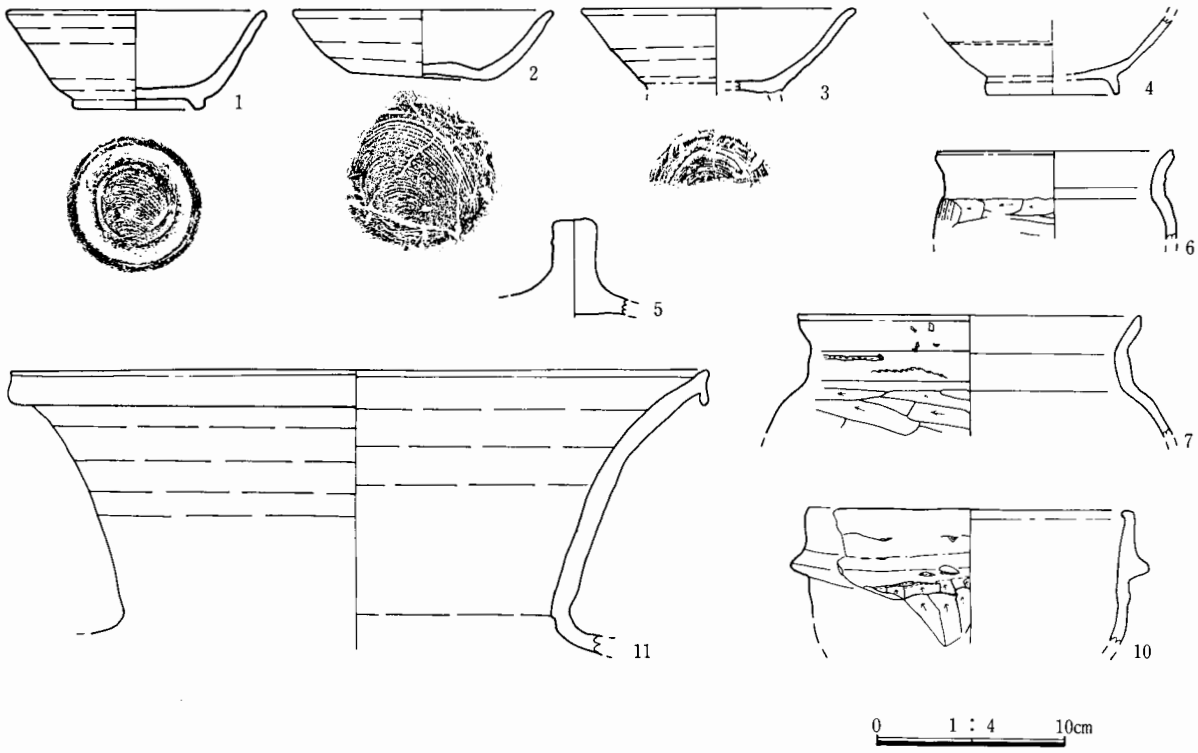
大甕の口縁部破片も補強材として用いられていた。

遺物はそのほかに竈内を中心にして土師器甕、須恵器坏・埦、灰釉陶器埦、羽釜等が出土している。



第107図　7号住居跡



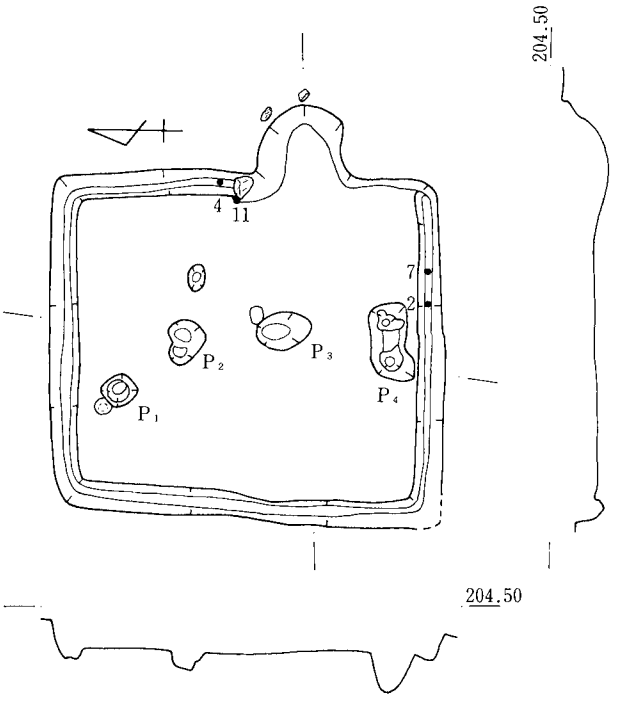


第108図　7号住居跡出土遺物

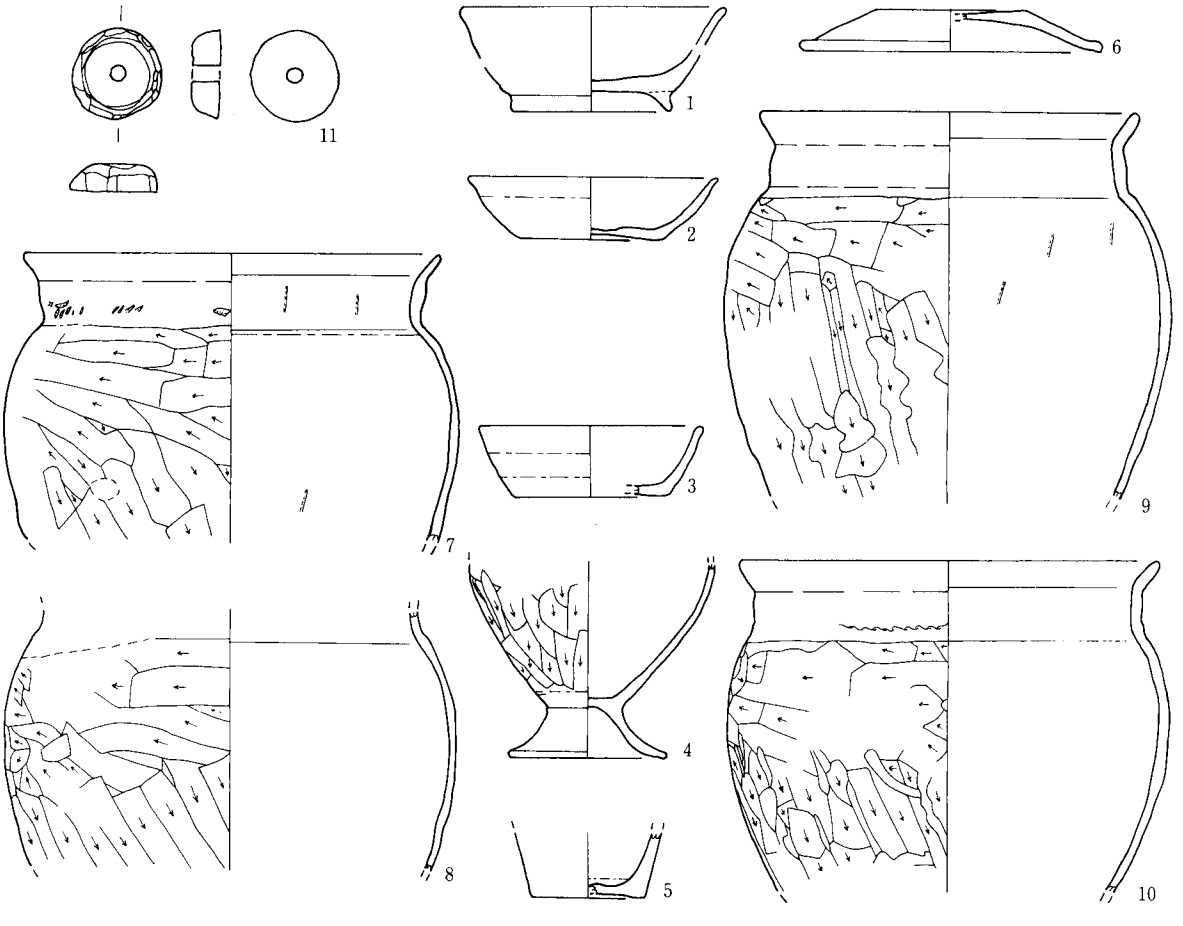
8号住居跡（観P119、PL28・35）

4－3杭上に位置する。南6mに6号住居跡が近接する。

東西3.6m、南北4.2m、深さ20～32cmを測る。平面形は南壁が北壁よりも若干長いが、長方形を呈する。壁面は角度をもって立ち上がる。床面は多少の凹凸があるものの、堅緻である。東壁の南半を除いて壁周溝が巡っている。幅10～18cm、深さ3～10cmを測る。柱穴は6基検出されているが、南北軸に絡むP2、P4は主柱穴の可能性がある。竈は東壁の南に寄った位置に付設されている。燃焼部のほとんどが壁外に位置する。北壁面に残る礫は袖の補強材の可能性がある。遺物は土師器甕・脚付き小型甕、須恵器坏・埦・蓋などが出土している。また、竈前面の床直で石製紡錘車が出土した。



第109図　8号住居跡　0　1：80　2m



第110図　8号住居跡出土遺物　0　1：4　10cm

9ａ・ｂ号住居跡（観Ｐ120、ＰＬ28・35）

３－６杭の南西に接して位置する。９ｂ号住居跡の東側過半部に９ａ号住が乗る状態で検出されており、９ａ号住居跡が新しい。

9ａ号住居跡

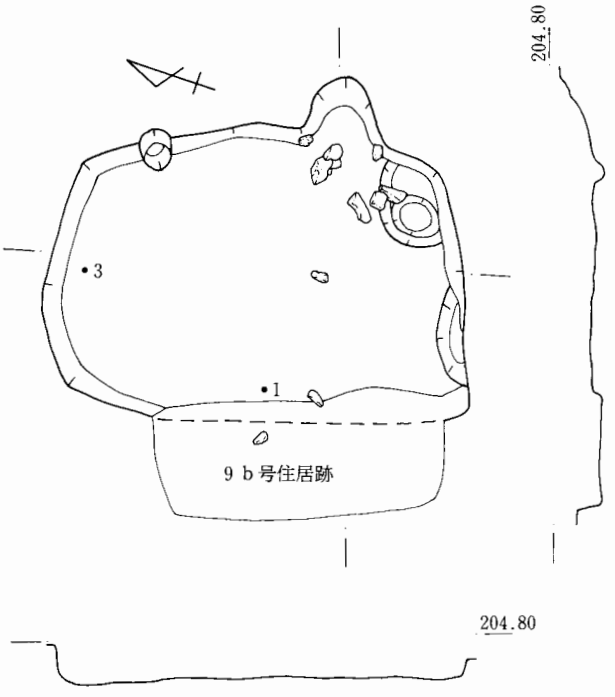
東西2.9m、南北3.3m、深さ20～31cmの規模を測るが、北・東壁が屈曲しているため、かなり歪んだ横長長方形状を呈する。壁面は特に南壁が緩やかに立ち上がる。また、９ｂ号住居跡と重複する西壁は明瞭には捉えられていない。床面は９ｂ号住居跡との重複部分は軟弱である。南東隅には土坑が検出されている。竈は東壁のかなり南に偏した位置に付設されている。燃焼部の両脇に小礫が残存し、燃焼面にも礫が出土したことから補強されていたものと思われる。

遺物は土師器甕、須恵器坏、石製紡錘車等が少量出土した。

9ｂ号住居跡

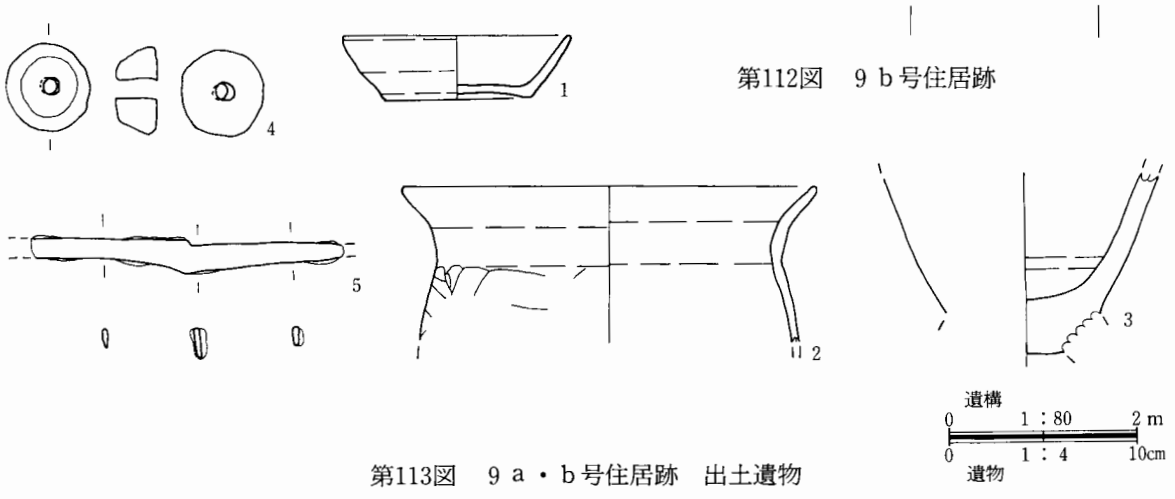
東西3.3m、南北3.0m、深さ20～32cmの規模である。平面形は縦長の隅丸長方形を呈す。壁の立ち上がりは比較的直であるが、北・南壁の一部は撹乱により不明瞭である。床面は全体的に比較的堅緻である。竈は東壁の南に寄って付設されているが、９ａ号住居跡竈前面の床下土坑の撹乱により、不明瞭な部分がある。掘り方は方形気味である。

遺物は須恵器瓶の破片と刀子が出土した。

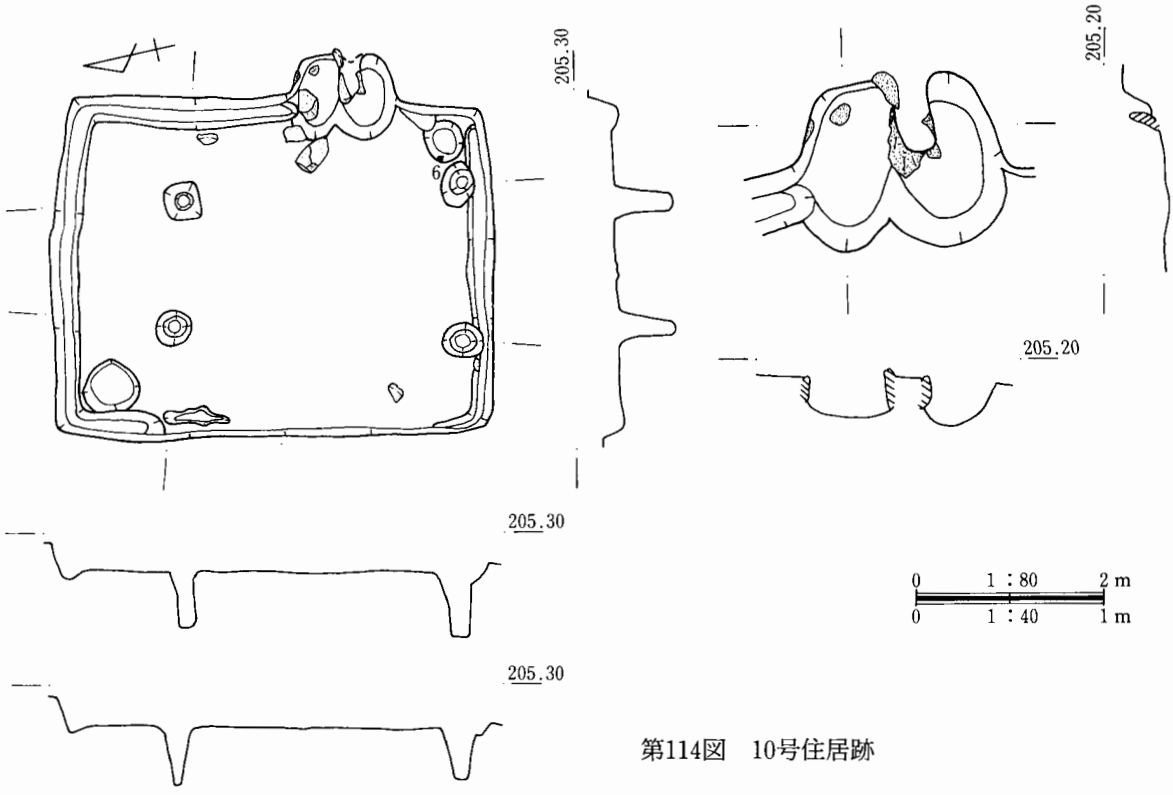


第111図　９ａ号住居跡　0　1：80　2 m

第112図　９ｂ号住居跡



第113図　９ａ・ｂ号住居跡　出土遺物



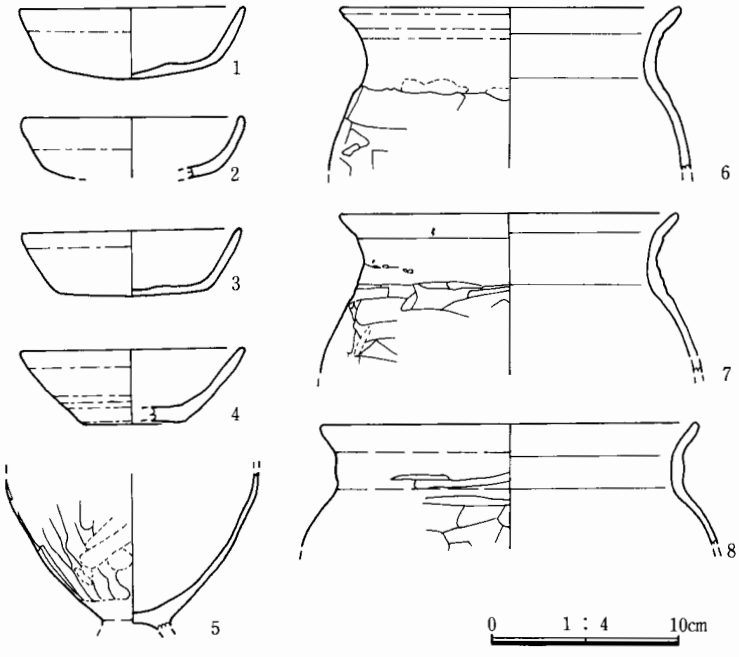
第114図　10号住居跡

10号住居跡（観Ｐ120、ＰＬ28・35）

４－６グリッドに位置する。北３ｍに12号住居跡、東６ｍに11号住居跡が近接する。

規模は東西3.5m、南北4.6m、深さ５～33cmを測り、平面形状は比較的整った横長長方形を呈する。壁面は各面ともに若干の角度をもって立ち上がる。床面はほぼ全面が堅緻である。壁周溝は東壁南半部と西壁中央部を除いて巡っている。幅20cm前後、深さ５～８cmと浅い。主柱穴は北寄りの２基がほぼ対角線上に位置するが南側の２基は南壁のすぐ内側に位置している。柱穴の規模は径40cm前後、深さは60cm前後とほぼ一定している。南東隅と北西隅に土坑が検出され、貯蔵穴の可能性もある。竈は東壁の南寄りに付設されており、作り替えが行われている。どちらも燃焼部の大半が壁外に出るタイプであるが、北側の竈は礫によって補強されている。出土状態から判断すると北側の竈が新しいと思われる。

遺物は土師器坏・甕、脚付小型甕、須恵器坏が出土している。



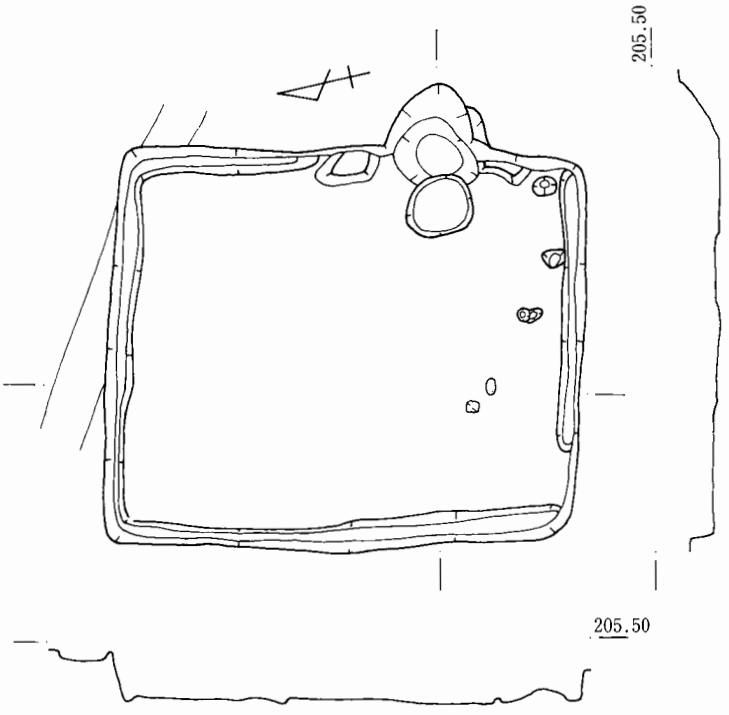
第115図　10号住居跡出土遺物

11号住居跡（観P121、PL29・35）

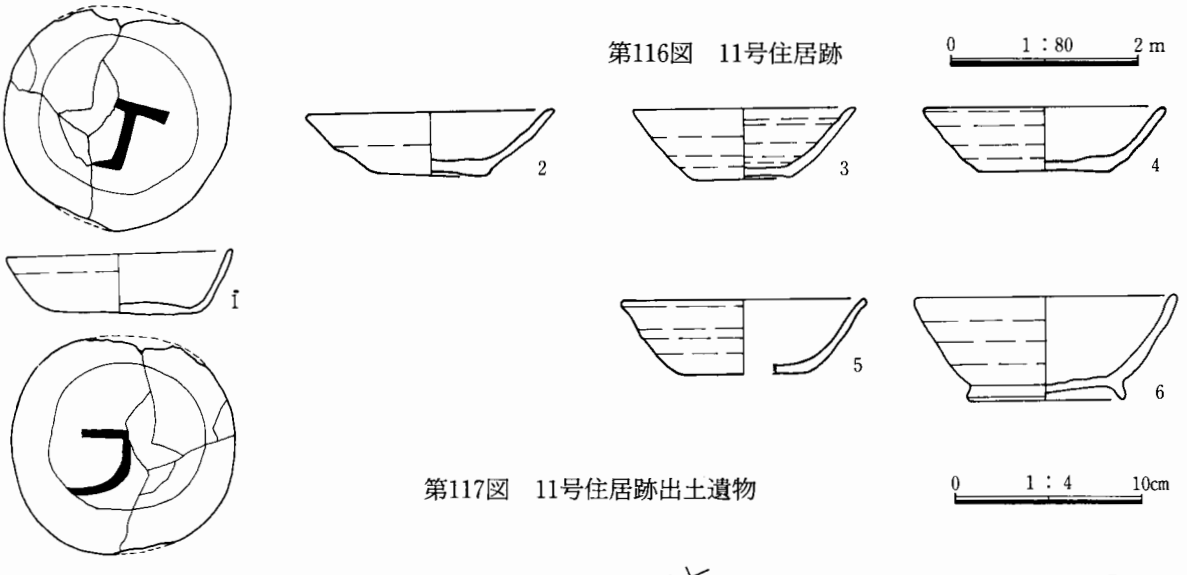
4－7杭西側に位置する。西6mに10号住、北6mに8号掘立柱建物跡が近接する。

東西4.1m、南北5.0m、深さ23～42cmを測る。平面形は横長長方形を呈する。壁面は若干の角度をもって立ち上がる。床面は凹凸があるものの堅緻である。竈周辺と南西隅を除いて壁周溝が巡っている。幅12～21cm、深さは4～9cmと浅い。竈は東壁の南寄りに付設されており、ローム袖の一部が残存していた。燃焼部は壁内外にほぼ半々の割合で位置する。

遺物は須恵器坏・埦等が出土した。



第116図　11号住居跡　0　1：80　2m

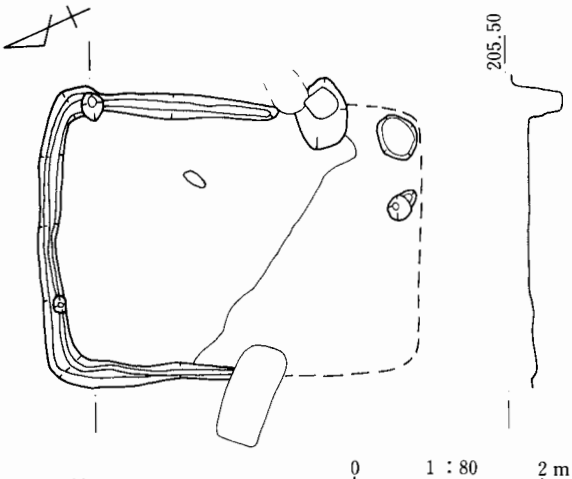


第117図　11号住居跡出土遺物　0　1：4　10cm

12号住居跡（PL29）

5－6杭の西側に位置する。南3mに10号住居跡、北側に13号住居跡が近接する。南側半分弱は削平されている。

東西3.1m、深さは北壁で20cmを測る。南北は南東隅の土坑の位置から判断すると約3.9m前後と思われる。床面は比較的堅緻である。北側過半部には壁周溝が検出されている。幅約20cm、深さは5cm以下と浅い。竈は東壁のかなり南に偏した位置に付設されている。燃焼部が壁内外におよそ



第118図　12号住居跡　0　1：80　2m

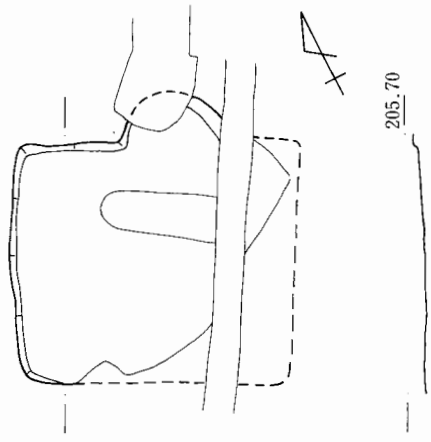
半々に位置するタイプである。遺物は出土していない。

13号住居跡（ＰＬ29）

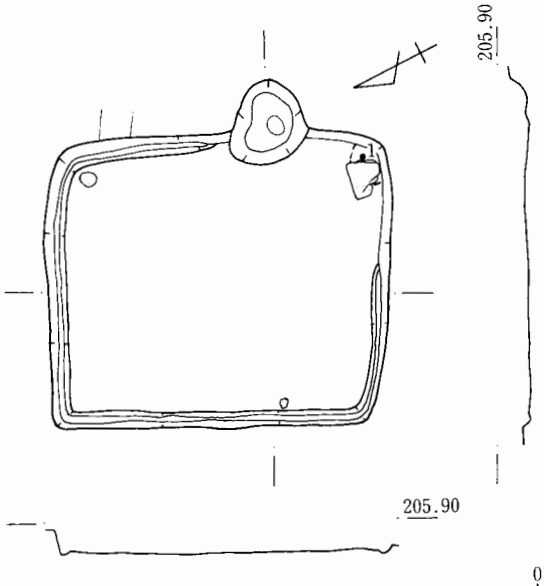
６－６杭の南西に位置する。南に12号住、東５ｍに８号掘立、７ｍに14号住居跡が近接する。南側は削平されており、また、残存部も耕作に伴う溝に撹乱されている。

規模は東西2.5ｍで、南北は削平のため不明である。床面は軟弱である。竈は東壁のほぼ中央と推定される位置に付設されている。燃焼部が壁内外にほぼ半々で位置するタイプと思われるが、住居の規模に比すと大きめである。

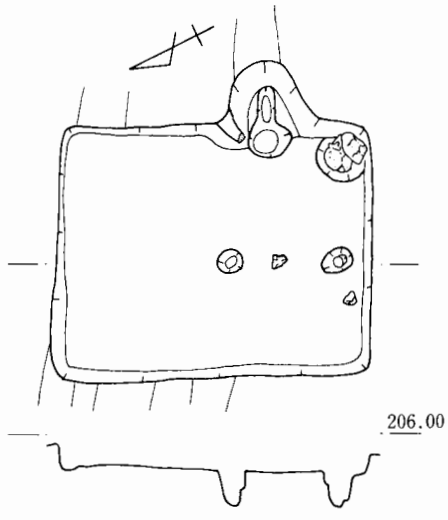
遺物は出土していない



第119図　13号住居跡



第120図　14号住居跡



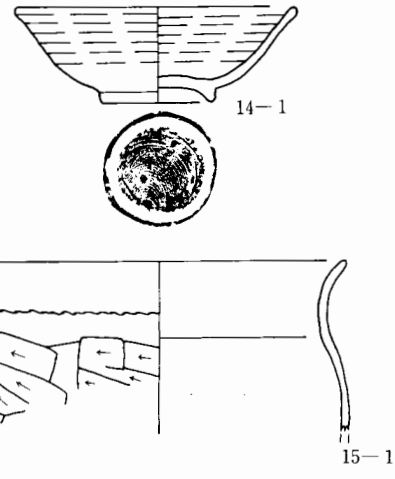
第121図　15号住居跡

14号住居跡（観Ｐ121、ＰＬ29・36）

５－７グリッドに位置する。８号掘立柱建物跡と重複する。

規模は東西3.0m、南北3.6m、深さ１～26cmを測り、長方形を呈す。壁の立ち上がりは比較的直である。床面は平坦で、ほぼ全面が堅緻である。南東隅部を除いて壁周溝が巡っている。幅15cm前後、深さ５cmを測る。竈は東壁の南寄りに付設されている。燃焼部は壁内外にほぼ半々位置する。

遺物は南東隅の土坑内から須恵器の塊が１点出土した。



第122図　14・15号住居跡　出土遺物

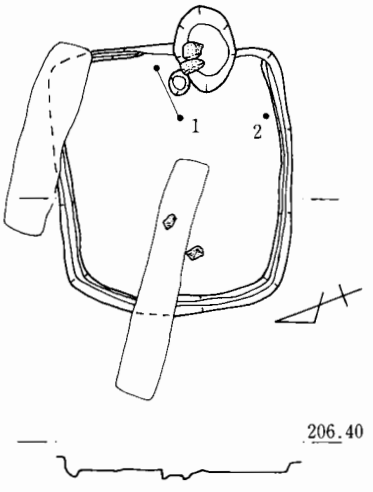
15号住居跡（観Ｐ122、ＰＬ29）

５－７杭の東側に位置する。西約５ｍに14号住居跡、北東４

mに16号住居跡が近接する。

規模は東西2.6m、南北3.3m、深さ20～32cmを測る。平面形状は横長長方形である。壁面は直に立ち上がる。床面は比較的堅緻である。南北軸上に検出された柱穴は主柱穴の可能性がある。径30cm前後、深さ40cm弱を測る。南東隅には土坑が検出され、内部から礫が出土している。竈は東壁の南寄りに付設されている。燃焼部は過半が壁外に位置し、ローム袖がわずか残存していた。

遺物は土師器甕等が少量出土しただけである。

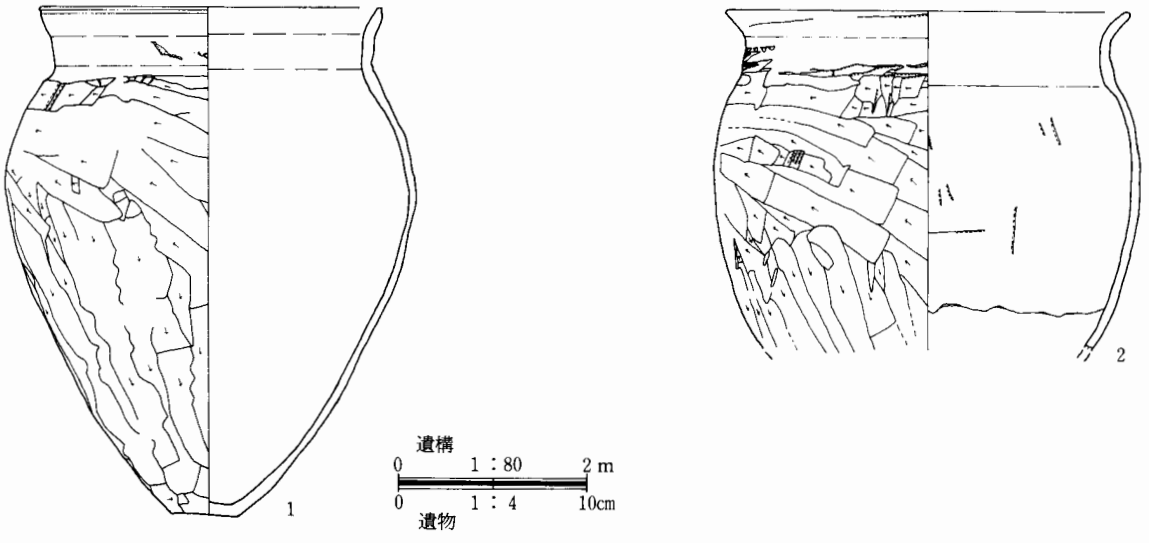


第123図　16号住居跡

16号住居跡（観P122、PL30・36）

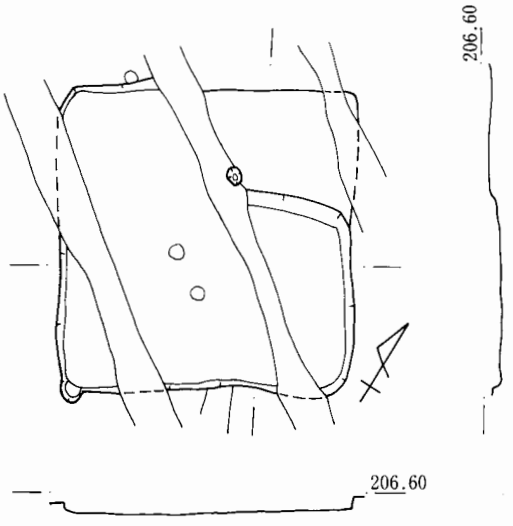
5－8グリッドに位置する。南西4mに5号住居跡が位置する。

規模は東西2.7m、南北2.4m、深さ5～14cmを測る。平面形は



第124図　16号住居跡出土遺物

西側が外方に丸みを持っているが、隅丸の縦長長方形を呈する。床面はほぼ全面が堅緻である。竈及び撹乱部分を除いて壁周溝が巡っている。幅約10cm、深さ4cm前後と浅い。竈は東壁の南に偏して付設されている。燃焼部は壁内外にほぼ半々の割合で位置する。内部からは礫が出土しており、補強されていた可能性もある。遺物は土師器甕等が少量出土した。



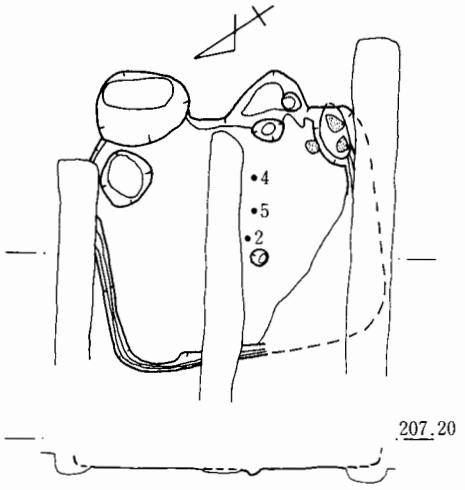
第125図　17号住居跡

17号住居跡（PL30）

7－8杭の西側に位置する。北7mに18号住居跡が近接する。現代の耕作溝の撹乱が激しい。

規模は東西3.3m、南北3.1m、深さは10cmほどで

ある。方位はN－32°－Wで、若干東西に長い長方形を呈する。床面は余り踏み固められていない。撹乱により不明瞭な部分もあるが、北西隅の１m四方ほどの範囲はローム粘性土が盛られ、床面よりも高くなっている。上面はすでに削平されていたため、床面からの高さは不明である。竈その他の施設は検出されていない。遺物も１点も出土しておらず、遺構の性格も住居跡であるかどうか判然としない。



第126図　18号住居跡

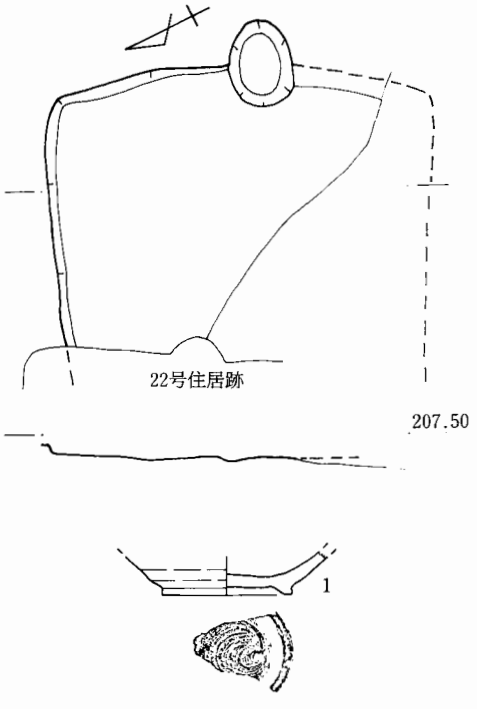
18号住居跡（観察122、ＰＬ30・36）

８－８杭の西に位置する。南西端部はすでに床下まで削平されており、また現代の耕作溝の撹乱を激しく受けている。

第127図　18号住居跡出土遺物

規模は東西2.5m、南北は計測できないが、2.8m前後と思われる。深さは北壁で10cmを測る。形状は小型の隅丸横長長方形を呈する。床面はやや軟弱である。南東隅には土坑が検出されており、中から礫が出土している。北東隅と東壁北端の壁外にかけても土坑が検出されており、いずれも貯蔵穴の可能性が考えられる。竈は東壁の南寄りに付設されている。燃焼部が屋内から壁外にかかるタイプである。

遺物は土師器坏・甕、須恵器坏・埦等が出土している。



19号住居跡（ＰＬ30）

９－８グリッドに位置する。西端に22号住居跡が重複する。

北約４mに20号住居跡が近接する。南西半部はすでに床下まで削平されているため、規模・平面形など不明な点が多い。

床面は比較的良く踏み固められている。竈は東壁に付設されている。燃焼部が屋内外ほぼ半々位置するタイプである。竈以外の施設は検出されていない。

遺物は須恵器埦の破片等が少量出土しただけである。

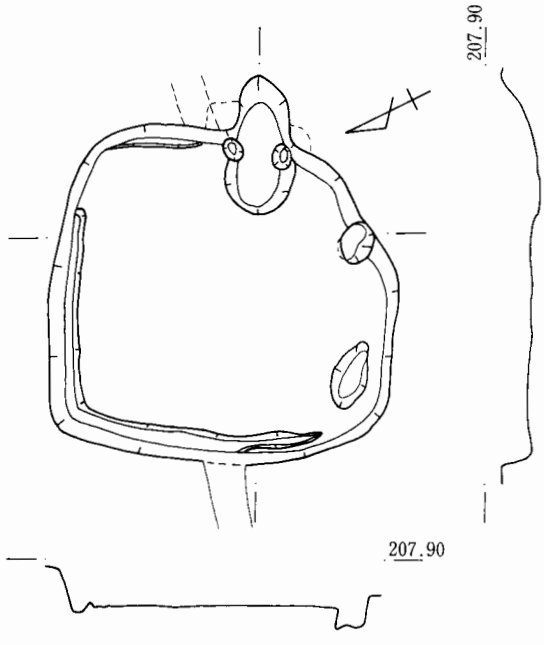
第128図　19号住居跡及び出土遺物

20号住居跡（観P123、ＰＬ30・36）

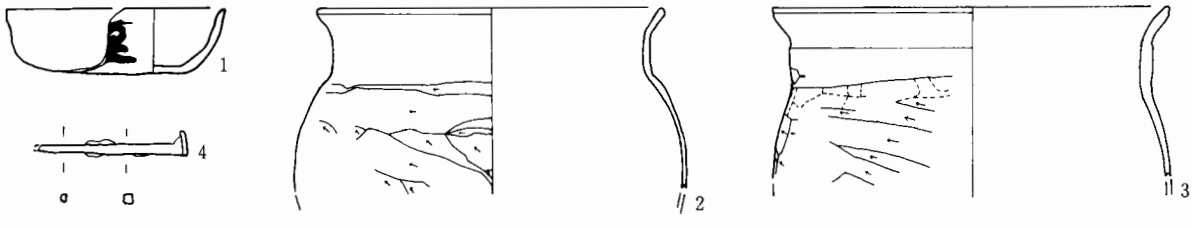
10－８グリッドに位置する。１号溝と重複する。南約４ｍに19・22号住居跡が近接する。

規模は東西3.4m、南北3.6mを測るが、南壁が屈曲しているため、歪んだ方形状を呈している深さは13～43cmを測る。方位はＮ－32°－Ｅである。床面はあまり堅緻ではない。壁周溝は南壁以外に断続的に巡っている。幅16cm、深さは４～９cmを測る。南壁際に２基の小ピットが検出されているが、主柱穴かどうか不明である。竈は東壁に付設されている。燃焼部が壁内外にかかるタイプで、両脇に小ピットが検出されていることから、礫によって補強されていたものと思われる。煙道はなだらかに立ち上がる。

遺物は竈その他から、土師器坏・甕、鉄釘等が少量出土している。尚、坏は墨書土器である。



第129図　20号住居跡



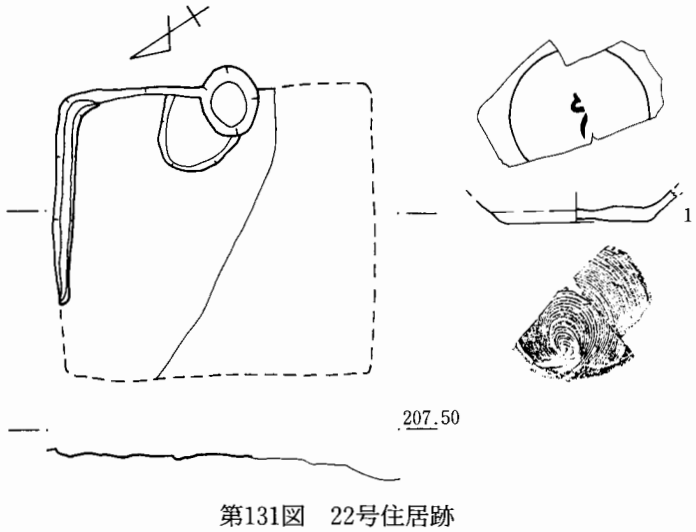
第130図　20号住居跡出土遺物

22号住居跡（ＰＬ31）

９－８グリッドに位置する。19号住居跡と重複する。北約４ｍに20号住居跡が近接する。すでに南西過半部を削平されているため規模・平面形状等不明である。

床面の残存部分は比較的堅緻である。北壁には壁周溝が巡っている。実測図の破線は床下土坑その他からの推定範囲で東西2.1m、南北3.1mを測る。竈は東壁に付設されている。

遺物は須恵器坏の底部（墨書）が１点出土しただけである。



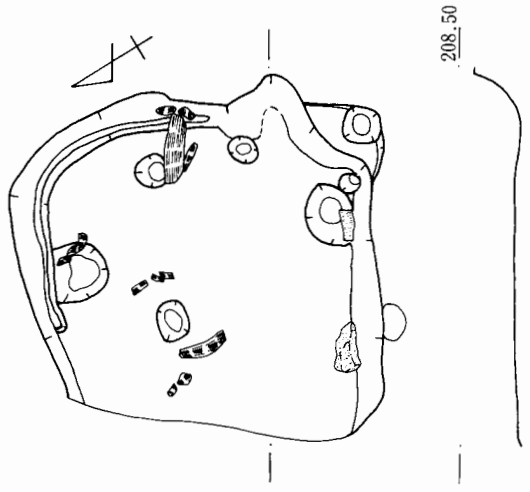
第131図　22号住居跡

21号住居跡（観P123、PL31・36）

11－9グリッドに位置する。西端は農道によって削平されている。

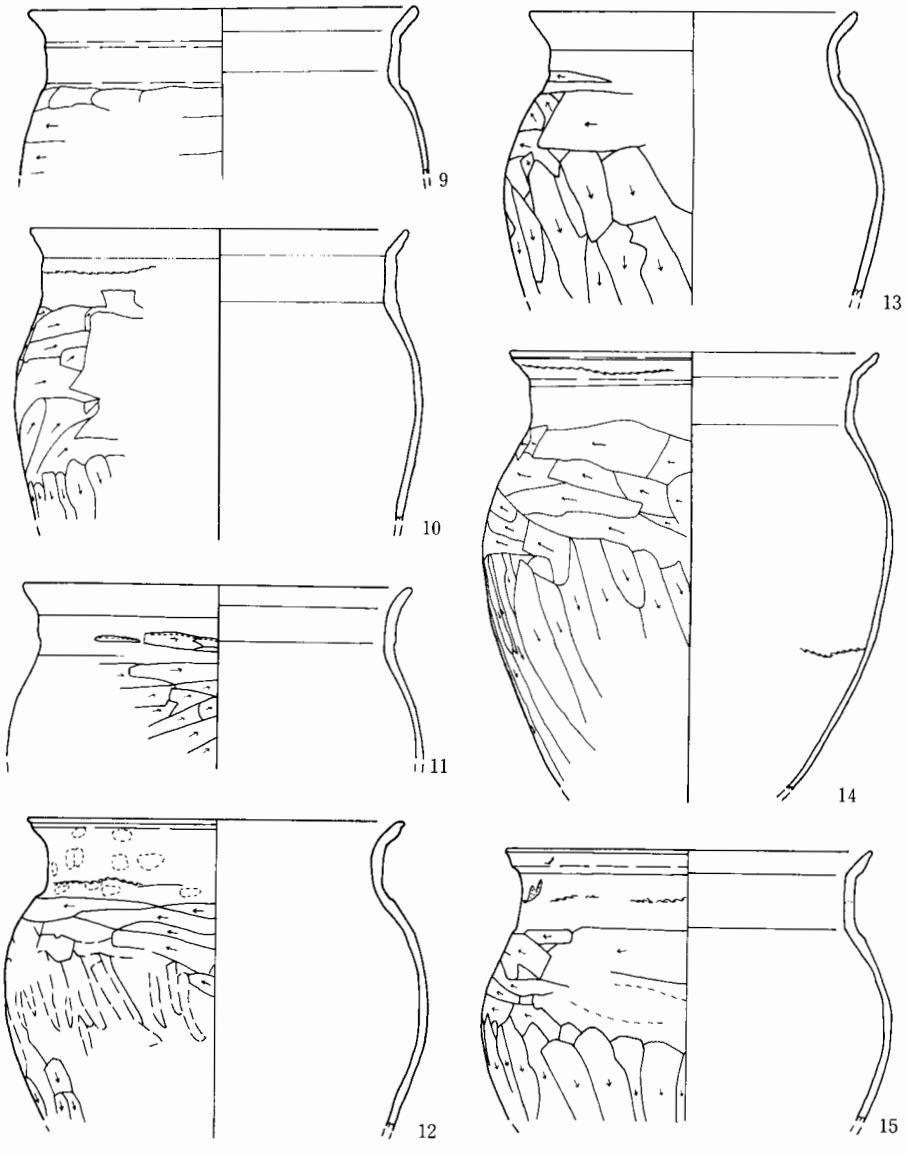
南北3.8mで東西は3.3m以上である。深さは約40cmを測る。形状は不詳であるが、歪んだ方形状を呈していると思われる。方位も不詳であるが、N－30°－E前後である。南東壁外には検出面から浅い掘り込みがあり、住居が重複している可能性もあるが、東壁の方向・位置が一直線上に揃うことから、棚状の施設と捉えたい。壁面は各面とも角度をもって立ち上がる。床面は竈前面を除くと軟弱で、床下土坑・ピットを掘り過ぎた部分もある。東壁から北壁にかけて幅約14cm、深さ約4cmの浅い壁周溝が巡っている。主柱穴は判然としないが、小ピットが数ケ所に検出されている。南東隅の土坑は貯蔵穴の可能性もある。竈は東壁の南寄りに付設されている。燃焼部が壁内外にほぼ半々の割合で位置する。左脇に検出された小ピットは補強材の抜き跡と思われる。

遺物は主に竈部分から流れ込むような状態で多量に出土している。器種は土師器甕が多く、他に土師器坏・脚付小型甕、須恵器坏・埦・甕・鉢が出土している。土器以外では砥石、鉄釘などがある。



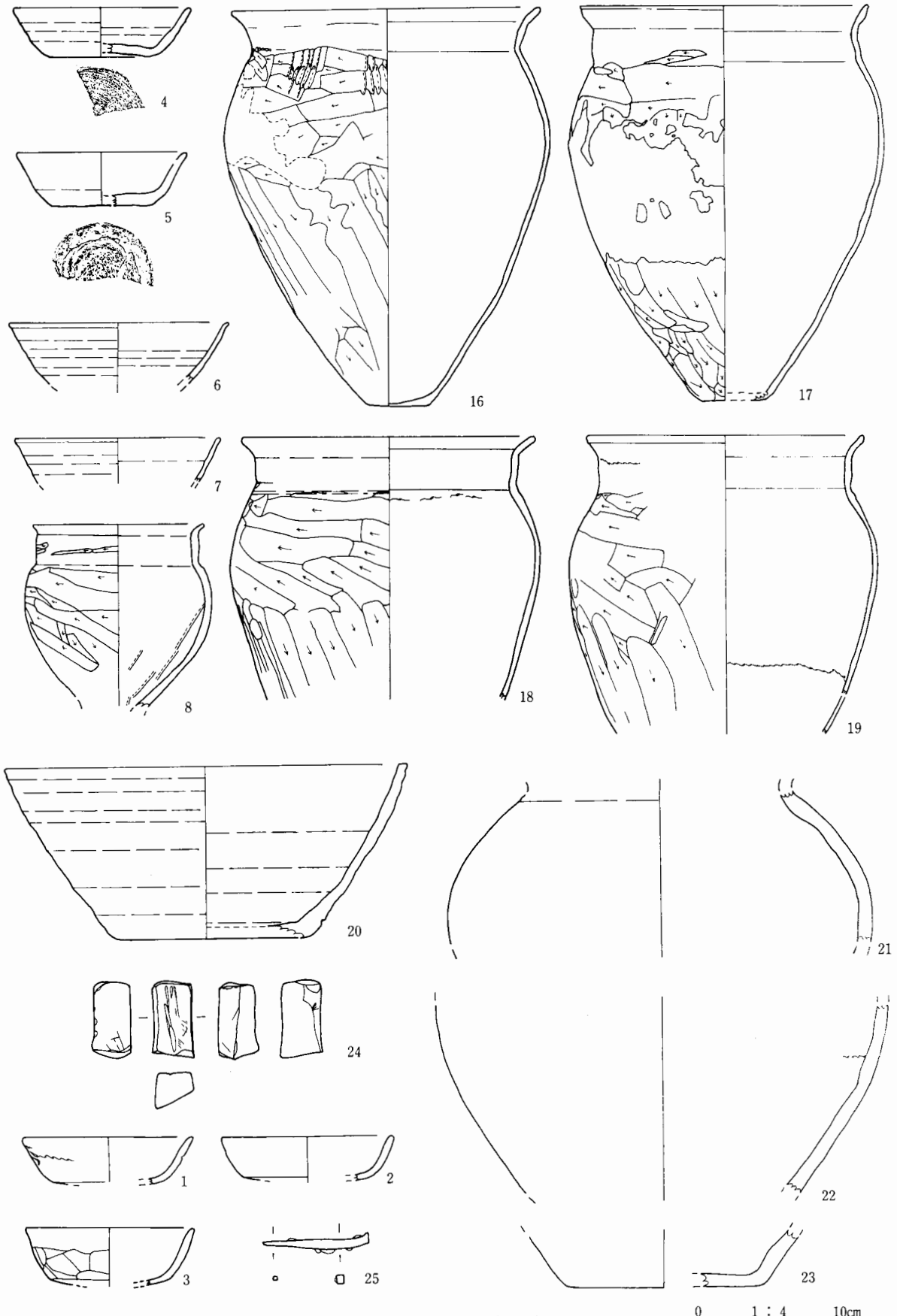
第132図　21号住居跡

0　1：80　2m



第133図　21号住居跡出土遺物(1)

0　1：4　10cm

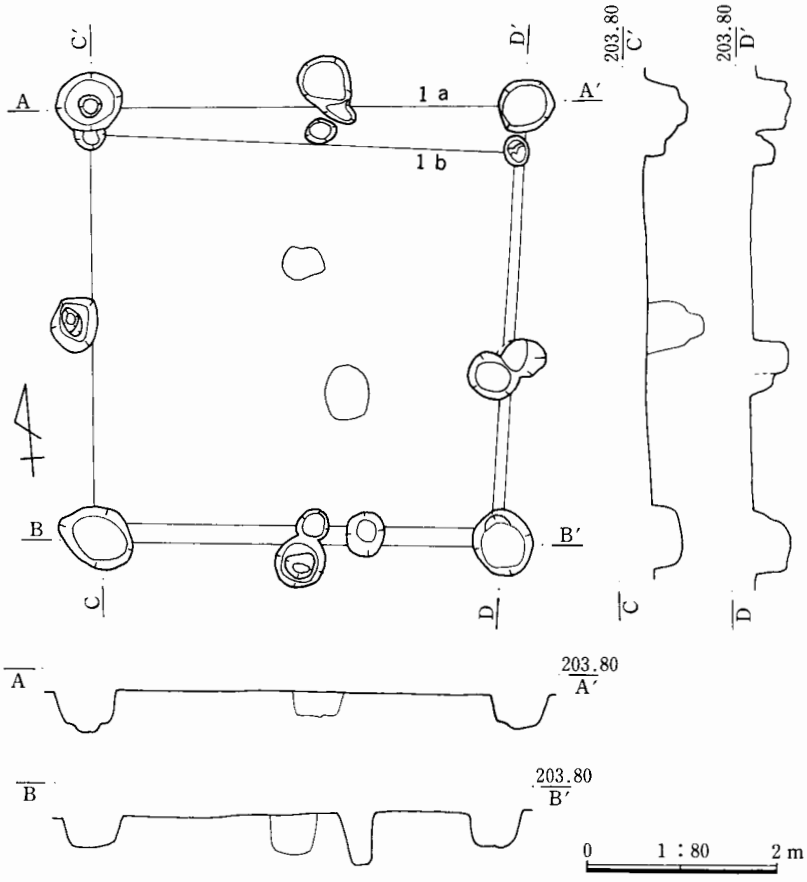


第134図　21号住居跡出土遺物(2)

3．掘立柱建物跡

1a・b号掘立柱建物跡（PL31）

2－2杭を含んで南に位置する。2号掘立柱建物跡と重複する。1・2・3号住居跡が近接する。また、3・6号掘立柱建物跡も北東約5mに近接する。なお、北側柱穴列とわずかずれた位置にも柱穴列が認められ、他にも重複する柱穴があることから、建て替えと思われる。2間×2間の建物跡である。



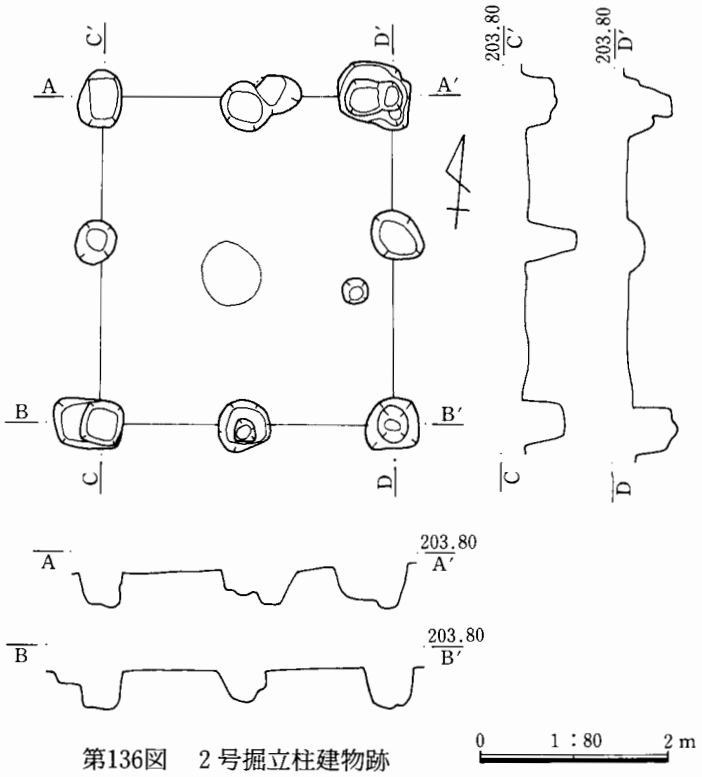
第135図　1a・b号掘立柱建物跡

1a号掘立柱建物跡

東西4.6m、南北4.5mの建物規模で、方位はN－6°－Eを測る。建物形状は南辺が北辺より短く歪んだ方形状を呈する。尚、北辺と西辺は直行する。柱間距離は約2.1～2.5mである。柱穴の掘り方形状は一定していないが、概ね不正円形である。規模は40～70cm、深さ30～60cmを測る。

1b号掘立柱建物跡

認識できない柱穴もあるため、確定できない要素が多いが、建物規模は東西4.5m×南北3.9mを測る。建物形状は歪んでおり平行四辺形状を呈する。方位はN－5°－E前後である。柱間距離は東西が2.0～2.4mで、南北は1.8～2.1mと短くなっている。柱穴の掘り方形状はほぼ円形である。規模は1a号掘立柱建物跡に比べて小型で、径30cm前後、深さ20cm強を測る。

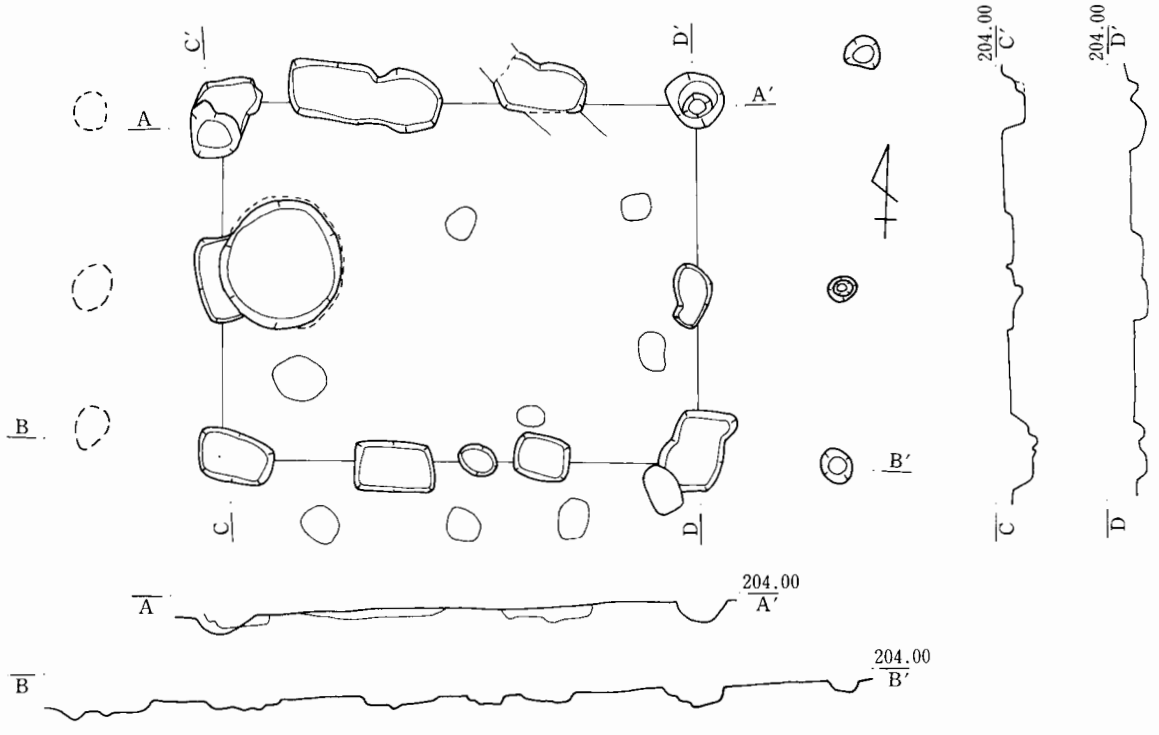


第136図　2号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡（PL31）

1－3グリッドに大半が位置する。1a・b号掘立柱建物跡と重複する。

2間×2間の建物構造で、規模は東西3.1m、南北3.4mを測る。方位はN－4°－Eである。形状は南北に長い概ね整った長方形状を呈する。柱間距離は東西が1.5～1.6m、南北が1.5～2.0mである。柱穴掘り方の形状は方形・楕円形等様々で一定していない。規模は50～60cmであるが、深さは20～60cmと一定していない。

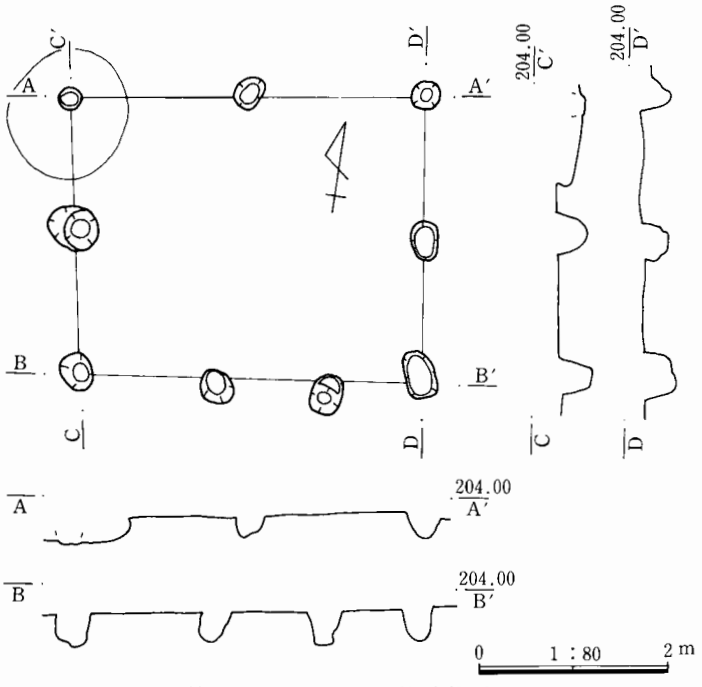


第137図　3号掘立柱建物跡　0　1：80　2m

3号掘立柱建物跡（PL31）

2－3グリッドに位置する。6号掘立、6号住と重複し、6号住より古いが、6号掘立との新旧関係は不明である。

東西3間×南北2間の建物で、東と西の2面に庇が付くと思われる。規模は身舎部は東西5.1m、南北3.6mを測り、庇の出は東西ともに1.5m前後を測ると思われる。柱痕が検出されないため、柱間距離は判然としないが、梁間・桁間とも1.6～1.9mと思われる。柱穴の形状は身舎部の大半は不正長方形状を呈する。規模は様々であるが、深さは20cm前後でほぼ一定している。庇部は形状がほぼ円形で、規模は径が30cm前後、深さ20cm前後と概ね一定している。



第138図　6号掘立柱建物跡　0　1：80　2m

6号掘立柱建物跡（PL32）

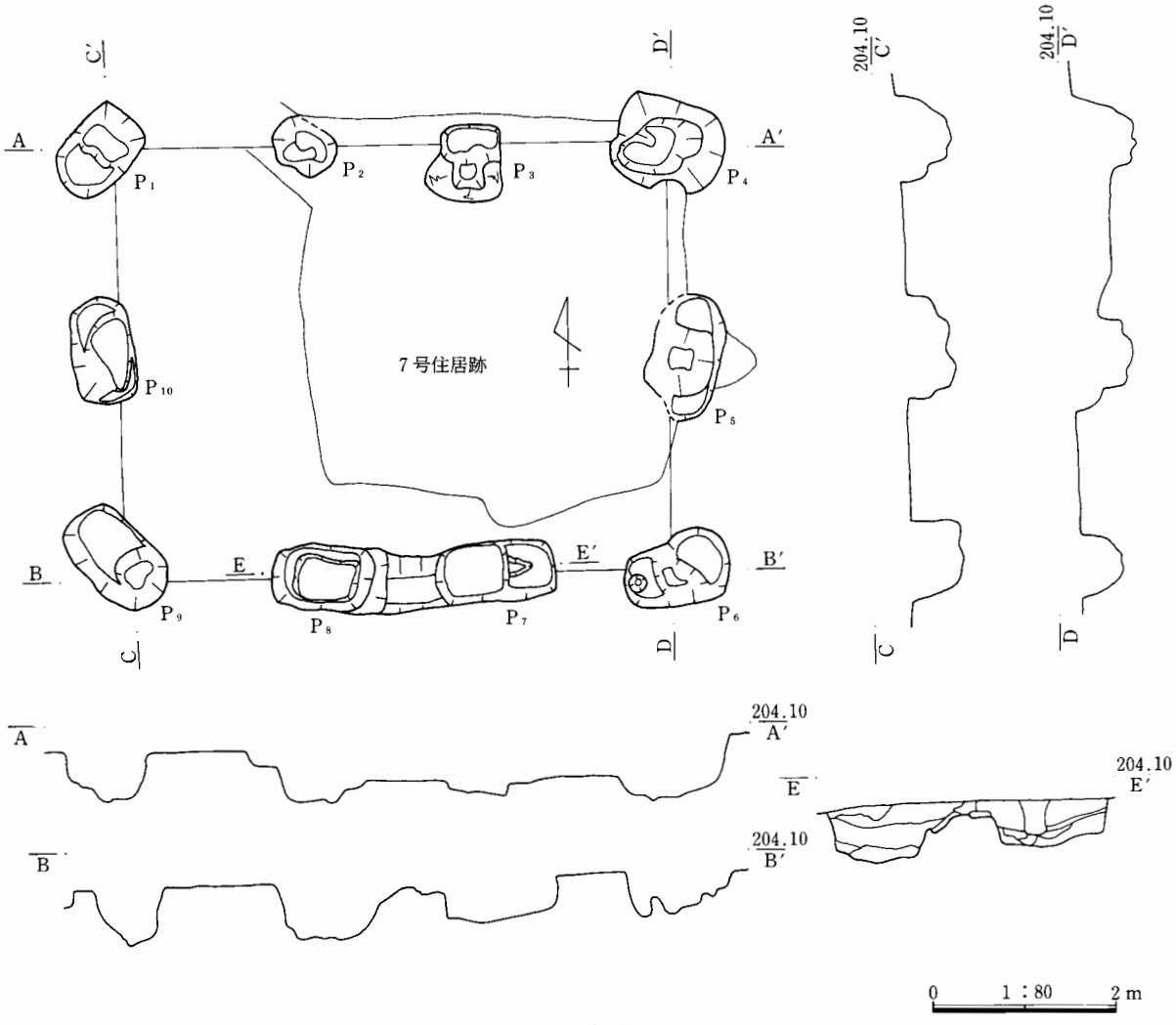
2－3グリッドに位置する。3号掘立柱建物跡と重複し、3・6号住居跡が近接する。

基本的に2間×2間の建物構造と思われるが、南辺は3間となっており、入口等の施設が設けられていた可能性がある。規模は東西3.8m、南北3.0mを測り、柱間距離は南北1.5～1.6m、東西は北辺が1.8・2.0m南辺が西から1.4・1.1・1.0mである。柱穴の掘り方の形状は概ね不正円形で、規模は径が30～40cm、深さが40cm弱とほぼ一定している。

4号掘立柱建物跡（PL31）

3－4杭上に位置する。7号住居跡と重複し、本跡が古い。重複によりP2～P5は撹乱を受けている。西4mに3号、東3mに5号掘立柱建物跡が近接する。

東西3間×南北2間の建物である。柱痕部が検出された柱穴が少ないため、規模は明確ではないが、東西6.2m、南北4.6m前後を測ると思われる。方位はN－1°－Eである。柱間距離は桁間が2m前後、梁間が2.3m前後と思われる。柱穴掘り方は概ね隅丸長方形で、P7・P8は上部でつながっている。規模は長辺1.2m、短辺0.6m前後を測るものが多い。深さは60cm前後でほぼ一定している。



第139図　4号掘立柱建物跡

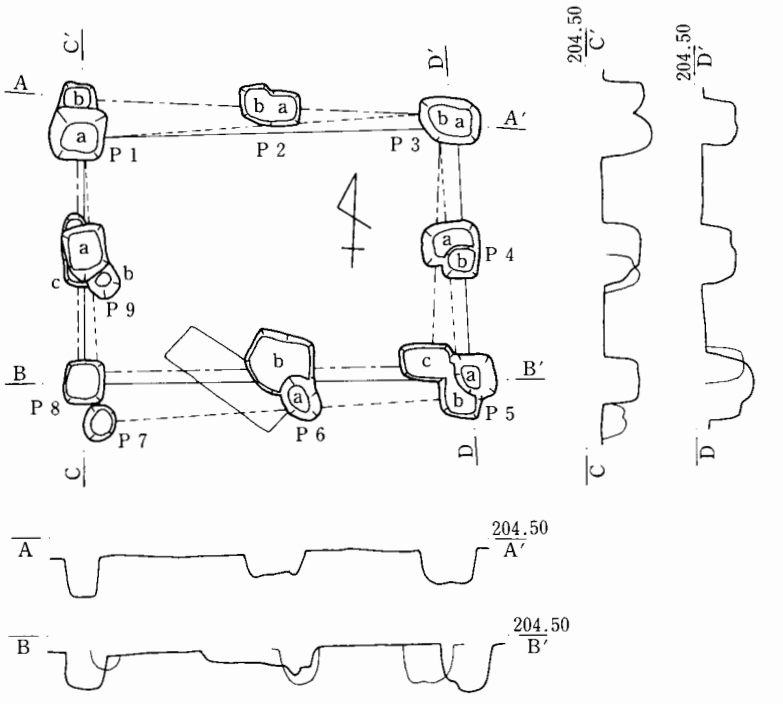
5ａ・ｂ号掘立柱建物跡

（ＰＬ32）

２－５グリッドに位置する。１～２度建て替えた可能性があるここでは２棟分を報告する。

5ａ掘立柱建物跡

東西２間×南北２間の建物跡であるが、東西に長い長方形状を呈する。規模は東西4.0m、南北1.6mを測り、方位はＮ－４°－Ｗである。柱間距離は東西が1.8～2.2m、南北1.2～1.4mである。柱穴掘り方の形状は概ね方形である。規模は一辺(径)40～60cm、深さ30～50cmでほぼ一定している。



第140図　５号掘立柱建物跡

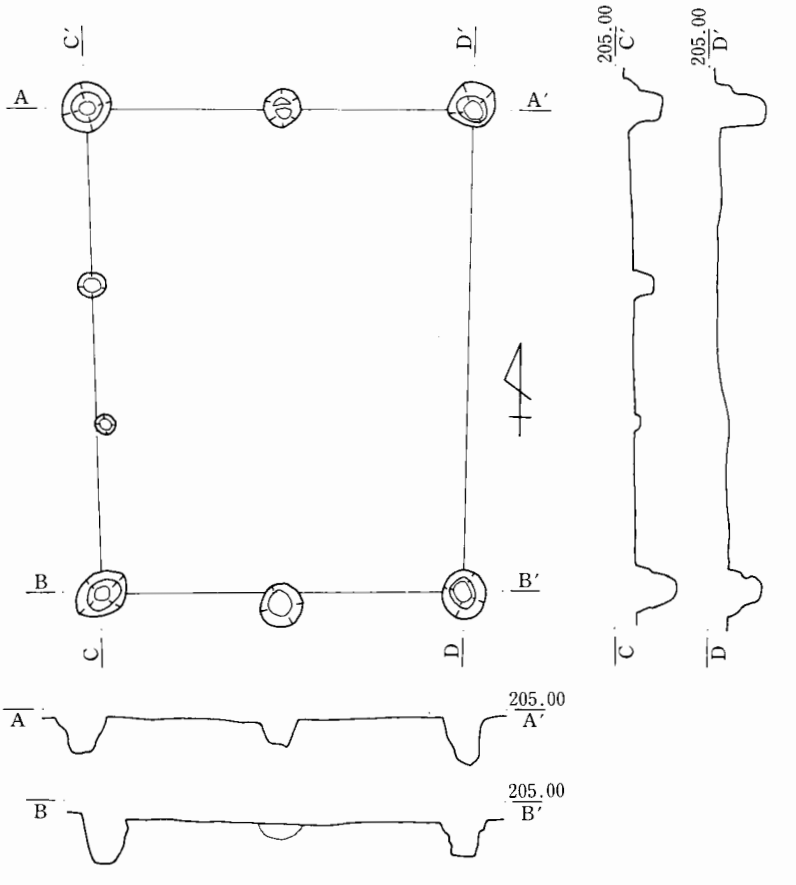
5ｂ号掘立柱建物跡

建物規模・形状等は５ａ号掘立柱建物跡と同様であるが、方位がわずか異なり、柱穴掘り方の形状が円形を呈するものが多くなる。

7号掘立柱建物跡（ＰＬ32）

５－５グリッドに位置する。

東西２間×南北３間の建物であるが、東辺に間柱が検出されておらず、西辺の間柱の規模が極端に小さいことから入口状の施設である可能性もある。東西4.1m、南北5.1mを測り、方位はＮ－１°－Ｗである。柱間距離は東西が1.9～2.1m、南北は中央が1.5mで両側が約1.8mである。柱穴掘り方の形状は円形で、規模は四隅が大きく径50cm前



第141図　７号掘立柱建物跡

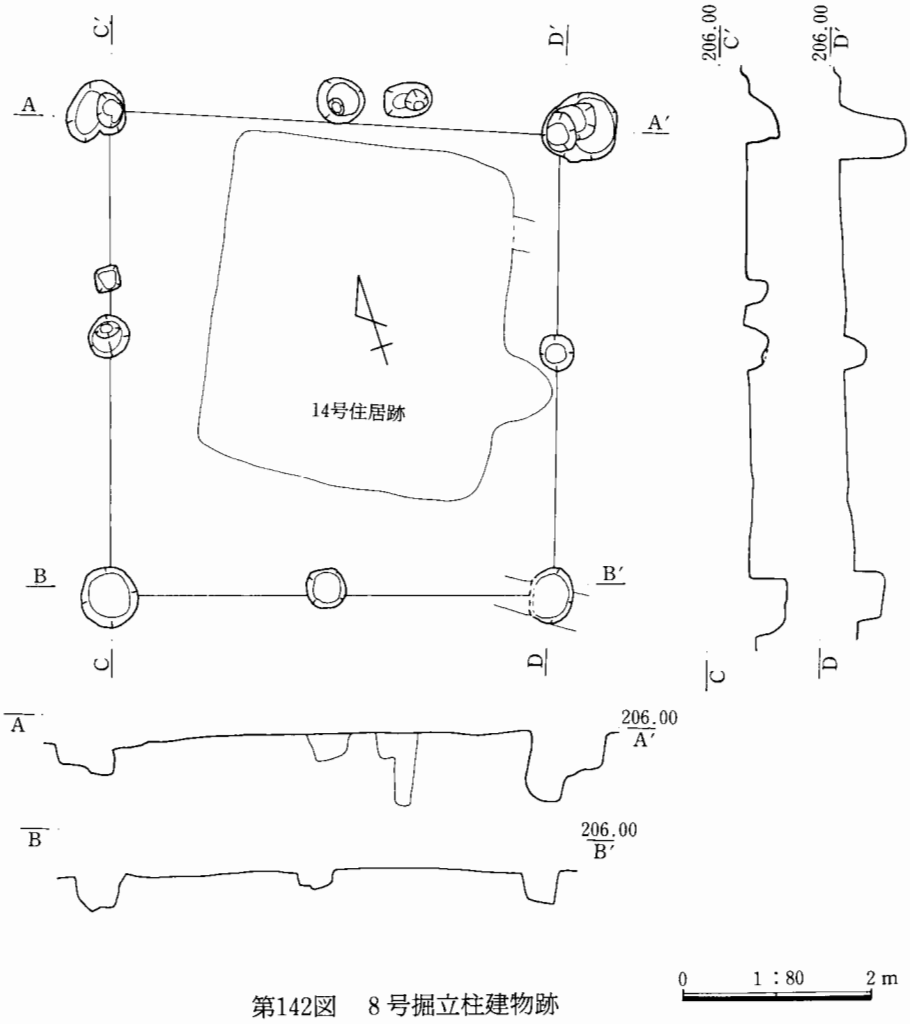
後、深さ50～60cmでほぼ一定している。東西の間柱は径40cm、深さ20・30cmである。西辺の間柱の規模は径20cm前後、深さ５・20cmである。

８号掘立柱建物跡

（ＰＬ32）

５－７グリッドに大半が位置する。14号住居跡と重複するが、柱穴自体は切りあっておらず、新旧関係は不明である。北辺の柱穴列には重複が認められ、建て替えの可能性があるが、ここでは全体が把握できる部分で報告したい。

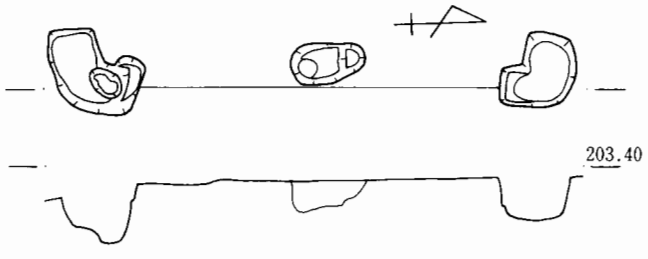
東西4.7m、南北5.1mを測り、方位はＮ－19°－Ｅである。柱穴の規模は四隅のほうが間柱よりも大きい。形状は全てほぼ円形を呈する。径は四隅が50cm前後、間柱が40cm前後、深さは四隅が40～70cm、間柱が20cm前後を測る。



第142図　８号掘立柱建物跡

９号掘立柱建物跡

２－１杭の西側に位置する。調査時点では柱穴列としたが、ここでは掘立柱建物跡として報告したい。西側は既に耕作等によって削平されており、東辺だけが残存する。各柱穴とも重複がみられ、建て替えが行われたと思われる。



第143図　９号掘立柱建物跡

南北4.5m前後を測り、ほぼ南北に配列される。柱間距離は約2.2mである。柱穴掘り方の形状は概ね方形で、一辺が40cm強、深さは両端が50～60cm、間柱が30cmを測る。

1号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 須恵器	埋土中 破片	口：(12.0)	黒色粒・白色粒 灰色	体部直線的に開く。 内外ともに回転ナデ。	還元炎焼成。 硬質。
2	高台付埦 須恵器	埋土中 1/5	口：(12.6)	小礫 灰色	体部内湾気味に開く。 内外ともに回転ナデ。	半還元炎焼成。 軟質。
3	甕 須恵器	竈前面床直 1/5		白色粒少量 灰色	底部に高台が付くと思われる。 内外ともに丁寧な回転ナデ。	還元炎焼成。 硬質。

2号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 3/5	口：12.2 底：9.8 高：3.2	砂粒 にぶい橙色	底部平底。体部直線的に開き、口縁部内湾気味。 体部下半部ナデ、底部ヘラケズリ。 内面ナデ、ヨコナデ。	
2	坏 土師器	埋土中 2/5	口：12.6 底：9.6 高：3.0	砂粒 にぶい橙色	底部平底。体部直線的に開く。 体部下半にユビオサエ。底部ヘラケズリ。 内面ナデ、ヨコナデ。	煤付着。
3	坏 須恵器	竈左袖部床直 2/3	口：13.5 底：6.5 高：3.6	白色粗粒、黒色粒 灰色	体部直線的に開き、口縁部は強く外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	底部に鉄滓付着
4	坏 須恵器	埋土中 1/2	口：12.6 底：6.8 高：3.3	黒色粒、白色粒多量 灰色	体部は内湾気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	還元炎焼成。 硬質。
5	鎌	南東隅床直	ほぼ完存　残存長19.8、最大幅4.1			棒状礫付着。

3号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	南東隅ピット 1/3	口：12.6 底：8.6 高：(3.2)	砂粒 橙色	底部丸底気味。体部直線的に開き、口縁部は立ち気味。 外面ナデ。内面ヨコナデ。	
2	坏 土師器	南西隅ピット 一部欠損	口：13.8 底：6.2 高：4.7	粗砂、赤色粒 橙色	底部平底。体部は若干内湾気味に開く。 外面：体部上半ナデ、下半ケズリ。底部一定方向ヘラケズリ。内面：ヨコナデ。	墨書土器「井」内面底部。
3	坏 須恵器	竈左脇 4/5	口：12.8 底：5.1 高：2.7	赤色粒少量 灰～にぶい黄橙色	体部中位に稜を持つ。口縁部は強く外反。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り、後周縁調整か？	半還元炎焼成。 軟質。
4	坏 須恵器	埋土中 2/3	口：13.7 底：6.3 高：4.3	黒色粒、粗砂 灰色	体部は内湾気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	半還元炎焼成。 軟質。
5	坏 須恵器	埋土中 1/2	底：6.4	粗砂、白色粒・黒色粒多量 灰色	体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
6	高台付埦 須恵器	埋土中 1/2	口：14.9 底：6.9 高：5.8	黒色粒・白色粒 灰色	体部内湾気味に開き、口縁部でわずか外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。	半還元炎焼成。 軟質。
7	高台付埦 須恵器	埋土中 3/4	底：7.2	夾雑物少ない 灰色	底部内面回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。	半還元炎焼成。 軟質。
8	瓶 灰釉陶器	埋土中 1/4	口：12.6	黒色粒 灰白色	口縁部は外反。 体部内外面ともに回転ナデ。釉はオリーブ灰色。	
9	甕 土師器	竈前面床直 1/3	口：12.4	細砂粒少量 にぶい黄橙色	口縁部外面ユビオサエ、下端ヨコナデ。内面ヨコナデ。	外面に接合痕。 破砕後火熱受ける
10	甕 土師器	埋土中 1/4	口：21.0 胴：23.0	砂粒 にぶい橙色	口縁部は内傾気味に立ち上がり、上半で外傾。 胴部外面ヘラケズリ。 胴部内面弱いハケナデ。	
11	甕 土師器	埋土中 1/5	口：19.8 胴：23.0	砂粒 にぶい橙色	口縁部下半は直立気味、上半外傾。 胴部外面ヘラケズリ。 胴部内面ナデ。	
12	甕 土師器	埋土中 1/5	口：18.0 胴：20.8	細砂粒少量 浅黄橙色	口縁部は内傾気味に立ち上がり、上半で外傾。 胴部外面ヘラケズリ。上端に指頭圧痕残存。 胴部内面ナデ。	口縁部外面に接合痕残存。
13	甕 土師器	竈前面床直 1/3	口：19.6 胴：21.6	粗砂、赤色粒 にぶい褐色～黒褐色	口縁部はわずか外傾気味に立ち上がり、上半でさらに外傾する。 胴部外面ヘラケズリ。胴部内面ナデ。	口縁部外面に接合痕残存。
14	甕 須恵器	竈前面床直 1/4	底：19.6 胴：41.4	小礫、白色粒 灰色	底部平底。 胴部・底部内外面とも不定方向のナデ。	
15	絞具	埋土中	一部欠損　全長7.9			鉄製品
16	砥石	埋土中	一部欠損　流紋岩（砥沢？）　長さ10.0、幅3.9、厚さ1.2			
17	砥石	埋土中	両端欠損　流紋岩（砥沢？）　残存長8.6、幅4.2、厚さ3.0			

4号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 破片	口：12.0 底：7.6 高：3.0	砂粒少量 橙色～浅黄橙色	底部平底。体部直線的に開く。 外面：体部ユビナデ、底部ヘラケズリ。 内面：ヨコナデ、ナデ。	体部外面下半部に粘土のヒビワレ
2	坏 須恵器	北壁周溝上 床レベル 1/4	口：13.2 底：6.4 高：3.9	砂粒、赤色粒 褐灰色～にぶい橙色	体部はわずか内湾気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	砂粒脱痕あり 還元炎焼成。 硬質。
3	坏 須恵器	埋土中 1/3	口：12.0 底：5.8 高：3.3	黒色粒、小礫 灰色	体部は内湾気味に開き、口縁部でわずか外反。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	黒色粒発泡 還元炎焼成。 硬質。
4	坏 須恵器	埋土中 1/2	口：12.8 底：6.8 高：3.5	小礫、赤色粒 灰色～にぶい黄橙色	体部内湾気味に開き、口縁部も内湾気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	5号住居跡出土破片と接合。

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
5	坏 須恵器	埋土中 底部完存	底：　6.4	小礫、白色粒 にぶい橙色	体部内外面ともに回転ナデ。左回転。 底部回転糸切り。	半還元炎焼成。 やや硬質。
6	高台付埦 須恵器	埋土中 1/2	口：13.8	小礫、白色粒 灰色	体部～口縁部内湾気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。	半還元炎焼成。 軟質。
7	高台付埦 須恵器	埋土中 1/4 高台部欠損	口：15.0 底： 高：(6.3)	黒色粒 灰色	体部内湾して開き、口縁部で外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。	3号住出土破片と接合。半還元炎焼成。軟質。
8	高台付埦 須恵器	埋土中 破片	台：　8.0	砂粒、黒色粒多量 灰色	体部内湾気味に開く。高台部大きく開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。接合は雑。	還元炎焼成。 やや硬質。
9	高台付埦 須恵器	埋土中 1/5	台：　9.0	黒色粒多量、小礫 灰色	体部内湾気味に開く。高台部大きく開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。	還元炎焼成。 やや硬質。
10	坏 土師器	埋土中 底部破片		細砂粒 にぶい橙色	底部外面ヘラケズリ。内面ナデ。	墨書土器文字不詳
11	坏 土師器	埋土中 底部破片		砂粒 橙色	底部外面ヘラケズリ。内面ナデ。	墨書土器文字不詳
12	蓋 須恵器	埋土中 1/2	鈕：　3.5	小礫多量、白色粒 灰色	天井部内面回転ナデ。外面回転ヘラケズリ後ナデ 鈕の上端は面取りされる。	天井部内面に自然釉付着。還元炎焼成。やや硬質。
13	甕 須恵器	埋土中 底部1/2 胴部一部	台：11.2	白色粒 灰色	高台端は平坦で幅広い。 体部・底部内外面ともに回転ナデ。 右回転。	外面に自然釉付着 還元炎焼成。 硬質。
14	甕 土師器	埋土中 1/4	口：20.0	細砂粒 にぶい橙色	口縁部は下半で直立し、上半で強く外傾する。 胴部外面ヘラケズリ。内面ナデ。	口縁部外面に接合痕残存。
15	甕 須恵器	埋土中 1/5	口：13.9	白色粒多量 灰色～褐灰色	胴部は直線的に開く。高台部は強く外側に張り出す。 胴部内外面ともに回転ナデ。	還元炎焼成。 硬質。
16	鉄製品	埋土中	棒状で両端欠損。　残存長7.3			紡錘車の軸か？
17	鉄製品	埋土中	板状で小孔あり。　残存長計9.5			
18	鎌	東壁周溝中	刃部先端欠損　残存長13.0、幅4.6　　柄部の木質残存。材質不明。			19と錆着
19	鎌	東壁周溝中	ほぼ完存　　全長24.7、幅5.3　　刃部に繊維（藁？）残存。			18と錆着
20	鎌	北壁周溝中	刃部先端欠損　残存長9.8、幅4.2　　全体的に繊維（藁？）残存。			

5号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	南東柱穴 1/3	口：11.8 底：　9.8 高：　3.2	細砂粒 橙色	底部は丸底気味の平底。体部は直線的に開く。 外面：体部ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：ナデ、ヨコナデ。	外面に煤付着。

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
2	坏 土師器	埋土中 破片	口：(12.0) 底：(8.4) 高：(2.7)	砂粒 橙色	体部は内湾して開き、口縁部で弱く外反。 外面：体部ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：ナデ、ヨコナデ。	
3	坏 須恵器	北東柱穴 1/3	口：12.0 底：6.4 高：3.5	黒色粒、小礫 灰色	体部は内湾気味に開く。底部はわずか突出。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	黒色粒発泡 半還元炎焼成。 やや軟質。
4	坏 須恵器	西壁密着 一部欠損	口：12.3 底：6.3 高：4.5	黒色粒 灰色	体部はわずか内湾気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り後周縁ヘラ調整。	半還元炎焼成。 やや軟質。
5	甕 土師器	埋土中 破片	口：(20.0)	砂粒 黄橙色	口縁部は内湾気味に外傾。口唇部直下沈線。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	
6	甕 土師器	埋土中 破片	口：(19,6)	砂粒 にぶい黄橙色	口縁部は下半でわずか内傾気味に立ち、上半で外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	口縁部外面に黒斑と黒色付着物

6号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	(坏) 須恵器	竈中 破片	口：(14.6)	赤色粒 灰色	体部は内湾して開き、口縁部外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。	半還元炎焼成。 軟質。
2	(坏) 須恵器	埋土中 破片	口：(14.0)	小礫 灰色	口縁部は肥厚し外反。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。	半還元炎焼成。 軟質。
3	坏 須恵器	埋土中 1/4	底：6.2	黒色粒多量 灰色	体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	還元炎焼成。 硬質。
4	高台付埦 須恵器	埋土中 1/3	口：13.9 台：5.8 高：5.5	小礫、赤色粒 灰色	体部は内湾気味に開き、口縁部外反。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	砂粒脱痕多い。 半還元炎焼成。 軟質。
5	脚付甕 土師器	竈中 3/4	口：14.0 胴：14.1	砂粒、小礫 赤褐色	口縁部下半は内傾気味、上半で外傾。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	頸部内面に接合痕
6	脚付甕 土師器	竈中 1/4	口：12.0 胴：13.9	砂粒、小礫 赤褐色	口縁部は外反する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	胴部外面に黒斑 頸部内面に接合痕
7	脚付甕 土師器	竈中 1/2	口：13.6 胴：16.6	砂粒、小礫 暗褐色	口縁部下半は内傾気味に立ち、上半でわずか外傾 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	胴部内面に接合痕
8	羽釜 須恵器	埋土中 破片	口：(19.0) 鍔：(24.0)	砂粒、黒色粒 灰色	口唇部と鍔先端は面取り。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。	還元炎焼成。 硬質。

7号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	高台付椀 須恵器	竈焚口 2/3	口：13.8 底：7.0 高：5.2	白色粒、黒色粒 灰色	体部直線的に開き、口縁部わずかに外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。	半還元炎焼成。 軟質。
2	坏 須恵器	竈内 3/4	口：13.8 台：7.0 高：3.5	砂粒多量、小礫 灰～浅黄橙色	体部内湾気味に開き、口縁部わずかに外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	二次焼成 半還元炎焼成。 軟質。
3	高台付椀 須恵器	埋土中 1/2 高台部欠損	口：14.4 台：(6.1) 高：(4.5)	細砂粒、赤色粒 にぶい橙色～灰 褐色	体部内湾気味に開き、口縁部わずかに外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。	半還元炎焼成。 軟質。
4	高台付椀 灰釉陶器	埋土中 3/4	台：7.0	砂粒少量 灰白色	体部内湾気味に開く。高台細く、内湾して立つ。 体部内外面ともに回転ナデ。左回転。	
5	蓋	埋土中 鈕部完存	鈕：2.3	砂粒 にぶい黄橙色	鈕は円棒状。 外面ナデ。天井部内面ヨコナデ。	
6	脚付甕 土師器	埋土中 1/3	口：12.8 胴：13.0	細砂粒少量 にぶい褐色	口縁部下半は直立気味、上半で外傾。 外面ケズリ。内面ナデ。	口唇部直下外面に 1条の沈線
7	甕 土師器	竈内 1/4	口：18.2	砂粒 赤褐色	口縁部は内傾気味に立ち上がり、上半で外傾する 胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	口縁部外面に接合 痕あり
8	甕 土師器	竈中 1/2	口：19.5 胴：21.5	砂粒 赤褐色	口縁部下半は内傾し、上半は外傾する。 胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	
9	甕 土師器	竈中、床直 2/3	口：19.8 胴：22.5	砂粒、赤色粒 橙色	口縁部は外反する。胴部は丸みがある。 胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	口縁部～頸部の摩 耗が激しい
10	羽釜	埋土中 1/5	口：17.3 鍔：19.0	小礫、砂粒 にぶい褐色	小型で浅く、ゆがみが激しい。鍔の断面は三角。 口縁端部は内側に張り出す。 胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	内外面に黒斑、口 縁部外面に接合痕
11	甕 須恵器	竈補強材 2/3	口：37.8	白色粗粒多量 灰色	口縁部下半で外傾し、上半でさらに外反する。 内外面ともに回転ナデ。	

8号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	高台付椀 須恵器	埋土中 1/3	口：14.0 胴：8.5 高：5.5	黒色粒少量 灰白～白色	体部内湾気味に開き、口縁部わずか外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。断面三角形状。	半還元炎焼成。 軟質。
2	坏 須恵器	南壁際 一部欠損	口：13.3 胴：7.3 高：3.3	黒色粒、小礫 灰色	体部内湾して開き、口縁部外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	半還元炎焼成。 軟質。
3	坏 須恵器	竈左袖脇 破片	口：(12.0) 胴：(8.0) 高：(3.7)	黒色粒 灰色	体部～口縁部内湾気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	還元炎焼成。 硬質。
4	脚付甕 土師器	竈左袖脇 2/3	裾：8.4	砂粒 にぶい橙色	脚部は外反して開く。 胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。 脚部内外面ヨコナデ。	外面全体的に煤付 着

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
5	小型甕 須恵器	埋土中 1/2	底：　6.0	小礫 灰色	胴部直線的に立ち上がる。 胴部内外面ともに回転ナデ。左回転。 底部回転糸切り。	還元炎焼成。 硬質。
6	蓋 須恵器	埋土中 破片	口：(16.0) 天：　7.8 高：　2.2	砂粒、黒色粒多 灰色	器高低く、鈕は不明。 天井部内外面ともに回転ナデ。右回転。 回転糸切り。	還元炎焼成。 硬質。
7	甕 土師器	南壁際 1/4	口：22.0 胴：23.9	砂粒 にぶい褐色	口縁部下半外傾して立ち、上半でさらに外傾する 胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	
8	甕 土師器	埋土中 1/4	口：19.8 胴：24.0	砂粒、赤色粒 にぶい橙色～褐色	胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	外面に黒斑 内外面に黒色付着物
9	甕 土師器	竈左袖 1/4	口：20.0 胴：23.6	砂粒 にぶい赤褐色	口縁部下半は内傾して立ち、上半で外傾する。 胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、ナデ。	全体的に煤付着
10	甕 土師器	埋土中 1/2	口：22.2 胴：23.4	砂粒 にぶい褐～橙色	口縁部下半は直立気味、上半は外傾する。 胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	頸部外面に接合痕 全体的に煤付着
11	紡錘車	竈左袖	完形　　流紋岩（砥沢？）　底径4.6、上径3.4、厚さ2.0、孔径0.7			側面は多面体状

9a・b号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 須恵器	西壁際床直 完形	口：12.0 底：　7.6 高：　3.3	小礫少量 灰色	体部～口縁部内湾気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	半還元炎焼成。 軟質。
2	甕 土師器	埋土中 1/3	口：22.0	砂粒 にぶい橙色	口縁部下半はわずか外傾気味に立ち、上半で外傾 胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	
3	甕 須恵器	北壁際床直 2/3 台部欠損		黒色粒、白色粒 とも多量 灰色	胴部内外面ともに回転ナデ。右回転。	自然釉付着 還元炎焼成。 硬質。
4	紡錘車	埋土上層	完形　流紋岩（砥沢？）　底径4.6、上径3.2、厚さ2.2、孔径0.9			
5	刀子	床直	両端部欠損　残存長16.5、幅1.8			

10号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 2/3	口：12.0 底：　8.8 高：　3.7	砂粒 橙色	底部は丸みを持つ。体～口縁部は内湾気味に開く 底部：外面ヘラケズリ、他はナデ、ヨコナデ。	
2	坏 土師器	埋土中 1/3	口：11.9 底：　9.0 高：(3.2)	砂粒 にぶい橙色	底部は丸底気味の平底と思われる。体部は直線的に開き、口縁部内湾気味となる。 底部：外面ヘラケズリ、他はナデ、ヨコナデ。	体部下半粘土のヒビ割れ。

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
3	坏 土師器	埋土中 1/2	口：11.7 底：8.0 高：3.4	砂粒 にぶい褐色	底部は平底。体部は直線的に開く。 底部：外面ヘラケズリ、他はナデ、ヨコナデ。	二次焼成
4	坏 須恵器	埋土中 1/4	口：12.0 底：4.8 高：3.9	砂粒、小礫 灰色	底部平底。体部直線的に開き、口縁部内湾気味。 体部：内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部：回転糸切り。	
5	脚付甕 土師器	埋土中 1/3	胴：13.4	細砂粒 にぶい橙色	胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。 脚部欠損後割れ口を調整	内面に砂粒脱痕
6	甕 土師器	竈内 1/4	口：18.0 胴：(19.2)	砂粒 にぶい褐～橙色	口縁部下半外傾し、上半でさらに外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	口唇部直下外面に 1条の沈線
7	甕 土師器	埋土中 1/2	口：18.0	砂粒 にぶい橙色	口縁部は外反気味に立ち、上半で外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	口縁部外面に接合 痕あり
8	甕 土師器	埋土中 1/6	口：(20.0) 胴：(22.0)	砂粒 橙色	口縁部下半は直立し、上半で外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	

11号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 一部欠損	口：12.0 底：8.1 高：3.4	細砂粒 橙色	底部平底。体部～口縁部内湾気味に開く。 底部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ、ナデ。	墨書土器 表「丁」か 裏「丁」か
2	坏 須恵器	埋土中 一部欠損	口：13.0 底：6.3 高：3.3	黒色粒少量 灰白色	体部外反して立ち上がり、稜を経てまた外反。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	歪み大きい 半還元炎焼成。 軟質。
3	坏 須恵器	埋土中 2/3	口：11.8 底：5.0 高：3.7	黒色粒、白色粒 灰色	体部内湾気味に立ち上がり、口縁部わずか外反。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	半還元炎焼成。 軟質。
4	坏 須恵器	埋土中 1/3	口：13.0 底：5.0 高：3.3	白色粒多量 灰白～灰色	体部～口縁部内湾気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	半還元炎焼成。 軟質。
5	坏 須恵器	埋土中 1/5	口：13.0 底：6.6 高：3.9	黒色粒多量 灰色	体部内湾気味に立ち上がり、口縁部外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	
6	高台付埦 須恵器	埋土中 1/3	口：14.0 台：8.2 高：5.5	褐灰色	体部～口縁部内湾気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部外面回転糸切り後回転ヘラケズリか。付高台	半還元炎焼成。 軟質。

14号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	高台付埦 須恵器	南東土坑内 一部欠損	口：15.0 胴：6.1 高：5.1	白色粗粒多量 小礫、粗砂 黒色、一部灰色	体部内湾気味に開き、口縁部わずかに外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	半還元炎焼成。 軟質。

15号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	甕 土師器	埋土中 1/3	口：20.0 胴：20.3	砂粒 にぶい橙～橙色	口縁部下半は直立気味、上半で外傾する。 胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	口縁部下半に接合痕

16号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	甕 土師器	竈左脇床直 一部欠損	口：18.2 胴：21.8 底：3.6 高：26.7	細砂粒 にぶい橙色	口縁部下半はわずか外傾、上半は内湾気味に開く 底部小さな平底。胴部上半に最大径。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。 底部：外面ヘラケズリ	胴部外面に黒斑 口縁部下半外面に接合痕
2	甕 土師器	南壁際床直 1/3	口：21.4 胴：22.4	細砂粒 灰褐色～にぶい赤褐色	口縁部下半は内傾気味に立ち、上半で強く外傾。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	口縁部外面に接合痕

18号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 破片	口：(12.0)	砂粒、小礫 にぶい褐色	体部～口縁部内湾して開く。 底部外面ヘラケズリ、他はナデ、ヨコナデ。	
2	坏 須恵器	中央部床直 1/3	口：14.0 底：6.0 高：4.7	白色粒 灰色	体部内湾して開き、口縁部強く外反する。 体部：内外面ともに回転ナデ。左回転。 底部：回転糸切り。	内外面に多量の付着物。半還元炎焼成。軟質。
3	高台付埦 須恵器	埋土中 1/5	台：7.1	砂粒 灰色	体部内湾気味に開く。高台部は幅広く、台形状。 体部：内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部：回転糸切り。付高台。	黒斑。二次焼成 半還元炎焼成。 軟質。
4	高台付埦 須恵器	竈前面床直 3/5	口：14.0 台：6.7 高：5.5	砂粒 灰色	体部内湾気味に開き、口縁部外反する。 体部：内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部：回転糸切り。付高台。	内外面剝落痕多い 半還元炎焼成。 軟質。
5	甕 土師器	竈前面床直 1/6	口：20.0 胴：24.3	粗砂、石英粒 にぶい黄橙色	口縁部は外反。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	

19号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	高台付埦 須恵器	竈 1/5	口：7.5	砂粒 浅黄橙色	高台部の高さは低い。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	酸化炎焼成。 軟質。

20号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	竈内 一部欠損	口：11.6 底：8.7 高：3.5	砂粒 にぶい橙色	底部平底。体部内湾気味に立ち上がる。 体部～底部外面ナデ。他はヨコナデ。	墨書土器 文字不明
2	甕 土師器	埋土中 2/5	口：18.2 胴：20.8	砂粒 にぶい橙色	口縁部下半は直立気味、上半で外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ。内面ナデ。	肩部に張りがない
3	甕 土師器	埋土中 1/4	口：21.0 胴：21.2	砂粒 褐灰色	口縁部下半は直立気味、上半で外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ。内面ナデ。	内外面に煤付着 口唇部直下外面に 沈線1条
4	鉄釘	埋土中	先端欠損　残存長7.9、太さ0.6			

21号住居跡

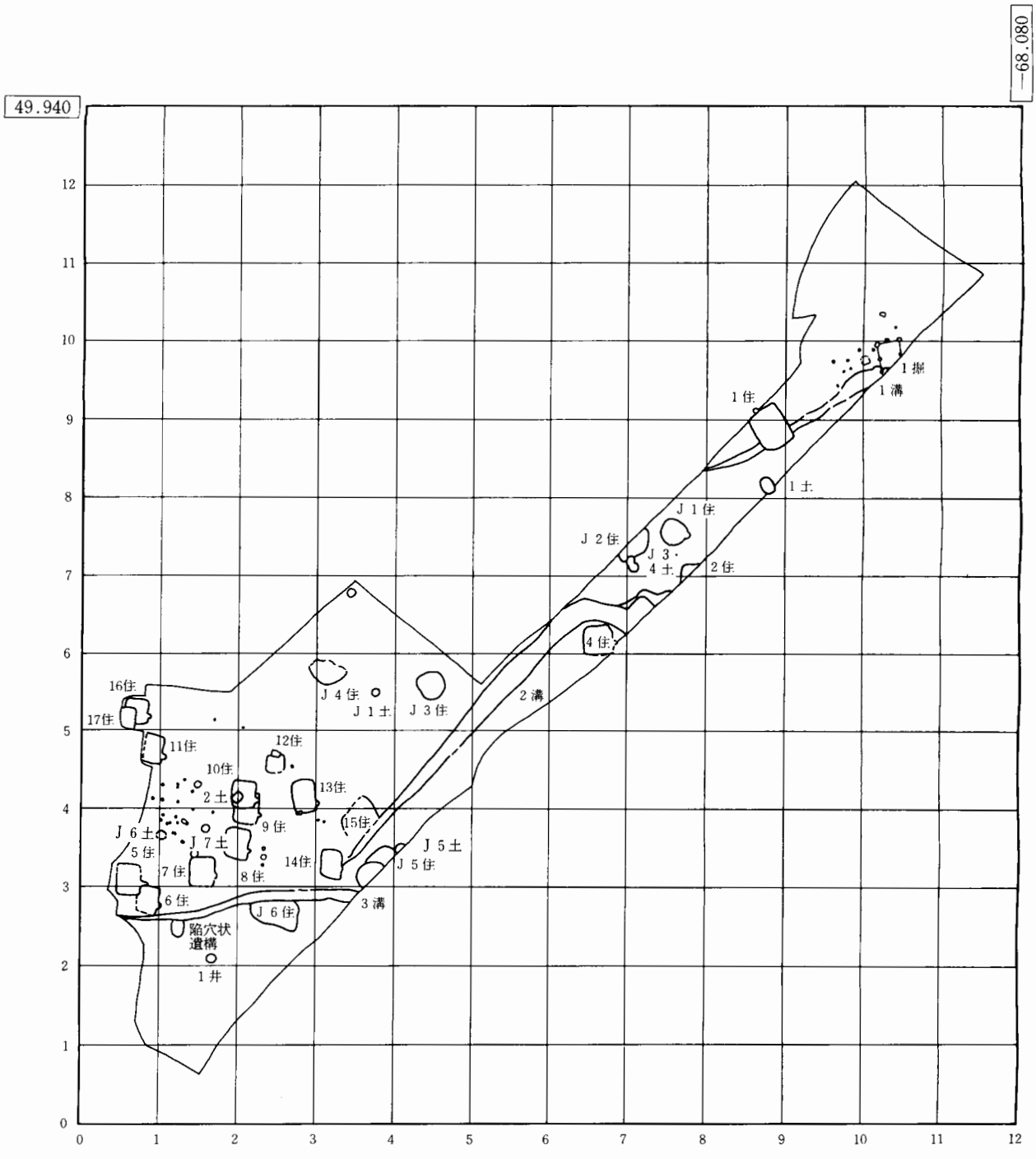
番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 1/4	口：12.0 胴：7.6 高：(3.3)	細砂粒 にぶい褐色	体部～口縁部は直線的に開く。底部平底か。 底部外面ヘラケズリ。他はナデ、ヨコナデ。	外面に接合痕 内面に黒色付着物 外面粘土ヒビ割れ
2	坏 土師器	埋土中 破片	口：(12.0) 胴：(8.0) 高：(3.1)	砂粒 にぶい褐色	体部～口縁部はわずか内湾気味に開く。 底部外面ヘラケズリ。他はナデ、ヨコナデ。	内面に煤付着
3	坏 土師器	床下土坑 1/3	口：12.0 胴：8.4 高：(4.1)	砂粒 橙色	体部は内湾気味に開き、口縁部わずか外反する。 体部・底部外面ヘラケズリ。他はナデ、ヨコナデ 体部内面粗いタテミガキ。	内面に黒色付着物
4	坏 須恵器	埋土中 1/4	口：12.6 胴：7.0 高：3.4	黒色粒多量 灰色	体部～口縁部直線的に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	還元炎焼成。 硬質。
5	坏 須恵器	埋土中 破片	口：(12.0) 胴：(7.4) 高：(3.7)	黒色粒少量 灰色	体部内湾気味に立ち上がり、口縁部わずか外反。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	
6	(塊) 須恵器	埋土中 破片	口：(15.4)	粗砂 灰色	体部内湾気味に開き、口縁部わずか外反する。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。	還元炎焼成。 硬質。
7	(塊) 須恵器	竈燃焼部 破片	口：(14.4)	黒色粒、白色粒 灰色	体部直線的に開き、口縁端部わずか外に張り出す 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。	半還元炎焼成。 軟質。
8	脚付甕 土師器	竈燃焼部 ほぼ完存 脚部欠損	口：12.0 胴：13.3 高：(12.7)	赤色粒、細砂粒 にぶい褐～橙色	口縁部はほぼ直立し、端部で短く外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	口縁部外面中位に 接合痕
9	甕 土師器	竈左袖周辺 埋土中、1/2	口：20.6 胴：21.6	赤色粒、細砂粒 浅黄橙色～橙色	口縁部下半はほぼ直立、上半で外反する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	口縁部外面に接合 痕
10	甕 土師器	煙道部上層 1/2	口：20.0 胴：21.5	細砂粒 にぶい褐色	口縁部下半はほぼ直立、上半で外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ。内面ナデ。	口縁部外面下半に 接合痕
11	甕 土師器	竈内 1/4	口：20.6 胴：22.0	砂粒 にぶい橙色	口縁部下半はほぼ直立、上半で外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ。内面ナデ。	

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
12	甕 土師器	竈前面埋土中 2/3	口：20.0 胴：22.4	細砂粒、赤色粒多量 にぶい橙色	口縁部下半はほぼ直立、上半は内湾気味に強く外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ。内面ナデ。	胴部外面に煤付着 口縁部下半に接合痕、指痕、ヘラ痕
13	甕 土師器	竈周辺埋土中 1/3	口：17.3	砂粒 褐色	口縁部下半は内傾気味、上半は外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	口縁部外面下半に接合痕
14	甕 土師器	竈内上層 4/5	口：19.5 胴：21.6	赤色粒、細砂粒 褐灰色～にぶい褐色	口縁部下半はほぼ直立、上半で強く外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ。内面ナデ。	口唇部直下外面に接合痕、口縁部外面に接合痕
15	甕 土師器	竈内 2/3	口：19.3 胴：21.7	細砂粒 にぶい橙色～褐灰色	口縁部下半はほぼ直立、段を経て上半で外傾する 胴部：外面ヘラケズリ。内面ナデ。	胴部外面に煤付着 口縁部下半に接合痕
16	甕 土師器	竈周辺埋土中 ～床直 3/4	口：21.6 胴：22.8 底：4.4 高：27.7	赤色粒、細砂粒 にぶい橙～橙色	口縁部下半は外傾し、上半でさらに外傾する。 底部は小さな平底。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	胴部上半外面剝落痕多い
17	甕 土師器	竈前面床直 一部欠損	口：20.1 胴：22.1 底：4.4 高：27.6	赤色粒、細砂粒 にぶい橙色～にぶい褐色	口縁部下半は内湾気味に立ち上がる。上半も内湾気味に外傾する。底部は小さな平底。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	胴部中央部外面に厚く煤付着。
18	甕 土師器	竈左袖周辺埋土中 1/2	口：20.5 胴：21.7	赤色粒、細砂粒 にぶい橙色～褐灰色	口縁部下半は内湾気味に立ち上がり、上半は外傾 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	
19	甕 土師器	竈周辺埋土中 1/2	口：19.6 胴：21.7	粗砂多量 明赤褐色	口縁部下半はほぼ直立、上半で外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ。内面ナデ。	口縁部外面下半に接合痕
20	鉢 須恵器	中央部床上7cm 1/2	口：28.2 胴：12.5 高：12.1	粗砂、小礫 にぶい黄橙色	底部は平底。体部は内湾して開く。 体部外面下端ケズリ。底部周縁ナデ。 他は内外面ともに回転ナデ。	半還元炎焼成。 軟質。
21	甕 須恵器	中央部埋土中 1/4	胴：30.0	小礫、白色粒、黒色粒とも多量 灰色	肩部に丸みがある。 胴部：外面回転ナデ。内面ナデ。	還元炎焼成。 硬質。
22	甕 須恵器	竈燃焼部 1/5	胴：(32.0)	赤色粒多、小礫 黄橙色	胴部内外面ナデ。	23と同一個体
23	甕 須恵器	竈前面床直 1/3	底：12.6	赤色粒多、小礫 黄橙色～橙色	胴部は外反気味に立ち上がる。 胴部内外面ナデ。底部内外面ナデ。	22と同一個体
24	砥石	埋土中	砂岩　欠損　残存長5.4、幅2.9、厚さ2.5			
25	鉄釘	埋土中	ほぼ完存　長さ7.3、太さ0.7			傘部欠損？

22号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 須恵器	竈内 2/3	底：7.6	黒色粒 白色	体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	墨書土器、文字不明

IV　久保田（くぼた）遺跡の遺構と遺物



第144図　遺構配置及びグリッド設定図

1．縄文時代の遺構と遺物

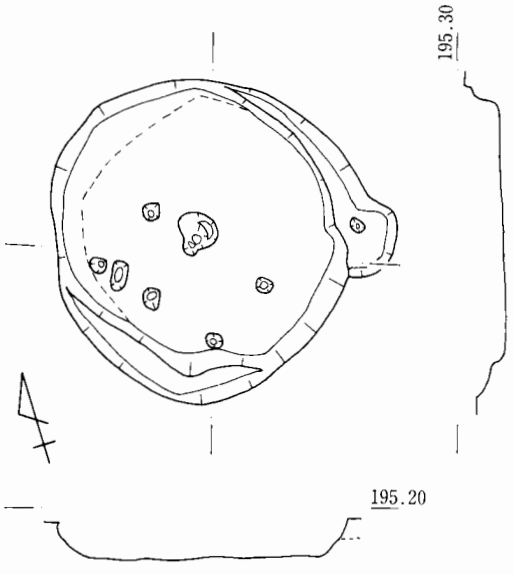
(1) 竪穴住居跡

Ｊ１号住居跡（ＰＬ38・45）

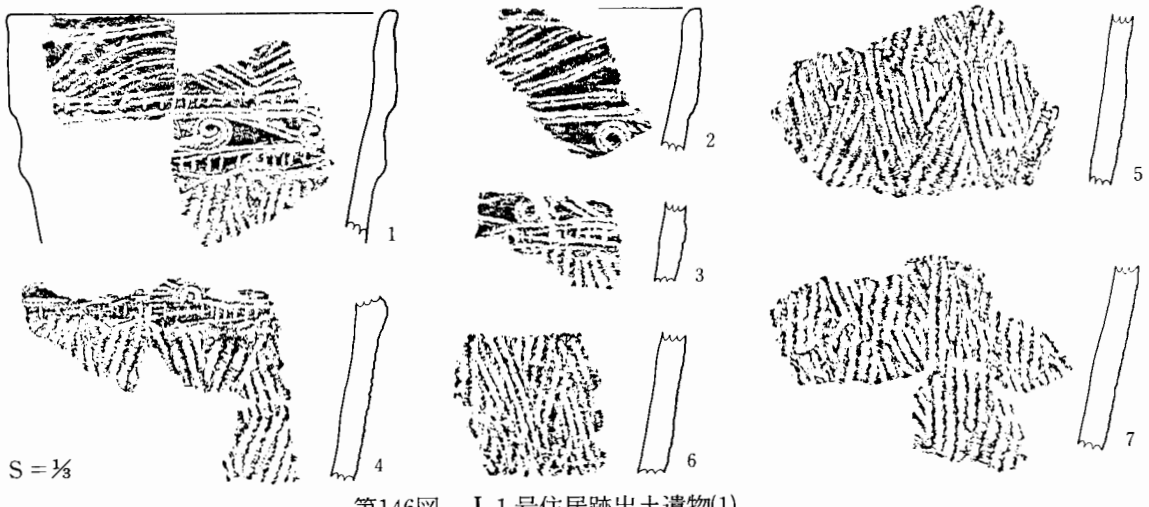
７－８グリッドに位置する。西２ｍにＪ２号住居跡が近接する。

南北3.3m、東西3.2mを測り不整円形を呈する。深さは約40cmを測る。東西両側の壁面は２段に掘り込まれており、この中段のレベルはほぼ等しいものの明瞭に床面とは判断できず、重複する別の住居跡か、あるいは何らかの施設であるかの判断はできなかった。内側の掘り込みで計測すると東西が約2.7mである。また、東側壁に径80cmで、底面レベルが中段と同じ土坑が重複するが、新旧関係は不明である。壁面は全体的に緩やかに立ち上がる。床面は全体的に軟弱である。西半部には６基の小ピットが検出されているが、柱穴であるかは判然としない。中央部には径40cmの浅い掘り込みがあるが、焼土等が検出されておらず、炉とする積極的な根拠がない。遺物は床面近くから石製装飾品が１点出土したが、土器は上層から少量出土しただけである。

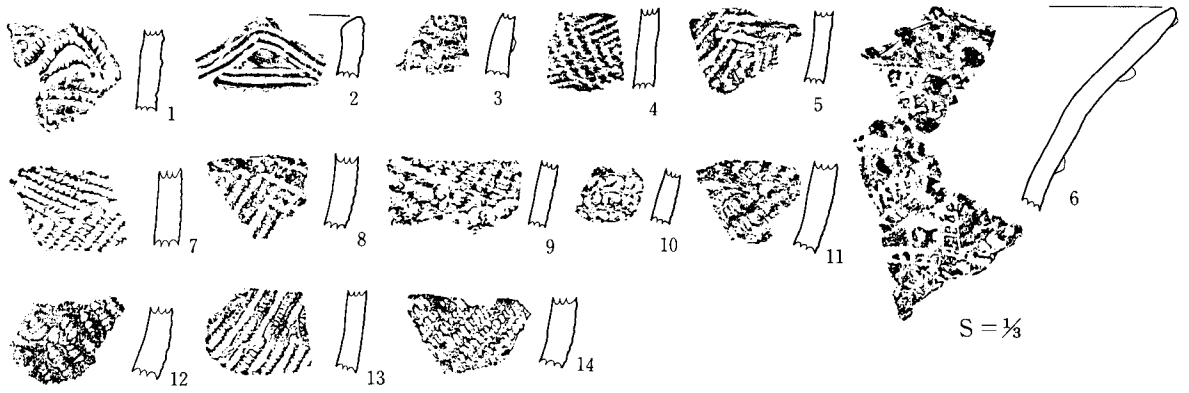
第146図１～７は、同一個体のものである。口縁部形状は平縁ないし小波状を呈するものである。口縁部には低く緩やかな２条の隆帯が巡り、口縁部文様を２段に区画している。文様は、口縁直下と２条の隆帯の上下に撚糸側面圧痕が巡らされ、上段には弧状に、下段には右下がりの斜位および渦状（渦の端部が上下交互となる）の撚糸側面圧痕が施文される。撚糸側面圧痕は、ＬとＲの２本を１単位としている。隆帯には刻みが施されている。胴部には、０段３条のＬＲとＲＬによる、縦位よりもやや斜位方向への回転により、縦位の矢羽根状の縄文を施す。裏面に



第145図　Ｊ１号住居跡　　Ｓ＝1/80



第146図　Ｊ１号住居跡出土遺物(1)



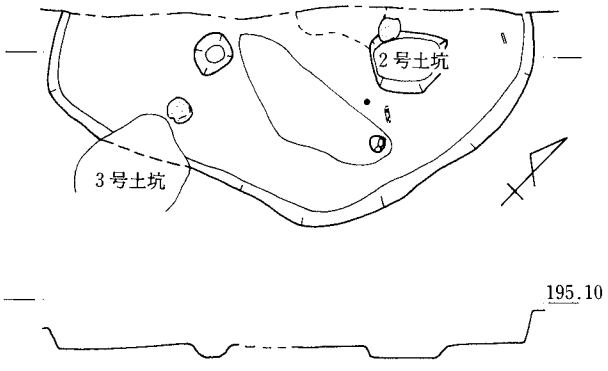
第147図　Ｊ１号住居跡出土遺物(2)

は横位方向を主としたかなり明瞭な擦痕状の整形痕が観察できる。胎土には、繊維の他に砂粒も多く含まれている。第147図１～３は、口縁部に細い隆帯を巡らせ口縁部文様を区画し、山形等の文様を施す。隆帯上には密に刻みを施している。６は口縁部に瘤状の突起をもち、単沈線による文様が描かれ、梯子状沈線等もみられる。４・５・７～14は胴部に羽状や斜状となる縄文を施したものであるが、７～10はループ状となる縄を用いたものである。いづれの土器も、胎土に繊維を含んでいるものである。

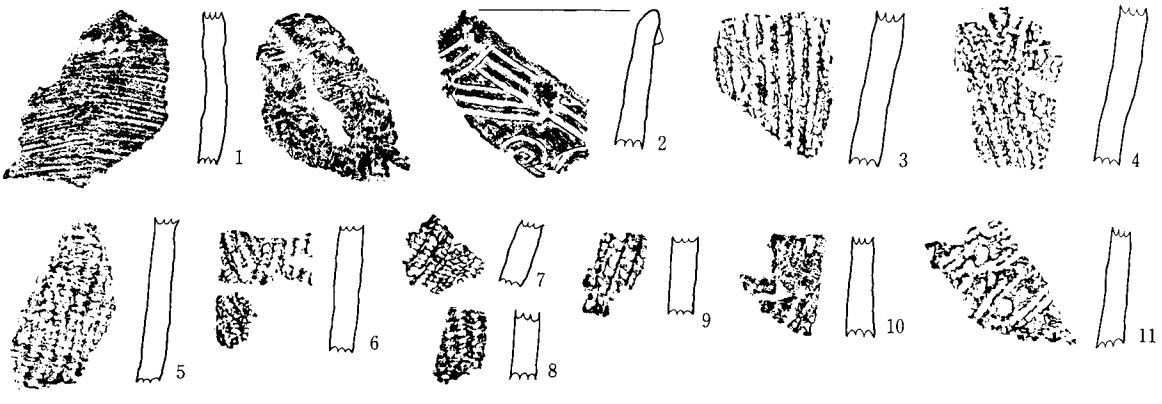
Ｊ２号住居跡（ＰＬ38・45）

７－８グリッドに位置する。縄文時代の土坑が数基重複するが、新旧関係は不明である。Ｊ１号住居跡が近接する。北西部は調査区域外である。

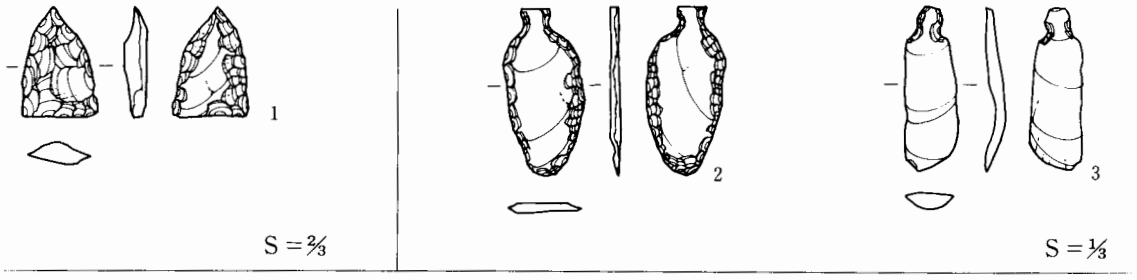
東西約５ｍ、南北約３ｍほどの範囲を調査した。南壁は直線的であるが、東壁（西壁）は湾曲しており、形状不明である。床面は比較的堅緻である。南壁に平行する位置に検出された２基のピットは主柱穴の可能性がある。床面のほぼ中央部は焼土化しており、東端部には長径25cmの礫が置かれている。掘り

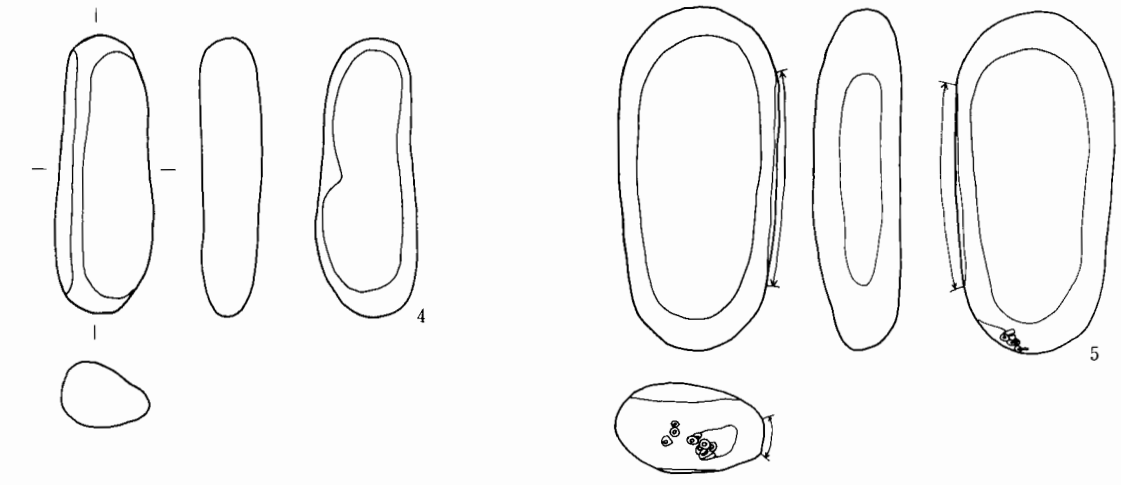


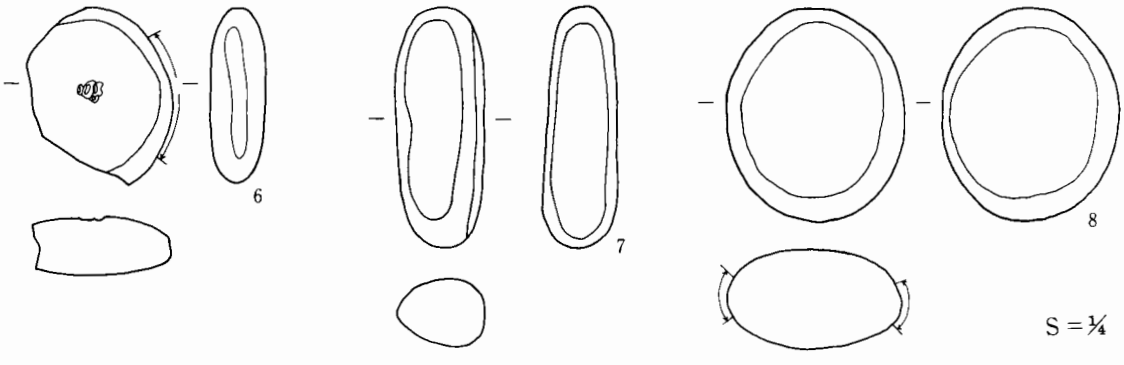
第148図　Ｊ２号住居跡　　S＝1/80

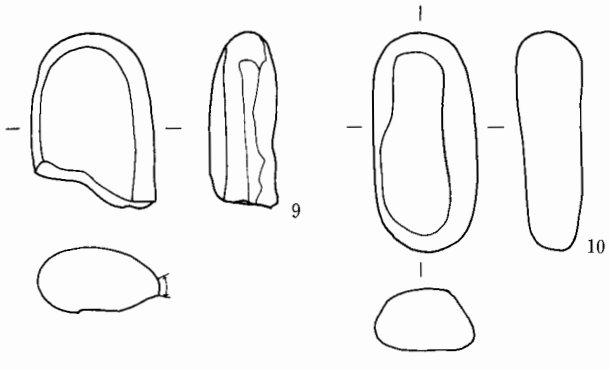


第149図　Ｊ２号住居跡出土遺物(1)　　S＝⅓









J 2号住居跡石器計測表　（単位cm・g）

番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
1	石鏃	2.2	2.0	1.4	黒色頁岩
2	石匙	6.6	3.0	11.3	黒色頁岩
3	石匙	6.3	2.0	9.9	黒色頁岩
4	磨石	14.6	5.2	410	粗粒安山岩
5	磨石	17.9	8.5	1,180	粗粒安山岩
6	磨石・凹石	(9.2)	(7.8)	(270)	粗粒安山岩
7	磨石	12.8	4.7	350	粗粒安山岩
8	磨石	11.2	9.4	750	粗粒安山岩
9	磨石	(9.3)	6.5	(320)	粗粒安山岩
10	磨石	11.7	5.4	370	ひん岩

第150図　J 2号住居跡出土遺物(2)

込みはないが地床炉と思われる。

遺物は南壁際から数点の石器類が出土したが、土器類は埋土中から少量出土しただけである。

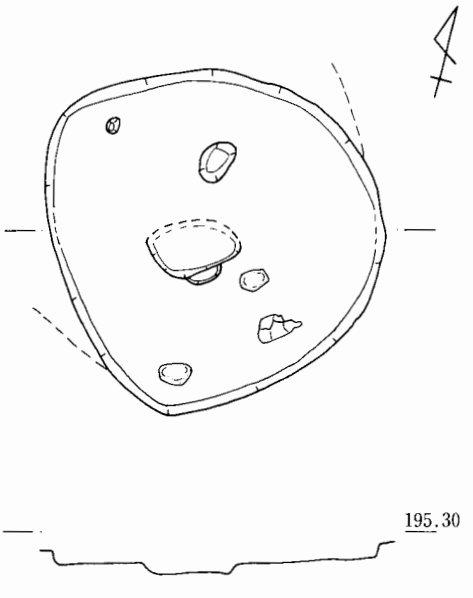
第149図１は、器面の表裏面に条痕を施したもので、条痕は両面ともに比較的浅いものである。２は口縁部に瘤状の突起を持ち、口縁部文様にやや太めな単沈線による文様が描かれている。３～11は胴部に縄文を施すものであるが、３～８は縦位の条となる縄文ないしは縦位の矢羽根状となるもので、０段３条の縄によるものである。なお、出土した石器は第150図に示した通りで、石鏃、石匙、凹石、磨石があり、比較的磨石の量が豊富である。

Ｊ３号住居跡（ＰＬ38・45）

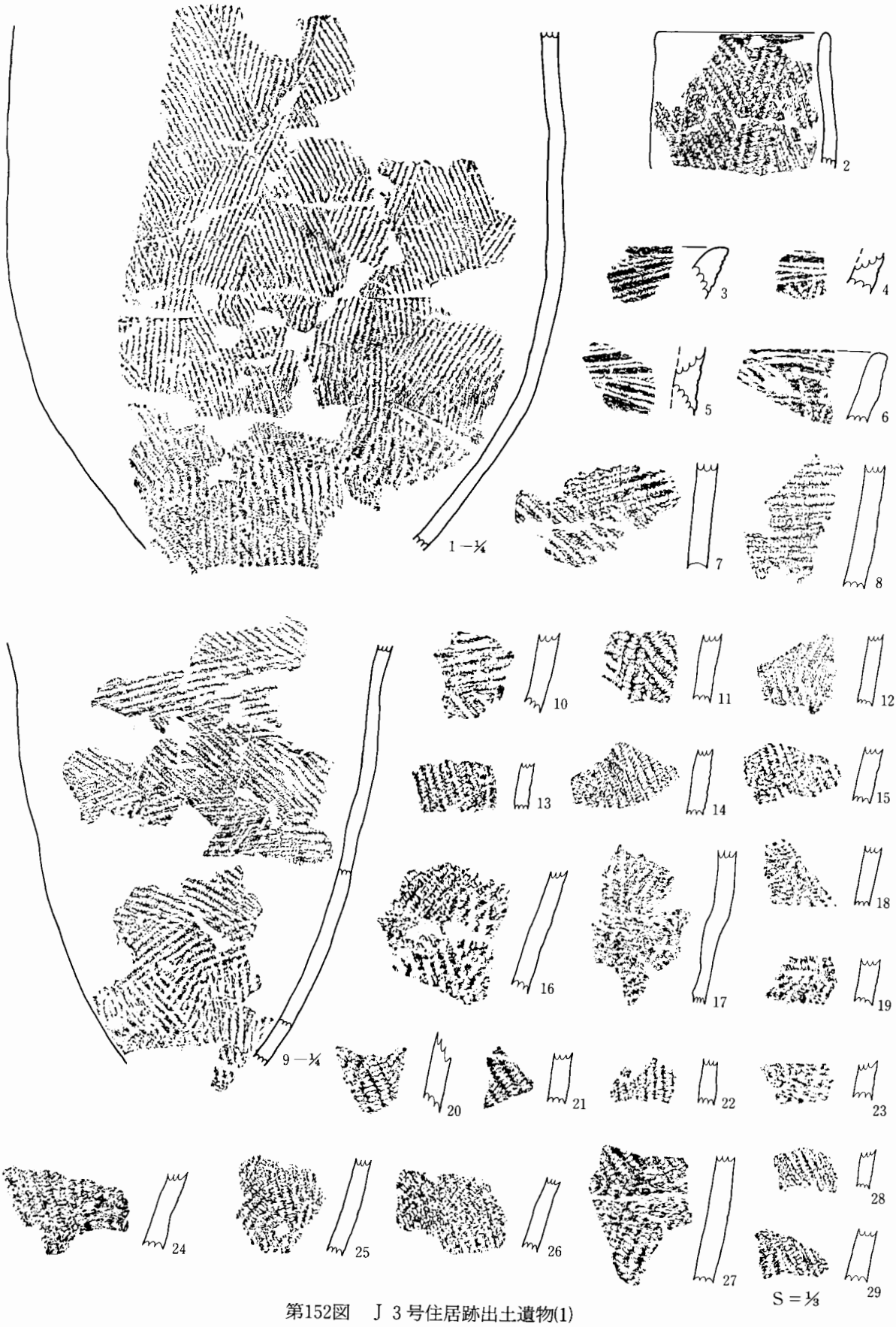
５－５グリッドに位置する。ほぼ中央部に土坑が重複し、本跡が古いと思われる。

径約3.4mで不整円形状を呈するが、北側から西側にかけては明瞭な壁面が検出されておらず、他の遺構が重複していたか、住居の範囲が広がる可能性もある。深さは約20cmを測る。床面は中央部は堅緻であるが、周縁は軟弱である。柱穴・炉跡等は不明である。床面上には長径30～50cmの台石状の河原石が３個据えられていた。遺物はこれ以外に深鉢の大片や石器類がほぼ床面上から出土している。

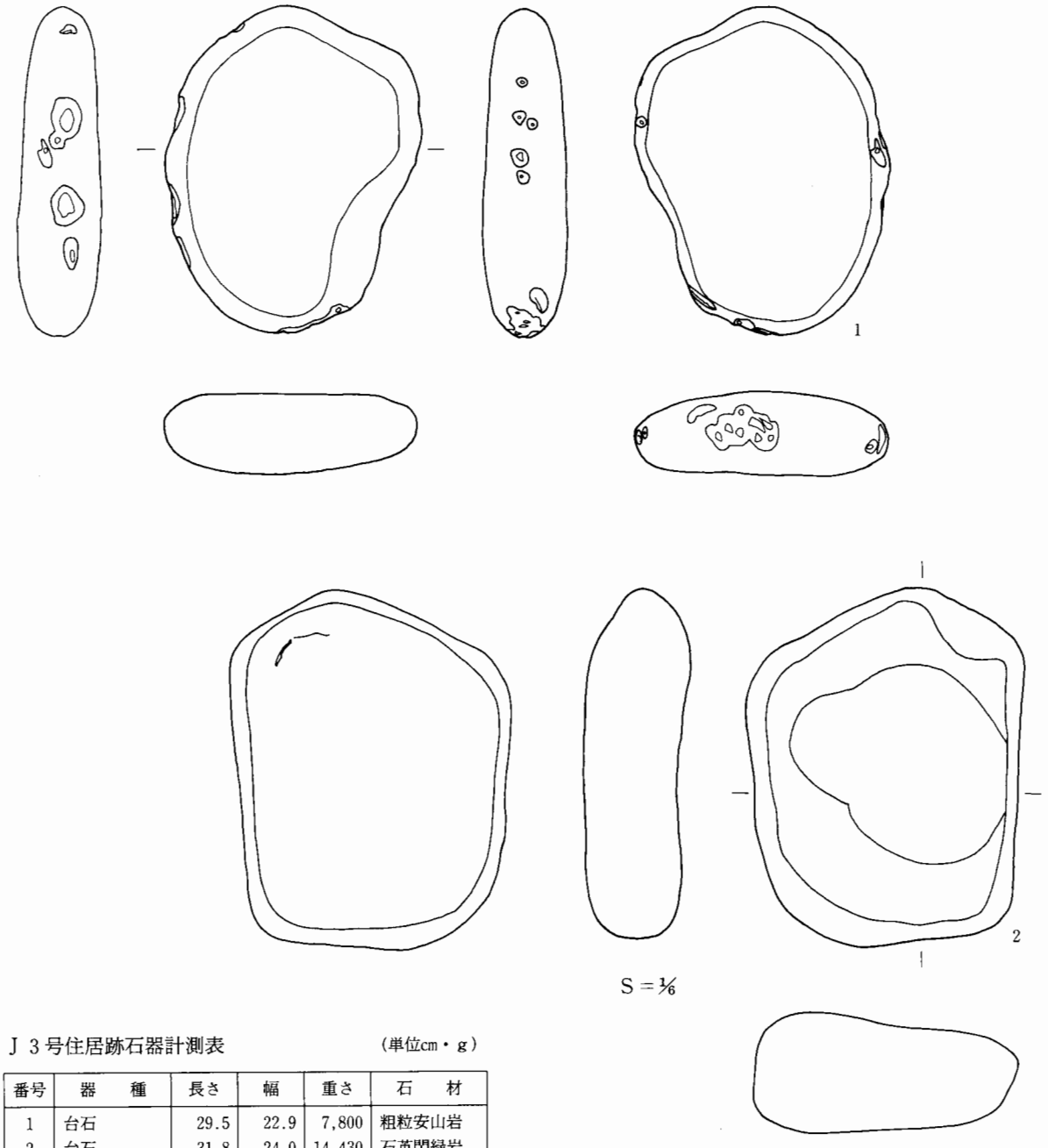
第152図１・３～５は、同一個体のものである。かなり大形の土器で、口縁部にはＬとＲの２本を１単位とした撚糸側面圧痕が施されるが、その文様は不明である。胴部には、０段３条のＲＬとＬＲによる縦位の矢羽根状の縄文が施され、さらにその下半には縦条の縄文が施されている。裏面には、横位ないしは斜位に擦痕状の整形痕が認められる。胎土は、繊維を含むがやはり砂粒が多い。６は平縁となるもので、やや太めな１本の撚糸側面圧痕を２条巡らせ口縁部文様を区画する。区画内には、弧状・斜位に文様が施され、さらには原体の端部の圧痕も施されている。胴部には、縦位の矢羽根状の縄文が施されている。胎土には繊維が含まれている。２は比較的小型な土器で、平縁となる口縁以下に縦位の矢羽根状の縄文が施されている。胎土は繊維を含むが砂粒も多い。７～10・16・17・26は、同一個体のものである。口縁部は不明であるが、胴部には０段３条のＲＬとＬＲによる横位への羽状縄文を施し、その下半には縦条の縄文が施されている。11～15・18～25・27～29は、胴部に０段３条の縄による縦位の矢羽根状の縄文、ないしは縦条の縄文が施されているものである。いづれの土器にも、胎土に繊維を含んでいるものである。



第151図　Ｊ３号住居跡



第152図　Ｊ３号住居跡出土遺物(1)



Ｊ３号住居跡石器計測表　　（単位cm・g）

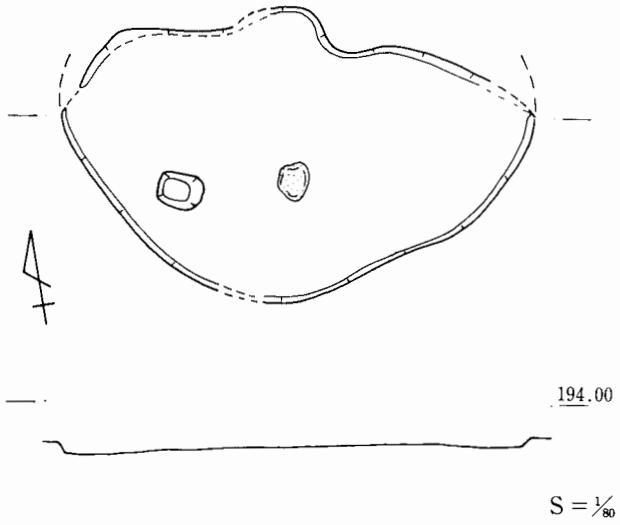
番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
1	台石	29.5	22.9	7,800	粗粒安山岩
2	台石	31.8	24.0	14,430	石英閃緑岩

第153図　Ｊ３号住居跡出土遺物(2)

Ｊ４号住居跡（ＰＬ39・45）

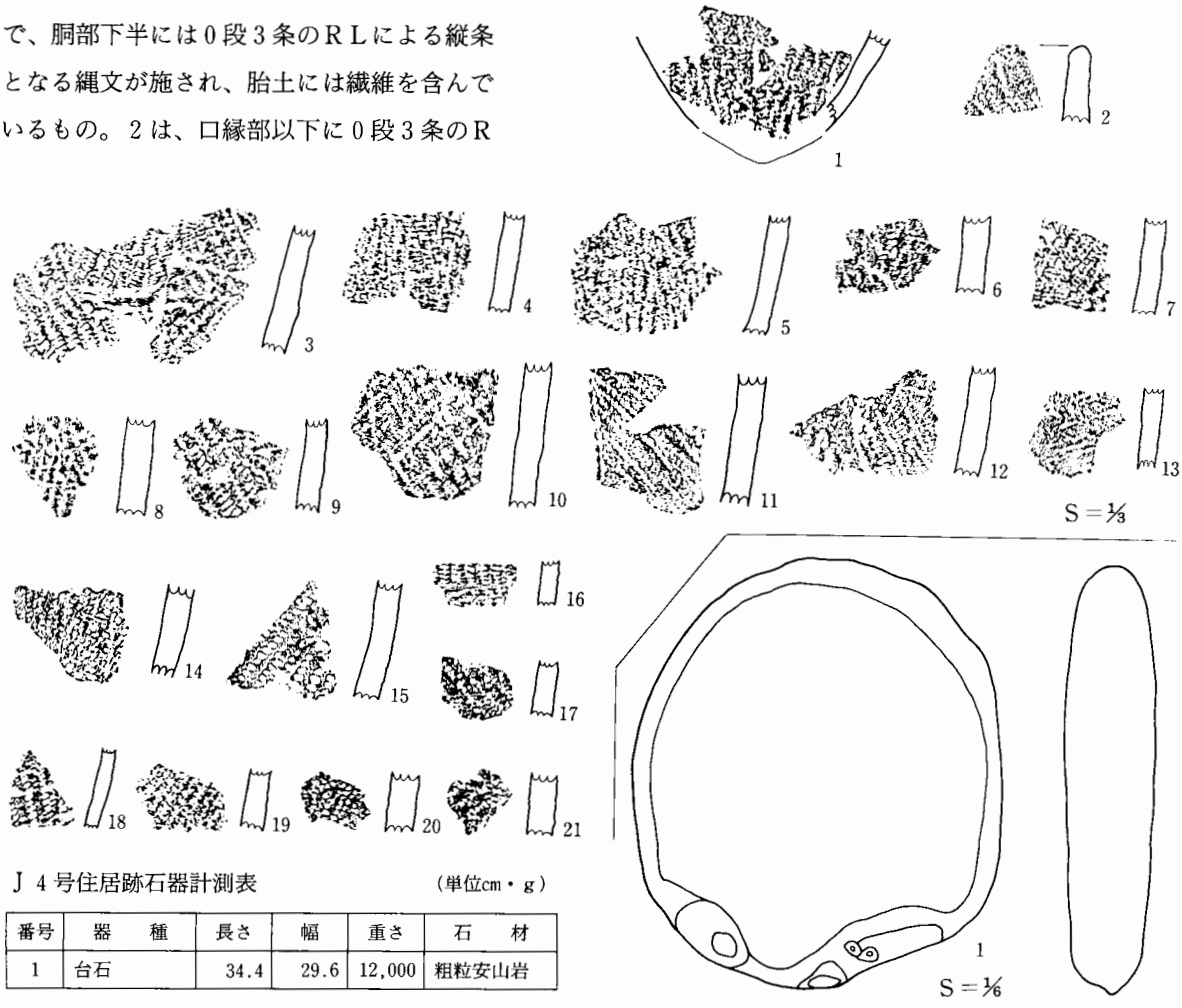
５－４グリッドに位置する。東側約９ｍにＪ３号住居跡が近接する。検出面から浅く、また、耕作による撹乱も激しい。北側は床面まで削平されている可能性がある。

東西4.8m、南北約3.0mを測り、半円形状を呈するが、北側が削平されているとおもわれるため、元来の形状は不明である。床面は堅い部分もあるが全体的には軟弱である。西半部には長径50cmのピットが検出されているが、本跡に伴うかどうか不明である。他には炉や柱穴は検出されていない。検出範囲のほぼ中央には長径40cmで長円形を呈する台石状の礫が据えられており、周辺には土器片が散乱していた。



第154図　Ｊ４号住居跡

第155図１は、尖底となると思われるもので、胴部下半には０段３条のＲＬによる縦条となる縄文が施され、胎土には繊維を含んでいるもの。２は、口縁部以下に０段３条のＲ



Ｊ４号住居跡石器計測表　（単位cm・g）

番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
1	台石	34.4	29.6	12,000	粗粒安山岩

第155図　Ｊ４号住居跡出土遺物

Ｌ縄文が施されているものである。３～21は胴部に縄文が施されているもので、胎土には繊維が含まれている。３～10は０段３条のＲＬとＬＲとによる縦位の矢羽根状の縄文が施されるもので、11～29についても縦条ないしは斜位に縄文が施されているものである。

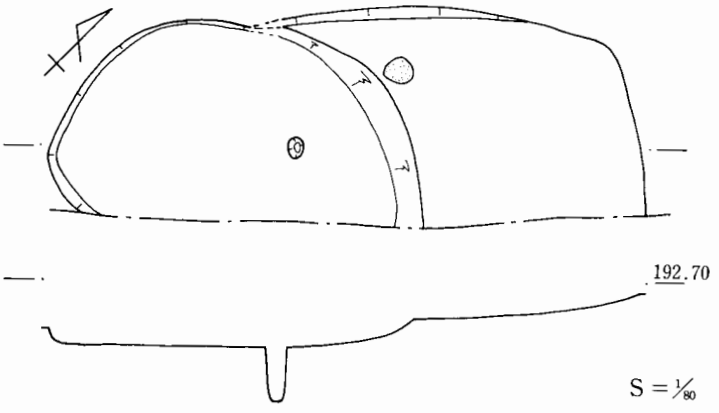
Ｊ５号住居跡（ＰＬ39・45）

３―４グリッドに位置する。南東部は調査区域外である。検出面から浅く、明瞭な壁の立ち上がりが検出されないため、住居であるかどうか判然としない。

径約４ｍの半円形状に若干深く掘り込まれ、さらに北東方向に４ｍほどの浅い方形状の部分が続いている。遺構が重複するのか、関連があるかの判断はつかない。半円形の部分の床（底）面は弱い擂り鉢状に窪んでおり、全体的に軟弱である。方形状の部分の床面も平坦ではあるものの、全体的に軟弱である。円形状の部分から深さ30cmのピットが検出された以外は炉も検出されていない。

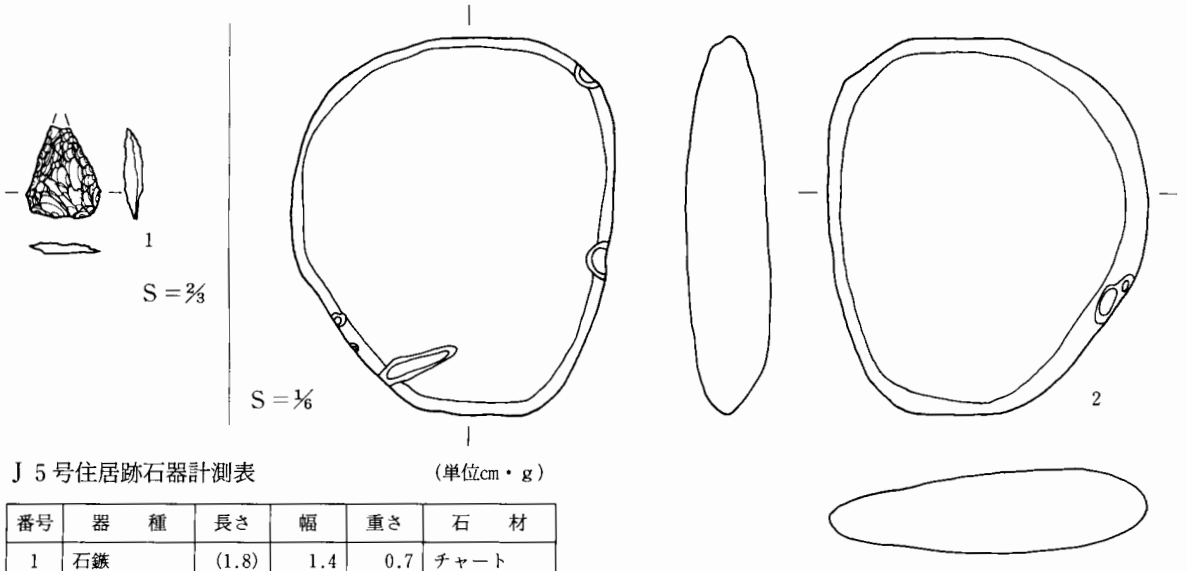
遺物は方形状の部分の床面に台石状の河原石が据えられ数点の石器が出土した以外は、どちらからも土器の小片が少量出土しただけである。

第157図１は口縁が平縁となるもので、ＲとＬの２本を１単位とした撚糸側面圧痕を口縁部の上下に２条巡らせて区画し、菱ないしは鋸歯状に文様を施す。胴部には、０段３条のＲＬとＬＲによる縦位の矢羽根状となる縄文を施している。口縁と胴部の境には、緩やかな隆帯が認められる。胎土には繊維を含んでいる。６・７は胴部に矢羽根状の縄文が施されているもの。15は、平底となる底部の底面に矢羽根状の縄文を施したもの。２は表裏面に条痕をもつもの。３～５・８～14は、表面にのみ比較的浅い条痕をもつものである。



第156図　Ｊ５号住居跡

第157図　Ｊ５号住居跡出土遺物(1)



Ｊ５号住居跡石器計測表　　（単位cm・g）

番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
1	石鏃	(1.8)	1.4	0.7	チャート
2	台石	29.9	25.7	6,500	粗粒安山岩

第158図　Ｊ５号住居跡出土遺物(2)

Ｊ６号住居跡（ＰＬ39・46）

２－３グリッドに位置する。北側は３号溝により削平されている。埋土が地山とほとんど同様であったため、住居形状等の認識に不安が残る。

東西６ｍを測り、南北は４ｍ程の範囲を調査した。壁面、床面とも明瞭に検出されたわけではなく、掘り過ぎたと思われる部分があるが、中央部から西側では比較的堅緻な部分も認められた。柱穴は確認できなかったが、中央部西寄りの床面が焼土化しており、炉跡と思われる。遺物はほぼ床面直上から多数の石器類（磨石、台石、剝片石器類）が出土しているが、土器は台石の直下から数点出土しただけである。

第160図２～５は同一個体のもので、表裏面にはやや太めな条痕が施されているものである。１は口縁が外反するもので、口舌部に貝殻背圧痕が施され、表裏面には条痕が施されている。図中では確認できないが、口舌下には竹管具による円形刺突が認められる。６・７は胴部に条痕が浅く施されているものである。いづれの土器も、胎土に繊維を含むものである。出土した石器については、他の遺構よりも比較的凹石や磨石の類が多い。

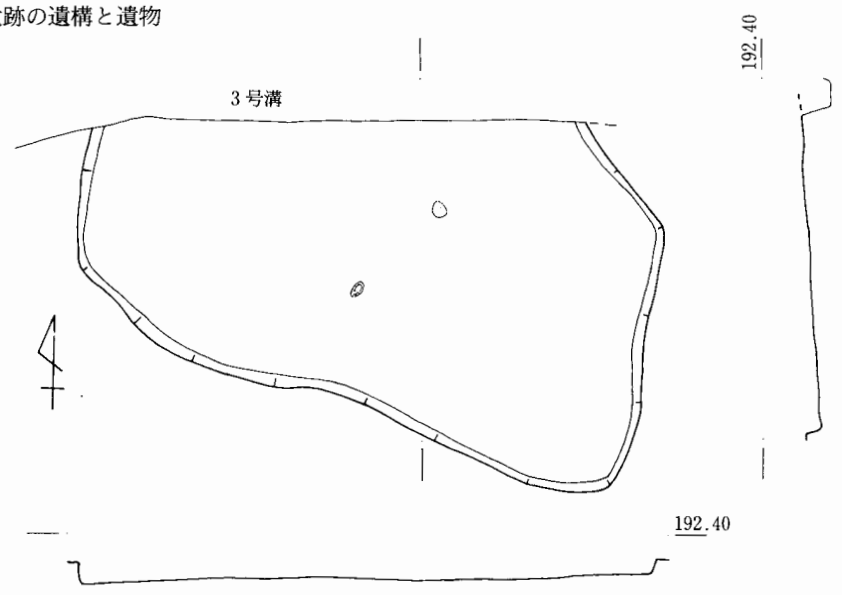
(2)　土坑（ＰＬ39・45・46）

Ｊ１号土坑

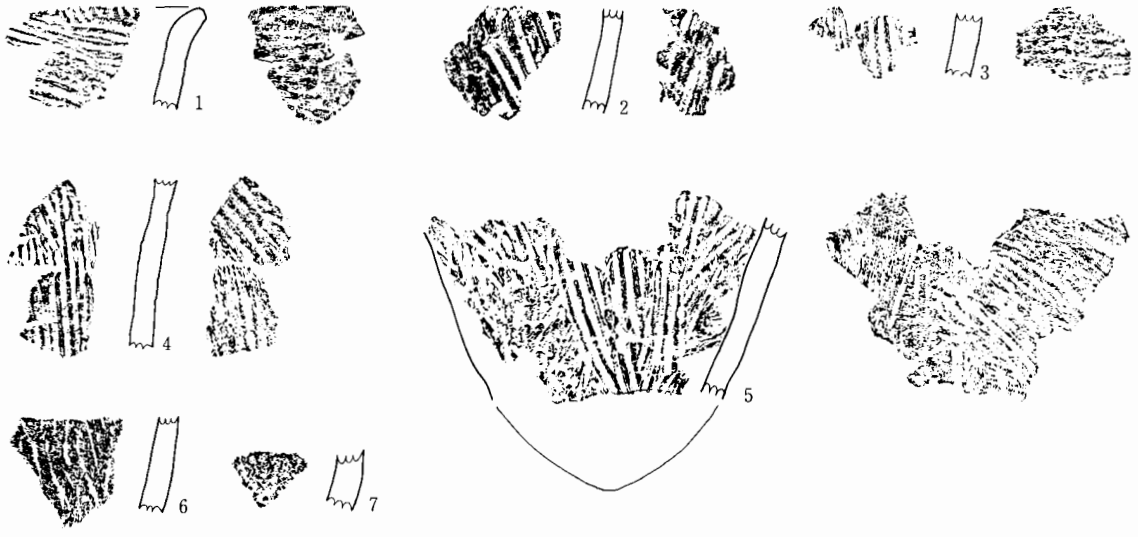
５－３グリッドに位置する。東５ｍにＪ３号住居跡、北西４ｍにＪ４号住居跡が近接する。

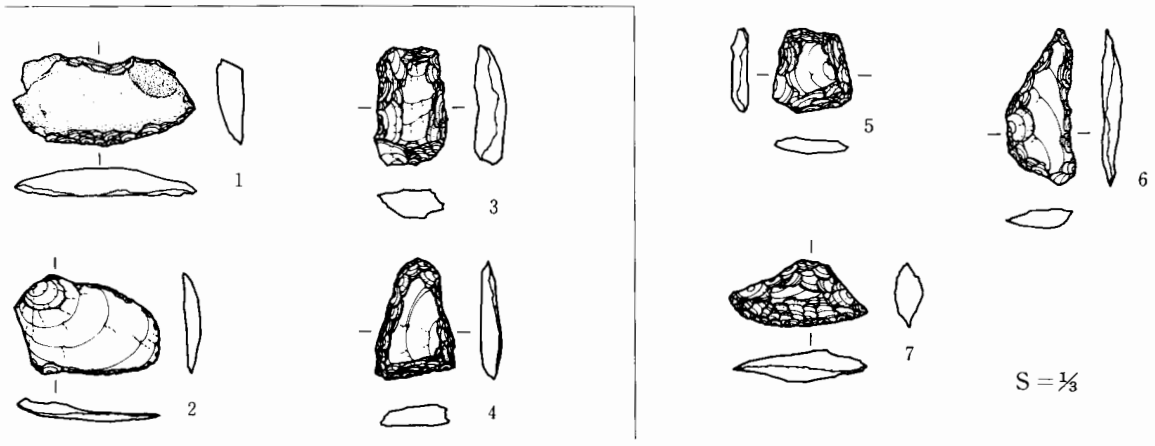
長径1.1m、短径1.0m、深さ30cmを測り、東西に若干長い円形を呈する。底面は平坦で、壁は直に立ち上がる。径30cm程の礫が、底面の北西端に据えたような状態で出土した。中央から南西に偏して、底面より約10cm浮いた状態で平板な礫が出土し、周辺から大小の礫と深鉢が１点出土している。他の遺物は土器破片が少量出土しただけである。

第163図１は平縁として図化されているが、資料が一部なためはっきりしないが小波状を呈する可能性もある。器形は、口縁がやや外反し、胴部は比較的寸胴で円筒形に近く、同一個体と思われる底部片からは平底となるものと考えられる。口縁部には棒状工具による太めな沈線が３条巡り、その上部に斜位の沈線がみら



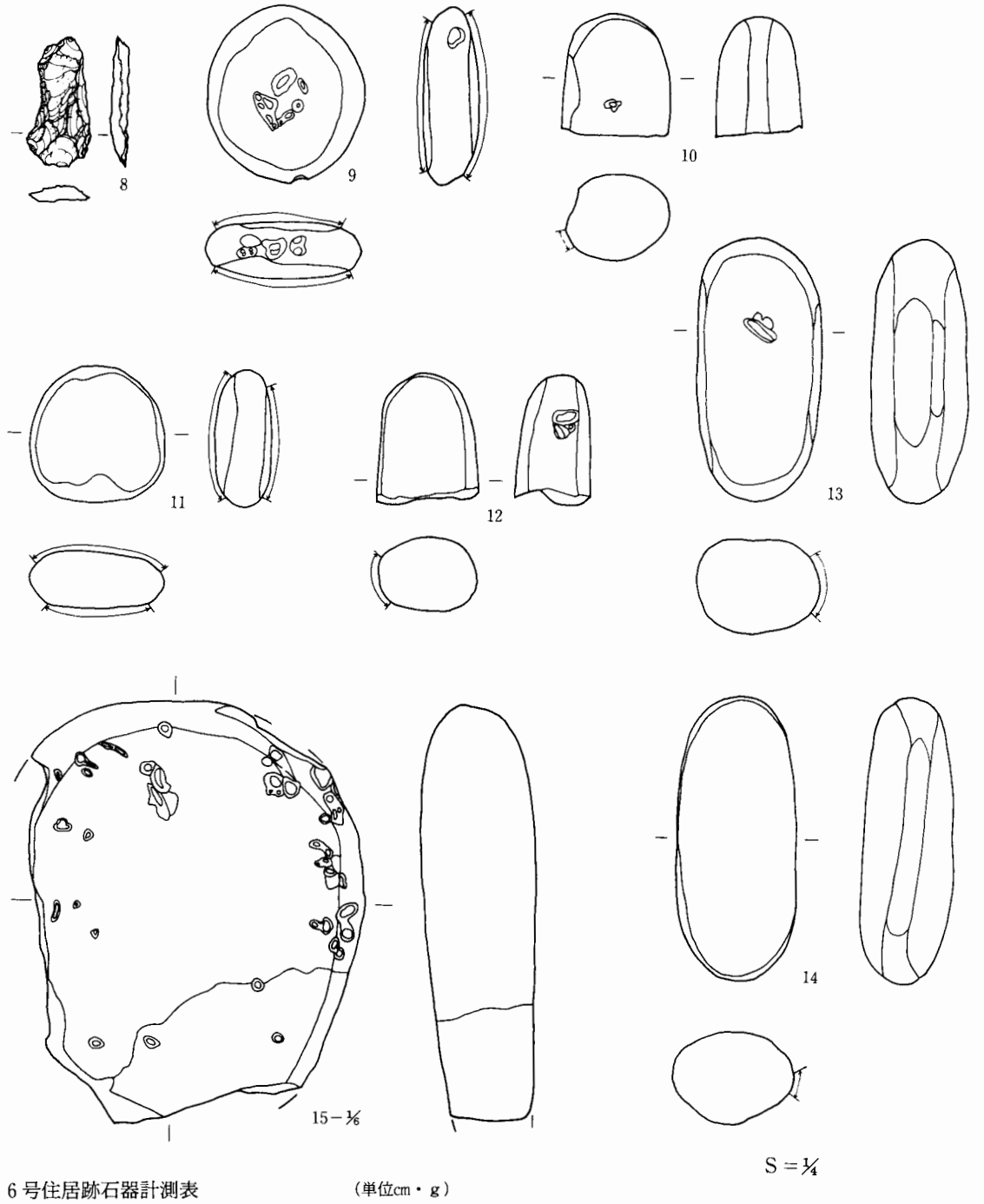
第159図　J 6号住居跡　　S＝1/80





S＝1/4

第160図　J 6号住居跡出土遺物(1)



Ｊ６号住居跡石器計測表　　（単位cm・g）

番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
1	スクレイパー	9.6	4.9	68.2	黒色頁岩
2	スクレイパー	7.7	5.4	29.9	黒色頁岩
3	打製石斧	6.2	3.9	51.1	黒色頁岩
4	打製石斧	6.5	4.2	34.7	黒色頁岩
5		6.0	2.8	13.7	黒色頁岩
6		3.3	3.1	8.5	黒色頁岩
7		5.4	2.6	13.2	黒色頁岩
8	打製石斧	7.8	3.9	32.1	粗粒安山岩
9	磨石・凹石	10.7	9.5	450	粗粒安山岩
10	磨石・凹石	(7.5)	6.7	395	粗粒安山岩

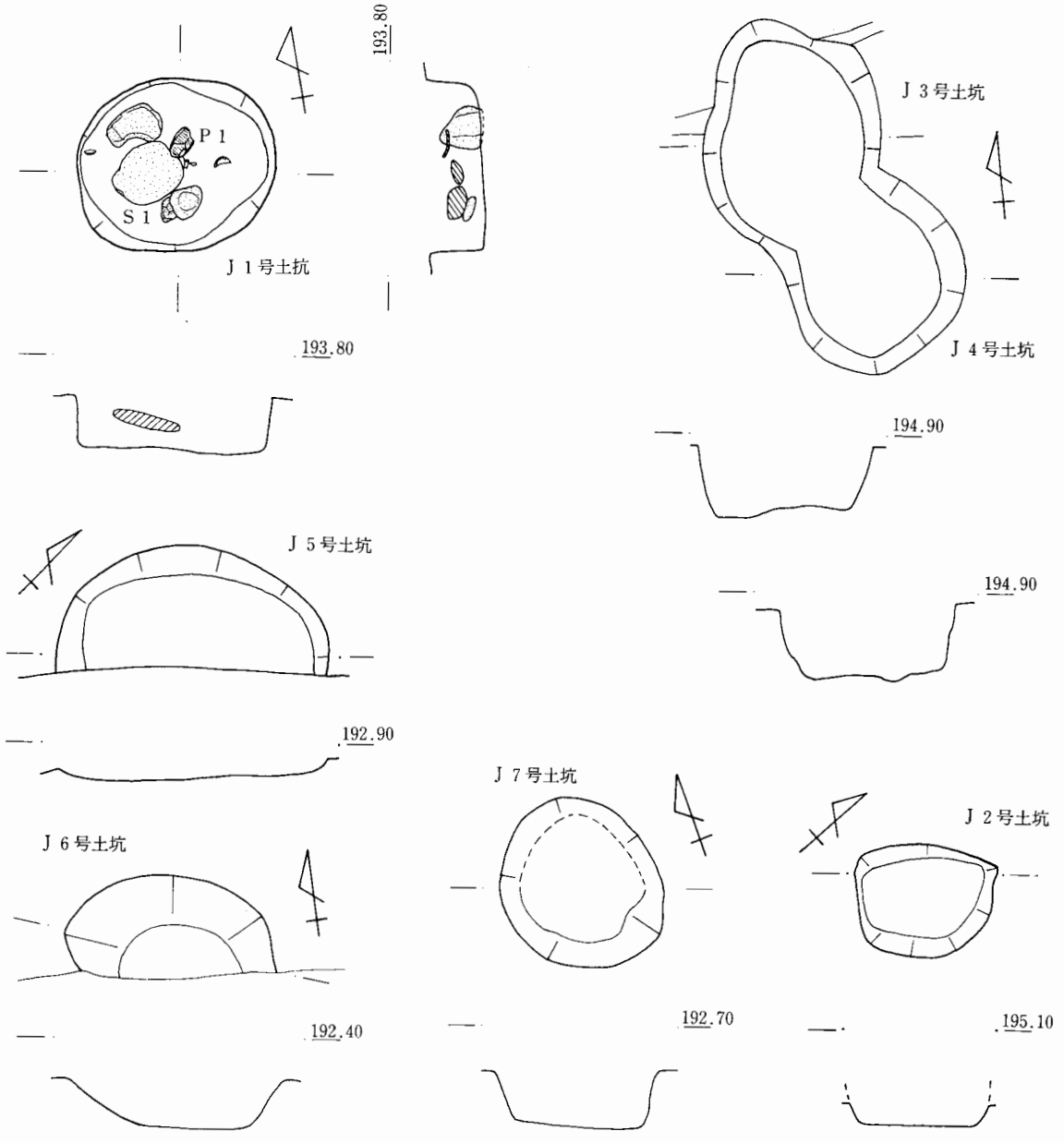
番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
11	磨石	8.3	8.2	340	粗粒安山岩
12	磨石	(8.0)	6.2	320	粗粒安山岩
13	磨石・凹石	16.0	7.5	1,170	石英閃緑岩
14	磨石	17.3	7.4	1,100	粗粒安山岩
15	台石・凹石	(38.4)	(30.1)	17,000	粗粒安山岩

第161図　Ｊ６号住居跡出土遺物(2)

れる。この沈線は、刻み状に口縁部を巡る可能性もある。胴部には、ＲＬと０段３条のＬＲによる横位回転の羽状縄文が施され、部分的に菱形を構成させる。さらに同一個体の胴部片を見ると、胴部下半には羽状縄文の下に、薄く条痕が縦方向に近い斜位に施されている。裏面には、横方向を主体に条痕が施されている胎土は、繊維と砂粒が多く含まれている。２は外反する平縁となる口縁部で、口舌部に刻みが施され、口縁部に太い沈線で波状ないしは弧状に文様を施している。３は胴部に０段３条のＲＬとＬＲの結束による羽状縄文を施すもので、胎土には繊維を含む。５は１と同一の個体となるもの。４・６・７は胎土に繊維をふくむ胴部片で、０段３条のＲＬとＬＲによる矢羽根状の縄文を施したもの。８・９は、表面のみに条痕を施したもので、いづれも胎土に繊維をふくむものである。

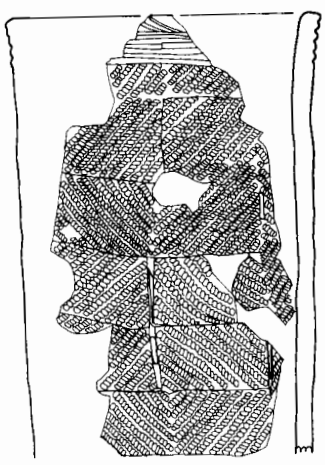
Ｊ２号土坑

７－８グリッドに位置する。Ｊ２号住居跡と重複し、本跡が新しい可能性がある。



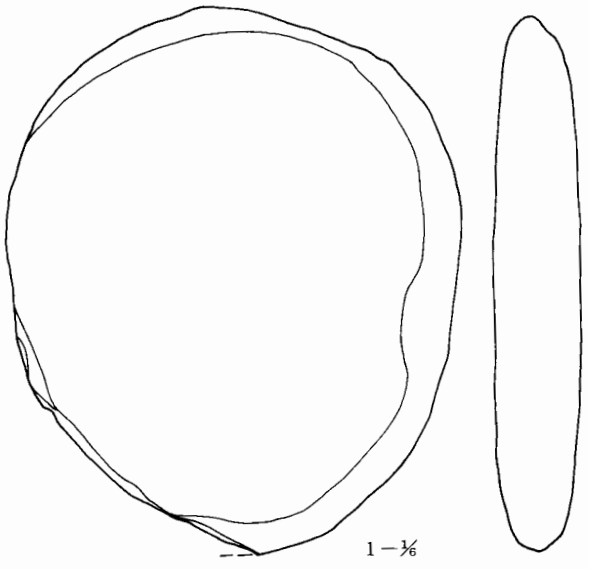
第162図　縄文土坑

S＝1/40

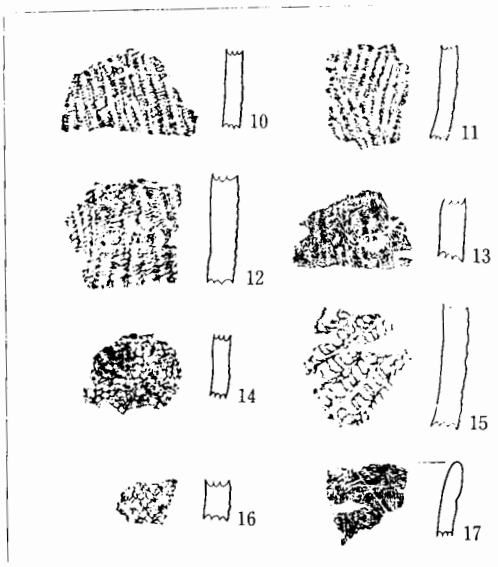


1－¼

J 1号土坑



1－⅙

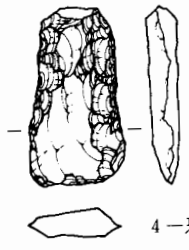


J 2号土坑

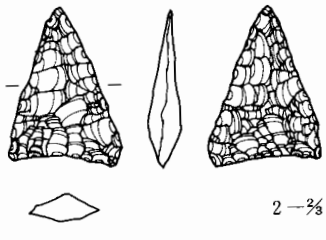
土坑出土石器計測表　　（単位cm・g）

番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
1	台石	42.6	36.4	18,250	粗粒安山岩
2	石鏃	3.2	2.1	3.1	
3	磨石	11.5	6.7	1,175	粗粒安山岩
4	打製石斧			95	黒色頁岩

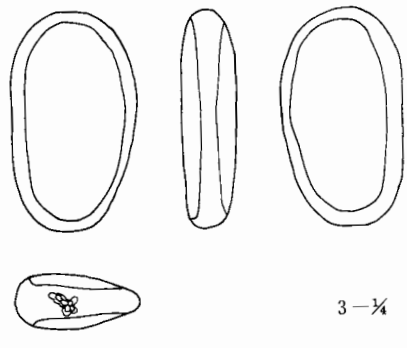
J 3号土坑



4－¼



2－⅔



3－¼

S＝⅓

第163図　縄文土坑出土遺物

長径0.8m、短径約0.6mを測り、Ｊ２号住居跡からの深さは約10cmである、平面形状は不正の長円形を呈する。底面は平坦で、壁も比較的急に立ち上がる。遺物は埋土中から土器破片、石器が少量出土している。

第163図10～12は胴部に０段３条のＲＬとＬＲによる縦位の矢羽根状の縄文を施すもので、胎土に繊維を含むものである。13・14は縦条となるように縄文が施されたもので、胎土に繊維を含む。15・16は斜位に縄文が施されたもので、いづれも胎土に繊維を含むものである。17は口縁部に刺突状の沈線を施し、裏面に浅い条痕を持つものである。

Ｊ３号土坑

７－８グリッドに位置する。Ｊ２号住居跡と重複し、Ｊ４号土坑とも重複するが、新旧関係は不明である。

長径1.3m、短径1.0m、深さ約40cmを測る。平面形状は不正の長円形を呈する。底面は多少の凹凸があり壁も若干角度をもって立ち上がる。遺物は打製石斧１点と少量の剝片が出土している。

Ｊ４号土坑

７－８グリッドに位置する。Ｊ３号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

径約１ｍを測り、ほぼ円形を呈する。深さは約40cmである。底面はほぼ平坦である。壁面は部分的に段があり、若干角度をもって立ち上がる。遺物は出土していない。

Ｊ５号土坑

３－５グリッドに位置する。Ｊ５号住居跡の北東に接する。南東半分は調査区域外である。

径約1.5mを測り、円形若しくは長円形を呈すると思われる。深さは約10cmと浅い。底面はほぼ平坦であるが、壁面の立ち上がりは不明である。遺物は剝片が数点出土しただけである。

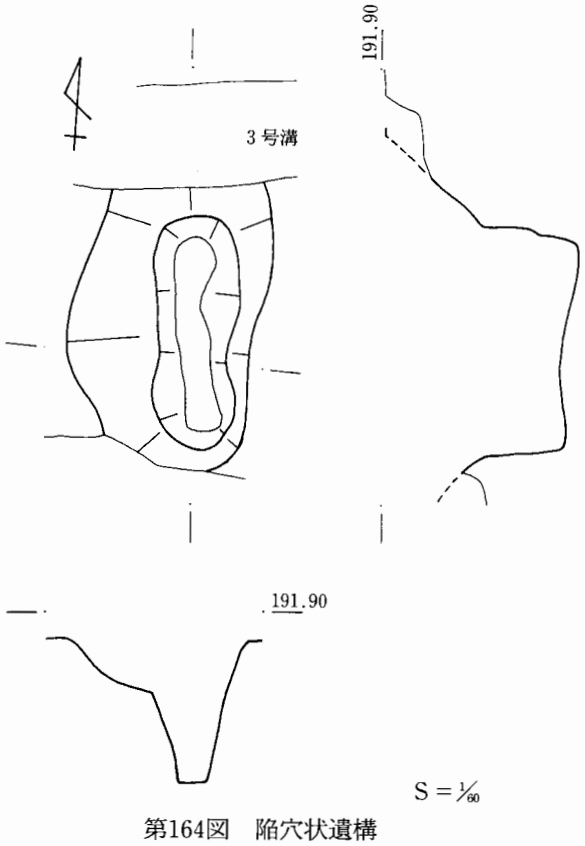
Ｊ６号土坑

３－２グリッドに位置する。現代の耕作溝によって過半部を削平されている。

残存部で径1.2mを測る。深さは約30cmである。底面は平坦であるが、壁面はかなり角度をもって立ち上がる。遺物は出土していないが、埋土から縄文時代の遺構と判断した。

Ｊ７号土坑

３－２グリッドに位置する。Ｊ６号土坑が西約５ｍに近接する。後世の小ピットが重複



第164図　陥穴状遺構

する。

径約１ｍを測り、ほぼ円形を呈する。深さは約30cmである。底面は平坦で、壁面は若干角度をもって立ち上がる。遺物は数点の剝片が出土しただけである。

陥穴状遺構（ＰＬ39）

２－２グリッドに位置する。３号溝と重複し、現代の耕作溝によっても端部を削平されている。

端部が削平されているため明確ではないが、長径約３ｍと推定され、短径1.5ｍを測る。中段では長径1.8ｍ、短径60cm前後を測る。深さは約1.5ｍである。東壁は直線的に立ち上がるが、西壁は中段から緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。

(3) 遺構外出土遺物（ＰＬ46・47）

本遺跡から出土した遺構外からの遺物については、第165～168図に示した通りで、早期前半の撚糸文土器から前期、中期、後期に至る比較的幅広い時期にわたる。

第165図１～４は撚糸文土器であり、１～３は口縁部片で、口舌部が比較的丸みをおび、やや外反し口縁部以下に撚糸が施されているもの。４は胴部に撚糸が施されているものである。

第165図５～８は表裏面に条痕が施されるもので、全体に施されている条痕は浅く、胎土には繊維が含まれている。

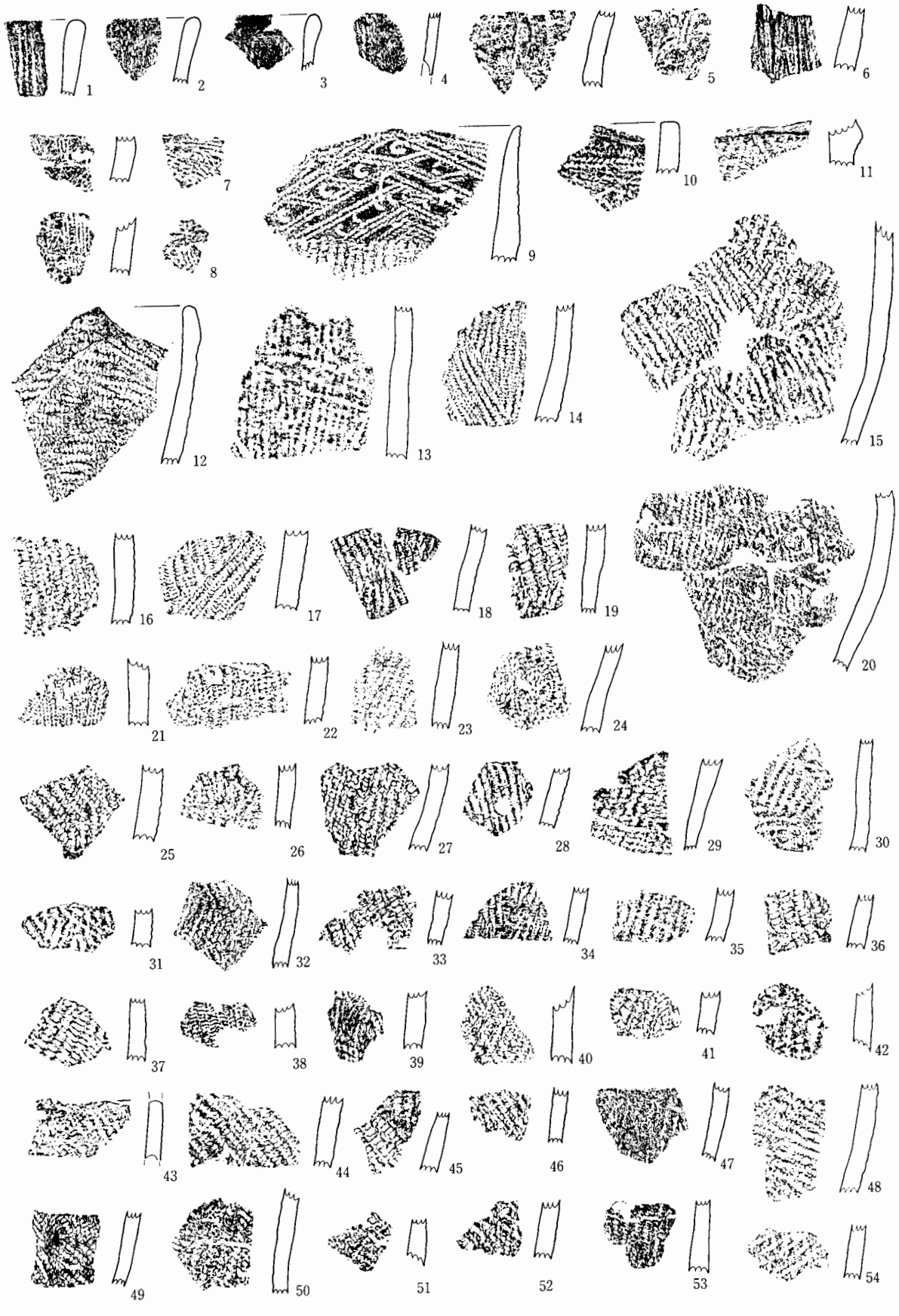
第165図９～42は、本遺跡から検出された遺構の主体を成す時期のもので、９はやや波状となる口縁の口縁部にＲとＬとを１組みとした撚糸側面圧痕により山形ないしは小さな菱形を構成させ、部分的にループ状の圧痕を施し、胴部に０段３条の縄による縦条の縄文を施しているもの。胎土には微量の繊維を含む。10は波状となる口縁部に、ＲとＬとを１組とした撚糸側面圧痕を施したもの。胎土に繊維を含む。11は口縁部と胴部とを区画する部分が隆帯状に肥厚し、以下胴部に０段３条のＲＬとＬＲとによる縦位の矢羽根状の縄文を施すもので、胎土には繊維を含むもの。12は波状口縁となるもので、口縁部は肥厚し口縁部以下にＲＬの縄文が施文されるもの。繊維は含まれていない。13～42は胴部に０段３条の縄による縦位の矢羽根状ないしは縦条となる縄文が施されるもので、胎土には繊維が含まれている。

第165図43～54・第166図１～17は、胎土に繊維を含む縄文施文の胴部片で、前期前半に位置付けられるものと考えられるが、詳細については不明なもの。０段３条の縄を用いているものも多いが、斜行するものや横走するものがある。また、羽状となるもののうち17は、結束によるものである。

第166図21は胴部にループ状となる縄文を数段施し、胎土に繊維を含むもの。22・23は波状ないしは平口縁となるもので、口縁部に多裁竹管による沈線で山形状ないしは鋸歯状に文様を描き、瘤状の突起を貼付している。胎土には繊維を含む。18～20は、１本ないし２本の細い縄を付加させた付加条を用いて縄文を施したもので、20は口縁部である。胎土には繊維を含む。24は平口縁となる口縁部に、半裁竹管による平行沈線を数条施したもので、胎土には繊維を含む。

第166図25～36は、口縁部や胴部に半裁竹管による沈線で文様を描くもので、26・35・36には地文に縄文が施されている。37～41は同一の個体と思われるもので、地文縄文の胴部に刻みをもつ細い隆帯で文様を描くもの。42～47は口縁部や胴部に細い半裁竹管による沈線で文様を描くもので、42は平行に、44～47は矢羽根状に集合沈線を施し、ボタン状貼付をも持つもの。

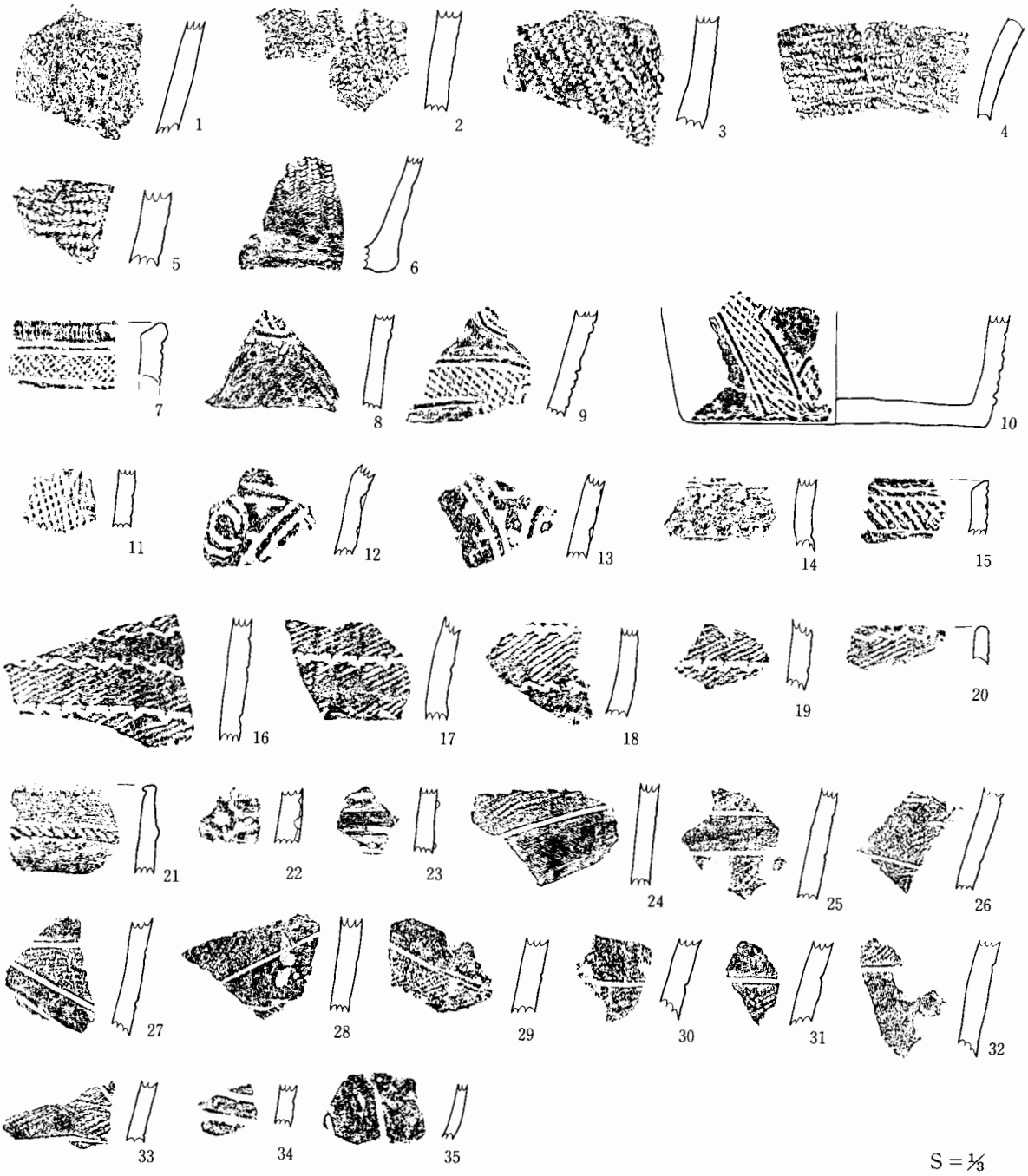
第166図48～50は同一の個体と思われるもので、口縁部は不明であるが胴部上半に貝殻と同様な効果をもつ



第165図　遺構外出土遺物(1)　　S＝⅓

S＝⅓

第166図　遺構外出土遺物(2)



第167図　遺構外出土遺物(3)

第168図　遺構外出土遺物(4)

S＝¼

ようなヘラ状の工具による押し引き、およびその下部に横位に連続する細い刺突、ヘラ状工具の端部による列点状の刺突を数段施文し、胴部下半には貝殻ではない別な工具による貝殻腹縁文が施されている。

第166図51～55・第167図１～６は、胴部にＲＬないしはＬＲの縄文を施文したものである。

第167図７～11・15は半裁竹管具による文様を描くもので、７・15は口縁部にやや太めな半裁竹管で区画した中に細い半裁竹管で格子状に沈線を施したもの。８～11は同一の個体と思われるもので、やや太めな半裁竹管により半肉彫り状に区画した内部に、細い半裁竹管による沈線で格子状ないしは斜位に文様を施したもの。14は半裁竹管による文様区画内に、三角状の刺突を連続させたもの。12・13・16～20は同一の個体と考えられるもので、12・13は口縁部文様に単沈線による曲線状の文様を描くとともに、三角状の刺突を施し、胴部に縄文を施したもの。

第167図21～23は口縁部に刻みを持つ細い隆帯を巡らせるもので、22には貼付文もみられる。24・35は胴部上半に沈線による幾何学文が区画され、区画内に縄文が施文されるものである。

遺構外から出土した石器については、石鏃、石匙、石斧、スタンプ形石器、凹石、磨石、そして多くの剝片等がある。第168図に図示したものは、その中でも主だったものを掲載した。各石器の計測値については、表に示したとおりである。

本遺跡から出土した縄文時代の遺物の中で、各遺構から出土した土器や遺構外からの土器に、注目すべき点がある。これらの土器は、およそ短時期に形成された一群の土器と考えられ、概ね早期末葉から前期初頭のものとして位置付けられるものである。県内におけるこの時期の土器群については、出土例も少なくその詳細については不明な点が多い。また、県外との比較においてもあまり良好な資料は見あたらない。むしろ北関東特有の土器群である可能性を秘め、今後の資料の増加を待ち、本資料を再度検討する必要性があるものと考えられる。

遺構外出土石器計測表　（単位cm・g）

番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
1	石鏃	1.9	1.7	0.9	黒色頁岩
2	石匙	7.3	2.3		黒色頁岩
3	打製石斧	6.2	3.8	49.3	灰色安山岩
4	打製石斧	13.0	5.9	316	黒色頁岩
5	スタンプ石	9.8	8.9	540	粗粒安山岩
6	スタンプ石	10.9	8.5	850	石英閃緑岩
7	スタンプ石	12.1	7.4	565	粗粒安山岩

番号	器　種	長さ	幅	重さ	石　材
8	スタンプ石	10.6	7.6	520	石英閃緑岩
9	凹石	9.7	8.4	500	粗粒安山岩
10	凹石	9.9	7.3	440	粗粒安山岩
11	磨石・凹石	10.9	10.2	500	粗粒安山岩
12	凹石	11.6	8.0	425	粗粒安山岩
13	台石	35.0	21.5	9,600	粗粒安山岩

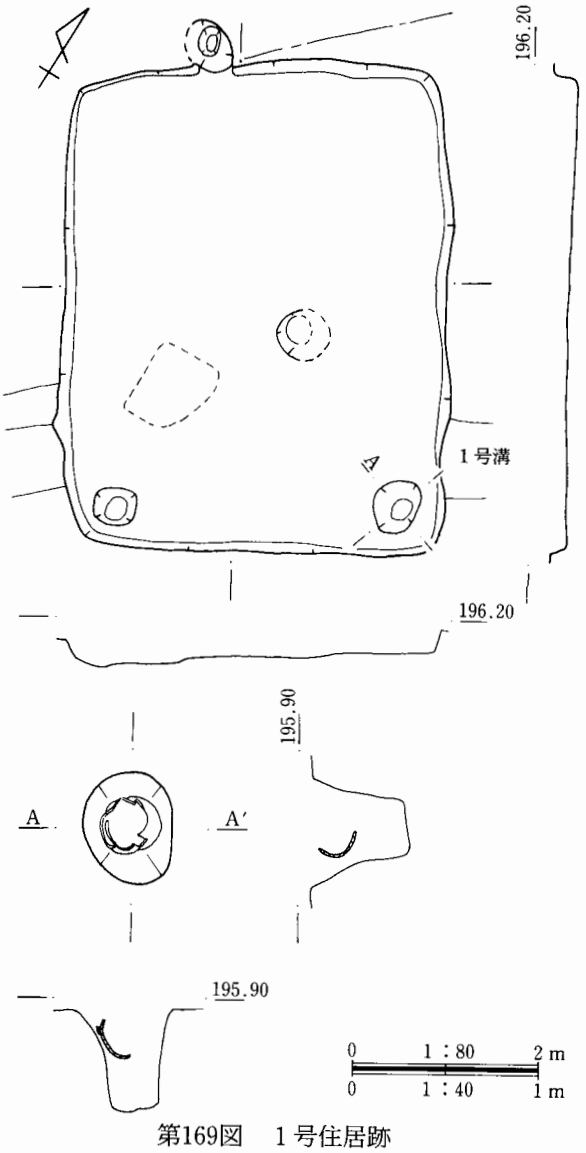
2．古墳～平安時代の竪穴住居跡

1号住居跡（観P162、PL40・47）

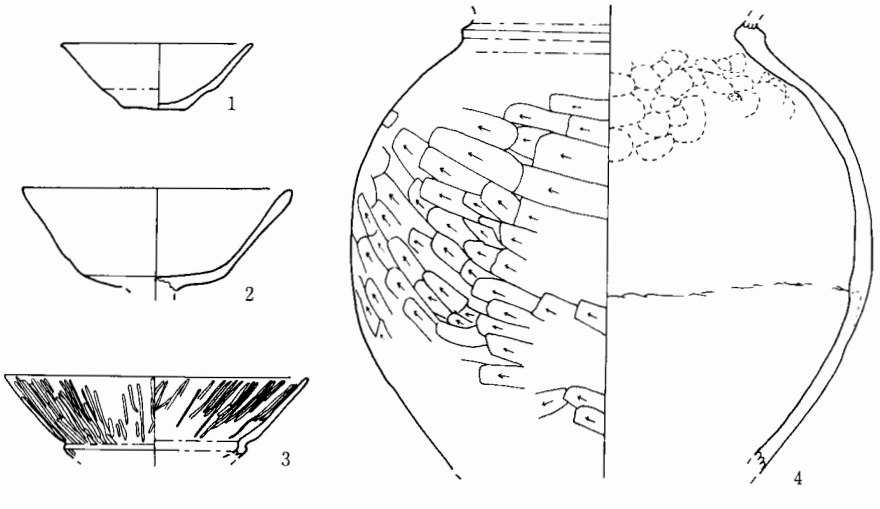
8－9グリッドを中心に位置する。1号溝と重複し、本跡が古い。南約5mに1号土坑が近接する。

東西4.0m、南北5.2mを測る。長軸の方位はN－20°－Wである。検出面からの深さは約20cmを測る。床面は中央部から南側は堅くしまっているが、北側と周縁は軟弱である。南側の両隅に径50cm強で不整長円形を呈するピットが検出された。東側ピットの中位には口縁部と底部を打ち欠いた壺が埋設されており、内部に白色粘質土が充填されていた。北壁の中央やや西寄りにもピットが検出されているが、本跡に伴うか不明である。床面のほぼ中央部に焼土の検出された径約50cmのピットがあり、炉跡の可能性がある。また、南西寄りの床面も長辺80cm程の範囲が焼土化しており、これも炉跡の可能性があると思われる。

遺物はピット内から出土した壺の他は、床面から高坏、坏等が少量出土しただけである。



第169図　1号住居跡



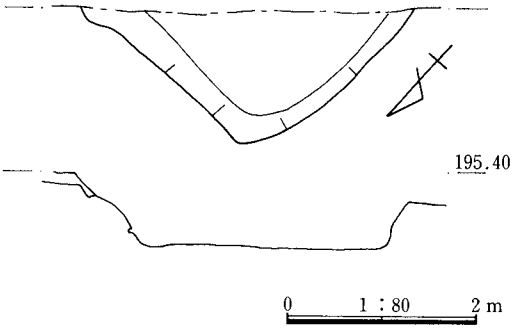
第170図　1号住居跡出土遺物　0 1：4 10cm

2号住居跡（ＰＬ40）

７－８グリッドに位置する。大半は調査区域外であり、北西隅部を調査しただけである。

東西・南北とも約2.4mの壁長が確認されている。深さは約50cmを測る。方位はＮ－５°－Ｅ前後と思われる。壁は一旦急角度で立ち上がり、中位から開き気味になる。床面は全体的に軟弱である。

遺物は数点の土器小破片が出土しただけである。



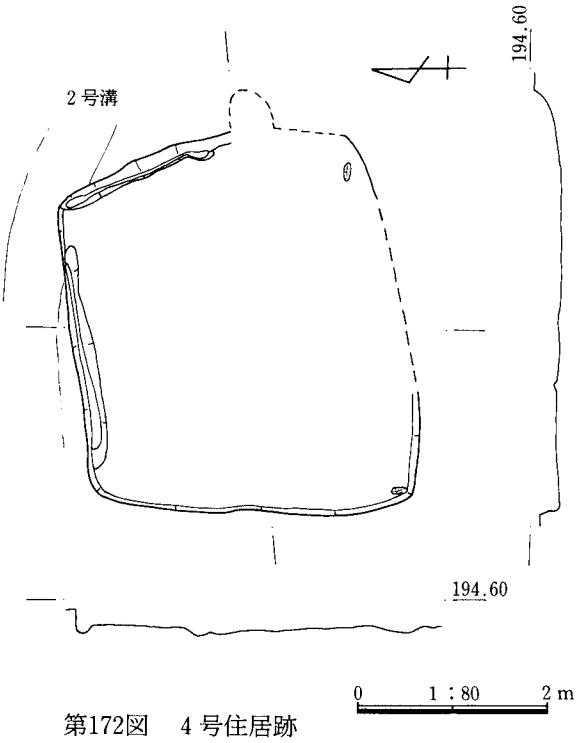
第171図　2号住居跡

4号住居跡（観Ｐ162、ＰＬ41・47）

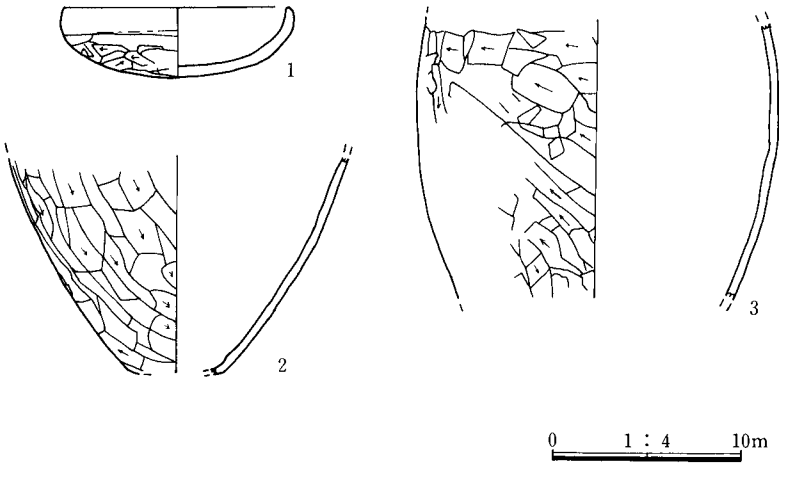
６－７グリッドに位置する。耕作その他による撹乱が激しく、特に竈から南壁にかけては残存状態がよくない。

東西約４m、南北3.5mを測り、北壁に比べ南壁の長い台形状を呈すると思われる。方位はＮ－５°－Ｗ前後である。深さは10cm以下で浅い。床面は残存状態がよくないが、比較的堅緻である。北壁と東壁の一部に壁周溝が検出されている。竈は東壁の南寄りにあるが、ほとんど削平されており、形状・規模等不明である。

遺物は竈前面の床面から、土師器坏・甕等が少量出土した。



第172図　4号住居跡

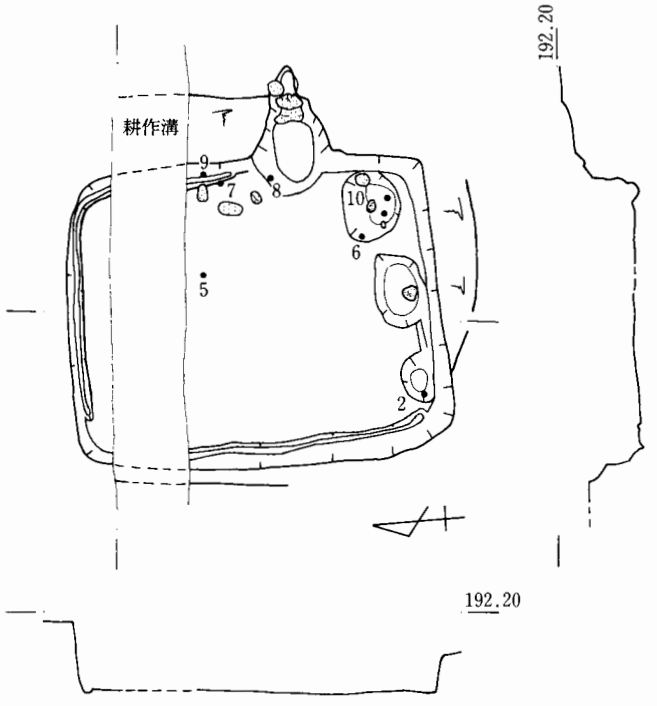


第173図　4号住居跡出土遺物

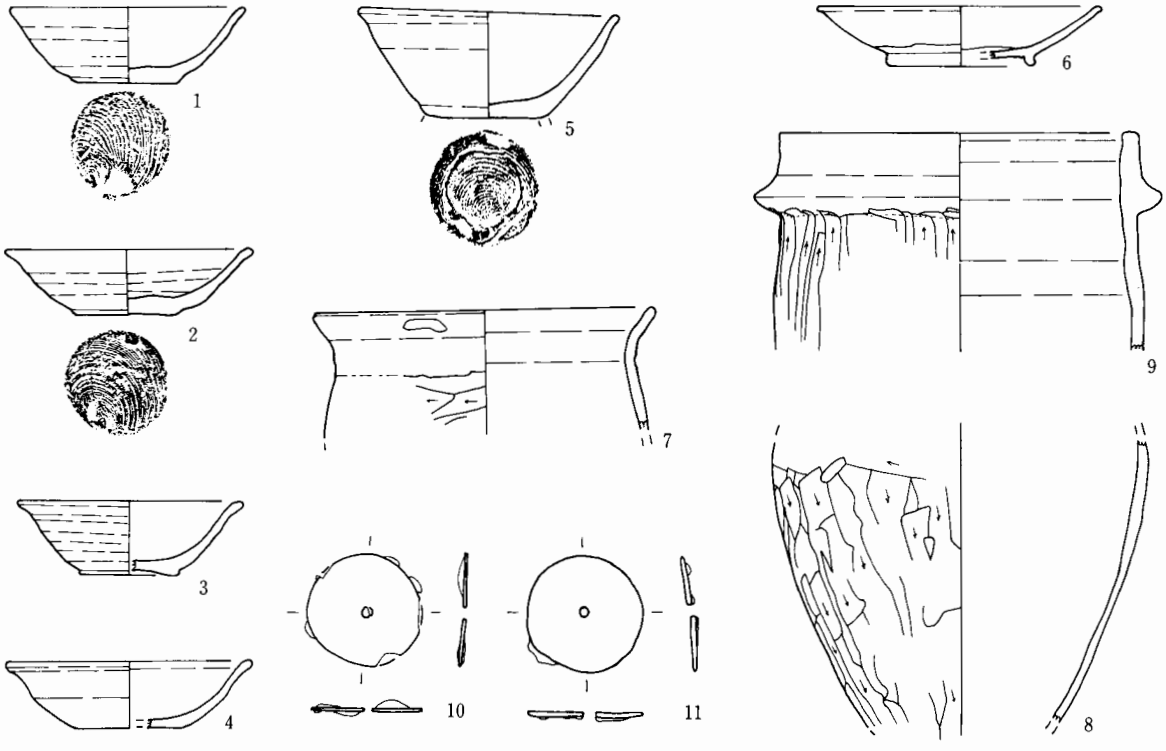
5号住居跡（観P162、PL41・47）

2・3－1グリッドに位置する。6号住居跡と重複し、本跡が新しいと思われる。北半部は現代の耕作溝により削平されている。

東西3.2m、南北3.9mを測り、隅丸長方形を呈する。方位はN－2°－Wである。深さは、北壁で80cmを測る。西壁際を除き壁上部には浅い掘り込みが巡り、本跡に関連する何らかの施設の可能性がある。床面は全体的に堅緻である。一部で途切れるが細く浅い壁周溝が巡っている。南壁際には3基の土坑が検出されており、貯蔵穴等の可能性が考えられる。南東隅は長径70cm、短径60cm、深さ30cmを測る。中央は長径70cm、短径50cm、深さ30cmである。南西隅は長径50cm、短径



第174図　5号住居跡　0　1：80　2m



第175図　5号住居跡出土遺物　0　1：4　10cm

30cm、深さ20cmである。柱穴は検出されていない。竈は、東壁の南寄りに付設されている。燃焼部は壁外に過半が位置し、煙道部は礫により補強されている。

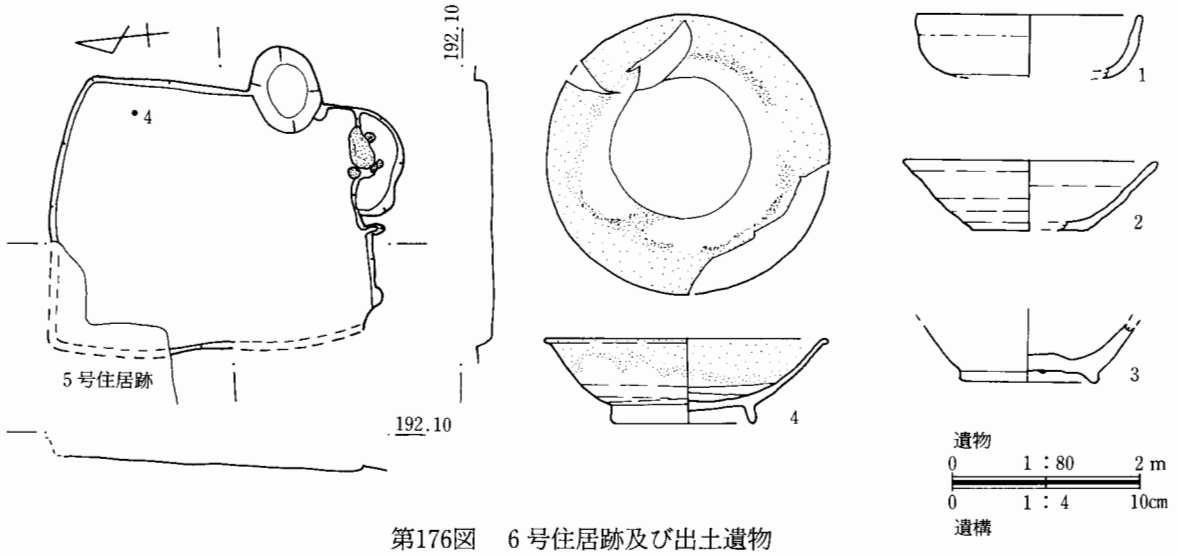
遺物は竈周辺や貯蔵穴から多数出土している。器種は、土師器甕、須恵器坏・埦、羽釜、灰釉陶器皿、鉄製紡錘車などである。なお、南東隅の土坑内から径10cm程の鉄滓が出土している。

6号住居跡（観P163、PL41・47）

1－2グリッドに位置する。5号住居跡と重複し、本跡が古いと思われる。北東約4mに7号住居跡が近接する。5号住居跡との重複や撹乱により、西壁は判然としない。

東西約2.7m、南北3.4mを測り、不整長方形状を呈すると思われる。方位はN－15°－E前後である。深さは北壁で20cmを測る。床面は全体的に軟弱である。南東隅には半円形の土坑状の張り出しがあり、本跡に係わる貯蔵穴等の可能性がある。内部には数個の小礫で固定されたと思われる長径40cm程の河原石が置かれていた。竈は東壁のかなり南に偏して付設されている。燃焼部が壁内外ほぼ半々に位置するタイプで、壁面は良好に焼けている。

遺物は土師器坏、須恵器坏・埦、灰釉陶器埦が、竈や床面から出土している。



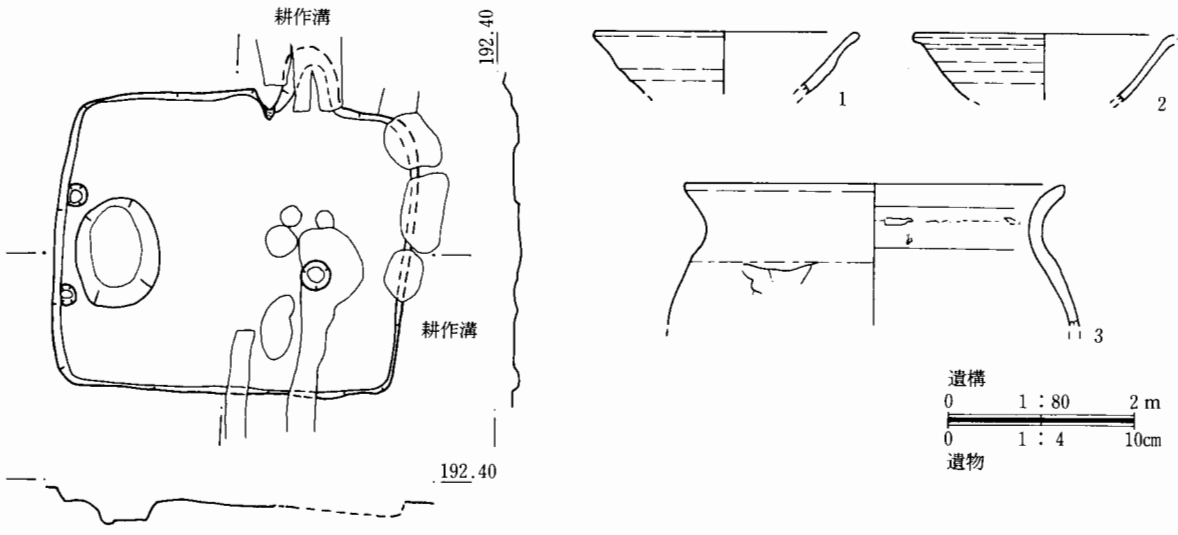
第176図　6号住居跡及び出土遺物

7号住居跡（観P163、PL41）

2－3グリッドに位置する。北東約2mに8号住居跡が近接する。南半部は耕作溝による撹乱が激しい。

東西3.2m、南北約3.7mを測り、ほぼ長方形を呈する。方位はN－3°－Eである。深さは北壁で17cmを測る。床面は比較的良く踏み固められている。北壁際には径10cmほどの小ピットが2本検出されている。さらに内側に長径115cm、短径90cm、深さ20cmを測り、楕円形を呈する土坑があるが、床下土坑の可能性もある。竈は東壁の南寄りに付設されているが、そのほとんどが耕作によって削平されていた。燃焼部の過半が壁外に位置するタイプと思われる。なお、ローム粘土の左袖がわずか残存していた。

遺物は土師器甕、須恵器埦等の破片が、埋土中からわずかに出土しただけである。



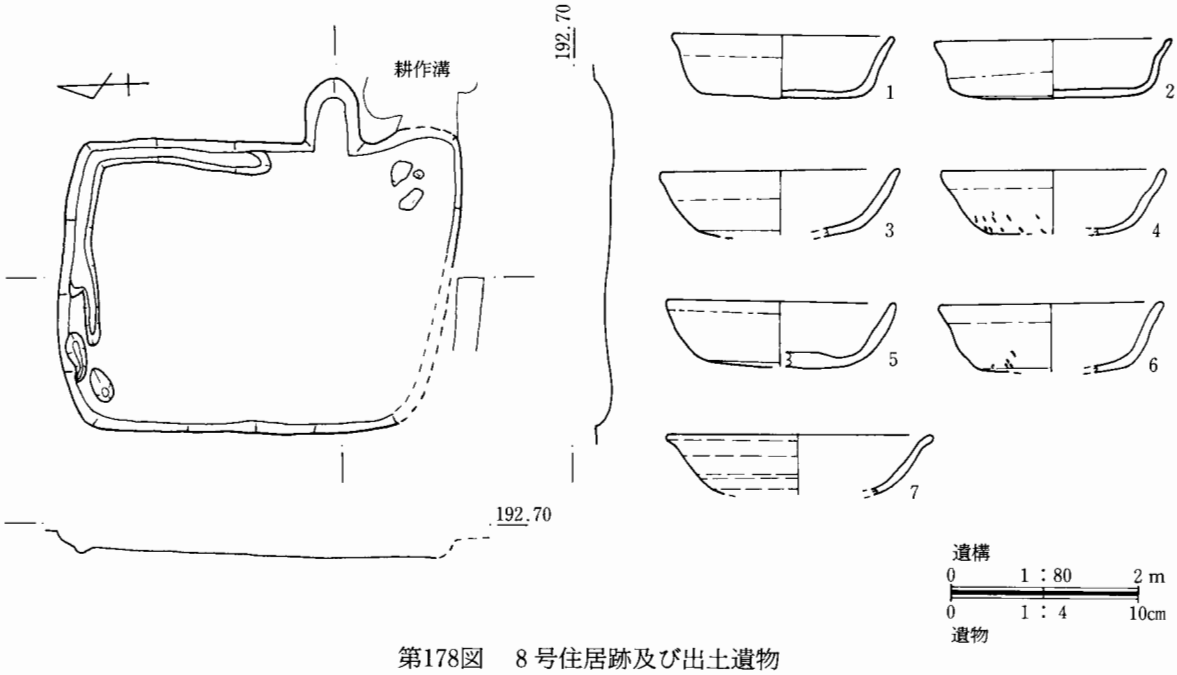
第177図　7号住居跡及び出土遺物

8号住居跡（観P163、PL41・47）

2・3－3グリッドに位置する。南西3mに7号住居跡、北側1mに9号住居跡、3mに10号住居跡が近接する。南端は耕作による撹乱が激しい。

東西3.1m、南北4.1mを測り、不整長方形を呈する。方位はN－4°－Eである。深さは北壁で18cmを測る。床面は全体的に軟弱である。東壁から北壁にかけて、壁周溝が巡っているが、北壁西半部の掘り方は整っていない。西壁にも巡っていた可能性があるが、不明瞭であった。竈は東壁の南寄りに付設されている。燃焼部がほとんど壁外に位置するタイプである。

遺物は土師器坏、須恵器埦？等が埋土中からわずか出土しただけである。



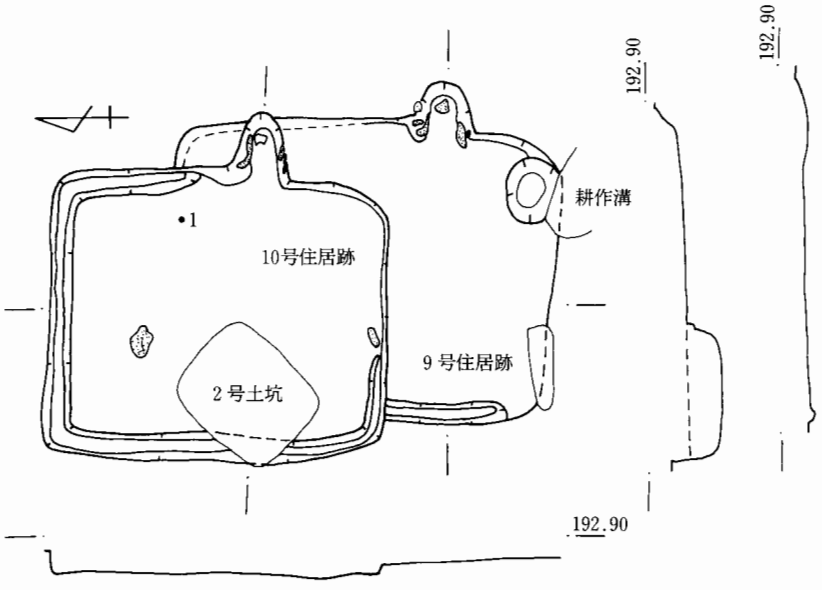
第178図　8号住居跡及び出土遺物

9号住居跡

（観P164、ＰＬ42）

３－３・４グリッドに位置する。10号住居跡により北側の約半分が削平されている。東側４ｍに13号住居跡が近接する。南壁は耕作による撹乱が激しい。

東西3.2m、南北約2.7ｍを測り、隅丸長方形を呈すると思われる。方位はＮ－10°－Ｅ前後と思われる。深さは10cm以下である。床面は比較的堅緻である。西壁には周溝が巡る。南東隅には径約60cm、深さ30cmの土坑がある。竈は東壁南寄りに付設されている。燃焼部の壁面は礫で補強されており、北側には短い袖が残存する。また、燃焼部奥に礫が埋設されており支脚の可能性も考えられる。遺物は須恵器塊が１点出土しただけである。

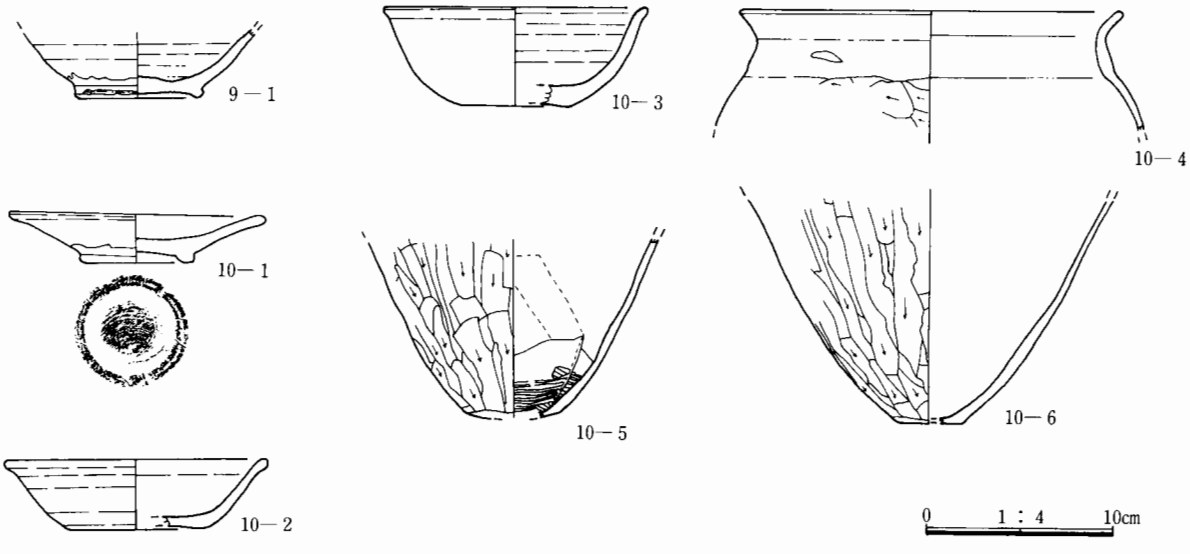


第179図　9・10号住居跡

10号住居跡（観P164、ＰＬ42・47）

４－２杭の北に接して位置する。９号住居跡と重複し、本跡が新しい。北東１ｍに12号住居跡が近接する。西壁に一部かかって内側に２号土坑が重複し、床下まで削平されている

東西3.0m、南北3.6mを測り、隅丸長方形を呈する。方位はＮ－６°－Ｅである。深さは北壁で25cmを測る。床面は全面が良く踏み固められていた。東壁南半部と南壁東半部を除き浅い壁周溝が巡る。竈は東壁の若干



第180図　9・10号住居跡出土遺物

南寄りに付設されている。燃焼部壁面は礫で補強されている。底面奥にも小礫があり、支脚の可能性がある。

遺物は竈周辺を中心に土師器甕、須恵器坏・埦、皿等が出土している。

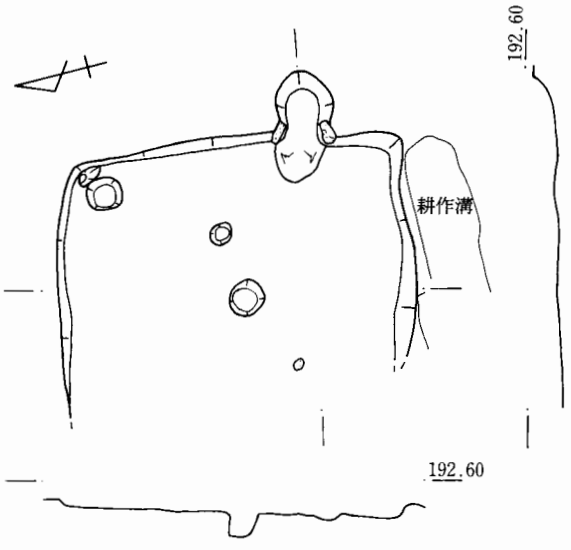
11号住居跡（観P165、PL42・48）

1－4グリッドに位置する。北約5mに16・17号住居跡が近接する。西端は削平されている。

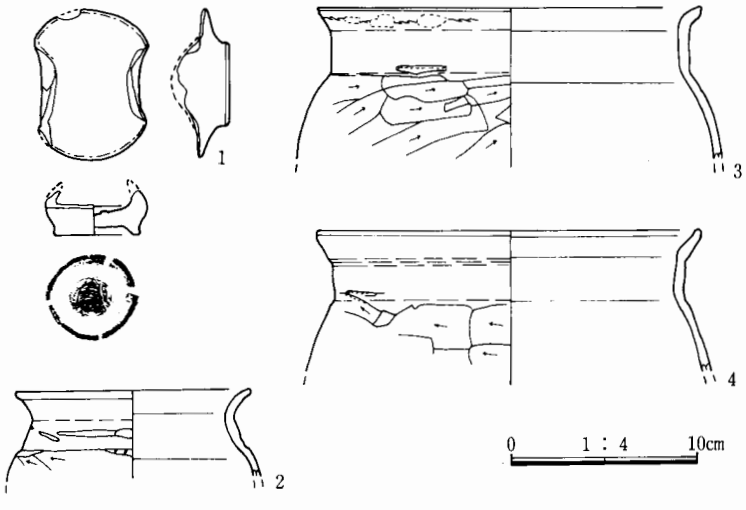
西壁は残存しないが床面の状況により、東西約2.6m、南北約3.8mを測り、不整長方形を呈する。方位はN－10°－E前後と思われる。深さは西壁を除き10cm程度である。

床面には耕作による撹乱が見られるが、周縁を除いて良好に踏み固められている。床のほぼ中央と北東隅には小ピットが検出されているが、性格は不明である。竈は東壁南寄りに付設されている。燃焼部の両脇補強材と思われる礫が残存していた。

遺物は竈周辺から土師器甕、埋土中から須恵器耳皿が出土している。



第181図　11号住居跡　0　1：80　2m



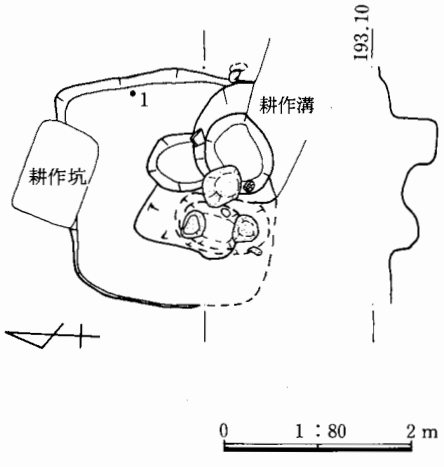
第182図　11号住居跡出土遺物

12号住居跡

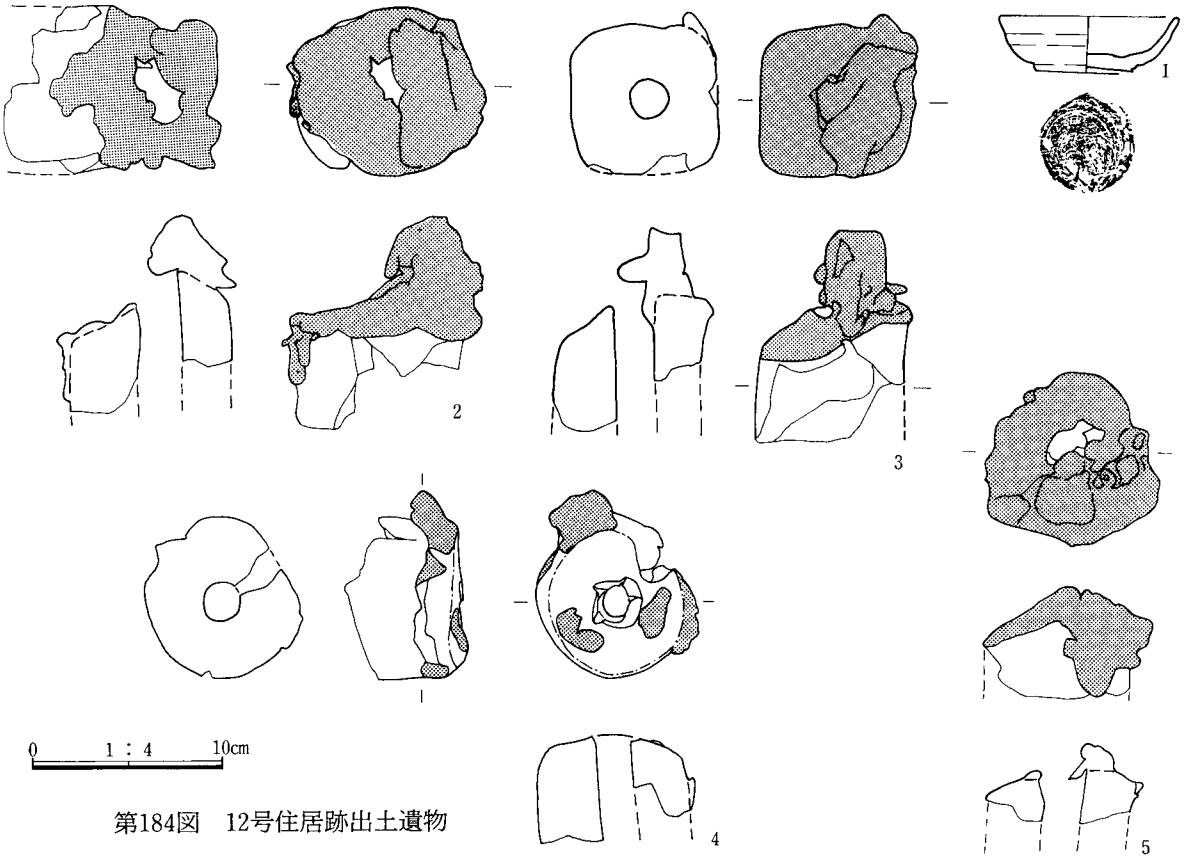
（観P165、PL42・48）

3－4グリッドに位置する。南西1mに10号住居跡、2mに9号住居跡、南東約2mに13号住居跡が近接する。南東隅は耕作により撹乱されており、北壁にも土坑が重複する。

東西2.5m、南北約2.2mを測り、不整長方形を呈する。深さは東壁で20cmである。床面は比較的良く踏み固められている。南東隅寄りには長径90cm、短径70cm、深さ60cmほどの土坑が掘られている。内部から羽口・鉄滓が多量に出土しており、焼けた礫も数点出土している。この土坑の西側には径40cmのピットが重複し、同様に鉄滓等が出土している。土坑の北側床面は径60cmほどの円形に浅く掘り込まれており、さらに、これらの東西の床も浅く掘りこまれ、



第183図　12号住居跡



第184図　12号住居跡出土遺物

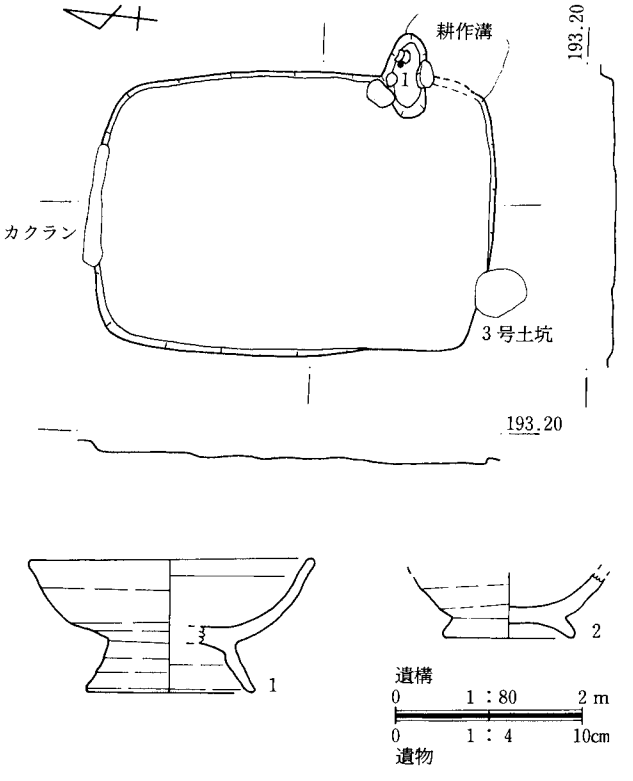
西側底面に径30cm程の礫が置かれている。いずれからも鉄滓が出土しており、鍛冶に係わる一連の施設と思われる。尚、東壁の南端に礫があり付近に焼土が認められるが、鍛冶に関連する施設であるか竈であるか判然としなかった。

遺物は羽口・鉄滓以外は坏が床面から１点出土しただけである。

13号住居跡（観Ｐ165、ＰＬ43・48）

３－４グリッドに位置する。北西２ｍに12号住居跡が近接する。南壁に３号土坑と重複するが新旧関係は不明である。北壁と東壁南端は撹乱を受けている。

東西3.0m、南北4.2mを測り、隅丸長方形状を呈する。深さは北壁で12cmである。方位はＮ－７°－Ｗである。床面は竈前面を除き全体的に軟弱である。竈は東壁のかなり南に偏



第185図　13号住居跡及び出土遺物

して付設されている。燃焼部壁面には礫が残存しており、補強されていたものと思われる。

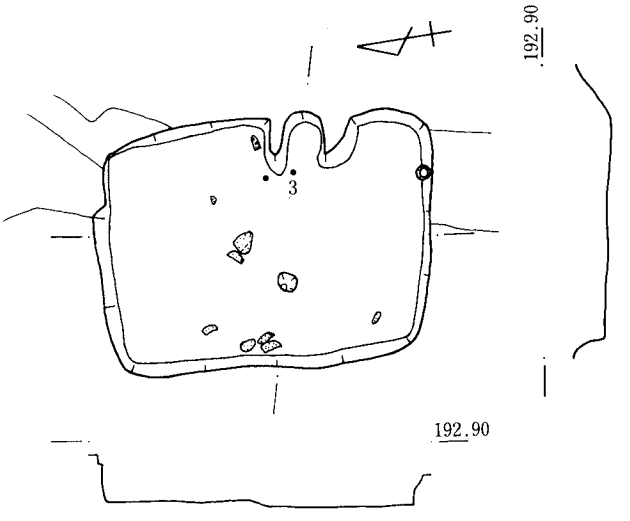
遺物は竈内から2点の埦が出土している。

14号住居跡（観P165、PL43・48）

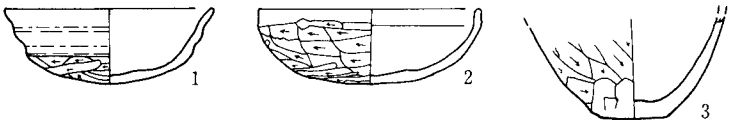
4－3グリッドに位置する。2号溝と重複する。

東西2.5m、南北3.5mを測り隅丸長方形を呈する。深さは北壁で52cmを測る。方位はN－20°－Eである。床面は平坦であるが、余り踏み固められていない。中央部と南壁東側にかかって2本の小ピットが検出されているが、主柱穴と思われるものは認められなかった。竈は東壁の南寄りに付設されている。燃焼部は壁内にあり煙道は急角度で立ち上がる。ローム粘土を用いた袖が残存する。

遺物は床直で土師器坏・甕、埋土中から土師器坏が出土している。なお、西壁直下の床面から菰石がまとまって出土した。



第186図　14号住居跡

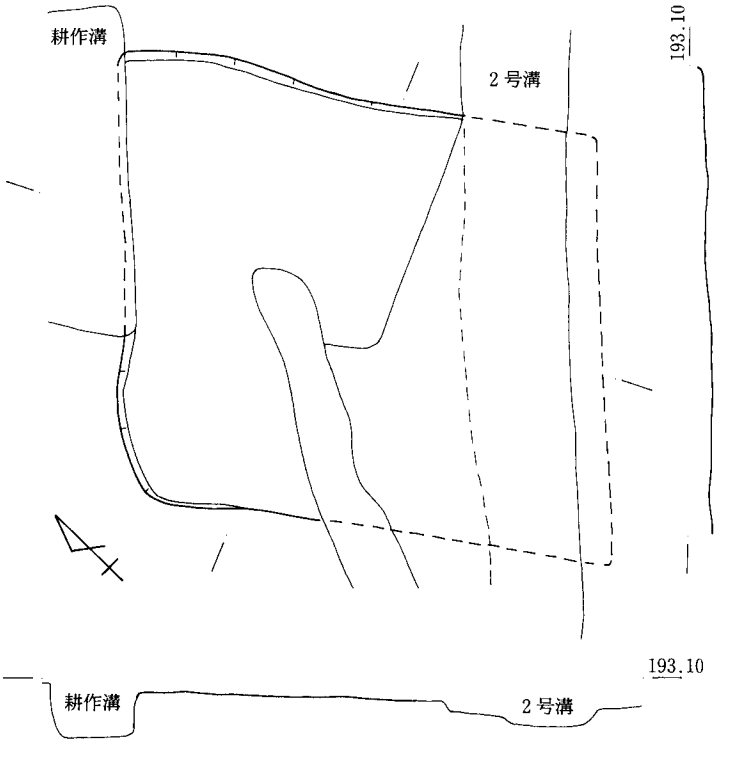


第187図　14号住居跡出土遺物

15号住居跡（PL44）

4－3グリッドに位置する。北西4mに13号住居跡、南西2mに14号住居跡が近接する。南側は2号溝や耕作溝により削平されている。検出面からの掘り込みが浅く、不明な点が多い。住居跡でない可能性もある。

東西4.8mを測り、南北は約4mが残存する。削平の為判然としないが、南北は2号溝の南まで伸びていると思われる。形状



第188図　15号住居跡

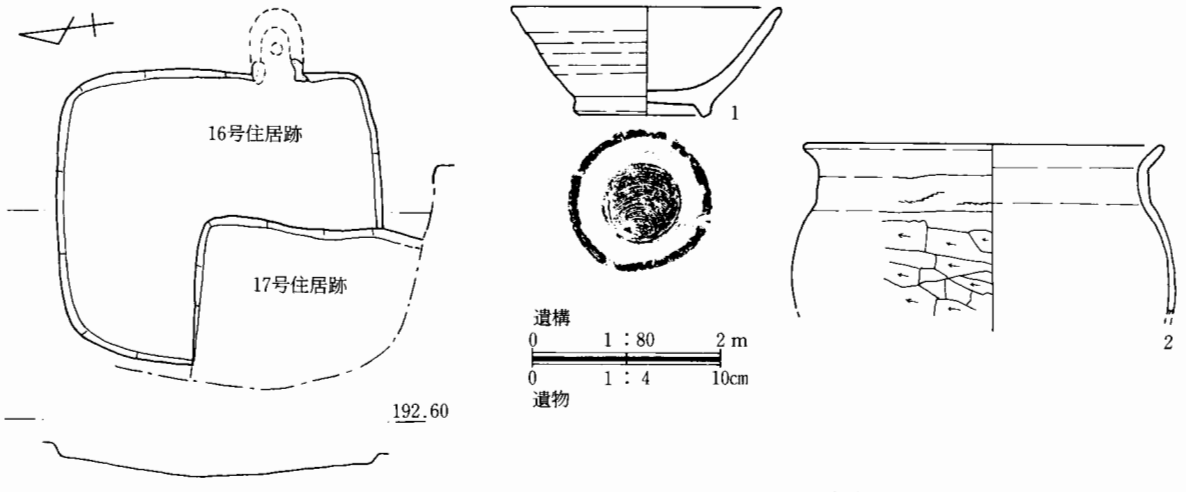
は平行四辺形状を呈する。深さは５cm以下である。床面は平坦で、比較的堅緻である。

遺物は出土しておらず、構築時期も不明である。

16号住居跡（観Ｐ166、ＰＬ43・48）

５－１グリッドに位置する。南西に17号住居跡が重複する。南東２ｍに11号住居跡が近接する。

東西３ｍ、南北3.4ｍを測り、隅丸長方形を呈する。深さは20～30cmである。壁面は若干角度をもって立ち上がる。床面は中央部がかなり窪んでいる。竈前面を除くとあまり堅緻ではない。竈は東壁の南寄りに付設されている。燃焼部は壁外に位置する。焚口は礫により補強されていた。燃焼部の奥寄りには支脚が据えられていた。なお、竈部分は実測漏れのため点線で表記している。



第189図　16・17号住居跡及び出土遺物

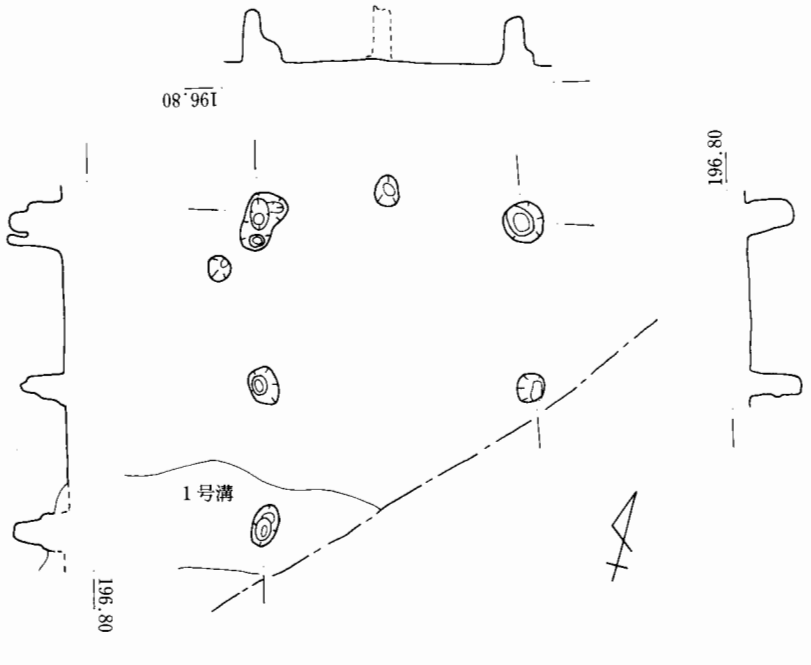
遺物は土師器甕と須恵器埦が出土している。

17号住居跡（ＰＬ43）

５－１グリッドに位置する。16号住居跡と重複し、本跡が新しいと思われる。北東の隅を調査しただけで過半部は調査区域外である。

東西1.6m、南北2.4m程の範囲を調査した。深さは約30cmを測る。床面は平坦で、堅緻である。

遺物は出土しておらず、時期も不明である。



第190図　１号掘立柱建物跡

3．その他の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（PL43）

9－11グリッドに位置する。1号溝と重複するが、新旧関係は不明である。南側は調査区域外である。

現況で東西2間×南北2間の建物構造で、2.8×3.4mの規模を測る。北辺の間柱は外側に偏して位置する柱穴掘り方の形状は基本的に円形と思われ、径30～40cm、深さ50cm前後を測る。間柱の規模が若干細いようである。柱間距離は桁間が1.4m等間、梁間が北側1.8m、南側1.6mを測る。梁間の柱間距離から考えると南側にもう1間伸びる可能性がある。遺物は出土しておらず、時期も不明である。

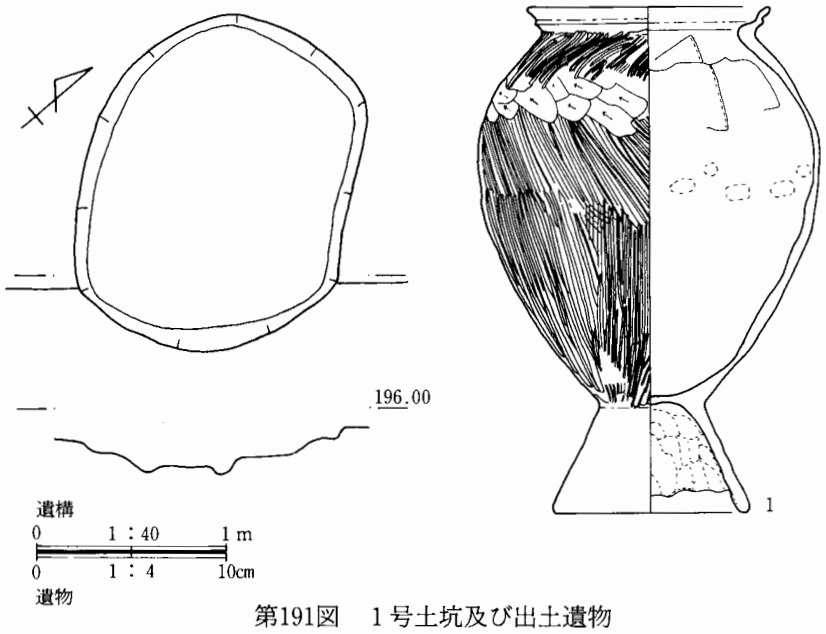
(2) 土　坑

1号土坑

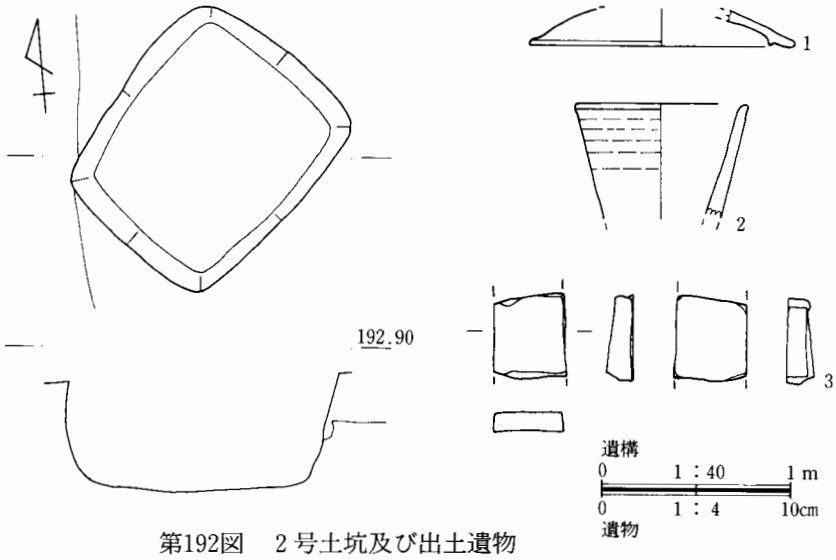
（観P166、PL44）

8－9グリッドに位置する。北側約4mに1号住居跡が近接する。

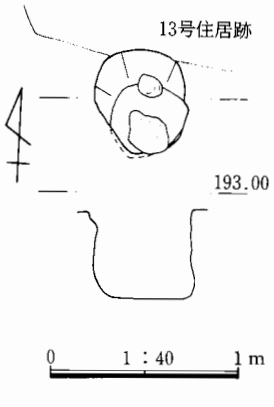
長軸1.8m、短軸1.4mを測り、歪みはあるが長円形を呈する。深さは中央で約20cmである。検出面から浅いためもあるあが、壁は角度をもって立ち上がる。底面の周縁は平坦で中



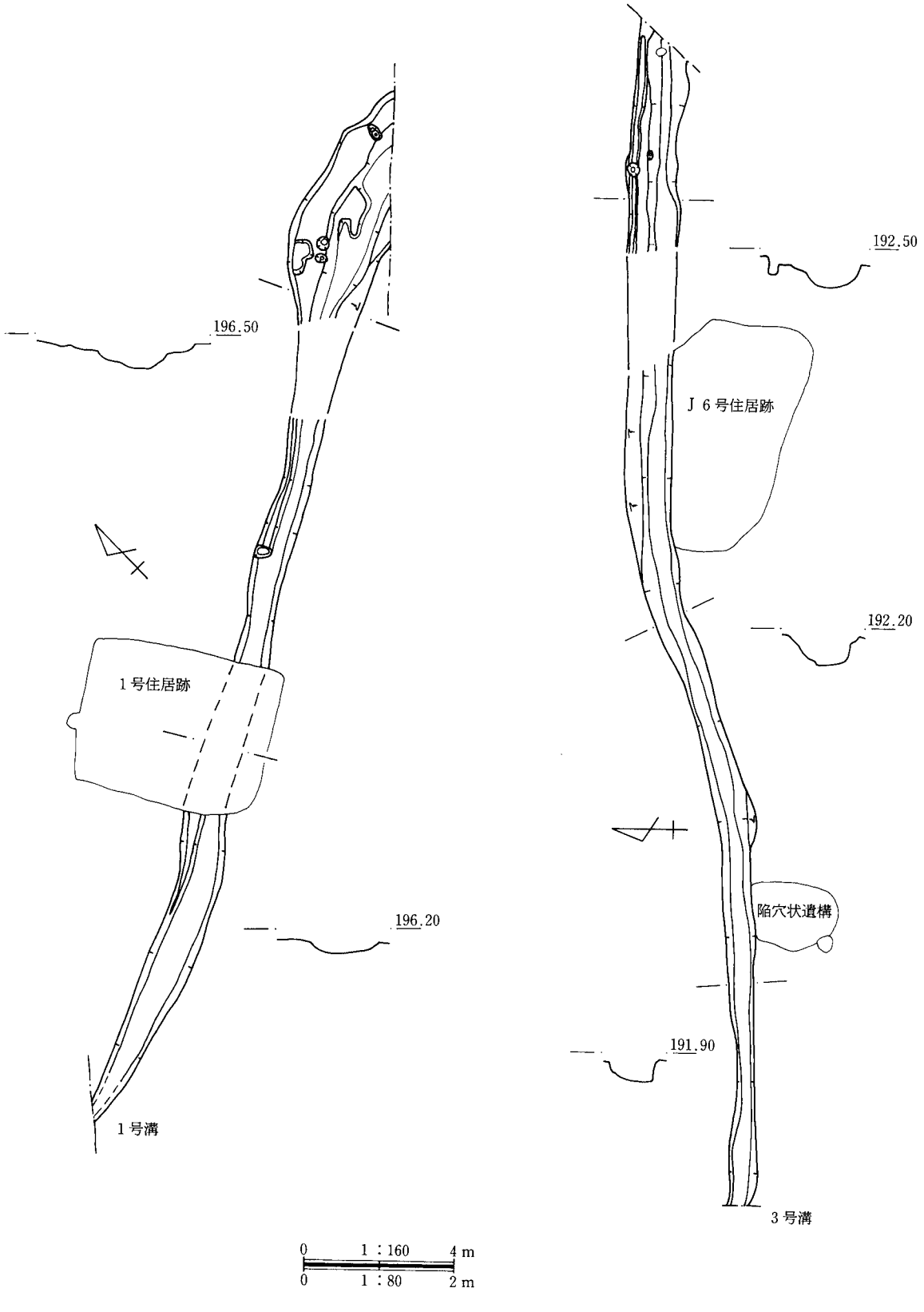
第191図　1号土坑及び出土遺物



第192図　2号土坑及び出土遺物



第193図　3号土坑


196.50
1号住居跡
196.20
1号溝
192.50
J 6号住居跡
192.20
陥穴状遺構
191.90
3号溝
0　1：160　4 m
0　1：80　2 m

第194図　1・3号溝

央部は鍋底状に窪む。

遺物は脚付き甕が底面密着で出土した。

2号土坑（観P166、PL42）

4－3グリッドに位置する。10号住居跡と重複し、本跡が新しい。

長軸1.35m、短軸1.1mを測り、長方形を呈する。深さは60cmである。長軸方位はN－43°－Eを測る。底面は平坦であり、壁は若干角度をもって立ち上がる。

遺物は須恵器蓋・壺？、砥石が出土した。

3号土坑（PL43）

3－3グリッドに位置する。13号住居跡の南壁にわずか重複するが、新旧関係は不明である。

長径60cm×短径50cmを測り、ほぼ円形を呈する。深さは50cmである。

埋土中から礫が多数出土した。

(3) 溝　　跡

1号溝（PL43）

9－11グリッドから8－8グリッドにかけて位置する。1号住居跡と重複し、本跡が新しい。また、1号掘立柱建物跡とも重複するが、新旧関係は不明である。東端が幅広く深いが、西へいくほど漸減する。

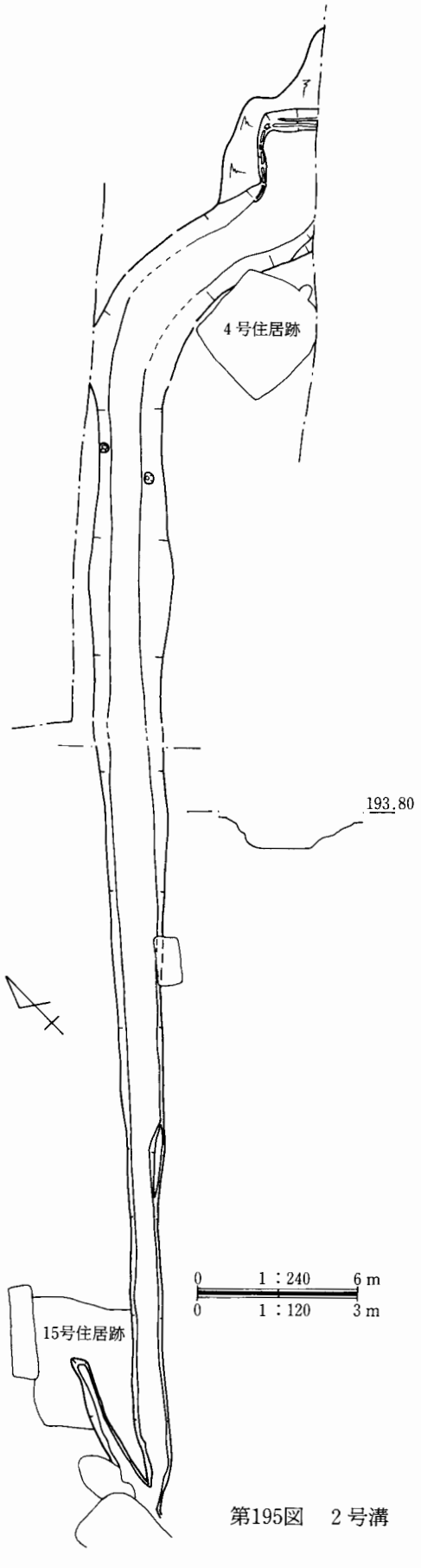
幅は0.8～1mであるが、東端には掘り替えが認められ、2.4mを測る。深さは東端でも30cm程である。検出範囲での走向はほぼN－55°－E前後を示す。

遺物は平安時代に属する土師器・須恵器の小片が出土しており、本跡の時期も該期と思われる。

2号溝（観P166、PL43・48）

6－8グリッドから3－4グリッドに位置する。東端で方形の掘り込みを持つことから、当初この部分を3号住居跡としたが、埋土の状況に切り合い関係を認められなかったこと、底面の溝への連続性などから、一連の遺構として報告する。

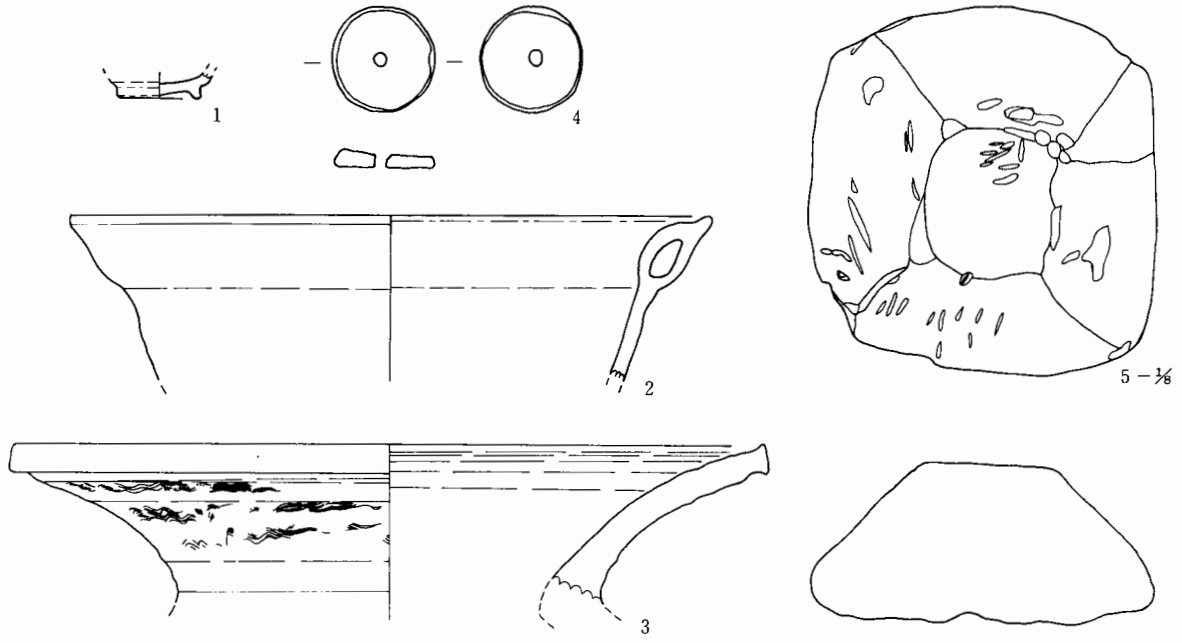
6－7グリッドで屈曲し、そこから南西方向へは直線的に掘削されている。この直線部分の走向はほぼ45°



第195図　2号溝

を測る。南西に行くに従い規模を減じて３－４グリッドで消滅するが、先端部は撹乱が激しく詳細は不明である。屈曲部で幅3.3m、深さ80cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。底面は平坦で、壁は直線的である。

遺物は多くないが、陶磁器片、須恵器転用紡錘車、石塔が出土している。



第196図　溝出土遺物

３号溝（ＰＬ43）

２－４グリッドから２－１グリッドに位置し、調査区域外に延びている。Ｊ６号住居跡北側を壊している。

約31ｍを調査した。中位で屈曲するものの、ほぼ東西の走行を示す。東端で幅約1.3m、深さ40cmを測り、西に行くに従い幅、深さともに漸減する。東半部の北壁は２段に掘り込まれており、上段に幅15cm、深さ25cmの細い溝がさらに掘り込まれている。断面形状は基本的には逆台形状で、底面は幅狭く平坦で、壁は斜めで直線的に立ち上がる。

遺物はほとんど出土しておらず、帰属時期も不明である。

(4)　井戸跡（観Ｐ166、ＰＬ44）

２－２グリッドに位置する。上部は耕作による撹乱を受けているが、他の遺構とは重複していない。

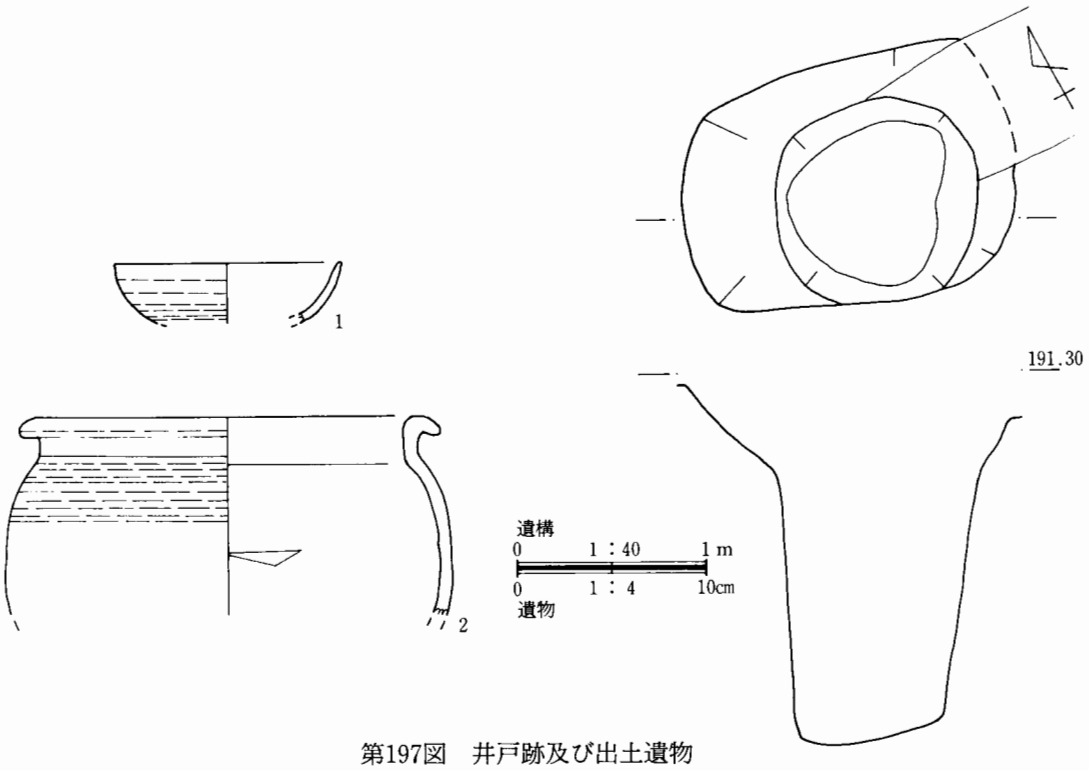
２段に掘り込まれており、上部の平面形は丸みをもった長方形を呈する。下部の平面形はほぼ円形である。上部は長軸1.8m、短軸1.25mを測り、深さは約40cmである。下部は径1.1mで検出面からの深さ1.9mを測る。底面には50cm大の礫が沈んでいた。

遺物は陶磁器が少量出土しただけである。

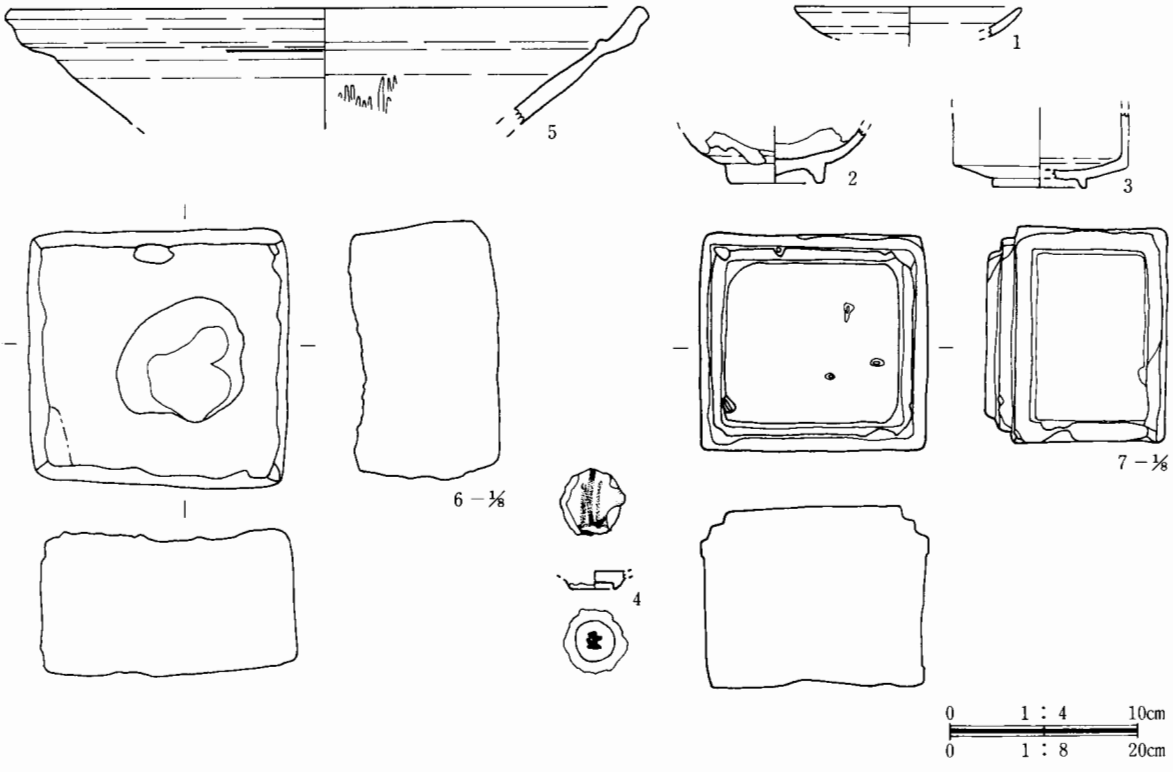
(5)　遺構外出土遺物（観Ｐ167、ＰＬ48）

縄文時代以外の遺構外出土遺物は余り多くないが、ここでは中近世の遺物に限って報告したい。

図示したものは調査区域の南端（１・２号溝周辺）から出土した陶磁器類及び石製品である。



第197図　井戸跡及び出土遺物



第198図　遺構外出土遺物

1号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	西壁際床直 一部欠損	口：10.1 底：3.5 高：3.7	粗砂 浅黄橙色～にぶい橙色	体部下半に段を有し、わずか外反気味に開く。 外面：体部ナデ、底部ナデ。 内面：体部ナデ、底部ナデ。	黒斑あり。 歪み多い。
2	高坏 土師器	東壁際床直 坏部ほぼ完存	口：14.3	砂粒 にぶい橙色	坏部は深く、直線的に開く。口縁部は肥厚する。 内外面ともナデ。	内外面に黒斑 二次焼成
3	高坏 土師器	埋土中 1/3	口：16.0	砂粒 にぶい橙色	体部に段をもち、口縁部は直線的に開く。 内外面ともナデ後縦方向のミガキ。	内外面とも煤付着
4	壺 土師器	南東ピット内 2/3	胴：27.7	粗砂 橙色	胴部は球形。頸部に段を持つ。 外面：頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。 内面：頸部～胴上端部ユビオサエ後ナデ。 胴部ナデ。	外面に黒斑 煤付着

4号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	竈前面床直 一部欠損	口：11.8 高：3.6	粗砂 にぶい橙色	浅い丸底。口縁部は内湾気味に立つ。 外面：体部上端ナデ、体～底部ヘラケズリ。 内面：ヨコナデ、ナデ。	
2	甕 土師器	竈前面床直 1/5	底：	細砂粒、赤色粒 にぶい橙色	外面：ヘラケズリ。ケズリの単位は不明瞭。 内面：ナデ。	胴部下半に煤付着
3	甕 土師器	竈燃焼部 1/2	胴：19.1	細砂粒、赤色粒 にぶい橙色	外面：ヘラケズリ。ケズリの単位は不明瞭。 内面：ナデ。	

5号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 須恵器	南東土坑内 一部欠損	口：12.5 底：5.4 高：4.0	小礫、砂粒 黒色粒 灰色	体部は内湾気味に開き、口縁部でわずか外反。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	黒斑 還元炎焼成。 やや硬質。
2	坏 須恵器	南西土坑上面 3/4	口：13.2 底：5.6 高：3.5	小礫多量、黒色粒少量 灰色	体部は内湾気味に開き、口縁部で強く外反。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	還元炎焼成。 硬質。
3	坏 須恵器	埋土中 2/5	口：12.0 底：5.1 高：3.9	粗砂 褐灰色	体部は内湾気味に開き、口縁部で強く外反。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	口～底部に黒斑 半還元炎焼成。 軟質。
4	坏 須恵器	埋土中 1/4	口：13.0 底：5.6 高：3.5	粗砂、黒色粒多量 灰色	体部は内湾して開き、口縁部で外反。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	還元炎焼成。 軟質。
5	高台付埦 須恵器	中央部床直 一部欠損 高台部欠損	口：13.8 底： 高：5.6	細砂粒 灰色	体部は内湾気味に開き、口縁部で外反。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。	内面黒斑、煤付着 酸化炎焼成。 軟質。

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
6	皿 灰釉陶器	南東土坑上層 1/5	口：15.0 台：7.8 高：3.2	粗砂少量 黒色粒 灰褐色	体部は内湾気味に開き、口縁部でわずか外反。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。釉色はオリーブ緑、ツケガケ。	高台接合部にヒビ割れ
7	甕 土師器	東壁周溝上面 破片	口：18.0	粗砂、小礫 赤色粒 暗赤褐色	口縁部は下半でほぼ直立し、上半で外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	
8	甕 土師器	竈焚口 1/4	胴：	粗砂多量 橙～黒褐色	胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	二次焼成
9	羽釜	東壁周溝上面 1/4	口：19.0 鍔：21.6	粗砂多量、小礫 石英、赤色粒 浅黄橙色	口縁部はほぼ直立する。鍔は厚く先端は丸い。 胴部ヘラケズリ、他は回転ナデか。	内面に接合痕あり
10	紡錘車	南東土坑内	ほぼ完存　径6.1厚さ0.15孔径0.6			鉄製品
11	紡錘車	埋土中	ほぼ完存　径6.2厚さ0.2孔径0.5			鉄製品

6号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 破片	口：12.0 底：9.0	細砂粒少量 にぶい橙色	外面：体部ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：ヨコナデ。	体部外面粘土ヒビ割れ
2	坏 須恵器	埋土中 1/6	口：13.4 底：6.0 高：3.6	粗砂、黒色粒 灰色	体部～口縁部は直線的に開く。 内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	還元炎焼成。 やや硬質。
3	高台付埦 須恵器	埋土中 1/4	台：7.2	粗砂、赤色粒 片岩粒 褐灰色	内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。	半還元炎焼成。 やや軟質。
4	高台付埦 灰釉陶器	北東隅床直 一部欠損	口：14.9 台：7.7 高：4.5	小礫、緻密 灰色 釉はオリーブ灰	体部は内湾して開き、口縁部は強く外反する。 外面体部下端と底部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。左回転。	ツケガケ

7号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 須恵器	埋土中 破片	口：(14.0)	砂粒、白色粒 黒色粒。灰色	口縁部は外反する。 内外面ともに回転ナデ。右回転。	半還元炎焼成。 やや軟質。
2	坏 須恵器	埋土中 破片	口：(14.0)	粗砂 にぶい黄褐色	口縁部は強く外反する。 内外面ともに回転ナデ。右回転。	半還元炎焼成。 やや軟質。
3	甕 土師器	埋土中 破片	口：(20.0) 胴：(21.8)	細砂粒 明赤褐色	口縁部は外反する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ハケナデ。	外面に煤、焼土付着。

8号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 2/3	口：11.5 底：8.0 高：3.2	砂粒 にぶい橙色	底部は平底で浅い。 外面：体部ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：ヨコナデ。	

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
2	坏 土師器	埋土中 1/2	口：12.7 底：9.3 高：3.0	粗砂 にぶい橙色	底部は平底で浅い。口縁部は一旦立ち上がり、上半で内湾気味に外傾する。 外面：体部ナデ、底部ヘラケズリ。	
3	坏 土師器	埋土中 一部欠損	口：12.6 底：8.0 高：3.4	小礫、細砂粒 にぶい橙色	体部～口縁部は内湾気味に開く。 外面：体部ナデ、底部ヘラケズリ。内面ヨコナデ	
4	坏 土師器	埋土中 1/4	口：12.0 底：7.0 高：3.3	砂粒 明赤褐色	体部～口縁部は湾曲して開く。 外面：体部ナデ、底部ヘラケズリ。	体部外面に刺突列 （ヘラ先状） 1～2段
5	坏 土師器	埋土中 1/3	口：12.0 底：7.6 高：3.5	砂粒少量 橙色～黒褐色	体部～口縁部は内湾して開く。 外面：体部ナデ、底部ヘラケズリ。	
6	坏 土師器	埋土中 1/5	口：12.0 底：8.0 高：3.6	砂粒 明赤褐色	体部～口縁部は弱いS字状に開く。 外面：体部ナデ、底部ヘラケズリ。	体部外面に刺突痕 （ヘラ先状） 一定していない
7	坏 須恵器	埋土中 破片	口：(14.0) 高：3.2	粗砂 灰黄色	体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。 内外面ともに回転ナデ。右回転。	還元炎焼成。 やや軟質。

9号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	高台付埦 須恵器	埋土中 2/5	台：6.7	砂粒、片岩片 黒色（内外）	体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。	半還元炎焼成。 やや軟質。

10号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	高台付皿	竈左脇床直 一部欠損	口：13.5 台：6.0 高：2.6	砂粒 浅黄橙色	体部～口縁部は外反気味に開く。高台は厚く低い 体部～口縁部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。	酸化炎焼成。 軟質。
2	坏 須恵器	竈内 1/5	口：14.0 底：7.0 高：3.7	粗砂 にぶい黄橙色	口縁部は外反する。 体部～口縁部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。	酸化炎焼成。 軟質。
3	埦	埋土中 1/7	口：(14.0) 底：(5.8) 高：5.2	粗砂 にぶい橙色	体部内湾して立上がり、口縁部は外反する。 体部下端ナデ。他は内外面ともに回転ナデ。 底部回転糸切り。右回転。	酸化炎焼成。 軟質。
4	甕 土師器	埋土中 1/3	口：20.0	細砂粒 にぶい赤褐色～ 橙色	口縁部は上半で内傾して立ち、上半で外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	煤付着
5	甕 土師器	竈内 1/3	底：4.8	細砂粒、赤色粒 橙～にぶい褐色	外面：胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。 内面：胴部下端～底部ハケナデ、他はナデ。	黒色付着物。
6	甕 土師器	竈内 1/4	底：3.2	細砂粒、赤色粒 橙色～赤灰色	外面：胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。 内面：ナデ。	

11号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	耳皿 須恵器	埋土中 一部欠損	長：7.8 幅：5.3	砂粒、赤色粒 灰白色	体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。 底部に大きな亀裂あり。	半還元炎焼成。 やや硬質。
2	小型甕 土師器	埋土中 1/2	口：12.4	砂粒 にぶい赤褐色	口縁部は内傾して立ち上がり、上半で外反する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	
3	甕 土師器	埋土中 1/4	口：20.4 胴：22.6	砂粒 にぶい橙色	口縁部は下半でほぼ直立し、上半で外傾する。 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	口縁部上半接合痕とユビオサエあり
4	甕 土師器	埋土中 1/4	口：20.4	砂粒 赤褐色	口縁部はほぼ直立し、上半で内湾気味に外傾する 胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	

12号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏	東壁際床直 一部欠損	口：9.4 底：5.0 高：3.1	砂粒 淡黄橙色	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は直線的に開く。底部は突出気味。体部～口縁部内外面ともに回転ナデ。右回転。底部回転糸切り。	酸化炎焼成。 軟質。 二次焼成。
2	羽口	土坑内	長さ：(7.2)　径：8.4　孔径：2.4　断面形：円形			先端に溶解付着物
3	羽口	土坑内	長さ：(7.2)　軸：7.6　孔径：2.0　断面形：方形			先端に溶解付着物
4	羽口	土坑内	長さ：(5.6)　径：8.4　孔径：1.8　断面形：ほぼ円形			先端に溶解付着物
5	羽口	土坑内	長さ：(2.8)　径：7.6　孔径：2.0　断面形：円形			先端に溶解付着物

13号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	高足高台付塊	竈内 3/5	口：15.1 台：8.9 高：7.1	小礫多量 にぶい橙色～灰褐色	体部は内湾して開き、口縁部でわずか外反する。 高台は外反気味に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 切り離し技法不明。付高台。	二次焼成 酸化炎焼成 軟質
2	高台付塊	竈内 2/3	台：6.9	粗砂、石英粗粒 赤色粒、白色粒 橙～にぶい褐色	高台は開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部外面ナデ。切り離し技法不明。	高台接合部ヒビ割れ。酸化炎焼成 軟質

14号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	坏 土師器	埋土中 4/5	口：11.0 高：3.9	粗砂 橙色	体部立ち上がり部と中位に段を持つ。 底部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	破砕後火熱を受ける。
2	坏 土師器	竈焚口床直 一部欠損	口：11.7 高：3.9	砂粒 橙色	口縁部は短く直立する。 底部～体部ヘラケズリ、他はヨコナデ。	底部～体部外面に黒斑
3	甕 土師器	床直 2/3	底：3.2	砂粒 にぶい橙色～黒褐色	胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	煤・焼土付着。 底部磨滅

16号住居跡

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	高台付埦 須恵器	埋土中 2/3	口：14.3 台：7.2 高：5.7	小礫、砂粒 灰白色	体部～口縁部は直線的に開く。 体部内外面ともに回転ナデ。右回転。 底部回転糸切り。付高台。周縁ナデ。	底部～体部内外面に黒斑
2	甕 土師器	埋土中 破片	口：(20.0) 胴：(21.0)	砂粒、赤色粒 にぶい橙色	口縁部はわずか内傾気味に立ち上がり、上半で外傾する。胴部：外面ヘラケズリ、内面ナデ。	口縁部に接合痕

1号土杭

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	脚付甕 土師器	底面密着 1/2	口：12.8 胴：18.0 裾：10.4 高：26.5	粗砂 褐色	S字状口縁。胴部は長卵型。脚部は直線的に開く 胴部：外面肩部ヘラケズリ、他はヘラケズリ後ハケメ。内面ヘラナデ、ナデ、ユビオサエ。 脚部：外面ナデ、内面ユビナデ。	脚裾内面折り返し

2号土杭

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	蓋 須恵器	埋土中 破片	口：14.0	小礫、黒色粒 白色	カエリを有する。 内外面とも回転ナデ。右回転。	半還元炎焼成 やや軟質
2	壺 須恵器	埋土中 1/4	口：9.2	白色粒 灰白色	わずか内湾気味に開き、先端で短く外反する。 内外面とも回転ナデ。右回転。	還元炎焼成、硬質 自然釉付着
3	砥石	埋土中	残存長4.4、幅3.8、厚さ1.6　流紋岩（砥沢？）			

2号溝

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	高台付碗 陶器	埋土中 1/8	口：(40.0)	灰白色 灰釉	体部下端から高台部は露胎。 釉は細かい貫入が目立つ。	
2	内耳鍋 軟質陶器	埋土中 破片	口：(33.9)	砂粒少量、褐色 黒褐色	口縁端外面は鋭く尖る。耳は棒状で細い。 内外面ともナデ。	
3	甕 須恵器	埋土中 1/8	口：(40.0)	砂粒小量 浅黄橙色	器壁厚く、口縁部は急激に外反りする。 3段の波状文	酸化炎焼成
4	紡錘車 須恵器	埋土中 完存	径：5.0 厚：0.8	黒色粒 灰色	摩耗激しい。右回転糸切り。	坏底転用 孔径0.6
5	石造物	埋土中	上：16.0、下：38.8、厚：16.8　角閃石安山岩ノミ痕が目立つ			五輪塔火輪

1号井戸

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	碗 陶器	埋土中 破片	口：12.0	淡白色 鉄釉	釉の剝落が目立つ。	
2	甕 陶器	埋土中 1/3	口：20.4	灰白色 鉄釉	釉厚い。	

遺構外

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	灯明皿 陶器	3号溝周囲 破片	口：12.0	橙褐色 鉄釉	釉は薄い。	口縁端に煤付着
2	碗 陶器	2－3G 1/2	台：5.3	灰白色 飴釉	釉は厚くタレる。ムラが激しい。 露胎部もまばらに釉がかかる。	貫入
3	碗 陶器	2－3G 1/2	底：9.4 台：5.0	灰白色 鉄釉	体部はほぼ直立する。全体的に薄い作り。 釉ムラが激しい。	
4	猪口 磁器	表採 底部完存	台：2.3	白色 透明釉	高台端は露胎で断面三角形を呈する。 底部内面に染付け。	底部外面に銘あり （正）
5	擂鉢 陶器	3号溝周囲 破片	口：(34.0)	浅黄白色 鉄釉	内面口縁下の稜が強い。口縁部の器厚の変化が激しい。外面の釉ムラが激しい。	
6	石造物	表採	28.0×27.2×15.2　安山岩			五輪塔地輪？
7	石造物	表採	24.0×23.2×19.2　安山岩			宝篋印塔基礎

Ⅴ　発掘調査の成果と問題点

1．遺 跡 の 変 遷

(1) 変 遷 の 概 観

白川・由森・久保田の3遺跡は互いに近接した台地上に位置しているが、それぞれの遺跡はそれぞれ異なった変遷を辿って今日に至っている。本項では3遺跡を通しての変遷を概観してみたい。

縄文時代早期には明確には遺物だけの検出であるが、まず久保田遺跡に足跡が印される。さらに久保田遺跡において前期初頭には集落が展開する。前期前半期には久保田遺跡に遺物が認められるものの、遺構は検出されていない。前期中葉には由森遺跡で住居が営まれ、遺物は少量ながら他の2遺跡でも出土している。前期後半では白川遺跡に住居が営まれ、久保田遺跡にも少量の遺物が出土している。前期末葉から中期初頭でもやはり久保田遺跡で遺物が認められる。中期後半の遺物は量的に少ないが白川遺跡から出土している。後期前半には白川遺跡に住居が営まれるものの、これ以降は全く痕跡がなくなってしまう。

このように、由森遺跡は前期中葉の1時期だけであり、白川遺跡は中期の遺構が存在する可能性も残るものの、前期後半と後期前半の2時期に居住が行われるだけである。これに対し、久保田遺跡は調査面積が狭く、検出された遺構自体は時期が限定されるものの、出土した遺物からは早期から中期前半までの、かなり多時期にわたって生活の場とされていたことが伺えるのである。

長い空白の時代を経て、古墳時代になると、前期にまず久保田遺跡に住居が出現する。中期になると白川遺跡に集落が展開し、後期まで居住が継続される。久保田遺跡でも後期の1時期に住居が再び出現し、さらに多少の断絶期間を経て奈良時代にも住居が出現する。奈良時代の終わり頃には白川遺跡で住居が出現し、若干時期が遅れて由森遺跡でも住居が出現する。白川遺跡の衰退と時期を合わせるように由森遺跡が隆盛期を迎え、三度久保田遺跡でも住居が出現する。由森遺跡の衰退とほぼ同時に、久保田遺跡も衰退するが、3遺跡の中では最も遅くまで居住が継続される。しかし、やがて竪穴住居跡の時代は終息を迎える。

久保田遺跡は、明確な時期は不明であるものの中世には館として、また、近世には屋敷としての居住痕跡を残している。さらに、中世の館跡と重なり合う形で現在でも1軒だけであるが居住が続けられている。これに対して、白川遺跡・由森遺跡ともに平安時代の集落が衰退して後には全く生活の痕跡は無くなってしまう。少なくとも、調査できた範囲内は現在と同じ様に畑として、あるいは山林・原野としての時を刻み続けてきたものと思われる。

古墳時代以降の遺跡の変遷を見ても、由森遺跡は平安時代だけであり、白川遺跡は古墳時代と奈良・平安時代の大略2時代に限定されるのに対して、久保田遺跡は3遺跡の中でもっとも古い古墳時代前期から、空白期を挟みながらも中近世さらに現代までの多時期・多時代に渡って生活の地として活用されてきている。

今回調査した3遺跡を縄文時代と古墳時代以降とに分けて変遷を追ってみたが、居住域としての利用の頻度が類似していることは興味深い。しかし、狩猟・採集の時代である縄文時代と栽培・生産の時代である古墳時代（弥生時代）以降とで居住域としての選地条件が同様であるはずはなく、また、古墳時代と奈良・平安時代、さらに中近世においても、それぞれの社会・経済情勢の元に選地がなされたと思われる。今後周辺の遺跡を調査する機会があれば改めて各時代の変遷を比較検討し、人々の動静を考えていきたいと思う。(特に久保田遺跡については遺跡の枢要部をなすと思われる台地東半部が全く調査できなかったため、遺跡の変遷をたどるについては未解明な点が多い。古墳時代、奈良・平安時代ともに調査範囲から検出された遺構からは断絶時期が多く認められるが、空白期の全てが埋まるとは思えないものの、調査区域外にはこの空白期

をある程度埋める遺構が存在する可能性のほうが大きいと思われる。）

遺跡変遷表は３遺跡の古墳時代～奈良・平安時代を通して14期に区分している。また、遺跡変遷図については、①時代別と次節の②白川遺跡古墳時代集落の変遷と③３遺跡の奈良・平安時代集落とで作成した。

(2)　白川遺跡古墳時代集落の変遷

白川遺跡の古墳時代住居跡の時期区分と各期の特徴は以下のとおりである。

II期　燃焼施設として炉を使用する住居跡である。12号住居跡は間層を挟み埋土中にＦＡ火山灰が堆積する。６・７号住居跡は重複するため分期される可能性がある。

住居跡の軒数が少なく、遺物の残存状況も良好でないため、一括した。

III期　基本的に間層を挟みＦＡが堆積する住居跡で、燃焼施設はカマドを使用する。土師器甕は胴部が卵型を呈する。II期と比較すると本期以降土師器の高坏がまったく出土しなくなる。坏は数タイプあるが、所謂「須恵器模倣坏」は殆ど出土していない。ＦＡの堆積状況を見ると34号住居跡以外は中央で10cm前後の間層を挟むが、34号住居跡は中央では間層を挟まないと思われる。遺物は甕の形態はほぼ同様であり、坏も基本的に差異を見いだせないものの、34号住居跡には「模倣坏」が加わることから、本期の中でも若干の時間差があるものと思われる。また、１・２号住居跡が重複していることからも時間差が認められる。

なお、１号住居跡からはＦＡの純層の堆積は認められないが、埋土の堆積状況からは人為的に埋められた可能性が考えられるため、遺物から本期とした。

IV期　燃焼施設はカマドで、埋土中に純層ではＦＡ火山灰を含まない。

甕は11号その他III期に比べると長胴化が著しく、明瞭に区別できるため、あるいは、甕の変遷で１時期、間に挟んだほうがよいかもしれない。坏は「模倣坏」の占める割合が大きくなる。なお、９号住居跡は床面にＦＡ粒が混入するような状態で、甕の長胴化が13号住居跡程ではないことから本期の中にも多少の時間差が存在するものと思われる。

なお、特に北半部においてIII期とIV期の住居跡では主軸方位に有意な差が認められる。

Ⅴ期　遺物の残りが悪いために、明瞭さを欠くが、土師器の甕にIV期よりも後出的な様相がみられるので時期設定した。遺構の特徴では竈の袖部に石材の補強を行っていない程度である。III・IV期の住居跡の竈は全て焚口の補強若しくは袖部の芯材として石材を用いている。

(3)　奈良・平安時代集落の変遷

各遺跡から検出された該期の住居跡はそれぞれ20軒前後と少なく、遺構から出土した遺物の種類も量も様々であり、また、重複等による先後関係の把握も調査した遺跡からはほとんどできなかったため、既存の他の報告書等を参考にさせていただいた。基本的には近隣の市町村と大差ないが、細部では多少差異がみられるため、資料の増加を待って本地域なりの編年を行い、改めて検討したいと思っている。個々の遺構の帰属時期については遺跡変遷図及び変遷表を参照していただくとして、何点かの補足説明を行いたい。

①主に土師器・須恵器の坏・甕・埦類の形態変化、および組成で帰属時期を同定している。

②遺物の数量が少なく、また、器種組成を欠く遺構の場合には、少なくとも前後の時期に属する可能性も含んでいる。

③期別の年代区分については９Ｃ代を４期に、それ以外については前後の２期に区分している。

④掘立柱建物跡は所属時期を決定するのに必要な遺物が出土していないため、基本的には時期を判定していないが、由森遺跡については規則的に配置されたと思われる掘立柱建物跡群があること。また、このうちの７号掘立柱建物跡からは実測図を提示していないが、典型的な「コの字状口縁」を呈する甕が出土していること。さらに、竪穴住居跡との重複関係、位置関係を加味してⅪ期に同定した。

因みに、竪穴住居跡と掘立柱建物跡群の新旧関係が判明しているものは４号掘立→７号住居跡（Ⅻ期）である。

奈良・平安時代の集落変遷については既に概観したが、時期ごとに改めて概観すると、Ⅶ期に久保田遺跡に住居が出現し（Ⅶ期以前から継続しているかどうかは不明である。）、Ⅷ期には白川遺跡が集落の出現と同時に隆盛期を迎える。Ⅸ期には白川遺跡は急激に衰退し、それに変わって由森遺跡に住居が出現する。Ⅺ期には由森遺跡で掘立柱建物を主体とする第１の隆盛期を迎えるが、白川遺跡では衰退したままである。久保田遺跡では集落が出現する。Ⅻ期には由森遺跡で竪穴住居跡を主体とする第２の隆盛期を迎えるが、白川遺跡は本期で消滅する。由森遺跡もⅬⅢ期には急激に衰退し消滅するが、久保田遺跡ではⅩⅣ期まで居住が継続される。

３遺跡の奈良・平安時代集落の調査の中で特筆される事項としては、由森遺跡の規則的に配置された掘立柱建物跡群がある。調査範囲等の関係もあるが、少なくとも富士見村においてはこれまでこのように規則的に配置された掘立柱建物群の調査例はなく（昭和59年に調査を行った見眼遺跡、昭和61年に調査を行った岩之下遺跡の掘立柱建物跡群に可能性を残すが）、また、掘立柱建物を主体とする集落の調査例もない。遺跡とすれば決して大きな遺跡ではなく、個々の掘立柱建物跡の規模・構造には有為な差異は見出しがたいが、「由森村」の成立には周辺で一般的にみられる該期の集落とは異なった形成要因が働いていた可能性も考えられる。しかし、現時点でそれが何によるか言及することは不可能である。また、出土遺物からもそれを示すような様相は認められていない。今後同様な事例を調査する機会があれば改めて考えてみたい。

主要な参考文献

中沢　悟「第５章第４節出土土器の分類と編年」『昭和53年度県営畑地帯総合土地改良事業清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書　第１集　清里・陣場遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982（昭和57年）

坂口　一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年－住居の重複と共伴関係による土器型式組列の検討－」『群馬県史研究　第24号』　群馬県史編さん委員会　1986（昭和61年）

坂口　一　「榛名山二ツ岳起源ＦＡ・ＦＰ層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡』　1986（昭和61年）

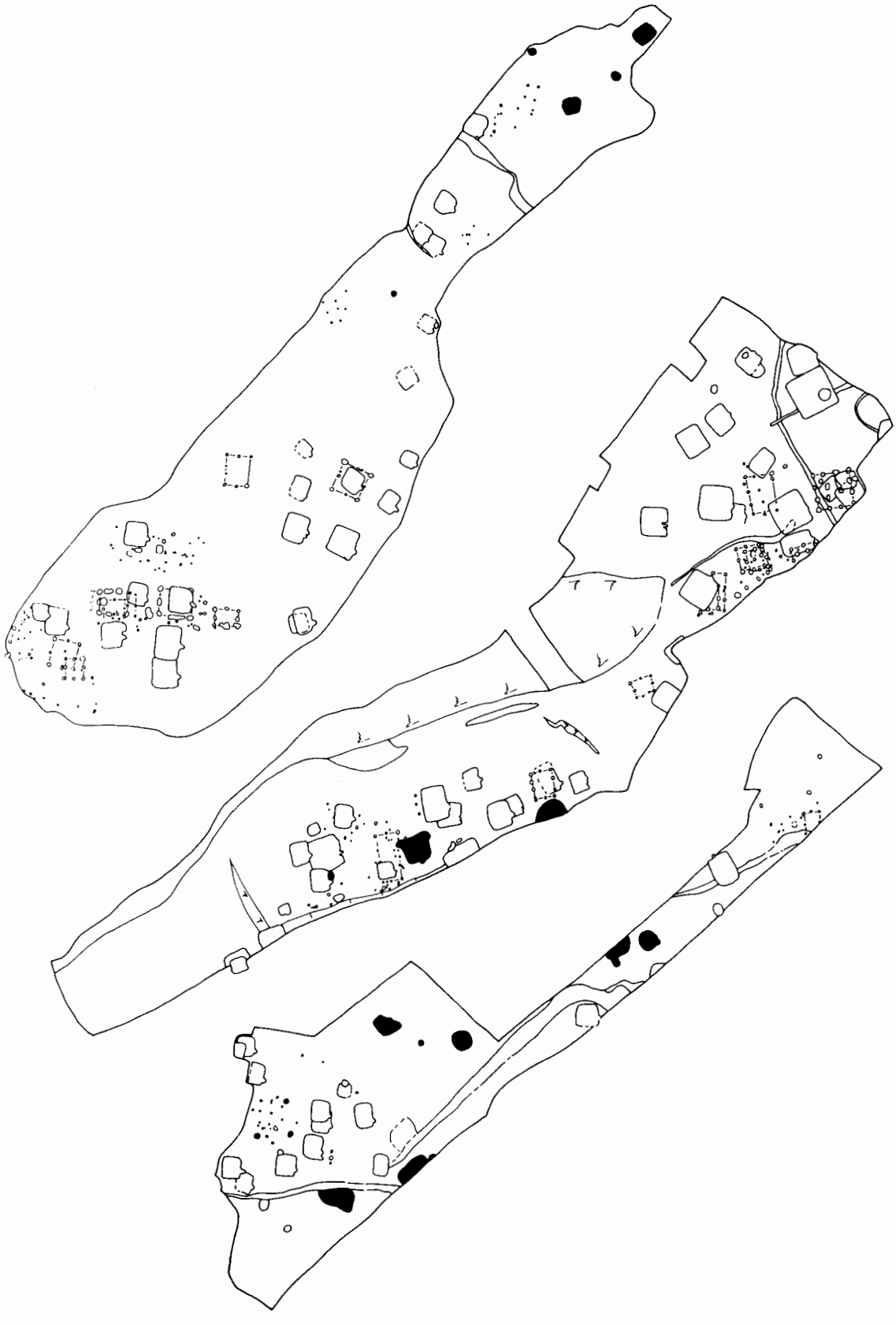
坂口　一　「群馬県における古墳時代中期の土器の編年－共伴関係による土器型式組列の検討－」『研究紀要　４』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1987（昭和62年）

桜岡正信「第４章第１節第１項　土器の分類と時期設定」　『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)－関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第20集－』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988　昭和63年

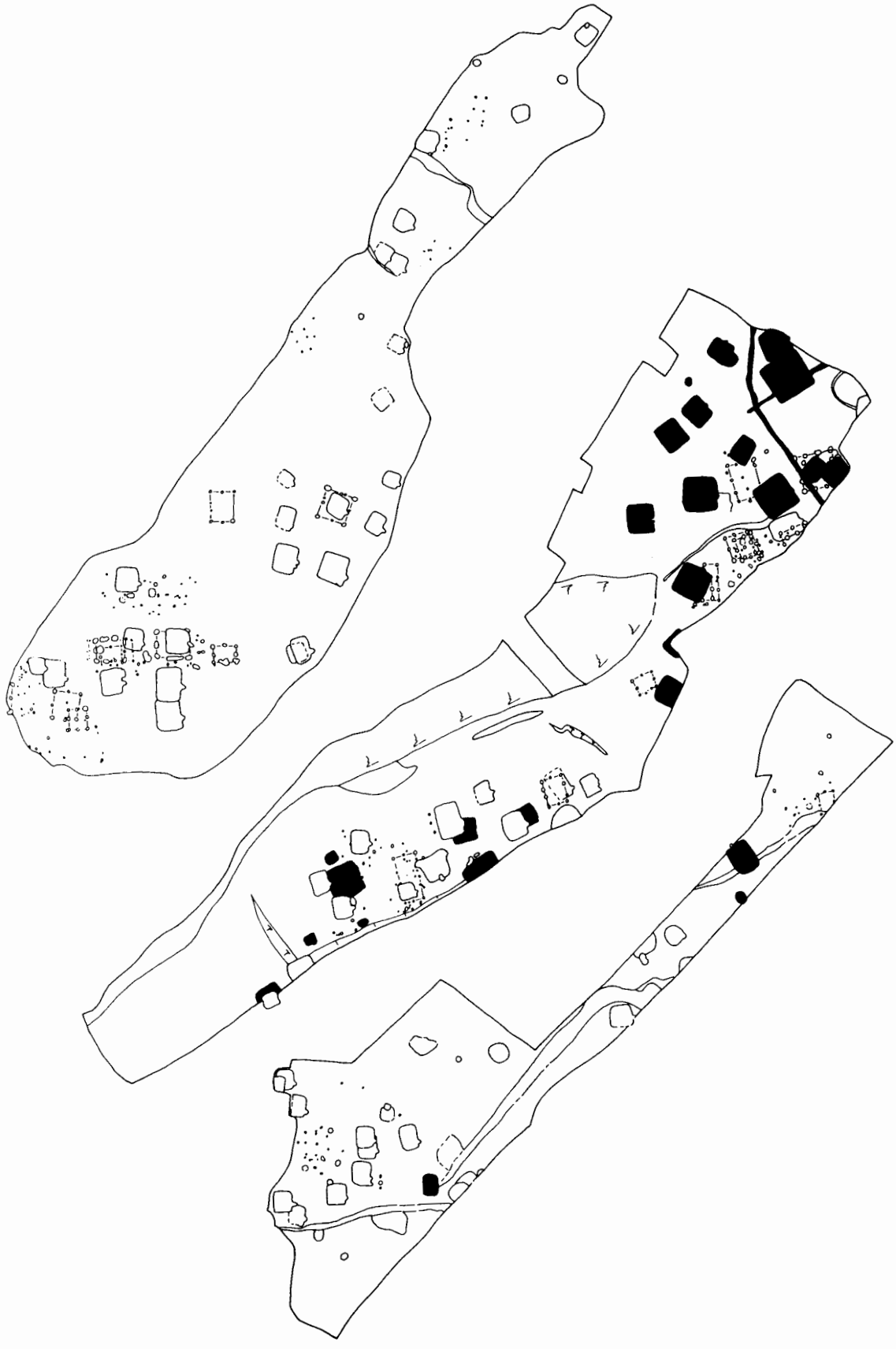
白川・由森・久保田遺跡変遷表（古墳時代以降）

期別	時代時期	年代	久保田遺跡	白川遺跡	由森遺跡
Ⅰ期	古墳時代前期	4C後	1住・1土		
Ⅱ期	古墳時代中期	5C前		6住・(7住)・12住	
Ⅲ期		5C後		1住・2住・3住・10住・11住・15住・17住・34住	
Ⅳ期	古墳時代後期	6C前		9住・13住・14住・22住・24住	
Ⅴ期		6C後		28住	
Ⅵ期		7C前	14住		
Ⅶ期	奈良時代	8C前	4住		
Ⅷ期		8C後		8住・21住・25住・26住・29住・31住	
Ⅸ期	平安時代	9C1		30住	5住
Ⅹ期		9C2			1住・15住
Ⅺ期		9C3	9住・11住	4住	2住・4住・20住・21住・16住・2掘・3掘・4掘・5掘・7掘
Ⅻ期		9C4	6住・8住・10住・16住	27住	3住・7住・8住・9a住・10住・11住・14住・18住
ⅩⅢ期		10C前	5住・7住		6住
ⅩⅣ期		10C後	12住・13住		

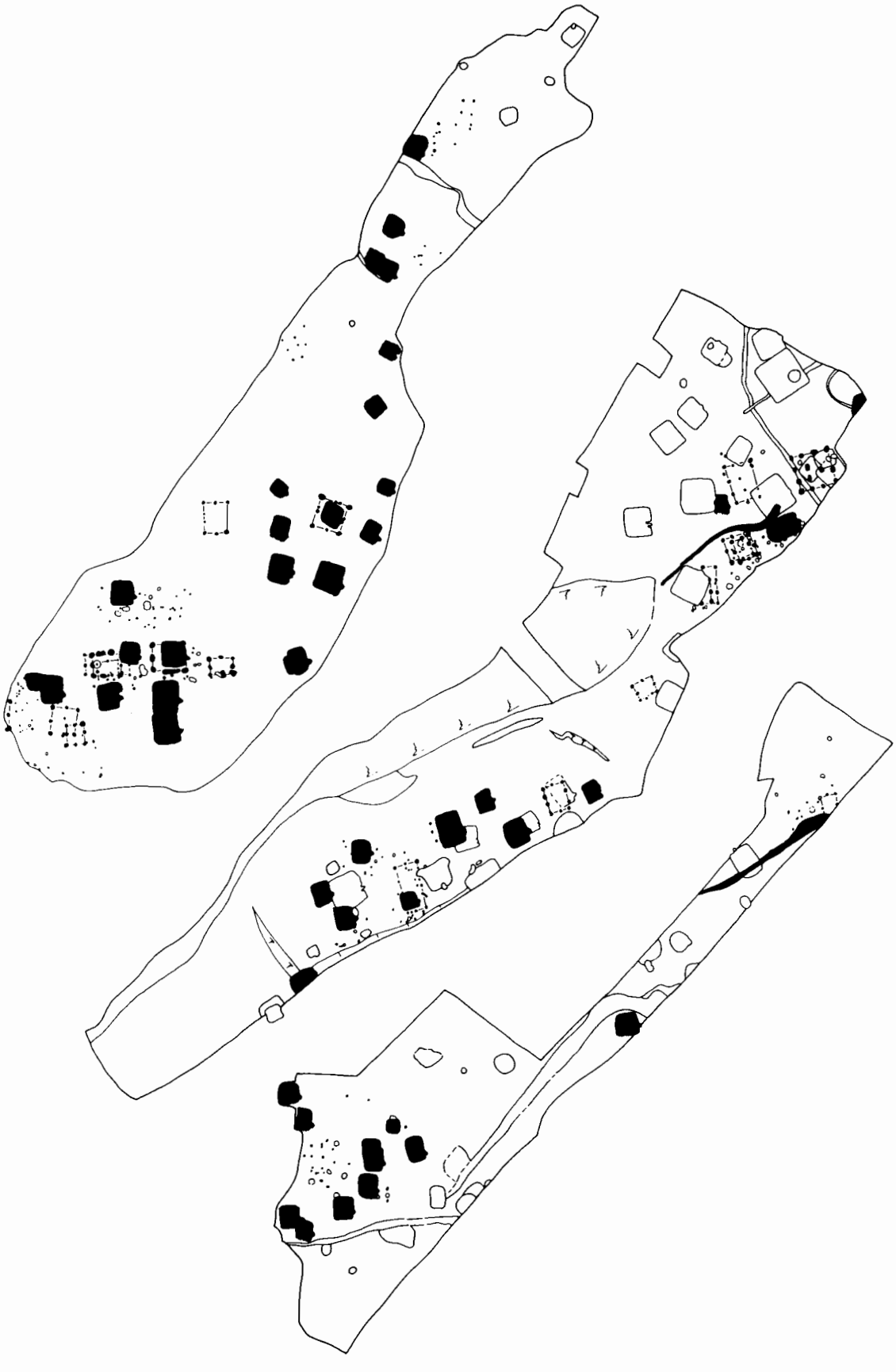
注：時代区分についてはおよその目安であり、厳密な意味で用いているわけではないことをお断りしておきたい。



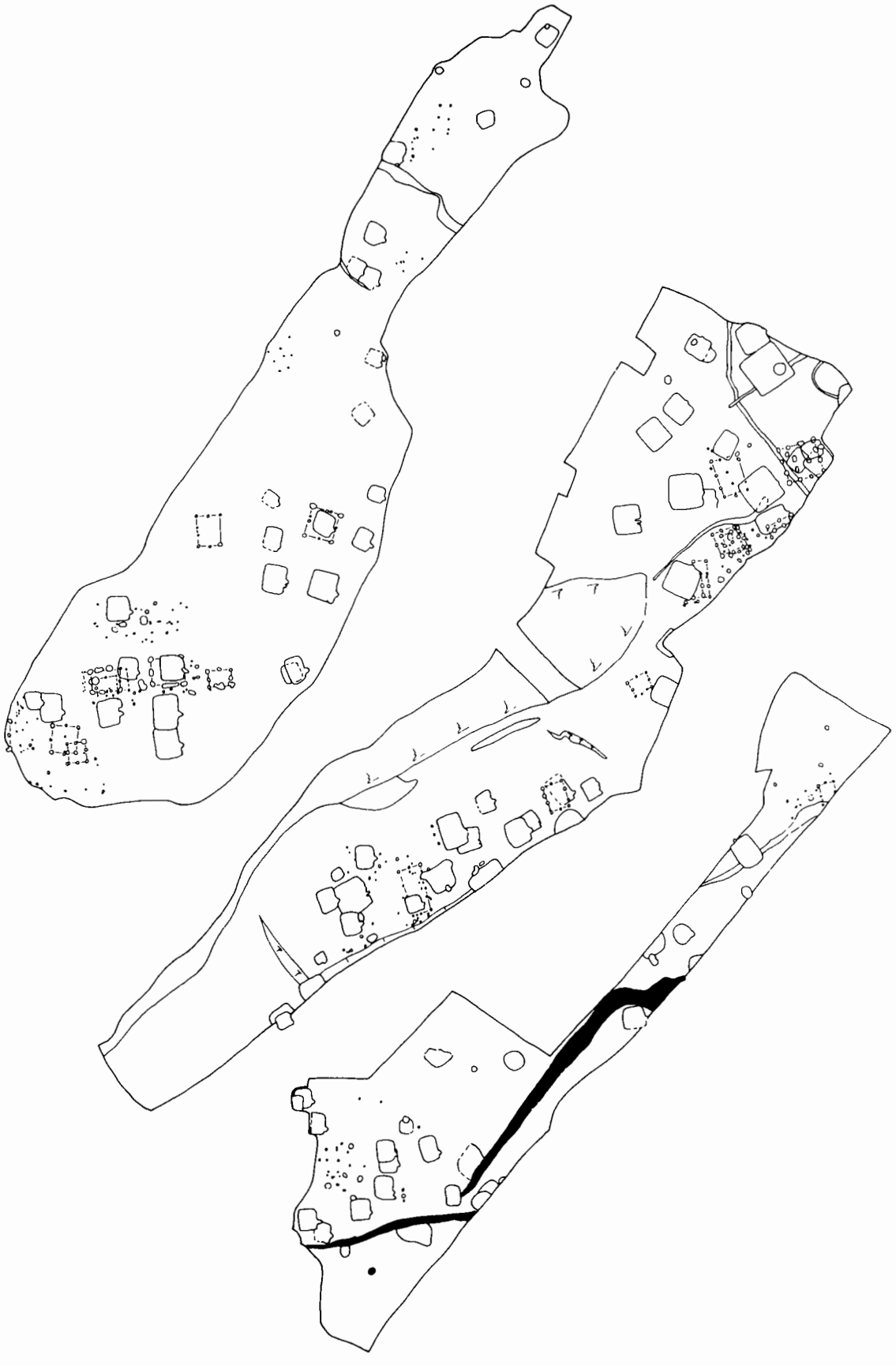
第199図　遺跡変遷図－縄文時代



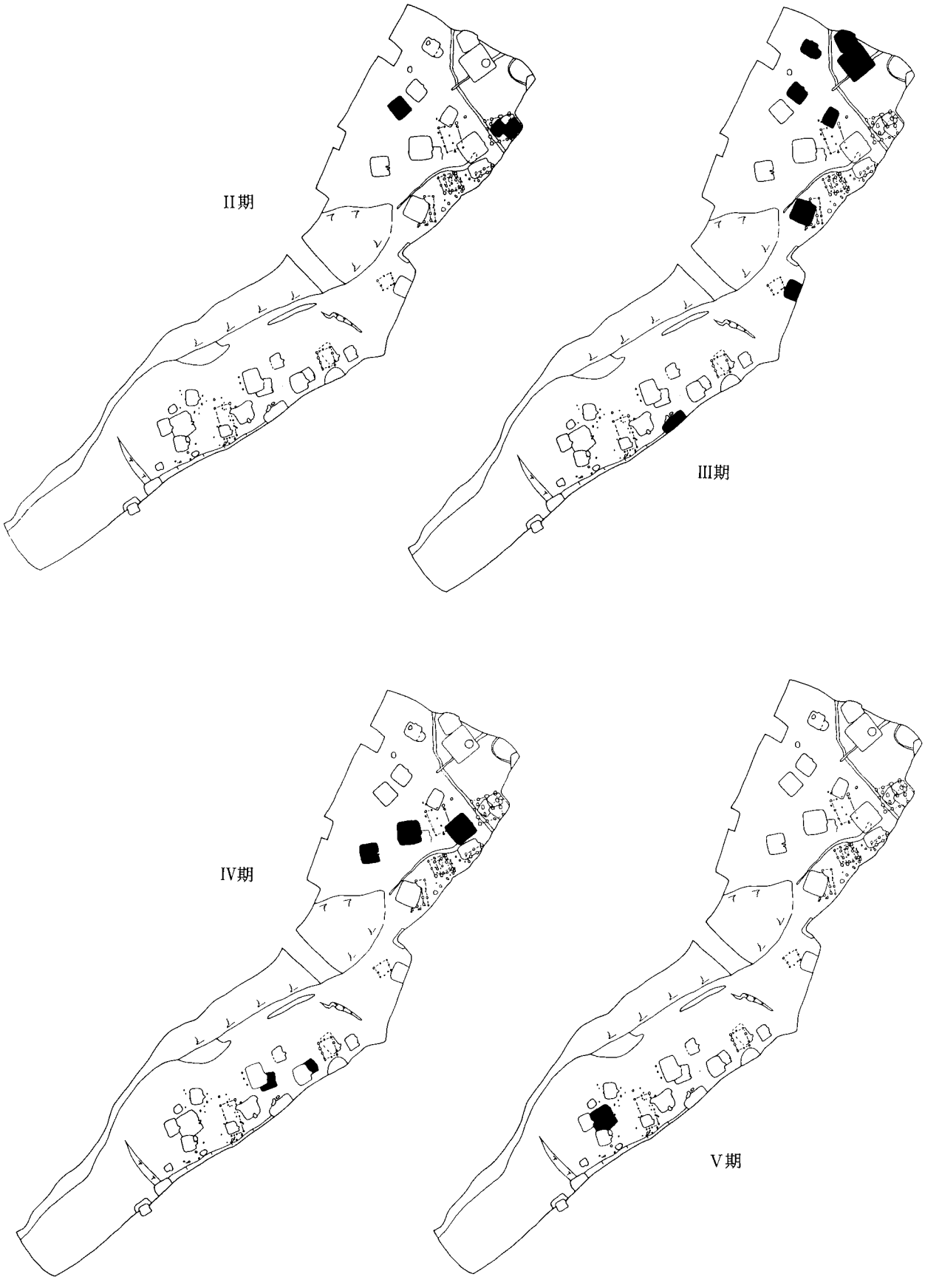
第200図　遺跡変遷図—古墳時代



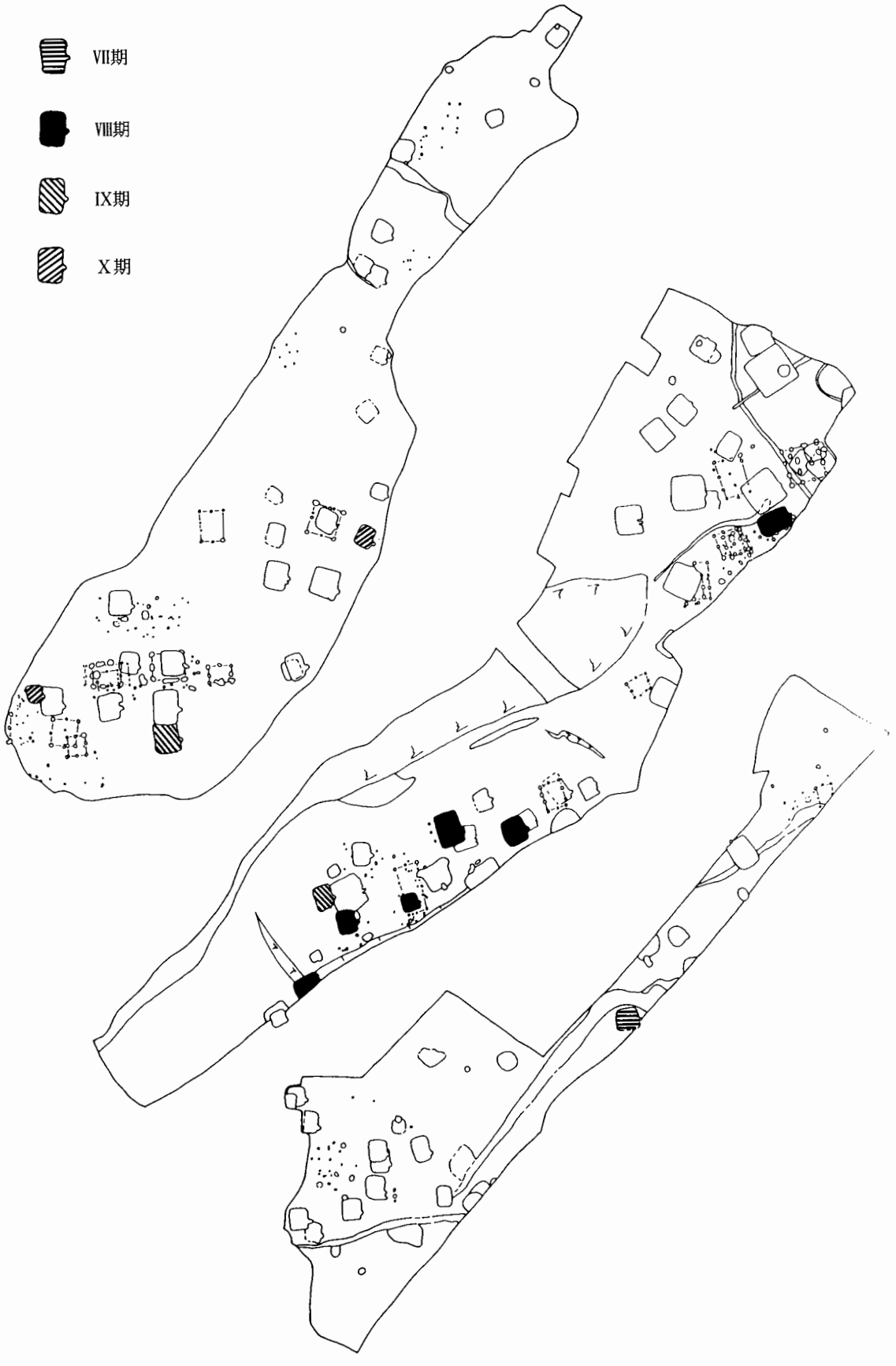
第201図　遺跡変遷図―奈良・平安時代



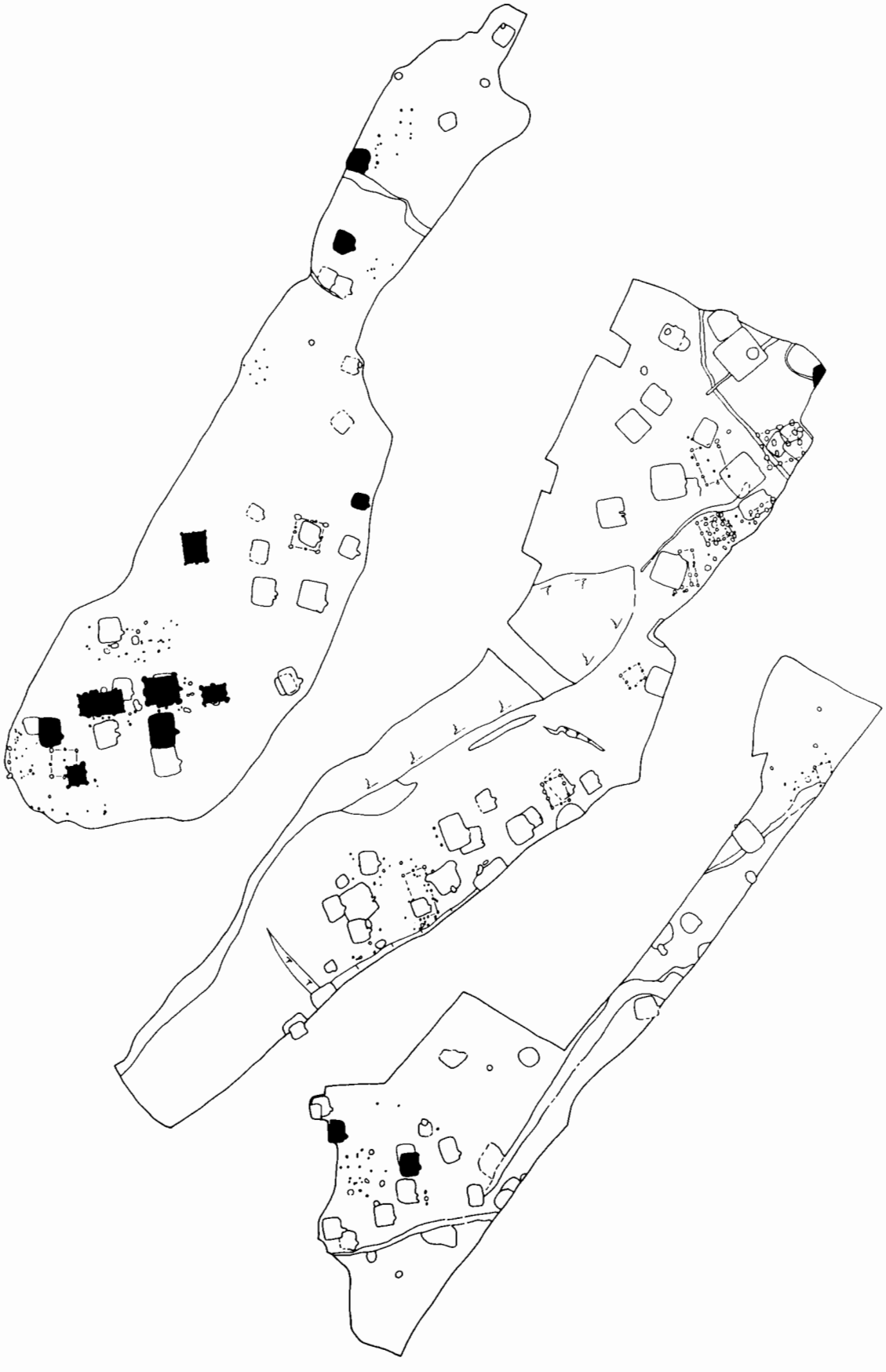
第202図　遺跡変遷図―中・近世



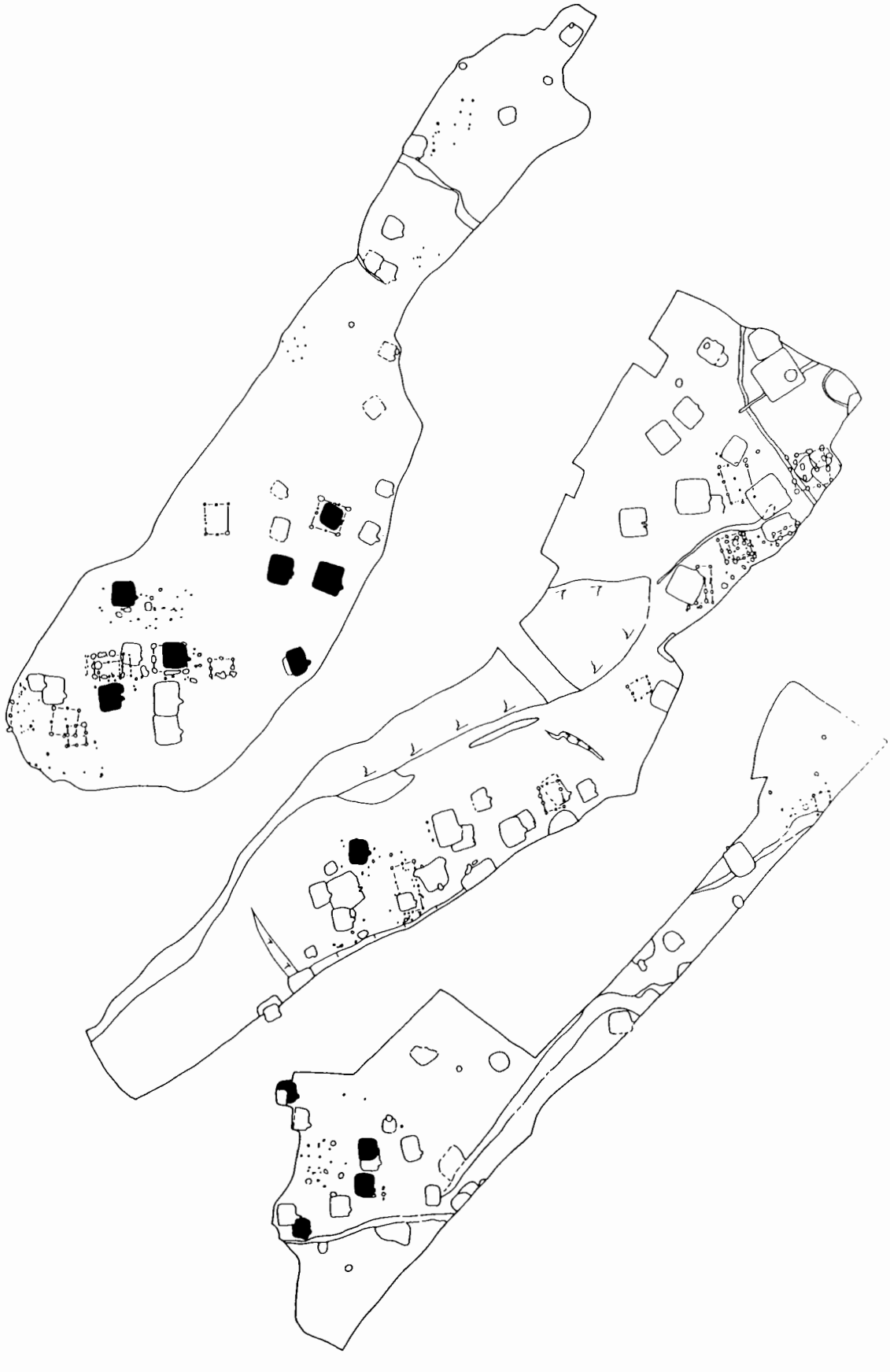
第203図　白川遺跡古墳時代集落変遷図



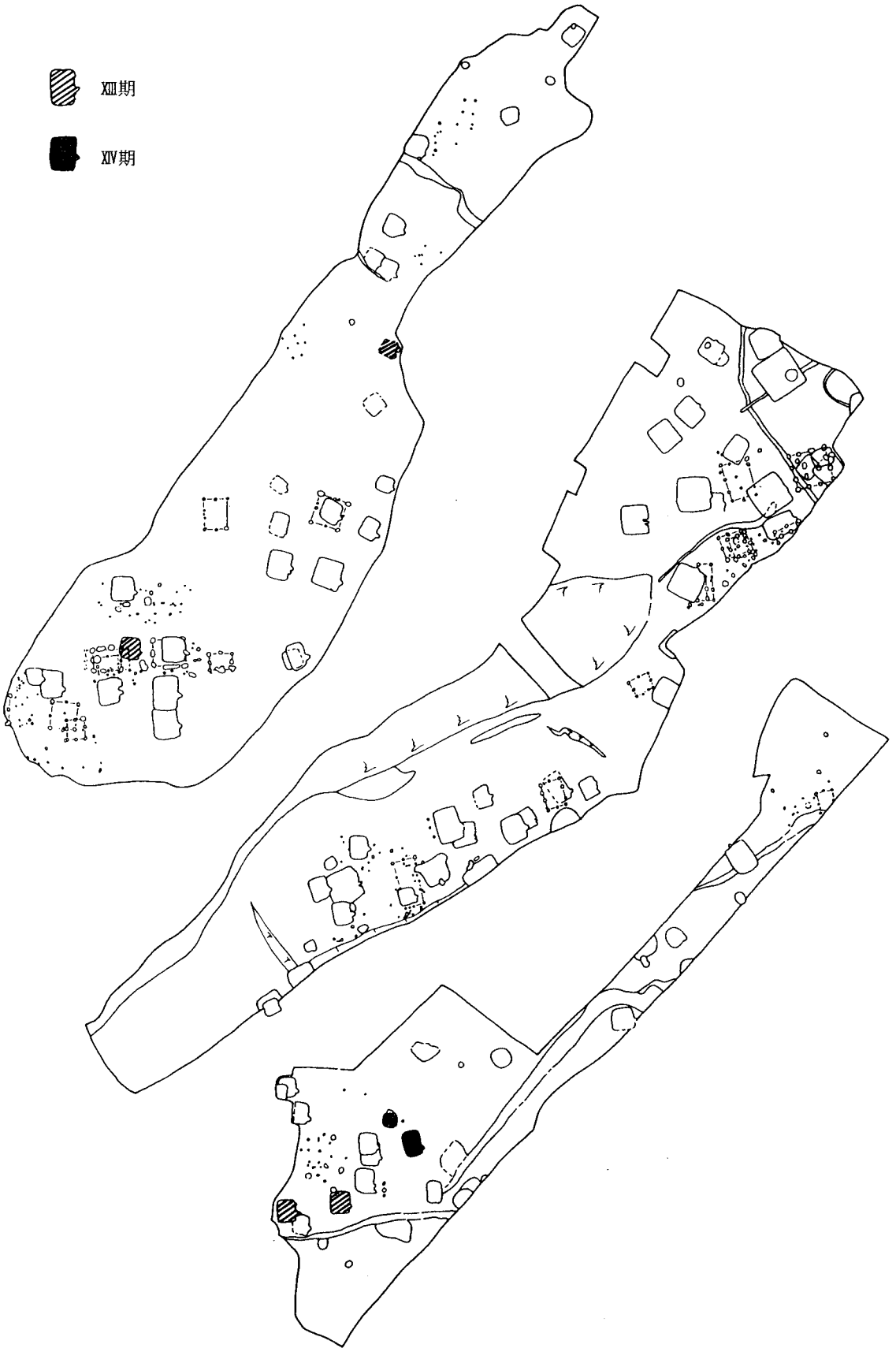
第204図　奈良・平安時代集落の変遷―Ⅶ～Ⅹ期―



第205図　奈良・平安時代集落の変遷―XI期―



第206図　奈良・平安時代集落の変遷―Ⅻ期―



第207図　奈良・平安時代集落の変遷—XIII・XIV期—

2．白川遺跡13号住居跡出土竹製品について

本跡は焼失家屋と思われ、多量の焼土・炭化材とともに良好な一括遺物が出土したことはすでにII章で報告した。柱材などの炭化材の中には加工痕跡を残すと思われるものもあったが、限られた調査期間の中では原状を維持して取り上げることは困難であった。しかし、床面に伏せられた坏の内部に竹製品の一部分が比較的良好な状態で遺存しており、類例も少ないと思われるため、ここで若干の補足説明と観察結果の報告等を行いたい。

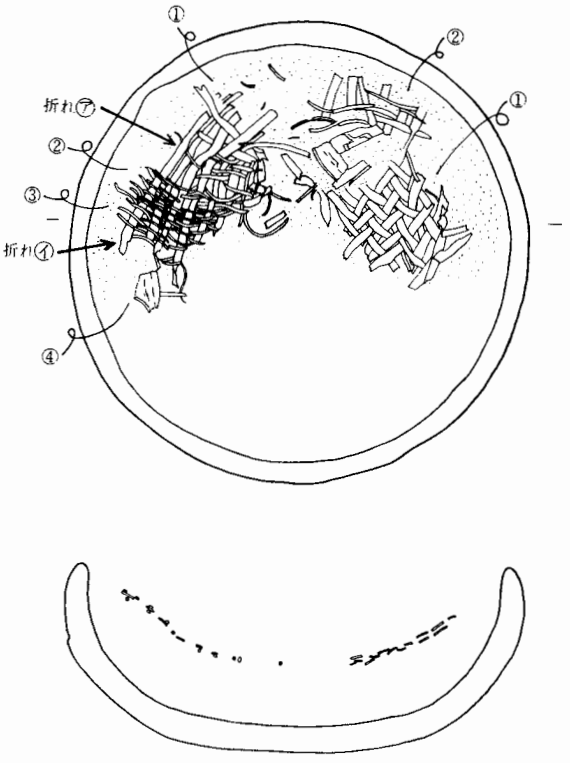
竹製品の出土状態

竹製品の存在に気が付いたのは、遺物の取り上げ作業中である。平面実測を行い、レベリングをして1点1点床面から遺物を取り上げていったが、図版33－9の坏を取り上げた作業員が、内部に詰まった土・焼土の間に炭化物があるのに気が付いた。とりあえずヒビ割れて炭化物から離れた土・焼土ブロックの何点かを取り除くと、竹らしき網物であることが観察できた。坏を取り上げた場所には焼土と若干の欠け落ちた炭化材が認められたものの、周囲の床面にはこの炭化材と関連するような炭化材の存在は認められなかった。坏の口縁部は完全に床面と密着していた。また、他にも伏せられた状態の坏が近くにあったが、内部には焼土・土が詰まっていただけである。(但し、細かい観察は行っていない。)

発掘調査の終了後、上面を被う土・焼土あるいは脱落した炭化材を取り除き、竹製品を露出させる作業を行っているが、竹材が細く脆いため、全体を露出するまでにはいたっていない。あくまで本稿は中間報告である。(執筆時点では実測時点よりも焼土・材の除去が進んでおり、実測図に表現されていない事項が多少判明している。)

竹製品の観察

竹製品は坏の内部約半分程の範囲に遺存し、大まかに言って2つの部分に分れる。挿図は処理の進まない段階で実測したため、この2つの部分の接点近くは、重なり合う炭化材・土を除去し切れていない。挿図では土（焼土）と土の間に挟まれ、ほぼ坏の内面の形状に沿った断面形状を呈するが、この形状が竹製品自体の元の形状を留めているわけではない。



第208図　竹製品実測図

材の種類

a．幅2.5㎜前後、厚さ0.5㎜以下
b．幅1.0㎜前後、厚さ0.5㎜以下
c．幅0.5㎜前後、厚さ0.5㎜以下
d．その他（幅5㎜前後の短片）

編み方　（編み方の表記方法については荒木ヨシ1970等の網代の表記方法を参考にした。）

図上左側をA、右側をBとして説明する。

Aは上から①2本超2本潜1本送り（経緯とも竹材a）

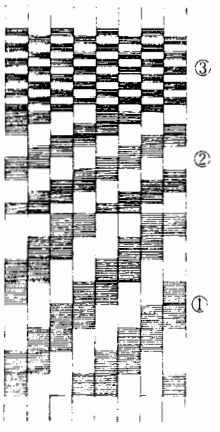
②2本超2本潜1本送り（経の竹材a、緯の竹材b～c）

③1本超1本潜1本送り（経の竹材a、緯の竹材c）

Bは上端を除き、①2本超2本潜1本送り（経緯とも竹材a）

上端は、②2本超2本潜1本送り（経の竹材a、緯の竹材b）

である。また、編み方の密度は②が比較的粗く、③は密（緯材が）である。①については現状ではわずかな隙間が認められるが、元々は密に編まれていたものと思われる。なお、②・③の経、緯については竹製品を復元した状態からの経、緯である事をお断りしておく。



第209図　竹製品編み方模式図

Aの観察

竹材の編み方は上記したとおりであるが、それ以外の事項を観察すると、ほぼ①と②の間に折れア（手前に折れている）が認められる。また、この折れアから下側の経材は徐々に間隔が広がる様相が観取できる。因みに、折れア部分の経材の間隔はほぼ1～3㎜、縁付近はほぼ3～5㎜と一定していない。折れイについては、3本共に先端に折れ、ないしはネジレが認められることから、縁の篝部分と思われる。

Bの観察

Bについては、実測後の処理により新たに判明した事項も含めて説明したい。

Bの②の部分はAの下側に続いており、②の編み方の上に③の編み方が認められる。さらに、①と②の間にはAと同様な折れがある。ただし、折れの方向は向う側である。また、①と②の境界付近はB－①部分を巡ってほぼ孤（あるいは隅丸長方形状）を描いている。

竹製品の復元

縁篝の状況が不明であり、全体が遺存していたかどうかも不明（柄等が付いていた可能性も完全には否定できない。）であるが、現段階で推定できる範囲で復元を試みたい。

上記のような観察の結果、この竹製品は①の部分を底部とし、体部下側が②（底部周縁が含まれる可能性もある）、体部上側が③で編まれた編み籠状の竹製品と思われる。

編み籠の形状は、土師器の丸底内湾坏（9の坏の様な）に類似した形状を当初推定したが、折れアの存在と体部の経材の開きを考えると、①部の形状からの制約を強く受けて、全体的に四角張った形状になると考えられる。大きさは、底部が径（若しくは一辺）5㎝前後、高さ3㎝前後（Aの折れアから折れイまでの長さが約3㎝）と非常に小型である。口径は8～9㎝程度と思われる。

注：編み籠等の竹製品については、民芸・民俗学等で用いられる用語があると思われるが、不勉強のため正式の用語については多くを知らない。因みに、2本超え2本潜り1本送りは「2本とびあじろ」、1本超え1本潜りは「4ツ目」もしくは「ざる目あみ」と呼ぶようである。

竹製品の用途

前記した竹製品の復元が妥当であるとの前提の元に用途を推定すると、まず何か「物」を入れた容器が考えられる。この場合、水物以外で、さらに水きりを必要とするもの（土器の坏等との差を考えると）で、大きさの点から量が少ないものとなる。具体的な物は現時点では不明であるが、形状や大きさから、現在でも用いられている（あるいは数十年前まで用いられていた）ものを探すと、「釣りの餌入れ」に類似するものがある程度である。「米の研ぎ籠」や「味噌濾し」のように、濾す、あるいは水にさらす用途に用いられたことも考えられるが、編み方はともかく大きさや形状の点からみると無理がある。単一の用途に使われたとは限らないが、いずれにしても、小型の盛り器としては土器の坏等があり、また木器も推定されるため、ここでは中に入れる「もの」をかなり限定した容器であると考えておきたい。

残存状態の検討

前記したとおり、9の坏は伏せられた状態で出土している。BからAの奥に隠れた部分は外面を住居の床に向けた状態、言わば正位で出土し、Aの部分は内面を床面に向けた状態で出土している。Bの下端とAの上端が接合し底部となっていたわけである。つまり、Aは上～左上側でBから離れ、折り返したような状態で出土したことになる。9の坏が伏せられた経緯が不明ではあるが、もし廃棄あるいは遺棄時点の原位置を保っているとすれば、この狭い坏の内部で焼失に伴って破損したとは考えにくい。とすれば、この編み籠はすでに住居・遺物が廃棄若しくは遺棄された時点で破損した状態にあったと思われる。

次に、坏内部の土・焼土について考えてみると、どの段階で坏内部に土が入り、焼土化したかという問題がある（土が坏内部に入っている状態で住居が焼失したのか、焼失後焼土・土が坏内部に侵入したのか）。取り上げから現在までの処理上の不備によって（問題意識の欠如・知識の不足）、土・焼土の充填状況、焼土化の程度、部位等については、これまで細かい観察・記録を行ってこなかったため、現況を主体に報告すると、焼土化しているのはAが坏内面に接する部分周辺だけで他は焼土化していない。編み籠を被う土・焼土の除去作業においても、編み籠を挟み込むような状態でこの周辺を中心に焼土があったことは確認されている。焼土の状況は焼土化していない土の部分と比較すると、比較的焼き締まっており、たまたまこの部分に焼土が侵入してきたというよりも、やはり、ある程度は土が内部にあり、編み籠を包み込んだ状態で坏が火熱を受けたと考えたほうがよいようである。なを、編み籠が坏内面に接する部分、つまり、竹材の先端はあたかも坏内面の形状に合わせて切り揃えたようになっていた。B上端の竹材残存部分は①～②の境から約1cmが残存するだけで、残り約2cmの部分は坏内壁に接した部分から先を欠失している。つまり、編み籠は坏内壁に接した篝部分から徐々に焼失し、遺棄した時点よりも約2cm程度動いた可能性がある（この編み籠を遺棄した時点でBの上端部分から先を坏の内面形状に沿って切り離しておけば別であるが）。恐らく、坏の器壁に接していた部分は器壁の温度の上昇によって焼亡（焼失・灰化）したものと思われる。しかし、土の間に包み込まれていた部分は燃焼する程は温度が上昇せず、あるいは燃焼するだけの酸素が供給されなかったため、炭化したものと思われる。とすれば、すでにこの住居跡が焼失した時点で坏の内部には土がある程度充填していたことになり、住居跡・遺物の廃棄・遺棄と焼失の間にある程度の時間（土圧その他により自然に土が坏内部に侵入するだけの時間）があったか、意識的に坏内部に竹製品を入れた状態で土を入れて伏せておいたと考えるしかなく、偶然の火災によって住居跡・遺物が廃棄・遺棄されたのではない可能性がでてくる。つまりこの住居跡・遺物は何らかの意図をもって故意に廃棄・遺棄され焼失したと思われる。

竹製品出土の意義とその他の問題点

良好な一括遺物を残す焼失家屋が、古墳時代のこの時期に多いことは、これまで行われた調査によってしばしば報告されていることであり、本村で行ったこれまでの発掘調査でも類例が出土しているが、突発的な事故によって家屋が焼失し、生活状態のまま遺物が遺棄されたか、それとも、住居の廃棄に伴って、遺物を意識的に遺棄していったか、あるいは、それが、ある程度生活状態を表すものなのか、それとも、廃棄に伴う何らかの整理の行為を経た状態なのかということについては、それを証明する明確な資料も、方法も残念ながらほとんどないと思われる。この事象が個人的な事情を越えた何か社会的な生因によっているであろうという指摘は首肯できるものの、具体的にその生因を挙げることは非常に困難である。地道にこのような事例を広く収集し、詳細に比較分析することによって、ある程度はそれにアプローチはできるとは思うが、限られた時間の中では困難であり、また、浅学な身には余りにも問題が大きすぎる。この問題に関しては後日を期したいと思う。

編み籠の材については分析を行っていないので不明であるが、真竹のような感触を得ている。ただし、真竹の搬入時期については時期が下るとも聞いているので、断言はできない。もし真竹とすれば、搬入時期を解明する上で貴重な資料となるであろう。また、真竹であり、搬入時期が下ることが確実とすれば、製品(あるいは竹材）自体が外国からの招来品ということになり、これも大きな問題を残している。

竹材が住居等の構築材の一部として用いられていたであろうことは、竹材の性質から考えて推定されているところである。また、我々の一昔前の生活や民俗学的な事例から考えても、籐製品や竹製品が編み籠等として用いられていたであろうことは十分推定されることである。しかし、木材や木製品以上に残存しにくいと思われる竹製品が土中に遺存することは、藍胎漆器等の特殊なものを除けば考えにくいし、実際、現在まで寡聞にして出土例を知らない。恐らく将来にわたっても類例の増える可能性はごくわずかと思われる。つまり、残念ながら考古学的な資料の増加によって竹製品の研究が進展する可能性はないに等しい。ただ、繊維製品を含めた諸種の編み方は縄文時代からの長い伝統と技術の蓄積の基にあり、特に農村の生活の中では日常容器・生産用具の中に占める竹製品（籐製品）の比率が高かったことは、石油製品がとってかわり、我々の生活様式が大きく変化した数十年前を考えてみても首肯できることである。

竹材の伐採・加工に用いた工具については推定するしかないが、最低でも伐採・荒割りに用いたナタ状の工具と加工（ヒゴ作り）に用いる切り出しナイフ様（刀子？）の工具が必要と思われる。本跡はもちろん、本村の古墳時代の竪穴住居跡からは１点の鉄製品も出土していないが、もしも、白川遺跡１３号住居跡の居住者が自らこの編み籠を製作したとすれば、少なくとも上記したような工具を所有していたと思われる。

先述したとおり、竹製品の処理は途中であり、あくまで本項は途中経過の報告である。今後、竹材の分析・竹製品の復元、あるいは坏内の土壌分析等も行った後で、改めて報告する機会をもちたい。

脱稿後、本村出身で隣村の北橘村在住の竹芸家　綿貫進氏に編み籠を観察していただく機会を得た。

綿貫氏によれば、この竹製品をもし推定、復元したような形状・大きさで作るとすれば、竹材の選別、伐採の時期、寝かしの期間、加工技術の習熟等が必要であり、だれでもが簡単に作れるような製品ではないとのことである。とすれば、竹製品の全てとは言わないが、ある程度竹製品の製作を専門に行った集団なり、職人が存在した可能性も考えられる。また、すでに職人が生まれるまでの歴史を竹製品が有していることにもなる。

参考文献

荒木ヨシ　「東日本縄文時代後・晩期の網代編みについて」　『物質文化　15』1970

荒木ヨシ　「縄文時代の網代編み」　『物質文化　17』1971

額田　巌　「竹製民具の構成理論」　『物質文化　16』1970

3．その他の主要な成果について

白川遺跡の古墳時代集落では限定された時期に出現すると思われる遺構・遺物が検出されている。

まず10号住居跡で煙道を持たない竈が付設されていた。富士見村では田中田遺跡に次いで２例目の出土例である。近年群馬県内でも数例の同様の施設が検出されているようであるが、当地方では竈は完成された形で導入されたとされており、何故このような燃焼施設が出現するのか不可解である。いずれにしても竈導入期のごく短期間に現れる現象であり、この後に継続しないことから過渡的な現象と思われる。

１号、13号、15号住居跡では南壁沿いのほぼ中央部床面に粘土帯で区画した遺構が検出された。(仮称－土手状区画遺構)　群馬県内では高崎市の正観寺遺跡・小八木遺跡、群馬町の引間遺跡等で数例が調査されているようである。構築材が粘土であるため、原状がどのような構造であったか不明であるが、位置や規模は３例ともに類似しており、特に位置的な観点から考えると入口施設との関連が推定されるが、機能的には現状では不明である。この施設も出現する時期が限られるようである。

遺物では１号、15号住居跡から出土した２孔タイプの甑が特記される。大型（甕型）甑の孔の中央に棒状の粘土を差し渡したもので、素材の点を除くと相対する孔の縁２ケ所に小孔を穿つタイプに類似性が認められる。現時点では群馬県内からの出土例はほとんど聞かないが、粕川村その他から数例出土している把手付き甑と同様に、須恵器模倣の大型甑導入に伴う過渡的な事例とおもわれる。

このような過渡的な文化事象が何故富士見村の遺跡に出現するのか、不思議である。過渡的な状況のままで文化事象が伝播するのか、あるいは、確立された形で伝播はしたが、それに対するささやかな抵抗として現れた事象なのか、人の移動はどのようであったか、過渡的な時期に人が移動してきたのか、それとも、文化事象だけが伝播してきたのか、これらのこと全て現時点では残念ながら不明である。

4．ま　と　め

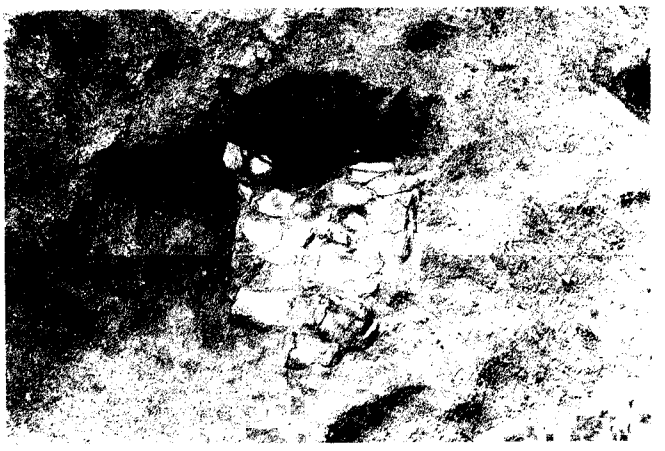
白川遺跡、由森遺跡、久保田遺跡の発掘調査から得られた成果は多種・多様である。特に、久保田遺跡の縄文時代早期末から前期初頭にかけての集落、白川遺跡の古墳時代集落、由森遺跡の平安時代集落の調査において特筆すべき成果が得られたように思う。さらに近接した３ケ所の遺跡が調査できたことで、変遷が比較でき、特に奈良・平安時代においては、時期によっては相互に何らかの関連をもって変遷したことが伺えることも大きな成果と思う。しかし、時間的な制約や筆者の非力によりこれら成果の抽出・検討や問題点の提示が満足にできないまま本書を刊行せざるを得ないのは残念である。今後、周辺の遺跡や類似する遺跡を調査する機会があれば、改めてこれらの課題について検討してみたい。

写 真 図 版

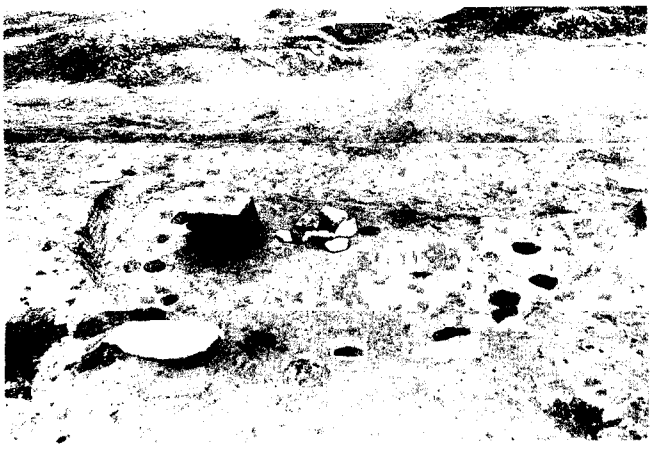
1　白川遺跡全景（北から）

2　白川遺跡南半部（北東から）

1　Ｊ２号住居跡全景（北東から）

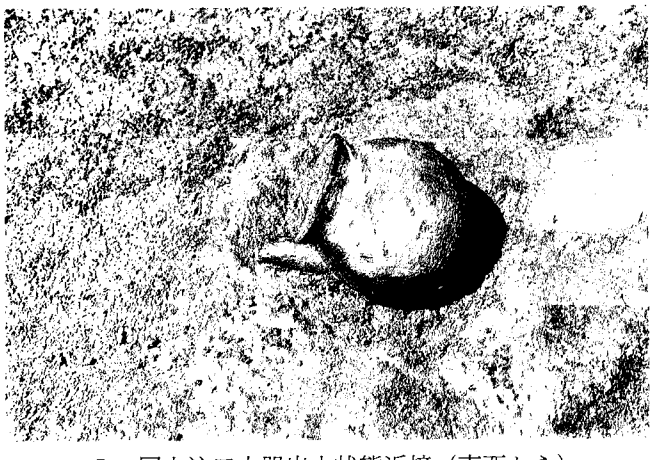


2　同左遺物出土状態（北から）



3　Ｊ１号住居跡全景（北西から）

4　同左炉跡出土状態（南から）



5　同上注口土器出土状態近接（南西から）

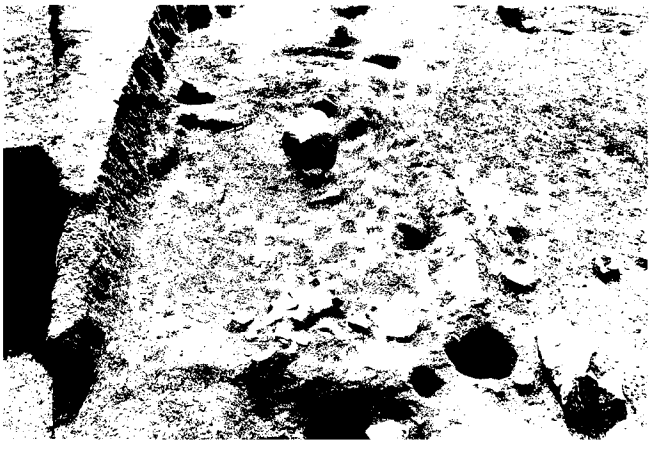
6　同左石皿出土状態（西から）

7　Ｊ２号土抗（南東から）

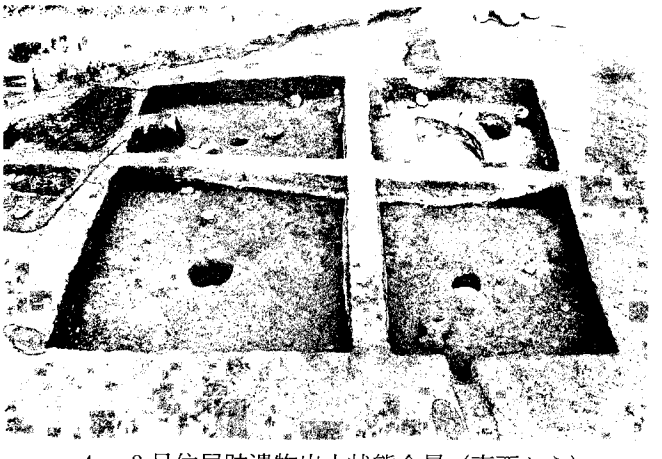
8　Ｊ１号土抗（北から）

1　１号住居跡（南西から）

2　同左カマド（西から）



3　同上土手状区画施設（北東から）



4　２号住居跡遺物出土状態全景（南西から）

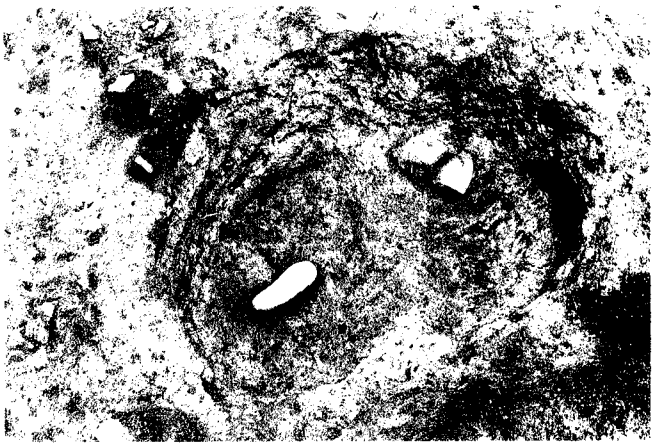
5　２号住居跡遺物出土状態（南西から）

6　同左カマド遺物出土状態（南西から）

7　３号住居跡全景（西から）

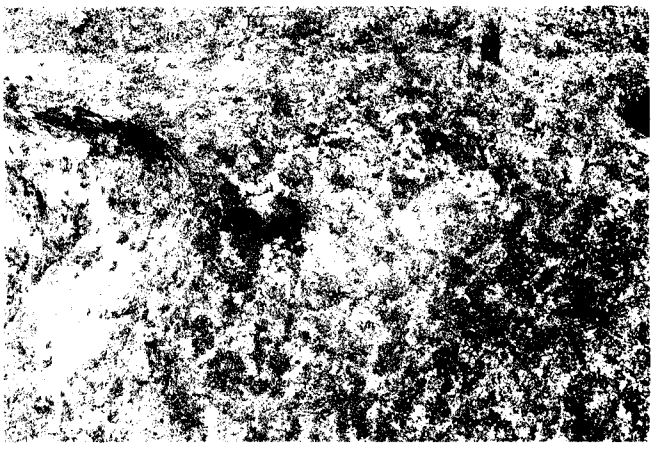
8　同左埋土断面（東から）

1　6号住居跡全景（南西から）



2　同左貯蔵穴遺物出土状態（南から）

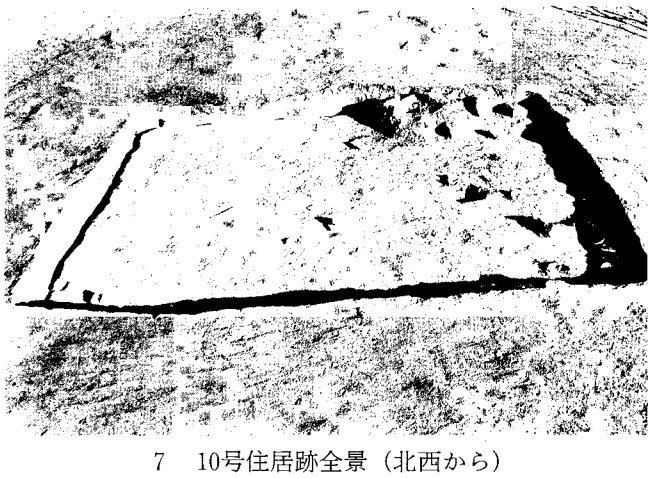
3　7号住居跡全景（南西から）



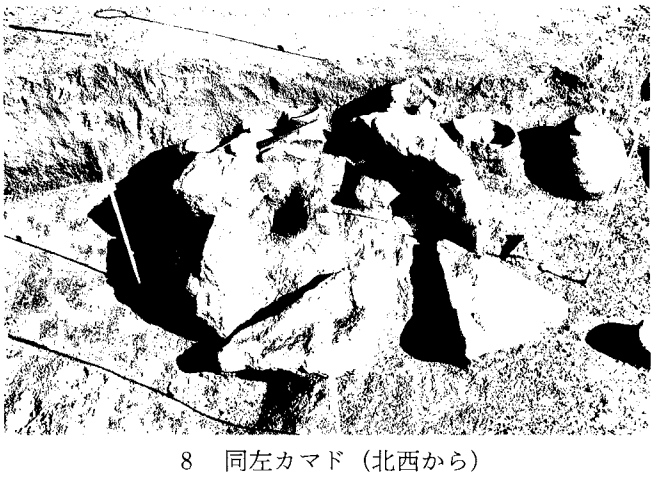
4　同左炉

5　9号住居跡全景（南西から）

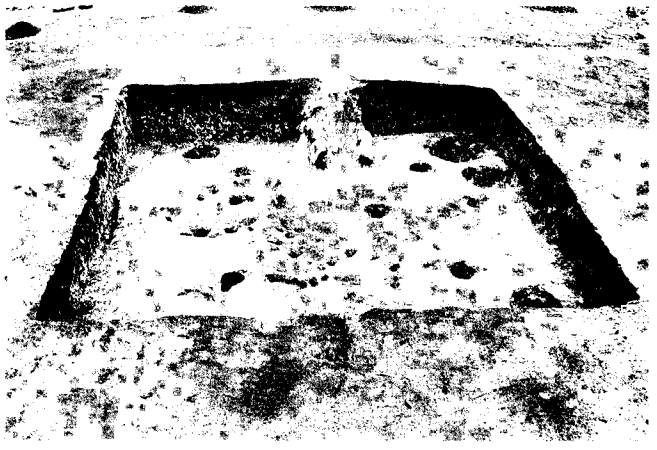
6　同左カマド（南西から）



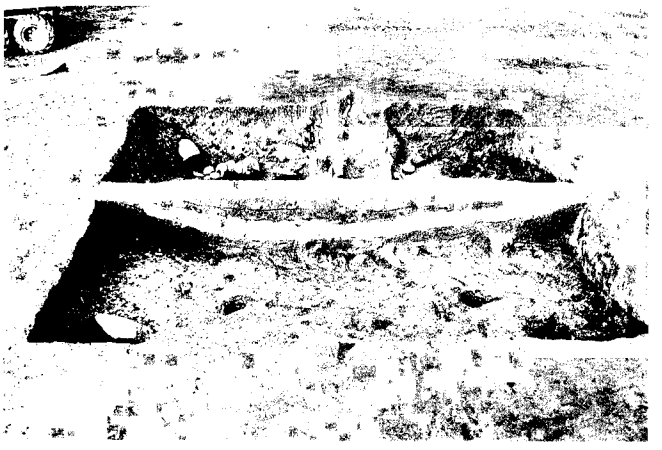
7　10号住居跡全景（北西から）



8　同左カマド（北西から）

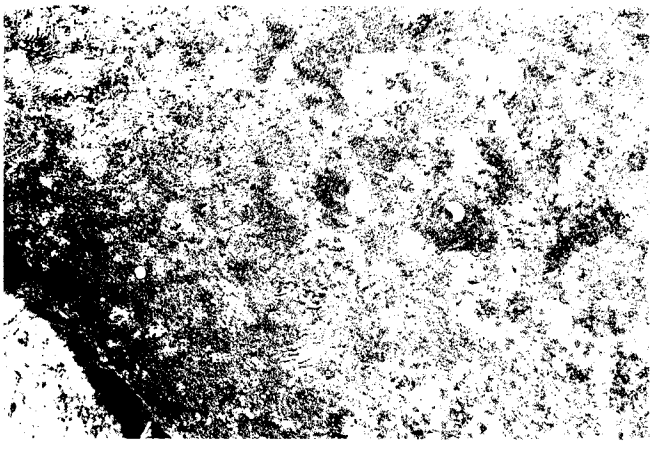


1　11号住居跡全景（南西から）

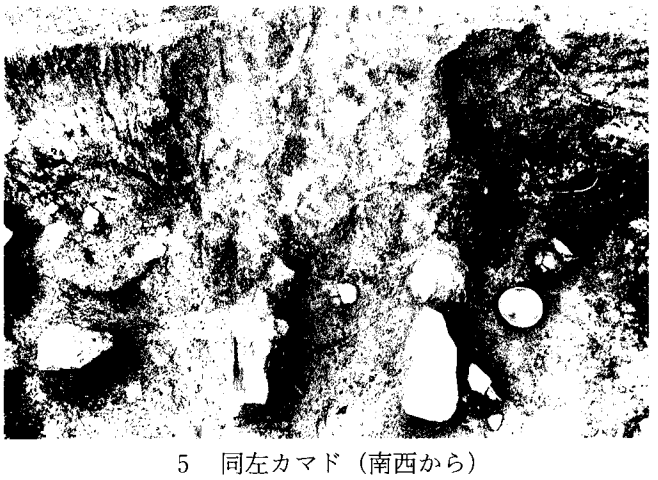


2　同左埋土断面（南西から）

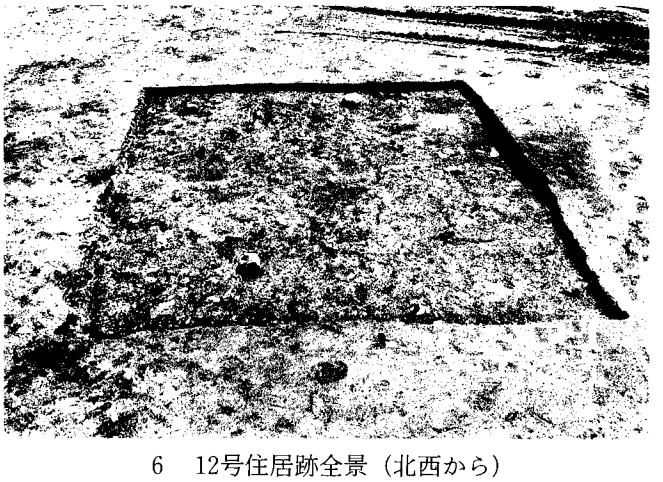
3　同上遺物出土状態（北東から）



4　同左石製模造品出土状態（南から）



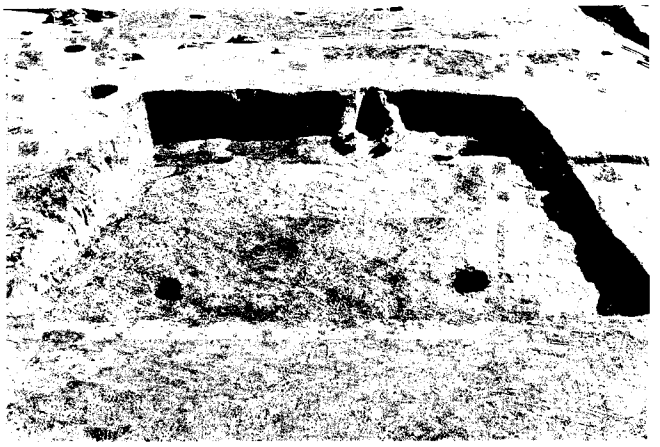
5　同左カマド（南西から）



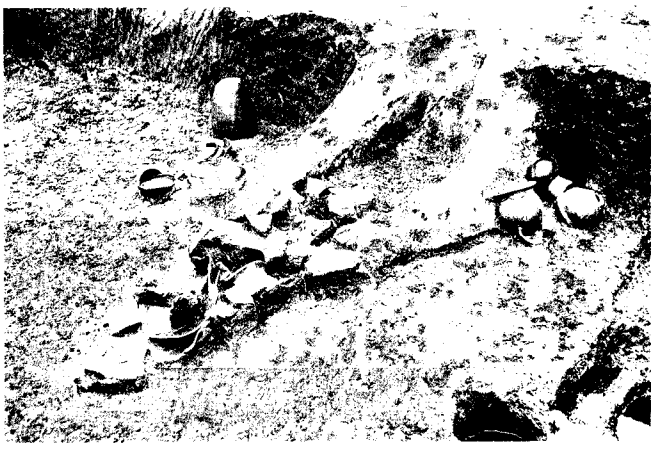
6　12号住居跡全景（北西から）

7　12号住居跡埋土断面（南西から）

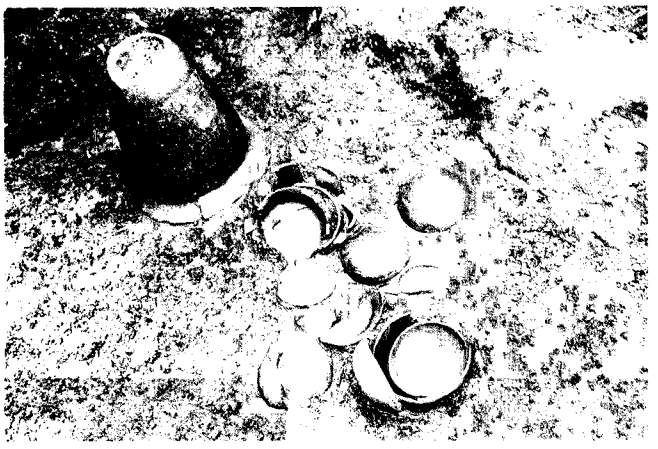
8　同左遺物出土状態（西から）



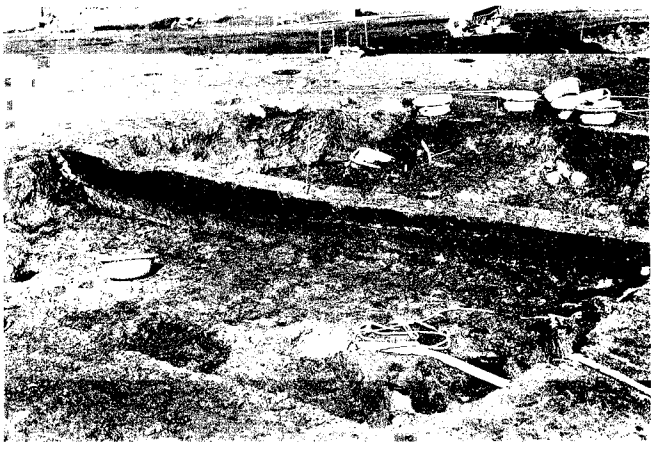
1　13号住居跡全景（西から）



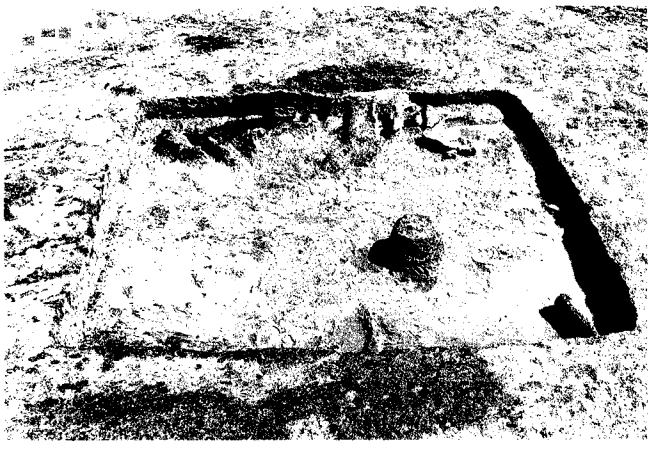
2　同左カマド及び周辺遺物出土状態（南西から）



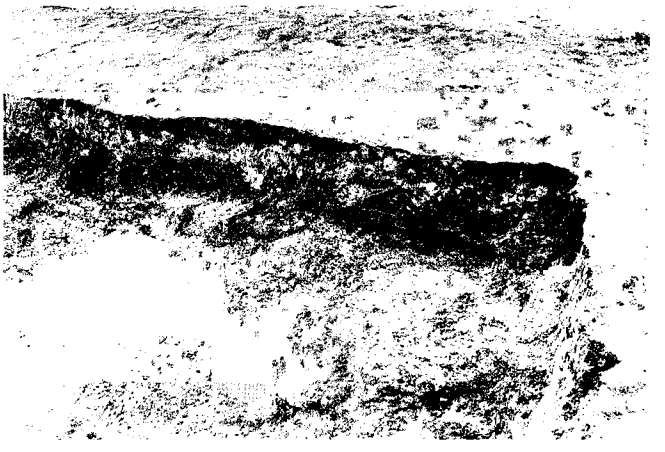
3　同上遺物出土状態（北西から）



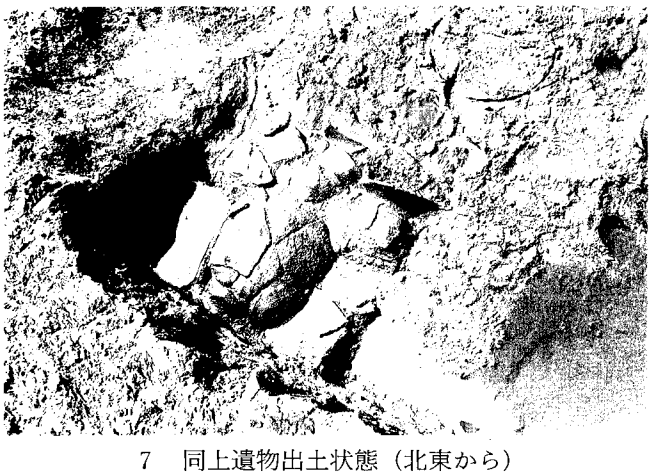
4　同左埋土断面（南西から）



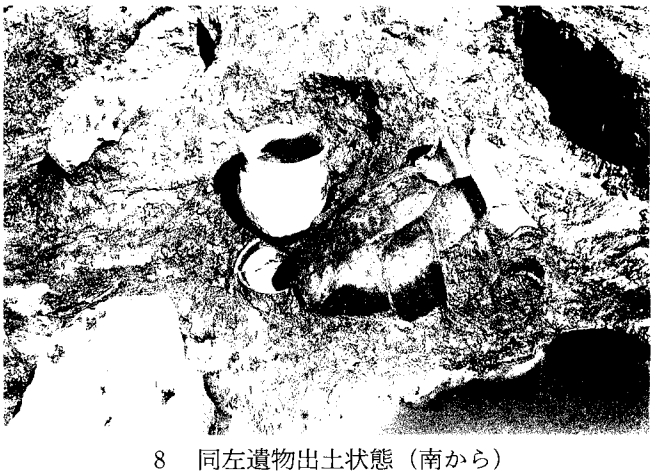
5　14号住居跡全景（西から）



6　同上炭化材・焼土出土状態（東から）

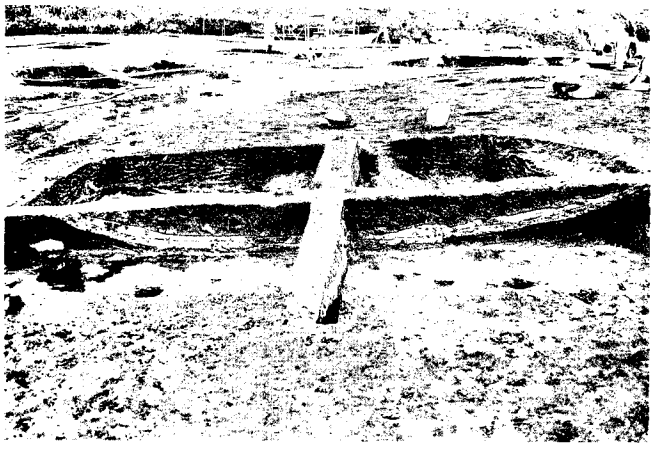


7　同上遺物出土状態（北東から）



8　同左遺物出土状態（南から）

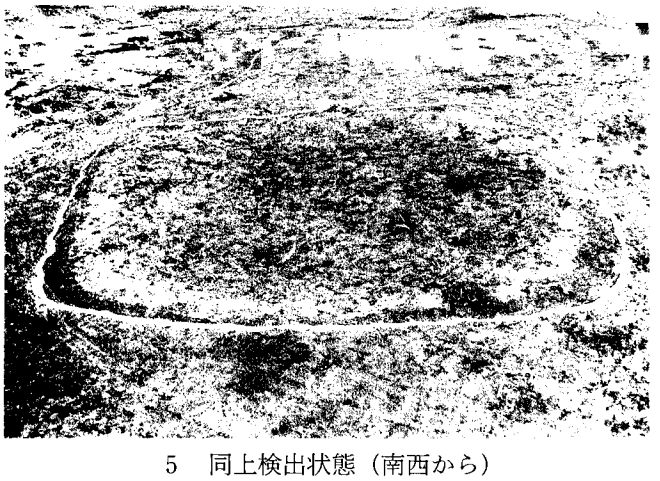
1　15号住居跡全景（南西から）



2　同左埋土断面（南西から）

3　同上カマド（南西から）

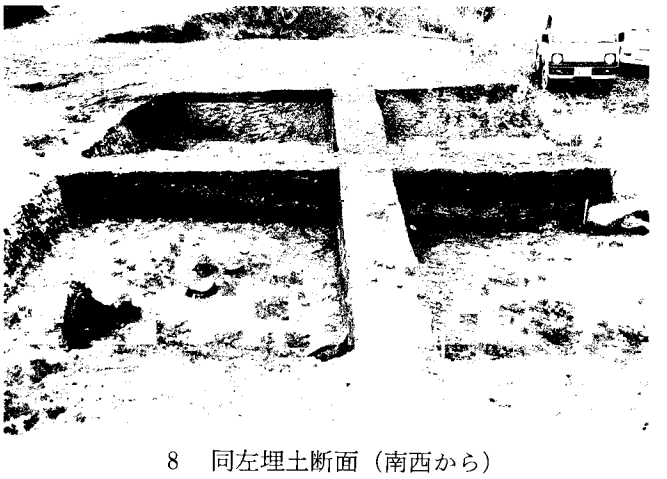
4　同左遺物出土状態（北西から）



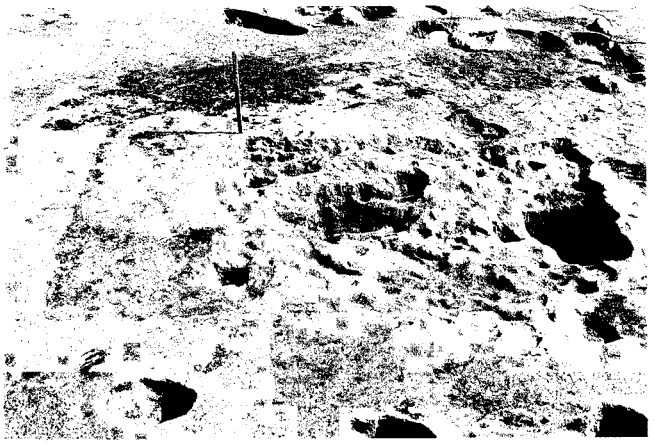
5　同上検出状態（南西から）

6　16号住居跡（北東から）

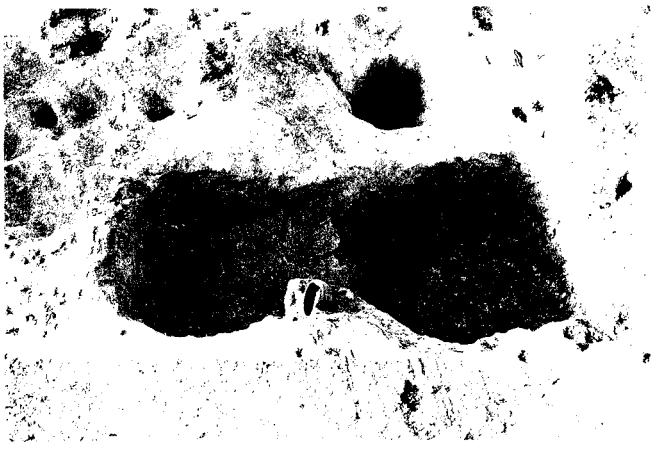
7　17号住居跡（北西から）



8　同左埋土断面（南西から）



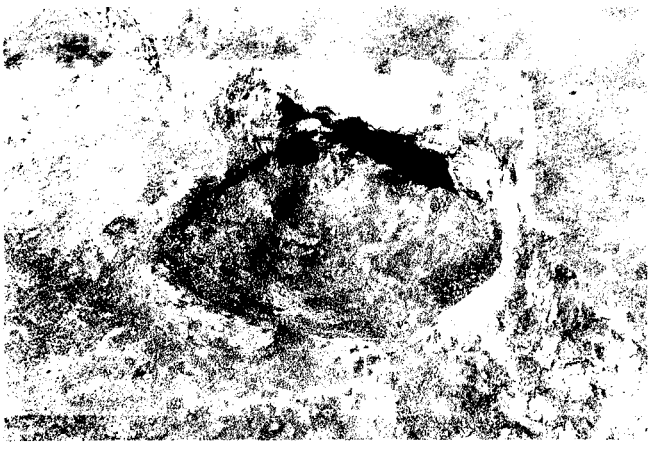
1　20号住居跡全景（西から）



2　同左貯蔵穴（南から）

3　22号住居跡全景（西から）

4　同左カマド（西から）



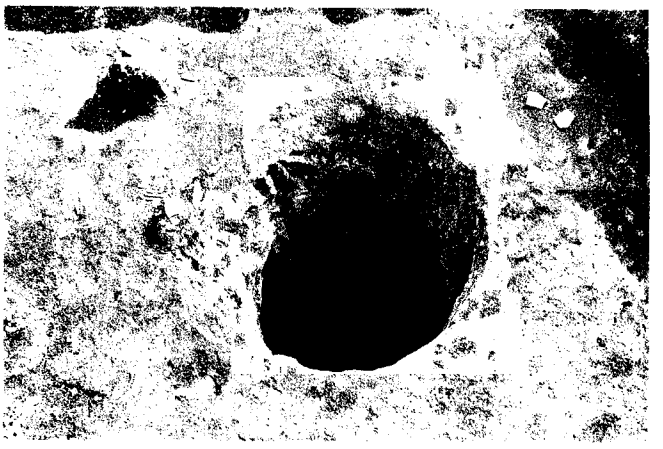
5　同上貯蔵穴（東から）

6　24・25号住居跡全景（西から）

7　24号住居跡遺物出土状態（西から）

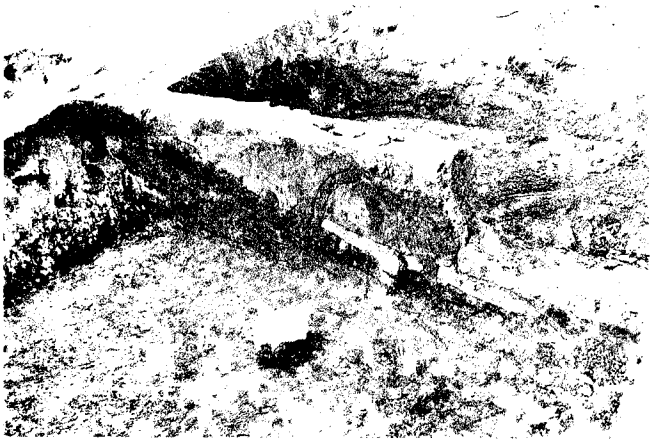
8　同左カマド（西から）

1　28号住居跡全景（南西から）



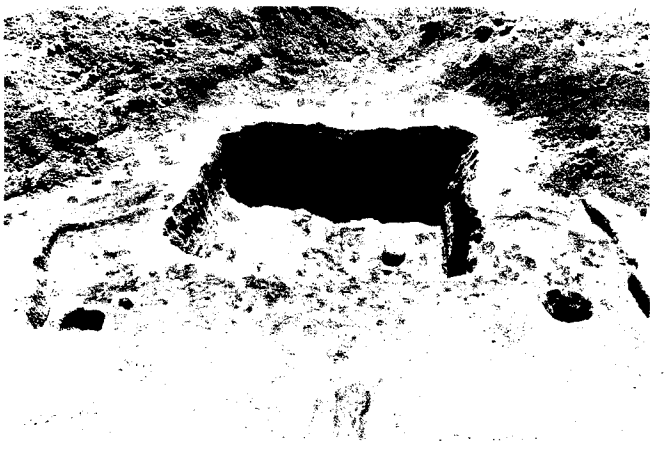
2　同左貯蔵穴

3　34号住居跡（北東から）

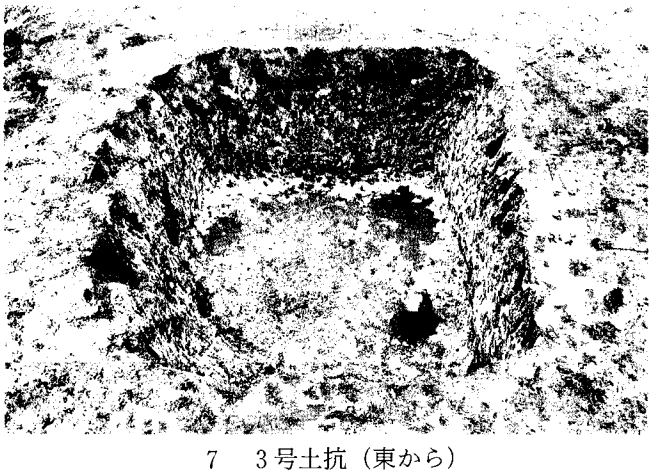


4　同左埋土断面（南西から）

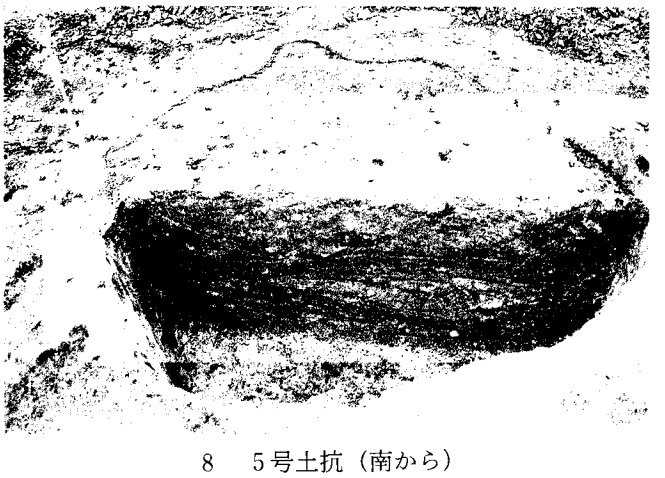
5　同上遺物出土状態（北西から）



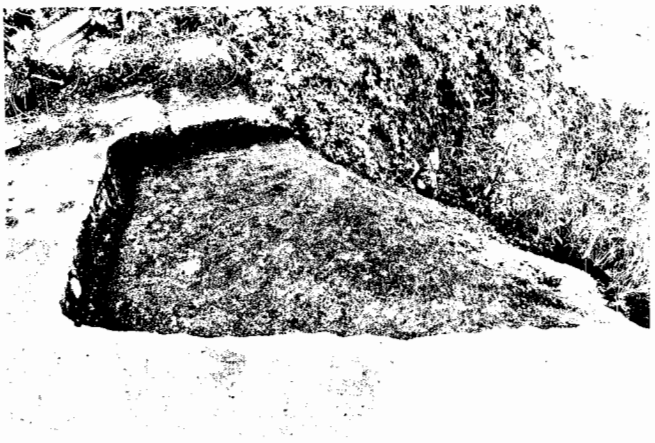
6　32号住居跡（北西から）



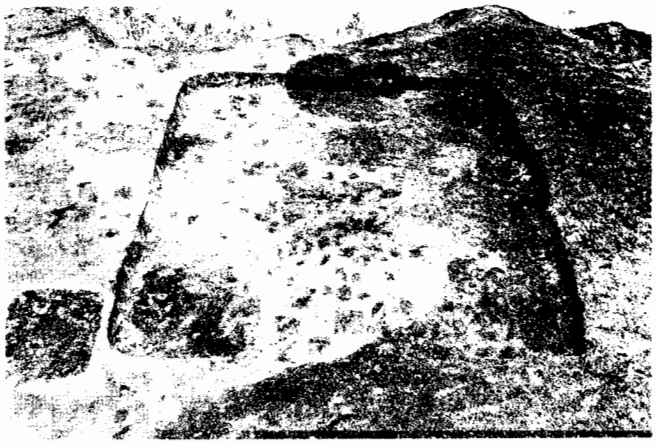
7　３号土抗（東から）



8　５号土抗（南から）



1　4号住居跡（西から）

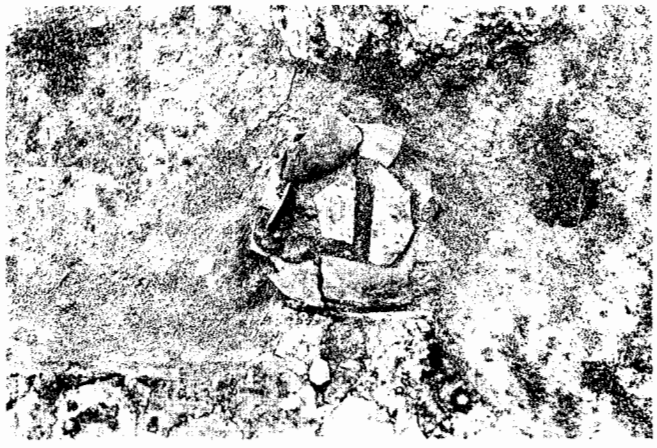


2　5号住居跡全景（西から）

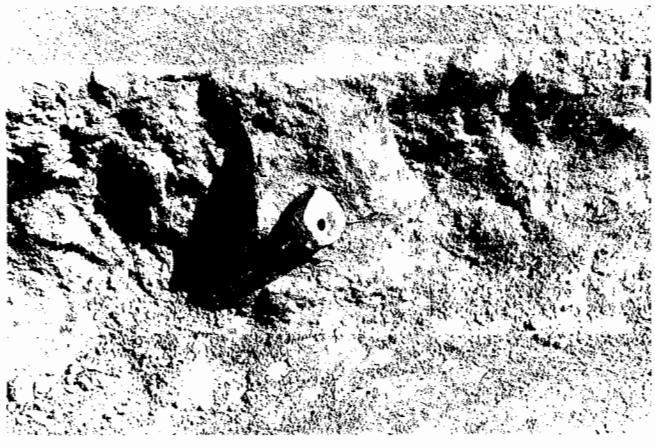
3　8号住居跡全景（南西から）

4　18号住居跡全景（西から）

5　21号住居跡全景（西から）

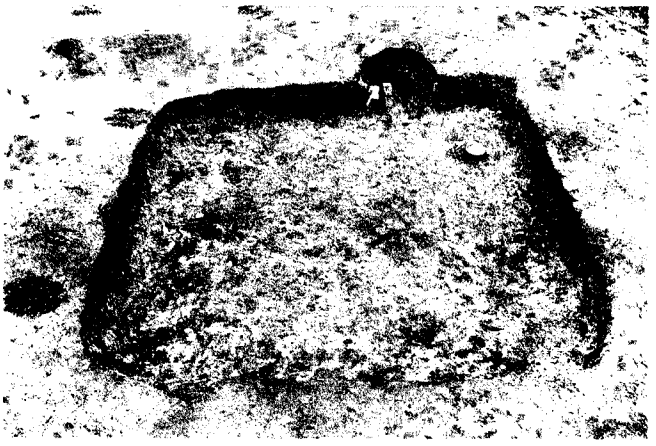


6　同上遺物出土状態（南から）



7　同上遺物出土状態（西から）

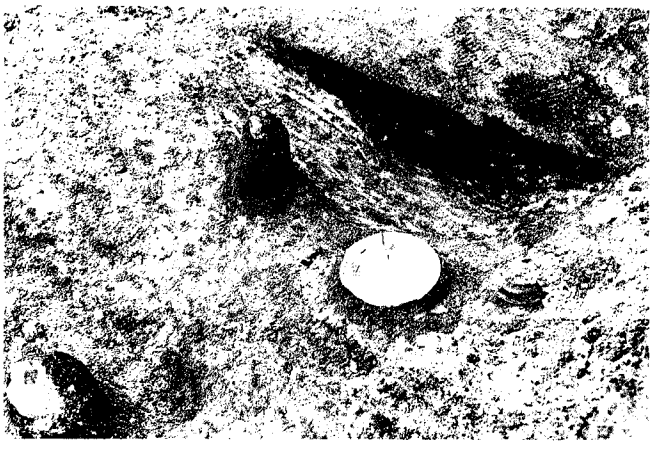
8　23号住居跡全景（西から）



1　26号住居跡全景（西から）

2　同左カマド（南西から）

3　27号住居跡全景（西から）

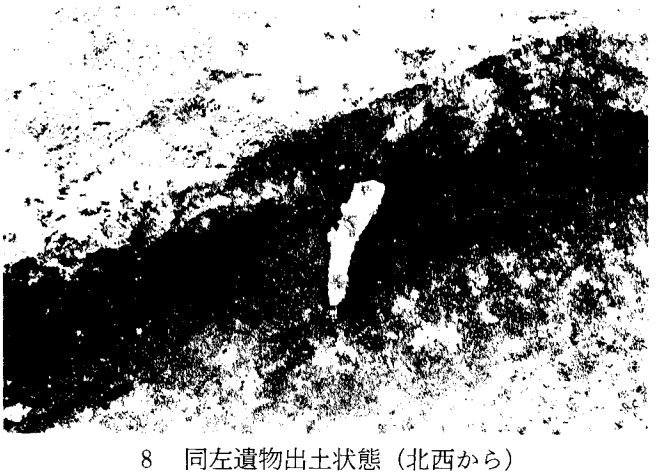


4　同左遺物出土状態（南西から）

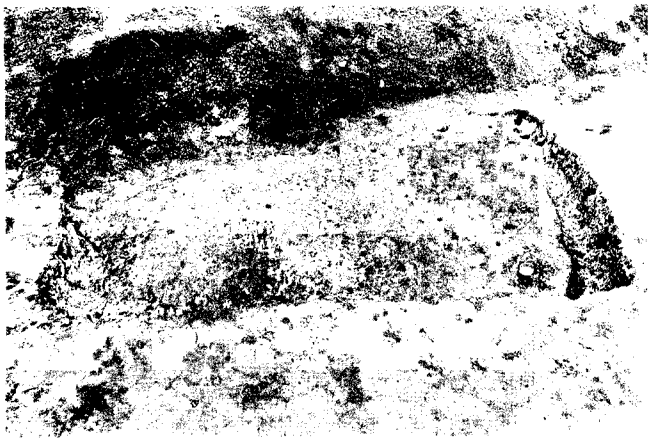
5　29号住居跡全景（西から）

6　同左カマド（西から）

7　30号住居跡全景（西から）

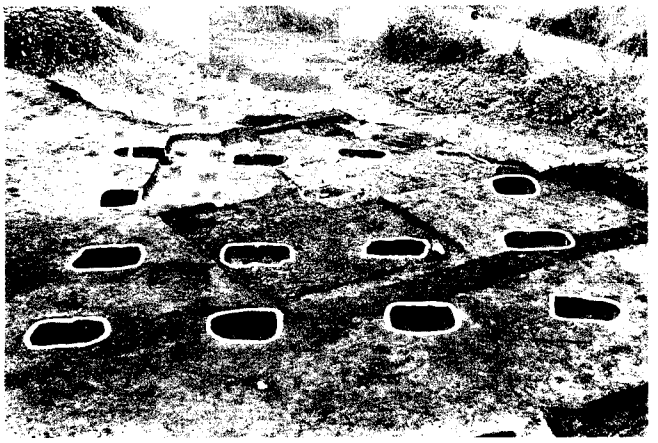


8　同左遺物出土状態（北西から）

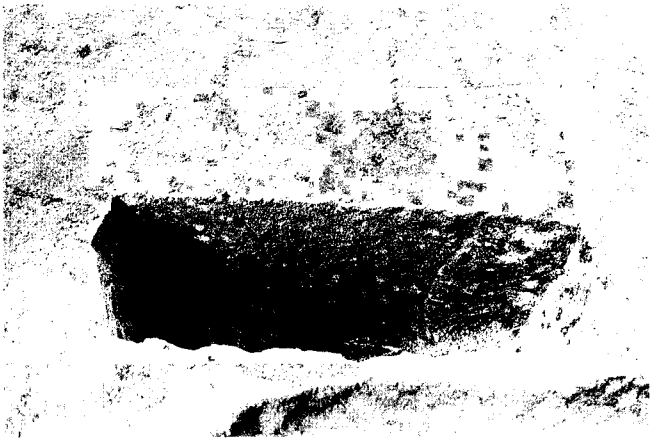


1　31号住居跡（北西から）

2　35号住居跡（西から）



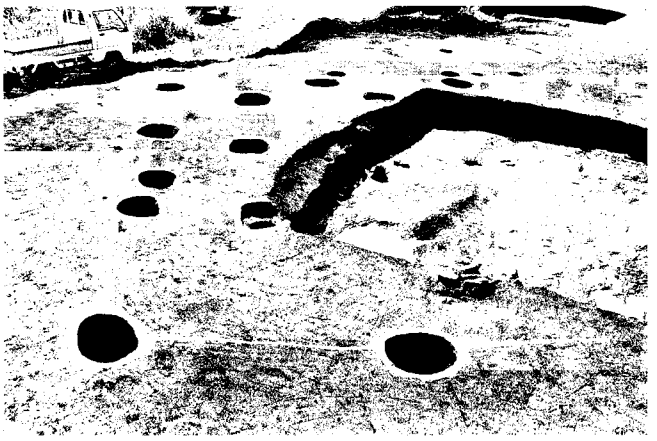
3　１号掘立柱建物跡全景（西から）



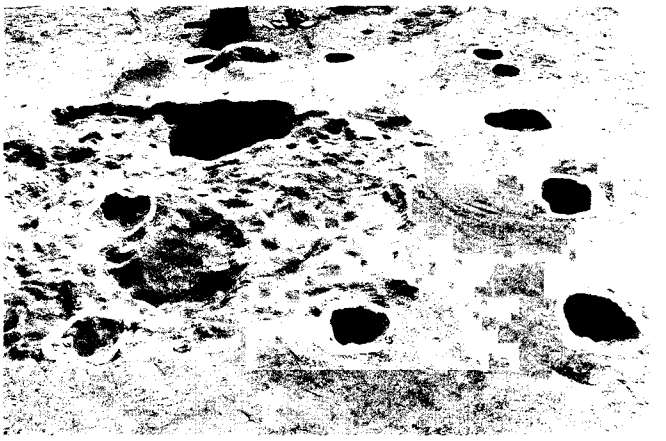
4　同左柱穴埋土断面（東から）

5　２Ａ・Ｂ号掘立柱建物跡全景（東から）

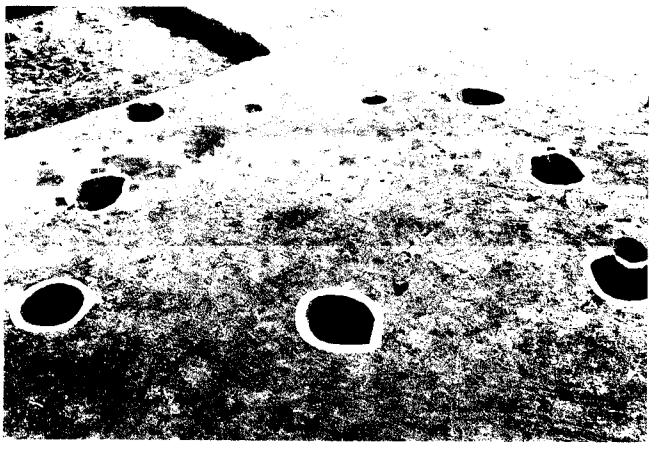
6　３号掘立柱建物跡全景（北から）



7　４Ａ・Ｂ号掘立柱建物跡全景（北から）

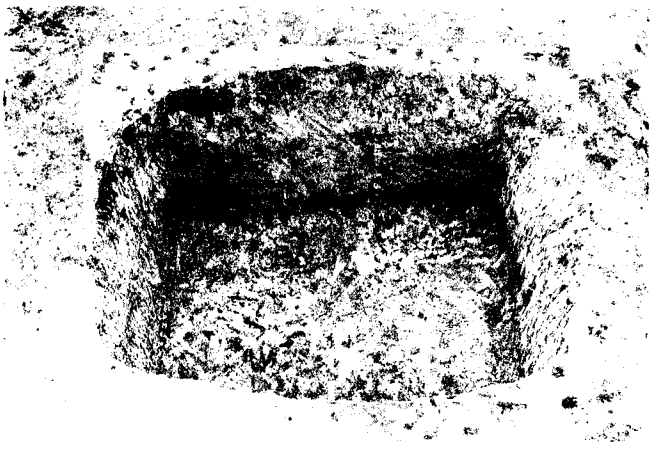


8　７号掘立柱建物跡全景（北から）



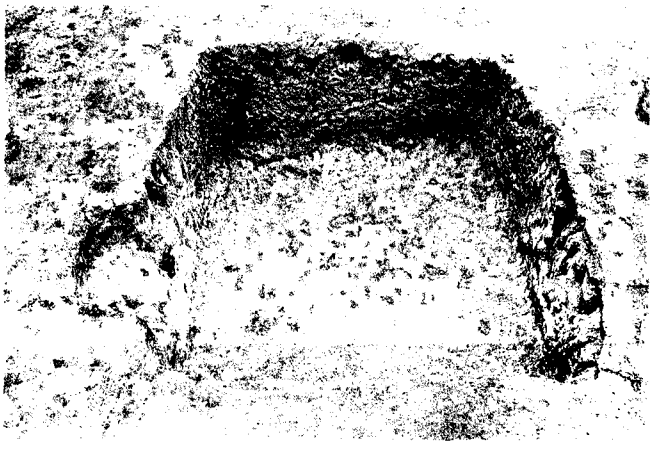
1　５号掘立柱建物跡全景（北西から）

2　６号掘立柱建物跡全景（北から）

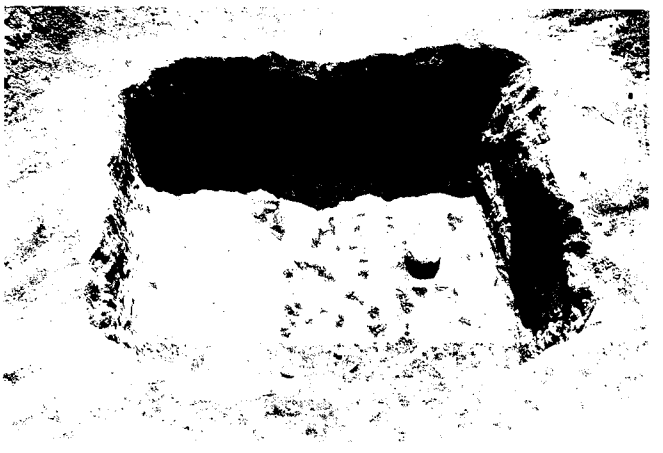


3　１号土抗（北西から）

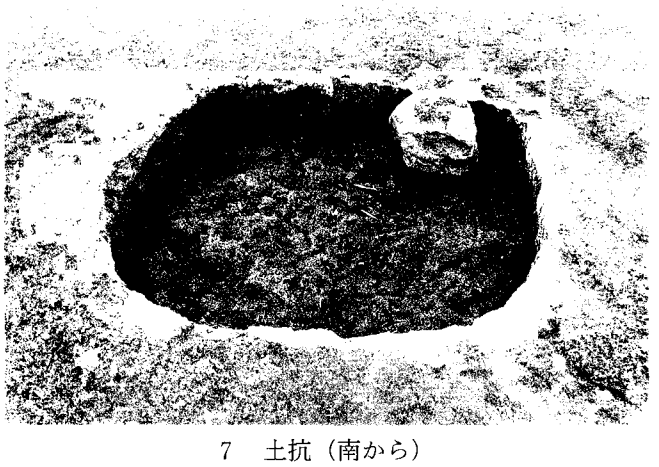
4　同左埋土断面（南から）



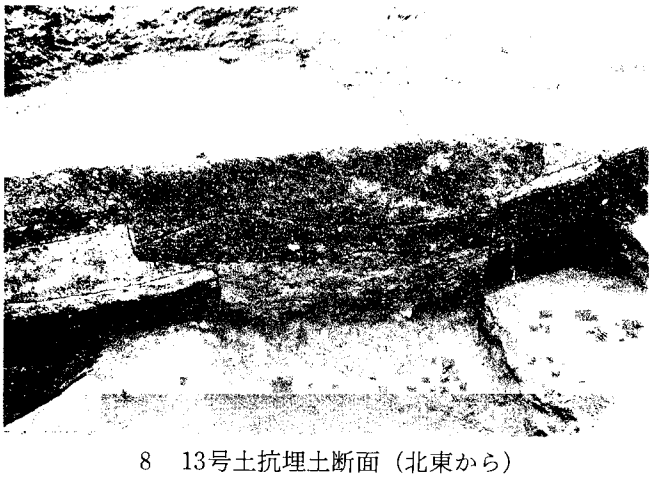
5　２号土抗（北東から）



6　４号土抗（北西から）



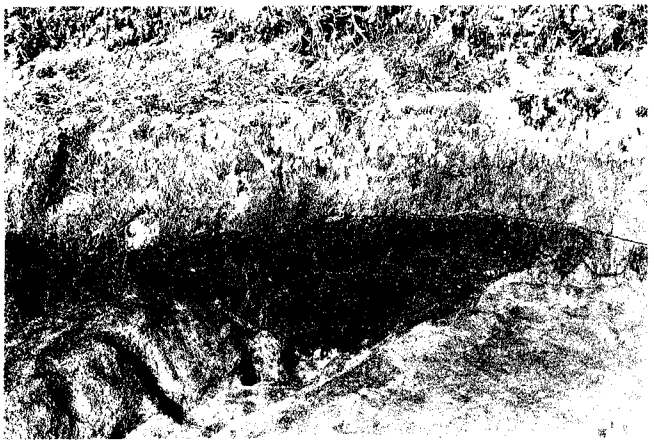
7　土抗（南から）



8　13号土抗埋土断面（北東から）

1　6号土抗（南東から）

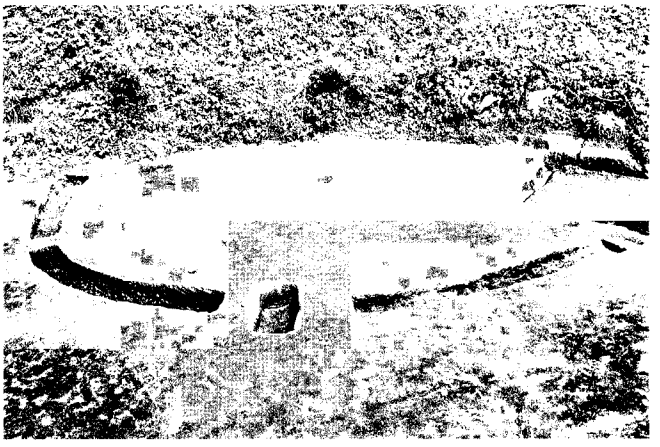
2　1号ピット（東から）



3　1号溝埋土断面（南西から）

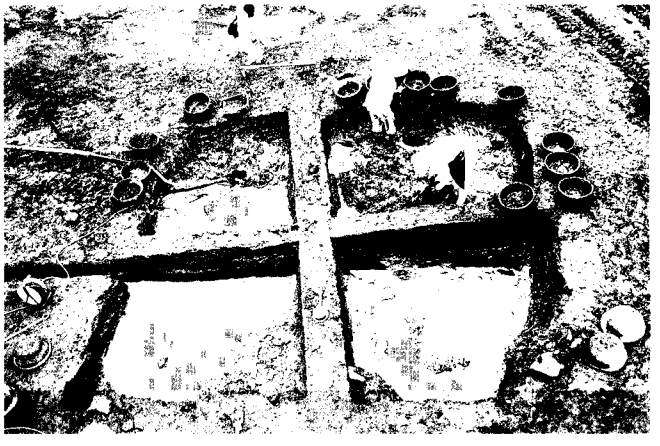
4　2号溝東半部（北西から）

5　1・2号溝（西から）



6　4号溝（南西から）

7　3号溝（南西から）



8　作業風景（13号住居跡）（東から）

Ｊ１住

Ｊ１住-3

Ｊ１住

Ｊ１住-1

Ｊ１住-2

Ｊ１住-1

Ｊ２住

Ｊ２住-1

Ｊ２住-8

遺構外-12

遺構外

縄文時代出土遺物

2

3

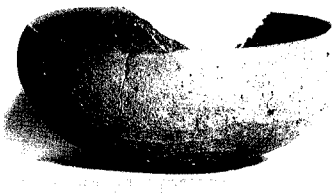
1

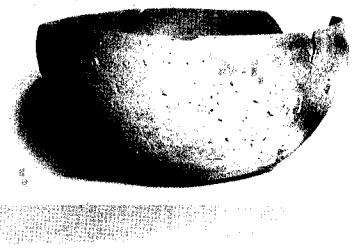
4

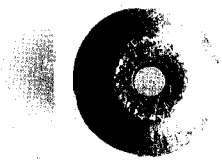
9

8

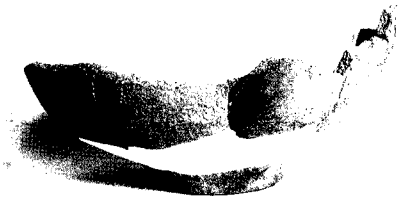
5


6


7

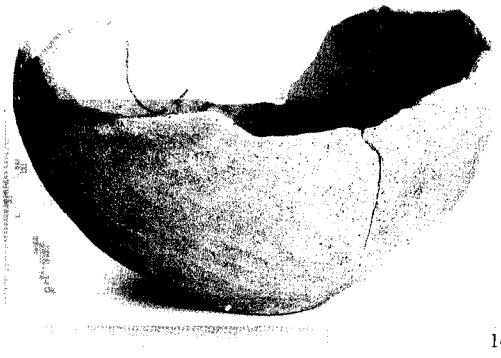


14

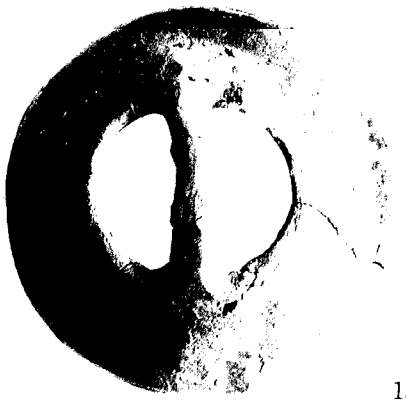

11

1 号住居跡出土遺物

10


14

2 号住居跡出土遺物（１）


13

12

15

1

2

5

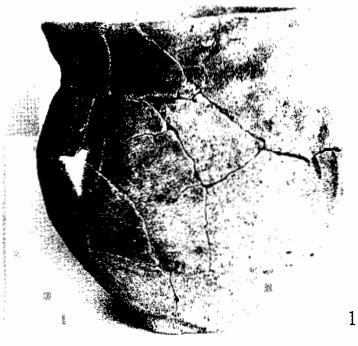
4

3

6

13

12


11

8

7

9

18

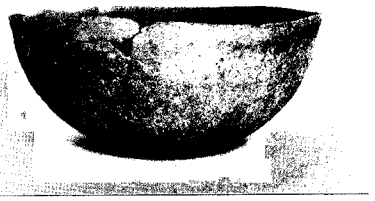
16

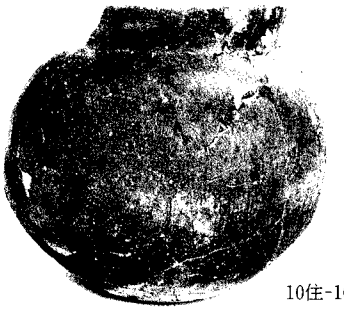
17

2号住居跡出土遺物(２)

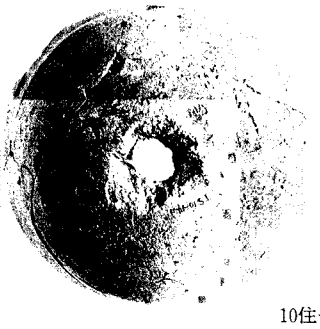
10住-4

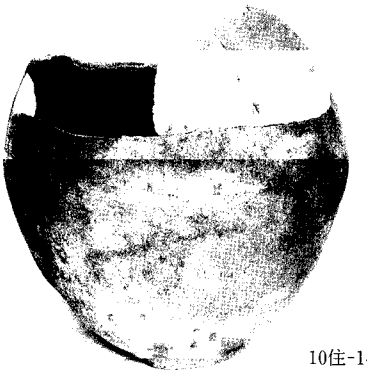
10住-2



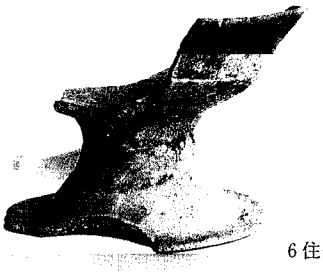

10住-10

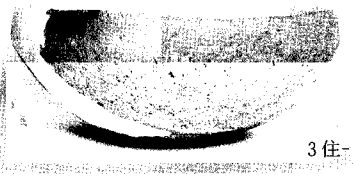
10住-8


10住-3


10住-14

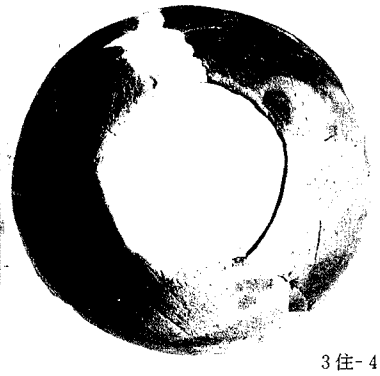
9住-11


6住-2

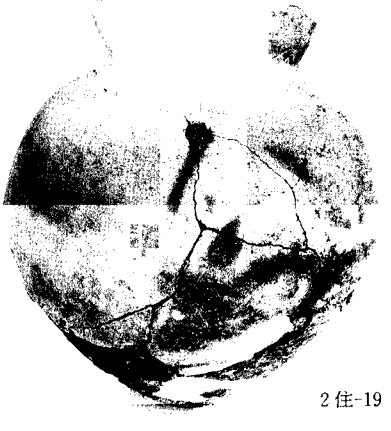

3住-2

20住-1

3住-1


3住-4

11住-22


2住-19

2・3・6・9・10・11・20号住居跡出土遺物

3

4

7

2

5

8

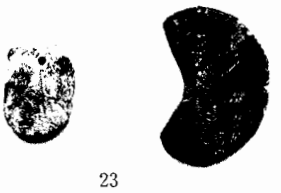
1

6

9

11

10


23 24

15

14

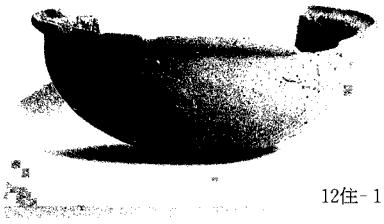
16

18

19

20

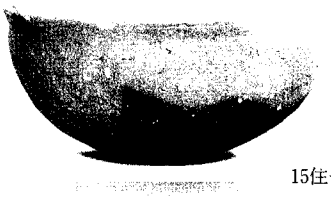
11号住居跡出土遺物

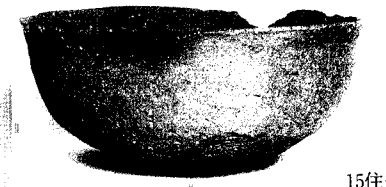

12住-1

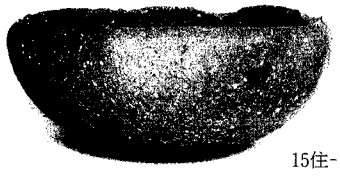
12住-2

12住-4

15住-6


15住-3

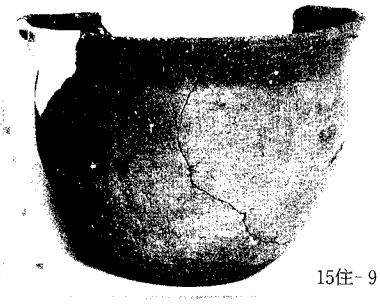

15住-4


15住-5

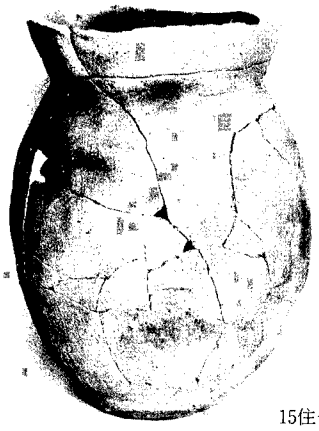
15住-8

15住-2

15住-1


15住-9

15住-7


15住-11

15住-10

15住-15

12・15号住居跡出土遺物

3

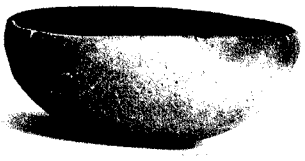
1

6

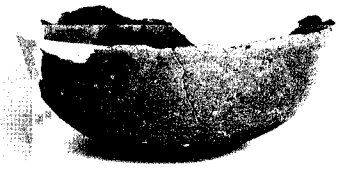
5

7

11


8

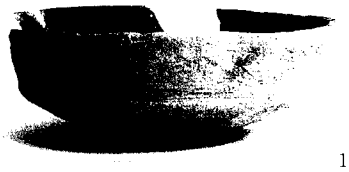
4


12

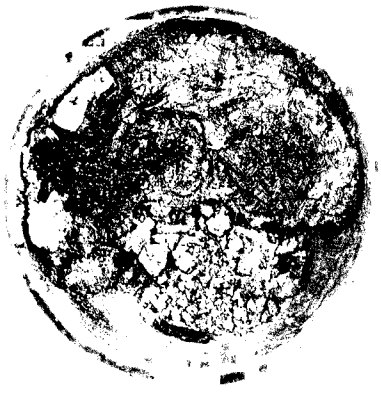
10

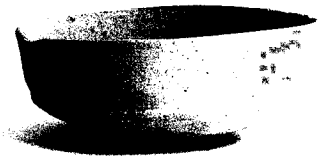
2

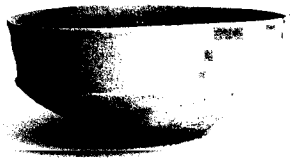
13


15

19




17

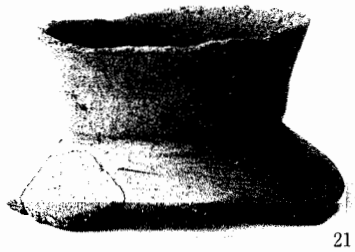

16

20

9

18

13号住居跡出土遺物（１）


21

22

25

24

23

28

29

26

27

13号住居跡出土遺物(２)

3

1

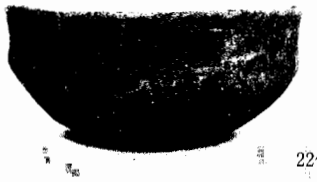
2

4

6

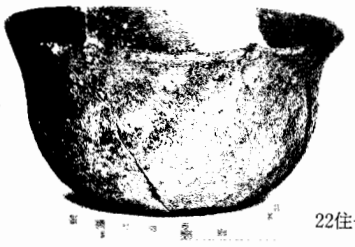
5

14号住居跡出土遺物

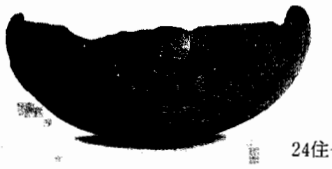

22住-1

22住-3

28住-4


22住-2

34住-1


24住-2

24住-4

34住-4

24住-1

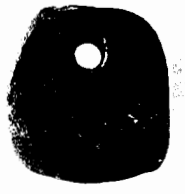
古墳時代住居跡出土遺物

4住-1

8住-2

8住-1

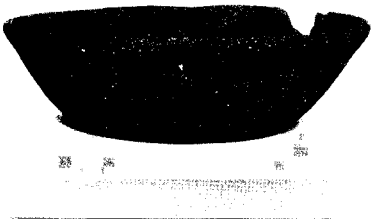
18住-1


21住-10

8住-3

奈良・平安時代住居跡出土遺物（１）

ＰＬ24　白川遺跡



27住-5

27住-2

26住-1

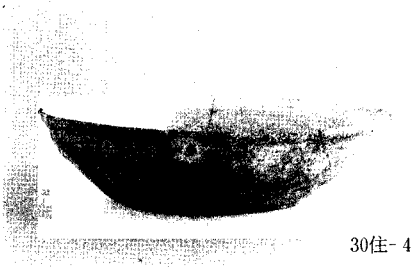
27住-7

27住-9

27住-6

29住-5

29住-6



30住-4

31住-2

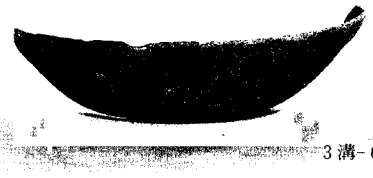
30住-9

30住-6

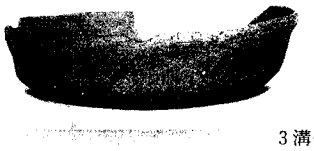
31住-3

奈良・平安時代住居跡出土遺物（２）

1Ｐ-1

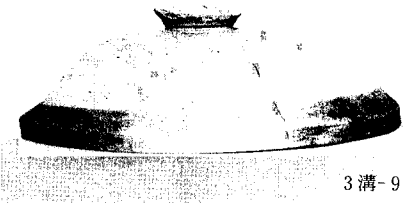


3溝-6



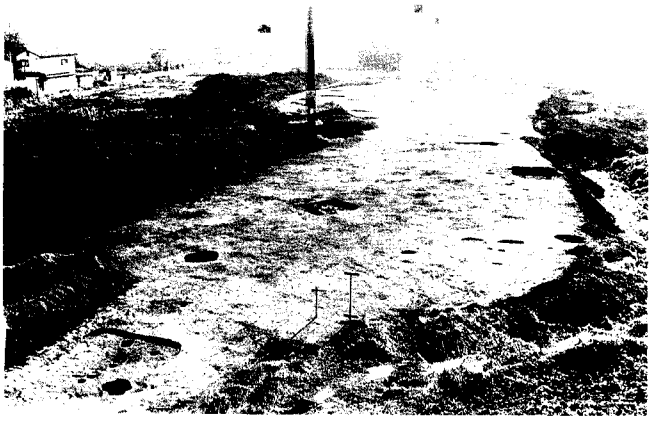
3溝-3

5土-1



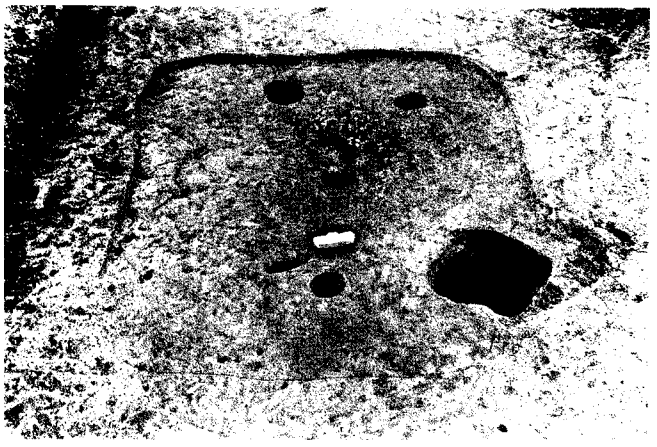
3溝-9

その他の遺構出土遺物

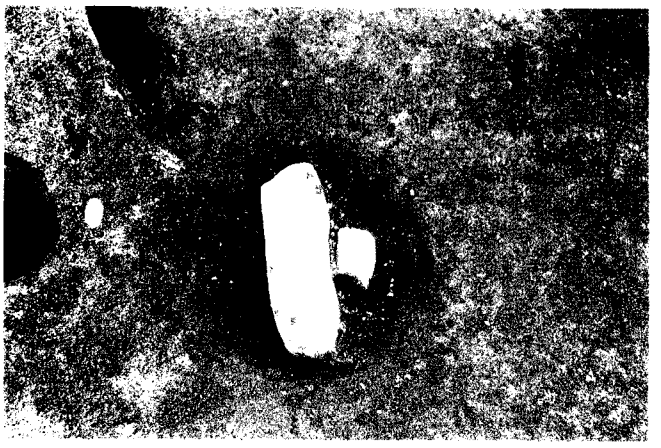


1　由森遺跡全景（北東から）

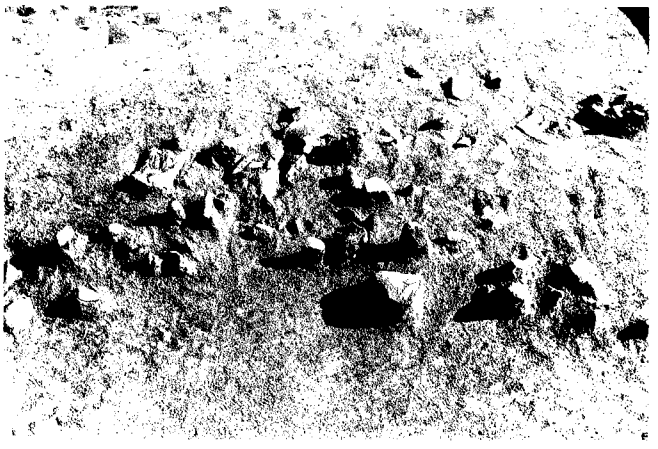
2　由森遺跡南端部（西から）



3　Ｊ１号住居跡全景（北東から）

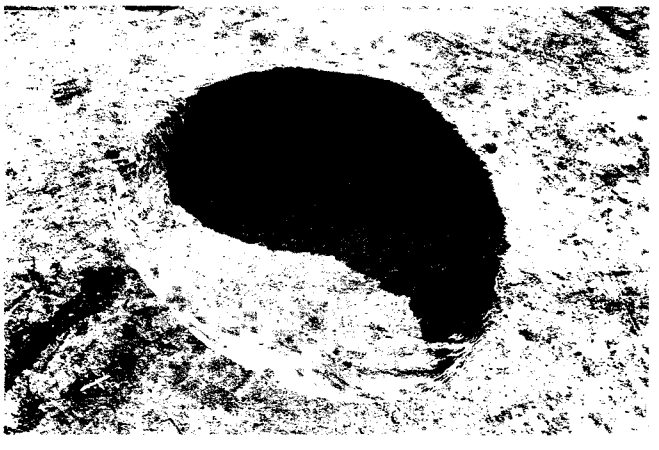


4　同左炉跡（北西から）

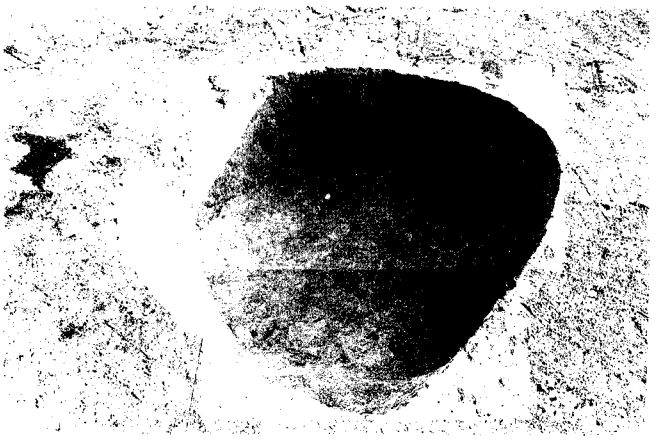


5　同上遺物出土状態（北西から）

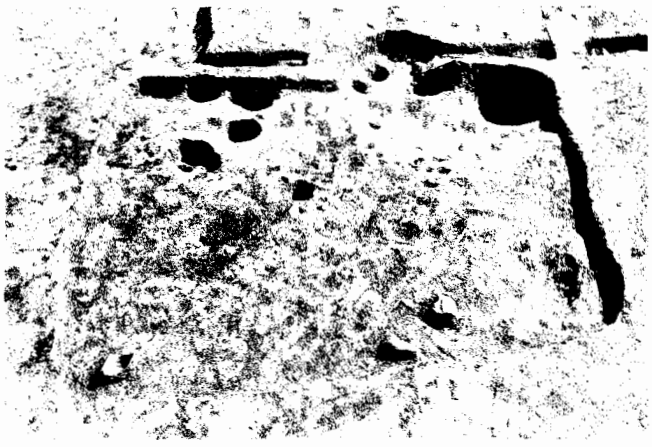
6　Ｊ２号住居跡全景（南西から）



7　Ｊ２号土抗



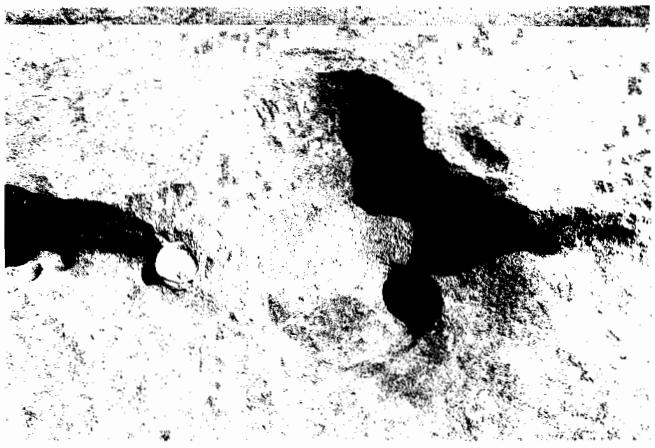
8　Ｊ１号土抗



1　１号住居跡全景（西から）

2　同左貯蔵穴（西から）

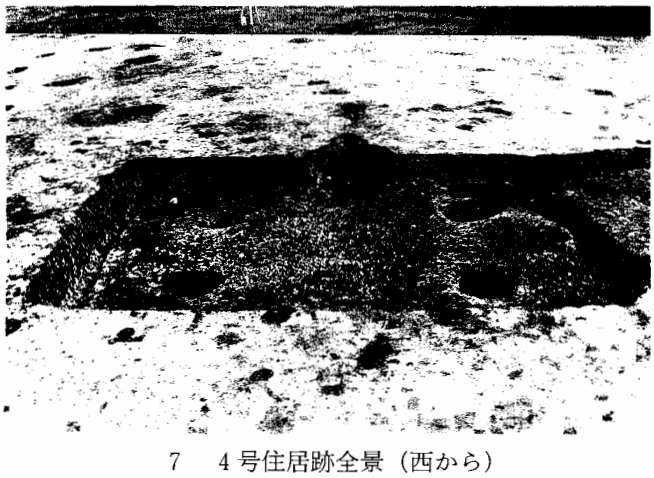
3　２号住居跡全景（西から）



4　同左カマド（西から）

5　３号住居跡全景（西から）

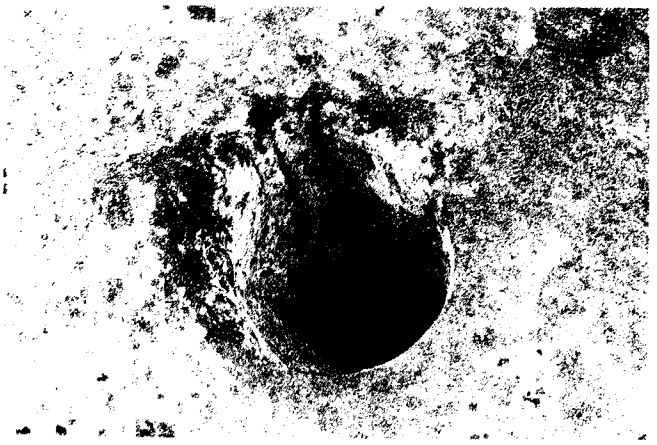
6　同左カマド（西から）



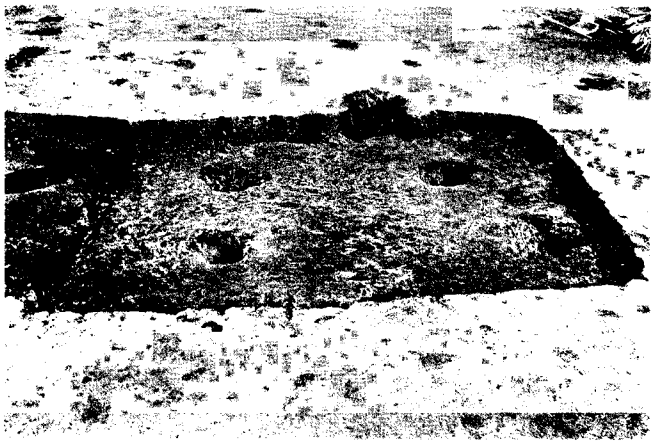
7　４号住居跡全景（西から）

8　同左カマド（西から）

1　4号住居跡遺物出土状態（西から）

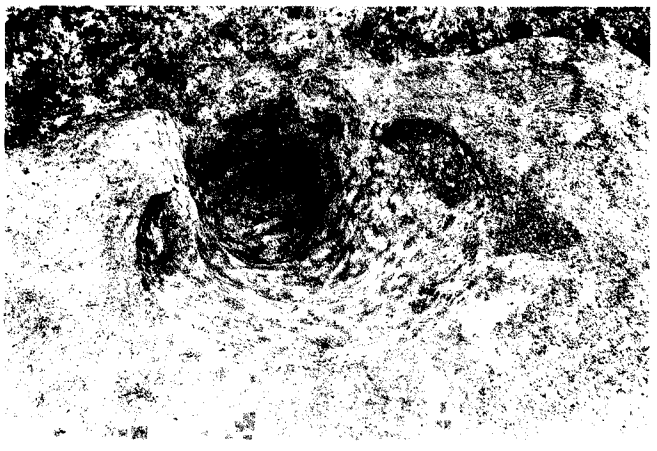


2　同左柱穴（北から）



3　5号住居跡全景（西から）

4　同左遺物出土状態（東から）



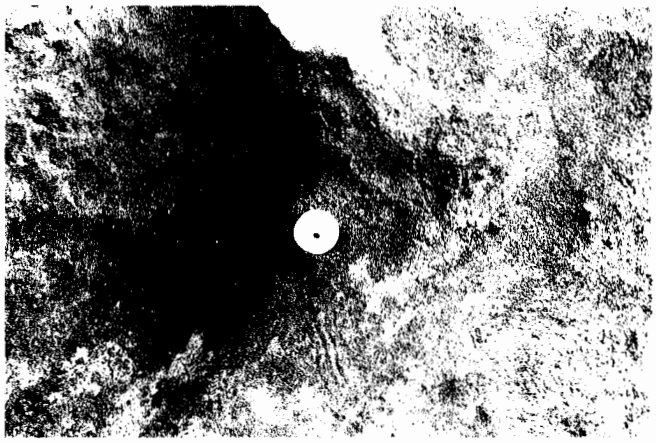
5　同上柱穴（北から）

6　6号住居跡全景（西から）

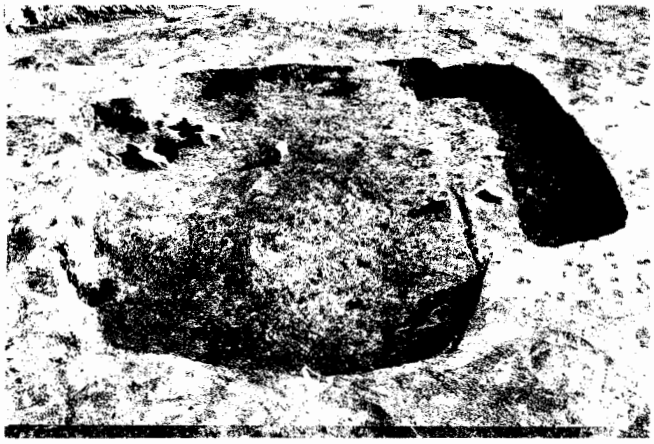
7　7号住居跡全景（西から）

8　同左カマド袖補強材（北から）

1　8号住居跡全景（西から）

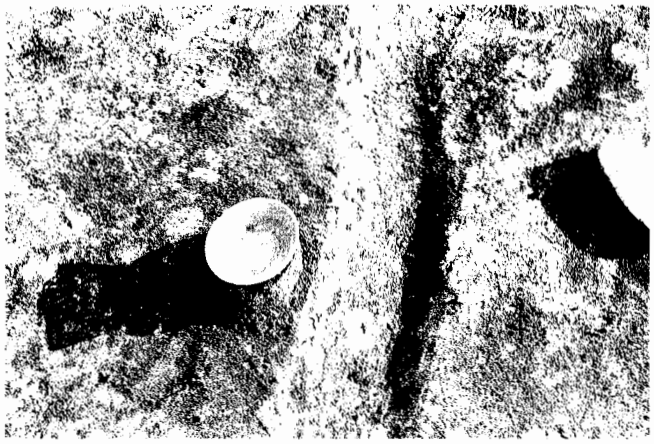


2　同左遺物出土状態（西から）



3　9Ａ(Ｂ)号住居跡全景（北から）

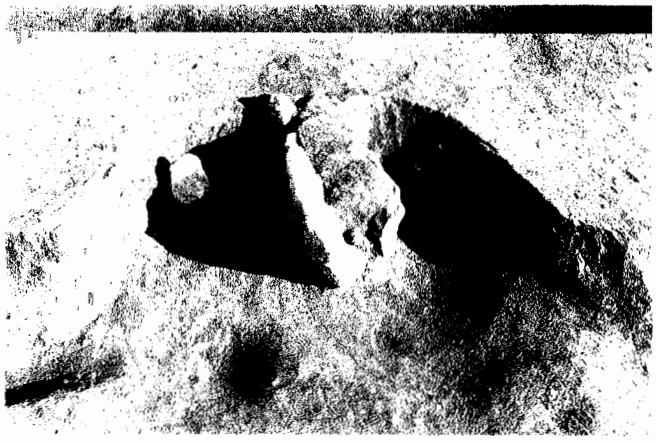
4　同左カマド（西から）



5　9Ａ号住居跡遺物出土状態（北から）

6　9Ｂ(Ａ)号住居跡全景（西から）

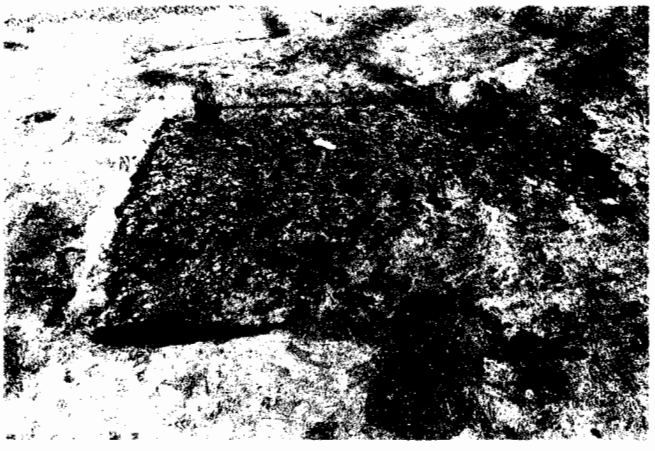
7　10号住居跡全景（西から）



8　同左カマド（西から）

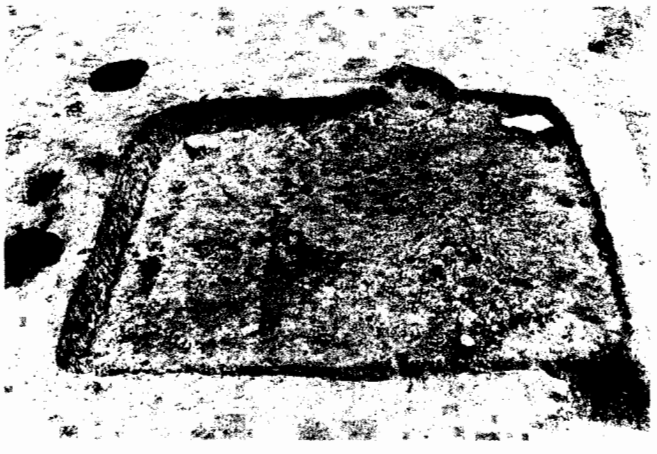
1　11号住居跡全景（西から）

2　同左カマド（西から）



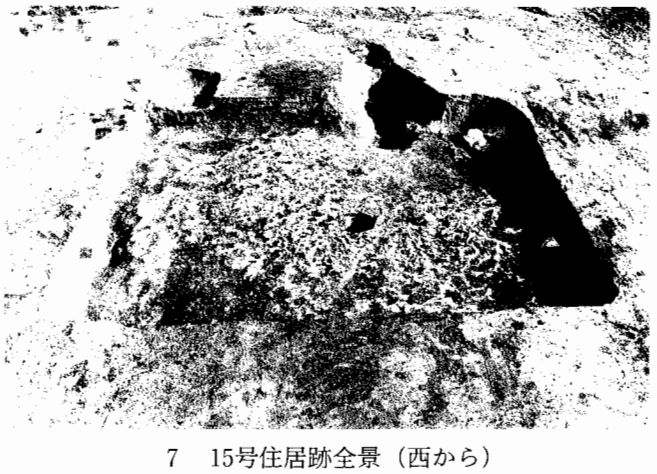
3　12号住居跡全景（西から）

4　13号住居跡（西から）



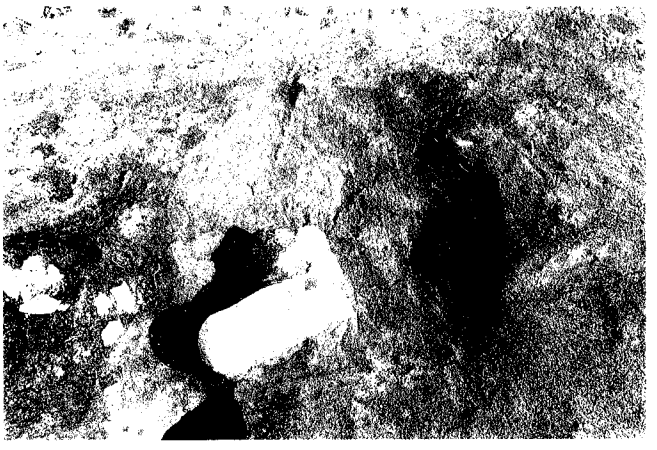
5　14号住居跡全景（西から）

6　同左遺物出土状態（西から）

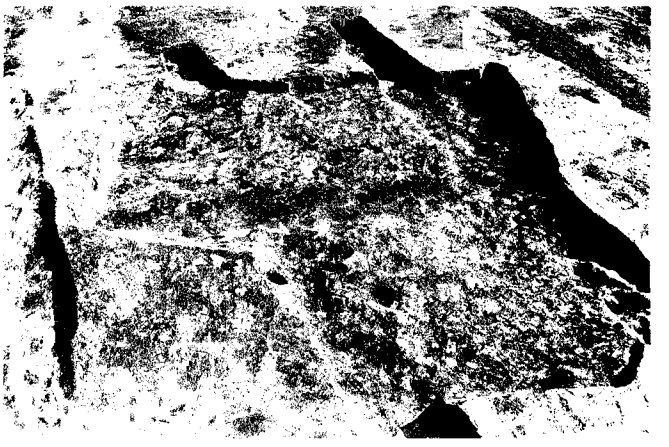


7　15号住居跡全景（西から）

8　16号住居跡全景（西から）



1　16号住居跡カマド（西から）

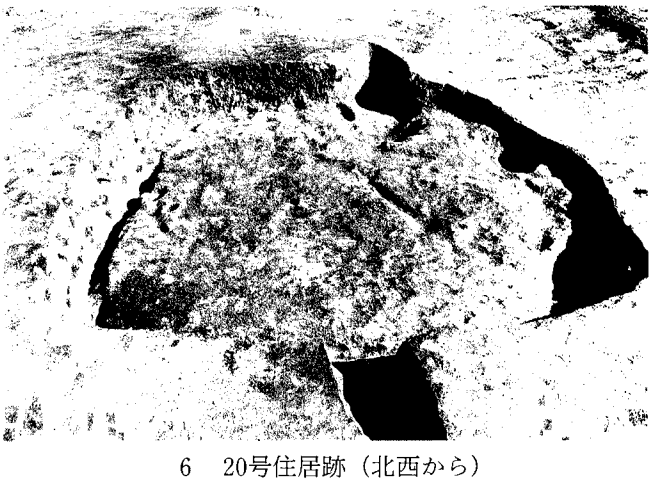


2　17号住居跡全景（北西から）

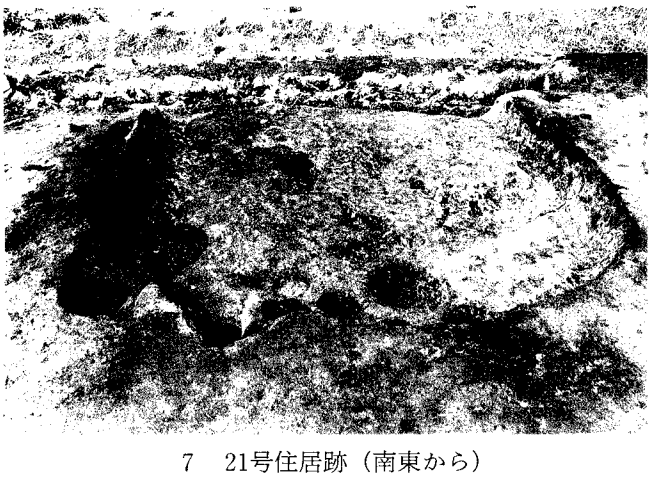
3　18号住居跡全景（北西から）

4　同左ピット（北西から）

5　19号住居跡（北西から）



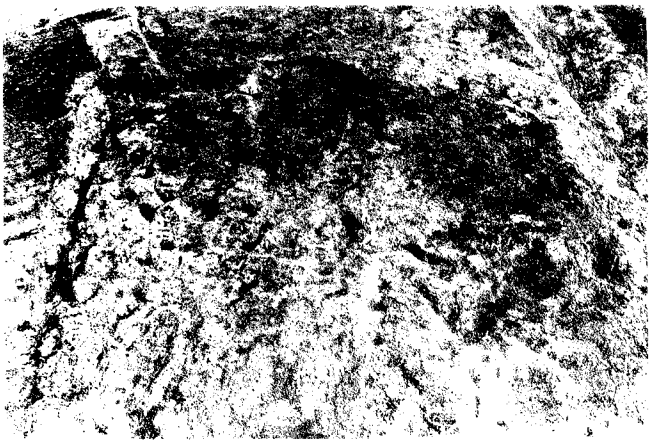
6　20号住居跡（北西から）



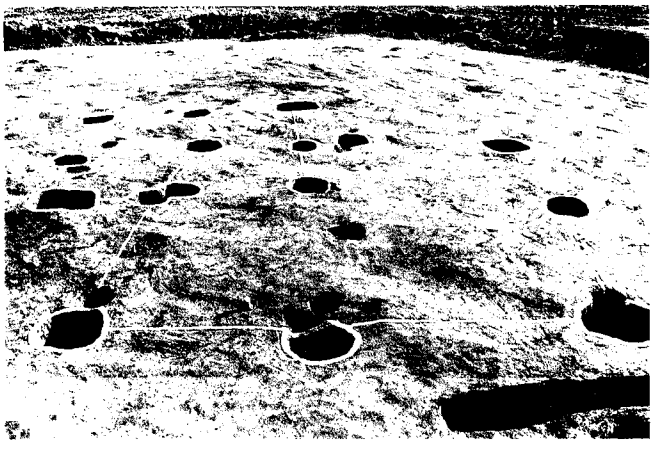
7　21号住居跡（南東から）

8　同左遺物出土状態（西から）

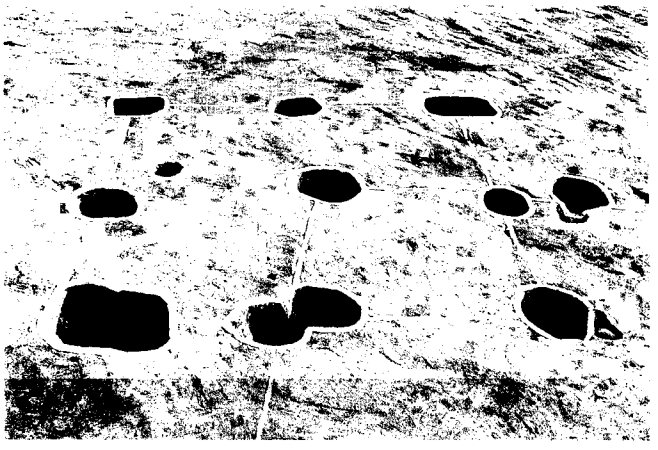
1　21号住居跡遺物出土状態（北から）



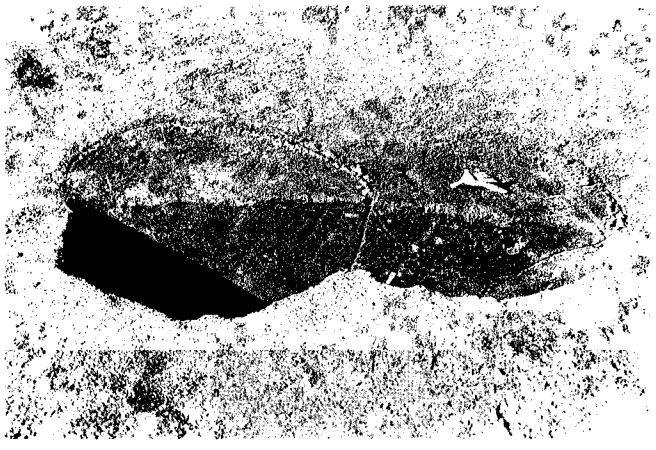
2　22号住居跡（北西から）



3　1・2号掘立柱建物跡（北から）

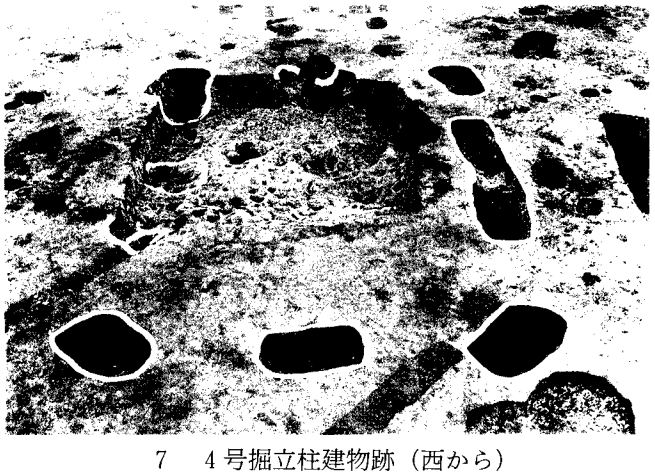


4　2号掘立柱建物跡（北から）

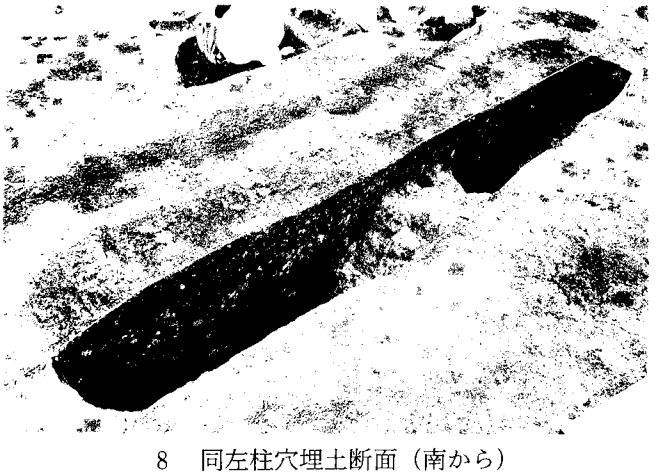


5　同上柱穴重複埋土断面（南から）

6　3号（6号）掘立柱建物跡（西から）



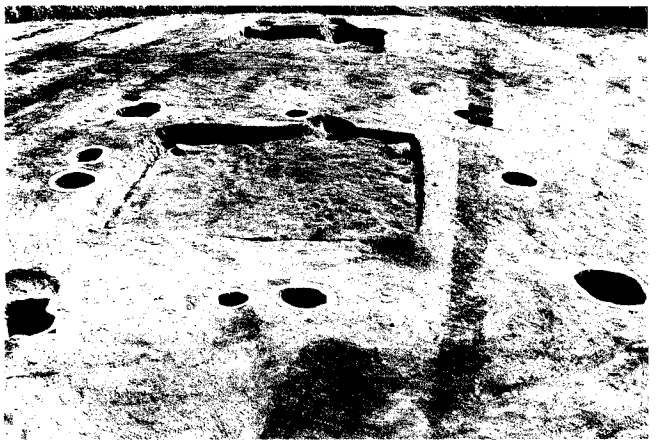
7　4号掘立柱建物跡（西から）



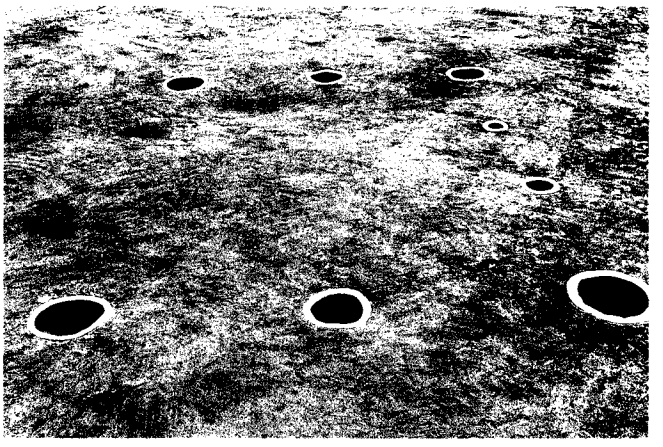
8　同左柱穴埋土断面（南から）

1　５号掘立柱建物跡（西から）

2　６号掘立柱建物跡（北から）



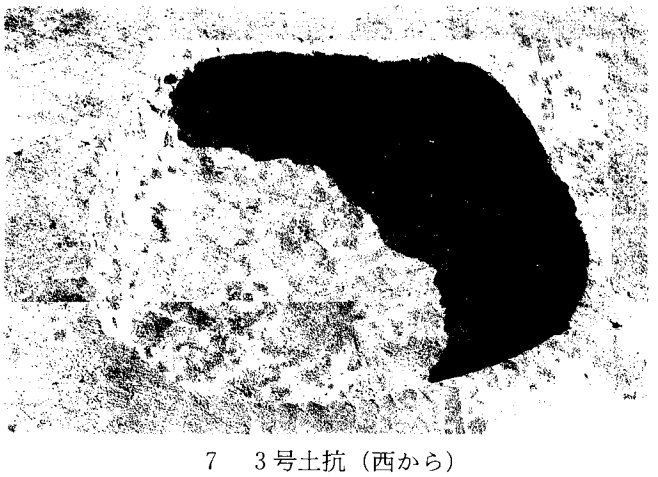
3　７号掘立柱建物跡（西から）



4　８号掘立柱建物跡（北から）

5　１号土抗（東から）

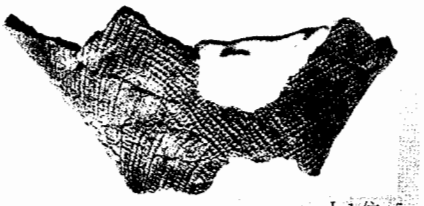
6　２号土抗（西から）



7　３号土抗（西から）

8　ピット群及び作業風景

Ｊ１住-１



Ｊ１住-５

Ｊ１住-４

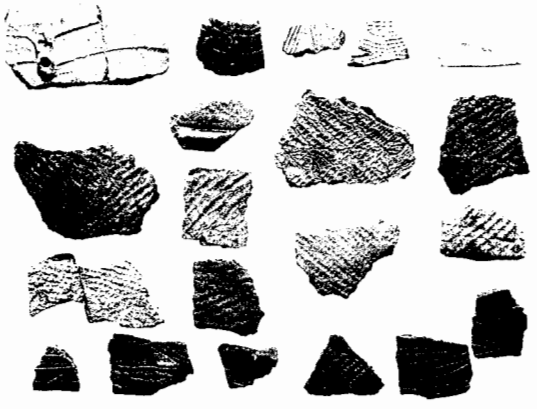
Ｊ１住-６

Ｊ２住

Ｊ２土

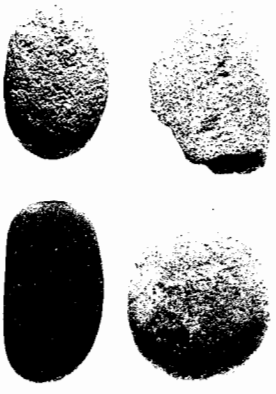
Ｊ１住

Ｊ２住-１



遺構外

Ｊ２住-１

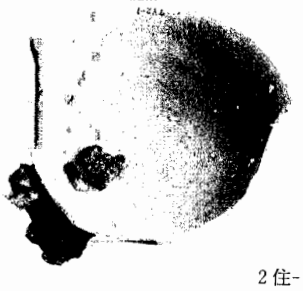


縄文時代出土遺物

2住-1

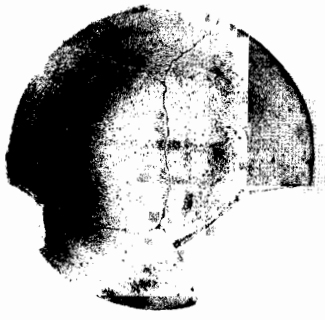
2住-5

2住-2


2住-3

2住-4

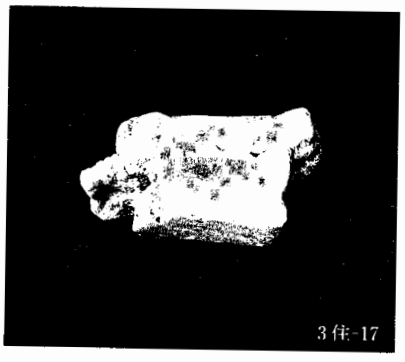
3住-15



3住-3

3住-16

3住-4


3住-17

3住-2

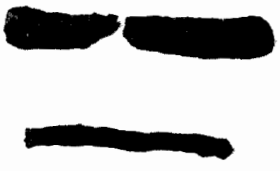
3住-6

4住-4

4住-20

4住-18

4住-2


4住-16、17

4住-19

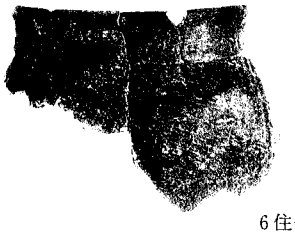
4住-3

2号・3号・4号住居跡出土遺物

5住-1

5住-3

5住-4

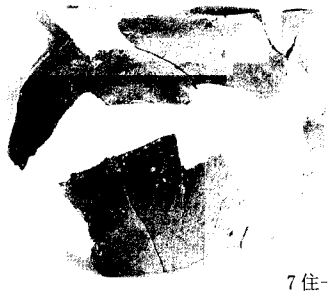

6住-7

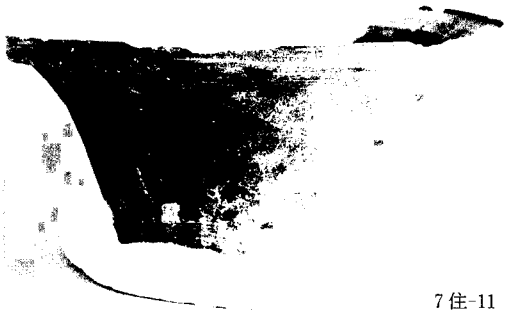
7住-1

7住-2

7住-3

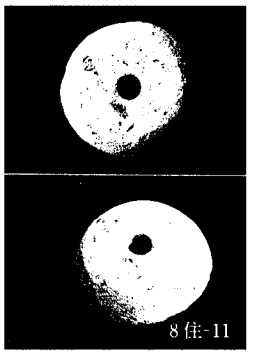
7住-8

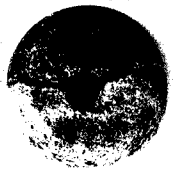

7住-9


7住-11

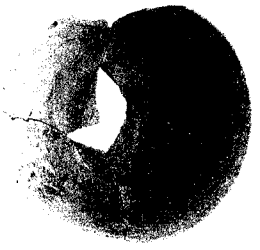
7住-5

8住-2

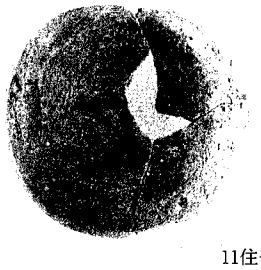

8住-11



9a住-4

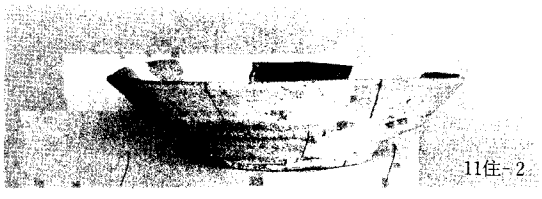


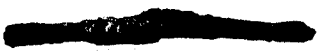
8住-4


11住-1

10住-1

9住-1


11住-2


9b住-5

11住-3

5号・6号・7号・8号・9号・10号・11号住居跡出土遺物

14住-1

18住-4

20住-1

20住-4

21住-14

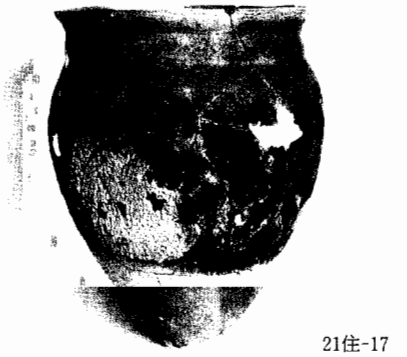
21住-15

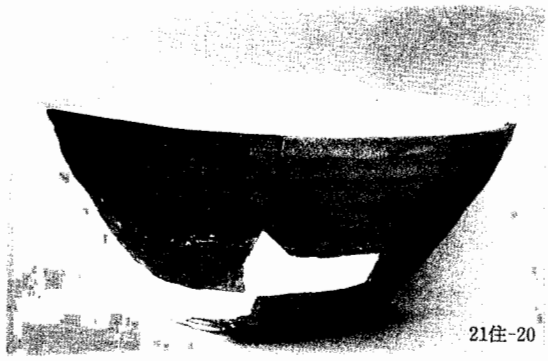
21住-25

16住-2

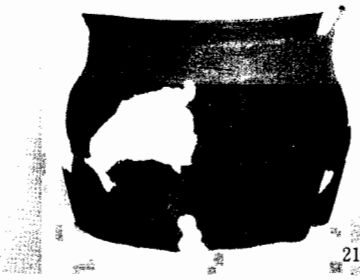
21住-8

21住-12


21住-17


21住-20

16住-1


21住-10

21住-13

21住-16

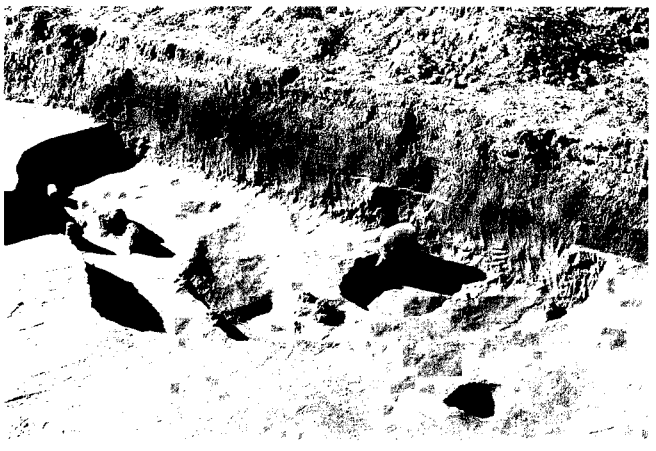
14号・16号・18号・20号・21号住居跡出土遺物

1　久保田遺跡南半部（北東から）

2　久保田遺跡北半部（北東から）

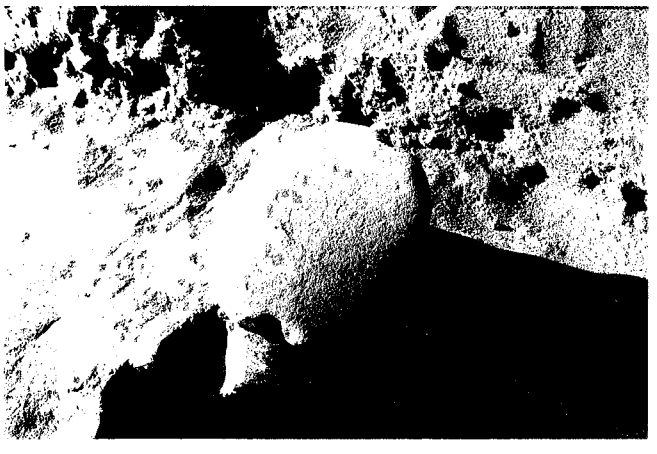
1　Ｊ１号住居跡全景（北東から）

2　同左遺物出土状態（南から）



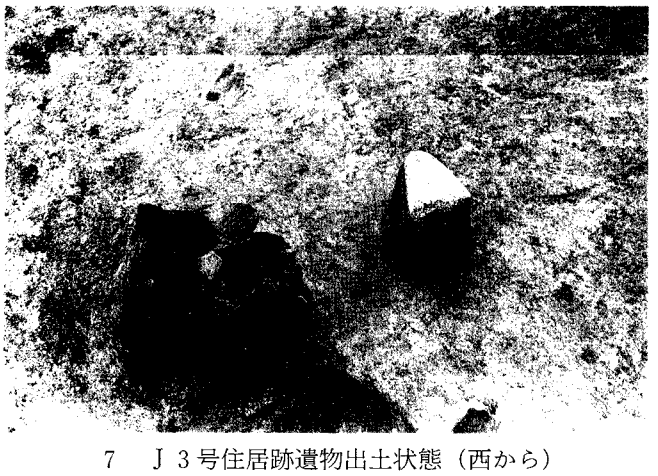
3　Ｊ２号住居跡（東から）

4　同左遺物出土状態（北から）

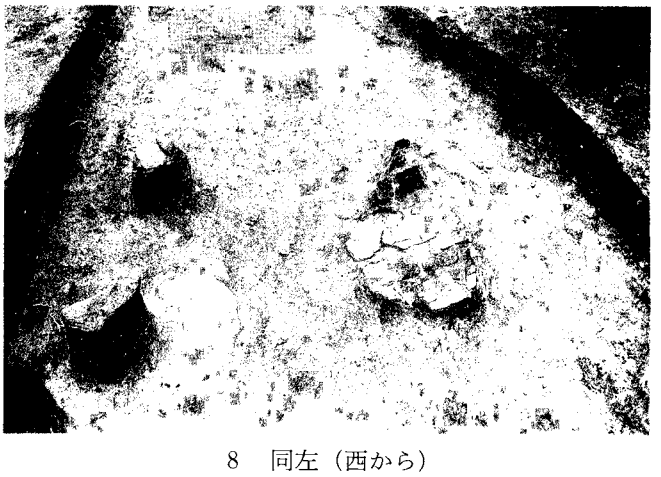


5　同上遺物出土状態（東から）

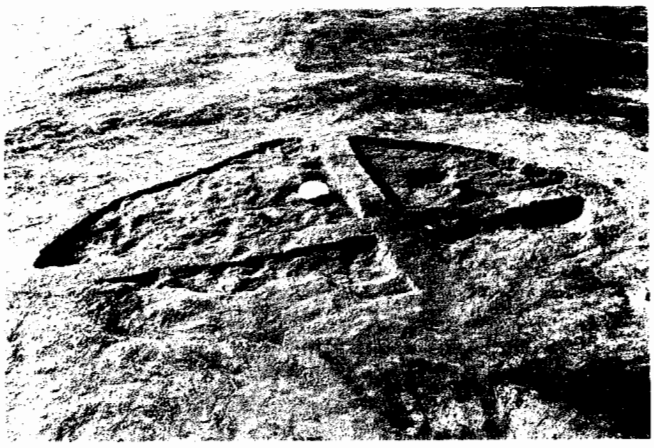
6　Ｊ３号住居跡全景（西から）



7　Ｊ３号住居跡遺物出土状態（西から）

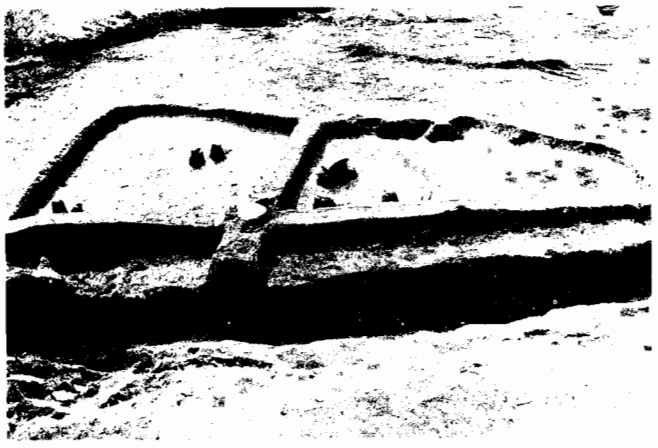


8　同左（西から）



1　Ｊ４号住居跡（北から）

2　Ｊ５号住居跡（北から）

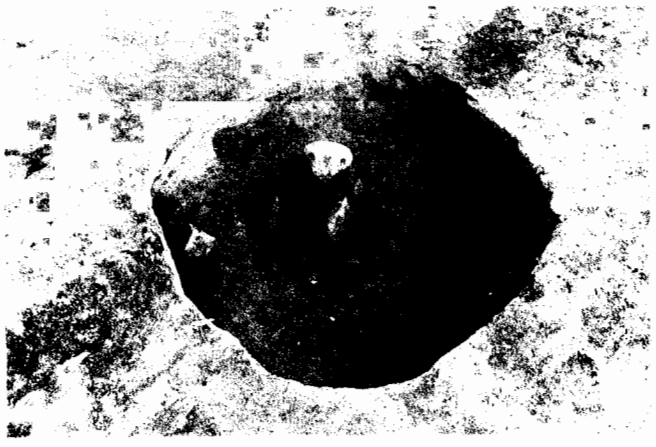


3　Ｊ６号住居跡（北から）

4　同左遺物出土状態（西から）

5　陥穴状遺構（北から）

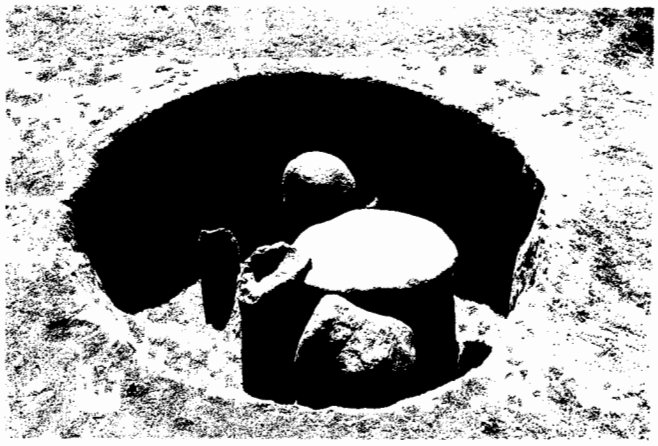
6　同左埋土断面（北から）



7　Ｊ７号土抗（南西から）

8　Ｊ６号土抗（北から）

1　Ｊ１号土抗埋土断面（南から）



2　同左遺物出土状態（北から）

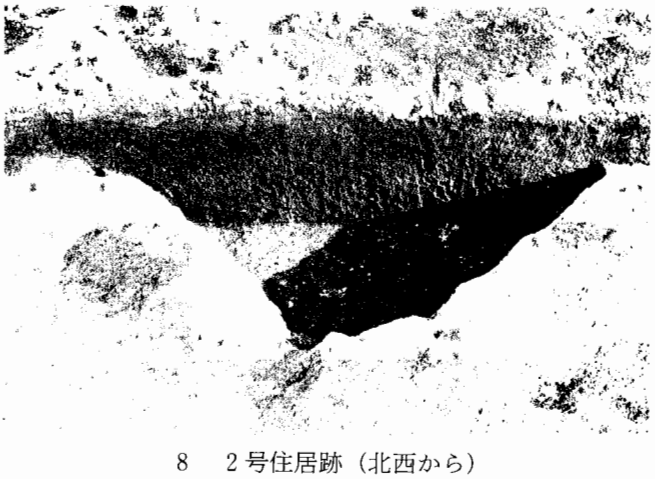
3　包含層遺物出土状態

4　Ｊ１・Ｊ２号住居跡（北東から）

5　１号住居跡全景（南東から）

6　同左ピット内遺物出土状態（東から）

7　同上遺物出土状態近接（南東から）



8　２号住居跡（北西から）

1　3号住居跡（2号溝）（北西から）

2　4号住居跡（西から）

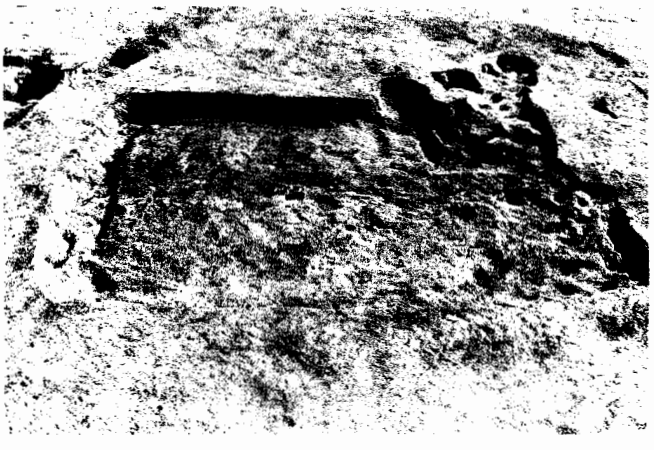
3　5号住居跡全景（東から）

4　同左遺物出土状態（北から）

5　6号住居跡全景（西から）

6　同左遺物出土状態近接（北から）

7　7号住居跡全景（西から）



8　8号住居跡全景（西から）

1　9・10号住居跡全景（西から）

2　9号住居跡カマド（西から）

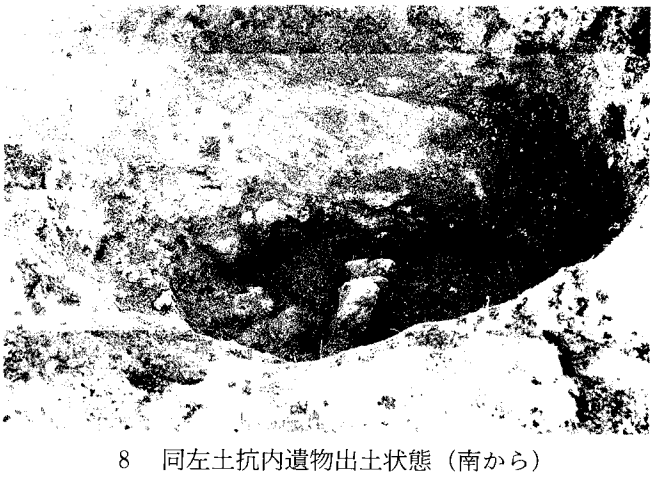
3　10号住居跡遺物出土状態近接（北西から）

4　11号住居跡（東から）

5　11号住居跡カマド（西から）

6　同左遺物出土状態近接（東から）

7　12号住居跡（北から）



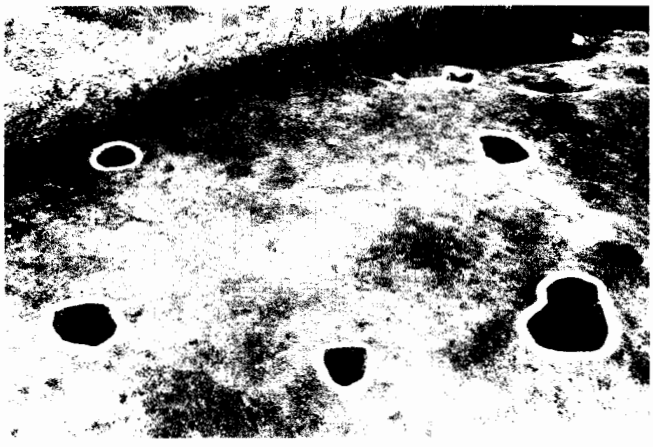
8　同左土抗内遺物出土状態（南から）

1　13号住居跡全景（西から）

2　同左カマド（西から）

3　14号住居跡全景（西から）

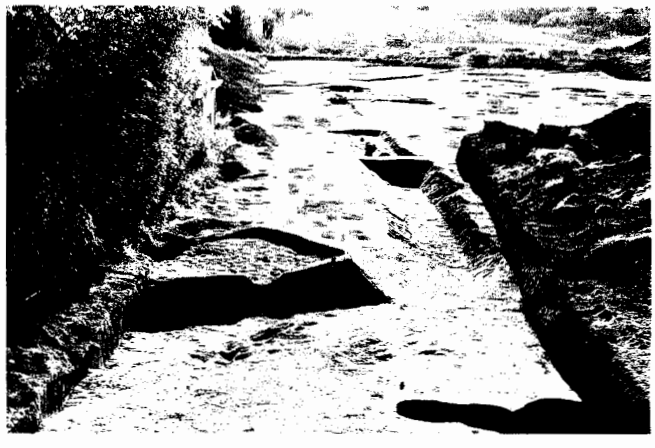
4　16・17号住居跡（東から）



5　１号掘立柱建物跡（北から）

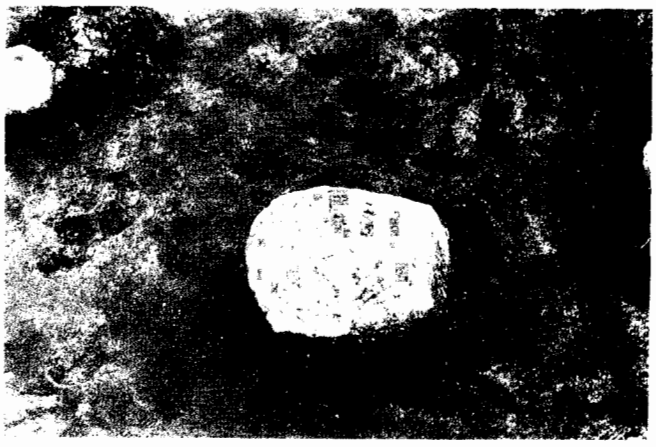
6　１号溝（北東から）

7　３号溝（東から）

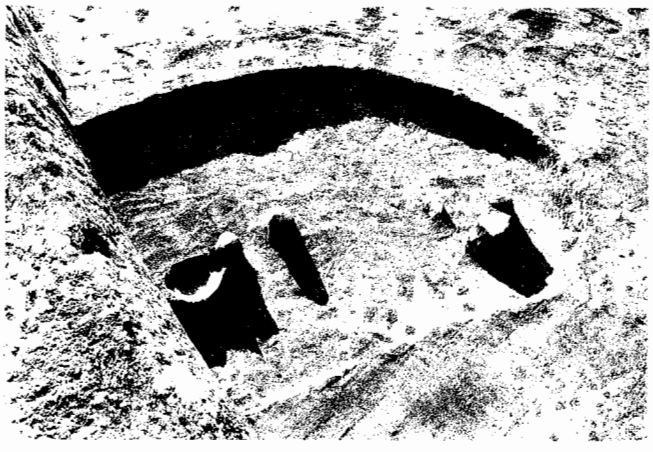


8　２号溝（北東から）

1　２号溝礫出土状態（南西から）

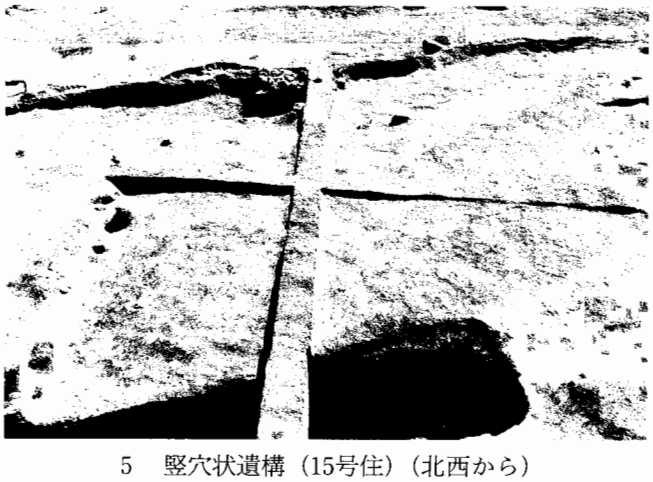


2　同左遺物出土状態近接（東から）



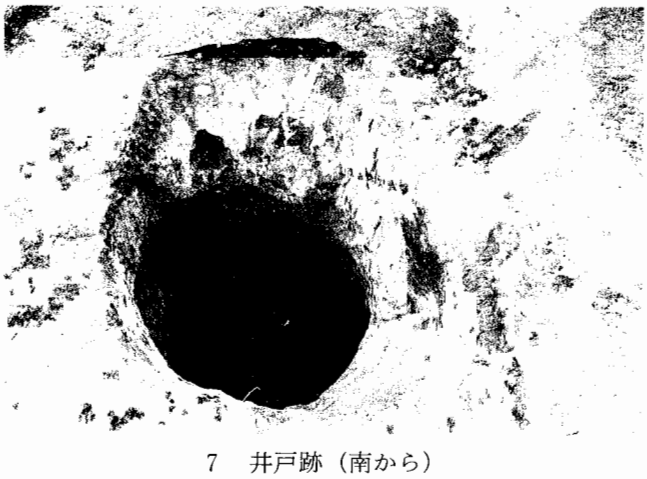
3　１号土抗（東から）

4　同左遺物出土状態近接（北東から）



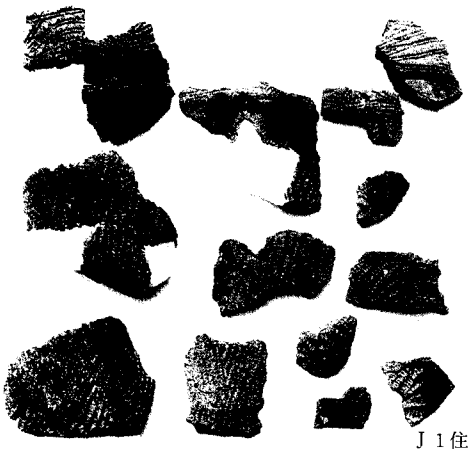
5　竪穴状遺構（15号住）（北西から）

6　ピット群（東から）

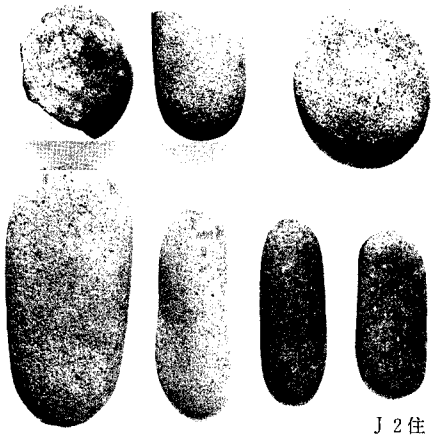


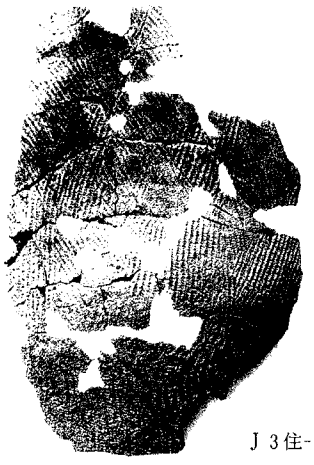
7　井戸跡（南から）

8　調査地雪景色（北東から）


Ｊ１住

Ｊ２住

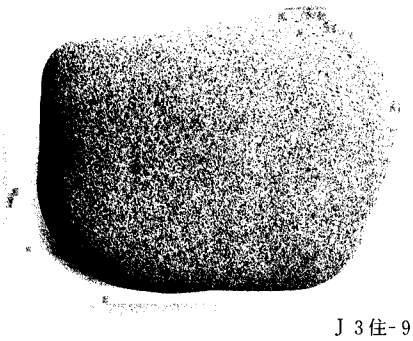

Ｊ２住

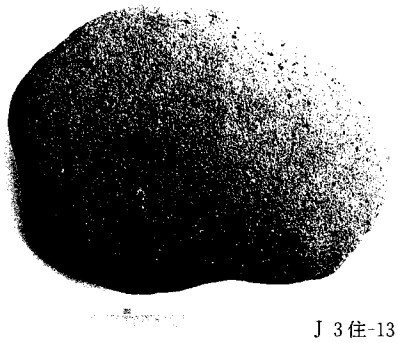

Ｊ３住-１

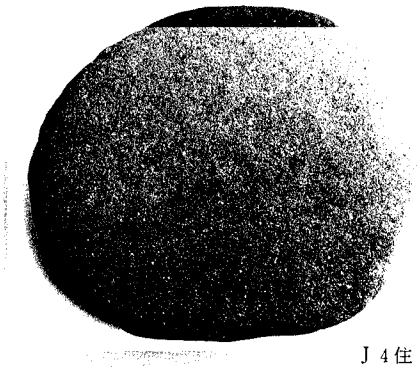
Ｊ３住-９

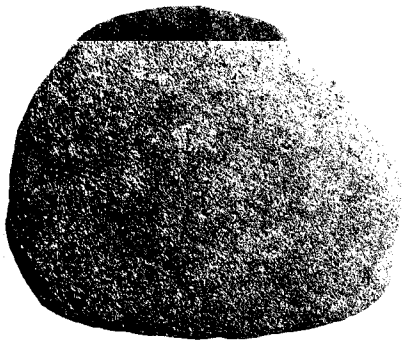
Ｊ３住

Ｊ２土

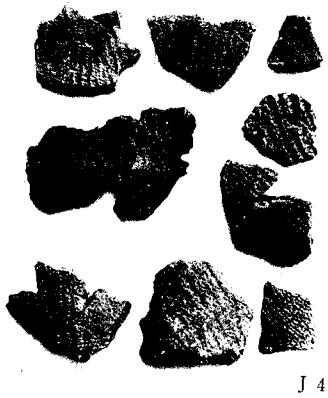

Ｊ３住-９


Ｊ３住-13

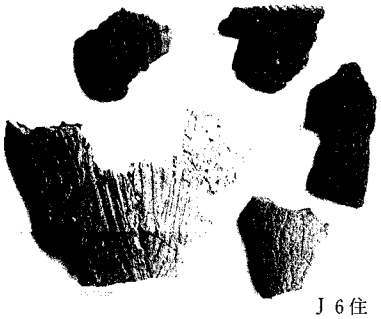

Ｊ４住


Ｊ５住-１

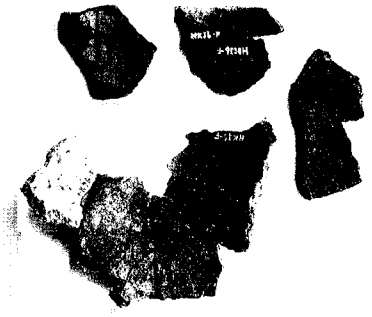
Ｊ５住


Ｊ４住

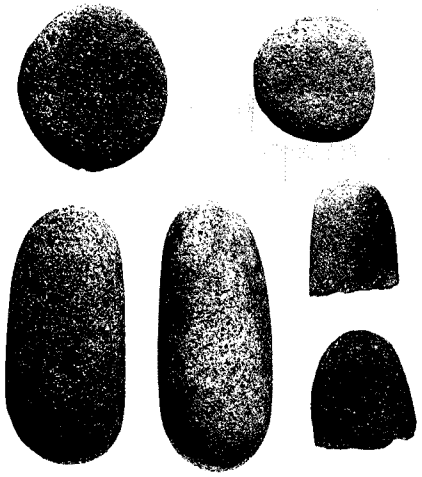
縄文時代出土遺物（Ｊ１～Ｊ５号住、Ｊ２号土抗）



Ｊ６住



Ｊ６住

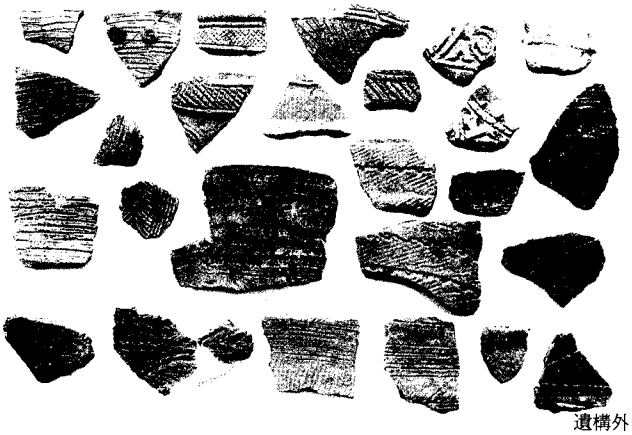


Ｊ６住

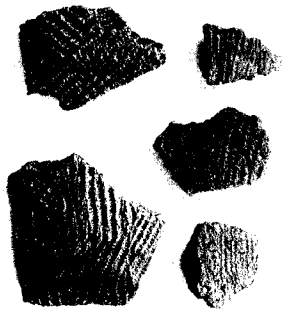
Ｊ６住

Ｊ６住-15

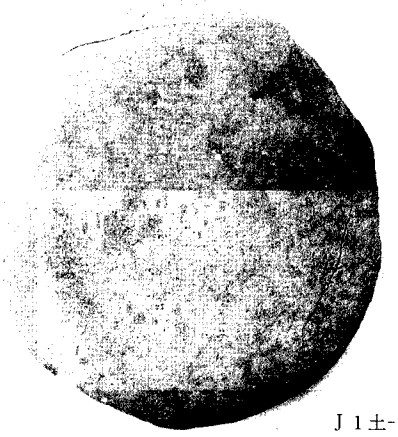
Ｊ１土-1



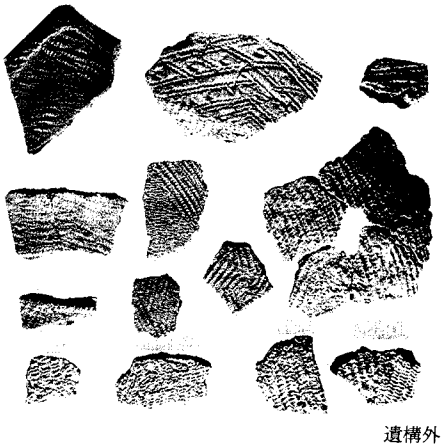
遺構外



Ｊ１土



Ｊ１土-1



遺構外

縄文時代出土遺物（Ｊ６号住、Ｊ１号土抗、遺構外）

縄文時代出土遺物（遺構外）

1住-1

1住-2

1住-4

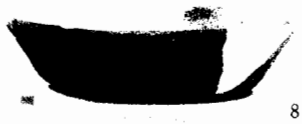
4住-1

10住-1

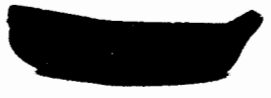
5住-1

5住-2

5住-5



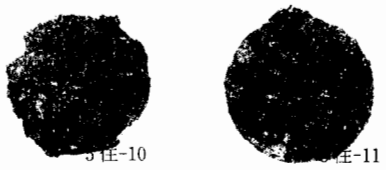
8住-1



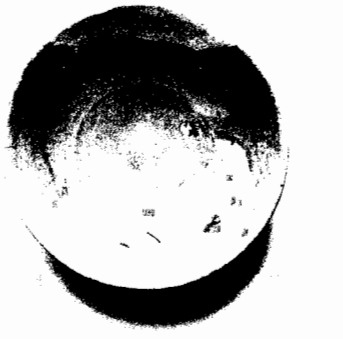
8住-2

8住-3

5住-9



5住-10　5住-11



6住-4

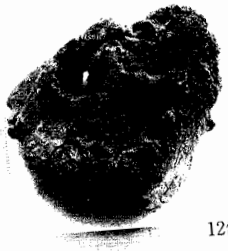
古墳～平安時代住居跡出土遺物

PL48　久保田遺跡

12住-2

12住-3

11住-1



12住-5

12住-4

12住

12住-1

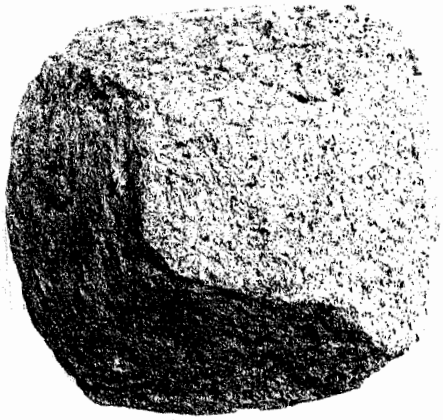
14住-1

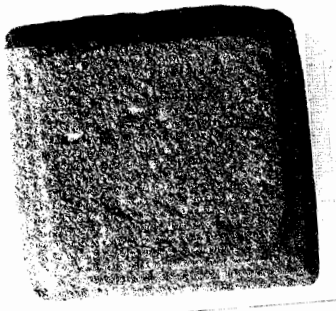
13住-1

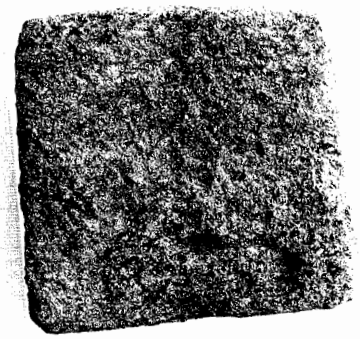
1土-1

14住-2

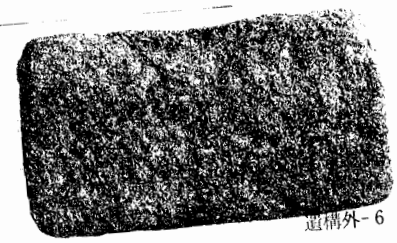
16住-1



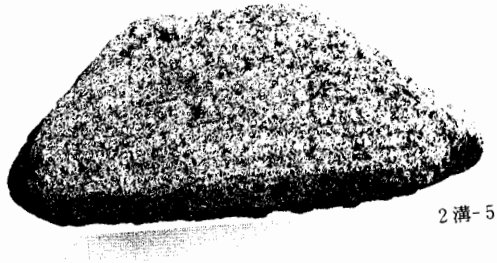




遺構外-7



遺構外-6



2溝-5

古墳～平安時代住居跡、その他の遺構、遺構外出土遺物

富士見地区遺跡群
白　川　遺　跡
由　森　遺　跡
久保田遺跡
昭和62年度県営圃場整備事業富士見地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

平成元年３月20日　印刷
平成元年３月25日　発行

編集・発行／群馬県勢多郡富士見村教育委員会
群馬県勢多郡富士見村大字田島866－１
電話（0272）88－6111

印刷／朝日印刷工業株式会社